兵庫県文化財調査報告　第 433 冊

姫 路 市

市之郷遺跡Ⅳ

－県営姫路日出住宅、県営姫路日出住宅第２－１期建替事業に伴う発掘調査報告書－

２０１２年３月（平成２４年３月）

兵 庫 県 教 育 委 員 会

姫路市

市之郷遺跡Ⅳ

― 県営姫路日出住宅、県営姫路日出住宅第２－１期建替事業に伴う発掘調査報告書 ―

２０１２年３月（平成２４年３月）

兵 庫 県 教 育 委 員 会

巻首図版 1

市之郷遺跡全景　南上空から

市之郷遺跡全景　東上空から

巻首図版 2

調査地遠景　南東上空から

調査地遠景　東上空から

調査地全景　東上空から

巻首図版 4

調査地全景　俯瞰

SH22 全景　東から

SH22 出土土器

巻首図版 6

SH28 全景　東から

SH28　土器溜土器出土状況

SH28 出土土器

巻首図版 8

SH28 出土土器（土器溜以外）

SH28 出土土器（土器溜）

SH28 土器溜出土土器

巻首図版 10

古墳時代　須恵器・土師器

古墳時代　須恵器

古墳時代　土師器

巻首図版 12

SH23 出土土器

SH26 出土土器

例　言

1．本書は、姫路市日出町３丁目 18 番に所在する市之郷遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は県営姫路日出住宅、県営姫路日出住宅第２－１期建替事業に先立つもので、兵庫県県土整備部住宅建築局からの依頼を受け、兵庫県教育委員会が本発掘調査を実施した。発掘調査は、株式会社平錦建設株式会社が請け負い、平成 18 年度に実施した。

3．本発掘調査は、兵庫県立考古博物館　山田清朝・鈴木敬二が担当した。

4．調査後の空中写真の撮影および図化は、株式会社　サンヨーナイスコーポレーションに委託して行った。

5．整理作業は、平成 22 年度から兵庫県立考古博物館および魚住分館にて実施した。

6．遺物写真の撮影は、兵庫県教育委員会が谷口フォト株式会社（平成 22 年度）・株式会社　地域文化財研究所（平成 23 年度）に委託して行った。

7．調査成果の測量については、調査地周辺の三等三角点「北条」と四等三角点「小婦方」を使用し、３級基準点を設置しておこなった。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第Ⅴ系に位置する。

8．本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とし、市内１等水準点をもとに３級水準点を設置した。

9．本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとに呼称した。また、各遺構は以下のように呼称した。

竪穴住居跡→ＳＨ、掘立柱建物跡→ＳＢ、柱穴→Ｐ、土坑→ＳＫ、溝→ＳＤ、

10. 第２図は、国土地理院発行 1/25000 地形図「姫路北部」「姫路南部」を使用した。第６図・第 18 図は、姫路市発行 1/1000 都市計画図を使用した。

11. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。

12. 本書の編集は友久伸子の補助を得て山田が行い、第４章を除いては山田が執筆した。

13. 本書にかかわる遺物・写真・遺構図等は兵庫県立考古博物館に保管している。

14. 最後に、発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。ここに感謝の意を表するものである。

秋枝　芳・大谷輝彦・中川　猛・小柴治子・福井　優

目 次

第１章　市之郷遺跡

第１節　地理的環境 …… 1

第２節　歴史的環境 …… 5

第２章　調査の経緯

第１節　調査の起因 …… 8

第２節　分布調査・確認調査 …… 9

第３節　本発掘調査 …… 11

第４節　整理作業 …… 12

第３章　調査の成果

第１節　調査の概要 …… 13

第２節　Ａ区の調査 …… 15

第３節　Ｂ区の調査 …… 75

第４節　Ｃ区の調査 …… 98

第５節　Ｄ区の調査 …… 126

第４章　分析・鑑定

第１節　市之郷遺跡の岩石同定 …… 129

第２節　市之郷遺跡出土土器の胎土分析 …… 131

第５章　遺物のまとめ

第１節　弥生土器 …… 147

第２節　古墳時代の土器 …… 157

第６章　遺構のまとめ

第１節　弥生時代の遺構 …… 173

第２節　古墳時代の遺構 …… 179

第３節　総括 …… 184

報告抄録 …… 写真図版末

挿　図　目　次

第１章

第１図　姫路市の位置 …… xiv
第２図　市之郷遺跡の位置 …… 1
第３図　姫路市の地理的位置 …… 2
第４図　市川水系 …… 3
第５図　市之郷遺跡と市川 …… 4
第６図　市之郷遺跡の調査 …… 5
第７図　渡来人の住居跡（県第１次調査） …… 6
第８図　県第４次調査 …… 7

第２章

第９図　竣工後の日出住宅 …… 8
第 10 図　工事計画と調査位置 …… 8
第 11 図　確認調査位置図 …… 9
第 12 図　確認調査 …… 9
第 13 図　確認調査出土土器 …… 10
第 14 図　地区割り図 …… 11
第 15 図　現地説明会 …… 11
第 16 図　遺物写真の撮影 …… 12

第３章

第 17 図　調査前（東から） …… 13
第 18 図　調査位置図 …… 13
第 19 図　Ａ区全体図 …… 14
第 20 図　Ａ区基本土層 …… 15
第 21 図　Ａ区　竪穴住居跡 …… 16
第 22 図　Ａ区西側住居跡群 …… 17
第 23 図　ＳＨ 01 …… 18
第 24 図　ＳＨ 01　カマド …… 19
第 25 図　ＳＨ 02 …… 20
第 26 図　ＳＨ 02 の調査 …… 21
第 27 図　ＳＨ 02　カマド …… 21
第 28 図　ＳＨ 03 …… 24
第 29 図　ＳＨ 04 …… 25
第 30 図　ＳＨ 05 …… 26
第 31 図　Ａ区中央住居跡群 …… 27
第 32 図　ＳＨ 06 …… 28
第 33 図　ＳＨ 07 の調査 …… 29
第 34 図　ＳＨ 07 …… 30
第 35 図　ＳＨ 07　カマド …… 31
第 36 図　ＳＨ 08 …… 32
第 37 図　ＳＨ 09 …… 34
第 38 図　ＳＨ 10　カマド …… 34
第 39 図　ＳＨ 10 …… 35
第 40 図　ＳＨ 11 …… 36
第 41 図　ＳＨ 11　カマド …… 37
第 42 図　ＳＨ 12 …… 39
第 43 図　ＳＨ 13 …… 40
第 44 図　ＳＨ 14 …… 41
第 45 図　ＳＨ 15 …… 42
第 46 図　ＳＨ 16 …… 42
第 47 図　Ａ区東側住居跡群 …… 43
第 48 図　ＳＨ 17 …… 43
第 49 図　ＳＨ 18 …… 45
第 50 図　ＳＨ 18 の調査 …… 45
第 51 図　ＳＨ 18　カマド縦断面 …… 46
第 52 図　ＳＨ 19 …… 47
第 53 図　Ａ区　掘立柱建物・柵・柱穴 …… 49
第 54 図　ＳＢ 01 …… 50
第 55 図　ＳＢ 02 …… 51
第 56 図　ＳＢ 03 …… 52
第 57 図　ＳＢ 04 …… 53
第 58 図　ＳＢ 05 …… 54
第 59 図　ＳＢ 05　柱穴断面 …… 55
第 60 図　ＳＢ 06 …… 56
第 61 図　ＳＢ 07 …… 57
第 62 図　ＳＢ 08 …… 58
第 63 図　ＳＢ 09 …… 58
第 64 図　ＳＡ 01 …… 59
第 65 図　Ａ区　土坑・溝 …… 62

第 66 図　ＳＫ 01 …… 63
第 67 図　ＳＫ 02 …… 63
第 68 図　ＳＫ 03 …… 64
第 69 図　ＳＫ 04 …… 65
第 70 図　ＳＫ 05 …… 65
第 71 図　ＳＫ 06 …… 65
第 72 図　ＳＫ 08 …… 66
第 73 図　ＳＫ 09 …… 67
第 74 図　ＳＫ 10 …… 68
第 75 図　ＳＫ 11 …… 69
第 76 図　ＳＫ 12 …… 70
第 77 図　ＳＤ 01 断面 …… 71
第 78 図　ＳＤ 02 断面 …… 72
第 79 図　ＳＤ 03 断面 …… 72
第 80 図　ＳＤ 04 断面 …… 73
第 81 図　ＳＤ 05 断面 …… 73
第 82 図　Ｂ区基本土層 …… 75
第 83 図　Ｂ区　平面図 …… 76
第 84 図　Ｂ区の調査 …… 76
第 85 図　ＳＨ 20 …… 77
第 86 図　ＳＨ 21 …… 78
第 87 図　Ｂ区中央住居跡群 …… 79
第 88 図　ＳＨ 22 の調査(1) …… 79
第 89 図　ＳＨ 22 の調査(2) …… 79
第 90 図　ＳＨ 22 …… 80
第 91 図　ＳＨ 22 内土坑 …… 81
第 92 図　ＳＨ 22　土器出土位置 …… 82
第 93 図　ＳＨ 23 …… 85
第 94 図　ＳＨ 23　カマド …… 86
第 95 図　ＳＨ 24　カマド …… 88
第 96 図　ＳＨ 24 …… 89
第 97 図　ＳＨ 25 …… 91
第 98 図　ＳＢ 10 の調査 …… 91
第 99 図　ＳＢ 10 …… 92
第 100 図　ＳＢ 10　柱穴断面 …… 93
第 101 図　ＳＫ 15 …… 94
第 102 図　ＳＤ 06 断面 …… 95
第 103 図　Ｃ区基本土層 …… 98
第 104 図　Ｃ区平面図 …… 99
第 105 図　Ｃ区中央住居跡群 …… 100
第 106 図　ＳＨ 26 内土坑 …… 100
第 107 図　ＳＨ 26 …… 101
第 108 図　324 拓影 …… 102
第 109 図　ＳＨ 27 …… 103
第 110 図　ＳＨ 28 …… 106
第 111 図　土器溜の検出 …… 106
第 112 図　ＳＨ 28　土器出土位置 …… 107
第 113 図　ＳＨ 28 土器溜　出土状況 …… 108
第 114 図　ＳＨ 28 土器溜　壺出土位置 …… 109
第 115 図　ＳＨ 28 土器溜　甕出土位置 …… 110
第 116 図　ＳＨ 28 土器溜　鉢出土位置 …… 111
第 117 図　ＳＨ 28 土器溜
高坏・器台出土位置 …… 113
第 118 図　ＳＨ 29 …… 116
第 119 図　ＳＨ 29　中央土坑 …… 117
第 120 図　ＳＥ 01 の調査 …… 118
第 121 図　ＳＥ 01 …… 119
第 122 図　ＳＫ 16 …… 120
第 123 図　ＳＫ 18 …… 121
第 124 図　ＳＤ 09 の調査 …… 122
第 125 図　ＳＤ 09 断面 …… 123
第 126 図　ＳＤ 10 断面 …… 124
第 127 図　Ｄ区基本土層図 …… 126
第 128 図　ＳＤ 11 断面 …… 126

第４章

第 129 図　市之郷遺跡出土石製品と
実体顕微鏡写真 …… 130
第 130 図　各粒度階における
鉱物・岩石出現頻度(1) … 136
第 131 図　胎土中の砂の粒径組成(1) …… 136
第 132 図　各粒度階における
鉱物・岩石出現頻度(2) … 137
第 133 図　胎土中の砂の粒径組成(2) …… 137
第 134 図　各粒度階における
鉱物・岩石出現頻度(3) … 138

第135図　胎土中の砂の粒径組成(3) …… 138
第136図　各粒度階における
鉱物・岩石出現頻度(4) …… 139
第137図　胎土中の砂の粒径組成(4) …… 139
第138図　砕屑物・基質・孔隙の割合 …… 139
第139図　胎土薄片(1) …… 142
第140図　胎土薄片(2) …… 143
第141図　胎土薄片(3) …… 144
第142図　胎土薄片(4) …… 145

第５章

第143図　弥生後期壺形土器の分類 …… 149
第144図　弥生後期甕Ｂａの法量分布 …… 150
第145図　弥生後期甕の分類(1) …… 151
第146図　弥生後期甕の分類(2) …… 152
第147図　弥生後期鉢の分類 …… 153
第148図　弥生後期高杯の分類 …… 154
第149図　弥生後期器台の分類 …… 154
第150図　古墳時第土師器の分類 …… 158
第151図　古墳時代須恵器の分類 …… 160
第152図　杯Ｈの法量(1 － 1) …… 162
第153図　杯Ｈの法量(1 － 2) …… 163
第154図　杯Ｈ蓋の法量(2 － 1) …… 164
第155図　杯Ｈ蓋の法量(2 － 2) …… 165
第156図　古墳時代一括資料(1 － 1) …… 166
第157図　古墳時代一括資料(1 － 2) …… 167
第158図　古墳時代一括資料(2 － 1) …… 168
第159図　古墳時代一括資料(2 － 2) …… 169
第160図　古墳時代一括資料(3 － 1) …… 170
第161図　古墳時代一括資料(3 － 2) …… 171
第162図　古墳時代一括資料(4) …… 172

第６章

第163図　遺構の変遷　弥生時代中期(1) …… 173
第164図　遺構の変遷　弥生中期(2) …… 174
第165図　遺構の変遷　弥生後期(1) …… 176
第166図　遺構の変遷　弥生後期(2)……177
第167図　遺構の変遷　古墳時代(1) …… 181
第168図　遺構の変遷　古墳時代(2) …… 182

表　目　次

第１表　ＳＢ01　建物・柱穴規模一覧 …… 50
第２表　ＳＢ02　建物・柱穴規模一覧 …… 51
第３表　ＳＢ03　建物・柱穴規模一覧 …… 52
第４表　ＳＢ04　建物・柱穴規模一覧 …… 53
第５表　ＳＢ05　建物・柱穴規模一覧 …… 55
第６表　ＳＢ06　建物・柱穴規模一覧 …… 56
第７表　ＳＢ07　建物・柱穴規模一覧 …… 57
第８表　ＳＢ08　柱穴規模一覧 …… 58
第９表　ＳＢ09　柱建物・柱穴規模一覧 …… 59
第10表　ＳＡ01　柱穴規模一覧 …… 60
第11表　ＳＢ10　建物・柱穴規模一覧 …… 94
第12表　市之郷遺跡出土石製品の
特徴と岩石名 …… 129
第13表　試料一覧および胎土分類結果 …… 131
第14表　薄片観察結果(1) …… 133
第15表　薄片観察結果(2) …… 134
第16表　薄片観察結果(3) …… 135
第17表　古墳時代竪穴住居一覧 …… 182
第18表　古墳時代掘立柱建物跡一覧 …… 183

図　版　目　次

Ａ区

図版１

ＳＨ 01 出土土器（１・２）

ＳＨ 02 出土土器（３～ 14）

ＳＨ 03 出土土器（15 ～ 18）

ＳＨ 04 出土土器（19・20）

ＳＨ 06 出土土器（21 ～ 23）

ＳＨ 07 出土土器（24 ～ 33）

図版２

ＳＨ 08 出土土器（34 ～ 36）

ＳＨ 09 出土土器（37・38）

ＳＨ 10 出土土器（39 ～ 43）

ＳＨ 11 出土土器（44 ～ 55）

図版３

ＳＨ 12 出土土器（56 ～ 60）

ＳＨ 14 出土土器（61・62）

ＳＨ 15 出土土器（63）

ＳＨ 16 出土土器（64）

ＳＨ 17 出土土器（65・66）

ＳＨ 18 出土土器（67 ～ 76）

ＳＨ 19 出土土器（77 ～ 81）

ＳＢ 01 出土土器（82・83）

ＳＢ 03 出土土器（84・85）

図版４

ＳＢ 04 出土土器（86・87）

ＳＢ 05 出土土器（88 ～ 97）

Ｐ 06 出土土器（98）　Ｐ 01 出土土器（99）

Ｐ 07 出土土器（100）　Ｐ 03 出土土器（101）

Ｐ 08 出土土器（102）

Ｐ 05 出土土器（103・104）

Ｐ 04 出土土器（105・106）

Ｐ 02 出土土器（107）

ＳＫ 01 出土土器（108 ～ 110）

ＳＫ 02 出土土器（111・112）

ＳＫ 03 出土土器（113）

ＳＫ 04 出土土器（114・115）

図版５

ＳＫ 07 出土土器（116）

ＳＫ 08 出土土器（117 ～ 120）

ＳＫ 09 出土土器（121 ～ 123）

ＳＫ 10 出土土器（124）

ＳＫ 11 出土土器（125 ～ 131）

ＳＫ 13 出土土器（132）

ＳＫ 12 出土土器（133）　ＳＫ 14 出土土器（134）

ＳＤ 01 出土土器（135 ～ 137）

図版６

ＳＤ 02 出土土器（138 ～ 141）

ＳＤ 03 出土土器（142 ～ 147）

ＳＤ 05 出土土器（148）

包含層出土土器（149 ～ 174）

図版７

包含層出土土器（175 ～ 184）

ＳＨ 03 出土石器（Ｓ１）　ＳＨ 11 出土石器（Ｓ２）

包含層出土石器（Ｓ３・Ｓ６）

ＳＨ 12 出土石器（Ｓ４）　Ｐ 03 出土石器（Ｓ５）

図版８

包含層出土鉄製品（Ｍ１・Ｍ２）

ＳＨ 02 出土鉄滓（Ｍ３）　ＳＨ 04 出土鉄滓（Ｍ４）

Ｂ区

図版９

ＳＨ 20 出土土器（185 ～ 188）

ＳＨ 22 出土土器（189 ～ 212）

図版 10

ＳＨ 22 出土土器（213 ～ 239）

図版 11

ＳＨ 23 出土土器（240 ～ 258）

ＳＨ 24 出土土器（259 ～ 263）

図版 12

ＳＫ 15 出土土器（264 ～ 266）

ＳＤ 06 出土土器（267 ～ 294）

図版 13
ＳＤ 06 出土土器(295・296)
ＳＢ 10 － Ｐ 1 出土土器(297・298)
包含層出土土器(299 ～ 308)
基盤層出土土器(309 ～ 311)
ＳＨ 23 出土石製品(Ｓ７)

Ｃ区
図版 14
ＳＨ 26 出土土器(312 ～ 324)
図版 15
ＳＨ 27 出土土器(325 ～ 341)
ＳＨ 28 土器溜出土土器(342 ～ 351)
図版 16
ＳＨ 28 土器溜出土土器(352 ～ 360)
図版 17
ＳＨ 28 土器溜出土土器(361 ～ 368)
図版 18
ＳＨ 28 土器溜出土土器(369 ～ 380)
図版 19
ＳＨ 28 土器溜出土土器(381 ～ 397)
図版 20
ＳＨ 28 土器溜出土土器(398 ～ 413)
図版 21
ＳＨ 28 土器溜出土土器(414 ～ 418)
ＳＨ 28 出土土器(419 ～ 430)
図版 22
ＳＨ 28 出土土器(431 ～ 454)
図版 23
ＳＨ 28 出土土器(455 ～ 476)
ＳＨ 27・28 出土土器(477 ～ 479)
ＳＨ 29 出土土器(480 ～ 483)
図版 24
ＳＨ 29 出土土器(484 ～ 486)
Ｐ 10 出土土器(487)　Ｐ 11 出土土器(488)
Ｐ 09 出土土器(489・490)
ＳＫ 17 出土土器(491)
ＳＫ 19 出土土器(492)
ＳＫ 16 出土土器(493)
ＳＤ 09 出土土器(494 ～ 509)
図版 25
ＳＤ 09 出土土器(510 ～ 526)
ＳＤ 08 出土土器(527)
包含層出土土器(528 ～ 536)
図版 26
ＳＨ 28 出土石器(Ｓ８)
ＳＨ 27 出土石製品(Ｓ９)
ＳＨ 26 出土鉄製品(Ｍ５・Ｍ６)
ＳＥ 01 出土鉄製品(Ｍ７)
ＳＨ 27 出土鉄製品(Ｍ８)

Ｄ区
図版 27
ＳＤ 11 出土土器(537 ～ 554)
図版 28
ＳＤ 11 出土土器(555 ～ 559)
包含層出土土器(560 ～ 569)
包含層出土銅銭(Ｍ９)

巻　首　図　版　目　次

巻首図版１
　市之郷遺跡全景　南上空から
　市之郷遺跡全景　東上空から
巻首図版２
　調査地遠景　南東上空から
　調査地遠景　東上空から
巻首図版３
　調査地全景　東上空から
巻首図版４
　調査地全景　俯瞰
巻首図版５
　ＳＨ 22 全景 東から　　ＳＨ 22 出土土器
巻首図版６
　ＳＨ 28 全景　東から
　ＳＨ 28　土器溜土器出土状況
巻首図版７
　ＳＨ 28 出土土器
巻首図版８
　ＳＨ 28 出土土器
　ＳＨ 28 出土土器(土器溜出土)
巻首図版９
　ＳＨ 28 土器溜出土土器
巻首図版 10
　古墳時代　須恵器・土師器
巻首図版 11
　古墳時代　須恵器
　古墳時代　土師器
巻首図版 12
　ＳＨ 23 出土土器　　ＳＨ 26 出土土器

写　真　図　版　目　次

Ａ区
写真図版１　遺構
　Ａ区　俯瞰
写真図版２　遺構
　Ａ区全景 北東から
　Ａ区全景 北西から
写真図版３　遺構
　西住居跡群～中央住居跡群　北西から
　東住居跡群～中央住居跡群　北西から
写真図版４　遺構
　ＳＨ 01 全景　東から
　ＳＨ 01 全景　南から
写真図版５　遺構
　ＳＨ 02 全景　東から
　ＳＨ 02 カマド　東から
　ＳＨ 02 カマド　土器出土状況　東から
　ＳＨ 02 カマド　土器出土状況　北東から
写真図版６　遺構
　ＳＨ 03 全景　南西から
　ＳＨ 03 全景　北西から
　ＳＨ 04 全景　南西から
写真図版７　遺構
　ＳＨ 05 全景 北西から
　ＳＨ 05 周壁溝断面　南から
　ＳＨ 06 周壁溝断面　南東から
　ＳＨ 06 全景　南東から
写真図版８　遺構
　ＳＨ 07 全景　南東から
　ＳＨ 08 全景　北西から
　ＳＨ 09 全景　南から

写真図版９　遺構
ＳＨ 10 全景　南東から
ＳＨ 10 全景　南西から
ＳＨ 10 カマド上面土器出土状況　東から
ＳＨ 10 カマド土器出土状況　南東から
写真図版 10　遺構
ＳＨ 11 全景　北西から
ＳＨ 11 カマド上面　北西から
ＳＨ 11 カマド縦断面　南西から
写真図版 11　遺構
ＳＨ 11　47 出土状況　南東から
ＳＨ 11　51 出土状況　南東から
ＳＨ 11　44 出土状況　南東から
ＳＨ 12　炭化材検出状況　北東から
ＳＨ 12　全景　北東から
ＳＨ 12　炭化材検出状況　南東から
ＳＨ 12　56・60 出土状況　南から
ＳＨ 12　57 出土状況　南西から
ＳＨ 12　58 出土状況　南西から
写真図版 12　遺構
ＳＨ 13 全景　北から
ＳＨ 14 全景　南西から
ＳＨ 15 全景　南から
写真図版 13　遺構
ＳＨ 16 全景　南東から
ＳＨ 16 全景　南から
ＳＨ 17 全景 南から
写真図版 14　遺構
ＳＨ 17　Ｐ１断面　北東から
ＳＨ 17　Ｐ２断面　東から
ＳＨ 18 全景　南から　　ＳＨ 19 全景　北から
写真図版 15　遺構
ＳＢ 01　Ｐ４断面　南東から
ＳＢ 01　Ｐ５断面　南東から
ＳＢ 01　Ｐ６断面　南東から
ＳＢ 01　Ｐ７断面　南東から
ＳＢ 04・ＳＢ 05 全景　北西から
ＳＢ 04 全景　北から
ＳＢ 04　Ｐ３断面　東から
ＳＢ 04　Ｐ５断面 北西から
写真図版 16　遺構
ＳＢ 05 全景　北西から
ＳＢ 05　Ｐ４断面　北西から
ＳＢ 05　Ｐ５断面　北西から
ＳＢ 05　Ｐ７断面　南東から
ＳＢ 05　Ｐ９断面　南東から
ＳＢ 05　Ｐ 10 断面　西から
ＳＢ 07　Ｐ１断面　南から
写真図版 17　遺構
ＳＢ 09 全景　南西から
ＳＢ 09　Ｐ４断面　南東から
ＳＢ 09　Ｐ５断面　南西から
ＳＫ 01 土器出土状況　東から
ＳＫ 01 断面　西から
ＳＫ 02 断面　北から
ＳＫ 03 断面　北西から
写真図版 18　遺構
ＳＫ 06 断面　南東から
ＳＫ 06 炭層断面　南東から
ＳＫ 09 全景　南から
ＳＫ 09 断面　西から
写真図版 19　遺構
ＳＤ 01 断面　南東から
ＳＤ 01 土器出土状況　北西から
ＳＤ 01 内土器出土状況　南西から
ＳＤ 03　144 出土状況　北から
ＳＤ 03　146 出土状況　北から
ＳＤ 04 断面　北西から
ＳＤ 05 断面　南西から

Ｂ区
写真図版 20　遺構
Ｂ区俯瞰
写真図版 21　遺構
Ｂ区全景　南東から
Ｂ区全景　北東から

写真図版 22　遺構
ＳＨ 20 全景　南東から
ＳＨ 20 全景　北から
写真図版 23　遺構
ＳＨ 21 全景　南東から
ＳＨ 22 全景　南から
ＳＨ 22 全景　東から
写真図版 24　遺構
ＳＨ 22 全景　北から
ＳＨ 22　高床部途切れ部　北から
ＳＨ 22　土坑２断面　北から
ＳＨ 22　189 出土状況　西から
写真図版 25　遺構
ＳＨ 22　中央土坑　北から
ＳＨ 22　226 出土状況　東から
ＳＨ 22　完掘状況　東から
ＳＨ 22　高床部土器出土状況　南東から
写真図版 26　遺構
ＳＨ 22　224 出土状況　東から
ＳＨ 22　高床部土器出土状況　南から
ＳＨ 22　237 出土状況　南から
ＳＨ 22　191・204・205 出土状況　南から
写真図版 27　遺構
ＳＨ 23 全景　西から　　ＳＨ 23 全景　北から
写真図版 28　遺構
ＳＨ 23 カマド全景　西から
ＳＨ 23 カマド全景　北から
ＳＨ 23 カマド完掘後　西から
ＳＨ 23　Ｐ４断面　西から
写真図版 29　遺構
ＳＨ 24 全景　東から
ＳＨ 24 全景　南から
写真図版 30　遺構
ＳＨ 24　カマド全景　南から
ＳＨ 24　カマド全景　南から
ＳＨ 24　カマド上面　南から
ＳＨ 24　カマド完掘　南から
写真図版 31　遺構
ＳＢ 10 全景　南東から
ＳＢ 10　Ｐ３断面　南東から
ＳＢ 10　Ｐ４断面　北西から
ＳＢ 10　Ｐ６断面　北西から
ＳＢ 10　Ｐ７断面　北西から
ＳＢ 10　Ｐ 11 断面　北東から
ＳＢ 10　Ｐ 13 断面　南東から
写真図版 32　遺構
ＳＢ 10　Ｐ 14 断面　南東から
ＳＢ 10　Ｐ 18 断面　南東から
ＳＤ 06 断面　南東から

Ｃ区
写真図版 33　遺構
Ｃ区俯瞰
写真図版 34　遺構
Ｃ区全景　南西から
Ｃ区全景　南東から
写真図版 35　遺構
ＳＨ 26 全景　南から
ＳＨ 27 全景　北西から
写真図版 36　遺構
ＳＨ 28 全景　南西から
ＳＨ 28 全景　北西から
写真図版 37　遺構
ＳＨ 28　土器出土状況　南東から
ＳＨ 28　土器出土状況　南西から
ＳＨ 28　高床部土器出土状況　北から
写真図版 38　遺構
ＳＨ 28　土器溜土器出土状況　南から
ＳＨ 28　土器溜土器出土状況　東から
ＳＨ 28　土器溜土器出土状況　北から
写真図版 39　遺構
ＳＨ 28　420 出土状況　南東から
ＳＨ 28　459 出土状況　南から
ＳＨ 28 土器溜土器出土状況　西から
ＳＨ 28 土器溜土器出土状況　南から

写真図版 40　遺構
ＳＨ 29 全景　北東から
ＳＨ 29 中央土坑確認状況　南東から
ＳＨ 29 中央土坑横断面　南東から
写真図版 41　遺構
ＳＨ 29 中央土坑全景　南東から
ＳＨ 29 中央土坑Ｂ全景　南東から
写真図版 42　遺構
ＳＥ 01 全景　東から
ＳＥ 01 石組　東から
写真図版 43　遺構
ＳＫ 16 全景　南東から
ＳＫ 17 断面　南東から
ＳＤ 09 全景　南から
ＳＤ 09 断面　南から

Ａ区
写真図版 44　遺物
ＳＨ 01 出土土器（２）
ＳＨ 02 出土土器（７・10・11・14）
ＳＨ 03 出土土器(16・17)
写真図版 45　遺物
ＳＨ 04 出土土器(19・20)
ＳＨ 06 出土土器(21・22)
ＳＨ 07 出土土器(29・33)
ＳＨ 08 出土土器(36)
写真図版 46　遺物
ＳＨ 08 出土土器(34)
ＳＨ 10 出土土器(41 ～ 43)
ＳＨ 11 出土土器(44・47・48)
写真図版 47　遺物
ＳＨ 11 出土土器(50 ～ 52・55)
ＳＨ 12 出土土器(56・57)
写真図版 48　遺物
ＳＨ 12 出土土器(60)
ＳＨ 14 出土土器(61)
ＳＨ 16 出土土器(64)
ＳＨ 18 出土土器(67・70)
写真図版 49　遺物
ＳＨ 18 出土土器(73 ～ 76)
写真図版 50　遺物
ＳＢ 03 出土土器(85)
ＳＢ 04 出土土器(86)
ＳＢ 05 出土土器(89・96)
Ｐ 05 出土土器(103)
Ｐ 04 出土土器(106)
ＳＫ 01 出土土器(110)
写真図版 51　遺物
ＳＫ 03 出土土器(113)
ＳＫ 04 出土土器(114・115)
ＳＫ 07 出土土器(116)
ＳＫ 08 出土土器(120)
ＳＫ 11 出土土器(125・126)
写真図版 52　遺物
ＳＫ 11 出土土器(130)
ＳＤ 01 出土土器(135・136)
ＳＤ 02 出土土器(138)
写真図版 53　遺物
ＳＫ 12 出土瓦(133)
ＳＤ 02 出土土器(140・141)
ＳＤ 03 出土土器(142)
写真図版 54　遺物
ＳＤ 03 出土土器(143・144・146・147)
ＳＤ 05 出土土器(148)
包含層出土土器(152)
写真図版 55　遺物
包含層出土土器(155・160・170・171・175)
写真図版 56　遺物
包含層出土土器(176 ～ 180・182・183)
写真図版 57　遺物
包含層出土瓦(184)
包含層出土鉄製品（Ｍ１・Ｍ２）
ＳＨ 02 出土鉄滓（Ｍ３）
ＳＨ 04 出土鉄滓（Ｍ４）

写真図版 58　遺物
ＳＨ 03 出土石器（Ｓ１）
ＳＨ 11 出土石器（Ｓ２）
包含層出土石器（Ｓ３・Ｓ６）
ＳＨ 12 出土石器（Ｓ４）
Ｐ 03 出土石器（Ｓ５）

Ｂ区
写真図版 59　遺物
ＳＨ 20 出土土器(185)
ＳＨ 22 出土土器(189 ～ 191・194・196)
写真図版 60　遺物
ＳＨ 22 出土土器(200 ～ 203・205・209)
写真図版 61　遺物
ＳＨ 22 出土土器(208・211・215・217 ～ 219)
写真図版 62　遺物
ＳＨ 22 出土土器(220 ～ 222・224)
写真図版 63　遺物
ＳＨ 22 出土土器
(223・225・226・228・235・237・238)
写真図版 64　遺物
ＳＨ 22 出土土器(239)
ＳＨ 23 出土土器(240 ～ 244・246・248・249)
写真図版 65　遺物
ＳＨ 23 出土土器(250・252・253・255)
ＳＨ 24 出土土器(259)
写真図版 66　遺物
ＳＨ 24 出土土器(262・263)
ＳＫ 15 出土土器(264・266)
ＳＤ 06 出土土器(268・270)
写真図版 67　遺物
ＳＤ 06 出土土器
(272・278・279・281・283・285・289・291)
写真図版 68　遺物
ＳＤ 06 出土土器(292・294 ～ 296)
ＳＢ 10 出土土器(298)
包含層出土土器(299・300)
写真図版 69　遺物
包含層出土土器(302・304・306 ～ 310)
写真図版 70　遺物
ＳＨ 23 出土石製品（Ｓ７）

Ｃ区
写真図版 71　遺物
SH26出土土器(312・313・317・319・321 ～ 323)
写真図版 72　遺物
ＳＨ 26 出土土器(324)
ＳＨ 27 出土土器(325・326・328・331)
写真図版 73　遺物
ＳＨ 27 出土土器(332 ～ 335・339・340)
ＳＨ 28 出土土器(342)
写真図版 74　遺物
ＳＨ 28 出土土器(343 ～ 346・348・349・351)
写真図版 75　遺物
ＳＨ 28 出土土器(352 ～ 354・356)
写真図版 76　遺物
ＳＨ 28 出土土器(357 ～ 359)
写真図版 77　遺物
ＳＨ 28 出土土器(360・361・363)
写真図版 78　遺物
ＳＨ 28 出土土器(364 ～ 367)
写真図版 79　遺物
ＳＨ 28 出土土器(368 ～ 372)
写真図版 80　遺物
ＳＨ 28 出土土器(373 ～ 377)
写真図版 81　遺物
ＳＨ 28 出土土器(379 ～ 384)
写真図版 82　遺物
ＳＨ 28 出土土器(385 ～ 387・390・391)
写真図版 83　遺物
ＳＨ 28 出土土器(393 ～ 395・397)
写真図版 84　遺物
ＳＨ 28 出土土器(396・398・400・403・404)

写真図版 85　遺物
ＳＨ 28 出土土器(401・402)
写真図版 86　遺物
ＳＨ 28 出土土器(405・408 ～ 412)
写真図版 87　遺物
ＳＨ 28 出土土器(414 ～ 417)
写真図版 88　遺物
ＳＨ 28 出土土器(418・420・421・423・424)
写真図版 89　遺物
SH28 出土土器(425・428 ～ 430・434・435)
写真図版 90　遺物
SH28 出土土器(436・437・440・441・444・445)
写真図版 91　遺物
ＳＨ 28 出土土器(446・447・449 ～ 453)
写真図版 92　遺物
ＳＨ 28 出土土器(454 ～ 459)
写真図版 93　遺物
ＳＨ 28 出土土器(460・462・464・467 ～ 469)
写真図版 94　遺物
ＳＨ 28 出土土器(470 ～ 472・474)
ＳＨ 27・ＳＨ 28 出土土器(477)
ＳＨ 29 出土土器(480)
写真図版 95　遺物
ＳＨ 29 出土土器(483 ～ 486)
Ｐ 10 出土土器(487)
写真図版 96　遺物
ＳＫ 17 出土土器（491）　ＳＫ 16 出土土器(493)
ＳＤ 09 出土土器(494 ～ 496・503・506)
写真図版 97　遺物
ＳＤ 09 出土土器（505・507・515・517・522・525)
写真図版 98　遺物
包含層出土土器(528・533・534・536)
ＳＨ 28 出土石器(Ｓ８)
ＳＨ 27 出土石製品(Ｓ９)
ＳＨ 26 出土鉄製品(Ｍ５・Ｍ６・Ｍ８)
ＳＥ 01 出土鉄製品(Ｍ７)

Ｄ区
写真図版 99　遺物
ＳＤ 11 出土土器(537 ～ 542・544)
写真図版 100　遺物
ＳＤ 11 出土土器(550・553・556・558)
写真図版 101　遺物
ＳＤ 11 出土土器(557・559)
包含層出土土器(560 ～ 562・565・567)
写真図版 102　遺物
包含層出土土器(569・571)
包含層出土銅銭(Ｍ９)

第１図　姫路市の位置

第１章　市之郷遺跡

第１節　地理的環境

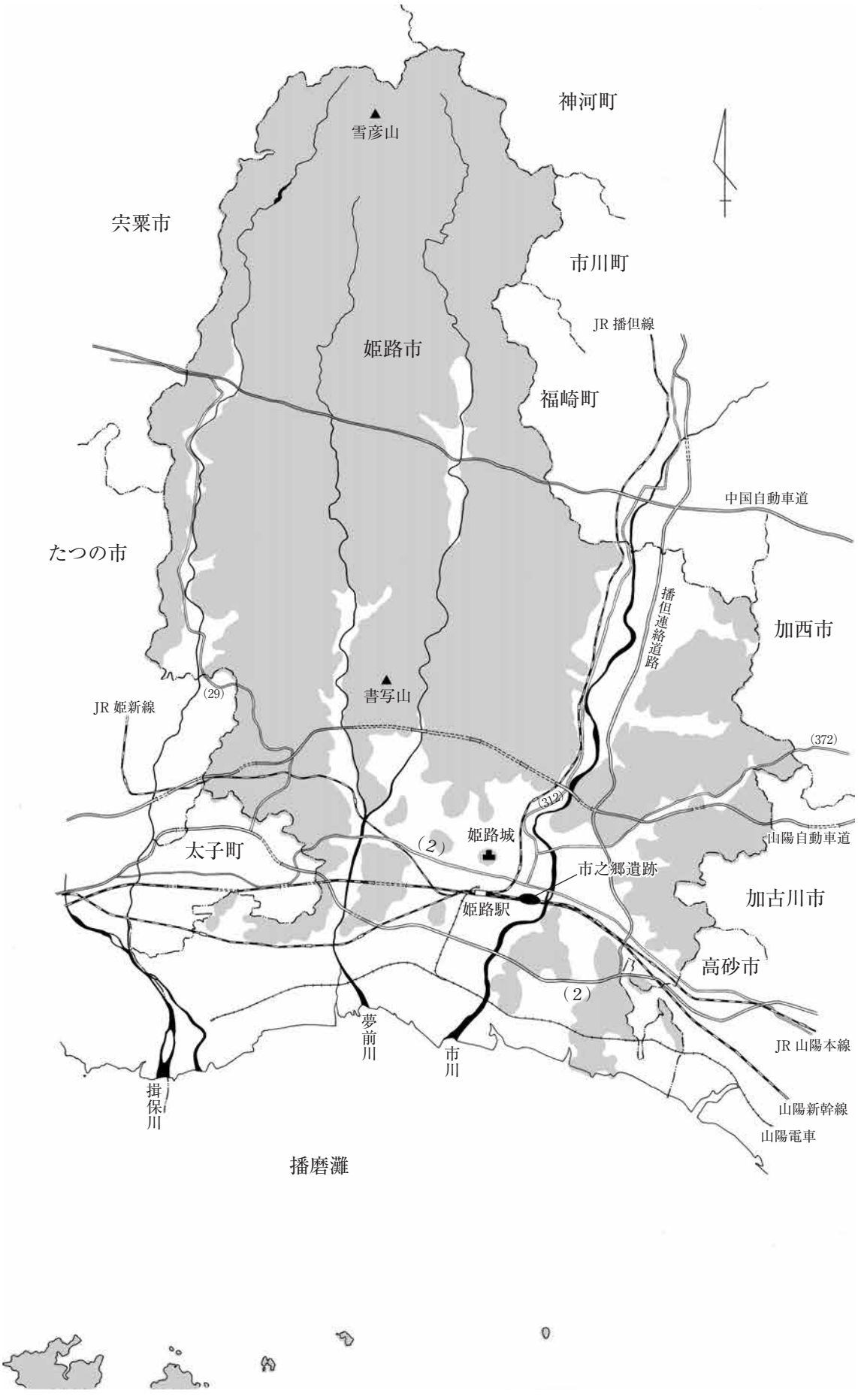
１．遺跡の位置

姫路市

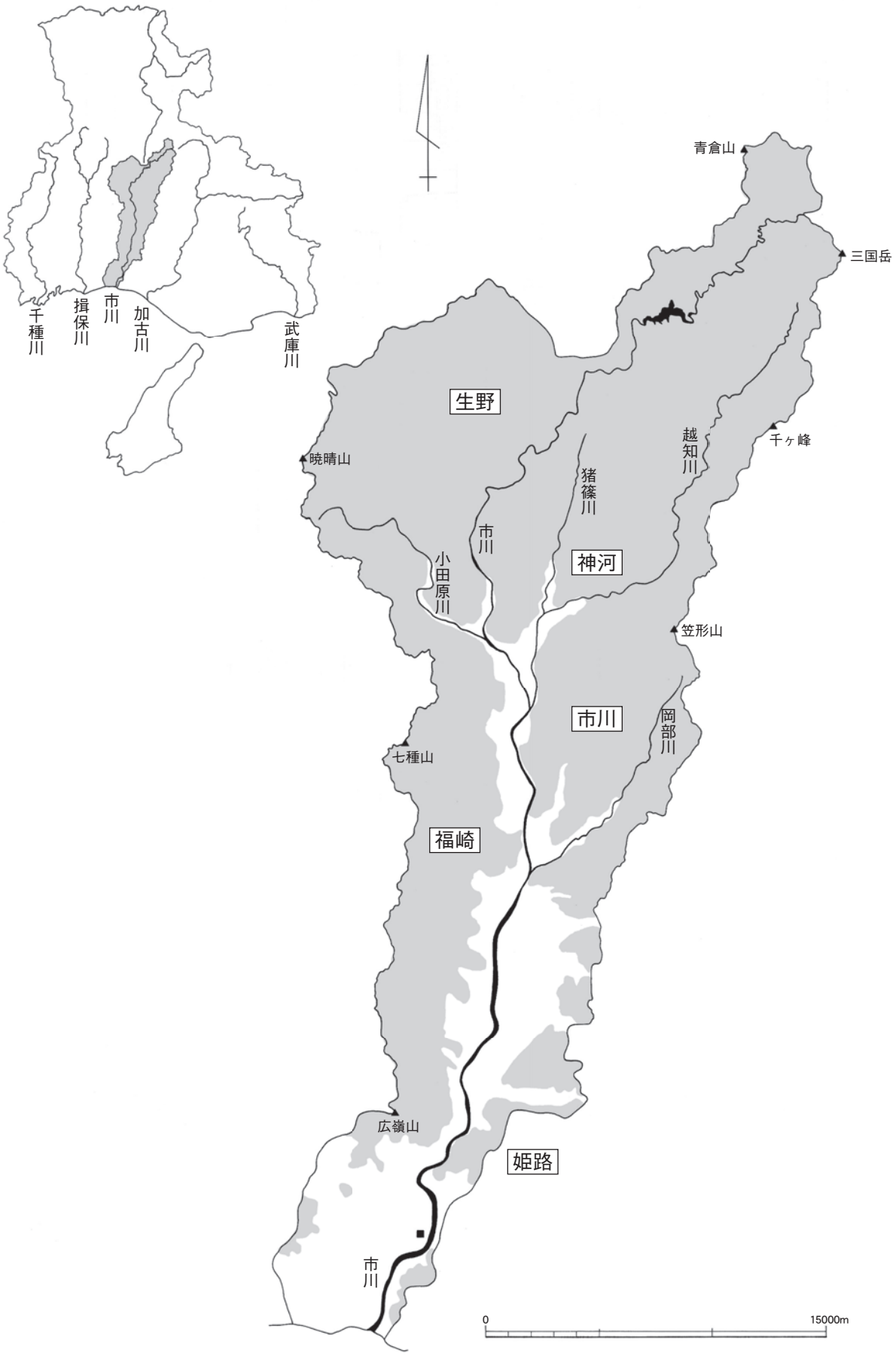
市之郷遺跡は姫路市日出町３丁目に所在する（第２図）。市之郷遺跡の所在する姫路市は、兵庫県第二の都市で、瀬戸内海を望む、播磨地域の中央部に位置する（第１図）。平成 18 年３月 27 日に、いわゆる平成の大合併により、飾磨郡家島町・同安富町・同夢前町および神崎郡香寺町を併せ、現在の姫路市となっている（第３図）。市域の面積は 534.27㎢、人口は約53 万６千人（平成 23 年 12 月現在、姫路市ホームページによる）である。市域は、西側を揖保郡太子町・たつの市（平成７年 10 月に合併後改称）・宍粟市、東側を神崎郡福崎町・同市川町・加西市・高砂市と接している（第３図）。

姫路市は、古代においては山陽道を中心とした交通の要衝として、江戸時代以降は姫路

第２図　市之郷遺跡の位置



第３図　姫路市の地理的位置


千種川
揖保川
市川
加古川
武庫川
青倉山
三国岳
生野
暁晴山
猪篠川
越知川
千ヶ峰
市川
小田原川
神河
笠形山
市川
岡部川
七種山
福崎
広嶺山
姫路
市川
0
15000m

第４図　市川水系

城を中心とした城下町として栄えてきた町である。また、昭和時代においては、沿岸部を中心に製鉄業を中心とした企業城下町として発展してきた。

現代においても、瀬戸内沿岸を東西に結ぶ交通（ＪＲ山陽本線・ＪＲ山陽新幹線・国道２号線・山陽自動車道）が通っている。また、瀬戸内側と日本海側を結ぶ交通（播但連絡道路・ＪＲ播但線・国道 312 号線）および中国山地内陸部（美作）とを結ぶ交通（ＪＲ姫新線）の起点ともなり、交通の要衝として重要な位置を占めている（第３図）。そして、平成８年４月１日には中核都市に移行している。

市之郷

市之郷遺跡の所在する市之郷は、旧城南村大字市之郷にあたり、姫路城の城下町の南東側周辺部にあたる。ＪＲ山陽本線姫路駅の東約２～３km から市川までの一帯がその範囲である（第２図）。遺跡の西半部は、かつてはＪＲの車両基地であったが、現在はＪＲ山陽本線高架に伴い再開発が行われ、区画整理事業用地となっている。

市之郷という地名は、平安時代から鎌倉時代にかけて、当地に「飾磨の市」がたっていたことに由来するものである(1)。『枕草子』をはじめ、多くの歌にうたわれ、都にも知れわたったほど大きな市であったようである。

２．地形的環境

市川

姫路市域は、大きく北側の山地と南側の平野部からなり、平野部は南北に市域を貫く市川と夢前川およびその支流によって形成されている。この平野は姫路平野と称され、市之郷遺跡は姫路平野の東側に位置する。市川下流域にあたり、現在は市川右岸に位置する（第５図）。海岸線から市之郷遺跡までの直線距離は約５km を測り、調査地の現地表面の標高は 12.70 m である。

第５図　市之郷遺跡と市川

市川は、朝来市生野町を源とし、神崎郡・姫路市をほぼ南北に南下し、瀬戸内海に注ぐ二級河川である（第４図）。全長約 77.5km を測り、兵庫県下で２番目に長い川である。流域面積は 491 ｋ㎡に及ぶ。『播磨風土記』においては、「小川」と称されている(2)。

地形環境

市之郷遺跡が立地する地形環境に関しては、『市之郷遺跡Ⅰ』で分析している(3)。本報告も、先の分析結果の上に立つものである。

〔註〕

(1) 橘川真一『播磨の街道　「中国行程記」を歩く』2004

(2) 『日本古典文学大系２　風土記』岩波書店　1958

(3) 山田清朝『市之郷遺跡Ⅰ－ＪＲ山陽本線連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書Ⅰ－』兵庫県教育委員会　2005

第２節　歴史的環境

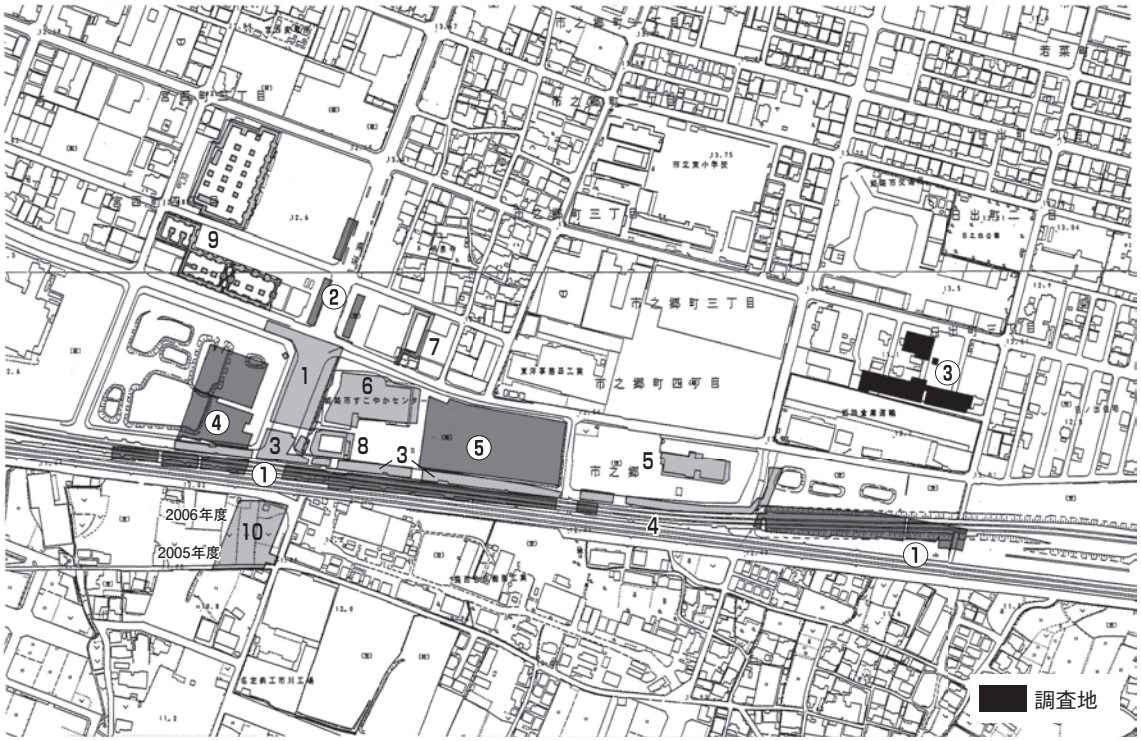
はじめに　市之郷遺跡の発掘調査は、姫路市教育委員会および兵庫県教育委員会により、今回報告する調査を含めて数次におよぶ調査が行われている。姫路市教育委員会・兵庫県教育委員会が実施した調査について古い順に調査次数を付け、以下その主要な調査についてその概要をまとめておくことにする。

なお、昭和時代においても、貨物駅建設に伴う調査、山陽新幹線建設に伴う調査が行われている。ただし、調査成果が明らかとなっていないため、具体的な調査位置も含め、詳細は不明である。このため、本報告では対象としないことにする。

１．市之郷遺跡の調査(姫路市教育委員会)

市第３次調査　区画整理に伴い、平成９年度に姫路市教育委員会により行われた西部調査区の調査である(第６図:３)。弥生時代中期から古墳時代初頭の溝･竪穴住居跡･土坑･土坑墓･素掘り井戸･掘立柱建物跡が検出されている。注目されるものとして、弥生時代中期後半の棟持柱を有する大型掘立柱建物跡、奈良時代前期の須恵器・水晶・土玉・土馬が出土した祭祀に関する遺構などが検出されている。

市第４次調査　区画整理に伴い、平成９年度に姫路市教育委員会により行われた東部調査区の発掘調査である(1)（第６図：４)。古墳時代後期の竪穴住居跡・溝・土坑、白鳳時代の市之郷廃寺に関係する遺構・遺物（瓦・鴟尾）が検出されている。古墳時代の竪穴住居跡内からは韓式土器がまとまって出土している。



第６図　市之郷遺跡の調査

市第５次調査　キャスティ 21 住宅建設に伴う調査である[(2)]（第６図：５）。姫路市教育委員会により、平成 12 年度に調査が行なわれている。弥生時代中期の溝、平安時代後期（11 世紀後半）の掘立柱建物跡が検出されている。

市第６次調査　すこやかセンター建設に伴う調査である[(3)]（第６図：６）。姫路市教育委員会により、平成 12 年度に調査が行なわれている。古墳時代の竪穴住居跡、７世紀末の柱穴・溝、平安時代の溝等が検出されている。７世紀末および平安時代の遺構に関しては、市之郷廃寺との関連が考えられている。

市第８次調査　新福祉センター建設に伴う調査である[(4)]（第６図：８）。姫路市教育委員会により、平成 13 年度に調査が行なわれている。今回報告する調査の大日線を挟んだ東側にあたる。弥生時代前期の河道、同中期後半の土器棺、同後期の竪穴住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡・集石土坑・区画溝、中世の井戸・埋甕・溝・土坑墓が調査で明らかとなっている。とりわけ注目されるのが、奈良時代の区画溝が市之郷廃寺に関連する遺構の可能性が高いことである。また、鴟尾片も出土している。

市第９次調査　店舗建設に伴う調査である[(5)]（第６図：９）。姫路市教育委員会により、平成 15 年度に調査が行なわれている。薬師堂の北側の地区を対象としている。市之郷廃寺に関連すると考えられる南北方向の溝が検出されている。

市第10次調査　姫路市教育委員会が阿保地区区画整理にともない実施した調査である（第６図：10）。調査地は、新幹線の南側、県道大日線の延長上にあたる地区である。調査の結果、北西から南東方向へ流れる古墳時代の流路跡を検出している。奈良時代には完全に埋没することが明らかとなっている。

３．市之郷遺跡の調査（兵庫県教育委員会）

県第１次調査　ＪＲ山陽本線連続立体化工事に伴う調査である[(6)]（第６図：①）。平成７年から平成８年にかけて実施された調査で、一部（Ａ地区）は今回報告する調査地の南側にあたるもので、調査区が近接している。弥生時代中期から室町時代にかけての遺構・遺物が明らかとなっている。また、市之郷廃寺の一部も明らかとなっている。

第７図　渡来人の住居跡（県第１次調査）

さらに、古墳時代中期初頭の竪穴住居は、韓式系土器が一括で出土し（第７図）、渡来人の住居の可能性が高いものと考えられ、注目されている。またＡ地区では、古墳時代中期から後期の竪穴住居や鎌倉時代から室町時代にかけての集落跡が明らかとなっている。

県第２次調査　都市計画道路大日線街路整備に伴う調査である[(7)]（第６図：②）。平成 17 年度に実施している。弥生時代前期の土坑、同中期の竪穴住居跡などが検出されている。

県第３次調査　今回報告する調査である（第６図：③）。

県第４次調査　姫路警察署庁舎新築工事に伴う調査である[8]（第６図：④）。古墳時代後期（６世紀後半～７世紀中頃）の掘立柱建物を中心とした建物群が検出されている（第８図）。特に７世紀中頃の建物群については、市之郷廃寺創建時期とほぼ一致することから、寺院建立氏族の居館と考えられるものである。この他、完新世段丘Ｉ面に伴う氾濫原面の埋没過程で形成された旧河道内からは、多量の弥生時代中期の土器が出土している。

第８図　県第４次調査

県第５次調査　ものづくり大学建設に伴う調査である（第６図：⑤）。兵庫県教育委員会が平成 20 年度に実施している。市之郷廃寺に伴う仏堂が明らかとなり、これにより市之郷廃寺の所在地を結論付けることができた。この他、古墳時代後期の竪穴住居が数棟検出されている。

〔註〕

（１）秋枝　芳「（仮称）姫路駅周辺第３地点遺跡（第２次調査）」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成９年度（1997）姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　1999

（２）中川　猛「（仮称）姫路駅周辺第３地点遺跡　キャスティ 21 住宅建設予定地」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成 12 年度（2000）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2002

（３）小柴治子「姫路駅周辺第３地点遺跡（すこやかセンター建設に伴う）」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成 13 年度（2001）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2003

（４）中川　猛「（仮称）姫路駅周辺第３地点遺跡　新福祉センター建設予定地」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成 12 年度（2000）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2002

（５）小柴治子「姫路駅周辺第３地点遺跡（店舗建設に伴う）」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成 13 年度（2001）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2003

（６）山田清朝『市之郷遺跡Ｉ－ＪＲ山陽本線連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書Ｉ－』兵庫県教育委員会　2005

（７）渡辺　昇『市之郷遺跡Ⅱ－（都）大日線緊急街路整備工事に伴う発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会　2010

（８）山田清朝『市之郷遺跡Ⅲ－姫路警察署庁舎新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会　2011

第２章　調査の経緯

第１節　調査の起因

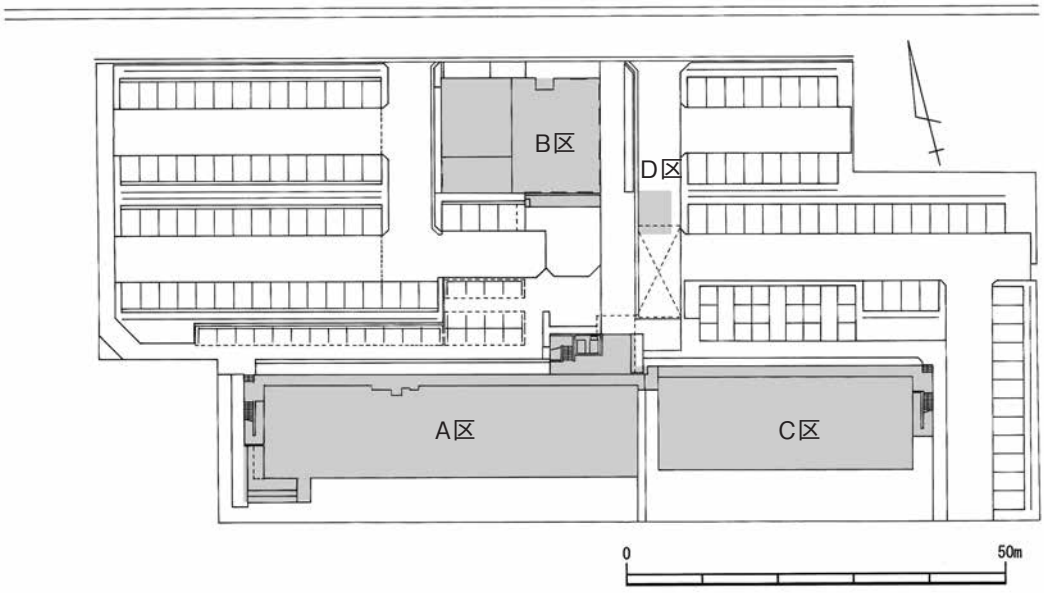
はじめに

兵庫県住宅供給公社は、姫路市日出町３丁目に、県営姫路日出住宅、県営姫路日出住宅第２－１期建替事業を計画している。当地区は、以前住宅地であったが、このたび、新たに県営住宅が建替えられることとなった。ところが、事業予定地が「仮称姫路駅周辺第３地点」（平成 22 年度より「市之郷遺跡」と改称）として周知されていることから、確認調査を経て本発掘調査を行うこととなったものである。

第９図　竣工後の日出住宅

工事概要

事業予定では、本棟（Ⅰ期）・本棟（Ⅱ期）・コミュニティプラザの大きく３棟からなる（第 10 図）。これらの建設予定地が、埋蔵文化財に抵触するため、本発掘の対象とした。本棟（Ⅰ期：第９図）がＡ区、本棟（Ⅱ期：第９図）がＣ区、コミュニティプラザがＢ区にあたるものである。このほか、防火水槽建設部分がＤ区にあたるものである（第 10 図）。このほか、駐車場・駐輪場等については、顕著な掘削を伴わないため、調査の対象外とした。



第 10 図　工事計画と調査位置

第２節　分布調査・確認調査

１．分布調査

市之郷遺跡は以前から周知されていた遺跡である。また、前章で紹介したように、周囲で多くの本発掘調査が行われている。このため、本事業に伴う分布調査は行われていない。

２．確認調査

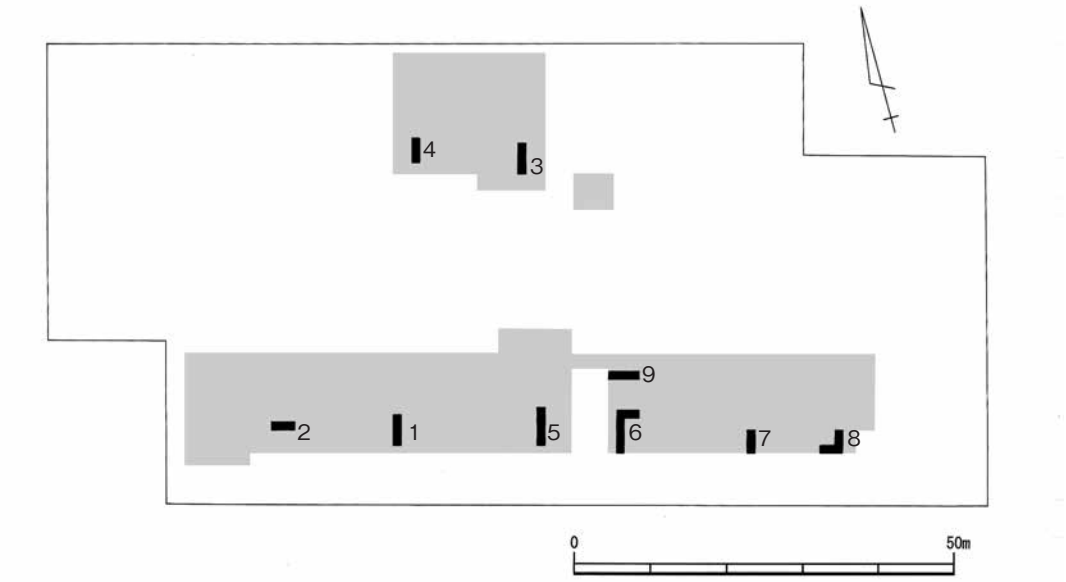
今回報告する調査地を対象とする確認調査は平成 17 年度に行なわれている。その概要等は以下のとおりである。

調査番号　2005097

調査期間　平成 17 年 10 月 20 日～ 10 月 21 日

調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　深江英憲

調査概要　調査は、１ｍ×３ｍ、１ｍ×４ｍ、１ｍ×５ｍのトレンチを合わせて９箇所設定し、重機と人力により、埋蔵文化財の有無の確認を行なった（第 11 図）。



第 11 図　確認調査位置図

この結果、１Ｔで柱穴を、４Ｔで土坑状の落ち込みを、５Ｔで柱穴と土坑を、８Ｔで土坑を、９Ｔで流路を確認した。

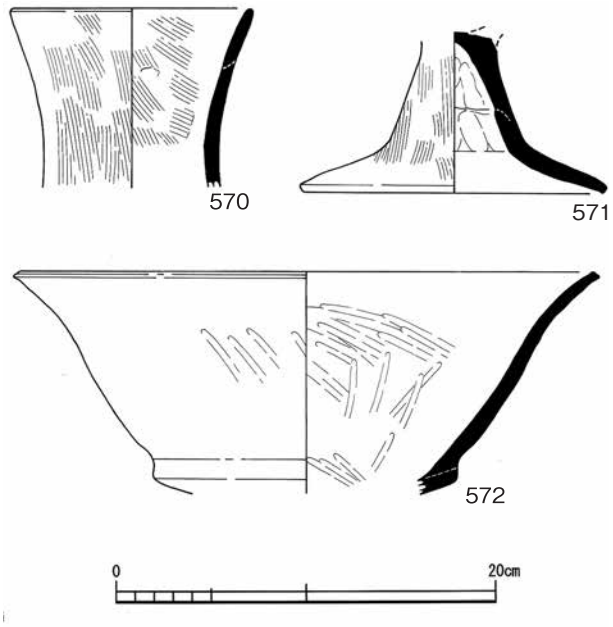
この他、２Ｔにおいては弥生時代中期の土器、４Ｔから土師器の高杯等（571・572）、６Ｔから弥生時代後期の土器（570）の出土を確認した（第 13 図）。

570 は長頸壺の口縁部で、弥生時

第 12 図　確認調査

代後期に位置付けられる土器である。571 は土師器の高杯の脚部である。572 は、土師器の大型高杯の杯部である。体部と口縁部の境は明確な段が形成されている。内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。

以上から、弥生時代中期と古墳時代後期の遺構が事業予定地全域に拡がっていることが明らかとなり、本発掘調査を実施することとなった。



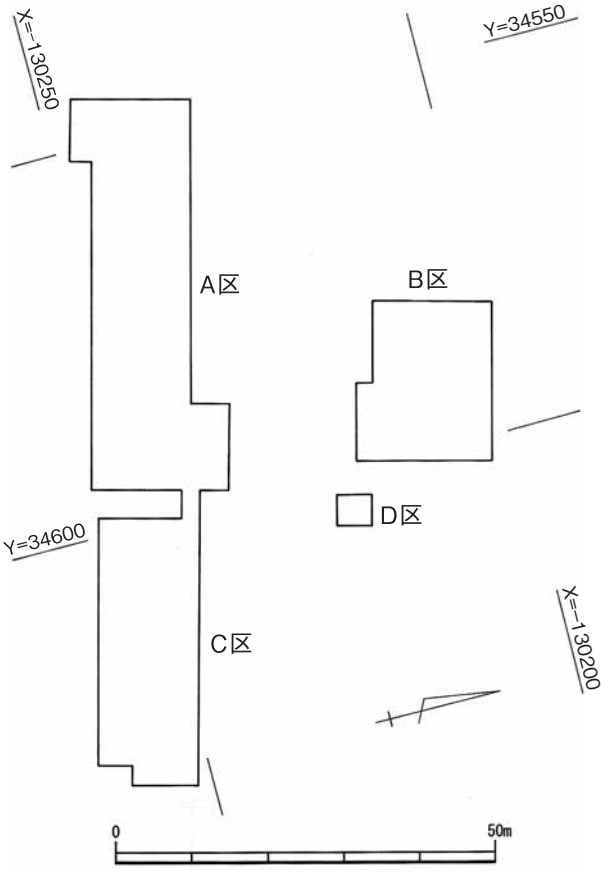
第 13 図　確認調査出土土器

第３節　本発掘調査

１．調査の概要

はじめに　　前節における確認調査の結果、県営姫路日出住宅、県営姫路日出住宅第２－１期建替事業予定地には、埋蔵文化財が包蔵されていることが明らかとなった。

以上から、建物の建設予定地４箇所を調査対象とした。本棟建設予定地をＡ区・Ｃ区、コミュニティプラザ建設予定地をＢ区、防火水槽建設予定地をＤ区と呼称し、調査をすすめていった（第 14 図）。調査時の概要等は以下の通りである。



第 14 図　地区割り図

遺跡調査番号　　遺跡調査番号：2006070

調　査　地　　姫路市日出町３丁目

調査期間　　平成 18 年6月 26 日～９月29 日

調査概要　　Ａ区～Ｄ区の４地区を対象とした。調査は、盛土層を重機により、以下は人力により作業を進めていった。遺構検出後、平成 18 年９月 20 日にヘリコプターによる空中写真測量を実施し、調査成果の記録に努めた。調査面積は、1699㎡（Ａ区：821㎡・Ｂ区：356㎡・Ｃ区：492㎡・Ｄ区：30㎡）である。

また、調査中に、県立須磨友が丘高校生３名が、体験発掘を行った。調査が一段落した平成 18 年９月 16 日に、一般市民を対象とした現地説明会を実施し、約 30 名の参加を得た（第 15 図）。

第 15 図　現地説明会

２．調査の体制

調査体制は以下の通りである。

調査員　　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現兵庫県立考古博物館）
山田清朝・鈴木敬二

室内作業員　　菊島昌子・藤田 泉

調査補助員　　桒田利可子

第４節　整理作業

はじめに　　整理作業は、平成 22 年度と 23 年度の２箇年で兵庫県立考古博物館にて実施した。各年度の整理作業の概要・体制等は以下の通りである。なお、土器の水洗については、発掘調査現場事務所にて発掘調査と平行して行った。

平成 22 年度

整理概要　　土器の接合・復元作業を行った。その後、土器および石器の実測をおこなった。これと平行して、遺物写真の撮影をおこなった。

整理体制　　整理保存課　山本　誠
調　査　課　山田清朝
嘱　託　員　友久伸子・森本貴子・吉田優子・高瀬敬子・島村順子・三好綾子
又江立子・伊藤ミネ子・宮野正子・佐々木誓子・荻野麻衣・藤池かづさ
嶺岡美見・吉村あけみ・佐々木　愛

平成 23 年度

整理概要　　土器の写真撮影、遺構図の整図･トレースを実施した。この他、出土石製品の石材鑑定を株式会社パレオ・ラボへ、ＳＨ 28 出土弥生土器の胎土分析をパリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。この結果は、第４章に掲載している。
また、出土土器の写真撮影を行った。併せて、原稿の執筆を行なった。

第 16 図　遺物写真の撮影

整理体制　　整理保存課　山本　誠・深江英憲
調　査　課　山田清朝
嘱　託　員　友久伸子・榎　真菜美

第３章　調査の成果

第１節　調査の概要

調査区

発掘調査は県営姫路日出住宅、県営姫路日出住宅第２－１期建替事業に伴うもので、平成 18 年度の１箇年で実施した。事業予定地は広範囲に及ぶが、調査は地下に掘削が及ぶ建物建設予定地を対象とした（第 17 図）。Ａ区～Ｄ区の４地区である（前章第３節）。ただし、Ａ区とＣ区については、その間隔がわずかであったため、北側の一部については連続させて調査を行っている。

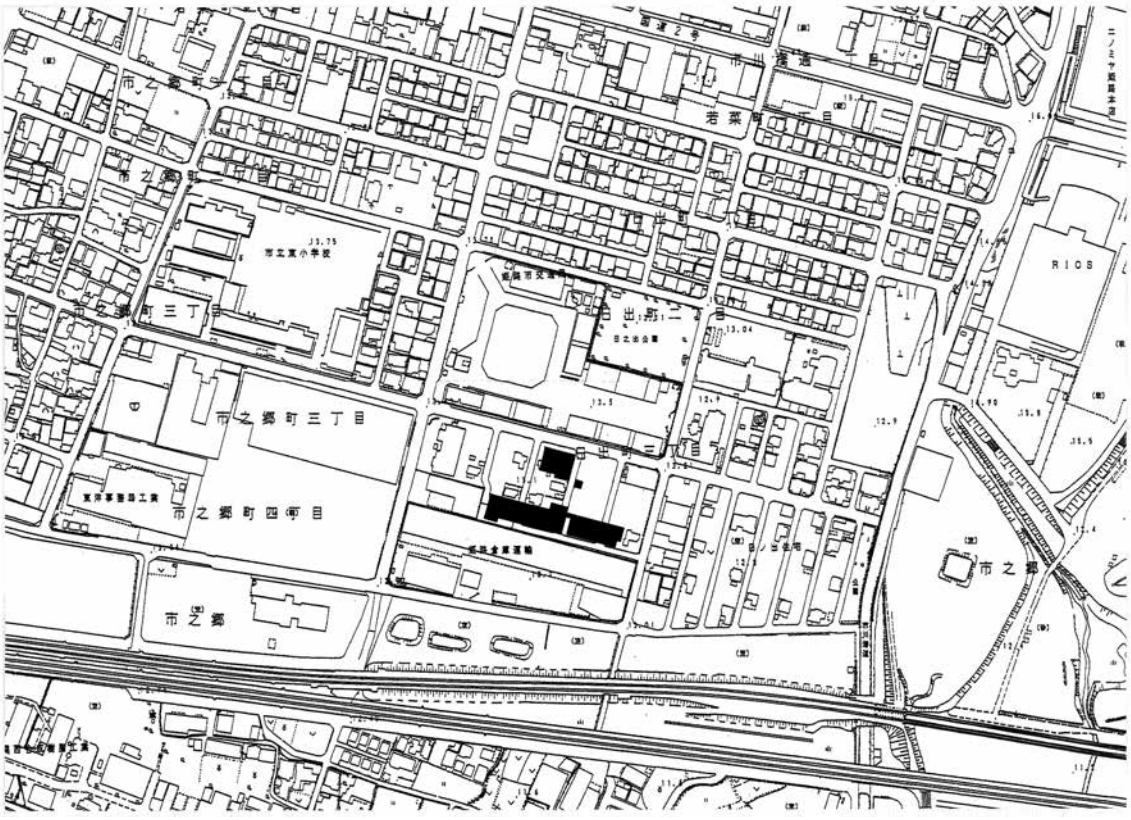
第 17 図　調査前（東から）

調査手順

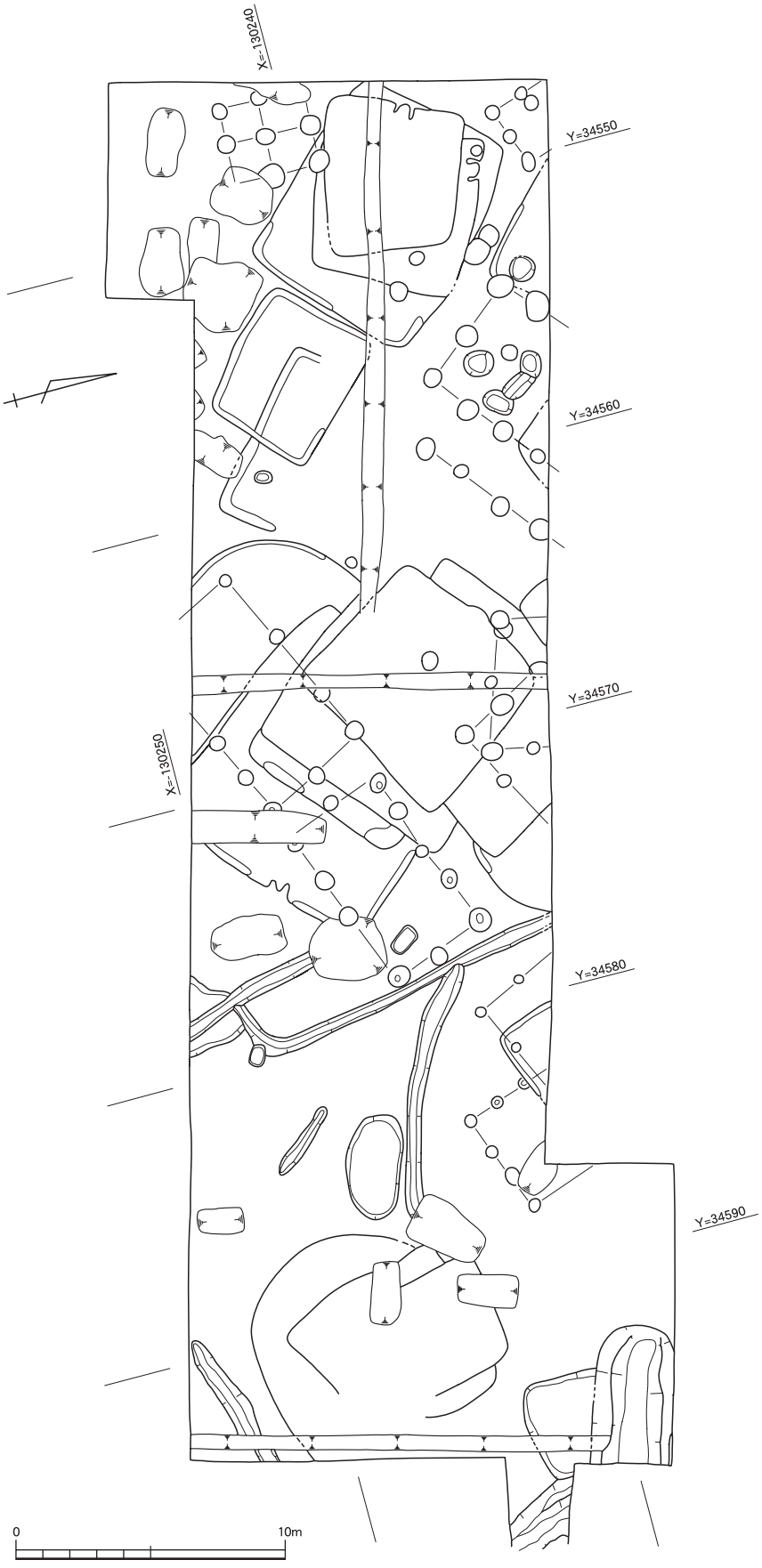
調査は、Ｃ区→Ａ区→Ｂ区→Ｄ区の順に進めていった。ただし、最終的には４地区がほぼ平行して調査を行う結果となった。

報告手順

報告は、事実報告については地区単位でまとめ、第５章においては、４地区を総括する形でまとめていくことにする。本報告において、遺構番号は遺構種ごとにＡ区→Ｂ区→Ｃ区→Ｄ区の順に付けている。出土遺物の番号についても同様である。



第 18 図　調査位置図



第 19 図　A 区全体図

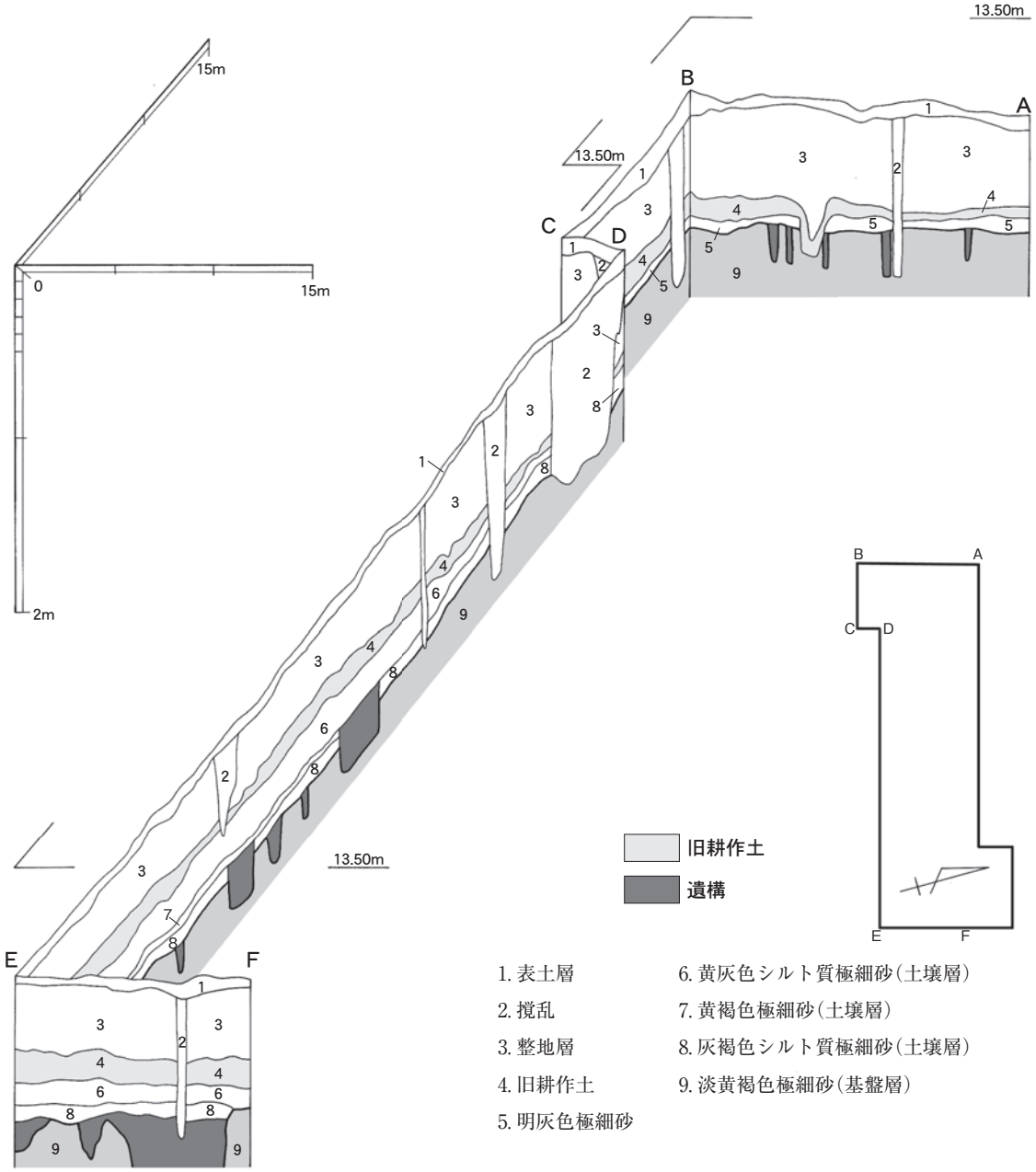
第２節　A区の調査

１．概要

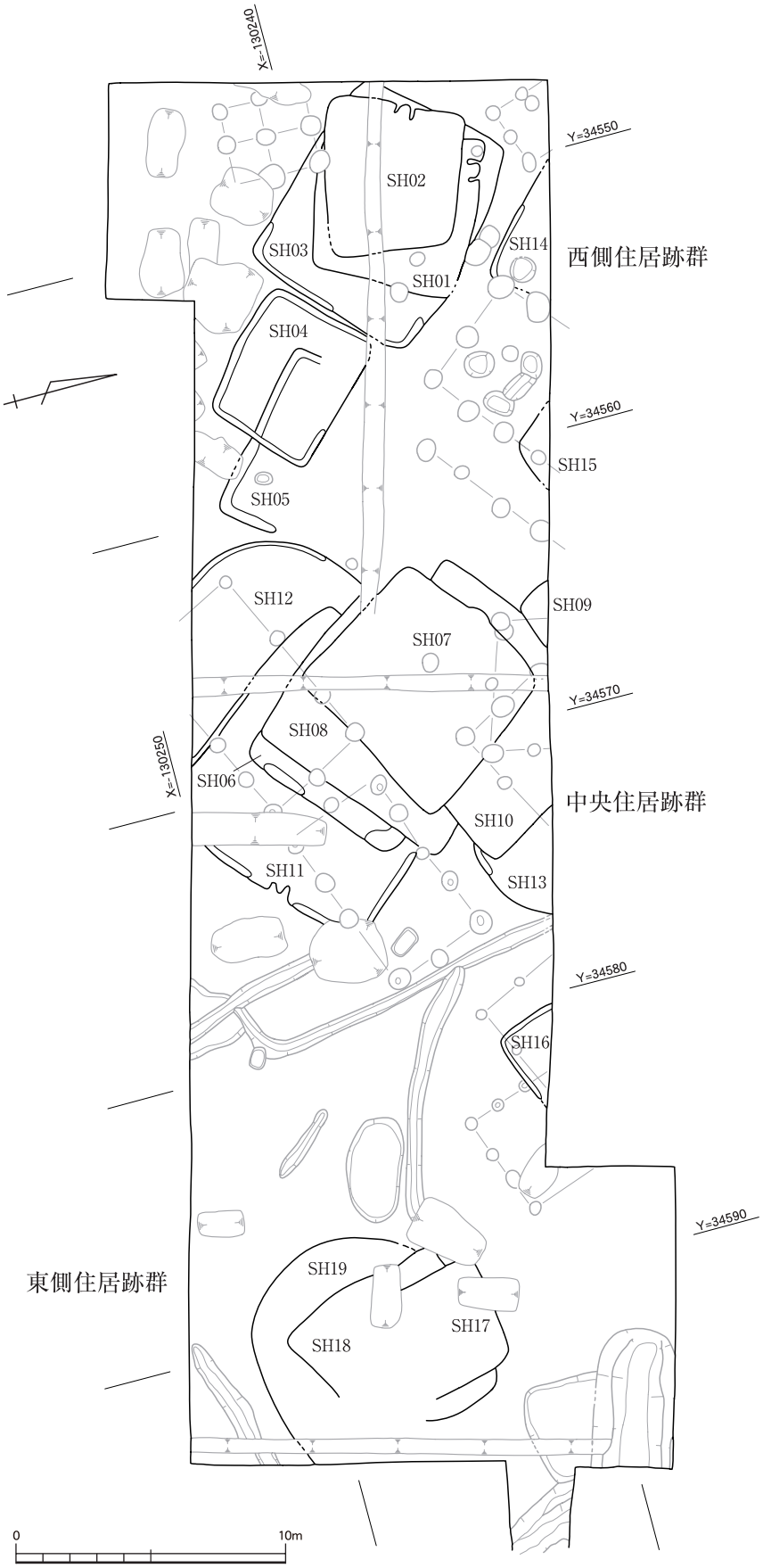
はじめに　当地区では、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝を検出している（第 19 図）。遺構は調査区全域で検出しており、遺構相互の切り合い関係も顕著である。特に、竪穴住居相互の切り合い関係は顕著で、大きく３箇所で住居跡群が形成されている。

基本土層　上から、表土・整地層、旧耕作土、土壌層、基盤層からなる（第 20 図）。

表土・整地層に関しては、昭和時代以降の整地層と考えられる。表土上面の標高は、12.90 ｍである。旧耕作土に関しては調査区全域で認められ、当地の旧地形を表しているものと考えられる。当調査区においては、レベル差は認められない。



第 20 図　A区基本土層



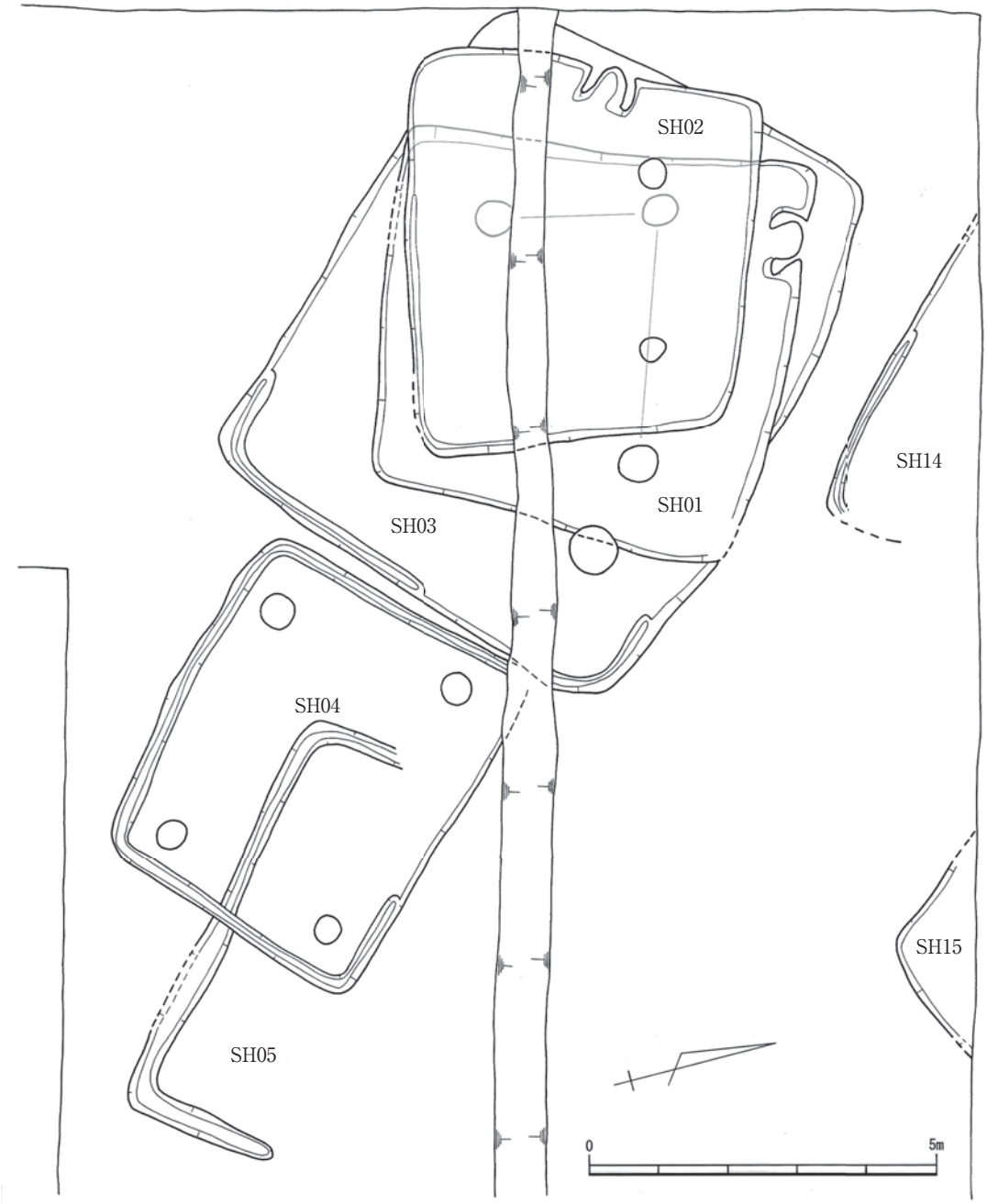
第 21 図　A区　竪穴住居跡

土壌層に関しては、東側ほど厚くなっており、南東側を中心に３層に分層可能である。ただし土壌化は顕著ではなく、多くは水田土壌層に対応する床土層であったと考えられる。

基盤層は、極細砂からなるが、調査区内においては礫層が認められる。礫層堆積後、この礫層を埋める形で極細砂が堆積したものと考えられる。調査区全域で大きなレベル差は認められない。

遺構の検出

遺構は、土壌層下面で検出している。南東部での土層観察においては、土壌層が３層認められたが、最下層土壌層（８層）の上面から切り込む遺構と、下面から切り込む遺構が認められた。しかし、土壌層上面における平面的な検出が困難であったため、全ての遺構を土壌層下面＝基盤層上面で検出している。つまり、遺構は１面で検出されている。その標高は、12.10 mである。



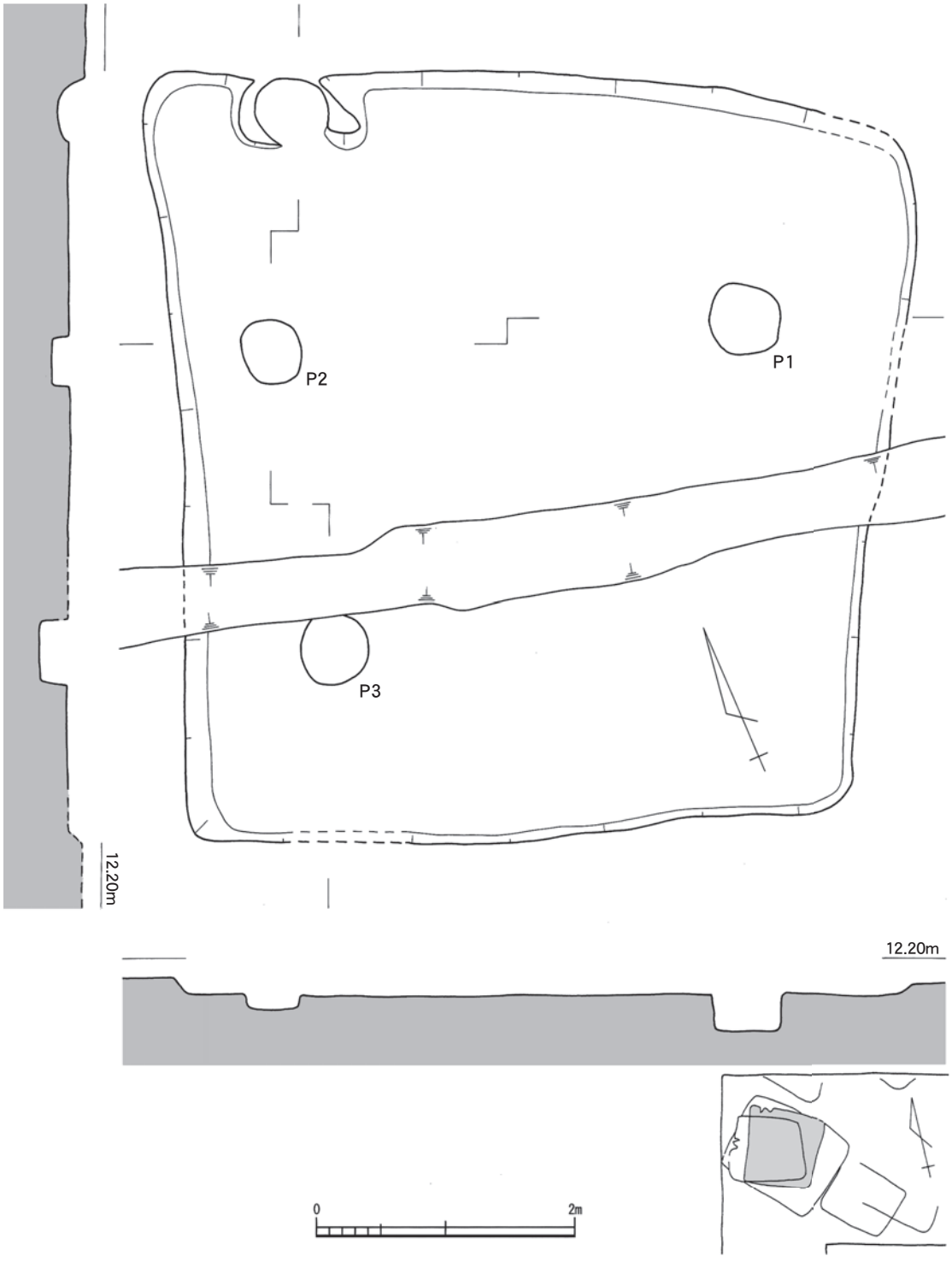
第 22 図　A区西側住居跡群

２．竪穴住居跡

はじめに　　計 19 棟（ＳＨ 01 ～ＳＨ 19）検出した。大きく、３つの住居跡群からなる。

ＳＨ 01（写真図版４）

検出状況　　調査区西部で検出した（第 21 図）。西側住居跡群に位置する（第 22 図）。ＳＨ 02・ＳＨ 03 と切り合い関係にあり、ＳＨ 03 を切り、ＳＨ 02 に切られている。ＳＨ 02 を検出後、その床面で当住居跡のプランを確認し検出したものである。ＳＨ 03 が埋められた後当住居跡が



第 23 図　ＳＨ 01

造られ、その後当住居跡が埋められた後にＳＨ02が造られたものと考えている。当住居跡が埋められた後に再掘削されているが、ＳＨ02の床面の深さが浅いため、結果として当住居跡のプランが残存する形となっている。このため、当住居跡全体が検出されている。

形状・規模　平面形は長方形を呈するが、南辺に対して北辺が長く、台形傾向にある（第23図）。南北方向で5.60ｍ、東西方向で5.67ｍを測り、両者を基準とした面積は48.16㎡である。また、検出面からの床面の深さは30㎝を測り、住居跡中央部での床面の標高は11.95ｍである。

付属施設　主柱穴とカマドを検出した。

主柱穴　３穴（Ｐ１～Ｐ３）検出した。本来は４穴からなるものと考えられるが、南東部の柱穴については検出することができなかった。

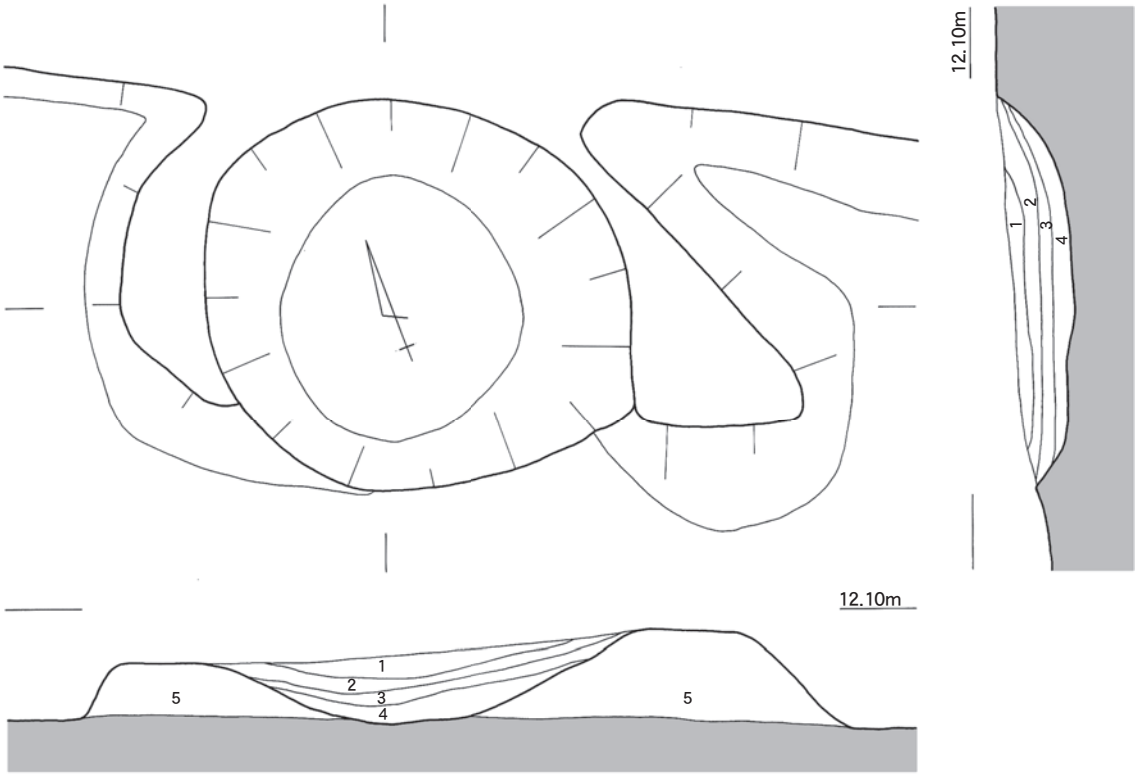
各柱穴掘り形の平面形は、円形をなす。その規模は、Ｐ１が53㎝、Ｐ２が35×50㎝、Ｐ３が51㎝を測る。また、床面からの深さは、Ｐ１が30㎝、Ｐ２が16㎝、Ｐ３が20㎝である。３穴とも柱痕を検出することはできなかった。

柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間が3.65ｍ、Ｐ２－Ｐ３間が2.30ｍである。

カマド　北辺の西側で検出した（第24図）。全体が検出されている。

カマドは盛土により造られ、袖頂部と床面との比高は11.60㎝を測る。住居跡内に袖部が張り出し、ハの字形をなす。住居跡北辺からの張り出しは、東側袖部で55㎝、西側袖部で48㎝を測る。また、両袖部間の幅は内側肩部間で52㎝を測る。

袖部に囲まれた焚口はわずかに土坑状に窪み、その規模は、主軸方向で51㎝、その直交方向で56㎝を測る。また、袖頂部と焚口最深部との比高は９㎝である。焚口内では、焼土



1.焼土　2.炭層　3.焼土　4.焼土　5.暗灰褐色シルト混じり極細砂

第24図　ＳＨ01　カマド

層と炭層の互層を確認した(第 24 図)が、いわゆる支柱は認められなかった。

なお、カマド内から１の土師器甕が出土している。

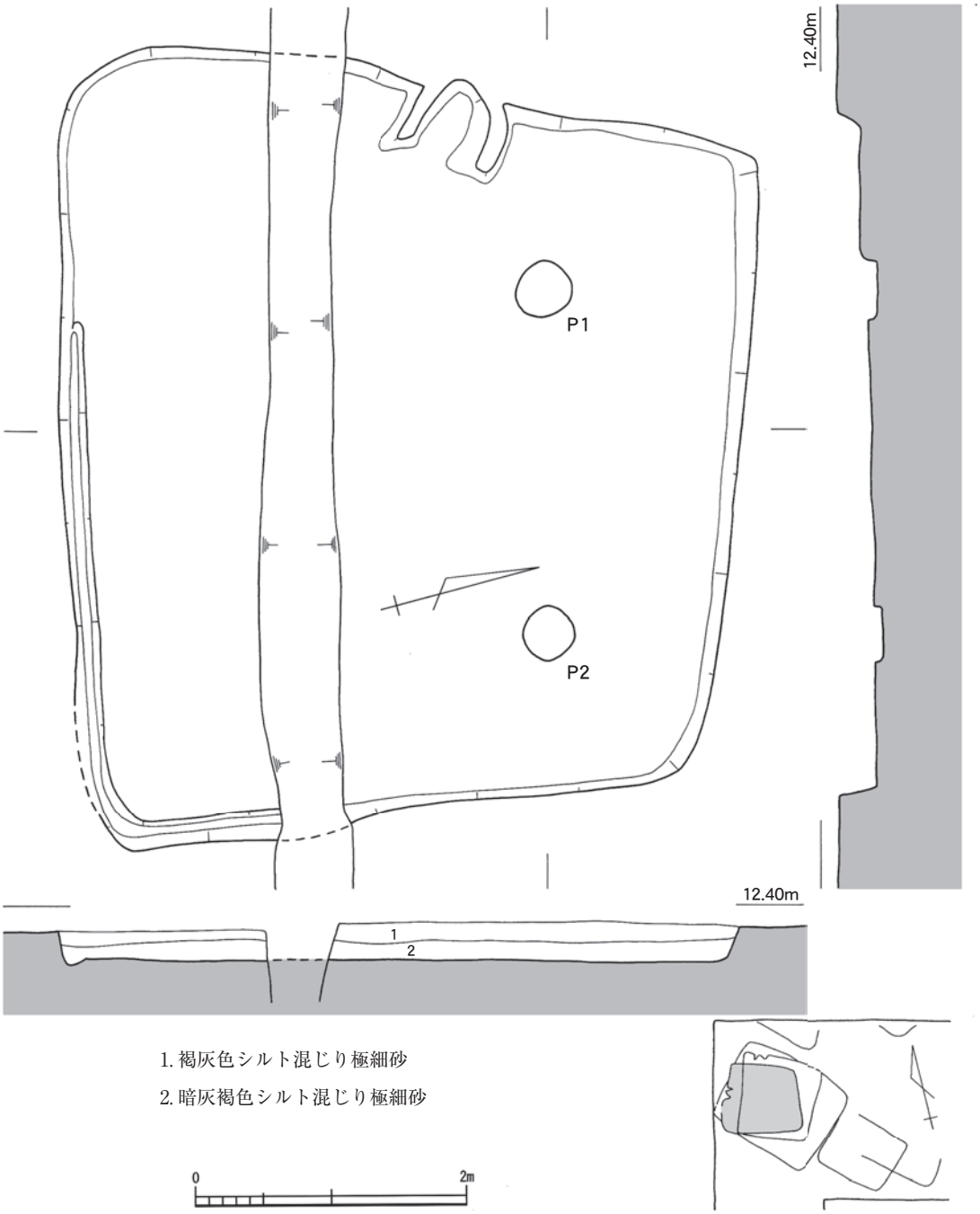
埋没状況　１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している(図版１)。

土師器　１の甕の口縁部片が出土している。長胴甕の口縁部と考えられる。

須恵器　杯Ｈ蓋・甕・高杯が出土している。図化できたのは２の杯Ｈ蓋に限られる。天井部を中心に残存し、天井部外面はヘラ切り後未調整である。この他、甕は体部片が、高坏は脚部片が出土している。

時　期　出土土器から、古墳Ｉ期古相に位置付けられる。



第 25 図　ＳＨ 02

ＳＨ 02（写真図版５）

検出状況　調査区西部で検出した（第 21 図）。西側住居跡群に位置する（第 22 図）。ＳＨ 01・ＳＨ 03 と切り合い関係にあり、両住居跡を切っている。このため、住居跡全体が検出されているが、住居跡のほぼ中央部を東西方向に後世の撹乱を受けている。

第 26 図　ＳＨ 02 の調査

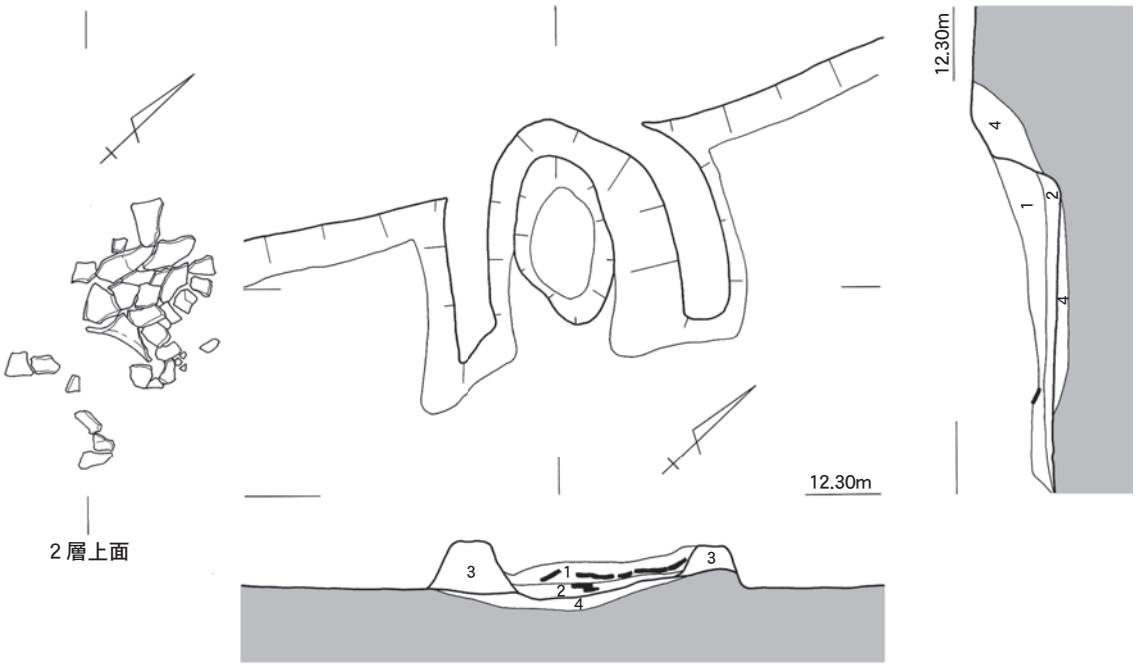
形状・規模　平面形は長方形を基本形とするが、東西両辺が平行関係になく、台形状をなす（第 25 図）。南北方向で 5.03 ｍを測り、北辺で 4.60 ｍ、南辺で 5.90 ｍを測る。北辺と南辺の平均規模と南北方向を基準とした面積は、26.40㎡である。また、検出面からの床面の深さは 28㎝を測り、住居跡中央部における床面の標高は 12.02 ｍである。

付属施設　主柱穴・カマド・周壁溝を検出した。

主柱穴　東西に並ぶ２穴（Ｐ１・Ｐ２）検出した。当初は４穴あったものと考えられるが、他の２穴に関しては、後世の撹乱を受け検出できなかったものと考えられる。２穴とも平面形は円形をなし、その規模は両穴とも 40㎝と同規模である。また、床面からの深さは、Ｐ１が 12㎝、Ｐ２が６㎝と浅い傾向にある。Ｐ１－Ｐ２間の距離は、2.55 ｍである。

カマド　西辺の中央部やや北側で検出した（第 27 図）。ほぼ全体が検出されている。

カマドは盛土により造られ、袖頂部と床面との比高は 13㎝を測る。住居跡内に袖部が張



1. 暗茶褐色シルト混じり細砂（焼土塊混入）　3. 暗茶褐色シルト混じり細砂
2. 暗褐灰色細砂（焼土塊多く混入）　4. 焼土

0　1m

第 27 図　ＳＨ 02　カマド

り出し、ハの字形をなす。住居跡西辺からの張り出しは、南側袖部で55㎝、北側袖部で60㎝を測る。また、両袖部間の幅は、内側肩部間で50㎝を測る。また、カマド使用時の焼土化した酸化層(第27図：４層)が、住居跡西辺の西側にも拡がっていた。

袖部に囲まれた焚口は、わずかに皿状に窪み、その規模は、主軸方向で45㎝、その直交方向で25㎝を測る。また、袖頂部と焚口最深部との比高は16㎝である。焚口内には、焼土塊を多く含む層（第27図：１層・２層）が堆積していた。また、この層が住居跡内で面的に認められ、カマド内から掻き出されたものと考えられる。

また、２層上面から土師器の甕(14)が押し潰された状態で出土している（第27図)。カマド内で使用されていたものと考えられる。

周壁溝　南辺から東辺にかけて検出した。検出したのは南辺の2/3と東辺の1/4に限られる。床面における規模は、幅16㎝を測り、横断面はU字形をなす。最深部における床面からの深さは５㎝である。

埋没状況　上から、褐灰色シルト混じり極細砂と暗灰褐色シルト混じり極細砂の２層からなる。両層とも、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土器と金属品が出土している。

土器　土師器と須恵器が出土している(図版１)。

土師器　甕・甑・高杯が出土している。甑と高杯に関しては、小片のため図化できなかった。

甕は、３個体（12～14）図化することができた。12と13は口縁部を中心に残存し、長胴甕の一部と考えられる。14は底部を除いて完形に復元できた個体で、長胴タイプの甕である。体部内面はヘラ削りにより仕上げられている。外面はハケ調整がていねいに施されている。

この他、甑は舌状をなす把手が出土している。高杯は、脚端部の小片が出土している。

須恵器　鉢・杯H・杯H蓋・高杯・甕が出土している。甕については、小片のため図化できなかった。

鉢は３の１個体が出土している。口縁部をく字形に屈曲させるもので、全体的に薄く仕上げられている。

杯H蓋は、４～７の４個体出土している。７を除いては、口縁部を中心に残存する。７は、完形に復元されるもので、天井部は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

杯Hは３個体（８～10）図化することができた。10を除いては、同タイプに分類できるものである。10は他の３個体より小型で口縁部の立ち上がりもわずかで、水平に近い特徴が認められる。

高杯は11の１個体が出土している。杯部を中心に残存し、底部にわずかに脚部の接合痕が認められる。この他、図化できなかったが、脚部片も出土している。

金属品　鉄滓（M３）が出土している（図版８)。7.0㎝×7.85㎝の規模で、断面は厚さ3.2㎝の長方形をなす。262.5ｇ。

時　期　出土土器から、古墳Ｉ期新相に位置付けられる。

ＳＨ 03（写真図版６）

検出状況　調査区西部で検出した（第 21 図）。西側住居跡群（第 22 図）に位置する。ＳＨ 02・ＳＨ 03 と切り合い関係にあり、両住居跡に切られている。このため、住居跡全体はほぼ検出されているが、床面が残存するのは住居跡の東半部に限られる。さらに、当住居跡の対角線上の東西方向に後世の撹乱を受けている。

形状・規模　平面形は南東－北西方向に主軸をとる長方形をなす（第 28 図）。主軸方向で 8.48 ｍを測り、その直交方向で 6.84 ｍを測る。両規模を基準とした面積は 58.00㎡と、大型の住居跡である。また、検出面からの床面までの深さは 18㎝を測り、住居跡中央部における床面の標高は 12.01 ｍである。

付属施設　主柱穴と周壁溝を検出した。

主柱穴　北東部で１穴（Ｐ１）検出した。当初は４穴あったものと考えられるが、他の３穴に関しては、後世の撹乱を受け検出できなかった。Ｐ１の規模は 65㎝× 70㎝で、床面からの深さは、17㎝と浅い傾向にある。

周壁溝　東隅と南東辺中央から南隅にかけて検出した。床面における規模は、幅 20㎝を測り、横断面はＵ字形～逆台形をなす。最深部における床面からの深さは８㎝である。溝内には暗灰褐色シルト混じり極細砂が堆積していた。

埋没状況　上から、褐灰色シルト混じり極細砂・暗灰褐色シルト混じり極細砂の２層からなる。両層とも、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土器と石製品が出土している。

土器　土師器と須恵器が出土している（図版１）。

土師器　甕と高杯が出土している。甕は体部片が、高杯は杯部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

須恵器　壺・杯Ｈ蓋・杯Ｈ・高杯・甕が出土している。高杯と甕に関しては、小片のため図化できなかった。

壺は 15 の１個体が出土している。口縁部を中心に残存し、全体的に薄く仕上げられている。

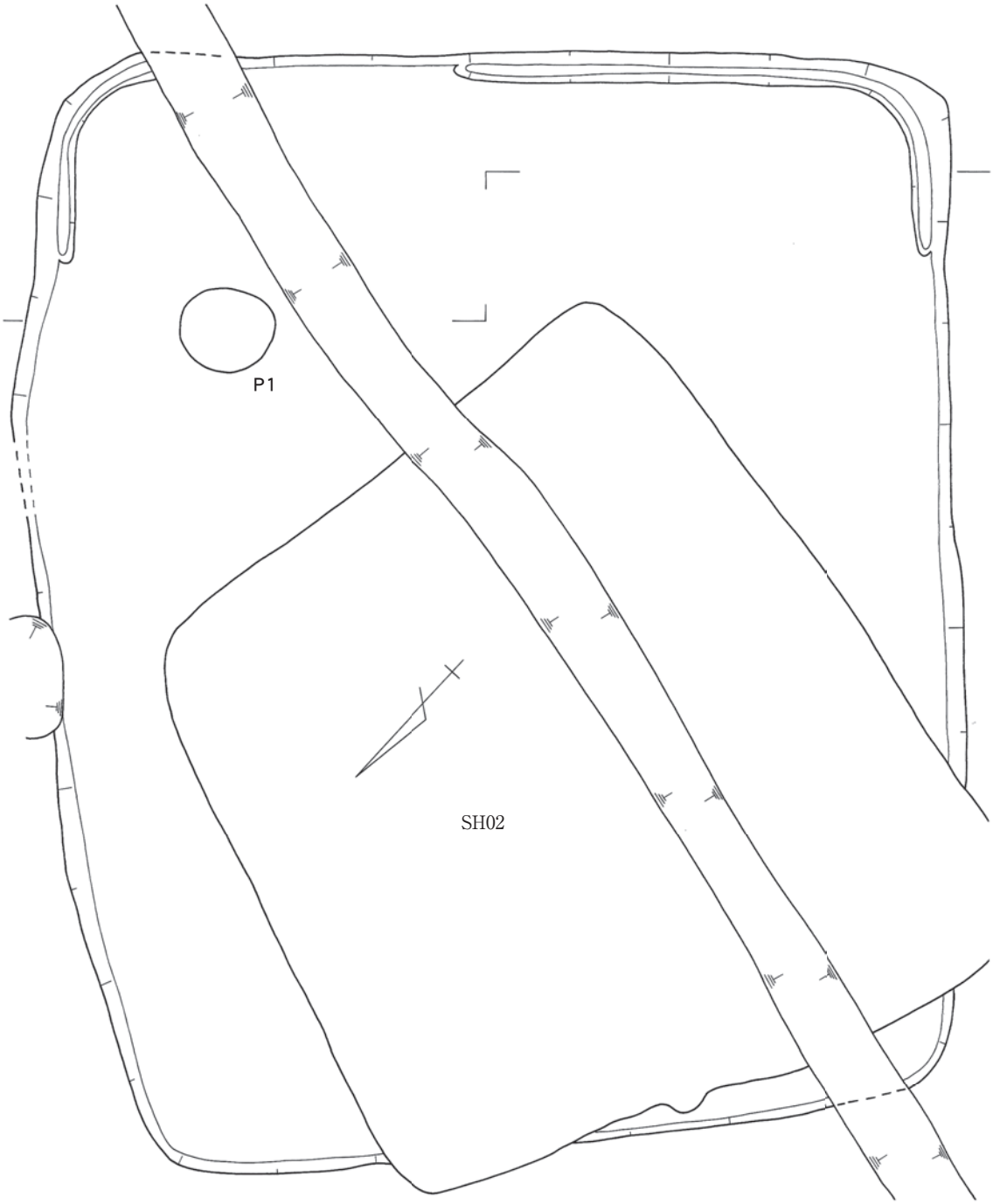
杯Ｈ蓋は、16 の１個体を図化することができた。ほぼ完形に復元できる個体で、天井部の 2/3 は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

杯Ｈは、17・18 の２個体が出土している。２個体とも同タイプに分類できるもので、法量的にも差は認められない。

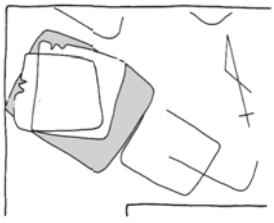
この他、甕は体部片が出土している。高杯は、脚部片が出土しており、長方透かしの一部が認められる。

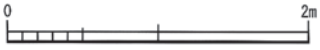
石製品　石鏃が１点（Ｓ１）出土している（図版７）。平基式に分類されるサヌカイト製打製石鏃である。先端を欠く以外はほぼ完存する。残存長 1.68㎝を測り、最大幅は 1.56㎝である。　1.0 ｇ。

時　期　出土土器から、古墳Ｉ期古相に位置付けられる。



1. 褐灰色シルト混じり極細砂
2. 暗灰褐色シルト混じり極細砂





第 28 図　ＳＨ 03

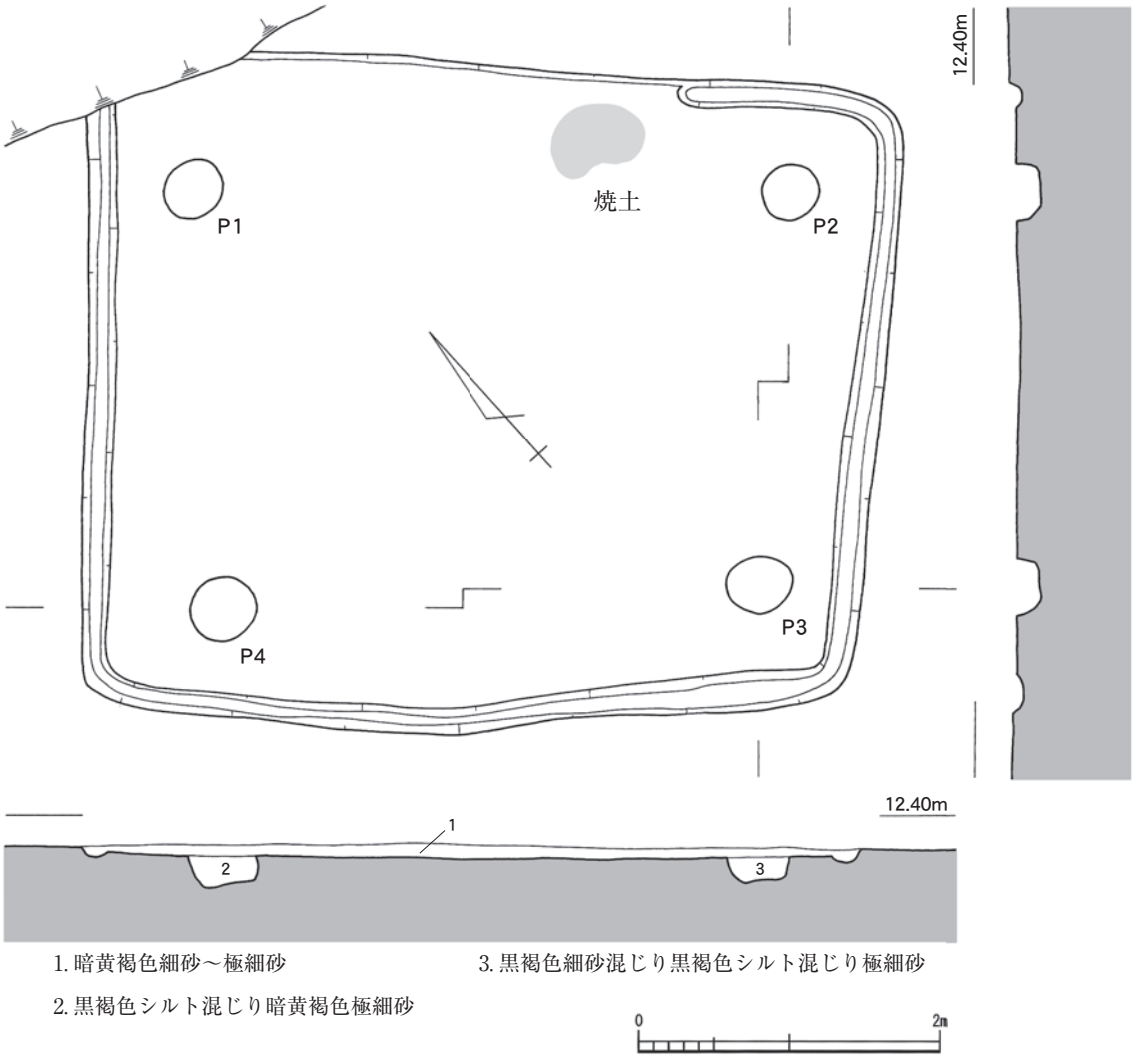
ＳＨ 04（写真図版６）

検出状況　調査区西部で検出した（第 21 図）。西側住居跡群（第 22 図：ＳＨ 01 ～ＳＨ 03）の東側に位置し、ＳＨ 03 と接している。ただし、西側住居跡群との前後関係は、調査では明らかにできなかった。また、ＳＨ 05 と切り合い関係にあり、ＳＨ 05 を切っている。このため、住居跡はほぼ全体が検出されているが、北隅が後世の撹乱を受けている。

形状・規模　平面形は北東－南西方向に主軸をとる長方形をなす（第 29 図）。ただし、北西辺と南東辺は平行せず、全体的に台形傾向にある。主軸方向で 4.45 ｍを測り、その直交方向で 5.24 ｍを測る。両者を基準とした面積は 23.31㎡である。また、検出面からの床面の深さはわずか 10㎝で、住居跡中央部における床面の標高は 12.12 ｍである。

付属施設　主柱穴・カマド痕・周壁溝を検出した。

主柱穴　４穴（Ｐ１～Ｐ４）検出した。４穴とも平面形は円形をなす。その規模は、Ｐ１とＰ２が 36㎝、Ｐ３が 38㎝、Ｐ４が 40㎝である。また、床面からの深さは、Ｐ１とＰ２が 11㎝、Ｐ３が 14㎝、Ｐ４が 18㎝と、全体的に浅い傾向にある。４穴とも柱痕を確認することはできなかった。柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間が 3.90 ｍ、Ｐ２－Ｐ３間が 2.65 ｍ、Ｐ３－Ｐ４間が 3.50 ｍ、Ｐ１－Ｐ４間が 2.80 ｍである。



第 29 図　ＳＨ 04

A区

カマド痕　　北東辺中央部よりやや東側で検出した（第 29 図網掛け箇所）。ただし、平面的に焼土を確認できたのみで、カマドそのものは検出できなかった。カマドの痕跡と考えている。

周壁溝　　カマド痕付近から西側を除く範囲で検出されている。その規模は、床面における幅 15cm を測る。横断面は逆台形をなし、床面からの深さは４cmとわずかである。

埋没状況　　暗黄褐色細砂～極細砂の１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　　土器と金属品が出土している。

土器　　土師器と須恵器が出土している（図版１）。

土師器　　甑の把手と高杯の接合部が出土している。いずれも、小片のため図化できなかった。

須恵器　　蓋・高杯・杯Ｈ蓋・杯Ｈ・甕・脚部が出土している。蓋と脚部を除いては、小片のため図化できなかった。甕は体部片が出土している。

蓋は、19 の１個体が出土している。天井部と口縁部境が屈曲するもので、口縁部は水平近くまで開く。天井部は回転ヘラ削りにより仕上げられている。内面に薄く自然釉の付着が認められる。

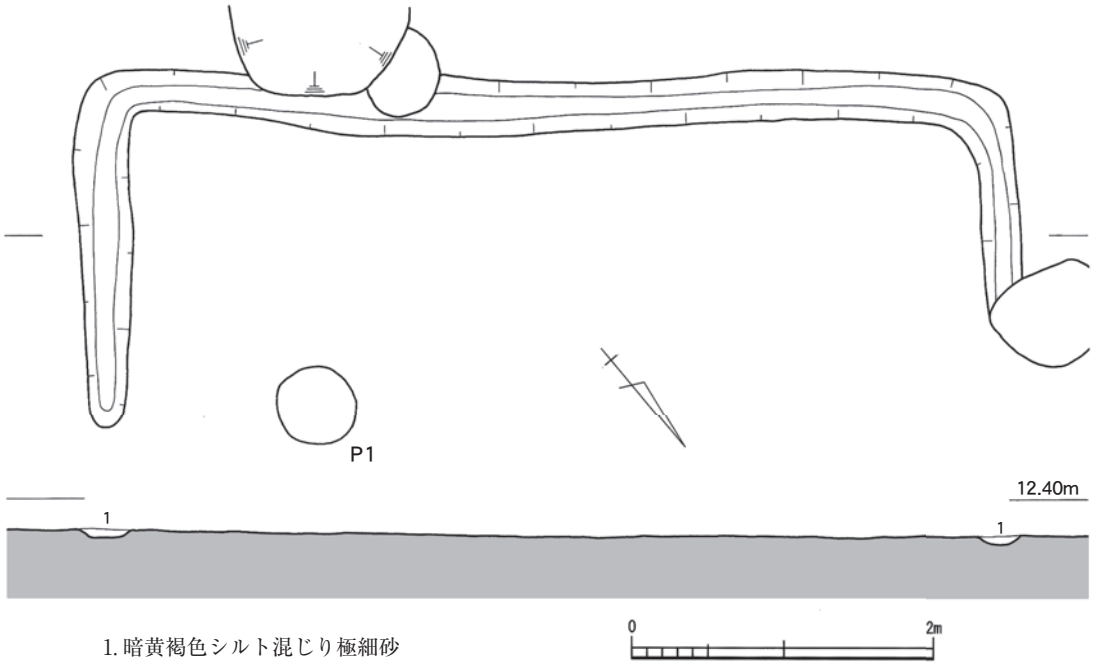
脚部（20）は、端部を中心に残存する。端部の径、内面の仕上げ方から脚部と判断したものである。端部が断面方形状に肥厚している。

金属品　　鉄滓（Ｍ４）が出土している（図版８）。4.3cm× 4.7cmの規模で、断面は不定形である。107.5 ｇ。

時　　期　　出土土器から、古墳Ｉ期新相に位置付けられる。

ＳＨ 05（写真図版７）

検出状況　　調査区西部で検出した（第 21 図）。西側住居跡群（第 22 図：ＳＨ 01 ～ＳＨ 03）の東側に位置する。ＳＨ 04 と平面的に重複し、ＳＨ 04 に切られている。検出できたのはコの字形をな



第 30 図　ＳＨ 05

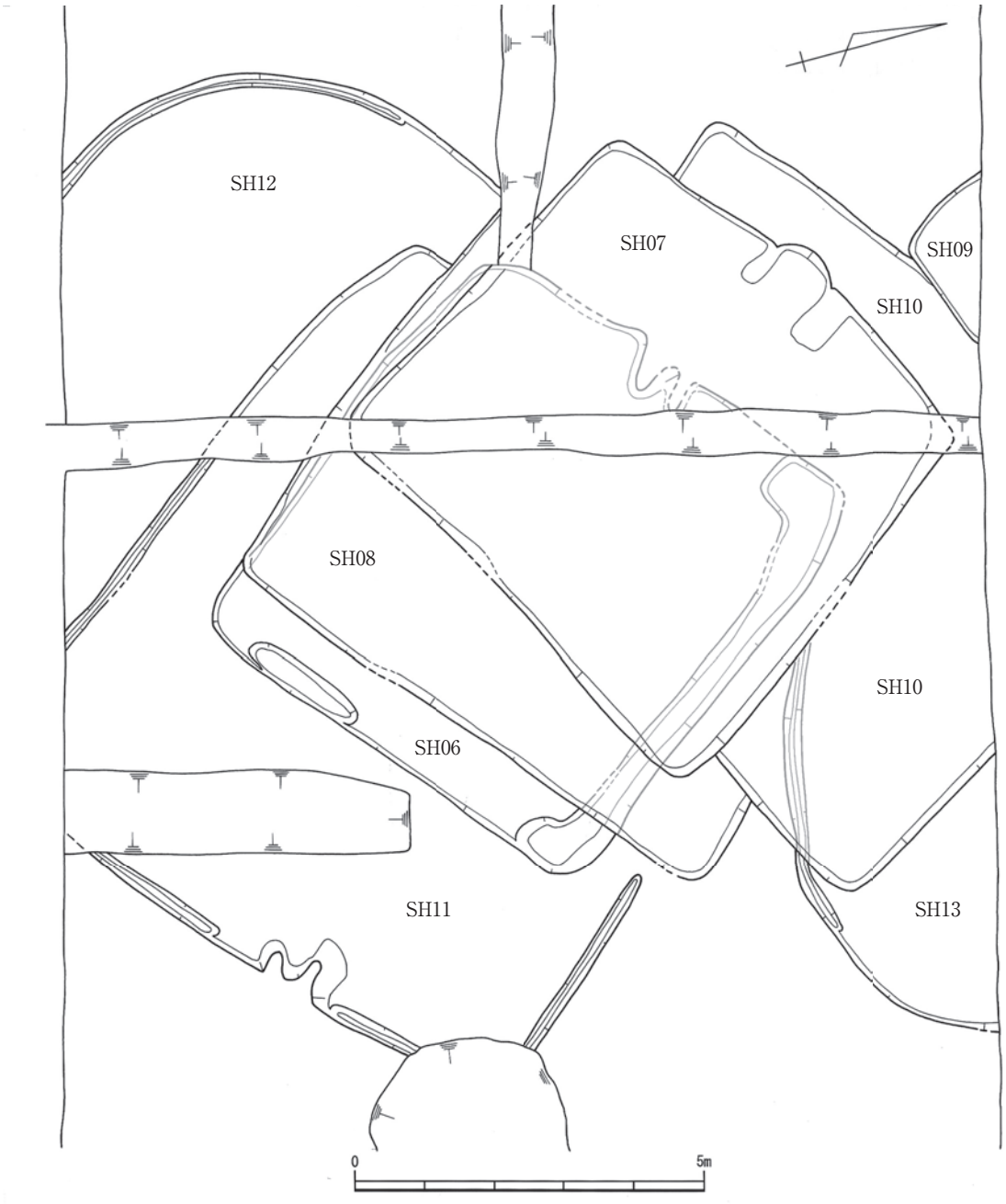
す溝に限られ、これを周壁溝と考え、住居跡と判断したものである。技術的に、上層を検出できなかったためである。周壁溝は全周せず、全体の 1/2 以下を検出したにとどまる。

形状・規模　平面形は、方形もしくは長方形をなすものと考えられる（第30図）。検出した範囲において、整った平面形をなす。北西－南東方向で 6.26 ｍを測り、その直交方向で 2.36 ｍを検出した。住居跡中央部における床面の標高は 12.20 ｍである。

付属施設　主柱穴と周壁溝を検出した。

主柱穴　南東部で１穴（Ｐ１）検出した。当初は４穴あったと考えられるが、他の３穴は検出できなかった。Ｐ１はほぼ円形をなし、その規模・床面からの深さは、51㎝・20㎝である。

周壁溝　先述したように、コの字形に検出した。検出面における幅は 36㎝を測り、横断面は皿形をなす。最深部における検出面からの深さは５㎝である。

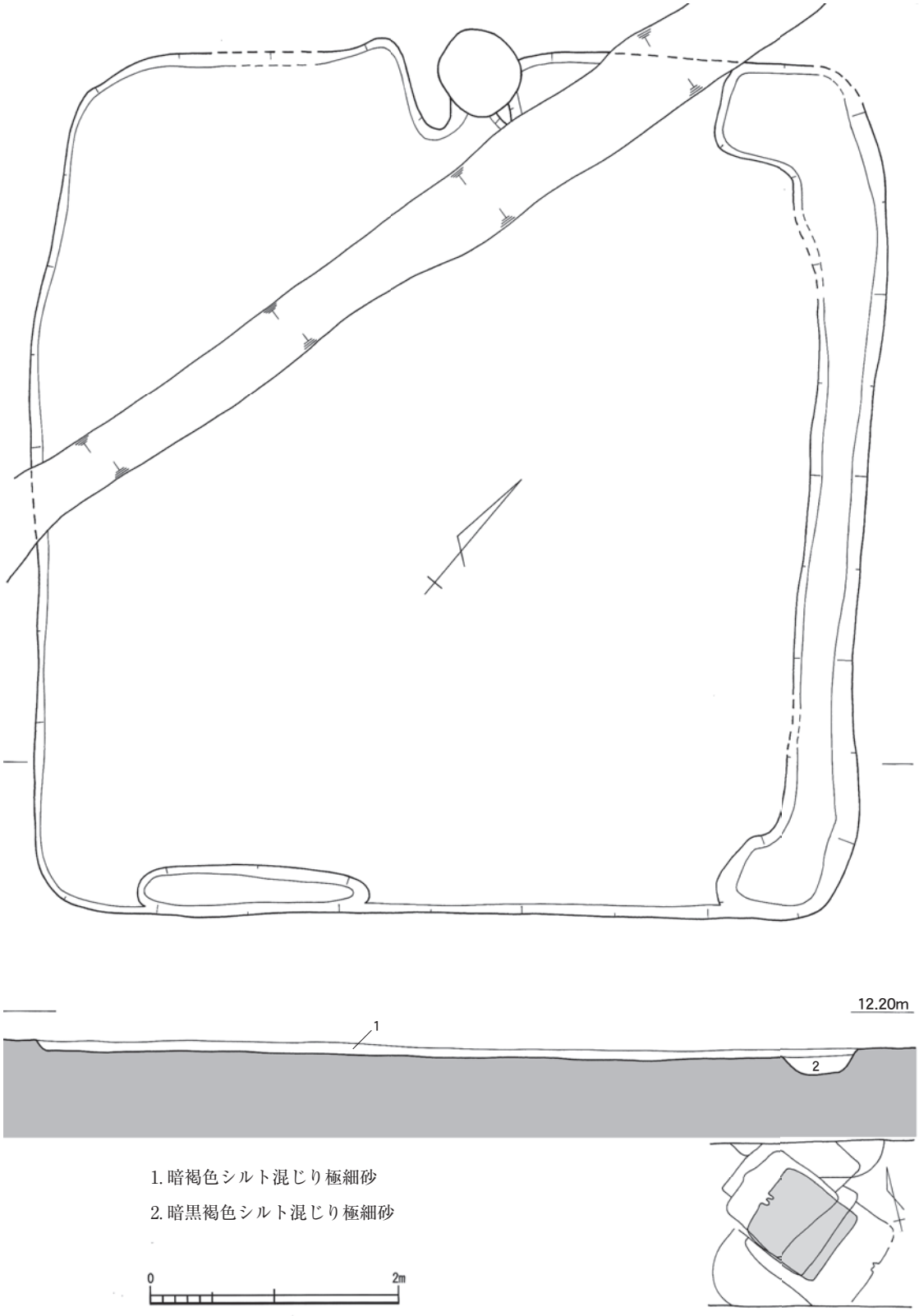


第 31 図　A区中央住居跡群

埋没状況　　周壁溝のみで、住居跡内の埋没状況は観察できなかった。周壁溝内は、黄褐色シルト混じり極細砂１層が堆積していた。その層相から人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　　須恵器の甕の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時　　期　　出土土器から、古墳Ⅰ期に位置付けられる。



第 32 図　ＳＨ 06

ＳＨ 06(写真図版７)

検出状況　調査区中央部で検出した(第21図)。A区中央住居跡群(ＳＨ06～ＳＨ13)内に位置する(第31図)。ＳＨ07を検出した際、床面において当住居跡のプランを確認している。ＳＨ07・ＳＨ08と切り合い関係にあり、両住居跡に切られている。ただし、当住居跡の床面の標高が低いため、住居跡全体を検出することができた。この他、南北方向に後世の撹乱を受けている。

形状・規模　平面形は、北西－南東方向に主軸をとる長方形をなす（第32図)。全体的に整った平面形を呈している。その規模は、北西－南東方向で6.93ｍ、その直交方向で6.63ｍを測り、両者を基準とした面積は45.94㎡である。住居跡中央部床面における検出面からの深さは10㎝を測り、その標高は11.83ｍである。

付属施設　カマドと周壁溝を検出した。

カマド　北西辺中央部で検出した。しかし、カマドの中央部が柱穴に切られており、カマドの存在を確認できる程度である。このなかで、南側の袖を検出することができ、北西辺からの長さは80㎝である。また、床面との比高は10㎝である。

周壁溝　北東辺全体と南東辺の一部で検出した。北東辺では、床面における幅57㎝と規模が大きい点が特徴的である。横断面は逆台形をなし、床面からの深さは13㎝を測る。南東辺の周壁溝は北東辺より小規模で、床面における幅は34㎝である。また、横断面は皿形をなし、床面からの深さは７㎝である。

埋没状況　暗褐色シルト混じり極細砂１層が堆積していた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している(図版１)。

土師器　甑の把手と高杯の接合部が出土している。いずれも、小片のため図化できなかった。

須恵器　杯Ｈ蓋・杯Ｈ・甕が出土している。甕については、小片のため図化できなかった。

杯Ｈ蓋は、21と22の２個体が出土している。同タイプに分類できるもので、22の天井部は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

杯Ｈは23の１個体が出土している。口縁部の立ち上がりは短く直立する。

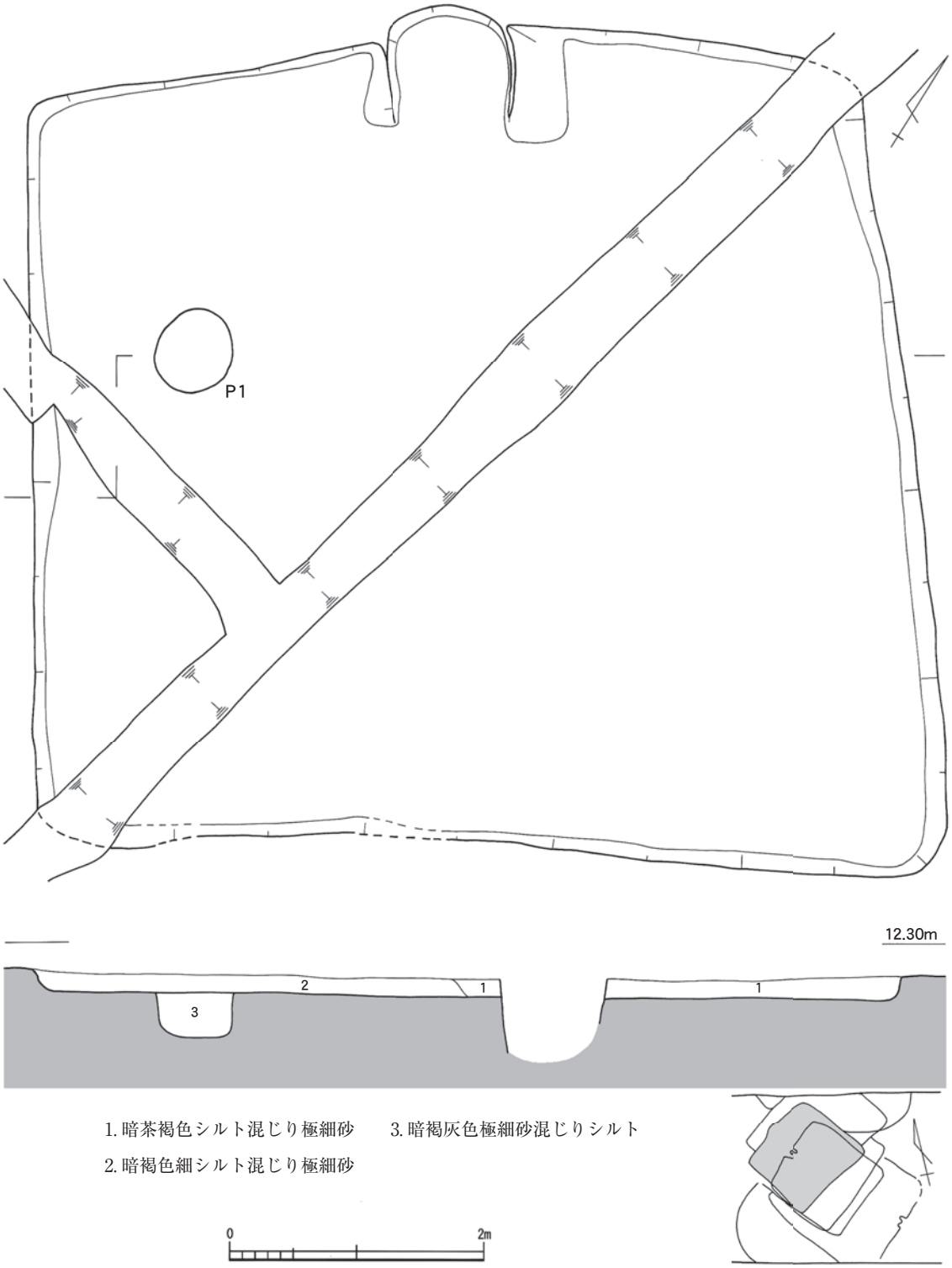
時　期　出土土器から、古墳Ｉ期古相に位置付けられる。

ＳＨ 07(写真図版８)

検出状況　調査区中央部で検出した(第21図)。中央部住居跡群(ＳＨ06～ＳＨ13)内に位置する(第31図)。ＳＨ06を確認する前に検出している。この他ＳＨ10と切り合い関係にあり、ＳＨ10を切っている。このため、住居跡全体を検出することができたが、南北方向に後世の撹乱を溝状に受けている。

第33図　ＳＨ07の調査

形状・規模　平面形は、北西－南東方向に主軸をとる長方形をなす（第34図)。全体的に整った平面形をなす。その規模は、北西－南東方向で6.40ｍ、

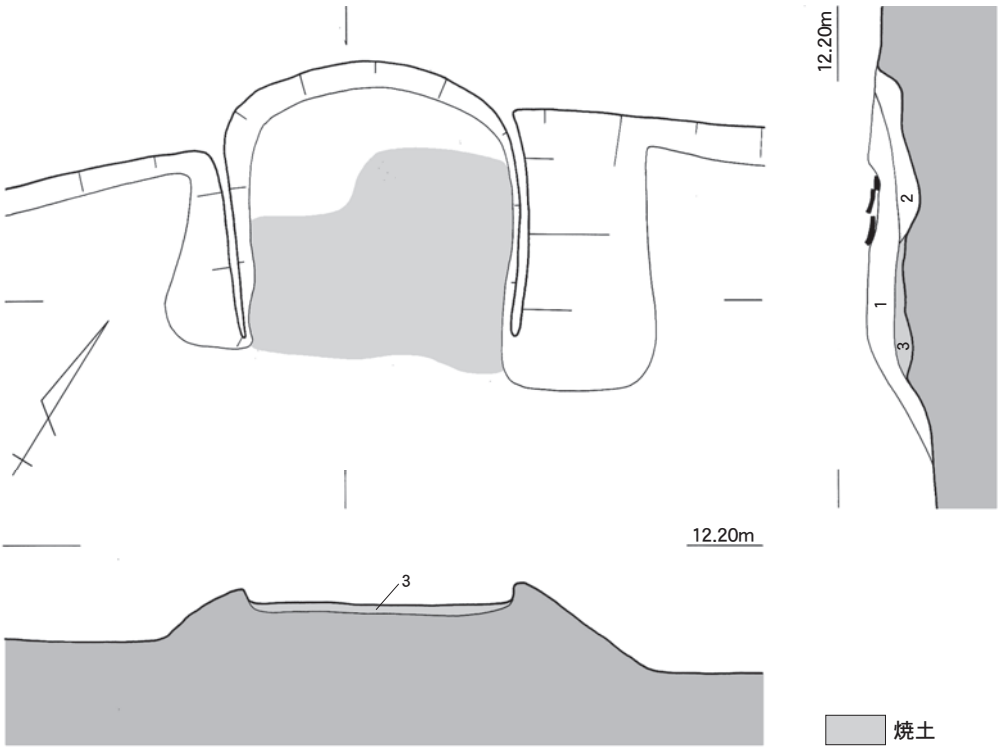


第 34 図　ＳＨ 07

その直交方向で 7.05 ｍを測り、両者を基準とした面積は 45.12㎡である。住居跡中央部床面における検出面からの深さは 14㎝を測り、その標高は 11.92 ｍである。

付属施設　　主柱穴とカマドを検出した。

主柱穴　　北西部で１穴（Ｐ１）検出した。当初は４穴あったものと考えられるが、他の３穴に関しては検出できなかった。Ｐ１は平面形がほぼ円形をなし、その規模は 60㎝× 65㎝を測る。



1. 暗褐灰色シルト混じり細砂（焼土塊混入）
2. 暗灰褐色細砂混じりシルト
3. 焼土

第 35 図　ＳＨ 07　カマド

また、床面からの深さは 35㎝である。柱痕は確認できなかった。

カマド　北西辺中央部で検出した（第 35 図）。わずかに残存する袖部と顕著に熱を受けた焼土層の存在からカマドと判断したものである。カマド中央部は住居跡北西辺より突出している。袖部は盛土により造られ、北西辺からほぼ直交方向に張り出し、その長さは南西側で 50㎝、北東側で 60㎝を測る。袖頂部におけるカマドの幅は 75㎝を測り、頂部と床面との比高は 24㎝を測る。また、カマド内側焼土面との比高は５㎝である。

なお、支脚・煙道等は残存していなかった。

埋没状況　上から、暗茶褐色シルト混じり極細砂と暗褐色細シルト混じり極細砂の２層が堆積していた。２層ともその層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している（図版１）。

土師器　甕・高杯・小型丸底壺・甑・高杯が出土している。

甕は 31 の１個体が出土している。口径 27.70㎝と大型の甕で、長胴タイプと考えられる。内外面ともハケ調整を中心に仕上げられている。この他、小片のため図化できなかったが、体部片がカマド内から出土している。長胴タイプの甕である。

高杯は 32 の１個体を図化することができた。杯部のみ残存し、下端部外面にわずかに口縁部と体部の境が突帯状をなしている。内外面ともナデ調整を中心に仕上げられている。この他、小片のため図化できなかったが、脚部片も出土している。

小型丸底壺は、33 の１個体である。体部から口縁部にかけて残存する。ナデ調整を基調に仕上げられている。

第 36 図　ＳＨ 08

甑は、舌状をなす把手が出土しているが、小片のため図化できなかった。

須恵器　　杯Ｈ蓋・杯Ｈ・蓋・高杯・甕が出土している。

杯Ｈ蓋は、24 と 25 の２個体が出土している。両者は形態的特徴を異にし、24 の天井部は比較的扁平傾向にある。

杯Hは26と27の２個体が出土している。27はやや大型であるが、口縁部の立ち上がりはわずかである。下端部にわずかにヘラ削り痕が認められる。

蓋は、28の１個体で、つまみ部分が出土している。釦状をなすものである。

高杯は29と30の２個体が出土している。29は完形に復元できた個体である。杯Hに脚部が付くタイプである。脚端部は端部が肥厚し、下端方向へわずかにつまみ出されている。回転ナデ調整を基調とし、杯底部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。30は、脚端部を中心に残存する個体で、端部は断面方形をなす。

この他、甕は体部片が出土しているが、図化できなかった。

時　　期　出土土器から、古墳Ⅰ期新相に位置付けられる。

ＳＨ08（写真図版８）

検出状況　調査区中央部で検出した（第21図）。A区中央住居跡群（ＳＨ06～ＳＨ13）内に位置する（第31図）。ＳＨ07・ＳＨ10と切り合い関係にあり、両住居跡に切られている。特に、ＳＨ07には大半が切られている。このため、検出できたのは南東辺から南西辺を中心とした一部に限られる。

形状・規模　南西辺の北西端は後世の撹乱により途切れている（第36図）。しかし、その北西側において北西隅が検出されていないことから、この撹乱を受けた箇所に北西隅があったものと考えられる。以上から、平面形は、北西－南東方向に主軸をとる長方形をなすものと考えられる（第36図）。その規模は、南東辺で8.07ｍを測り、南西辺で6.40ｍを検出している。両者を基準とすると、当住居跡の面積は51.64㎡以上と考えられる。住居跡中央部床面における検出面からの深さは21㎝を測り、その標高は11.92ｍである。

付属施設　何も検出されていない。

埋没状況　暗灰褐色細シルト混じり極細砂１層が堆積していた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している（図版２）。

土師器　甕の体部片と高杯の脚部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

須恵器　甕・杯H蓋・杯H・脚部が出土している。

甕は、34の１個体が出土している。口縁部から体部にかけて残存する個体で、口縁端部は玉縁状をなす。

杯H蓋は、35の１個体が出土している。天井部が平坦で、全体的に厚く仕上げられている。また、口縁端部外面は、工具の当りが認められ、外傾する端面を有する。

脚部は、36の１個体が出土している。端部を中心に残存し、顕著な屈曲が認められる。また、端部は外方に引き延ばされ、平坦面を有する。さらに、上部には円形の透かしの一部が認められる。復元される径は１㎝である。

この他、杯Hは小片のため図化できなかった。

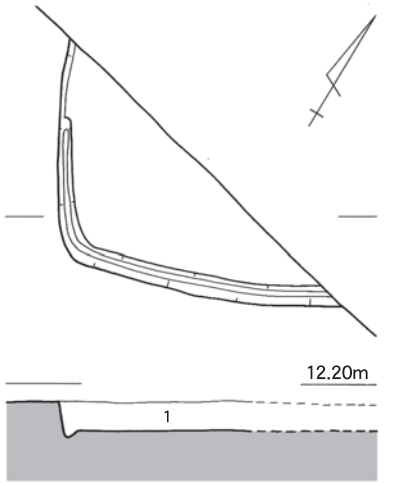
時　　期　出土土器から、古墳Ⅰ期新相に位置付けられる。

ＳＨ 09(写真図版８)

検出状況　調査区中央部で検出した（第 21 図)。中央住居跡群(ＳＨ 06 ～ＳＨ 13)北端に位置する(第 31 図)。住居跡の大半は調査区外にあたり、検出できたのは南隅に限られる。また、ＳＨ 10 と切り合い関係にあり、ＳＨ 10 を切っている。

形状・規模　平面形は方形もしくは長方形をなすものと考えられ、南西辺から南東辺にかけて検出されている（第 37 図)。検出した規模は、南西辺で 1.47 ｍを測り、南東辺で 1.90 ｍを測る。住居跡中央部床面における検出面からの深さは、20㎝を測り、その標高は 11.88 ｍである。

付属施設　周壁溝が検出されている。南西辺の一部から南東辺にかけて検出されている。床面を基準とした横断面はＵ字形をなし、床面における幅は８㎝、床面からの深さは４㎝を測る。



第 37 図　ＳＨ 09

埋没状況　暗灰褐色シルト混じり極細砂～細砂１層が堆積していた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している(図版２)。

土師器　高坏・甕・甕が出土している。高杯は脚部片が、甕と甕は体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

須恵器　杯Ｈ蓋(37)と杯Ｈ(38)が出土している。いずれも、口縁部を中心に残存する。

時　期　出土土器から、古墳Ｉ期新相に位置付けられる。

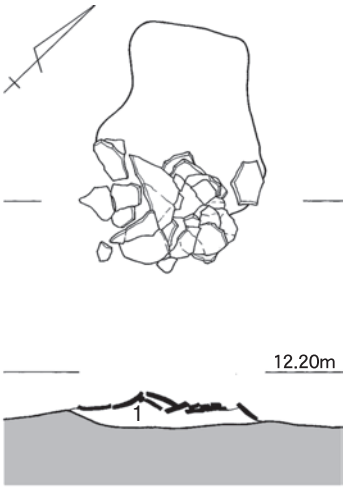
ＳＨ 10(写真図版９)

検出状況　調査区中央部で検出した（第 21 図)。中央部住居跡群(ＳＨ 06 ～ＳＨ 13)の北側に位置する(第 31 図)。住居跡の南側大半はＳＨ 07 に切られ、北隅は調査区外へ拡がっている。このため、検出できたのは西隅と東隅を中心とした範囲である。この他、北西部の一部がＳＨ 09 に切られている。

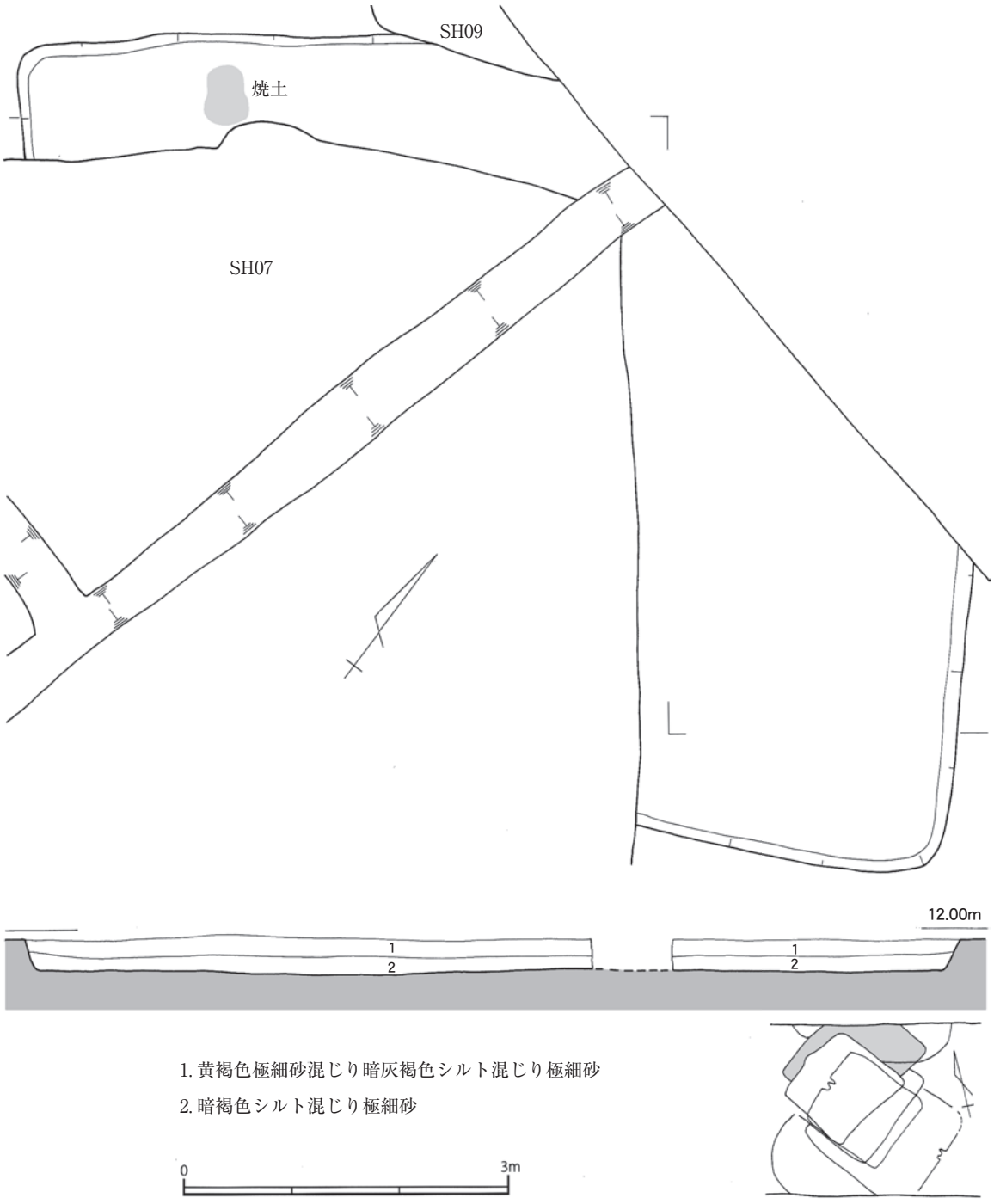
形状・規模　平面形は、北西－南東方向に主軸をもつ長方形をなす(第 39 図)。住居跡の規模は、北西－南東方向で 7.65 ｍ、北東－南西方向で 8.68 ｍと復元でき、両者を基準とした面積は 66.40㎡を測る。住居跡中央部床面における検出面からの深さは 30㎝を測り、その標高は 11.82 ｍである。

付属施設　カマドを検出した(第 38 図)。

カマド　北西辺南西側で検出した。わずかに焼土が残存するの



第 38 図　ＳＨ 10　カマド



第 39 図　ＳＨ 10

みで、袖部等は残存していなかった。焼土面上には、カマドに使用されていた土師器甕(42)が出土している。

埋没状況　上から、黄褐色極細砂混じり暗灰褐色シルト混じり極細砂・暗褐色シルト混じり極細砂の２層が堆積していた。特に上層については、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している(図版２)。

土師器　甕と高杯が出土している。

甕は 41 と 42 の２個体が出土している。両者は大型の甕で、長胴タイプに分類されるも

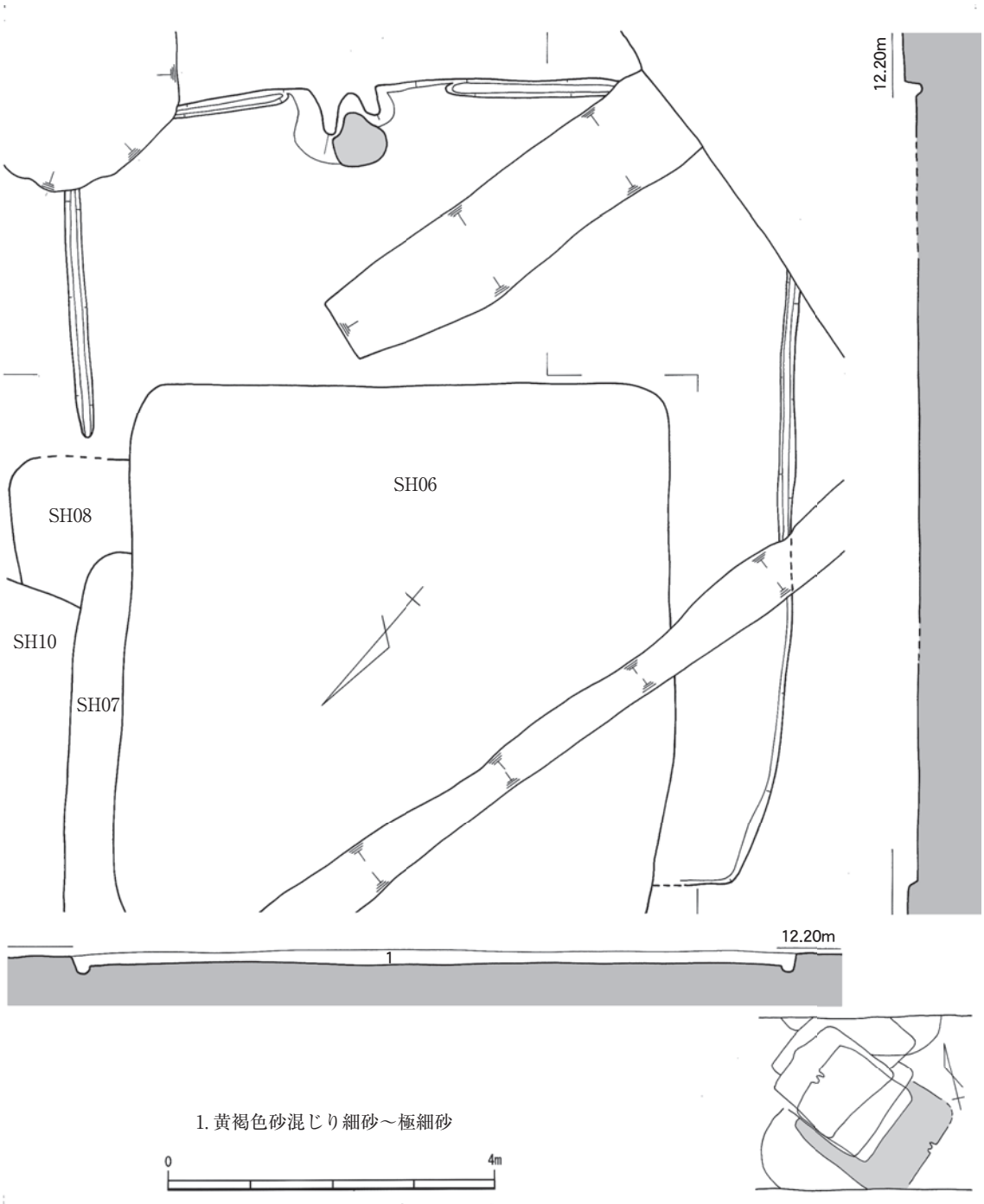
のである。41 は口縁部がく字形に屈曲する。内外面ともハケ調整により仕上げられている。42 は口縁部が大きく外反する。

高杯は、43 の１個体が出土している。杯部を中心に残存する。杯部内面にはヘラミガキの痕跡がわずかに認められる。

須恵器　　杯Ｈ蓋・鉢・甕が出土している。

杯Ｈ蓋は 39 の１個体が出土している。鉢は、40 の１個体である。体部から口縁部にかけて直線的で、端部は断面方形をなす。甕については、体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時　期　　出土土器から、古墳Ｉ期新相に位置付けられる。



第 40 図　ＳＨ 11

ＳＨ 11（写真図版 10・11）

検出状況　調査区中央部で検出した（第 21 図）。中央部住居跡群（ＳＨ 06 ～ＳＨ 13）の南側に位置する（第 31 図）。住居跡の大半はＳＨ 08 に切られ、南隅は調査区外に拡がっている。また、東隅は後世の撹乱を受けている。このため、検出できたのは全体の約 1/2 程度である。

形状・規模　平面形は、北西－南東方向に主軸をとる方形をなす（第 40 図）。その規模は、主軸方向で 9.85 m、その直交方向で 9.87 ｍを測り、両者を基準とした面積は 97.22㎡である。住居跡中央部床面における検出面からの深さは 15㎝で、その標高は 11.96 ｍである。

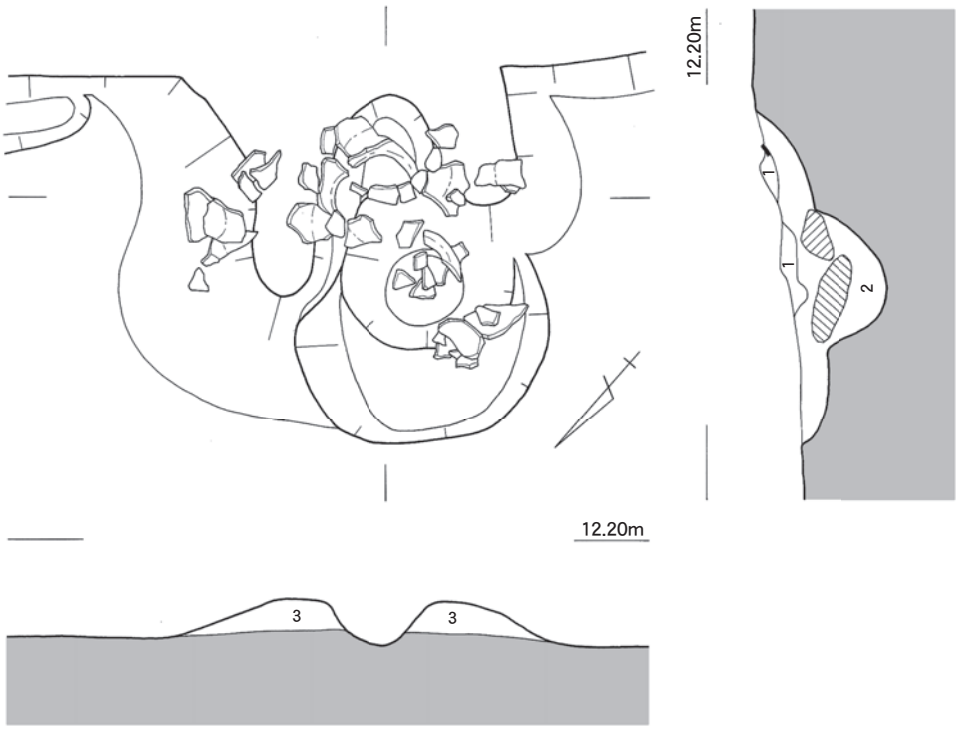
付属施設　カマドと周壁溝を検出した。

カマド　南東辺中央部やや北東側で検出した（第 41 図）。袖部とその北西側の土坑からなる。袖部は住居跡南東辺からハの字形にのび、頂部における規模は、北東側が 55㎝、南西側が 37㎝を測る。袖部は基本的に盛土からなり、床面との比高は８㎝を測る。袖部に囲まれた内側は浅い土坑状をなし、袖頂部との比高は 12㎝を測る。

浅い土坑の北西側、焚口部付近は、さらに顕著な土坑をなしている。床面における規模は 67㎝× 37㎝を測り、床面との比高は 24㎝である。土坑内には炭・焼土片を含む暗褐色シルト混じり極細砂が堆積していた。また、15㎝～ 30㎝大の礫の混入も認められた。支脚の一部として利用されていた可能性も考えられる。なお、焚口との関係は不明である。

袖部に挟まれた箇所を中心に土師器の甕（55）が口縁部を下側にした状態で検出されている（写真図版 10）。支脚として転用されていた可能性が考えられる。

周壁溝　北東辺・南東辺と南西辺の一部で検出した。いずれも住居跡掘り形のラインに平行する



第 41 図　ＳＨ 11　カマド

もので、床面における幅は 18㎝を測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における床面からの深さは７㎝である。

埋没状況　黄褐色砂混じり細砂～極細砂１層が堆積していた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土器と石製品が出土している。

土器　土師器と須恵器が出土している（図版２）。

土師器　高杯と甕が出土している。

高杯は 52 ～ 54 の３個体出土している。52 は杯部を中心に残存する。口縁部が内湾傾向にある。53 と 54 は脚部のみ残存する。

甕は 55 の１個体が出土している。長胴タイプの大型甕で、体部内外面はヘラ削りを中心に仕上げられている。体部下半外面には煤の付着が認められる。

須恵器　杯Ｈ・杯Ｈ蓋・高坏・壺・甕が出土している。

杯Ｈ蓋は、44 ～ 46 の３個体が出土している。いずれも同タイプに分類されるものである。

杯Ｈは、47 ～ 49 の３個体が出土している。47 と 48 は同タイプに分類されるもので、底部は回転ヘラ削りにより仕上げられている。49 は、47・48 より小型である。

甕は、50 の１個体が出土している。口縁部を中心に残存する。口縁端部は肥厚し、端面は凹線状をなす。この他、体部片も出土している。

高杯は 51 の１個体が出土している。脚部を中心に残存するもので、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。端部は平坦な接地面をなす。

石製品　石鏃が１点（Ｓ２）出土している（図版７）。凹基式に分類されるサヌカイト製の打製石鏃で、完存する。全長 2.02㎝を測り、最大幅は 1.22㎝である。中央部の厚さは 3.9㎜を測る。風化が顕著である。0.6 ｇ。

時　期　出土土器から、古墳Ｉ期古相に位置付けられる。

ＳＨ 12（写真図版 11）

検出状況　調査区中央部で検出した（第 21 図）。中央部住居跡群（ＳＨ 06 ～ＳＨ 13）の南西側に位置する（第 31 図）。住居跡の大半はＳＨ 11 に切られ、さらに南側は調査区外に拡がっている。また、東側は後世の撹乱を受けている。このため、検出できたのは全体の約 1/4 強である。

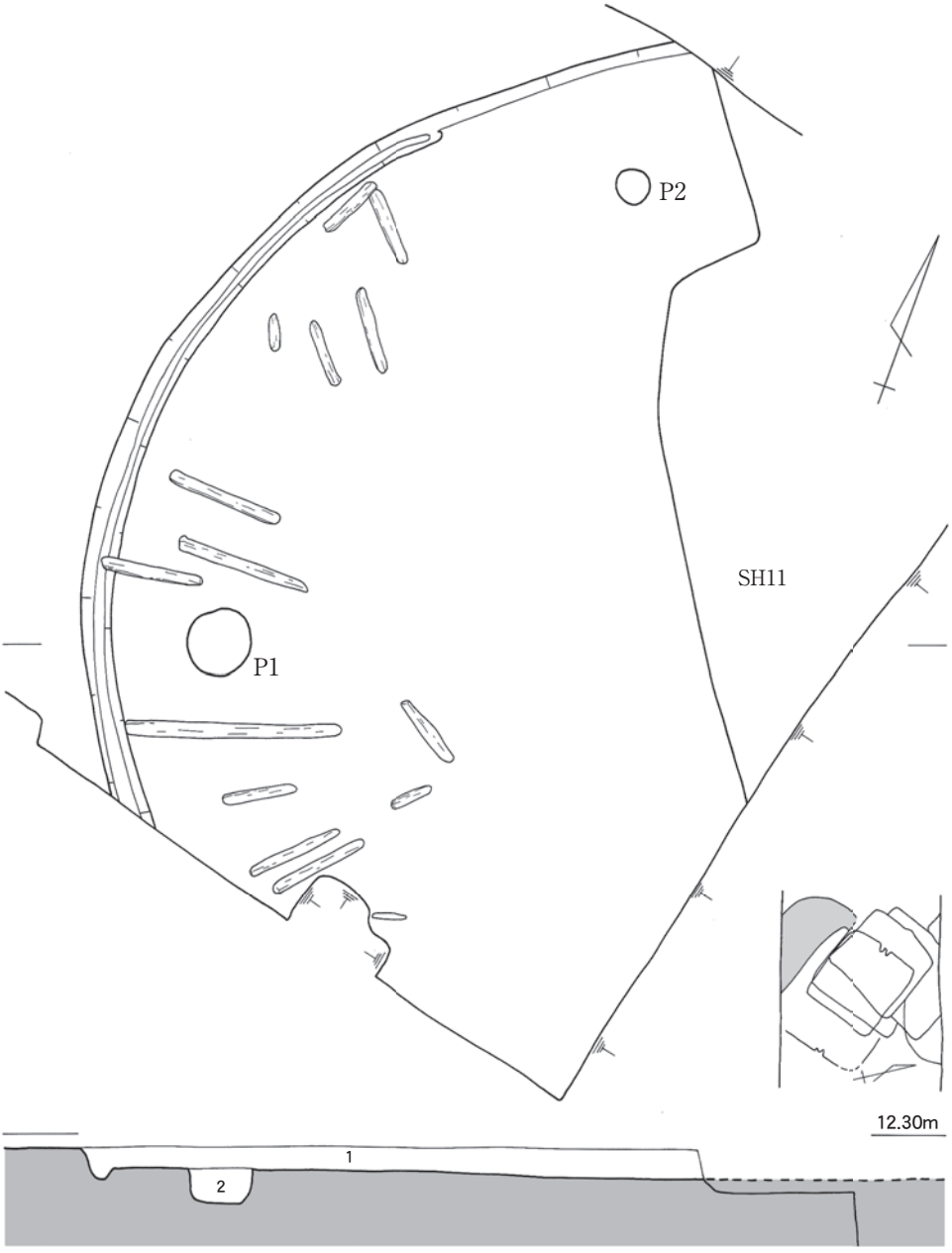
なお、当住居跡は焼失住居で、床面に炭化した建築材が放射状に遺存していた（第 42 図）。

形状・規模　平面形は、円形をなすものと考えられる（第 42 図）。その規模は、東西方向で 4.12 ｍ、北西－南東方向で 5.24 ｍ残存している。住居跡中央部床面における検出面からの深さは、17㎝を測り、その標高は 12.06 ｍである。

付属施設　主柱穴と周壁溝を検出した。

主柱穴　２穴検出した。２穴の床面における平面形は円形をなし、その規模はＰ１が 42㎝、Ｐ２が 22㎝を測る。また、床面からの深さは、それぞれ 23㎝・５㎝である。なお、２穴とも柱痕は検出できなかった。

周壁溝　住居跡掘り形のラインの南西側に平行して検出範囲の 2/3 で検出された。床面における幅は 14㎝を測る。横断面は逆台形をなし、最深部における床面からの深さは７㎝である。



1. 暗灰褐色シルト混じり極細砂
2. 暗黒灰色シルト混じり極細砂(柱穴)

第 42 図　ＳＨ 12

埋没状況　暗灰褐色シルト混じり極細砂１層が堆積していた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土器と石製品が出土している。

土器　弥生土器の壺と甕が出土している(図版３)。

壺　56 ～ 58・60 の４個体が出土している。

56 は広口壺の口縁部で、口縁端部を拡張させ、端面に円形浮文が貼り付けられている。円形浮文は径 8.5㎜を測り、等間隔に貼り付けられている。

57 は、底部を除いて完形に復元できた広口壺である。口縁端部を上方に拡張させ端面を造り、ヘラにより斜行するキザミ目が刻まれている。また、体部中位にも貝殻施文による

列点文が認められる。体部下半にはヘラミガキが認められる。

58は、底部から体部にかけて残存する個体である。大型の壺の一部と考えられが、下半外面に煤が付着していることから、甕の可能性も考えられる。

60は、台付無頸壺の接合部である。外面には断面三角形の突帯が２条貼り付けられている。また、下端には三角形状の透かしの一部が認められる。２箇所残存し、全体で６方に穿たれていたものと考えられる。また、壺の底部が皿状をなし、上方から落とし込まれている状況を観察することができる。

甕　59の１個体が出土している。底部を中心に残存する。鉢の可能性も考えられる。

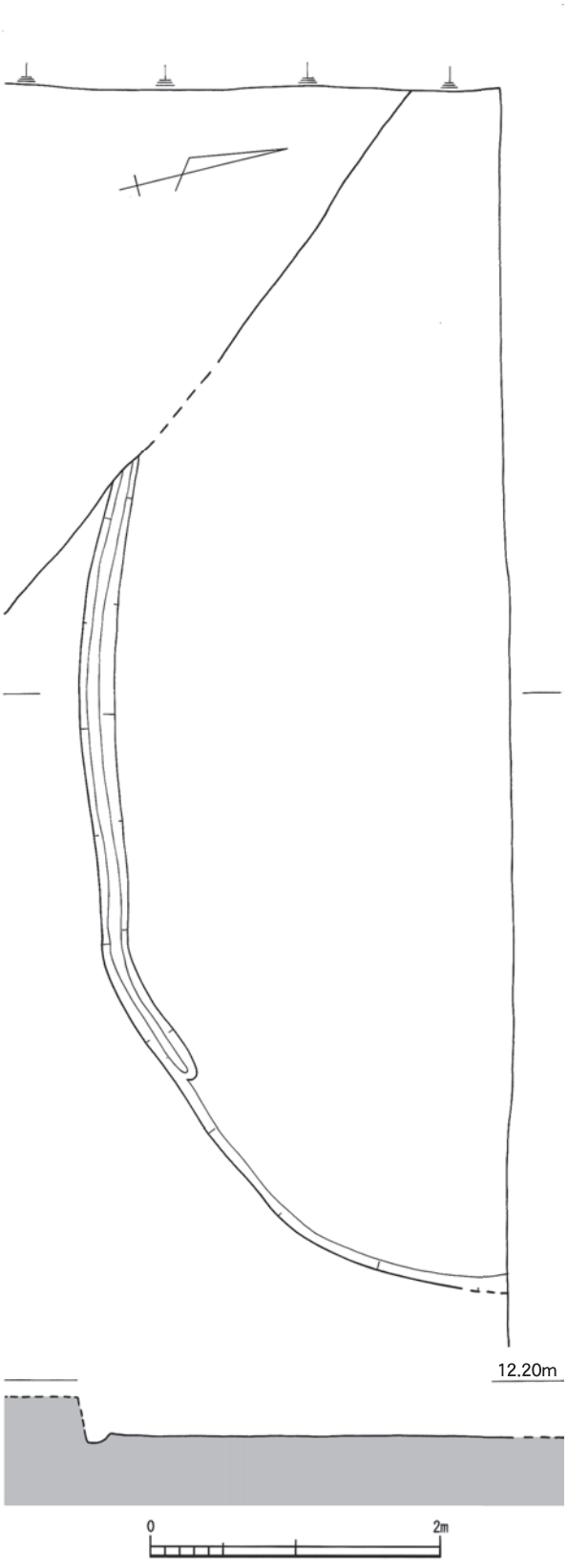
石製品　Ｓ４は、サヌカイト製の大型打製石鏃で、完存する（図版７）。平基式の石鏃で、全長5.02㎝を測る。最大幅は2.28㎝を測り、中央部の厚さは4.3㎜である。4.88 ｇ。

時　期　出土土器から、弥生Ⅰ期－３に位置付けられる。

ＳＨ13（写真図版12）

検出状況　調査区中央部で検出した（第21図）。中央部住居跡群（ＳＨ06～ＳＨ13）の北東側に位置する（第31図）。住居跡の西半部上部はＳＨ10により削平されている。この他、住居跡の西側はＳＨ07に切られ、さらに北側は調査区外に拡がっている。このため、検出できたのは全体の約1/2弱である。

形状・規模　平面形は、円形もしくは隅円方形をなすものと考えられる（第43図）。その規模は、南北方向で３ｍ検出している。東西方向については、少なくとも5.75ｍ以上である。



第43図　ＳＨ13

また、住居跡中央部床面における検出面からの深さは27㎝を測り、その標高は11.83ｍである。

付属施設　　周壁溝を検出した。

周壁溝　　住居跡掘り形のラインの南側を中心に検出された。床面における幅は17㎝を測る。横断面は逆台形をなし、最深部における床面からの深さは６㎝である。

出土遺物　　弥生土器が出土している。いずれも、小片のため図化できなかった。

弥生土器　　壺と高坏が出土している。壺は体部片で、外面に櫛描直線文が２単位認められる。

時　　期　　出土土器から、弥生Ⅰ期に位置付けられる。

ＳＨ14（写真図版12）

検出状況　　調査区西半部で検出した（第21図）。西住居跡群（ＳＨ01～ＳＨ03）の北側に位置する（第22図）。住居跡の南隅を中心に検出されたもので、大半は調査区外に拡がっている。このため、検出できたのは全体の約1/4弱である。

形状・規模　　平面形は、方形もしくは長方形をなすものと考えられる（第44図）。その規模は、南北方向で1.90ｍ、東西方向で4.30ｍ検出している。住居跡中央部床面における検出面からの深さは26㎝を測り、その標高は12.14ｍである。

付属施設　　周壁溝を検出した。

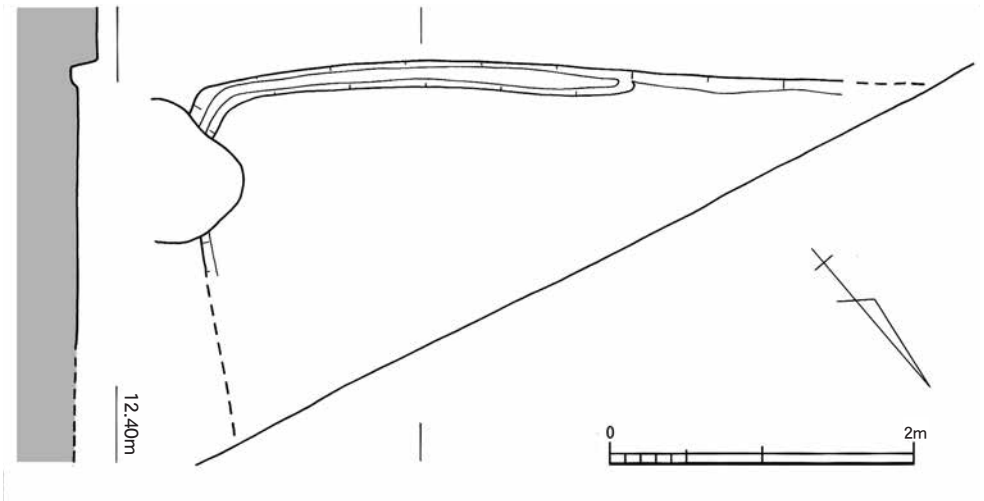
周壁溝　　住居跡南隅から南西辺途中まで検出された。床面における幅は14㎝を測る。横断面は逆台形をなし、最深部における床面からの深さは５㎝である。

出土遺物　　土師器と須恵器が出土している（図版３）。

土師器　　甑の把手（61）が出土している。舌状をなすタイプで、ナデ調整により仕上げられている。

須恵器　　杯Ｈ蓋・杯Ｈ・甕が出土している。このなかで図化できたのは、62の杯Ｈに限られる。他は、小片のため図化できなかった。

時　　期　　出土土器から、古墳Ⅰ期古相に位置付けられる。



第44図　ＳＨ14

ＳＨ 15(写真図版 12)

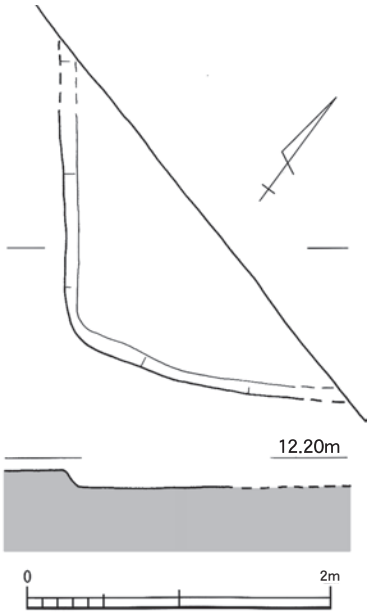
検出状況　調査区中央部北西側で検出した（第 21 図)。中央住居跡群（ＳＨ 01 ～ＳＨ 13) の北東側に位置する。住居跡の南隅を中心に検出されたもので、大半は調査区外に拡がっている。このため、検出できたのは全体の約 1/4 弱である。

形状・規模　平面形は、北西－南東方向に主軸をとる、方形もしくは長方形と考えられる（第 45 図)。南西辺に対して南東辺がやや弧状をなし、全体的にやや歪んだ形状をなす。南西辺で 1.50 m、南東辺で 1.20 m検出している。住居跡中央部床面における検出面からの深さは 12㎝を測り、その標高は 12.02 mである。

付属施設　全く検出されていない。

出土遺物　須恵器の杯Ｈ蓋 (63) が出土している (図版３)。天井部に対して口縁部が屈曲するタイプで、天井部は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

時　　期　出土土器から、古墳Ｉ期古相に位置付けられる。



第 45 図　ＳＨ 15

ＳＨ 16(写真図版 13)

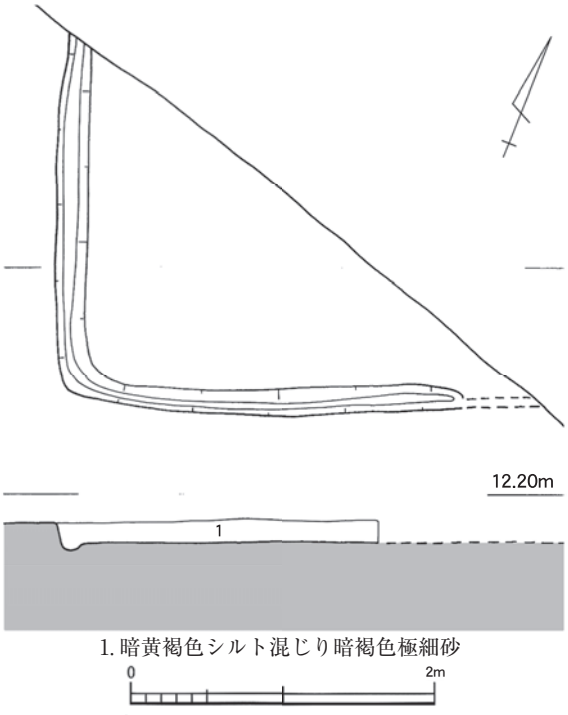
検出状況　調査区東半部北端で検出した (第 21 図)。中央住居跡群 (ＳＨ 01 ～ＳＨ 13) の東側に位置する。住居跡の南隅を中心に検出されたもので、大半は調査区外に拡がっている。このため、検出できたのは全体の約 1/4 弱である。

形状・規模　平面形は、方形もしくは長方形をなすものと考えられる（第 46 図)。南西辺と南東辺がほぼ直角をなし、全体的に整った形状をなす。検出した規模は、南西辺で 2.45 m、南東辺で 2.15 mを測る。住居跡中央部床面における検出面からの深さは、19㎝を測り、その標高は 11.85 mである。

付属施設　周壁溝を検出した。

周壁溝　検出した範囲では全周する。床面における幅は 14㎝を測る。横断面は逆台形をなし、最深部における床面からの深さは４㎝である。

埋没状況　暗黄褐色シルト混じり暗褐色極細砂１層が堆積していた。その層相か



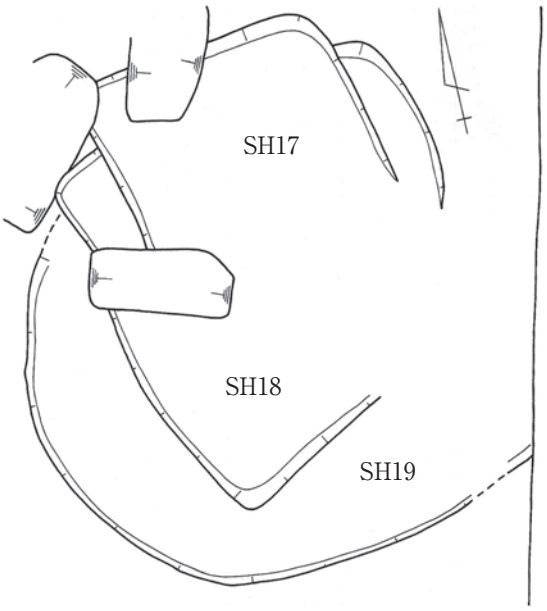
第 46 図　ＳＨ 16

ら判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の壺と甕が出土している。壺は、64の１個体を図化することができた（図版３）。口縁部外面に波状文が施されている。瑞の可能性が考えられる。この他、提瓶の体部片が出土している。外面にはカキメが施されている。

甕は、体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時　期　出土土器から、古墳Ⅰ期に位置付けられる。



第47図　A区東側住居跡群

ＳＨ17（写真図版13）

検出状況　調査区東半部で検出した（第21図）。東側住居跡群（ＳＨ17～ＳＨ19）に位置する（第47図）。住居跡の南辺を除いて検出されているが、一部後世の撹乱を受けている。住居跡の南辺に

第48図　ＳＨ17

ついては、溝状の落ち込みに切られ、そのラインを明らかにすることはできなかった。また、ＳＨ 18 と切り合い関係にあり、ＳＨ 18 を切っている。

形状・規模　平面形は、南北方向に主軸をとる長方形をなす（第 48 図）。検出した３辺が平行もしくは直角関係にあり、全体的に整った形状をなす。その規模は、東西方向で 4.20 ｍを測る。主軸方向（南北方向）については、Ｐ２の検出状況から判断して、少なくとも４ｍ以上と考えられる。住居跡中央部床面における検出面からの深さは 28㎝を測り、その標高は 11.74 ｍである。

付属施設　カマドと主柱穴を検出した。

主柱穴　２穴（Ｐ１・Ｐ２）検出した。本来は４穴からなるものと考えられるが、西側の２穴については、検出できなかった。

２穴の床面における平面形はやや歪んだ形状をなすが、基本的には円形傾向にある。その規模は、Ｐ１が 28㎝× 36㎝、Ｐ２が 36㎝× 40㎝を測る。また、床面からの深さは、それぞれ８㎝･10㎝である。なお、２穴とも柱痕を検出することはできなかった。柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間が 2.40 ｍである。

カマド　北辺中央部で検出した（第 48 図）。ただし、カマドの北西側は撹乱を受け、さらに上部は削平を受けている。

ハ字形にのびる袖部と、両袖に囲まれた焼土面が検出されている。裾部における袖部の規模は、西側で 90㎝、東側で 85㎝を検出している。袖部は基本的に盛土からなり、床面との比高は 13㎝を測る。袖部に囲まれた内側は焼土層からなり、その厚さは３㎝を測る。焼土面と袖頂部のレベルはほぼ同じである。

埋没状況　暗褐色シルト混じり細砂１層が堆積していた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している（図版３）。

土師器　甕の体部片が出土している。長胴タイプと丸胴タイプが出土しているが、いずれも図化できなかった。

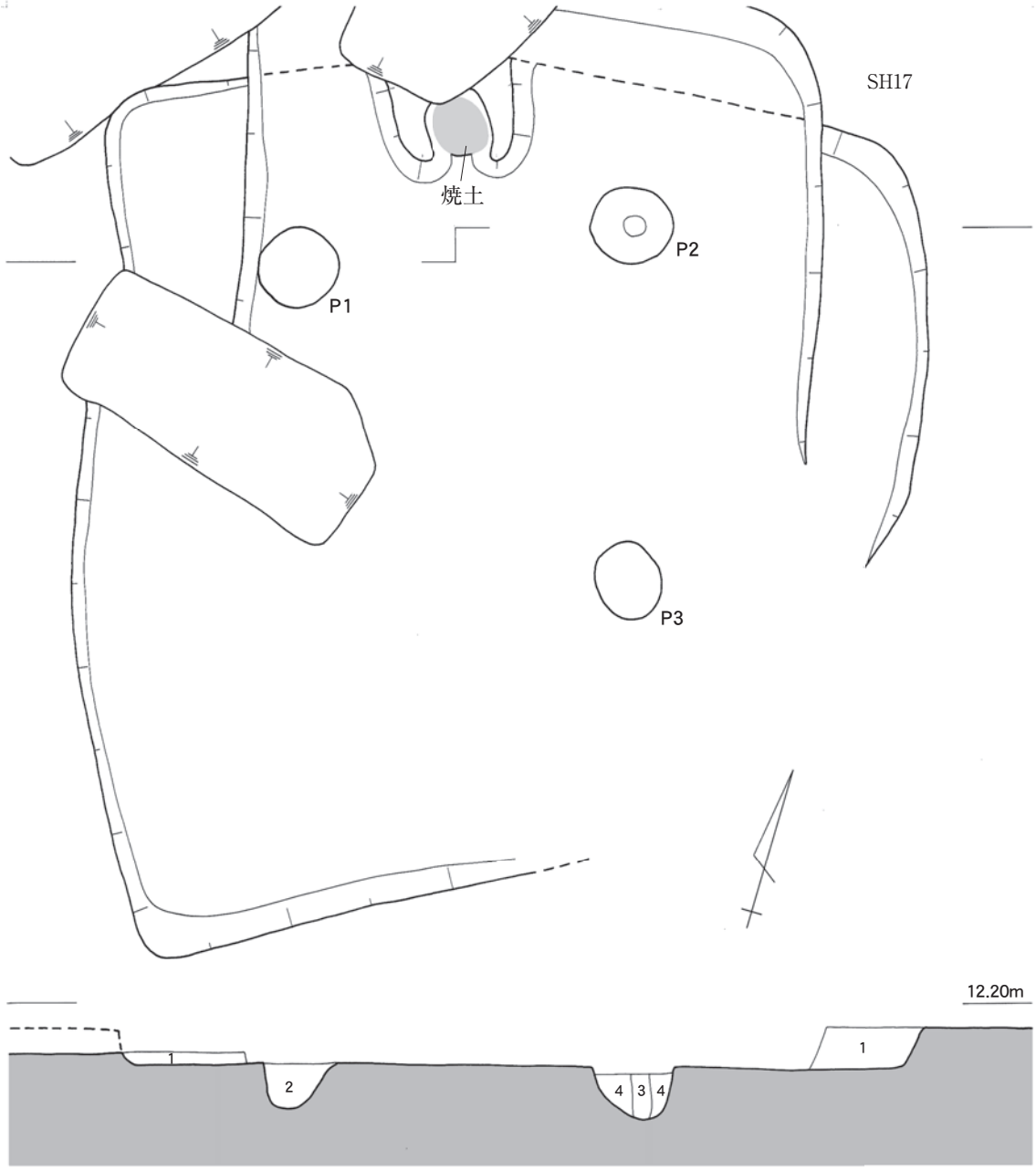
須恵器　杯Ｈ蓋・杯身・甕が出土している。

杯Ｈ蓋は、65 の１個体が出土している。天井部が扁平なタイプで、回転ヘラ削りにより仕上げられている。杯身は、66 の１個体が出土している。甕については、体部片が出土しているが、図化できなかった。

時　期　杯身と杯Ｈ蓋の示す時期が明らかに異なる。後者が当住居跡の時期を示しているものと考えられる。よって、古墳Ｉ期古相に位置付けられる。

ＳＨ 18（写真図版 14）

検出状況　調査区東半部で検出した（第 21 図）。東側住居跡群（ＳＨ 17 ～ＳＨ 19）に位置する（第 47 図）。住居跡の南東隅を除いて検出されているが、北側の大半はＳＨ 17 に切られている。ただし、ＳＨ 17 の南辺については明確にできなかったため、ＳＨ 17 との境は不明瞭である。この他、２箇所において後世の撹乱を受けている。以上から、検出できたのは全体の 1/2 以下に限られる。



1. 暗灰色シルト混じり暗褐色極細砂
2. 茶褐色シルト混じり暗灰色細砂(P1)
3. 暗灰色シルト混じり極細砂～細砂(P2)
4. 黄褐色細砂混じり暗褐灰色シルト混じり極細砂(P2)

第 49 図　ＳＨ 18

形状・規模

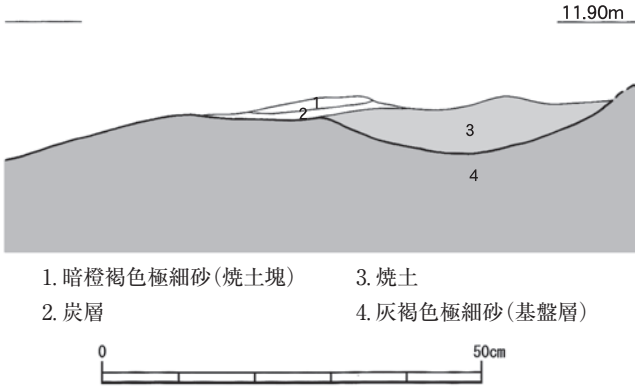
平面形は、ほぼ南北方向に主軸をとる方形をなす（第 49 図）。ただし、西辺が直線的ではないことに加え、一部を除いて４辺が平行・直角関係にない。このため、全体の平面形がかなり歪んだ形状をなしている。その規模は、南北方向で 6.08 m、東西方向で 5.08 mを測る。住居跡中央部床面における検出面からの深さは 30㎝を測り、

第 50 図　ＳＨ 18 の調査

その標高は 11.80 ｍである。

付属施設　カマドと主柱穴を検出した。

主柱穴　３穴（Ｐ１～Ｐ３）検出した。これらの３穴は、ＳＨ 17 の床面を検出した際に確認できたものである。本来は４穴からなるものと考えられるが、南西部の１穴については、検出できなかった。後世の撹乱と平面的に一致する可能性も考えられる。



第 51 図　ＳＨ 18　カマド縦断面

３穴の床面における平面形は円形をなし、その規模はＰ１が 53㎝、Ｐ２が 60㎝、Ｐ３が 47㎝を測る。また、床面からの深さは、それぞれ 33㎝、37㎝、８㎝である。また、Ｐ２においては柱痕を検出することができ、その径は 17㎝を測る。また、柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間が 2.50 ｍ、Ｐ２－Ｐ３間が 2.60 ｍである。

カマド　北辺中央部と復元される位置で検出した（第 51 図）。ただし、カマドの北側は撹乱を受け、さらに北辺の大半がＳＨ 17 に切られているため、北辺との関係は調査では明らかにできなかった。また、上部の大半が削平を受けていた。

ハ字形にのびる袖部と、両袖に囲まれた焼土面が検出されている。裾部における袖部の規模は、西側で 62㎝、東側で 70㎝を検出している。袖部は基本的に盛土からなり、床面との比高は５㎝を測る。袖部に囲まれた内側は焼土層からなり、その厚さは５㎝を測る（第 51 図）。焼土面と袖頂部のレベルはほぼ同じである。また、この焼土面から南側にかけてわずかに炭層を検出している。

埋没状況　暗灰色シルト混じり暗褐色極細砂１層が堆積していた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している（図版３）。

土師器　甑・甕・椀・高杯が出土している。

甑は、73 と 74 の２個体が出土している。73 は口縁部から体部にかけて残存する。直立する体部に対して、口縁部がわずかに外反傾向にあり、端部は薄く仕上げられている。また、体部内面はヘラ削り、外面はヘラミガキにより仕上げられている。74 は、口縁部を中心に残存し、口縁部は直立傾向にある。端部は、外端部を中心とした横ナデ調整により、内傾する端面が形成されている。

甕は、75 の１個体を図化することができた。丸胴タイプの甕と考えられ、内外面ともハケ調整により仕上げられている。この他、図化できなかったが、長胴タイプの甕の体部片も出土している。

椀は 76 の１個体が出土している。口縁部から体部にかけて残存し、椀形をなす。

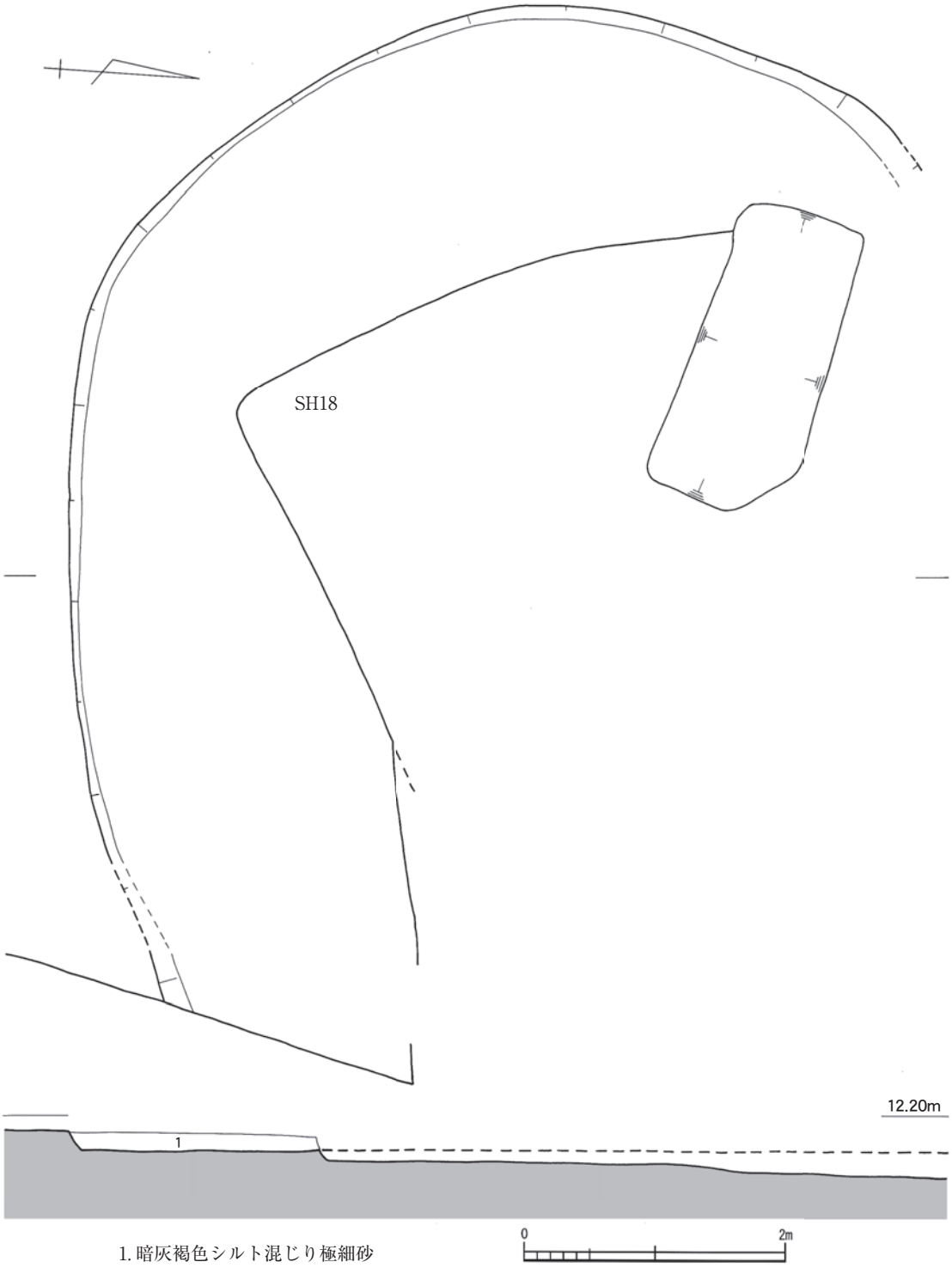
この他、高杯は杯部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

須恵器　　杯H蓋・杯H・高杯が出土している。

杯H蓋は、67 ～ 69 の３個体が出土している。67 が比較的大型であるのに対して、69 は小型と、法量的な差が認められる。68 の天井部には自然釉の付着が認められる。

杯Hは、70 の１個体が出土している。底部は比較的扁平で、ヘラ切り後回転ナデ調整により仕上げられている。

高杯は 71 と 72 の２個体が出土している。71 は杯部下半を中心に残存する。杯底部内面



第 52 図　ＳＨ 19

には当具痕が認められる。72 は、脚裾部を中心に残存する。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、上部に２条の沈線が認められる。

時　　期　　出土土器から、古墳Ⅰ期古相に位置付けられる。

ＳＨ 19（写真図版 14）

検出状況　　調査区東端部で検出した（第21図）。東側住居跡群（ＳＨ17～ＳＨ19）に位置する（第47図）。検出できたのは住居跡の西側から南側にかけてにあたり、他はＳＨ 17・ＳＨ 18 に切られていた。このため、検出できたのは全体の 1/2 以下に限られる。

形状・規模　　平面形は、ほぼ円形傾向にある（第 52 図）。ただし、全体的な形状はやや不定形気味である。このため規模を明確にすることは困難であるが、南北方向で６ｍ以上、東西方向で８ｍ以上を測る。住居跡中央部床面における検出面からの深さは 15㎝を測り、その標高は 11.90 ｍである。

付属施設　　全く検出されていない。

埋没状況　　暗灰褐色シルト混じり極細砂１層が堆積していた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　　土師器と須恵器が出土している（図版３）。

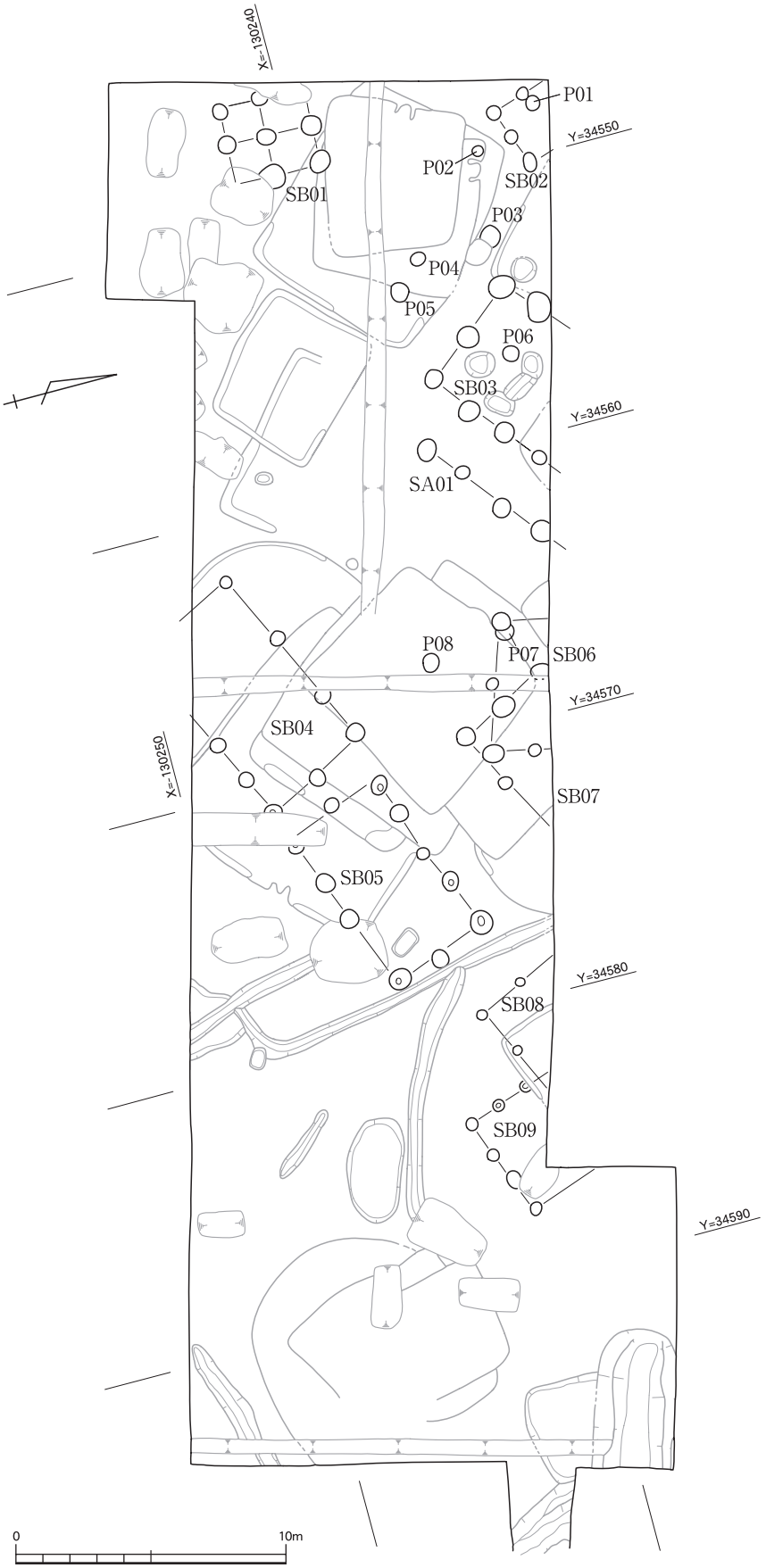
土師器　　甕と壺が出土している。

甕は、79 の１個体が出土している。口縁部のみ残存する。

壺は、口縁部を中心に残存する個体（80）と、体部を中心に残存する個体（81）が出土している

須恵器　　杯Ｈ蓋・杯Ｈ・高杯・甕が出土している。杯Ｈ蓋を除いては、小片のため図化できなかった。杯Ｈ蓋は、77 と 78 の２個体が出土している。口縁部を中心に残存するが、２個体とも小型である。

時　　期　　出土土器から、古墳Ⅰ期古相に位置付けられる。



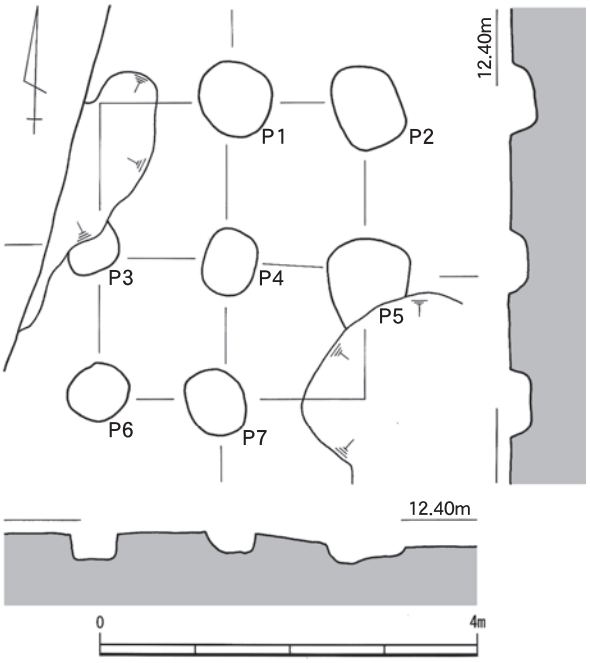
第 53 図　A区　掘立柱建物・柵・柱穴

３．掘立柱建物跡

はじめに　　計９棟（ＳＢ 01 ～ＳＢ 09）検出した（第 53 図）。

ＳＢ 01（写真図版 15）

検出状況　　西端部で検出した（第 53 図）。ＳＢ 02 の南側に位置する。ＳＨ 01 ～ＳＨ 03 と切り合い関係にあり、これらの住居跡を切っている。基本的には建物全体が検出されているが、北西隅と南東隅の２穴は、後世の撹乱を受け検出することはできなかった。調査時においてはＰ２とＰ５については土坑と判断していたが、整理段階で建物の一部と判断し、復元できたものである。



第 54 図　ＳＢ 01

建　　物　　梁行２間、桁行２間の総柱建物である（第 54 図）。梁行・桁行が平行・直角関係にあり、全体的に整った平面形をなす。建物の規模は、梁行（Ｐ３－Ｐ５）で 2.90 ｍ、桁行（Ｐ１－Ｐ７）で 3.20 ｍを測り、両者を基準とした建物の面積は 9.28㎡である。また、桁行（Ｐ１－Ｐ７）を基準とした棟軸方向は、Ｎ２°Ｗを示す。なお、各柱穴間の距離等は第１表の通りである。

柱　　穴　　柱穴の平面形はすべて隅円長方形を基本とするが、その平面形は直線的ではない。また、各柱穴の主軸方向と棟軸方向は一致しない。その規模は、50㎝大～ 90㎝大と比較的大型である。柱痕については全て確認できなかった。各柱穴の規模は第１表の通りである。

出土遺物　　土師器と須恵器が出土している（図版３）。

土師器　　Ｐ４・Ｐ６・Ｐ７から甕の体部片が、Ｐ７から椀もしくは皿の口縁部片が出土している。いずれも、小片のため図化できなかった。

須恵器　　図化できたのは、Ｐ７出土の杯Ｈ蓋（82）と、Ｐ２出土の杯Ｈ（83）の２個体に限られる。この他、図化できなかったが、Ｐ３・Ｐ４から甕の体部片が出土している。

時　　期　　出土遺物から判断して、古墳Ⅱ期と考えられる。

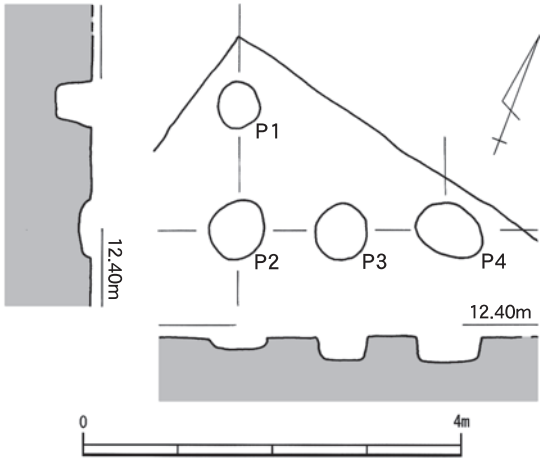
第１表　ＳＢ 01　建物・柱穴規模一覧

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
梁　行	Ｐ３- Ｐ４	1.40	2.90	1.45
	Ｐ４- Ｐ５	1.50		
桁　行	Ｐ１- Ｐ４	1.70	3.20	1.60
	Ｐ４- Ｐ７	1.50		

No.	平面規模（cm）	柱痕（cm）	深さ（cm）
Ｐ１	74 × 80	－	28
Ｐ２	66 × 91	－	28
Ｐ３	54 ×（60）	－	27
Ｐ４	54 × 70	－	20
Ｐ５	85 ×（95）	－	20
Ｐ６	57 × 60	－	24
Ｐ７	58 × 71	－	22

ＳＢ 02

検出状況　調査区北西隅で検出した（第 53 図）。ＳＢ 01 の北側に位置する。南側梁行が検出された以外、建物の大半は調査区外へ拡がっている。一部柱穴と切り合い関係にあるが、顕著な切り合い関係は認められない。このため、検出できたのは全体の約 1/2 程度である。



第 55 図　ＳＢ 02

建　物　梁行２間の側柱建物である（第 55 図）。桁行については検出できたのは１間分である。梁行と桁行は平行・直角関係にあり、全体的に整った平面形をなす。建物の規模は、梁行（Ｐ２－Ｐ４）で 2.25 ｍを測る。また、桁行（Ｐ１－Ｐ２）を基準とした棟軸方向は、Ｎ 21° Ｗを示す。なお、各柱穴間の距離等は第２表の通りである。

柱　穴　柱穴の平面形はすべて円形を基本とするが、整円ではなく楕円形気味である。その規模は、40㎝から 60㎝である。柱痕については全て確認できなかった。各柱穴の規模は第２表の通りである。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している。

土師器　Ｐ２とＰ４から甕の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

須恵器　Ｐ２から、杯Ｈの底部片が出土している。底部はヘラ切り後未調整である。

時　期　出土遺物から判断して、古墳Ⅱ期と考えられる。

第２表　ＳＢ 02　建物・柱穴規模一覧

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
西桁行	Ｐ１- Ｐ２	1.35	1.35	1.35
南梁行	Ｐ２- Ｐ３	1.10	2.25	1.13
	Ｐ３- Ｐ４	1.15		

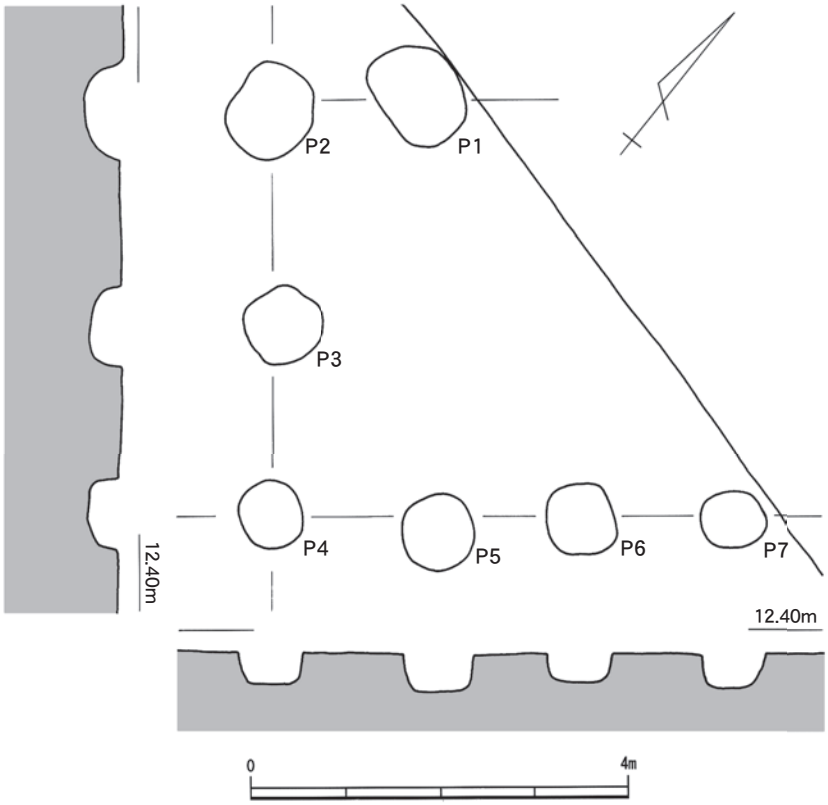
No.	平面規模（㎝）	柱痕（㎝）	深さ（㎝）
Ｐ１	44	－	31
Ｐ２	56 × 60	－	12
Ｐ３	52 × 59	－	24
Ｐ４	74 × 54	－	24

ＳＢ 03

検出状況　調査区西半部北側で検出した（第 53 図）。ＳＢ 02 の東側に位置する。また、ＳＡ 01 の東側に位置し、方向性を同じくしている。建物の約 1/2 は調査区外へ拡がっており、検出できたのは全体の約 1/2 程度である。

建　物　梁行２間の側柱建物である（第 56 図）。桁行については、検出できたのは３間分である。梁行と桁行は平行･直角関係にあり、全体的に整った平面形をなす。建物の規模は、梁行（Ｐ２－Ｐ４）で 4.50 ｍを測り、桁行は南東側（Ｐ４－Ｐ７）で 4.85 ｍを検出している。梁行に対して桁行柱穴間の距離が明らかに短い傾向にある。また、南東桁行（Ｐ４－Ｐ７）を基準とした棟軸方向は、Ｎ 51° Ｅを示す。各柱穴間の距離等は第３表の通りである。

柱　穴　柱穴の平面形は方形もしくは長方形を基本とするが、全体的に歪んだ平面形をなしてい



第 56 図　ＳＢ 03

る。また、柱穴の主軸と建物の棟軸はほぼ一致するが、Ｐ１とＰ２に関しては一致しない傾向にある。柱穴の規模は、Ｐ１とＰ２が傑出し、一辺が１ｍ以上を測る。他の柱穴に関しては 70㎝～ 80㎝大でほぼ同規模である。検出面からの深さについても、30㎝～ 40㎝とほぼ一定している。なお、柱痕については全て確認できなかった。各柱穴の規模は第３表の通りである。

出土遺物　　土師器と須恵器が出土している（図版３）。

土師器　　Ｐ５～Ｐ７から甕の体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。Ｐ５から出土した体部片は、被熱により赤変していた。

須恵器　　図化できたのは、Ｐ２出土の杯Ｈ蓋（84）と、Ｐ６出土の高杯（85）である。84 の内面にはヘラ状工具の当り痕が認められた。

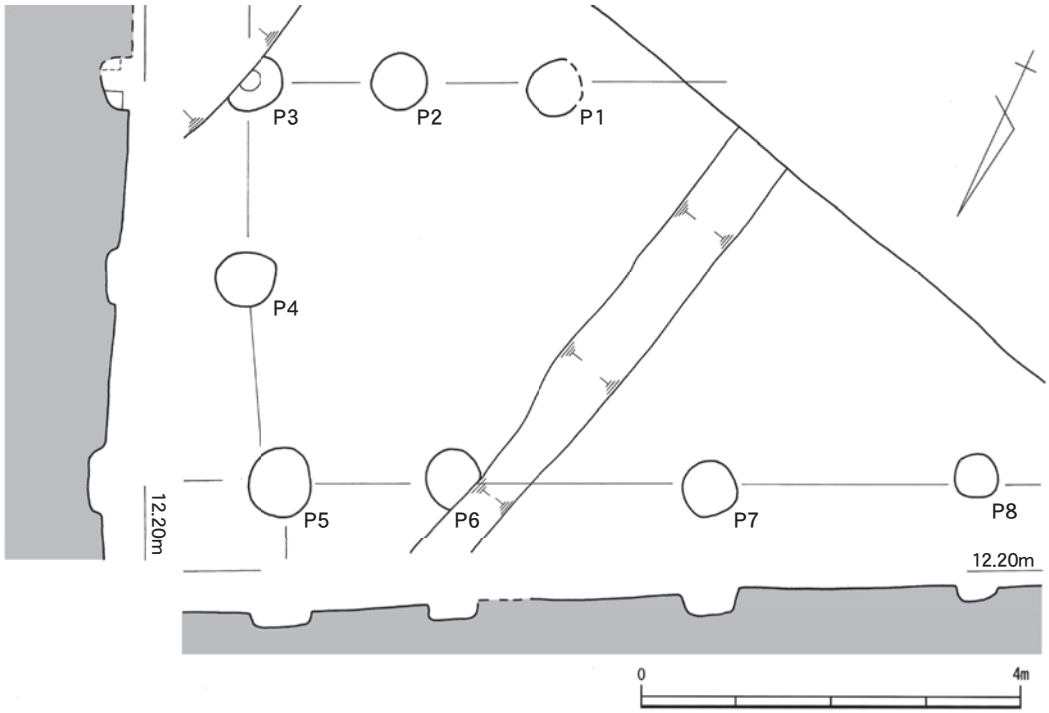
この他、Ｐ１から甕の体部片、Ｐ２から杯Ｇ蓋と杯Ｈ、Ｐ４から杯Ｈ、Ｐ６から蓋、Ｐ７から杯Ｈ蓋と甕が、それぞれ出土している。また、Ｐ２～Ｐ４から、杯もしくは蓋の一部が出土しており、いずれもヘラ切り後未調整である。

時　　期　　出土遺物から判断して、古墳Ⅱ期と考えられる。

第３表　ＳＢ 03　建物・柱穴規模一覧

	柱　　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
南西梁行	Ｐ２- Ｐ４	2.50	4.50	2.25
	Ｐ３- Ｐ４	2.00		
南東桁行	Ｐ４- Ｐ５	1.80	4.85	1.62
	Ｐ５- Ｐ６	1.50		
	Ｐ６- Ｐ７	1.55		

No.	平面規模（㎝）	柱痕（㎝）	深さ（㎝）
Ｐ１	87 × 111	－	30
Ｐ２	83 × 100	－	40
Ｐ３	81 × 78	－	38
Ｐ４	65 × 71	－	29
Ｐ５	75 × 81	－	40
Ｐ６	72 × 73	－	28
Ｐ７	70 × 59	－	33



第57図　ＳＢ04

ＳＢ04（写真図版15）

検出状況　調査区中央部南側で検出した（第53図）。ＳＢ05の西側に位置する。建物の南隅は調査区外へ拡がっており、検出できたのは全体の約3/4程度である。この他、建物中央部を後世の撹乱を受け、北西桁行の１穴を欠く。

建　物　梁行２間の側柱建物である（第57図）。桁行については、検出できたのは３間分である。ただし、北西側と南東側では柱穴間の距離が異なり、当初の柱間については復元が困難である。両桁行は平行関係にあるが、梁行とは直角関係にはない。建物の規模は、梁行（Ｐ３－Ｐ５）で4.20ｍを測り、桁行は北西側（Ｐ５－Ｐ８）で7.30ｍを検出している。また、北西桁行（Ｐ５－Ｐ８）の直角方向を基準とした棟軸方向は、Ｎ65°Ｗを示す。なお、各柱穴間の距離等は第４表の通りである。

柱　穴　柱穴の平面形は円形もしくは隅丸方形を基本とする。柱穴の規模は、Ｐ８がやや小規模である以外は、50㎝～60㎝大とほぼ同規模である。検出面からの深さについても、Ｐ４の６㎝を除いては、12㎝～30㎝と顕著な差は認められない。なお、柱痕についてはＰ３を除いては検出できなかった。各柱穴の規模は第４表の通りである。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している（図版４）。

第４表　ＳＢ04　建物・柱穴規模一覧

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
南東桁行	Ｐ１-Ｐ２	1.65	3.25	1.63
	Ｐ２-Ｐ３	1.60		
北東梁行	Ｐ３-Ｐ４	2.00	4.20	2.10
	Ｐ４-Ｐ５	2.20		
北西桁行	Ｐ５-Ｐ６	1.85	7.30	2.43
	Ｐ６-Ｐ７	2.65		
	Ｐ７-Ｐ８	2.80		

No.	平面規模（㎝）	柱痕（㎝）	深さ（㎝）
Ｐ１	56×58	－	12
Ｐ２	57×60	－	28
Ｐ３	65	21	24
Ｐ４	64×58	－	6
Ｐ５	65×71	－	21
Ｐ６	56×58	－	20
Ｐ７	58×57	－	30
Ｐ８	40×44	－	18

土師器　　小片が出土しているが、器種の特定できるものは出土していない。

須恵器　　Ｐ２から壺（86）が、Ｐ６から杯Ｈ蓋（87）が出土している。86 は口縁部を中心に残存し、端部は玉縁状を呈する。

この他、Ｐ２から杯Ｇの口縁部片が、Ｐ３から甕の体部片が、Ｐ４から杯Ｈが、それぞれ出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時　　期　　出土遺物から判断して、古墳Ⅱ期と考えられる。

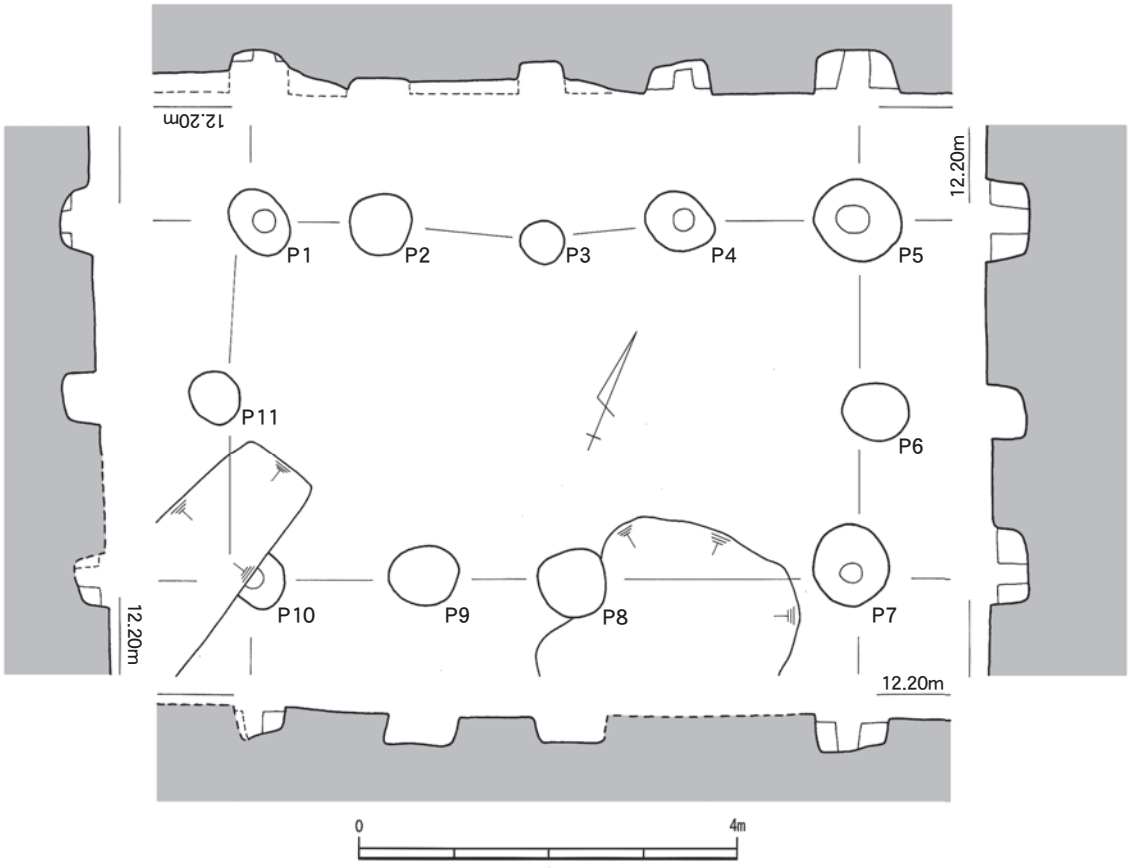
ＳＢ 05（写真図版 15・16）

検出状況　　調査区中央部南側で検出した（第 53 図）。ＳＢ 04 の東側に位置する。建物全体が調査区内におさまるが、南側桁行の１穴を後世の撹乱を受けて欠く。

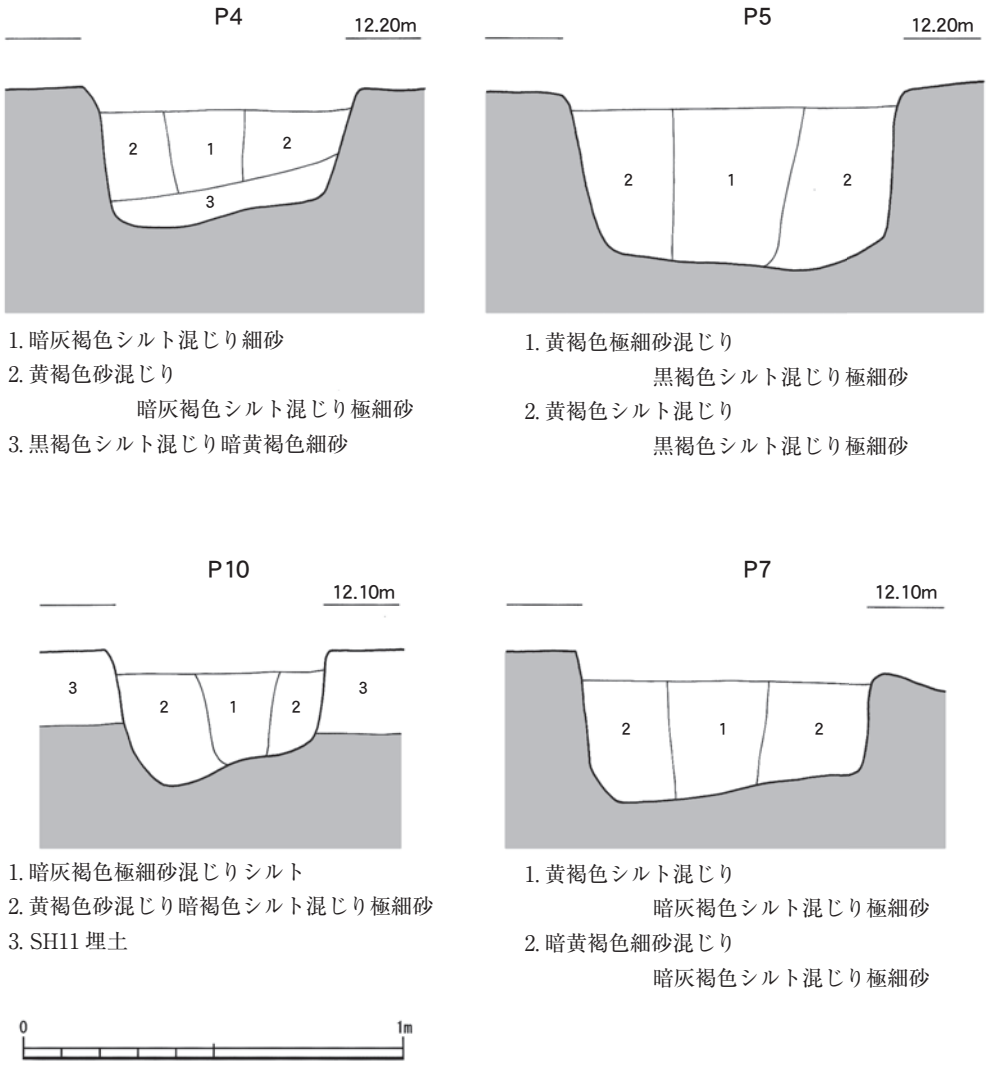
また、建物を構成する柱穴の多くは平面的に重複する竪穴住居跡を切っているが、一部住居跡検出後に検出できたものも認められる。このため、西側の柱穴を中心にその上部が削平を受けた形となっている。

建　　物　　梁行２間、桁行４間の側柱建物である（第 58 図）。ただし、南側桁行については、後世の撹乱を受け１穴を欠く。また、Ｐ 10 についても後世の撹乱を受け、検出できたのは 1/2 程度である。北側桁行のＰ３、西側梁行のＰ 11 が桁行・梁行のラインからずれるため、全体的に柱通りが良好ではない。ただし、桁行・梁行が基本的に平行・直角関係にあり、全体的に整った長方形をなしている。柱穴間の距離は、桁行に対して梁行が広い傾向にある。

建物の規模は、東側梁行（Ｐ５－Ｐ７）と北側桁行（Ｐ１－Ｐ５）を基準とすると、23.12㎡



第 58 図　ＳＢ 05



第 59 図　ＳＢ 05　柱穴断面

である。また、東梁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ 22° Ｗを示す。なお、各柱穴間の距離等は第５表の通りである。

柱　穴　　柱穴の平面形は隅丸方形を基本とするが、円形に近いものも認められる。柱穴の規模は、Ｐ３がやや小規模である以外は、多くが 70㎝大である。この中で、Ｐ５とＰ７が 80㎝大と突出した規模である。検出面からの深さについても、多くが 30㎝以上である。柱痕についてはＰ１・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ７・Ｐ 10 で検出することができ、その規模は 22㎝～ 30㎝である。

第５表　ＳＢ 05　建物・柱穴規模一覧

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北桁行	Ｐ 1 - Ｐ 2	1.25	6.25	1.56
	Ｐ 2 - Ｐ 3	1.70		
	Ｐ 3 - Ｐ 4	1.50		
	Ｐ 4 - Ｐ 5	1.80		
東梁行	Ｐ 5 - Ｐ 6	2.00	3.70	1.85
	Ｐ 6 - Ｐ 7	1.70		
南桁行	Ｐ 7 - Ｐ 8	2.95	6.40	1.60
	Ｐ 8 - Ｐ 9	1.60		
	Ｐ 9 - Ｐ 10	1.85		
西梁行	Ｐ 10 - Ｐ 11	1.95	3.80	1.90
	Ｐ 11 - Ｐ 1	1.85		

No.	平面規模（cm）	柱痕（cm）	深さ（cm）
Ｐ 1	54 × 74	25	23
Ｐ 2	63 × 64	－	8
Ｐ 3	45 × 43	－	34
Ｐ 4	60 × 71	23	39
Ｐ 5	81 × 86	30	49
Ｐ 6	71 × 60	－	41
Ｐ 7	80 × 83	23	43
Ｐ 8	70 × 70	－	30
Ｐ 9	70 × 64	－	31
Ｐ 10	55	22	22
Ｐ 11	50 × 57	－	35

また、Ｐ４においては、柱穴掘削後に柱穴内を整地した後、柱を立てている状況を観察することができた(第59図)。なお、各柱穴の規模は第５表の通りである。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している(図版４)。

土師器　小片が出土しているが、器種の特定できるものは出土していない。

須恵器　Ｐ２から杯Ｈ(95)、Ｐ３から杯Ｈ蓋(92)と壺(97)、Ｐ５から杯Ｈ(94)、Ｐ６から杯Ｈ蓋(91)、Ｐ８から杯Ｈ蓋(88・89)、Ｐ９から杯Ｈ蓋(90)と杯Ｈ(93・96)が、それぞれ出土している。このなかで、杯Ｈとした96は、内外面に釉の付着が認められる。また、底部はヘラ切り後ナデ調整が加えられている。97は、提瓶の口縁部と考えられる。

この他、Ｐ１・Ｐ３・Ｐ５・Ｐ10から、甕の体部片が出土している。

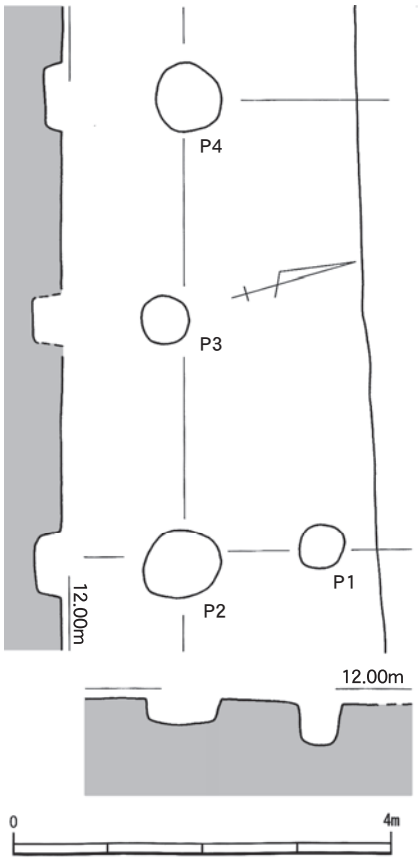
時　期　出土遺物から判断して、古墳Ⅱ期と考えられる。

ＳＢ06

検出状況　調査区中央部北端で検出した（第53図)。ＳＢ04の北側に位置する。建物南側を中心に検出され、大半は調査区外へ拡がっている。また、ＳＢ07と平面的に重複するが、調査ではその前後関係を明らかにすることはできなかった。この他、Ｐ４の北側については、ＳＨ09と切り合い関係にあり、検出できなかった。

建　物　梁行２間の側柱建物である（第60図)。桁行については、１間分検出できたにとどまる。南側梁行については中間の１穴(Ｐ３)がＰ２－Ｐ４を結ぶラインより南側にある。建物の規模は、南梁行（Ｐ２－Ｐ４）で5.25ｍを測る。また、東桁行（Ｐ１－Ｐ２)を基準とした棟軸方向は、Ｎ16°Ｅを示す。なお、各柱穴間の距離等は第６表の通りである。

柱　穴　柱穴の平面形は隅丸方形を基本とするが、Ｐ１のように円形に近いものも認められる。また、Ｐ３については後世の撹乱の下面で検出したものである。柱穴の規模は、Ｐ２とＰ４が70㎝を越え、突出している。柱痕については、いずれの柱穴においても検出できなかった。なお、各柱穴の規模は第６表の通りである。



第60図　ＳＢ06

第６表　ＳＢ06　建物・柱穴規模一覧

	柱　間	柱穴間距離(m)	側面距離(m)	柱穴間平均距離(m)
東桁行	Ｐ1-Ｐ2	1.50	1.50	1.50
南梁行	Ｐ2-Ｐ3	2.60	5.25	2.63
	Ｐ3-Ｐ4	2.65		

No.	平面規模(㎝)	柱痕(㎝)	深さ(㎝)
Ｐ1	48 × 45	－	43
Ｐ2	87 × 75	－	19
Ｐ3	49 × 50	－	6
Ｐ4	70 × 68	－	15

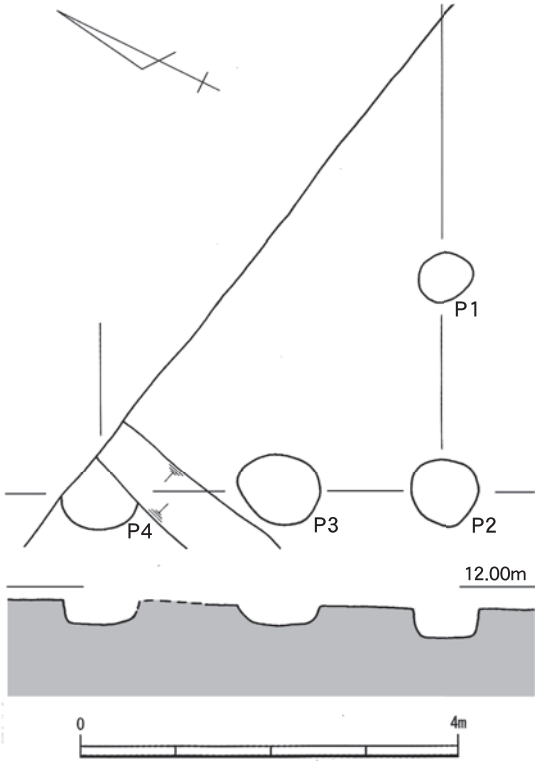
出土遺物　土師器の甕が出土している。Ｐ２から出土しているが、小片のため図化できなかった。また、時期の特定も困難である。

時　期　出土遺物から詳細な時期を判断することは困難である。建物の棟軸方向等から、古墳Ⅱ期と考えられる。

ＳＢ07

検出状況　調査区中央部北端で検出した（第53図）。ＳＢ04の北側に位置する。建物南隅を中心に検出され、大半は調査区外へ拡がっている。また、ＳＢ06と平面的に重複するが、調査ではその前後関係を明らかにすることはできなかった。この他、Ｐ１の北東側については、ＳＨ13と切り合い関係にあり、検出できなかった。

建　物　梁行２間の側柱建物である（第61図）。桁行については、１間分検出できたにとどまる。南西側梁行と南東側桁行は直角関係にあり、検出した範囲では整った平面形をなしている。建物の規模は、南西梁行（Ｐ２－Ｐ４）で3.80ｍを測る。また、南西梁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ24° 30′Ｗを示す。



第61図　ＳＢ07

なお、各柱穴間の距離等は第７表の通りである。

柱　穴　柱穴の平面形は隅丸方形を基本とするが、Ｐ３のように楕円形に近いものも認められる。また、Ｐ４については、後世の撹乱を受けさらに一部調査区外へ拡がるため、全体を検出することはできなかった。柱穴の規模は、Ｐ１を除いては70㎝以上と、比較的大型である。柱痕については、いずれの柱穴においても検出できなかった。各柱穴の規模は第７表の通りである。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

土師器　Ｐ３から甕の体部小片が出土している。

須恵器　Ｐ２とＰ３から、杯Ｈもしくは杯Ｈ蓋と考える小片が出土している。

時　期　出土遺物から判断して、古墳Ⅱ期と考えられる。

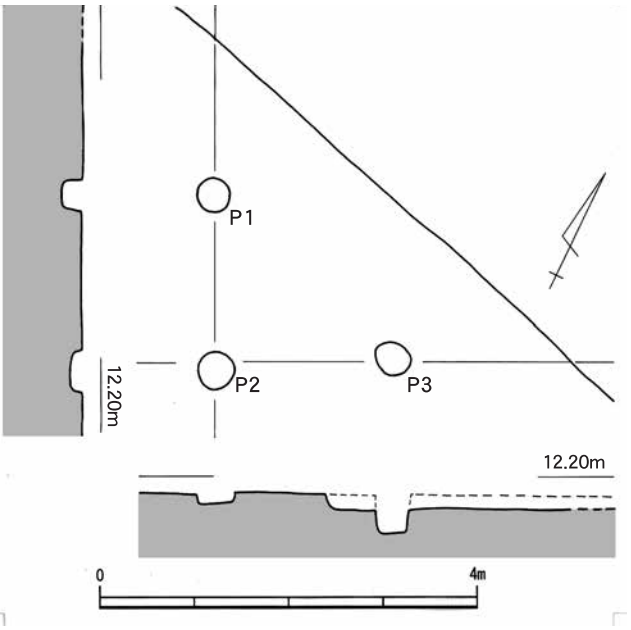
第７表　ＳＢ07　建物・柱穴規模一覧

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
南東桁行	Ｐ１-Ｐ２	2.25	2.25	2.25
南西梁行	Ｐ２-Ｐ３	1.80	3.80	1.90
	Ｐ３-Ｐ４	2.00		

No.	平面規模（㎝）	柱痕（㎝）	深さ（㎝）
Ｐ１	55 × 48	－	12
Ｐ２	72 × 70	－	33
Ｐ３	88 × 76	－	20
Ｐ４	80	－	22

ＳＢ 08

検出状況　調査区東半部北端で検出した（第 53 図）。ＳＢ 05 の東側に位置する。建物南隅を中心に３穴検出されたのみで、大半は調査区外へ拡がっている。また、ＳＢ 09 と一部平面的に重複するが、調査ではその前後関係を明らかにすることはできなかった。



第 62 図　ＳＢ 08

建　物　側柱建物と考えられるが、検出した限りにおいては梁行・桁行の判断は困難である（第 62 図）。梁行と桁行は直角関係にあり、検出した範囲では整った平面形をなしている。柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間・Ｐ２－Ｐ３間ともに 1.85 ｍである。また、建物南西側（Ｐ１－Ｐ２）を基準とした棟軸方向は、Ｎ 25° Ｗを示す。

第８表　ＳＢ 08　柱穴規模一覧

No.	平面規模（cm）	柱痕（cm）	深さ（cm）
Ｐ１	37	－	21
Ｐ２	40	－	15
Ｐ３	34	－	25

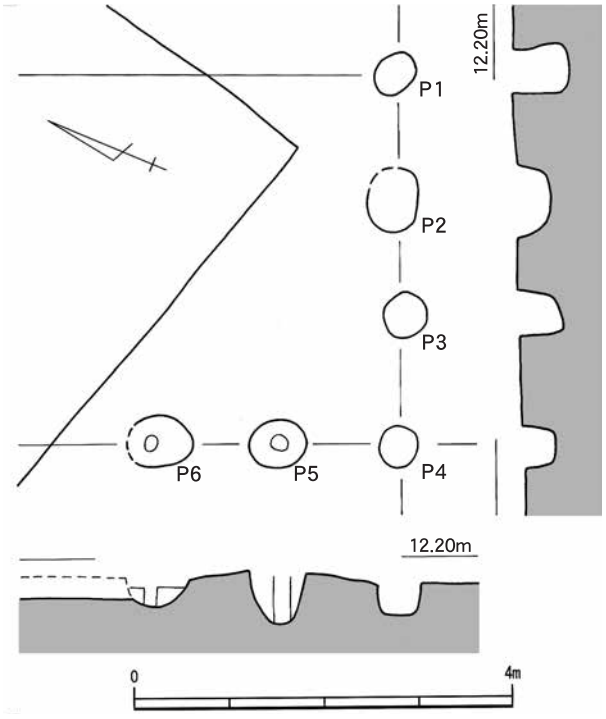
柱　穴　柱穴の平面形は円形を基本とする。その規模は 34cm～ 40cm とほぼ同規模である。柱痕については、いずれの柱穴においても検出できなかった。各柱穴の規模は第８表の通りである。

出土遺物　Ｐ２から、土師器の甕の体部片が出土している。外面はハケ調整により仕上げられている。

時　期　出土遺物から判断して、古墳Ⅱ期と考えられる。

ＳＢ 09（写真図版 17）

検出状況　調査区東半部北端で検出した（第 53 図）。ＳＢ 05 の東側に位置する。建物南東梁行を中心に検出され、約 1/2 は調査区外へ拡がっている。また、ＳＢ 08 と一部平面的に重複するが、調査ではその前後関係を明らかにすることはできなかった。



第 63 図　ＳＢ 09

第９表　ＳＢ 09　建物・柱穴規模一覧

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
南東梁行	Ｐ１-Ｐ２	1.35	3.90	1.30
	Ｐ２-Ｐ３	1.20		
	Ｐ３-Ｐ４	1.35		
南西桁行	Ｐ４-Ｐ５	1.15	2.35	1.18
	Ｐ５-Ｐ６	1.20		

No.	平面規模（cm）	柱痕（cm）	深さ（cm）
Ｐ１	45 × 40	−	42
Ｐ２	67 × 50	−	27
Ｐ３	45 × 47	−	36
Ｐ４	45 × 43	−	24
Ｐ５	60 × 46	19	39
Ｐ６	53	13	17

建　物　梁行３間の側柱建物である（第 63 図）。桁行については南西側で２間分検出している。梁行と桁行は直角関係にあり、検出した範囲では整った平面形をなしている。南西側桁行（Ｐ４－Ｐ６）を基準とした棟軸方向は、Ｎ 23° 30′Ｗを示す。各柱穴間の距離等は第９表の通りである。

柱　穴　柱穴の平面形は円形を基本とするが、全体的に整った形状をなさず楕円傾向にある。その規模は、多くが 40㎝大である。柱痕については、Ｐ５とＰ６で検出されている。各柱穴の規模は第９表の通りである。

出土遺物　一部の柱穴から土師器の小片が出土しているが、器種の特定は困難である。

時　期　出土遺物から時期を特定することは困難である。このため、第５章の検討結果をもとに、古墳Ⅱ期と考えられる。

４．柵

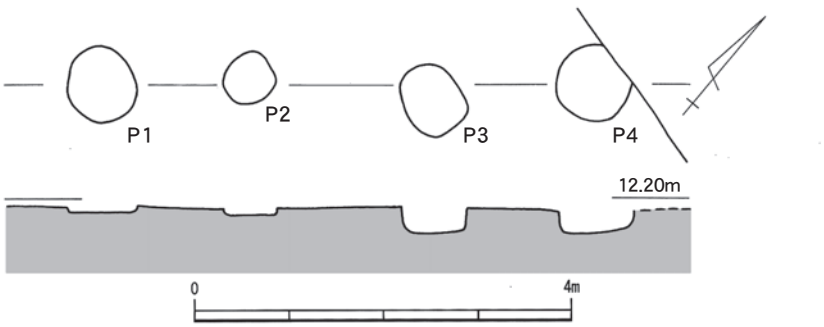
はじめに　ＳＡ 01 の１条のみである。

ＳＡ 01

検出状況　調査区西半部北端で検出した（第 53 図）。ＳＢ 03 の南東側に位置し、その棟軸方向とほぼ一致する。４穴が直列し、他に対応する柱穴がないため、柵と判断したものである。検出したのは４穴であるが、さらに北東側へのびる可能性も考えられる。

柵　列　４穴からなる（第 64 図）。柱穴間の距離は一定ではない。Ｐ１－Ｐ４を基準とした棟軸方向は、Ｎ 50° 30′Ｅを示す。なお、各柱穴間の距離等は第 10 表の通りである。

柱　穴　柱穴の平面形は隅丸方形を基本とするが、全体的に歪んだ形状をなしている。その規模は、Ｐ２を除いては 70㎝と、ＳＢ 03 とほぼ同規模である。柱痕については、全く検出されていない。各柱穴の規模は第 10 表の通りである。



第 64 図　ＳＡ 01

第 10 表　ＳＡ 01　柱穴規模一覧

	柱　　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
南東梁行	Ｐ１- Ｐ２	1.55	5.20	1.73
	Ｐ２- Ｐ３	1.95		
	Ｐ３- Ｐ４	1.70		

No.	平面規模（cm）	柱痕（cm）	深さ（cm）
Ｐ１	72 × 80	－	7
Ｐ２	55 × 60	－	8
Ｐ３	66 × 77	－	24
Ｐ４	78 × 79	－	22

出土遺物　　全く出土していない。

時　　期　　出土遺物から時期を特定することはできない。このため、その方向性がＳＢ 03 と一致することから、古墳Ⅱ期と考えられる。

５．柱穴

はじめに　　ここでは、建物を構成しない柱穴において、良好な資料が出土したものが数穴認められる。そこで、これらの柱穴について、出土遺物を中心に報告する。本項では、８穴（Ｐ 01 ～Ｐ 08）について報告する。

Ｐ 01

検出状況　　調査区北西隅で検出した（第 53 図）。P02 の北西側に位置する。

出土遺物　　須恵器と土師器が出土している。

土師器　　甕の体部小片が出土している。被熱により赤変している。

須恵器　　99 の杯Ｈ蓋１個体が出土している（図版４）。

時　　期　　出土遺物から判断して、古墳Ｉ期新相と考えられる。

Ｐ 02

検出状況　　調査区北西部で検出した（第 53 図）。P01 の南東側、P03 の西側に位置する。

出土遺物　　土師器の甕１個体（107）が出土している（図版４）。口縁部から体部にかけて残存し、口縁端部はわずかにつまみあげられている。丸胴タイプの甕と考えられる。

時　　期　　出土遺物から判断して、古墳Ｉ期と考えられる。

Ｐ 03

検出状況　　調査区北西部で検出した（第 53 図）。P04 の北側、P06 の西側に位置する。

出土遺物　　土器と石製品が出土している。

土器　　須恵器と土師器が出土している。

土師器　　甕の体部小片が出土している。外面はハケ調整により仕上げられている。

須恵器　　杯Ｈ蓋（101）と甕が出土している（図版４）。甕は体部片が出土しており、外面にはカキメが認められる。

石製品　　完存するサヌカイト製打製錐が１点（Ｓ５）出土している（図版７）。全長 2.91㎝を測り、頭部幅は 2.73㎝である。最大厚は 5.3㎜を測る。4.1 ｇ。

時　　期　　出土遺物から判断して、古墳Ｉ期古相と考えられる。

P 04

検出状況　調査区西部中央で検出した（第 53 図）。P05 の北西側、P03 の南側に位置する。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。

土師器　甕と甑が出土している。甕は体部片が出土しており、ハケ調整により仕上げられている。甑は体部片が出土している。

須恵器　杯H（105）・壺（106）・甕が出土している（図版４）。106 は、平瓶の口縁部と考えられる。甕は体部片が出土している。

時　期　出土遺物から判断して、古墳Ｉ期新相と考えられる。

P 05

検出状況　調査区西部中央で検出した（第 53 図）。P04 の南東側に位置する。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。

土師器　甕の体部片が出土している。被熱により赤変している。

須恵器　杯H（103・104）と高杯が出土している（図版４）。104 の底部はヘラ切り後ヘラ削りにより仕上げられている。高杯は、小片のため図化できなかったが、脚部を中心に残存する。長方透かしが認められる。

時　期　出土遺物から判断して、古墳Ｉ期古相と考えられる。

P 06

検出状況　調査区西半部北側で検出した（第 53 図）。P05 の北東側に位置し、平面的にＳＢ 03 の中央部にあたる。

出土遺物　弥生土器の底部片（98）が出土している（図版４）。鉢の可能性が考えられる。内面には煤の付着が認められる。

時　期　出土遺物から判断して、弥生Ｉ期と考えられる。

P 07

検出状況　調査区中央部北側で検出した（第 53 図）。P08 の北西側に位置する。ＳＢ 06 －Ｐ４と切り合い関係にあり、P04 に切られている。

出土遺物　須恵器の杯H蓋（100）が出土している（図版４）。口縁部がやや屈曲傾向にある。

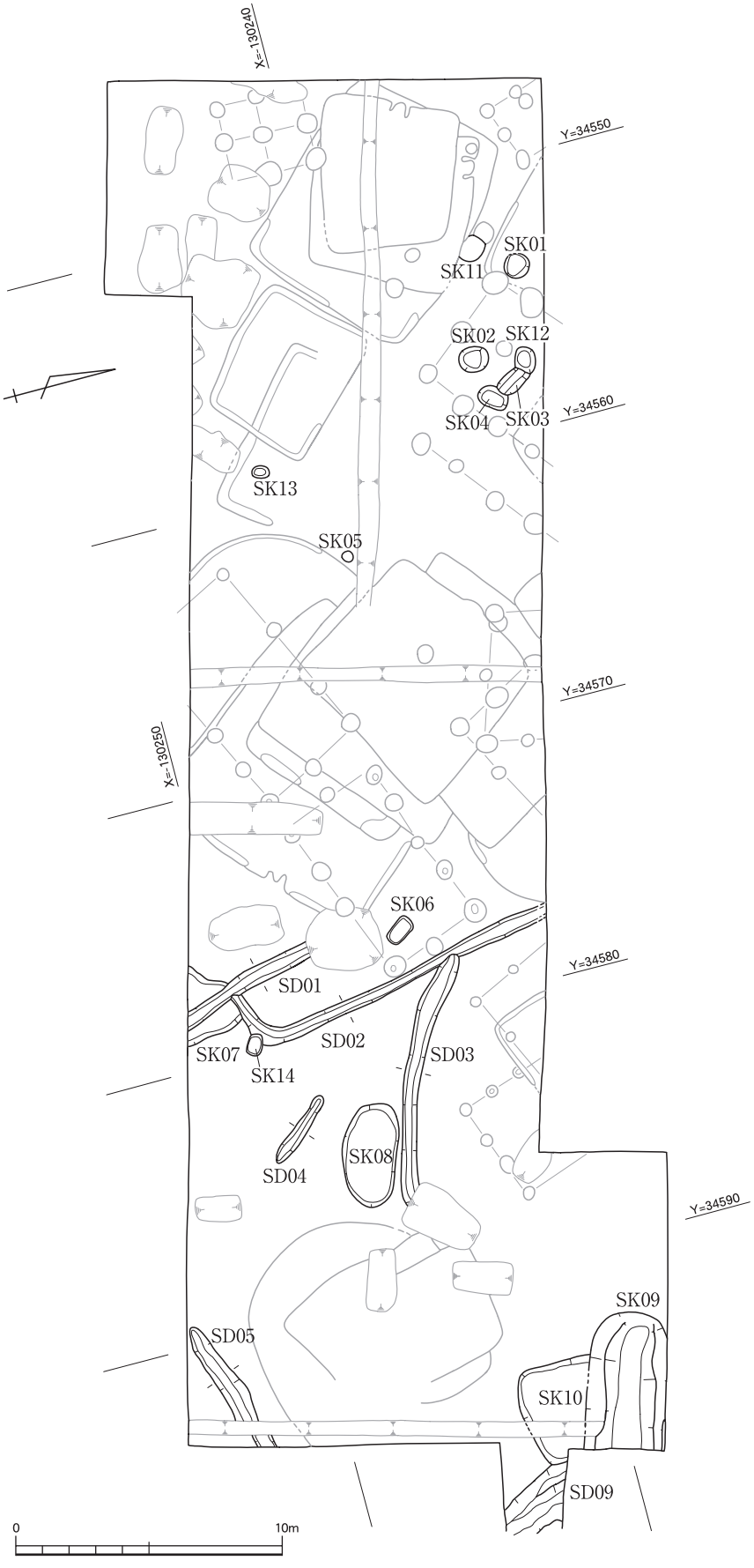
時　期　出土遺物から判断して、古墳Ｉ期古相と考えられる。

P 08

検出状況　調査区中央部で検出した（第 53 図）。P07 の南東側、ＳＢ 06 の南側に位置する。

出土遺物　須恵器の杯H蓋（102）が出土している（図版４）。口縁部がやや外反傾向にある。

時　期　出土遺物から判断して、古墳Ｉ期古相と考えられる。


X=130240
Y=34550
SK01
SK11
SK02
SK12
SK04
SK03
Y=34560
SK13
SK05
Y=34570
X=130250
SK06
Y=34580
SD01
SD02
SD03
SK07
SK14
SD04
SK08
Y=34590
SK09
SD05
SK10
SD09
0
10m

第 65 図　A区　土坑・溝

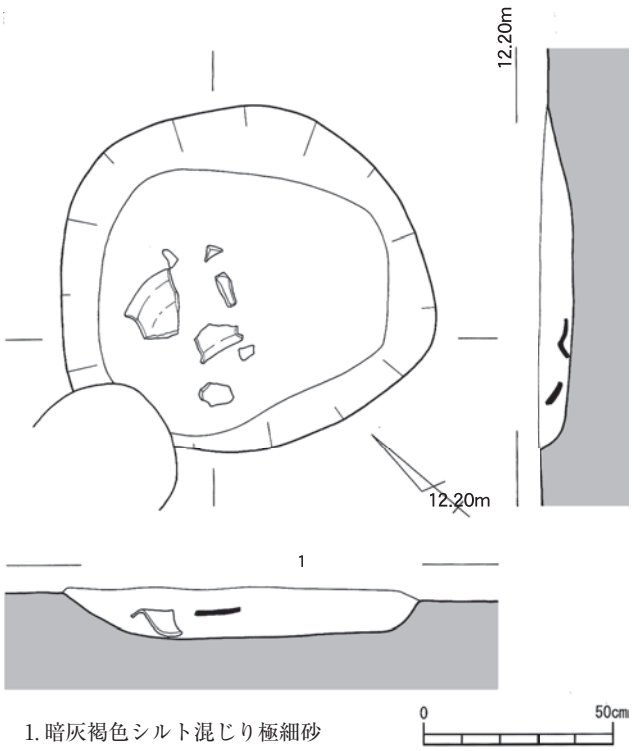
６．土坑

はじめに　14基（ＳＫ01～ＳＫ14）検出されている（第65図）。

ＳＫ01（写真図版17）

検出状況　調査区西半部北端で検出した（第65図）。ＳＢ03－Ｐ２の北西側に位置する。北西隅を柱穴に切られ一部を欠くが、ほぼ全体が検出されている。

形状・規模　平面形は、整った形状をなしていないが、方形傾向にある（第66図）。北東－南西方向に主軸をとり、その規模は主軸方向で90㎝を測る。また、その直交方向で98㎝を測る。横断面は基本的には逆台形をなすが、一部皿形をなしている。最深部における検出面からの深さは９㎝を測り、底部はほぼ平坦である。



第66図　ＳＫ01

埋没状況　埋土は、暗灰褐色シルト混じり極細砂１層からなる（第66図）。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　高坏１個体分（110）が、押し潰された状態で出土している。土坑内に廃棄されたものと考えられる。この他、甕が２個体分（108・109）出土している（図版４）。

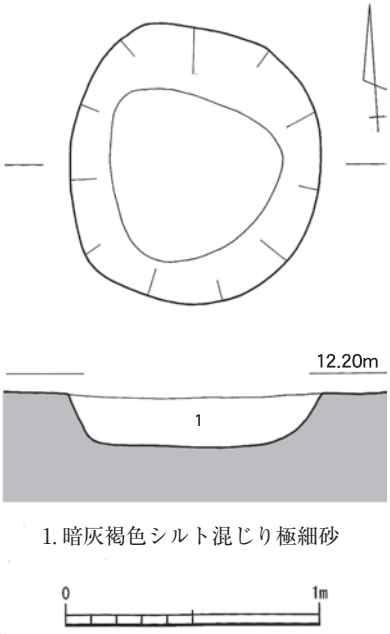
高坏は、椀形の体部に対して、口縁部が水平方向に屈曲する。体部は内外面ともハケ調整を基調としている。甕２個体は、同タイプに分類できるもので、口縁端部は短く屈曲し、端部は拡張されていない。

時　期　出土遺物から判断して、弥生Ⅰ期－２と考えられる。

ＳＫ02（写真図版17）

検出状況　調査区西半部北端で検出した（第65図）。ＳＢ03内に位置し、ＳＫ01の東側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められず、全体が検出されている。

形状・規模　平面形は、整った形状をなしていないが、方形傾向にある（第67図）。ほぼ南北方向に主軸をとり、そ



第67図　ＳＫ02

の規模は主軸方向で 1.12 ｍを測る。また、その直交方向で 99㎝を測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは 19㎝を測り、底部はほぼ平坦である。

埋没状況　埋土は、暗褐灰色シルト混じり極細砂１層からなる（第 67 図）。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　弥生土器の蓋（111）と甕（112）が出土している（図版４）。111 は、口縁端部内面から端面にかけて煤の付着が認められたことから、蓋と判断したものである。全体的に磨滅傾向にある。甕についても同様である。

時　　期　出土遺物から判断して、弥生Ⅰ期－２と考えられる。

ＳＫ 03（写真図版 17）

検出状況　調査区西半部北端で検出した（第 65 図）。ＳＢ 03 内に位置し、ＳＫ 02 の北東側にあたる。北西端がＳＫ 12 に、南東端がＳＫ 04 に切られ、両端を欠く。溝状をなすが、北西側と南東側を切る遺構の延長まで延びていないため、土坑として報告する。

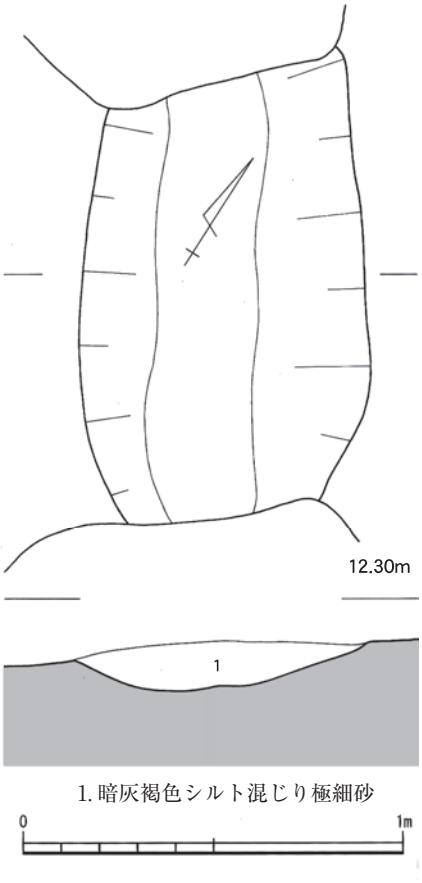
形状・規模　平面形は、溝状をなしている（第 68 図）。ほぼ北西－南東方向に主軸をとり、その規模は主軸方向で 1.24 ｍ検出している。また、その直交方向は 85㎝を測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは 12㎝を測る。

埋没状況　埋土は、暗灰褐色シルト混じり細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。

土師器　椀１個体（113）が出土している（図版４）。器壁が全体的に厚い傾向にあり、内外面ともハケ調整を基調として仕上げられている。内面にはわずかにヘラミガキが認められる。

須恵器　蓋の口縁片が出土しているが、小片のため図化できなかった。坏Ｈ蓋と考えられる。



第 68 図　ＳＫ 03

時　　期　出土遺物およびＳＫ 04 との切り合い関係から判断して、古墳Ⅰ期と考えられる。

ＳＫ 04

検出状況　調査区西半部北端で検出した（第 65 図）。ＳＫ 02 の北東側にあたる。ＳＫ 03 と切り合い関係にあるが、ＳＫ 03 を切っている。このため、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形は、隅丸長方形をなしている（第 69 図）。ほぼ北東－南西方向に主軸をとり、その規模は主軸方向で 1.17 ｍを測る。また、その直交方向は 76㎝である。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは 10㎝を測る。

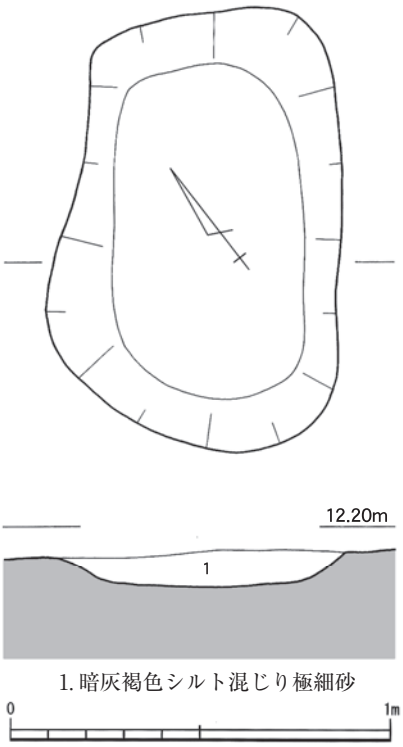
埋没状況　埋土は、暗灰褐色シルト混じり極細砂１層からなる（第 69 図）。黄褐色砂・炭片を含み、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（図版４）。

土師器　皿（114）と甕が出土している。114 は、口径 20.80㎝、器高 4.35㎝と大型の皿である。口縁端部には、わずかに内側に窪みが認められる。全体的に化粧土が塗布されているが、暗文は磨滅が著しく観察できない。甕は長胴タイプに分類されるもので、体部片が出土している。

須恵器　壺（115）が出土している。口縁部を中心に残存し、口縁端部は水平な端面を有する。体部内面には当具痕が認められ、外面はカキメが施されている。

時　期　出土遺物から判断して、古墳Ⅰ期と考えられる。



第 69 図　ＳＫ 04

ＳＫ 05

検出状況　調査区中央部で検出した（第 65 図）。ＳＨ 12 の北西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は、円形をなす（第 70 図）。ほぼ東西方向に主軸をとり、その規模は主軸方向で 43㎝、その直交方向で 40㎝を測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは７㎝である。

埋没状況　埋土は、暗褐灰色シルト混じり極細砂１層からなる（第 70 図）。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

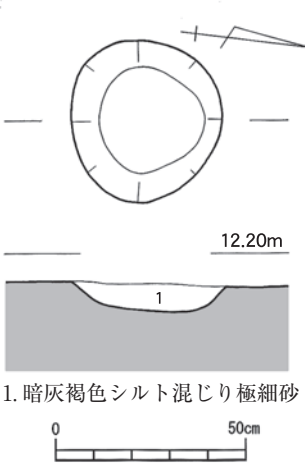
出土遺物　弥生土器の壺の体部片が出土している。

時　期　出土遺物から判断して、弥生Ⅰ期－２と考えられる。

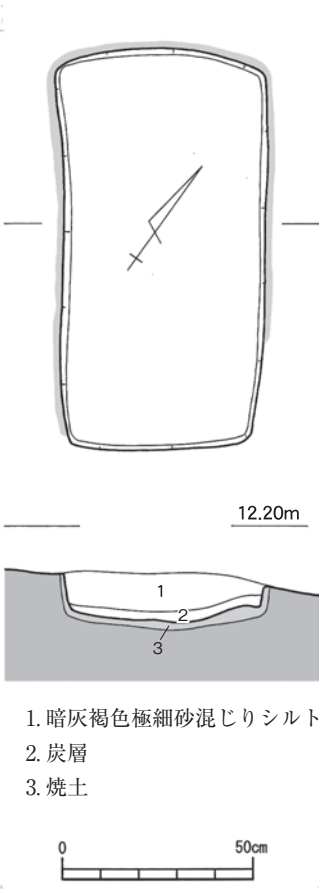
ＳＫ 06（写真図版 18）

検出状況　調査区中央部で検出した（第 65 図）。ＳＢ 05 －Ｐ７の西側に位置する。ただし、主軸方向は一致しない。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。ただし、東側がわずかに削平を受けていた。

形状・規模　平面形は、長方形をなす（第 71 図）。北西－南東方向に主軸をとり、その規模



第 70 図　ＳＫ 05



第 71 図　ＳＫ 06

は主軸方向で 1.06 m、その直交方向で 53㎝を測る。横断面は箱形をなし、底部は平坦面をなす。最深部における検出面からの深さは 13㎝である。

埋没状況　埋土は、上から暗灰色極細砂混じりシルトと炭層の２層からなる（第 71 図）。暗灰色極細砂混じりシルトについては、焼土塊・炭片を多く含み、人為的に埋められたものと考えられる。また、土坑周囲は酸化層となっており、硬く焼土化していた。

出土遺物　土師器の小片が出土している。器種の特定も困難であるが、古墳時代に位置付けられるものと考えられる。

時　　期　出土遺物から判断して、古墳Ⅰ期と考えられる。

ＳＫ 07

検出状況　調査区東半部南側で検出した（第 65 図）。ＳＫ 06 の南側に位置する。ＳＤ 01・ＳＤ 02 と切り合い関係にあり、両溝に切られている。さらに、遺構の多くは南側調査区外へ拡がっており、全体は検出されていない。

形状・規模　検出した範囲が限られているため、平面形を明らかにすることは困難である。検出した限りにおいては不定形傾向にある。東西方向で３m、その直交方向で 2.15 m検出している。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは 16㎝である。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（図版５）。

土師器　甕の体部片が出土している。

須恵器　杯Ｈ蓋（116）と甕が出土している。甕は体部片が出土しているが、全体的に焼成が不十分である。

時　　期　出土遺物から判断して、古墳Ⅰ期古相と考えられる。

ＳＫ 08

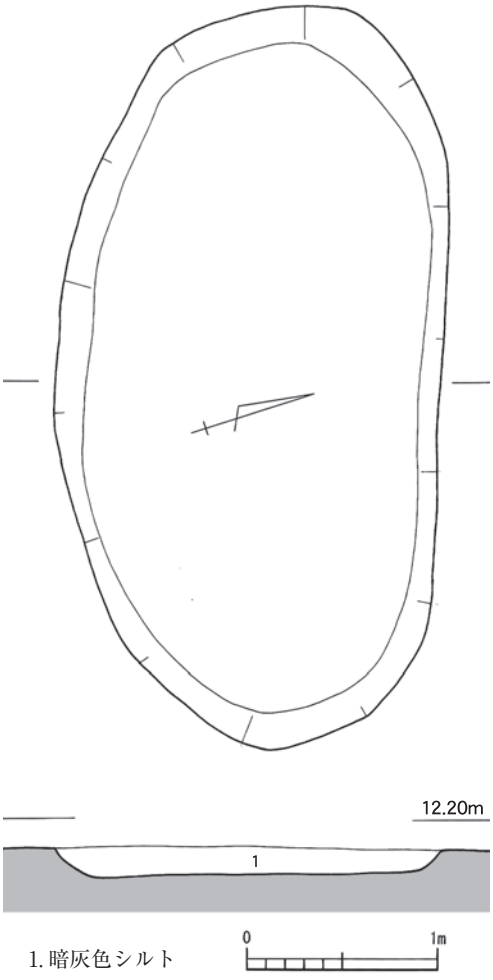
検出状況　調査区東半部中央で検出した（第 65 図）。ＳＫ 07 の北東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は長楕円形をなす（第 72 図）。ほぼ東西方向に主軸を取り、その規模は 3.90 m を測る。また、その直交方向は２mである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは 12㎝である。

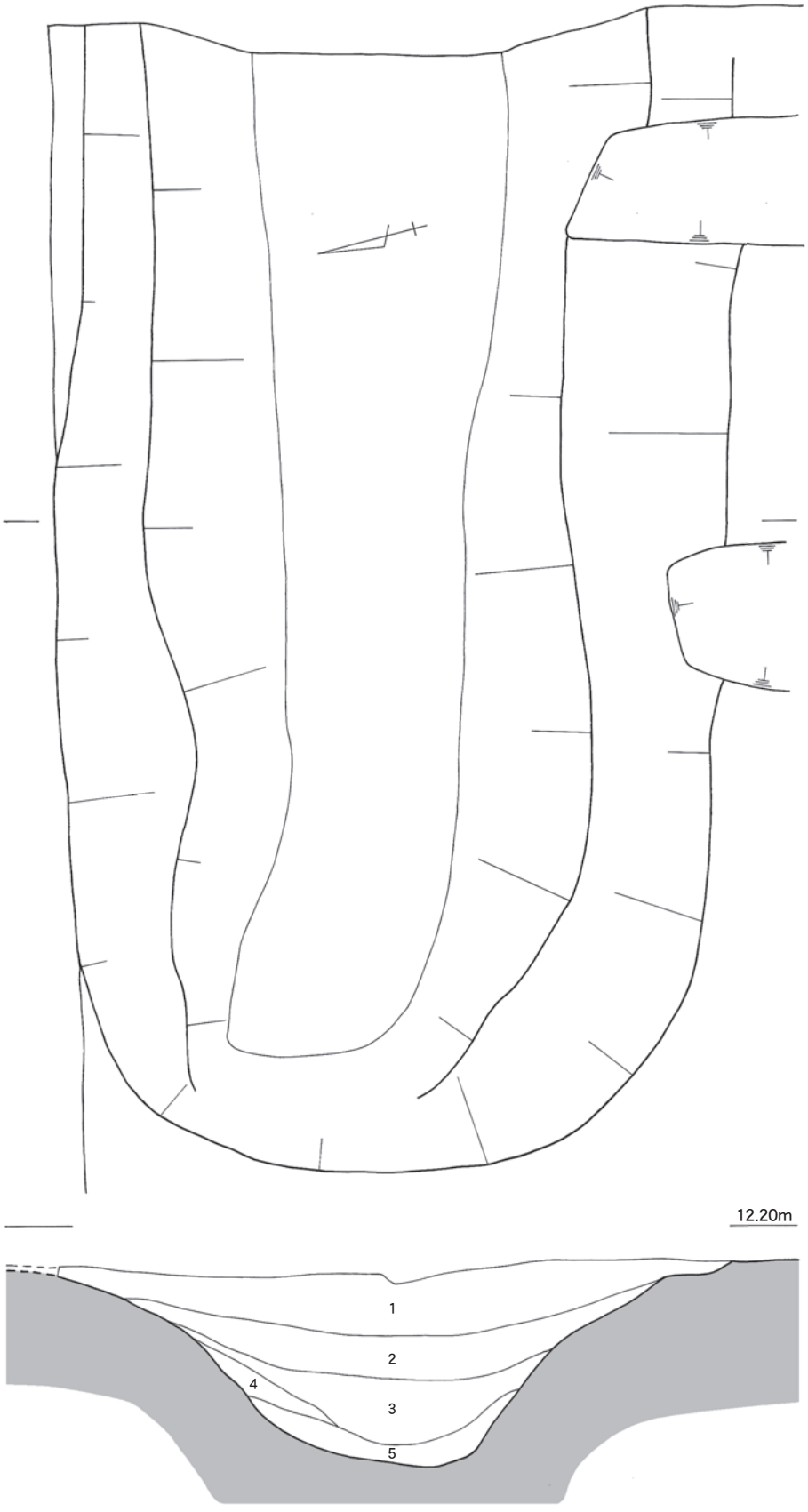
埋没状況　埋土は、暗灰色シルト１層からなる（第 72 図）。その層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（図版５）。

土師器　甕の体部片が出土している。



第 72 図　ＳＫ 08



1. 暗灰色極細砂
2. 暗褐色シルト質極細砂
3. 暗灰色シルト質極細砂～シルト
4. 暗黄褐色シルト質極細砂
5. 黄褐色

第 73 図　ＳＫ 09

須恵器　杯Ｈ（117 ～ 119）・杯Ｈ蓋・高杯（120）が出土している。高杯は、脚部を中心に残存する。長方形透かしを有するもので、当初は３箇所に開けられていたものと考えられる。

時　期　出土遺物から判断して、古墳Ｉ期古相と考えられる。

ＳＫ 09（写真図版 18）

検出状況　調査区北東隅で検出した（第 65 図）。ＳＫ 10 と切り合い関係にあり、ＳＫ 10 を切っている。ただし、東周側は調査区外へ拡がっている。溝状遺構の可能性も否定できないが、本書では土坑として報告する。

形状・規模　平面形は溝状をなす（第 73 図）。ほぼ東西方向に主軸を取り、その規模は長軸方向で 5.20 ｍ検出し、その直交方向で３ｍを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは 92㎝である。

埋没状況　埋土は、５層からなる（第 73 図）。各層とも 10㎝以下の礫を含み、その層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　弥生土器と須恵器が出土している（図版５）。

弥生土器　壺（123）・底部（122）・甕が出土している。いずれも５層（第 73 図）から出土している。122 は、鉢の可能性が考えられる。甕については、小片のため図化できなかったが、口縁部片が出土している。いずれも中期後半に位置付けられるものである。

須恵器　杯Ｈ蓋（121）・杯Ｈ・高杯・甕が出土している。いずれも、３層以上から出土している。121 は、天井部がヘラ切り後未調整である。天井部と口縁部の境にはヘラ削りが施されている。甕は体部片が出土しているが、全体的に焼成が不十分である。

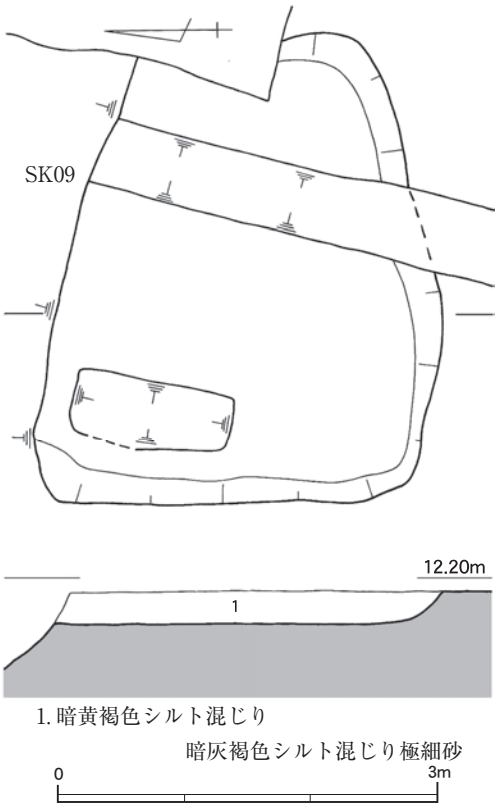
時　期　出土遺物から判断して、弥生時代Ｉ期－３には掘削され、古墳Ｉ期新相に埋没したものと考えられる。

ＳＫ 10

検出状況　調査区北東隅で検出した（第 65 図）。ＳＫ 09 と切り合い関係にあり、本遺構の北側の大半がＳＫ 09 に切られている。また、北東隅は調査区外に拡がり、検出できたのは全体の約 1/2 程度である。さらに、一部が後世の撹乱を受けている。

形状・規模　平面形は方形もしくは長方形をなすものと考えられる（第 74 図）。ほぼ東西方向に主軸を取り、その規模は長軸方向で 3.72 ｍを測り、その直交方向は 3.10 ｍを検出している。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは 27㎝である。

埋没状況　埋土は、暗黄褐色シルト混じり暗灰褐色



第 74 図　ＳＫ 10

シルト混じり極細砂１層からなる（第 74 図）。当層は、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（図版５）。

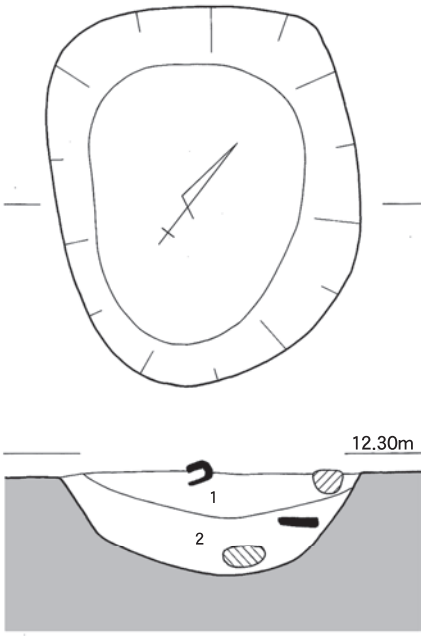
土師器　甕の体部片が出土している。外面は、ハケ調整により仕上げられている。

須恵器　杯Ｈ（124）・杯Ｈ蓋・高杯・甕が出土している。高杯は、脚端部が残存する。甕は体部片が出土している。

時　期　出土遺物から判断して、古墳Ⅰ期古相と考えられる。

ＳＫ 11

検出状況　調査区北西部北端で検出した（第 65 図）。ＳＫ 01 の南側に位置する。一部柱穴と接しているが、他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。



1. 暗褐灰色シルト混じり細砂
2. 黄褐色砂混じり黒灰色砂質シルト

第 75 図　ＳＫ 11

形状・規模　平面形はやや歪んだ楕円形をなす（第 75 図）。ほぼ北西－南東方向に主軸を取り、その規模は長軸方向で 1.00 ｍ、その直交方向で 80㎝を測る。横断面は逆台形をなすが、底部は平坦ではない。最深部における検出面からの深さは 27㎝である。

埋没状況　上から、暗褐灰色シルト混じり細砂、黄褐色砂混じり黒灰色砂質シルトの２層からなる（第 75 図）。両層とも、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（図版５）。

土師器　鉢（129・131）・椀（130）・甑（128）・甕が出土している。

甑は口縁部を中心に残存し、わずかに内傾する端面を有する。

鉢の 129 は、椀に近い形態をなし、内外面がヘラミガキにより仕上げられていることから、高杯の可能性も考えられる。端部に横ナデ調整が加えられ、わずかに外反しながら薄く仕上げられている。131 は、全体的に磨滅が著しく、調整は観察できない。高杯・椀の可能性も考えられる。

椀の 130 はほぼ完存する個体である。外面は横方向、内面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。特に、内面は暗文状に施されている。また、外面のヘラミガキは、ヘラ削り・ハケ調整後に施されている。

須恵器　杯Ｈ蓋（127）・甕（125）・壺（126）が出土している。

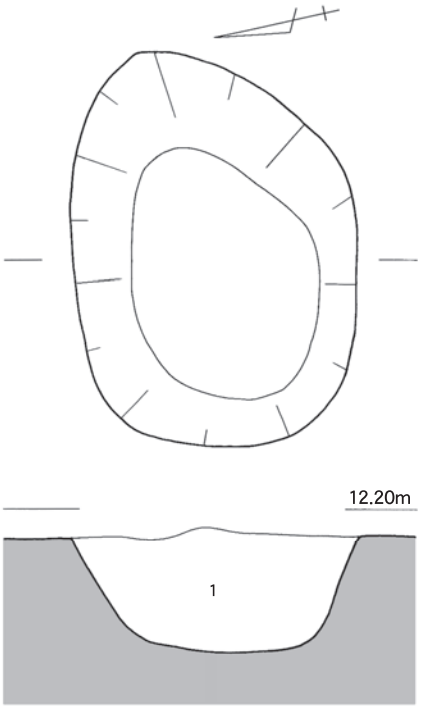
甕は、口縁部を中心に残存し、端部は回転ナデ調整により上方にわずかにつまみ上げられている。壺は、提瓶の体部片である。把手状の突起が認められ、外面は平行叩きにより成形されている。内面には当具痕が認められる。外面には、灰の釉着が認められる。

時　期　出土遺物から判断して、古墳Ⅱ期と考えられる。

ＳＫ 12

検出状況　調査区北西部北端で検出した（第 65 図）。Ｐ 06・ＳＫ 02 の北側、ＳＫ 04 の北西側に位置する。ＳＫ 03 と切り合い関係にあり、ＳＫ 03 を切っている。

形状・規模　平面形はやや歪んだ隅丸長方形をなす（第 76 図）。ほぼ東西方向に主軸を取り、その規模は長軸方向で 1.02 ｍを測り、その直交方向で 75㎝を測る。横断面は深い逆台形をなし、底部は平坦面をなす。最深部における検出面からの深さは 33㎝である。



第 76 図　ＳＫ 12

埋没状況　黒褐色シルト混じり極細砂１層からなる（第 76 図）。当層は、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器・土師器・瓦が出土している（図版５）。

土師器　甕の体部片が出土している。

須恵器　甕の体部片が出土している。

瓦　丸瓦（133）が出土している。広端部を中心に残存し、凹面には布目が認められる。広端部はヘラにより切り離され、側面もヘラにより切り離され面取りがされている。凸面はナデ調整により仕上げられている。

時　期　出土遺物から判断して、古墳Ⅱ期と考えられる。

ＳＫ 13

検出状況　調査区西半部で検出した（第 65 図）。ＳＫ 05 の南西側に位置し、ＳＨ 05 と平面的に一致する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形をなす。ほぼ南北方向に主軸を取り、その規模は長軸方向で 65㎝を測り、その直交方向で 45㎝を測る。横断面は浅い逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは 13㎝である。

出土遺物　弥生時代中期の底部片（132）が出土している（図版５）。外面の一部は被熱により赤変している。甕の可能性が考えられる。

時　期　出土遺物から判断して、弥生Ⅰ期と考えられる。

ＳＫ 14

検出状況　調査区東半部南側で検出した（第 65 図）。ＳＫ 07 の北東側に位置する。ＳＤ 02 と切り合い関係にあり、ＳＤ 02 を切っている。このため、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形は長方形をなす。ほぼ東西方向に主軸を取り、その規模は長軸方向で 80㎝を測り、その直交方向で 47㎝を測る。横断面は浅い逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは 12㎝である。

出土遺物　土師器の堝（134）が出土している（図版５）。完形に復元できた個体で、口径 28㎝、器高 16.3㎝と比較的大型である。鉢形の体部に口縁部が屈曲し、底部は平底傾向にある。また、底部の器壁が厚く仕上げられている。体部中位外面には煤の付着が認められる。

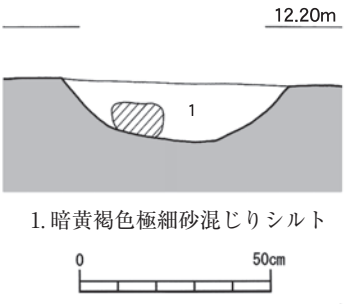
時　期　出土遺物から判断して、古墳Ⅰ期と考えられる。

７．溝

はじめに　５条（ＳＤ 01 ～ＳＤ 05）検出されている（第 65 図）。

ＳＤ 01（写真図版 19）

検出状況　調査区東半部南側で検出した（第 65 図）。中央住居跡群の南東側に位置する。ほぼ南北方向に直線的にのびる溝で、北端は後世の撹乱を受け、南端は調査区外にのびている。また、ＳＤ 02 と切り合い関係にあり、ＳＤ 02 を切っている。



第 77 図　ＳＤ 01 断面

形状・規模　検出した長さは 5.50 ｍである。検出面における幅は 60㎝を測り、横断面は逆台形をなす（第 77 図）。底部はほぼ平坦で、最深部における検出面からの深さは 15㎝である。

埋没状況　埋土は、暗黄褐色極細砂混じりシルト１層からなる（第 77 図）。層中に礫を含み、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（図版５）。

土師器　甕（136）と高杯（137）が出土している。

甕は、口縁部から体部にかけて残存する。比較的小型に分類されるもので、丸胴タイプの甕と考えられる。体部内面はヘラ削りにより仕上げられている。高杯は脚部が残存する。接合部中央には、径３㎜の孔が認められ、脚部の絞り成形と関係するものと考えられる。

須恵器　甕（135）と杯Ｈ蓋が出土している。甕は底部を除いてほぼ完存する個体である。倒卵形の体部に口縁部が外反し、外傾する端面が形成されている。体部は叩き成形後、カキメが施されている。

杯Ｈ蓋については天井部のみ残存し、ヘラ削りが施されている。

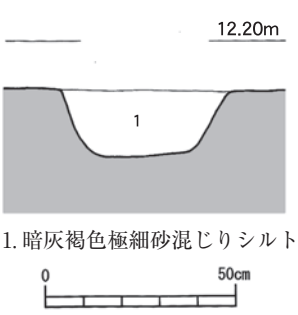
時　期　出土遺物およびＳＤ 02 との切り合い関係から、古墳Ⅰ期新相と考えられる。

ＳＤ 02

検出状況　調査区東半部で検出した（第 65 図）。中央住居跡群の東側に位置する。南北方向から東西方向にかけて屈曲し、直線的にのびる溝である。西端はＳＫ 07 とＳＤ 01 に切られ、北端は調査区外にのびている。また、ＳＤ 03 と切り合い関係にあり、ＳＤ 03 に切られている。

形状・規模　検出した長さは 11 ｍである。検出面における幅は 45㎝を測り、横断面は逆台形をなす（第 78 図）。底部はほぼ平坦で、最深部における検出面からの深さは 17㎝である。また、底部の標高は、西端が 11.88 ｍ、北端が 11.92 ｍとほぼ一定している。

埋没状況　　埋土は、暗灰褐色極細砂混じりシルト１層からなる（第 78 図）。層中に礫を含み、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。



第 78 図　ＳＤ 02 断面

出土遺物　　須恵器と土師器が出土している（図版６）。

土師器　　甕と甑（140）が出土している。甑は把手のみの出土で、舌状をなす。ユビオサエとナデ調整により仕上げられている。甕は、体部片が出土している。

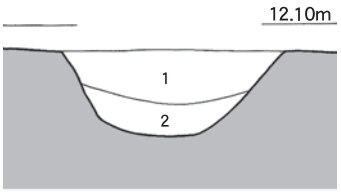
須恵器　　杯Ｈ蓋（138）・杯Ｈ（139）・甕（141）が出土している。

杯Ｈ蓋の天井部の 2/3 は回転ヘラ削りが施され、ヘラ記号が認められる。甕は、口縁部を中心に残存する。口縁端部は肥厚し、断面方形をなす。体部から口縁部にかけて叩き整形後、口縁部までカキメが施されている。

時　　期　　出土遺物から判断して、古墳Ⅰ期古相と考えられる。

ＳＤ 03（写真図版 19）

検出状況　　調査区東半部で検出した（第 65 図）。中央住居跡群の東側、東側住居跡群の西側、ＳＢ 08・ＳＢ 09 の南側、ＳＫ 08 の北側に位置する。北西方向から南東方向にかけてわずかに弧状をなし、北西端は調査区内で収束し、他端は後世の撹乱を受け途切れている。北西端はＳＤ 02 と切り合い関係にあり、ＳＤ 02 を切っている。



第 79 図　ＳＤ 03 断面

形状・規模　　検出した長さは 10 ｍである。検出面における幅は 58㎝を測り、横断面は逆台形をなす（第 79 図）。また、最深部における検出面からの深さは 23㎝を測り、底部の標高は 11.88 ｍとほぼ一定している。

埋没状況　　埋土は、上から、暗灰色シルト質極細砂、暗灰色砂混じり暗黄褐色極細砂の２層からなる（第 79 図）。特に下層については、自然に堆積し土壌化したものと考えられる。

出土遺物　　須恵器と土師器が出土している（図版６）。

土師器　　脚部片（147）と高杯が出土している。脚部全体の器形は不明である。高杯は、接合部片が出土している。

須恵器　　杯Ｈ蓋（142・143）・杯Ｈ（144・145）・壺（146）が出土している。

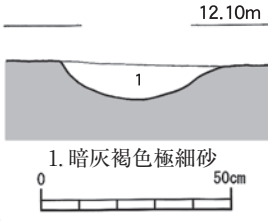
杯Ｈ蓋の 143 の天井部は回転ヘラ削り後ナデ調整が加えられている。また、144 の底部はヘラ切り後弱いヘラ削りが加えられている。146 の壺は、横瓶の口縁部と考えられる。

時　　期　　出土遺物から判断して、古墳Ⅰ期新相と考えられる。

ＳＤ 04（写真図版 19）

検出状況　　調査区東半部で検出した（第 65 図）。東側住居跡群の西側、ＳＫ 08 の南側に位置する。北西方向から南東方向にかけて直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。

形状・規模　検出した長さは３ｍである。検出面における幅は42㎝を測り、横断面はやや深い皿形をなす（第80図）。また、最深部における検出面からの深さは９㎝を測り、底部の標高は11.93ｍとほぼ一定している。



第80図　ＳＤ04断面

埋没状況　埋土は、暗灰褐色極細砂１層からなる（第80図）。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土遺物から時期を判断することは困難である。このため、埋土の特徴から判断して、古墳時代と考えられる。

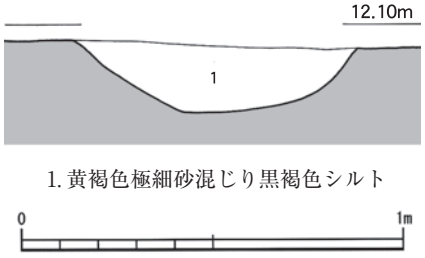
ＳＤ05（写真図版19）

検出状況　調査区南東隅で検出した（第65図）。Ｃ区で検出したＳＤ08に繋がるものと考えられる。

形状・規模　検出した長さは5.20ｍである。検出面における幅は74㎝を測り、横断面は逆台形をなす（第81図）。また、最深部における検出面からの深さは18㎝を測り、底部の標高は東端部で11.93ｍ、西端部で11.99ｍと、ほぼ同じである。

埋没状況　埋土は、黄褐色極細砂混じり黒褐色シルト１層からなる（第81図）。

出土遺物　土師器の甑（148）が出土している（図版６）。把手のみ残存し、舌状をなす。ユビオサエとナデ調整により仕上げられている。



第81図　ＳＤ05断面

時　　期　出土遺物から判断して、古墳時代と考えられる。

８．包含層

はじめに　遺構には伴わないが、比較的良好な資料が出土している。これらの資料について、包含層出土遺物として報告する。出土資料としては、土器・石製品・金属製品が出土している。

土器　弥生土器・須恵器・土師器・瓦が出土している（図版６・７）。

弥生土器　壺・甕・底部・脚部が出土している。

壺　底部片（149～151）が出土している。いずれも、外面がヘラミガキにより仕上げられていることから、壺と判断したものである。149については、胎土の特徴から、中期初頭に位置付けられるものである。

甕　５個体（152～156）出土している。完存するものはなく、口縁部片と底部片からなる。ただし、153については、鉢の可能性も考えられる。

脚部　157と158の２個体が出土している。高坏か鉢の脚部と考えられる。157は、脚部の裾部で、く字形に短く屈曲する。内面はヘラ削り、外面はヘラミガキにより仕上げられている。高坏の可能性が考えられる。158は、裾部に対して接合部が広径の脚部である。高坏もしくは台付鉢の可能性が考えられる。

土師器　高坏（159）・甕（160）・鉢（161）が出土している。

高坏は、脚部が残存する。外面はハケ調整、内面はヘラ削りにより仕上げられている。甕は、長胴タイプに分類されるもので、口縁部は受口状をなす。体部は内外面ともハケ調整によ

り仕上げられている。鉢は、半球形の体部に対して口縁部が内湾する。全体的に剥離が顕著である。

須恵器　杯蓋（162）・杯Ｈ蓋（163 ～ 167）・杯Ｈ（168 ～ 174）・杯Ａ（175）・高杯（176）・壺（177 ～ 179・181・182）・鉢(180・183)が出土している。

杯蓋の 162 は、ＳＨ 07 から出土したものである。しかし、他の土器と比較して古く位置付けられるため、包含層出土土器として扱うものである。天井部の大半がヘラ削りにより仕上げられ、ＴＫ 47 型式に位置付けられる。

杯Ａ（175）は、底部に対して体部から口縁部にかけて大きく内湾する。口縁端部は薄く仕上げられている。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整により仕上げられている。

高杯（176）は、杯部が残存する。体部と口縁部の境外面が、２条の突帯状をなしている。接合部下端には、長方透かしの一部が認められる。内面には薄く自然釉が付着している。

壺（177）は、瓶の可能性が考えられる。体部中位外面に１条の沈線が描かれている。体部下端外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。178 は小型の短頸壺で、完形に復元できた個体である。底部はヘラにより切り離されている。また、体部下端外面はヘラ削りにより仕上げられている。179 は、大型の短頸壺である。底部から体部にかけては、回転ヘラ削りにより仕上げられている。また、頸部付近には重ね焼痕が認められる。181 は、口縁部を中心に残存し、頸部から口縁部にかけて大きく外反する。口縁端部はわずかに肥厚する。体部上端には、叩きが格子状に認められる。182 は、181 と同様の形態的特徴をなすが、口縁部には肥厚は認められない。

２個体の鉢（180・183）は、法量的には異なるが、基本的に同形態をなす。体部から口縁部にかけて直線的にのび、口縁部は断面長方形に肥厚する。外面に釉の付着が認められる。ただし、183 については、体部外面にカキメが施され、甕の可能性も考えられる。

瓦　184 の１点が出土している。玉縁を有するタイプで、玉縁を中心に残存する。残存長は 15 ㎝を測り、玉縁長は 5.5㎝である。凹面には布目痕が認められ、凸面はナデ調整により仕上げられている。玉縁端部はヘラ削りにより仕上げられ、側面はヘラ切りにより切り離され、内側は面取りされている。

石製品　石鏃（Ｓ３）と削器（Ｓ６）が出土している（図版７）。

Ｓ３は、平基式に分類されるサヌカイト製打製石鏃で、完存する。全長 2.27㎝を測り、最大幅は 1.37㎝である。中央部の厚さは 2.3㎜である。0.98 ｇ。

Ｓ６は、サヌカイト製で、全長 4.9㎝、幅 4.07㎝を測る。中心部の厚さは７㎜を測る。12.18 ｇ。

金属製品　不明品が２点（Ｍ１・Ｍ２）出土している（図版８）。

Ｍ１は、刀子状の製品の一部と考えられ、2.85㎝残存する。幅は 1.78㎝を測り、横断面はレンズ状をなし、中央部の厚さは 2.5㎜を測る。

Ｍ２は、鉄釘の一部と考えられる。3.38㎝残存し、断面は 1.48㎝× 8.6㎜の長方形をなす。

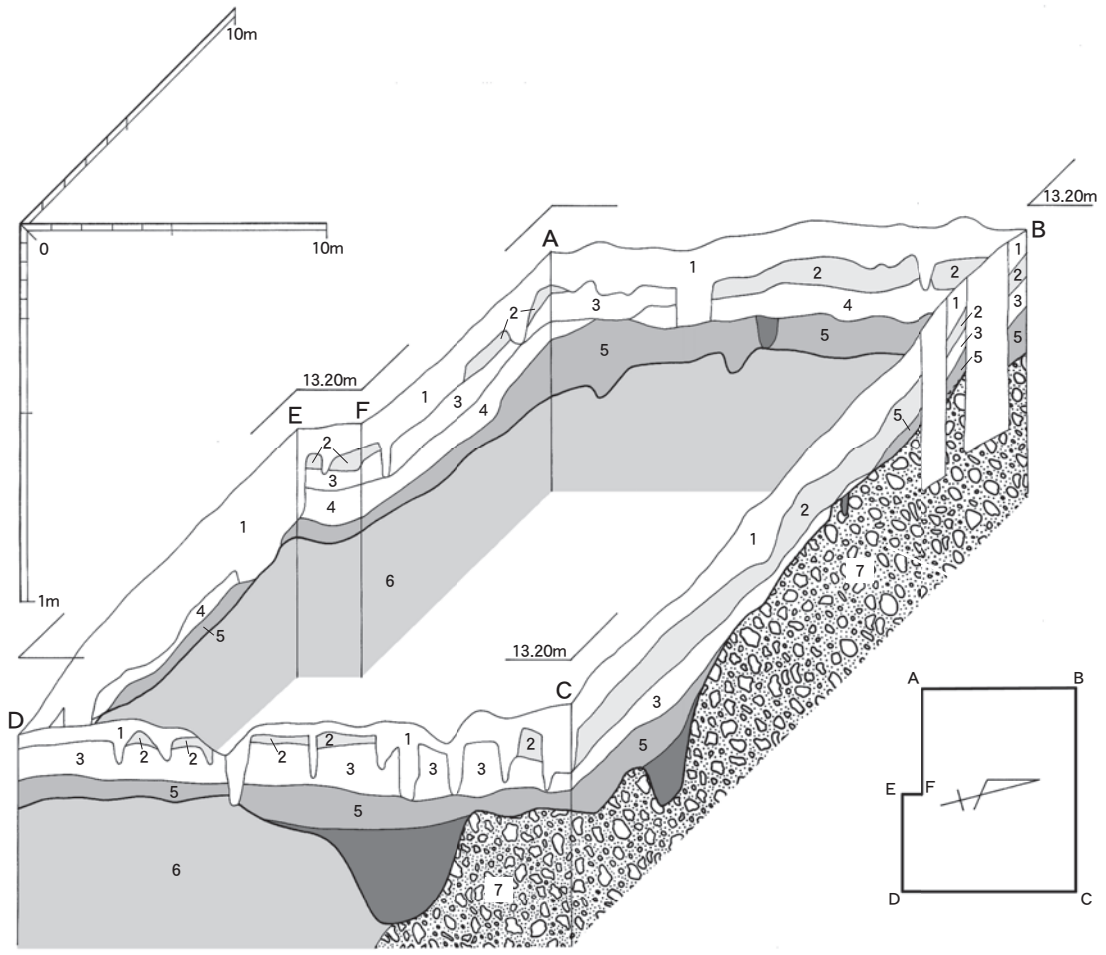
第３節　Ｂ区の調査

１．概要

はじめに　Ａ区同様、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝を検出している（第 83 図）。ただし、遺構の密度はＡ区程ではなく、一部を除いて切り合い関係もわずかである。

基本土層　当地区の基本土層は、基本的にはＡ区とほぼ同じである。上から、整地層、旧耕作土層、床土層、土壌層、基盤層からなる（第 82 図）。

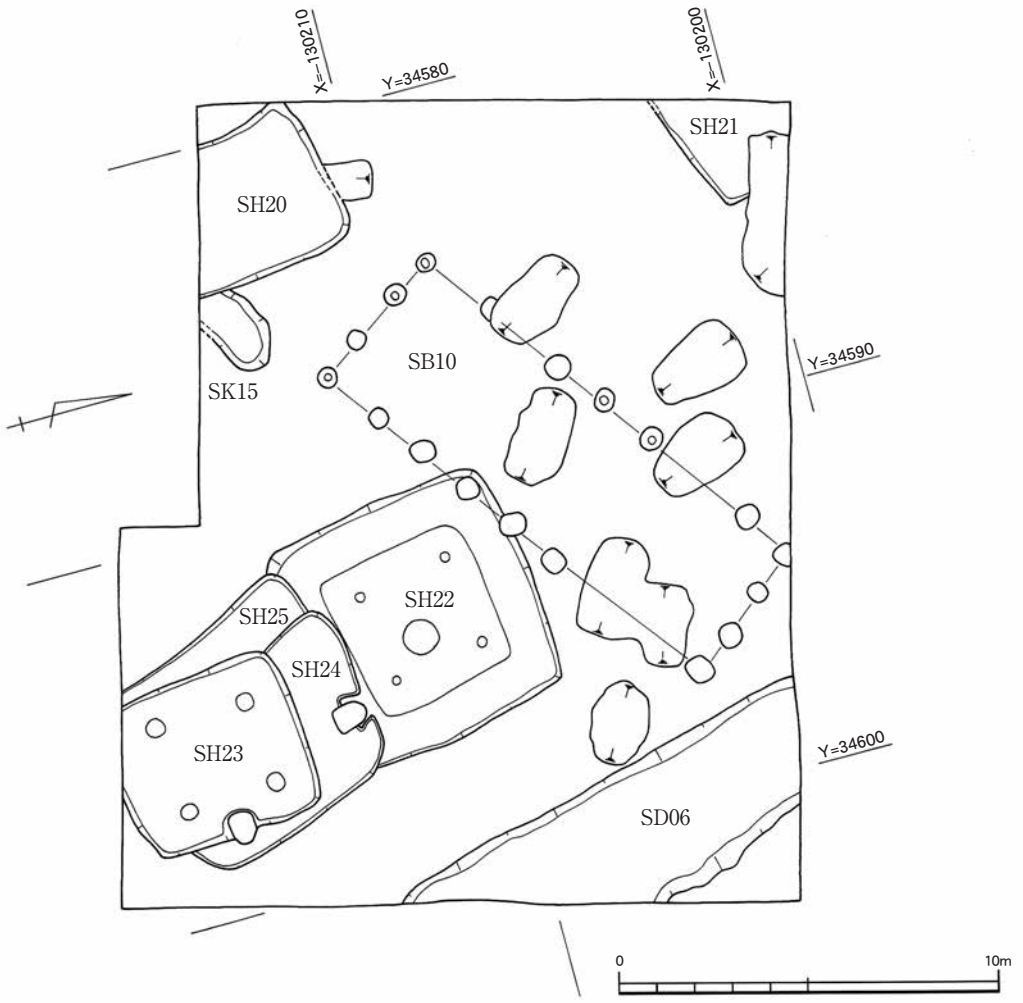
整地層に関しては、全域で認められるものの、Ａ区ほど顕著ではなく、Ａ区に近い南東部を除いては 20㎝程である。現地表面の標高は、13.00 ｍである。旧耕作土層に関しては、調査区南東部を中心に削平を受けている。基本的には、確認した範囲においては、レベル差は認められない。土壌層に関しては、大きく２層からなるが、下層についてはＡ区より土壌化が顕著である。基盤層中からは中期初頭の土器(309 ～ 311)が出土している(図版 13)。



1. 盛土層
2. 旧耕作土
3. 黄灰色シルト混じり極細砂（床土）
4. 暗灰色シルト混じり極細砂（土壌層）
5. 暗褐色シルト混じり極細砂（土壌層）
6. 黄褐色極細砂（基盤層）
7. 砂礫層（基盤層）

旧耕作土
土壌層
遺構

第 82 図　Ｂ区基本土層



第 83 図　B区　平面図

基盤層は、A区同様、極細砂からなるが、北部を中心に礫層が認められる。調査区全域で大きなレベルの差は認められない。また、極細砂の堆積については、粒度観察から、東側から西側への堆積が認められる。

遺構の検出　遺構は、断面観察においては、土壌層上面と下面で検出している。ただし、上面から切り込む遺構はわずかであることから、土壌層下面まで掘り下げ、この１面のみで検出している（第 84 図）。その標高は 12.20 mと、A区よりわずかに高くなっている。

２．竪穴住居跡

はじめに　計６棟（ＳＨ 20 ～ＳＨ 25）検出した。ＳＨ 20 とＳＨ 21 が単独で検出されている以外は、中央部で４棟がまとまって検出されている（中央住居跡群：第 87 図）。４棟は複雑な切り合い関係を示し、ほぼ全容をとどめるのはＳＨ 22 とＳＨ 23 の２棟に限られる。

第 84 図　B区の調査

ＳＨ 20（写真図版 22）

検出状況　調査区南西部で検出した（第 83 図）。他の遺構との切り合い関係は認められないが、住居跡南部から西部にかけては調査区外に拡がっている。また、住居跡中央部も後世の撹乱を受けている。さらに、住居跡北辺肩部も撹乱を受けている。このため、検出できたのは、全体の約 1/2 強である。

形状・規模　平面形は、長方形もしくは方形をなすものと考えられる（第 85 図）。南北方向に主軸をとり、北辺で 3.60 m、東辺で 4.45 m検出している。住居跡中央部床面における検出面からの深さは 20㎝を測り、住居跡中央部における床面の標高は 12.02 mである。

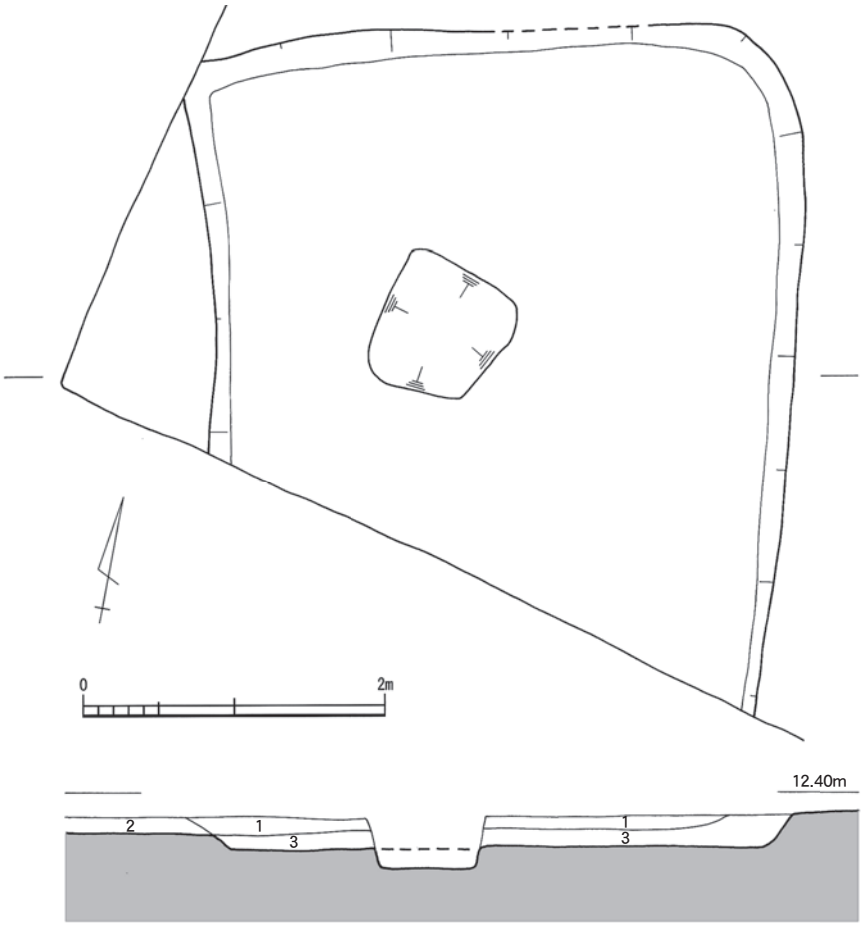
付属施設　高床部を検出した。

高床部　住居跡西側で検出された。検出した限りでは、西辺に平行するものと考えられる。最大幅１mを測り、床面との段差は 10㎝である。

埋没状況　３層からなる（第 85 図）。３層ともその層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　弥生土器の壺と甕が出土している（図版９）。

壺　185 の１個体が出土している。広口壺の体部片で、櫛描直線文と櫛描波状文のセットが３セット認められる。櫛描直線文と櫛描波状文の原体は同じで、７条からなる。



1. 暗褐色シルト混じり細砂～中砂　2. 暗黄褐色シルト混じり極細砂～細砂
3. 暗灰褐色シルト混じり細砂～中砂

第 85 図　ＳＨ 20

この他、186 の底部についても、壺の底部と考えられる。内外面とも磨滅が著しく、調整を詳細に観察することは困難である。

甕　187 と 188 の２個体が出土している。188 については、壺の可能性も考えられる。

時　期　出土土器から、弥生Ⅰ期－２に位置付けられる。

ＳＨ 21（写真図版 23）

検出状況　調査区北西部で検出した（第 83 図）。他の遺構との切り合い関係は認められないが、住居跡の大半は調査区外に拡がっている。検出できたのは東隅から南東辺にかけてである。また、住居跡北東部は後世の撹乱を受けている。このため、検出できたのは、住居跡の一部に限られる。

形状・規模　平面形は、長方形もしくは方形をなすものと考えられる（第 86 図）。北西－南東方向に主軸をとり、南東辺で 3.20 ｍ検出している。その直交方向については、少なくとも３ｍ以上と推定される。住居跡中央部床面における検出面からの深さは 17㎝を測り、住居跡中央部における床面の標高は 12.24 ｍである。

付属施設　全く検出されていない。

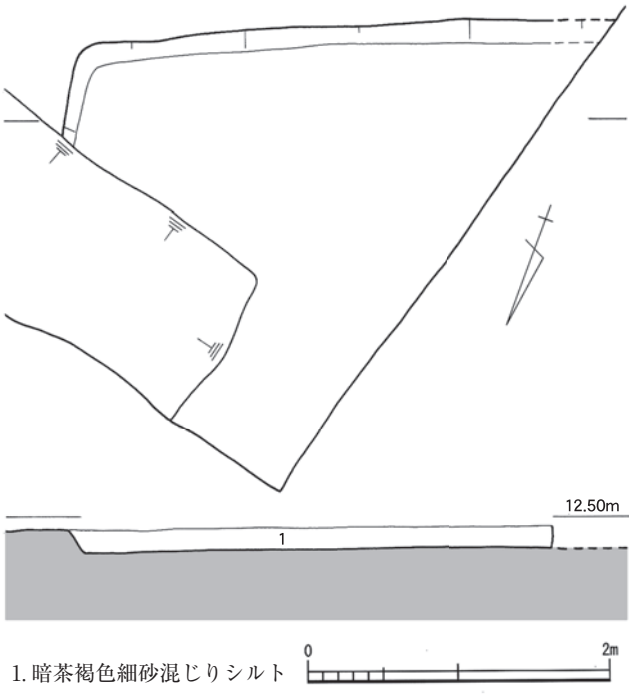
埋没状況　暗茶褐色細砂混じりシルト１層からなる（第 86 図）。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している。

土師器　杯Ｈ蓋と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。甕は、体部片が出土している。

須恵器　甕と高杯が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。甕は体部片が、高杯は脚部片が出土している。

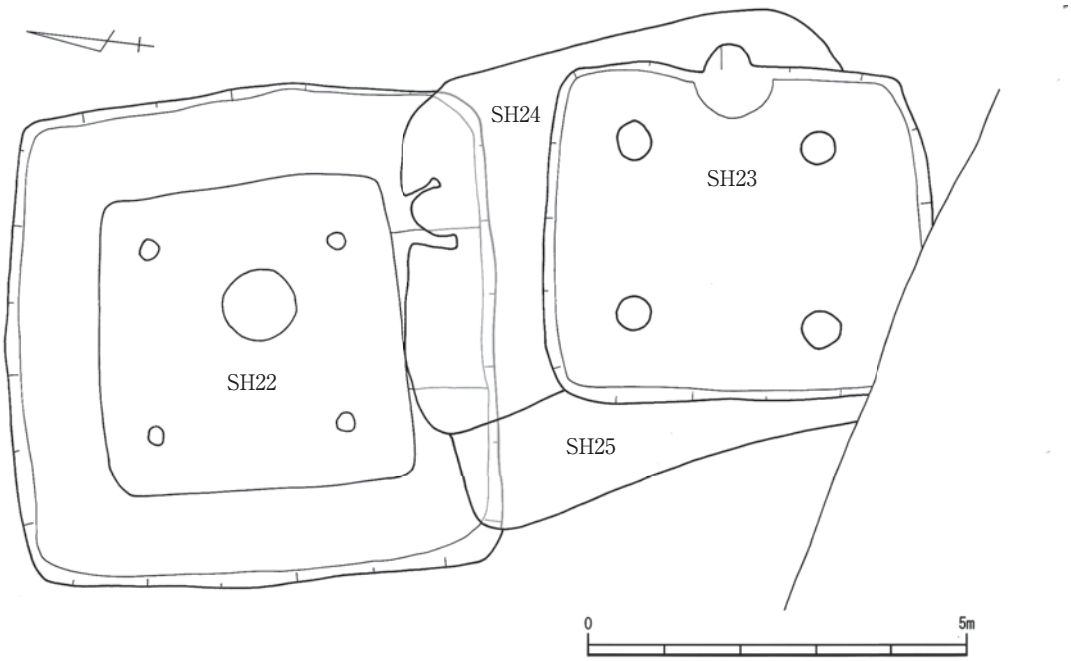
時　期　出土土器から、古墳Ⅰ期に位置付けられる。



第 86 図　ＳＨ 21

ＳＨ 22（写真図版 23 ～ 26）

検出状況　調査区中央部で検出した（第 83 図）。ＳＢ 10 の南側、ＳＤ 06 の西側に位置する。ＳＨ 24・ＳＨ 25 と切り合い関係にあり、両住居跡に切られている。ただし、ＳＨ 24 の検出面からの深さが浅いため、本住居跡の南側肩部がわずかに削られた程度である。この他、北側肩部の一部がＳＢ 10 の柱穴に切られているが、基本的には完存する。



第 87 図　Ｂ区中央住居跡群

形状・規模　平面形は、方形をなす（第 90 図）。四辺ともほぼ平行・直角関係にあり、整った正方形をなす。ほぼ南北方向に主軸をとり、南北方向で 6.45 ｍ、東西方向で 6.65 ｍを測る。両者を基準とした面積は 42.89㎡である。また、住居跡中央部床面における検出面からの深さは 60 ㎝を測り、住居跡中央部における床面の標高は 11.77 ｍである。

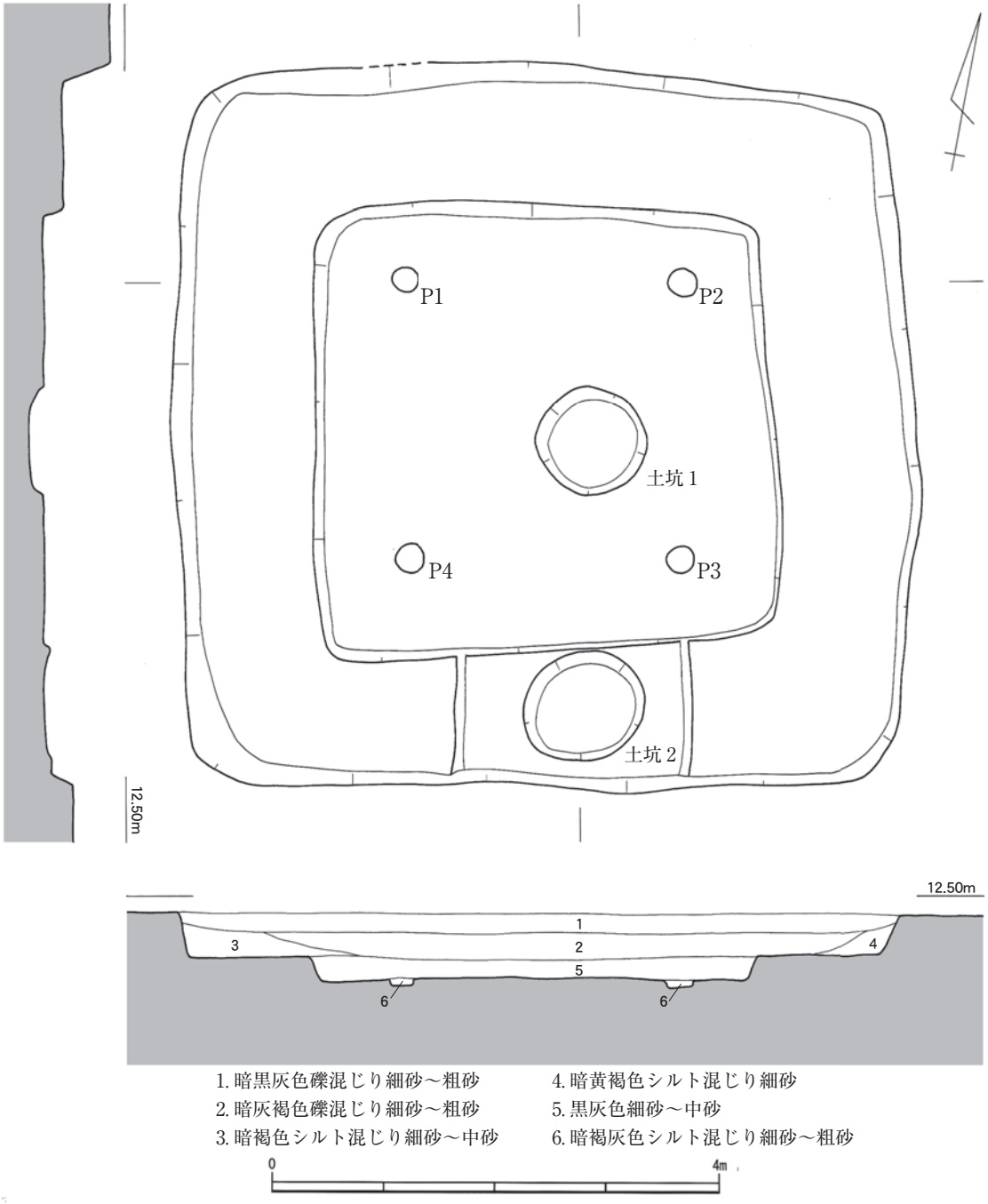
第 88 図　ＳＨ 22 の調査(1)

第 89 図　ＳＨ 22 の調査(2)

付属施設　主柱穴、土坑２基(土坑１・土坑２)、高床部を検出している。

主柱穴　４穴(Ｐ１～Ｐ４)検出している。４穴とも円形をなし、床面における規模はほぼ同規模で、25㎝を測る。また、床面からの深さは、４穴とも５㎝である。柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間・Ｐ２－Ｐ３間が 2.48 ｍ、Ｐ３－Ｐ４間・Ｐ１－Ｐ４間が 2.50 ｍ、とほぼ一定している。また、４穴の位置関係は、整った正方形をなしている。ただし、４穴とも柱痕を検出することはできなかった。

高床部　住居跡南側中央部を除いて、住居跡の輪郭に沿って全周する。地山を削り込んで造られ、床面との比高は 20㎝を測る。また、上面における幅は 1.10 ｍと一定している。南側で途切れている幅は 2.10 ｍである。また、高床部が途切れた箇所は、床面より約５㎝高い平坦面となっている。

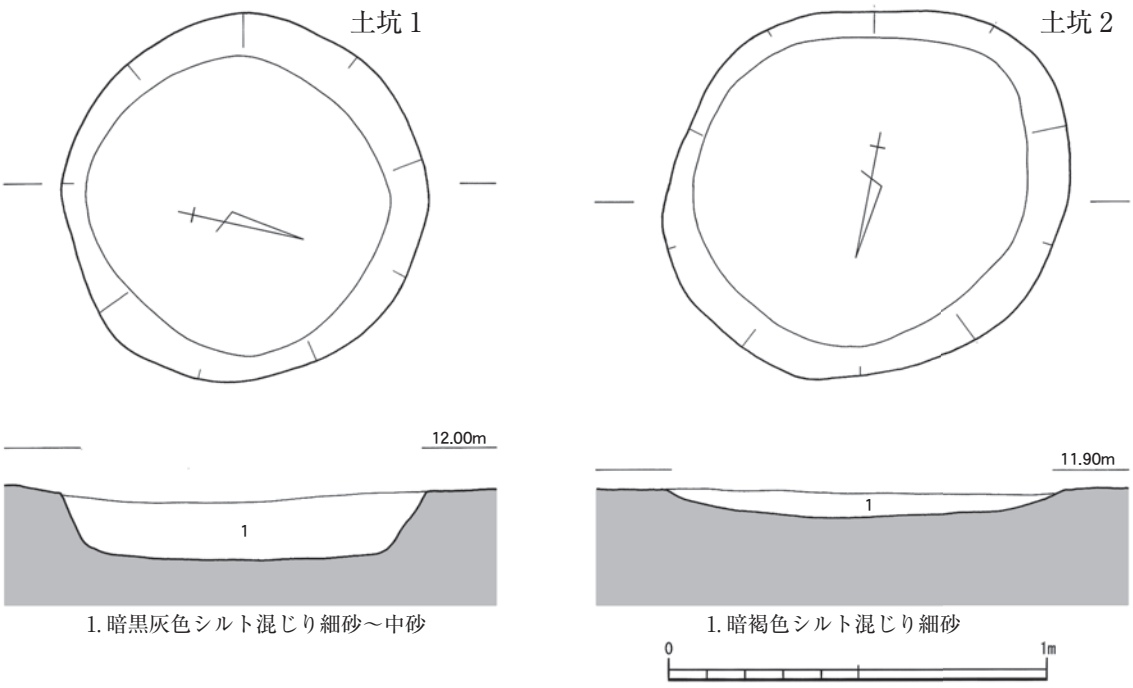


第 90 図　ＳＨ 22

土坑１　　住居跡中央部に位置する（第 90 図）。主柱穴で囲まれたなかの中央部ではなく、やや東側へ偏っている。平面形は、住居跡同様、主軸をほぼ南北方向にとる円形をなす（第 91 図）。その規模は、南北方向・東西方向ともに 97㎝を測る。横断面は逆台形をなし、底部はほぼ平坦をなす。最深部における床面からの深さは、20㎝である。埋土は、暗黒灰色シルト混じり細砂～中砂１層からなる。人為的に埋められている。

土坑内からは、鉢(222)と高坏(226)が出土している。

土坑２　　高床部が途切れた箇所の中央部に位置する（第 90 図）。平面形はほぼ円形をなすが、土坑１より全体的に歪んでいる（第 91 図）。東西方向に主軸をとり、その規模は 1.07 ｍを測る。また、その直交方向で 96㎝を測る。横断面は浅い皿形をなし、最深部における検出面から



第 91 図　ＳＨ 22 内土坑

の深さはわずか７㎝である。埋土は､暗褐色シルトまじり細砂１層からなる。土坑内からは、土器の小片が出土している。

埋没状況　５層からなる（第 90 図)。いずれも、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　弥生土器が多量に出土している。

出土位置　平面的に出土位置を記録できたものは、住居跡北西隅と南側の高床部が途切れた箇所である（第 92 図)。特に、後者の南西隅から出土した 189 は、ほぼ完形に近い状態での出土である (写真図版 24)。この高床部の途切れた箇所からは、壺 (192)・甕 (204)・鉢 (217・218) が出土している。他に、土坑１から鉢(222)と高坏(226)が出土している。

北西隅から、壺(191)・甕(202・205・206)・高坏(237)・製塩土器(224)が出土している(第 92 図)。このほか、全体的に高床部上面から出土した土器が多い傾向を、指摘することができる。

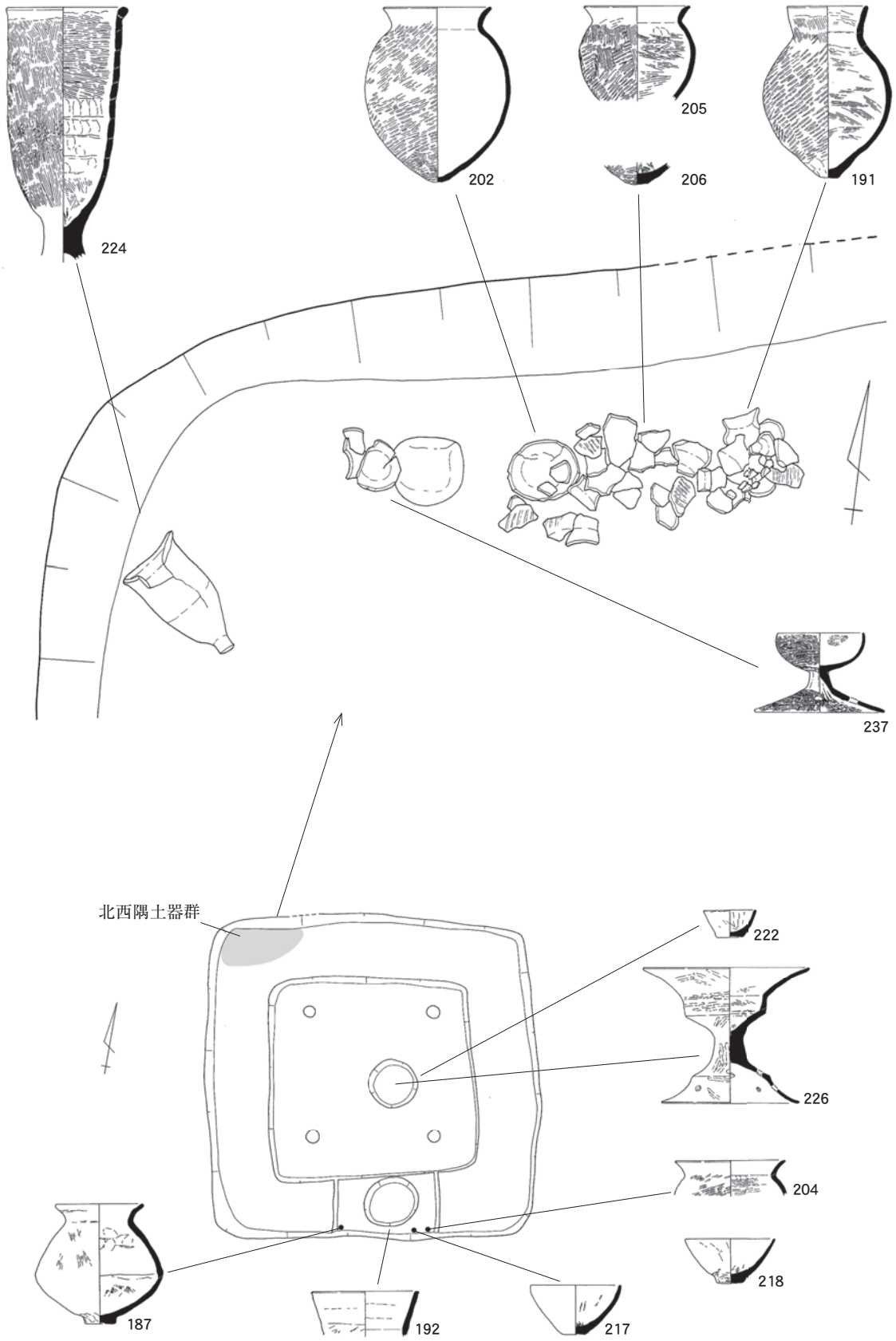
出土器種　壺・甕・鉢・製塩土器・高坏・器台・蓋が出土している(図版９・10)。

壺　広口壺 (189・195)・複合口縁壺 (190)・直口壺 (191 ～ 194)・短頸壺 (196)・底部 (197 ～ 200)が出土している。

広口壺の 189 は、ほぼ完存する。算盤玉形の体部に対して、口縁部がく字形に外反する。体部内外面はハケ調整により、口縁部は横ナデ調整により、仕上げられている。底部は、中央部がわずかに窪み、木の葉状の圧痕が認められる。また、体部外面下半は被熱により赤変し、煤の付着が認められる。

195 は口縁部を中心に残存し、直立する頸部に対して、口縁部が外方へ屈曲する。内外面とも磨滅が著しく、調整は観察できない。

複合口縁壺は、190 の１個体が出土している。口縁部の上半部のみ残存し、外面には櫛描



第 92 図　ＳＨ 22　土器出土位置

波状文が２単位描かれている。上段は４条、下段は５条残存する。全体的に磨滅傾向にあるが、内外面とも横方向のヘラミガキにより仕上げられている。直口壺は、191 ～ 194 の４個体が出土している。このなかで、191 はほぼ完存する。体部から口縁部にかけて叩き整形により仕上げられ、その後口縁部はハケ調整とナデ調整により仕上げられている。また、体部下端底部付近外面は縦方向の弱いヘラ削りが施され、底部は尖り底傾向にある。体部下半外面は、被熱により赤変している。

192 ～ 194 は、口縁部を中心に残存する。192 の頸部外面には、191 同様叩き整形痕が認められる。また、体部上端内面には、ヘラ削りの痕跡が認められる。194 の体部内面にも、ヘラ削り痕が認められる。

短頸壺は、196 の１個体である。口径 7.1㎝と小型の土器である。ユビオサエとナデ調整を基調として仕上げられている。

底部片は、197 ～ 200 の４個体が出土している。197 と 198 は丸底化の傾向が認められ、197 は内外面、198 は外面がヘラミガキにより仕上げられている。また、197 の底部中央はわずかに窪んでいる。199 と 200 は、甕の可能性も考えられる底部である。外面は叩き整形により仕上げられ、内面はハケ調整により仕上げられている。200 の底部は、中央部が窪み、木の葉状の圧痕が認められる。

甕　Ｖ様式系甕(201 ～ 207・211 ～ 213)と山陰系甕(208 ～ 210)が出土している。

Ｖ様式系甕は、叩き整形を基本とするものである。内面はハケ調整を基本とするが、202 のようにナデ調整により仕上げられる個体も認められる。また、法量的に大型（201 ～ 203）と小型(204・205)に分類できる。

底部は、206･207･211 ～ 213 の５個体が出土しており、底部も叩き整形により仕上げられ、尖り底状をなしている。206 は底面も叩き整形が加えられている。また、211 は内面がヘラミガキにより仕上げられていること、212 はその形態から、鉢の可能性も考えられる。さらに 213 は、全体的に歪んだ形状をなしているが、外面は被熱により赤変している。

山陰系甕は、208 ～ 210 の３個体出土している。いずれも、搬入品ではなく、在地産と考えられる。また、体部内面はヘラ削りにより仕上げられている。この他、209 の口縁部外面には煤の付着が認められる。また、210 は、口頸部の形態、および体部外面がヘラミガキにより仕上げられていることから、壺の可能性も考えられる。

鉢　底部が丸底に近いタイプ(214・215)・台付鉢(216)・直口鉢(217 ～ 223)が出土している。

底部が丸底状をなすタイプは、214 と 215 の２個体が出土している。214 は底部を中心に残存し、ナデ調整を基調に仕上げられている。215 は完形に復元できた個体で、全体的に手づくねにより成形され、粗い仕上げである。外面の凹凸が顕著である。体部はハケ調整を基調とし、底部は弱いヘラ削りにより仕上げられている。また、口縁部はつまむようなユビオサエにより成形されている。

台付鉢は 216 の１個体で､台部のみ残存する。全体的にユビオサエにより成形されている。

直口鉢は、217 ～ 223 の７個体出土している。217 は、底部は中央がわずかに窪み、口縁

部はわずかに内湾傾向にある。218 と 219 は、突出した平底をなす。いずれも底部まで叩きにより成形されている。220 ～ 222 は、平底の底部に対して体部が直線的である。221 は、口縁部がわずかに屈曲する。222 は、器高 3.6㎝と小型の鉢で、完存する。ナデ調整を基調として仕上げられている。223 は、体部が直線的に大きく開くタイプである。器高に対して口径が大きい点が特徴的である。

製塩土器　224 の 1 個体が出土している。底部を除いて完存する個体である。体部は叩き成形後、ハケ調整により仕上げられている。また、内面は輪積み痕が顕著に残り、上半はハケ調整、下半はユビオサエにより仕上げられている。口縁部は屈曲気味に外反し、ユビオサエとナデ調整により仕上げられている。底部は脚台状をなすものと考えられる。

高坏　有稜・有段高坏(225 ～ 234)と椀形高坏(235 ～ 237)が出土している。

有稜・有段高坏は、10 個体出土している。大型の有稜高坏 (225)、杯部に明確な段を有する高坏(226・227)、口縁部が大きく外反するタイプ(228)、小型の有稜高坏(229 ～ 232)、脚部(233・234)、に分類できる。

大型の有稜高坏は、225 の 1 個体が出土している。体部高に対して口縁部高が深いタイプで、内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。

段を有する高坏は 226 と 227 の 2 個体が出土している。226 はほぼ完存する個体で、外反する体部に対して上部が直立し、さらに口縁部が大きく外反している。また脚部も中位で屈曲している。この屈曲部の上側と下側の 2 段にわたって円形の透かしが各 4 孔ずつ開けられている。その位置は、上側と下側では互い違いに開けられている。また、脚部上半の柱状部中央には径 2 ㎜の円孔が開けられているが、その規模は計測できない。脚部から口縁部までヘラミガキにより仕上げられている。

227 も脚部のみの残存であるが、その形態から 226 と同タイプの高坏の脚部と判断したものである。屈曲部の上側には円形の透かしが開けられている。

口縁部が大きく外反するタイプは、228 の 1 個体である。口縁部が水平方向に外反し、横ナデにより上方につまみ上げられている。坏部は内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。

小型の有稜高坏は、229 ～ 232 の 4 個体出土している。229 は、形態的に壺の口縁部の可能性も考えられるが、全体的に器壁が薄く、内外面ともヘラミガキにより仕上げられていることから、高坏と判断したものである。230 は、体部高に対して口縁部高が浅い傾向にある。一方、231 と 232 は口縁部高の方が深い傾向にある。

脚部は、233 と 234 の 2 個体が出土している。その形態から有稜高坏の脚部と考えられる。外面はヘラミガキにより仕上げられている。

椀形高坏は 235 ～ 237 の 3 個体が出土している。235 は坏部のみ残存する。内外面とも化粧土が塗布され、ヘラミガキにより仕上げられている。236 は、脚柱部が短いことから、椀形高坏の脚部と判断したものである。脚部外面にはヘラ削りが加えられている。237 は完形に復元できた個体である。坏部・脚裾部ともハケ調整後、ヘラミガキにより仕上げられているが、全面ではない。脚裾部には円形の透かしが 3 箇所残存するが、当初は 4 箇所に開けられていたものと考えられる。

器台　　238 の１個体が出土している。小型の器台で、柱状の脚部に対して受け部が直線的に開く。脚柱部の中央は径１㎝の中空となっている。脚裾部には円形の透かしが３方に認められる。外面の観察から、赤色に塗られていた可能性が考えられる。

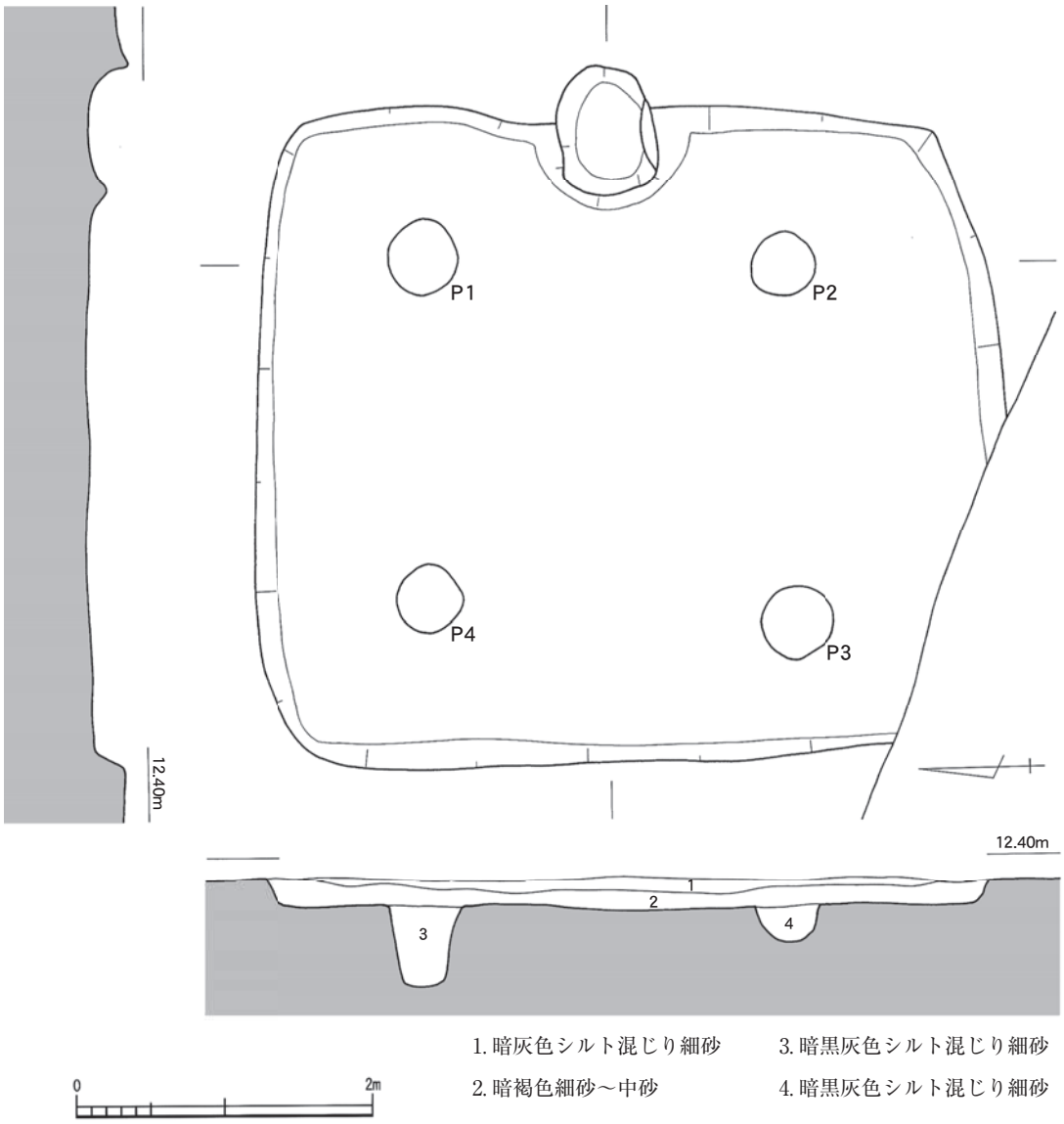
蓋　　239 の１個体が出土している。大型の蓋で、天井部を欠く。内外面ともハケ調整により仕上げられているが、全体的に粗い仕上げで、外面には輪積み痕が顕著に観察される。口縁部内面には煤の付着が認められる。

時　期　　出土土器から、弥生Ⅱ期－３(庄内期)に位置付けられる。

ＳＨ 23(写真図版 27・28)

検出状況　　調査区中央部南側で検出した（第 83 図)。Ｂ区中央住居跡群内に位置する（第 87 図)。ＳＨ 22 の南側、ＳＤ 06 の西側に位置する。ＳＨ 24・ＳＨ 25 と切り合い関係にあり、両住居跡を切っている。住居跡南西隅が調査区外に拡がっており未検出であるが、他は完存する。

形状・規模　　平面形は、方形に近い台形をなす（第 93 図)。東辺と西辺は平行関係にあるが、北辺と南



1. 暗灰色シルト混じり細砂　　3. 暗黒灰色シルト混じり細砂
2. 暗褐色細砂～中砂　　4. 暗黒灰色シルト混じり細砂

第 93 図　ＳＨ 23

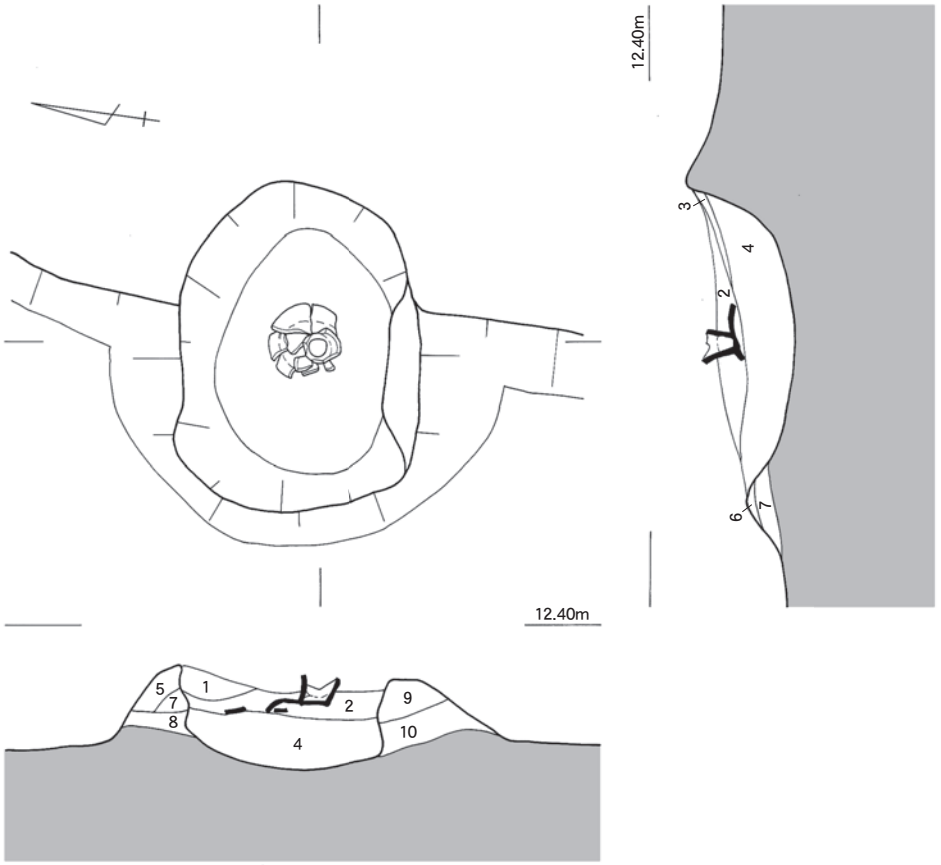
辺は平行関係にはない。東西方向に主軸をとり、東西方向で4.41ｍ、南北方向で5.04ｍを測る。両者を基準とした面積は22.22㎡である。また、住居跡中央部床面における検出面からの深さは23㎝を測り、住居跡中央部における床面の標高は12.03ｍである。

付属施設　主柱穴とカマドを検出している。

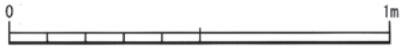
主柱穴　４穴（Ｐ１～Ｐ４）検出している。４穴とも円形をなし、床面における規模はほぼ同規模で、Ｐ１が45㎝、Ｐ２が42㎝、Ｐ３が48㎝、Ｐ４が43㎝を測る。また、床面からの深さは、Ｐ１が54㎝、Ｐ２が23㎝、Ｐ３が41㎝、Ｐ４が40㎝である。ただし、４穴とも柱痕を検出することはできなかった。

柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間・Ｐ２－Ｐ３間が2.45ｍ、Ｐ３－Ｐ４間が2.50ｍ、Ｐ１－Ｐ４間が2.35ｍ、とほぼ同規模で、４穴がほぼ整った正方形をなしている。

カマド　東壁中央部に位置する（第94図）。東側約1/3は東壁のラインより東側へ突出している。カマドの主軸は、東壁のラインとほぼ直交し、突出部を含めた主軸方向の規模は、85㎝を測る。袖部は断面三角形をなし、頂部は平坦な箇所がわずかである。東壁を基準とした袖部の規模は、北側・南側ともに40㎝である。



1. 暗灰色シルト混じり極細砂
2. 暗褐灰色シルト質極細砂（炭・焼土片含む）
3. 暗茶褐色シルト混じり細砂（炭・焼土片含む）
4. 暗茶褐色細砂混じりシルト（炭・焼土片含む）
5. 暗灰色細砂混じりシルト
6. 焼土
7. 暗褐灰色シルト混じり極細砂（下層に炭集積）
8. 暗茶褐色シルト混じり細砂（炭・焼土片含む）
9. 暗褐灰色シルト混じり極細砂（下層に炭集積）
5. 暗茶褐色シルト混じり細砂（炭・焼土片含む）



第94図　ＳＨ23　カマド

袖部は基本的に盛土により造られており、東側はＳＨ24を埋めた土が利用されている。内側の立ち上がりは、全体的に直立傾向にある。盛土内には、炭片や焼土片が混入しており、幾度が造り直された結果と考えられる。袖頂部と床面との比高は北側が20㎝、南側が16㎝を測る。また、袖頂部間の規模は55㎝である。

カマド内は、深い土坑状をなし、最深部における袖頂部からの深さは28㎝である。土坑内は、大きく２層の堆積が認められ、埋土内には炭片と焼土片が多く含まれていた。また、一旦埋まった段階、４層上面のカマド中央部で高杯（255）が逆位で出土している。支柱として転用されていたものと考えられる。

このほか、カマド内で使用されていたと考えられる土師器の甕(251)が出土している。

埋没状況　上から、暗灰色シルト混じり極細砂・暗茶褐色細砂混じりシルトの２層からなる。いずれも、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土器と石製品が出土している。

土器　土師器と須恵器が出土している(図版11)。

土師器　甕(247 ～ 252)・椀(253)・高杯(254 ～ 256)・鉢(257)・甑(258)が出土している。

甕は、247 ～ 252の６個体が出土している。247 ～ 250の４個体は、丸胴タイプの甕で口縁部から体部にかけて残存する。内外面ともハケ調整を基調とするが、248の内面にはヘラ削りが加えられている。また、248の口縁端部は、つまむような横ナデ調整により、薄く仕上げられている。さらに、247の外面は、被熱による赤変が顕著である。250は、球形の体部に対して、口縁部が短く内湾気味に直立する。底部は、ヘラ削りにより仕上げられている。

長胴タイプの甕は、251と252の２個体である。251は口縁部がく字形に屈曲している。252は、ほぼ完存する個体で、口縁部は受口状をなす。体部は砲弾形をなし、内面の大半はヘラ削りにより仕上げられている。体部外面全面に被熱痕が認められる。

椀は253の１個体が出土している。完形に復元できた個体で、半球形の体部に対し口縁部がわずかに外反する。また、端部はわずかに内傾する面を有する。体部内面にはヘラミガキが暗文状に加えられている。

高杯は254 ～ 256の３個体が出土している。254は脚部のみ残存し、外面はヘラミガキに近いヘラナデによって仕上げられている。255はほぼ完存する個体である。杯部は水平な体部に対して口縁部が斜上方に直線的にのびる。脚部の裾は大きく水平方向に屈曲している。体部内面にわずかにヘラミガキの痕跡が認められる。杯部と脚部は、充填法により接合されている。256は大型の高杯である。口縁部が大きく水平方向に開いている。下端部には接合痕が認められ、体部との境をなしているものと考えられる。

鉢は257の１個体が出土し、口縁部を中心に残存する。大型の鉢で、口縁部は内湾傾向にある。また、端部は薄く仕上げられている。

甑は258の１個体で、口縁部から体部にかけて残存する。体部から口縁部にかけて直線的で、端部は横ナデ調整により内傾する端面を有する。

須恵器　杯Ｈ蓋(240 ～ 242)・杯Ｈ(243 ～ 245)・甕(246)・壺が出土している。

杯Ｈ蓋は、240 ～ 242の３個体が出土している。いずれもほぼ完形に復元できたもので、

天井部はヘラ削りにより仕上げられている。また、天井部内面には仕上げナデが加えられている。

杯Ｈは、243 ～ 245 の３個体が出土している。３個体の間には法量的な差が認められる。また、243 の底部はヘラ削りにより仕上げられているのに対して、244 の底部はヘラ切り後ナデ調整により仕上げられ、体部との境にヘラ削りが加えられている。

甕は、246 の１個体が出土している。口縁部を中心に残存し、口縁端部は肥厚し、断面長方形をなす。

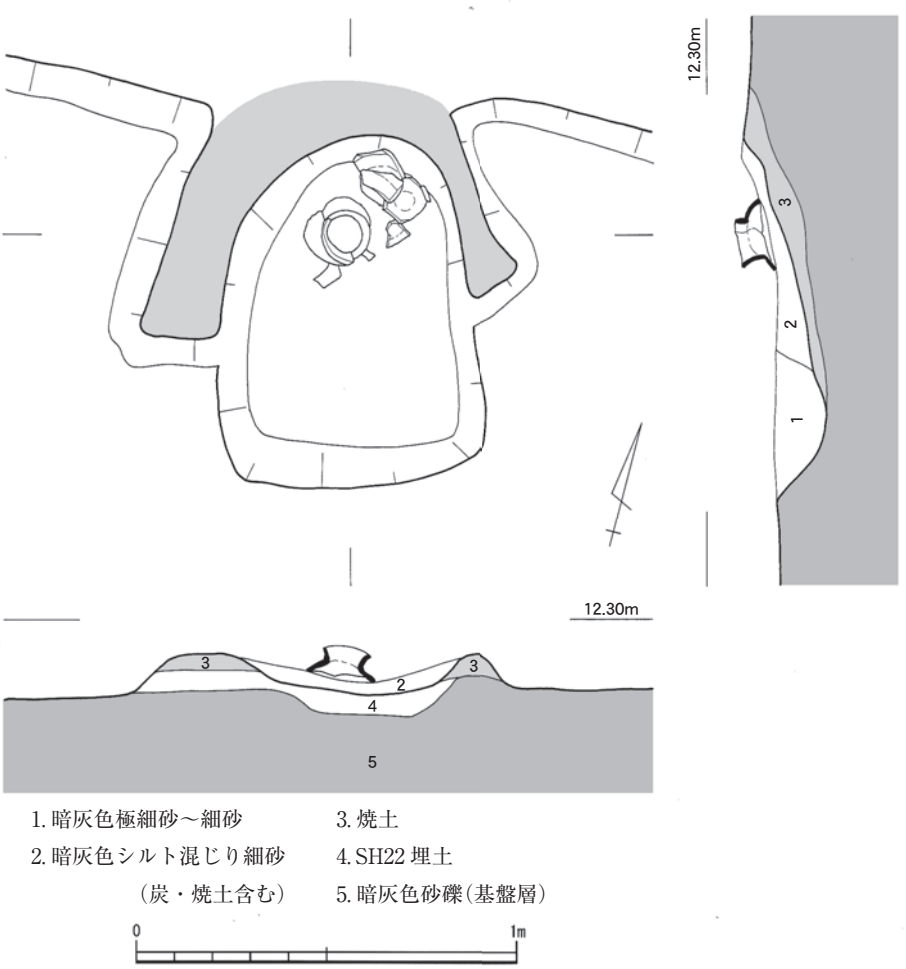
壺については小片のため図化できなかったが、体部片が出土している。

石製品　砥石が１点（Ｓ７）出土している（図版 13）。凝灰岩を使用したもので、長方体をなし、一端を欠く。４面が使用されている。残存長 8.05㎝を測り、幅は 4.5㎝、厚さは 3.2㎝である。残存する端面は使用されず、自然面のままである。236.4 ｇ。

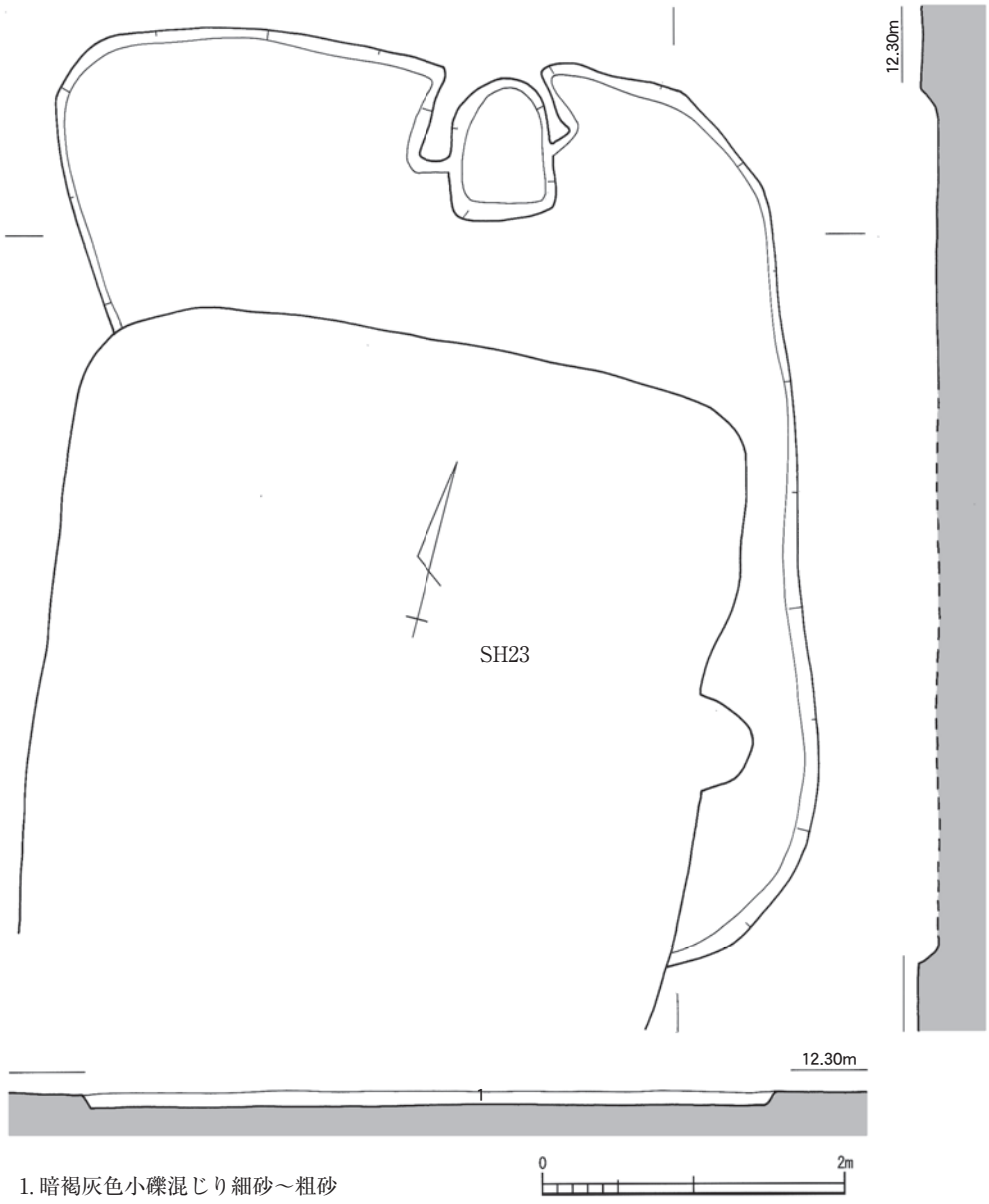
時　期　出土土器から、古墳Ｉ期古相に位置付けられる。

ＳＨ 24（写真図版 29・30）

検出状況　調査区中央部南側で検出した（第 83 図）。ＳＨ 22 の南側、ＳＤ 06 の西側に位置する。ＳＨ 22・ＳＨ 23 と切り合い関係にあり、ＳＨ 22 を切り、ＳＨ 23 に切られている（第 87 図）。ＳＨ 23 に大半を切られ、検出できたのは全体の約 1/3 である。



第 95 図　ＳＨ 24　カマド



第 96 図　ＳＨ 24

形状・規模　平面形は、長方形をなすがかなり歪んだ形状をなす（第 96 図）。どちらかというと、平行四辺形に近い形状である。南北方向に主軸をとり、東西方向で 4.50 ｍを測る。また、南北方向で 5.90 ｍ検出している。住居跡中央部床面における検出面からの深さは５㎝を測り、住居跡中央部における床面の標高は 12.05 ｍである。

付属施設　カマドを検出している。

カマド　北壁中央部に位置する。焼土を除いては、北壁より突出していない（第 95 図）。カマドの主軸は、北壁のラインに対してやや斜交する。その規模は、主軸方向で 92㎝を測る。袖部は、断面台形をなし、頂部は平坦をなす。北壁を基準とした袖部の長さは、西側で 62㎝、東側で 50㎝である。

袖部は基本的に盛土により造られており、焼土化していた。袖頂部と床面との比高は西側が 10㎝、東側が９㎝を測る。また、袖部内側肩部を基準とした袖頂部間の規模は 65㎝である。

カマド内は、浅い土坑状をなし、最深部における袖頂部からの深さは13㎝である。土坑内は、１層の堆積が認められ、炭片と焼土片が多く含まれていた。また、この層の上面から土師器の甕(263)が出土している。煮沸具として使用されていたものと考えられる。

埋没状況　暗褐灰色小礫混じり細砂～粗砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している(図版 11)。

土師器　椀(261)・高杯(262)・甕(263)が出土している。

椀は 261 の１個体が出土している。完形に復元された個体で、丸底の底部に対して、口縁部が直線的にのびている。鉢に近い形態である。

高杯は、262 の１個体が出土している。杯底部から脚部にかけて残存する。全体的にていねいに造られ、杯部内外面および脚部外面はヘラミガキにより仕上げられている。杯部の体部と口縁部の境は明確に屈曲する。

甕は、263 の１個体が図化できた。完形に復元できた個体で、丸胴タイプの甕である。球形の体部に対して口縁部が短く外反する。口縁部と底部の器壁が他より厚く仕上げられている。体部外面はハケ調整を基調として仕上げられ、上半部に「十」字状のヘラ記号が認められる。全体的に被熱による赤変が顕著で、薄く煤の付着も認められる。

この他図化できなかったが、長胴タイプの甕の体部片・口縁部片も出土している。カマド内からの出土である。

須恵器　杯Ｈ蓋(259)と高杯(260)が出土している。

杯Ｈ蓋の 259 は、天井部が平坦で、ヘラ切り後弱いヘラ削りにより仕上げられている。また、口縁端部が強い回転ナデにより薄く仕上げられている。

高杯は 260 の１個体で、脚裾部が残存する。端部がわずかに肥厚する。

時　期　出土土器から、古墳Ⅰ期古相に位置付けられる。

ＳＨ 25

検出状況　調査区中央部で検出した（第 83 図）。ＳＨ 22 の南側、ＳＤ 06 の西側に位置する。ＳＨ 22 ～ＳＨ 24 と切り合い関係にあり、ＳＨ 22 を切り、ＳＨ 23・ＳＨ 24 に切られている（第 87 図）。ＳＨ 23 とＳＨ 24 に大半を切られ、検出できたのは北西隅を中心とした一部に限られる。

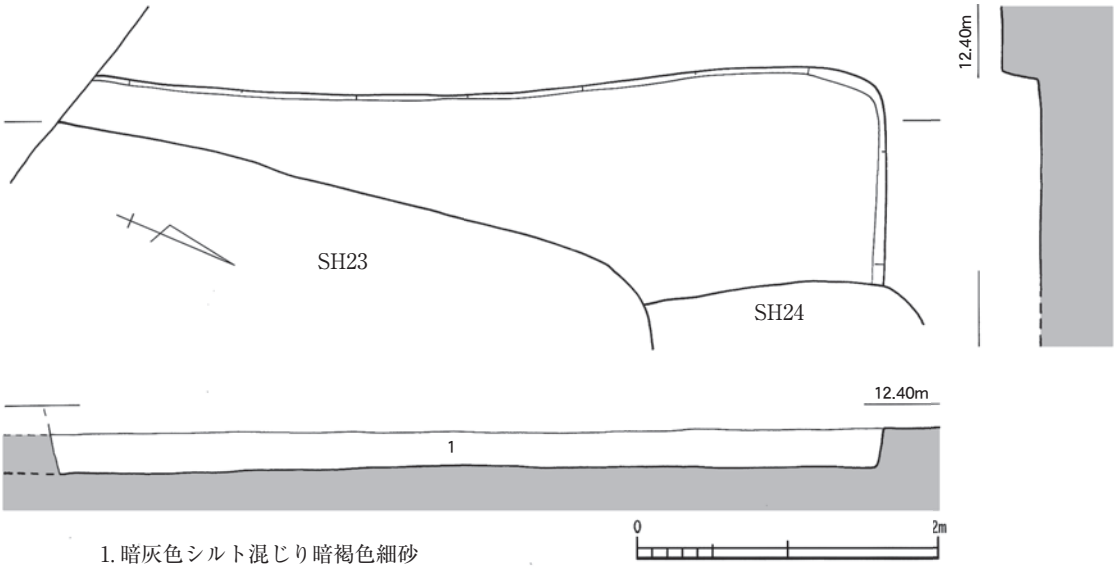
形状・規模　平面形は、長方形もしくは方形をなすものと考えられる（第 97 図）。南北方向に主軸をとり、西壁で 5.20 ｍ、東西方向で 1.40 ｍ検出している。住居跡中央部床面における検出面からの深さは 25㎝を測り、住居跡中央部における床面の標高は 12.00 ｍである。

付属施設　全く検出されていない。

埋没状況　暗灰色シルト混じり暗褐色細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　弥生土器の壺と甕が出土している。壺と甕ともに体部片が出土しており、いずれも小片のため図化できなかった。甕の体部片には叩き痕が認められる。

時　期　出土土器から、弥生Ⅱ期－２もしくは弥生Ⅱ期－３に位置付けられる。



1. 暗灰色シルト混じり暗褐色細砂

第 97 図　ＳＨ 25

３．掘立柱建物跡

はじめに　　１棟（ＳＢ 10）検出している。

ＳＢ 10（写真図版 31・32）

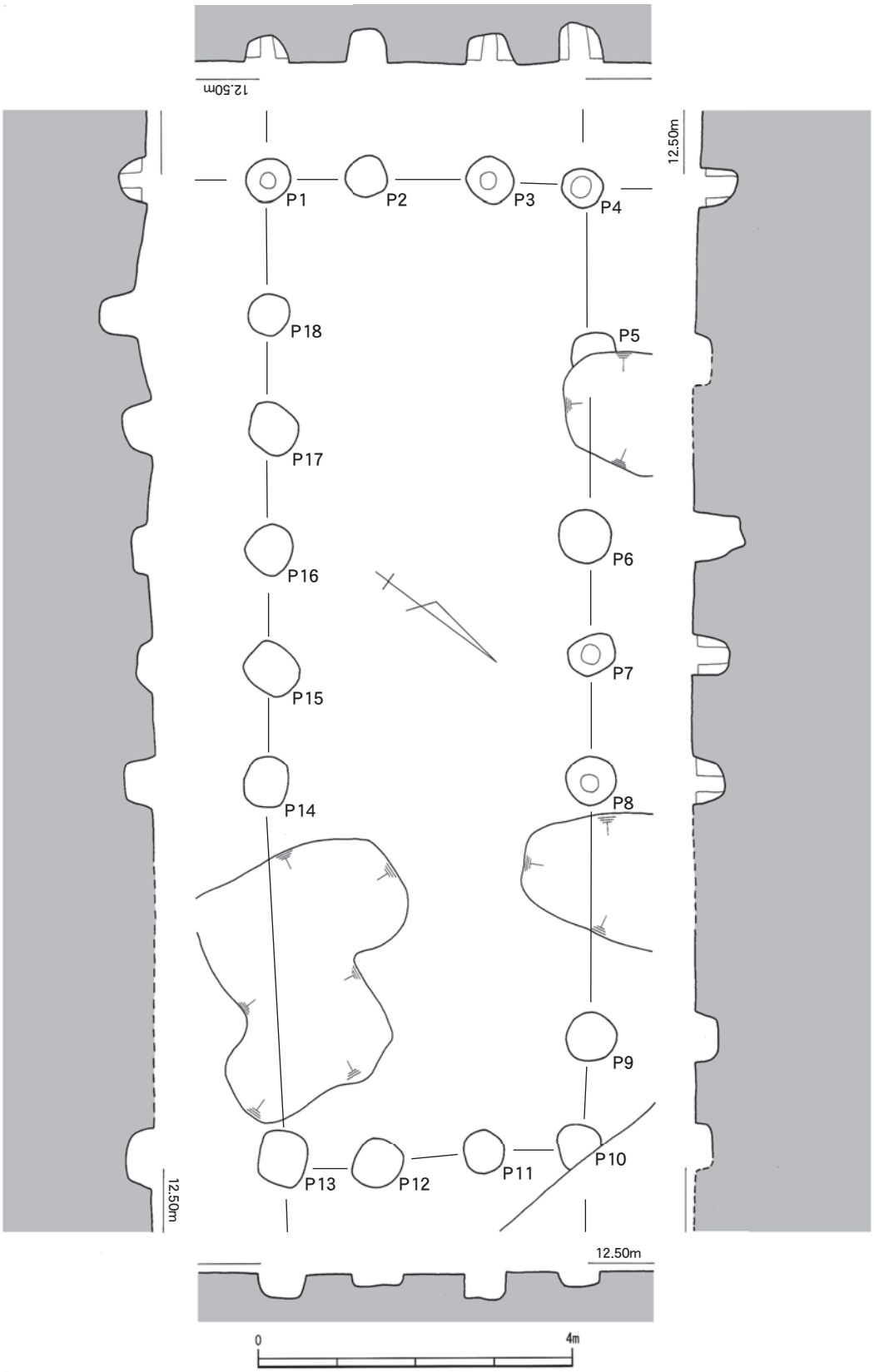
検出状況　　調査区のほぼ中央で検出した（第 83 図）。ＳＨ 22 の北側に位置する。一部の柱穴がＳＨ 22 と切り合い関係にあり、ＳＨ 22 を切っている。このため、基本的には建物全体が検出されているが、北西桁行の１穴（Ｐ８－Ｐ９間）は、後世の撹乱を受け検出することはできなかった。また、南東桁行のＰ 13 －Ｐ 14 間も後世の撹乱を受け、検出できなかった（第 98 図）。

第 98 図　ＳＢ 10 の調査

建　　物　　梁行３間、桁行７間の側柱建物である（第 99 図）。なお、桁行については、後世の撹乱を受けているため明確にできないが、Ｐ８－Ｐ９間にもう１穴あるものとし、桁行が７間と判断したものである。このため、南東桁行のＰ 13 －Ｐ 14 間は１穴を欠くものと判断している。

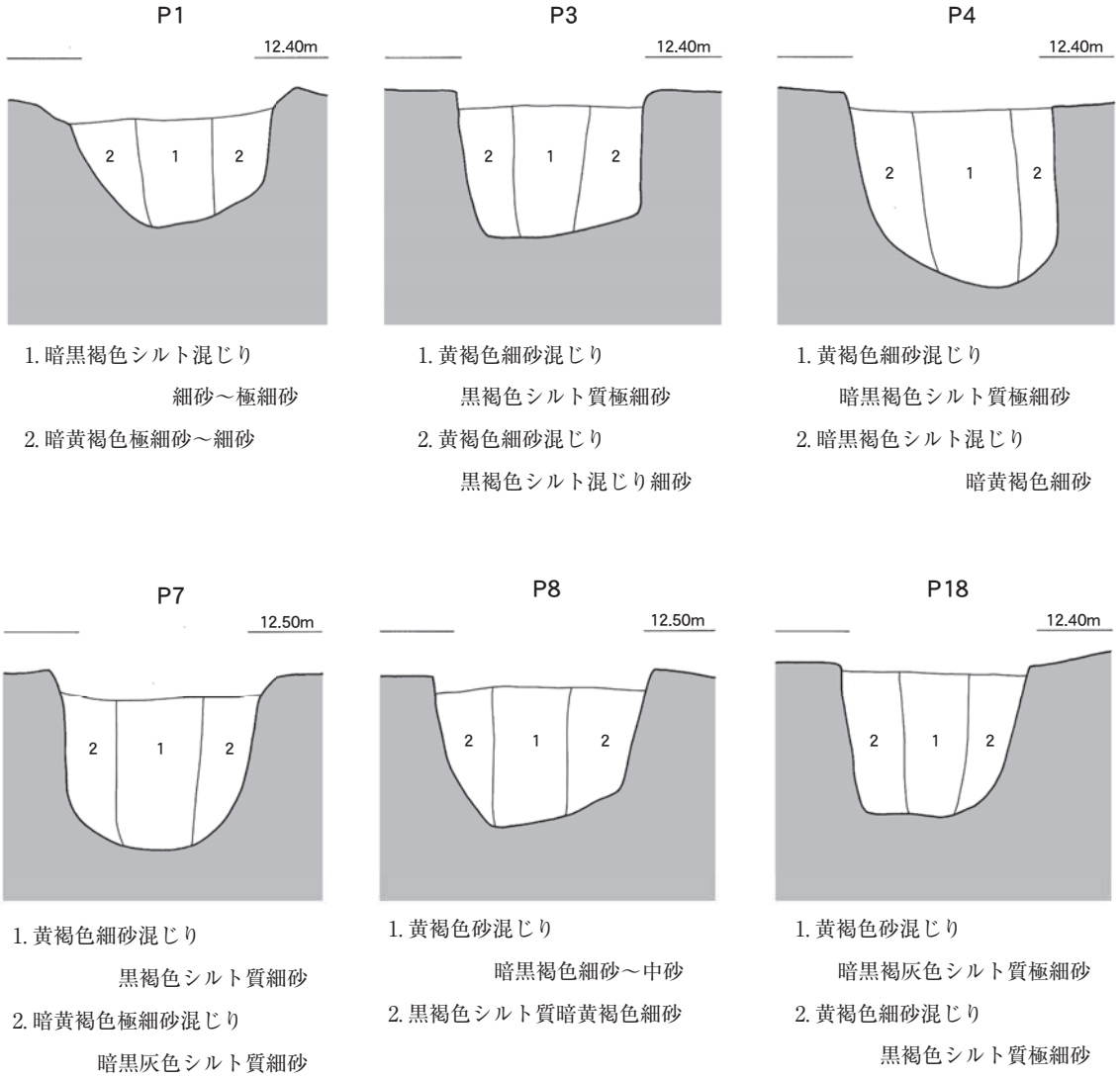
一部を除いて、梁行・桁行とも、基本的には平行・直角関係にあり、全体的に整った平面形をなしている。ただし、両桁行間の規模に差が認められる。建物の規模は、梁行（Ｐ１－Ｐ４間）で 4.00 ｍ、北西桁行（Ｐ４－Ｐ 10 間）で 12.15 ｍを測り、両者を基準とした建物の面積は 48.60㎡である。また、南西梁行（Ｐ１－Ｐ４）を基準とした棟軸方向は、Ｎ 34° 30′Ｗを示す。

各柱穴間の距離等は第 11 表の通りである。なお、第 11 表の桁行の柱穴間距離については、７間として計算している。これによると、柱穴間の距離は一定ではないが、特にＰ４－Ｐ５間とＰ 13 －Ｐ 14 間の柱穴間距離が他より広い傾向にある。



第 99 図　ＳＢ 10

柱　穴　　柱穴の平面形は、隅丸長方形・隅丸方形を基本とする。ただし、その平面形は直線的ではない。また、各柱穴の主軸方向と棟軸方向が一致するものはわずかである。その規模は、50㎝大～ 70㎝大でほぼ一定している。柱痕については、Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ７・Ｐ８・



第 100 図　ＳＢ 10　柱穴断面

Ｐ 18 で検出した（第 100 図）以外、他の柱穴では検出できなかった。柱痕の規模は、Ｐ４がやや突出する以外、20㎝大でほぼ同規模である。

なお、各柱穴の規模は第 11 表の通りである。

出土遺物　柱穴から出土した遺物は、全て弥生土器である。Ｐ 16 からは 297 の壺と 298 のミニチュア土器が出土している。297 の外面はハケ調整後ヘラミガキにより仕上げられている。298 は、全て手づくねにより成形されている。この他、小片のため図化できなかったが、Ｐ 16 からは高坏の脚端部片も出土している。

さらに、Ｐ７・Ｐ 11・Ｐ 15 から甕の体部片が出土しているが、いずれも叩き痕が認められる。

時　　期　出土遺物から判断して、弥生Ⅱ期－４（布留期）と考えられる。

第 11 表　ＳＢ 10　建物・柱穴規模一覧

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
南西梁行	Ｐ 1 - Ｐ 2	1.25	4.00	1.33
	Ｐ 2 - Ｐ 3	1.55		
	Ｐ 3 - Ｐ 4	1.20		
北西桁行	Ｐ 4 - Ｐ 5	2.10	12.15	1.74
	Ｐ 5 - Ｐ 6	2.35		
	Ｐ 6 - Ｐ 7	1.40		
	Ｐ 7 - Ｐ 8	1.65		
	Ｐ 8 - Ｐ 9	3.25		
	Ｐ 9 - Ｐ 10	1.40		
北東梁行	Ｐ 10- Ｐ 11	1.30	3.80	1.27
	Ｐ 11- Ｐ 12	1.30		
	Ｐ 12- Ｐ 13	1.20		
南東桁行	Ｐ 13- Ｐ 14	4.85	12.60	1.80
	Ｐ 14- Ｐ 15	1.50		
	Ｐ 15- Ｐ 16	1.50		
	Ｐ 16- Ｐ 17	1.60		
	Ｐ 17- Ｐ 18	1.45		
	Ｐ 18- Ｐ 1	1.70		

No.	平面規模（cm）	柱痕（cm）	深さ（cm）
Ｐ 1	60 × 50	20	37
Ｐ 2	51 × 48	−	34
Ｐ 3	58 × 57	20	40
Ｐ 4	52 × 50	26	50
Ｐ 5	56 ×（23）	−	20
Ｐ 6	66 × 64	−	67
Ｐ 7	60 × 49	23	46
Ｐ 8	62 × 61	22	40
Ｐ 9	63 × 63	−	29
Ｐ 10	56 × 56	−	18
Ｐ 11	57 × 52	−	36
Ｐ 12	64 × 58	−	15
Ｐ 13	70 × 60	−	30
Ｐ 14	67 × 57	−	35
Ｐ 15	70 × 61	−	20
Ｐ 16	62 × 58	−	20
Ｐ 17	70 × 58	−	37
Ｐ 18	54 × 50	18	45

４．土坑

はじめに　　ＳＫ 15 の１基を検出している。

ＳＫ 15

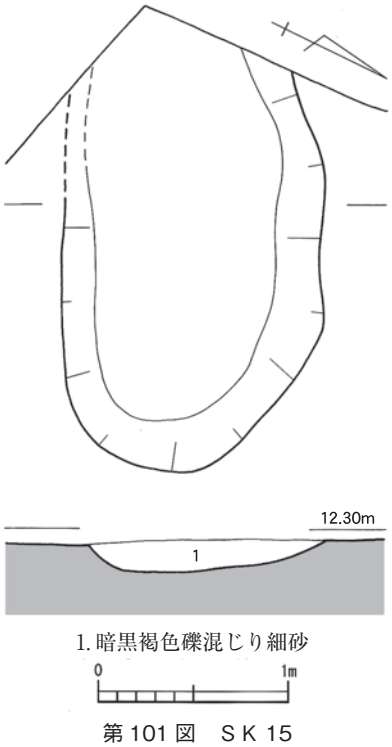
検出状況　　調査区南西部で検出した（第 83 図）。ＳＨ 20 の東側に位置し、ＳＨ 20 に切られている。また、南西側の一部は調査区外へ拡がっており、検出できたのは全体の約 3/4 である。

形状・規模　　平面形は、長楕円形もしくは溝状をなすものと考えられる（第 101 図）。ほぼ東西方向に主軸をとり、その規模は主軸方向で 2.20 ｍを検出している。また、その直交方向で 1.38 ｍを測る。横断面はやや深い皿形をなし、最深部における検出面からの深さは 16㎝である。

埋没状況　　埋土は、暗黒褐色礫混じり細砂１層からなる（第 101 図）。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　　弥生土器の壺（264・265）と高坏（266）が出土している。

壺　　264 と 265 の２個体が出土している。



第 101 図　ＳＫ 15

264 は、口縁部片と体部片からなるが、胎土・色調の特徴から同一個体と判断して復元したものである。広口壺と考えられ、口縁部は直立する頸部に対して口縁部が大きく水平方向に開く。口頸部は内外面とも磨滅が著しく、調整を観察することは困難である。体部は球形をなし、叩き成形により仕上げられている。

265 は、短頸壺の口縁部と考えられる。頸部から口縁部にかけて大きく外反している。

高坏　266 の１個体が出土している。脚部のみの残存で、脚部には円形の透かしが４箇所に開けられている。全体的に磨滅が顕著である。

時　期　出土遺物から判断して、弥生Ⅱ期－３(庄内期)と考えられる。

５．溝

はじめに　ＳＤ 06 の１条を検出している。

ＳＤ 06(写真図版 32)

検出状況　調査区北東隅で検出した（第 83 図)。Ｂ区中央住居跡群の東側に位置する。ほぼ南北方向に直線的にのびる溝で、その方向性はＳＨ 22 の棟軸方向とほぼ一致する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、両端とも調査区外へのびている。

形状・規模　検出した長さは 12.30 ｍである。検出面における幅は 4.60 ｍを測る。当溝は２段にわたって掘られ、その横断面は、上段が皿形、下段が浅いＵ字形をなす。下段最深部における検出面からの深さは 50㎝である。

埋没状況　埋土は、大きく１層・２層(上層)と３層・４層(下層)の２層に分類できる(第 102 図)。当初４層下面のラインまで掘削後、下層が人為的に埋められている。その後、２層下面まで再掘削され、最後に上層が洪水に起因して埋没している。

出土遺物　弥生時代の土器と古墳時代の土器が出土している(図版 12・13)。

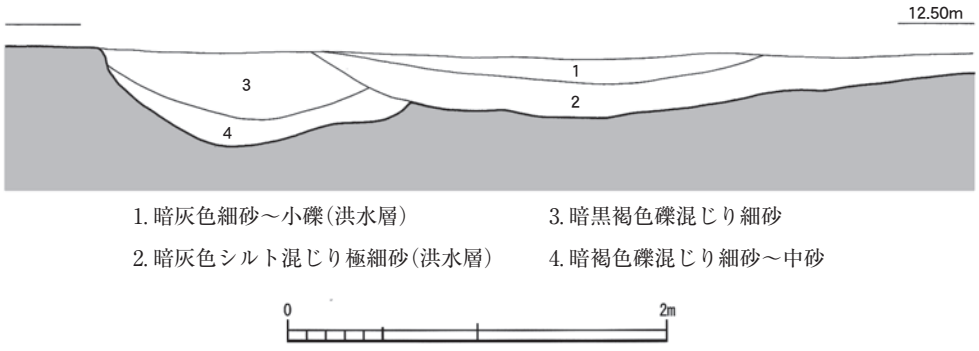
弥生時代　壺(267・268)・甕(269 ～ 276)・高坏(277)・鉢(278)が出土している。

壺　267 と 268 の２個体が出土している。267 は広口壺の口縁部と考えられ、口縁端部は面を有し、凹線が引かれている。268 は直口壺の口縁部と考えられ、体部から頸部にかけて叩き成形後、口縁部がハケ調整を基調として仕上げられている。体部も全面ではないが、ハケ調整が加えられている。

甕　中期の甕と後期の甕が出土している。

中期の甕は、269 の１個体である。短く屈曲し端部が上方につまみ上げられている。端面には凹線が引かれている。

後期の甕は、270 ～ 276 の７個体が出土している。いずれも叩き成形を基本とするＶ様式系甕である。このなかで、270 の体部外面には、叩き成形後全面ではないがヘラミガキが加



1. 暗灰色細砂～小礫(洪水層)　3. 暗黒褐色礫混じり細砂
2. 暗灰色シルト混じり極細砂(洪水層)　4. 暗褐色礫混じり細砂～中砂

第 102 図　ＳＤ 06 断面

えられている。一方、276 は内面がヘラミガキにより仕上げられている。この他、274 の底面にはヘラ記号状の沈線が認められる。

高坏　277 の１個体が出土している。脚部のみの残存で、端部が上方につまみ上げられている。

鉢　278 の１個体が出土している。台付鉢の台部と考えられる。台部には２個一対の円孔が穿たれている。

古墳時代　土師器と須恵器が出土している。

土師器　椀(279)・甑・甕が出土している。

椀の 279 は、深い皿形を呈し、底部から口縁部にかけて内湾している。口縁部がわずかに横ナデ調整により仕上げられている。また内面にはヘラミガキ痕を観察することができる。

この他、甑は把手が、甕は体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

須恵器　杯Ｈ蓋（280 ～ 283）・杯Ｈ（287 ～ 293）・高杯（284 ～ 286）・甕（294）・壺（295・296）が出土している。

杯Ｈ蓋は 280 ～ 283 の４個体が出土している。法量的な差が認められ、280 は口径 11㎝、器高 2.8㎝と小型である。一方、器壁が他より厚く仕上げられている。天井部は回転ヘラ削り後ナデ調整が加えられている。

高杯は 284 ～ 286 の３個体出土している。284 は、杯部のみの残存で、杯底部中央にわずかに脚との接合痕が認められる。そして、接合痕の一部に透かしの上端部が２箇所で認められる。285 は、脚部のみ残存する。接合部から開くもので、上端には沈線が認められる。２箇所で、長方形透かしの一部が残存する。286 は、接合部を中心に残存する。脚柱部上半には断面鋭角をなす切り込みが２箇所で認められるが、貫通していない。また、切り込み箇所の下端部には２条の凹線状の沈線が引かれている。

杯Ｈは 287 ～ 293 の７個体出土している。法量的に 287 が大型で、他とは異なる。また、289 の底部はヘラ削りにより仕上げられている。一方、291 と 292 の底部はヘラ切り後未調整である。291 は、全体的に焼き膨れが顕著である。

甕は 294 の１個体が出土している。口縁部から体部中位まで残存し、口縁端部は大きく折り返されている。

壺は、295 と 296 の２個体が出土している。295 は、短頸壺の口縁部から体部上半である。296 は、瓶の体部の可能性も考えられる。体部外面下端には静止ヘラ削りが加えられている。

時　期　出土遺物は、大きく弥生時代と古墳時代に分けることができる。以上から判断して、少なくとも弥生Ⅰ期（弥生時代中期）には掘削されていたものと考えられる。その後、古墳Ⅰ期新相にはほぼ埋没したものと考えられる。

６．包含層

はじめに　遺構には伴わないが､比較的良好に残存する資料が出土している。これらの資料について、包含層出土遺物として報告する。出土資料としては、須恵器・土製品・弥生土器が出土している。

須恵器　杯Ｈ蓋(299・300)・杯Ｈ(301 ～ 303)・高坏(304)・杯Ｂ(305)・椀(306)が出土している。

杯Ｈ蓋は、299 と 300 の２個体出土している。２個体とも法量的に大型で、口径が 13㎝を越えるものである。299 の天井部は回転ヘラ切り後ナデ調整、300 は回転ヘラ削り後ナデ調整により、仕上げられている。

杯Ｈは、301 ～ 303 の３個体出土している。杯Ｈ蓋に対応するように大型である。３個体とも、底部はヘラ削りにより仕上げられている。

高杯は 304 の１個体が出土している。脚部を中心に残存し、杯部に対して脚部が小型である。脚部は、裾部が大きく外反する。杯部内面には仕上げナデが加えられている。

杯Ｂは、305 の１個体である。底部を中心に残存する。

椀は、306 の１個体である。底部を中心に残存し、明確な高台を有する。底部は回転糸切りにより切り離され、10 世紀代に位置付けられるものである。

土製品　鞴の羽口(307)が出土している。極一部の残存で、内径が 2.1㎝、外径が 6.5㎝と復元できる。

弥生土器　高坏(308)・壺(309・310)・甕(311)が出土している。

高坏は、308 の１個体が出土している。脚部のみ残存し、全体的に接合部から裾部まで直線的に開く。内外面ともハケ調整を基調とし、外面にはヘラミガキが加えられている。

壺は、309 と 310 の２個体が出土している。いずれも基盤層中から出土した土器である。309 は広口壺の口縁部で、中期初頭に位置付けられる。頸部には櫛描直線文と櫛描波状文が施文されている。310 は、広口壺の体部片である。上から、櫛描直線文・櫛描波状文３帯・刺突列点文・櫛描直線文３帯が施文されている。特に最下段の３帯の櫛描直線文は、連続するものではなく、扇状文のように止め、３帯が流水文状をなしている(写真図版 69)。

甕は 311 の１個体が出土している。中期に位置付けられるものである。

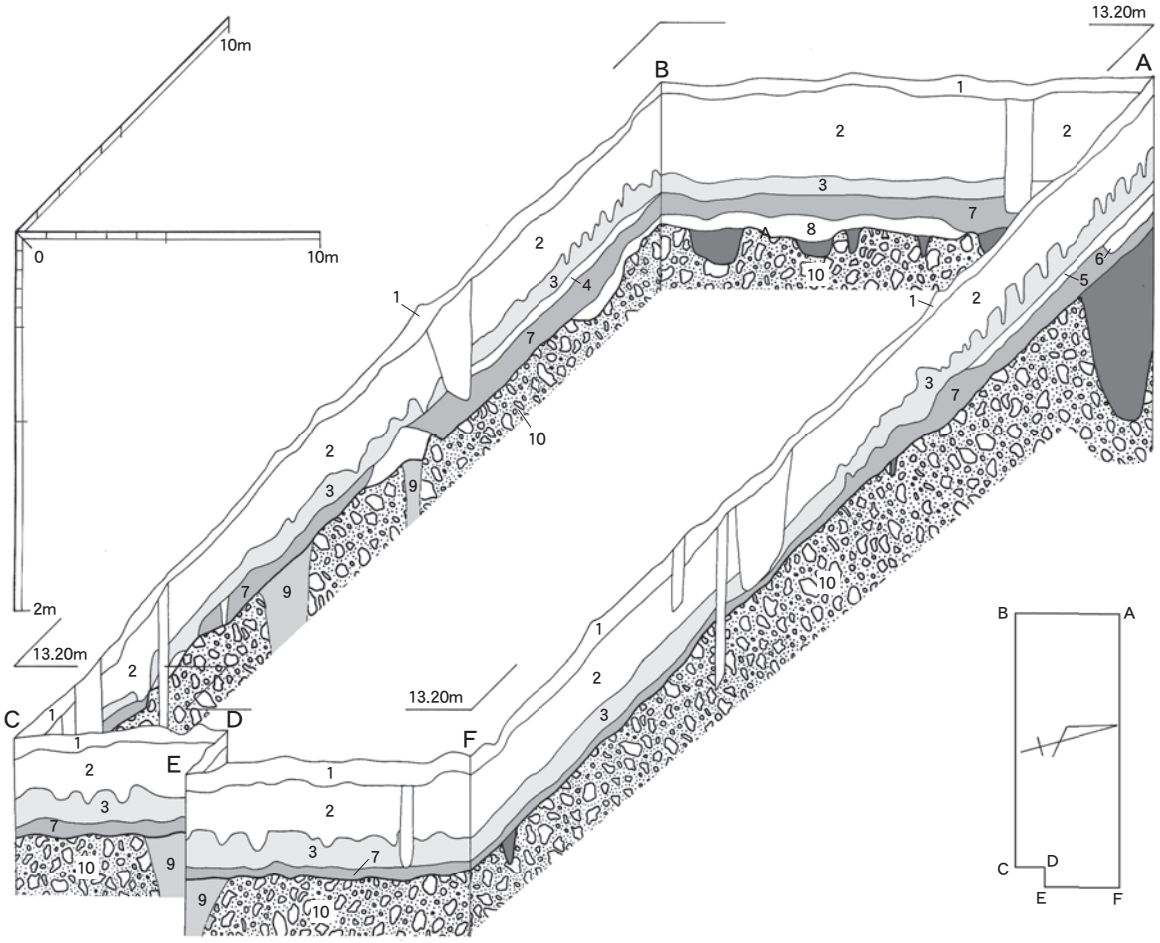
第４節　Ｃ区の調査

１．概要

はじめに　当地区でも、Ａ区同様、竪穴住居跡・柱穴・土坑・溝・井戸を検出している（第 104 図）。ただし、遺構の密度はＡ区程ではなく、一部を除いて切り合い関係もわずかである。全体的に、東側ほど遺構の分布が希薄となっている。特に、住居跡群の東側は、検出された遺構はわずかである。

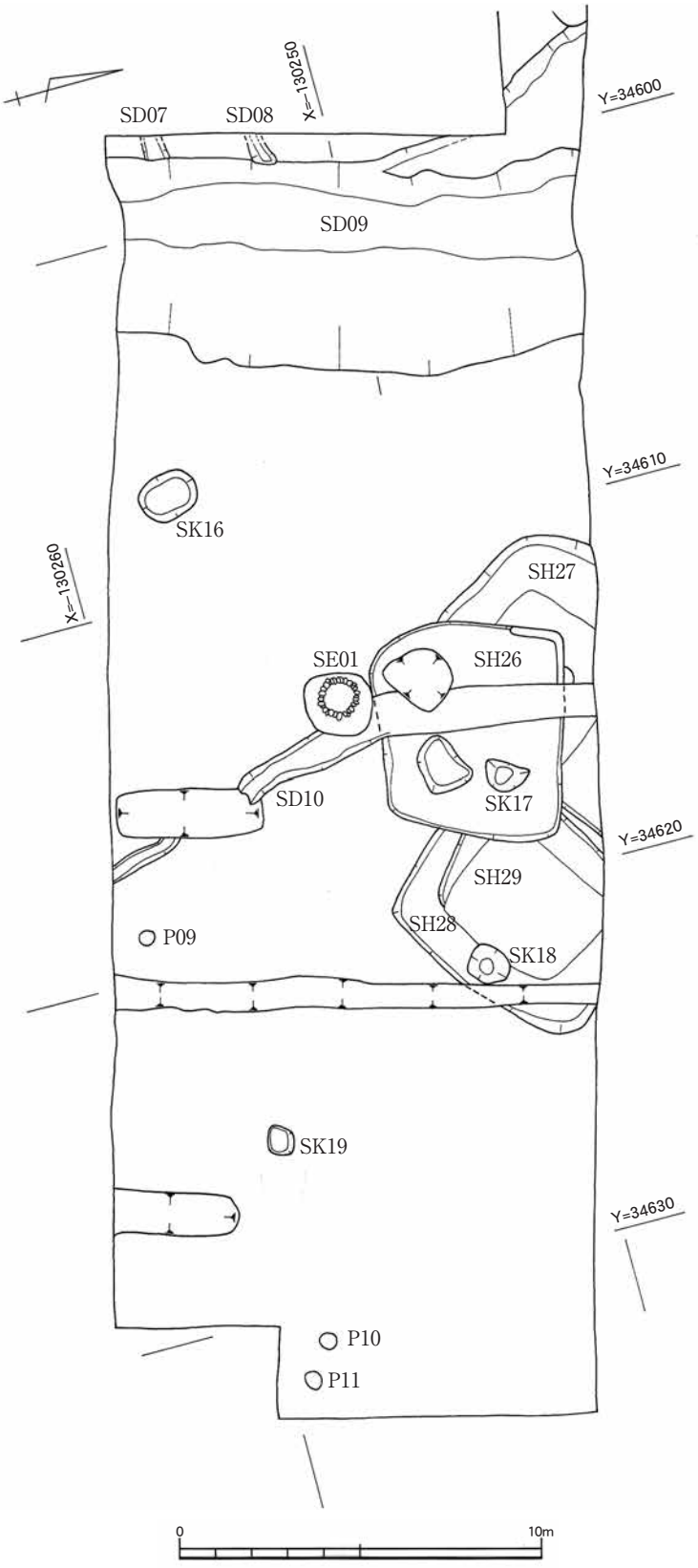
基本土層　当地区の基本土層は、基本的にはＡ区とほぼ同じであるが、東側ほど単純である。上から、表土・盛土層、旧耕作土層、土壌層、基盤層からなる（第 103 図）。

盛土層に関しては、Ａ区同様全域で認められ、その厚さは 30㎝～ 40㎝である。現地表面の標高は、12.90 ｍである。旧耕作土層に関しても全域で認められ、その断面の観察から畠地として利用されていたようである。基本的には、確認した範囲においては、レベル差は



1. 表土　2. 盛土　3. 旧耕作土　4. 暗灰色シルト質極細砂　5. 明灰色シルト質極細砂　6. 黄灰色シルト質極細砂　7. 黄灰色シルト質極細砂（土壌層）　8. 黄褐色極細砂　7. 黄褐色シルト質極細砂（基盤層）　10. 砂礫層（基盤層）

第 103 図　Ｃ区基本土層



第 104 図　Ｃ区平面図

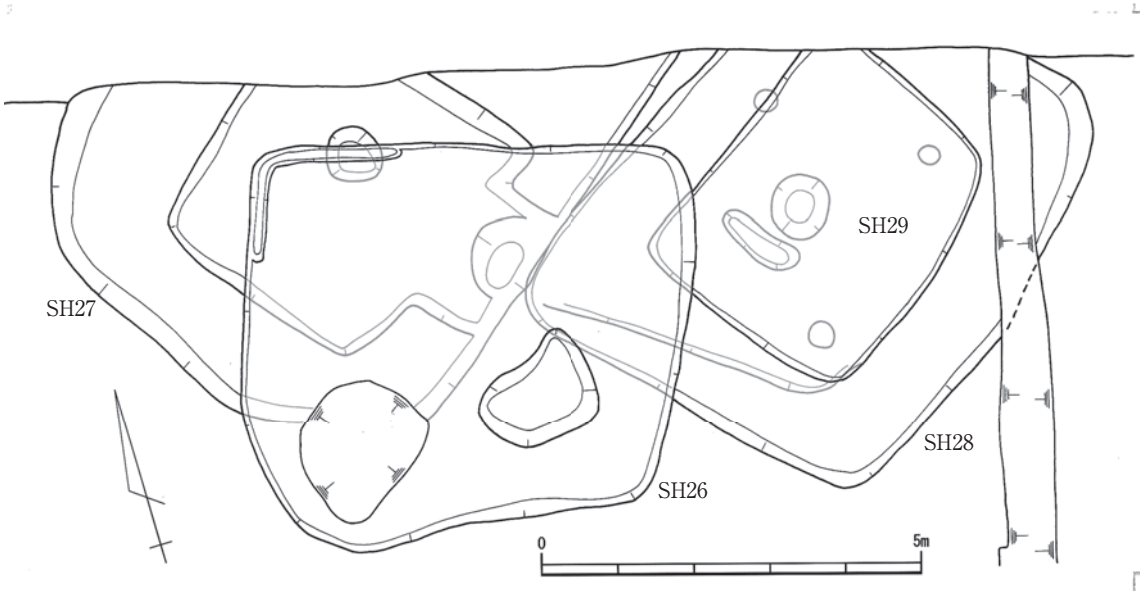
認められない。土壌層に関しては、基本的に１層からなり土壌化があまり顕著ではない。

基盤層は、砂層と礫層からなるが、後者が大半を占めている。特に東側ほど礫層が顕著で、その礫も大型である。以上から、東側から西側への堆積が認められる。

遺構の検出　遺構は、土壌層下面で検出し、この１面のみで検出している。その標高は 12.40 ｍと、Ａ区より高くなっている。特に東側では礫層上面で遺構を検出している。

２．竪穴住居跡

はじめに　計４棟（ＳＨ 26 ～ＳＨ 29）検出した（第 104 図）。これらの住居跡は、全て１箇所で切り合い関係をもって、まとまって検出されている（Ｃ区中央住居跡群：第 105 図）。ただし、最も新しいＳＨ 26 の掘削が浅かったため、これに切られているＳＨ 27 とＳＨ 28 は比較的良好な状態で検出されている。



第 105 図　Ｃ区中央住居跡群

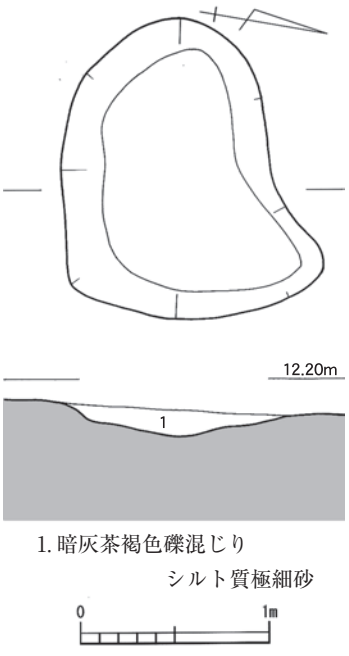
ＳＨ 26（写真図版 35）

検出状況　調査区中央部北側で検出した（第 104 図）。Ｃ区中央住居跡群中に位置する。Ｃ区中央住居跡群の中では最も新しく、他の住居跡群を切っている。住居跡内の一部が後世の撹乱を受けているが、住居跡全体が検出されている。

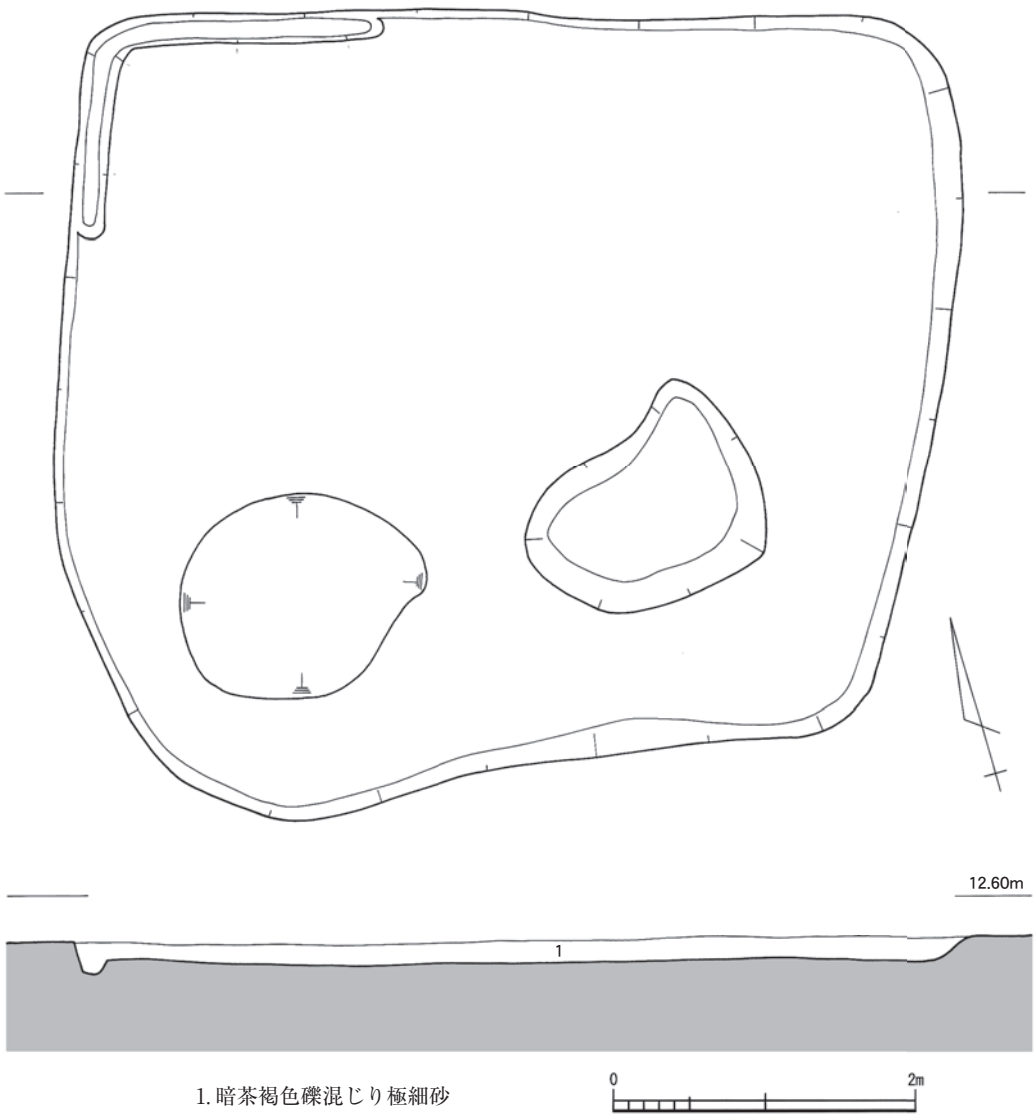
形状・規模　平面形は、長方形を基本形とするが、南辺から東辺にかけて歪んでいる（第 107 図）。特に、西辺から北辺にかけて直線的であるのに対して、南辺は大きく歪んでいる。南北方向に主軸をとり、主軸方向で 5.33 ｍ、その直交方向で 5.90 ｍを測る。両者を基準とした床面積は、31.44㎡である。住居跡中央部床面における検出面からの深さは 14㎝を測り、住居跡中央部における床面の標高は 12.07 ｍである。

付属施設　周壁溝と土坑を検出した。

周壁溝　住居跡北西隅を中心に検出されている。床面における幅 18㎝を測り、横断面は逆台形をなす。床面との比高は４㎝である。



第 106 図　ＳＨ 26 内土坑



第 107 図　ＳＨ 26

土　坑　　住居跡南東部に位置する。平面形は不定形で、主軸は東西方向を示す（第 106 図）。その規模は、主軸方向で 1.60 ｍ、その直交方向で 1.38 ｍを測る。横断面は皿形をなし、最深部における床面からの深さは 14㎝である。

土坑内には暗灰茶褐色礫混じりシルト質極細砂１層が堆積していた。埋土内には、炭片と焼土片が多くはないが含まれていた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

埋没状況　　暗茶褐色礫混じり極細砂１層からなる（第 107 図）。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　　土器と金属製品が出土している。

土器　　土師器と須恵器が出土している（図版 14）。

土師器　　甕と甑が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。甑は、把手が出土しており、舌状をなす。

須恵器　杯H蓋（312・313）・蓋（314）・杯H（315 ～ 320）・高杯（321・322）・甕（323）・壺（324）が出土している。

杯H蓋は312と313の２個体出土している。いずれも完形に復元できるもので、法量的にも類似する。312の天井部は回転ヘラ削り後、313の天井部は回転ヘラ切り後、ナデ調整が加えられている。

蓋は314の１個体が出土している。杯Bの蓋と考えられ、釦状のつまみのみ残存する。天井部内面には当具痕が認められ、その上にナデ調整が加えられている。

杯Hは、315 ～ 320の６個体出土している。法量的な差が認められ、319と320は明らかに小型である。316・317・319の底部は、ヘラ切り後ナデ調整が加えられている。また、318の底部は回転ヘラ切り後、体部側をヘラ削りし、その後ナデ調整が加えられている。

高杯は321と322の２個体が出土している。321は、短脚の高杯で完形に復元できた個体である。杯部は杯H蓋を逆にした形態で、脚部は大きく開き、端部が下方へつまみ出されている。透かしは認められない。脚部内面には、斜方向の絞り目が認められる。322は長脚の高杯で、脚部のみ残存する。脚部には、上下２段に長方形透かしが開けられている。また、脚部中位には２条の沈線が引かれている。

甕は323の１個体が出土している。完形に復元できた個体である。倒卵形の体部に口縁部が斜外方に直線的にのび、端部が玉縁状をなす。体部外面は叩き成形により仕上げられ、内面は当具痕が顕著に残存する。

壺は、324の１個体で、横瓶に分類されるものである。底部を除いて復元でき、体部中位には充填痕が認められる。また、口縁部内面には「N」字状のヘラ記号が認められる（第108図）。

第108図　324拓影

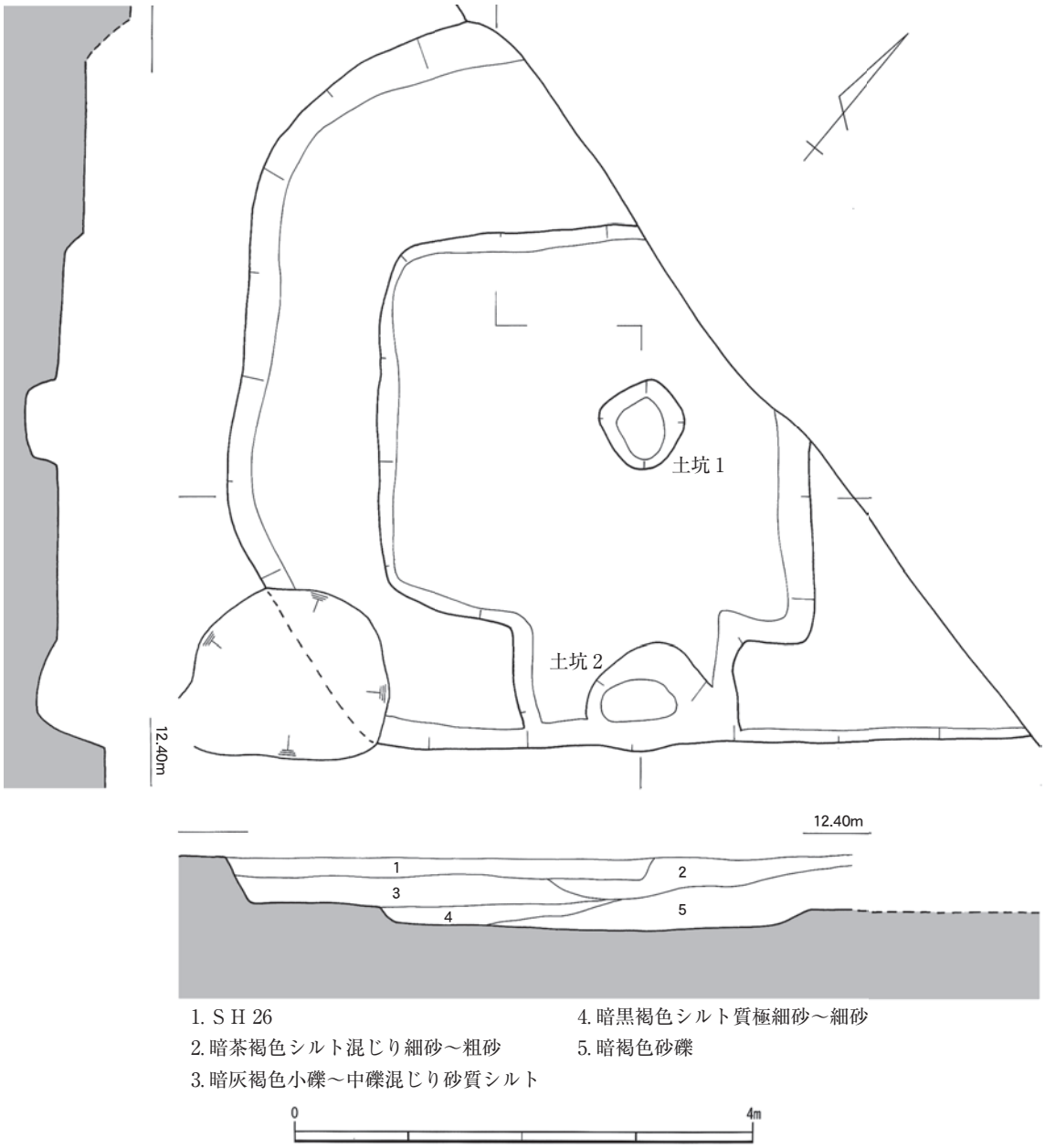
金属製品　鉄鏃２点（M５・M６）が出土している（図版26）。M５は、関部を中心に茎と刃部がわずかに残存する。残存長4.85㎝を測り、関部長は2.90㎝、刃部長は1.64㎝、茎部長は3.10㎜残存する。また、関部は断面長方形をなし、その規模は7.8㎜×4.50㎜である。刃部の断面はレンズ状をなし、幅2.38㎝、中央部の厚さ３㎜を測る。

M６もM５と同タイプの鉄鏃である。刃部から茎部まで残存し、残存長は6.90㎝を測る。刃部は先端部を欠き、残存長１㎝、最大幅2.5㎝を測る。横断面はレンズ状をなし、中央部の厚さは4.5㎜である。関部は、全長2.90㎝を測り、断面は8.5㎜×5.5㎜の長方形をなす。茎部もほぼ完存し、全長３㎝を測る。横断面は径4.5㎜の円形をなす。刃部には木質の付着が認められた。

時　期　出土土器から、古墳Ⅰ期新相に位置付けられる。

ＳＨ27（写真図版35）

検出状況　調査区中央部北側で検出した（第104図）。C区中央住居跡群中に位置する（第105図）。ＳＨ26検出後明らかとなった住居跡で、北隅から東側にかけては調査区外に拡がっている。また、南隅は後世の撹乱を受けている。このため検出できたのは、全体に約3/4である。



第 109 図　ＳＨ 27

形状・規模　平面形は、長方形もしくは方形をなす（第 109 図）。南東辺は直線的であるのに対して、南西辺から北西辺にかけては大きく弧状をなしている。北西－南東方向に主軸をとり、主軸方向で 6.31 ｍ、その直交方向で 5.22 ｍ検出している。住居跡中央部床面における検出面からの深さは 58㎝を測り、住居跡中央部における床面の標高は 11.56 ｍである。

付属施設　高床部と土坑２基（土坑１・土坑２）を検出した。

高床部　南東部で途切れる以外、全周する形で検出されている。高床部内側のラインは直線的で、上面の幅は、南東側で 80㎝、南西側で 1.20 ｍ、北西側で 1.50 ｍを測る。また、床面との比高は 13㎝を測る。なお、途切れている箇所は、床面と同レベルである。

土坑１　住居跡中央部で検出されている（第 109 図）。いわゆる中央土坑に該当する土坑である。ただし、南北方向に主軸をとり、住居跡の棟軸方向とは一致しない。また、高床部内側を基準とすると、中央部よりやや東側に位置する。

平面形は方形傾向にあり、その規模は68㎝×68㎝を測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは12㎝である。埋土は、暗黒灰色極細砂～細砂１層からなる。

土坑２　住居跡南東辺近く、高床部が途切れた箇所で検出されている（第109図）。平面形は楕円形をなし、主軸は住居跡棟軸と直交する。床面における規模は主軸方向で1.08ｍ、その直交方向で66㎝を測る。横断面は、Ｕ字形をなし、最深部における検出面からの深さは15㎝である。

埋没状況　４層からなる（第109図）。いずれもその層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。なお、２層からは古墳時代後期の須恵器が出土したことから、ＳＨ26との関連が考えられる。

出土遺物　土器・石製品・金属製品が出土している。

土器　弥生土器の壺(325～327)･甕(329～333)･小型丸底壺(328)･鉢(334～337･340)･蓋(338)･ミニチュア土器(339)・高坏(341)が出土している(図版15)。

壺　複合口縁壺と直口壺が出土している。

複合口縁壺は、325と326の２個体が出土している。

325は、口縁部から頸部にかけて残存する。口縁部上段外面には櫛描波状文が施紋され、その後径1.5㎝の竹管円形浮文が貼り付けられている。櫛描波状文は12本を単位としている。竹管円形浮文は２箇所残存し､全体で８個貼り付けられていたものと復元できる。また、頸部外面には断面蒲鉾形の突帯が貼り付けられ、ヘラによるキザミ目が刻まれている。体部内面は指ナデにより仕上げられている。

326も口頸部を中心に残存する。口縁部上段が内側に直線的に立ち上がる。口縁部は横ナデ調整を基調に仕上げられているが、口縁部上段外面にハケ目がわずかに認められる。讃岐産の可能性が考えられる。

直口壺は、327の１個体が出土している。磨滅のため内外面の調整は観察できないが、全体的に器壁が薄く仕上げられている。

小型丸底壺　328の１個体が出土している。完形に復元された個体で、球形の体部に対して口縁部が斜外方に外反気味に開く。体部高に対して口縁部高が高い傾向にある。

甕　Ｖ様式系甕・布留式甕他が出土している。

Ｖ様式系甕は、329の１個体が出土している。底部のみの残存で、明確な平底をなす。底部は輪台状をなす。

布留式甕は、330～332の３個体出土している。330は口縁部のみの残存であるが、口縁端部は肥厚しない。331は典型的な布留式甕で、球形の体部に対して口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は内傾する面を有する。332は、口縁部が直線的に立ち上がり、端部は肥厚しない。内面はヘラ削りにより仕上げられている。

他のタイプは、333の１個体である。小型の甕で、内外面ともハケ調整により仕上げられている。

鉢　334と335の２個体が出土している。334は、平底の底部から口縁部にかけてわずかに内湾気味に立ち上がるもので、Ｖ様式系甕の下半部と同形態をなすものである。335は、深い皿形をなすものである。口縁部は弱い横ナデ調整により、わずかに外反傾向にある。内面にヘラミガキの痕跡を観察することができる。

この他、336 と 337 の底部片についても、その形態的特徴から、鉢の可能性が考えられる。また、340 の脚台についても、台付鉢の可能性が考えられる。脚部外面はヘラミガキにより仕上げられている。

蓋　338 の１個体が出土している。つまみ部を中心に残存する。指オサエにより環状をなしている。

ミニチュア　339 の１個体が出土している。壺形をなす土器であるが、器高 6.3㎝と小型の土器である。手づくねを基調として仕上げられている。

高坏　341 の１個体が出土している。脚部を中心に残存する。脚高５㎝と小型の高坏である。脚部外面はヘラミガキにより仕上げられている。

石製品　管玉が１点（Ｓ９）出土している（図版 26）。縦に半裁された 1/2 が残存する。全長 2.05㎝、径 6.2㎜を測る。両側から穿孔され（写真図版 98）、その径は２㎜を測る。材質は軟質の緑色凝灰岩である（第４章第１節）。

金属製品　Ｍ８は、頭部を中心に残存し、その規模は 2.53㎝とわずかである。断面は長方形をなし、その規模は 6.7㎜× 4.5㎜である。残存する頭部幅は 9.8㎜を測る。

時　期　出土土器から、弥生Ⅱ期－４（布留期）に位置付けられる。

ＳＨ 28（写真図版 36 ～ 39）

検出状況　調査区中央部北側で検出した（第 104 図）。Ｃ区中央住居跡群中に位置する（第 105 図）。一部は、ＳＨ 26 を検出後明らかとなった住居跡で、北隅は調査区外に拡がっている。また、東隅は南北方向に後世の撹乱を受けている。このため検出できたのは、全体に約 3/4 強である。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は、長方形をなす（第 110 図）。北西辺と南東辺は直線的でほぼ平行するのに対して、南西辺は北西辺に直交せず、全体的に歪んだ形状をなしている。北東－南西方向に主軸をとり、主軸方向で 6.40 ｍ、その直交方向で 5.30 ｍ検出している。また、両者を基準とした面積は、33.92㎡である。住居跡中央部床面における検出面からの深さは 45㎝を測り、住居跡中央部における床面の標高は 11.76 ｍである。

付属施設　高床部を検出した。

高床部　検出した範囲では全周する。高床部内側のラインは直線的で、住居跡肩部のラインとほぼ平行する。上面の幅は平行ではなく、南東側・南西側で１ｍ、北西側で 85㎝、北東側で 1.20 ｍを測る。また、床面との比高は 16㎝を測る。

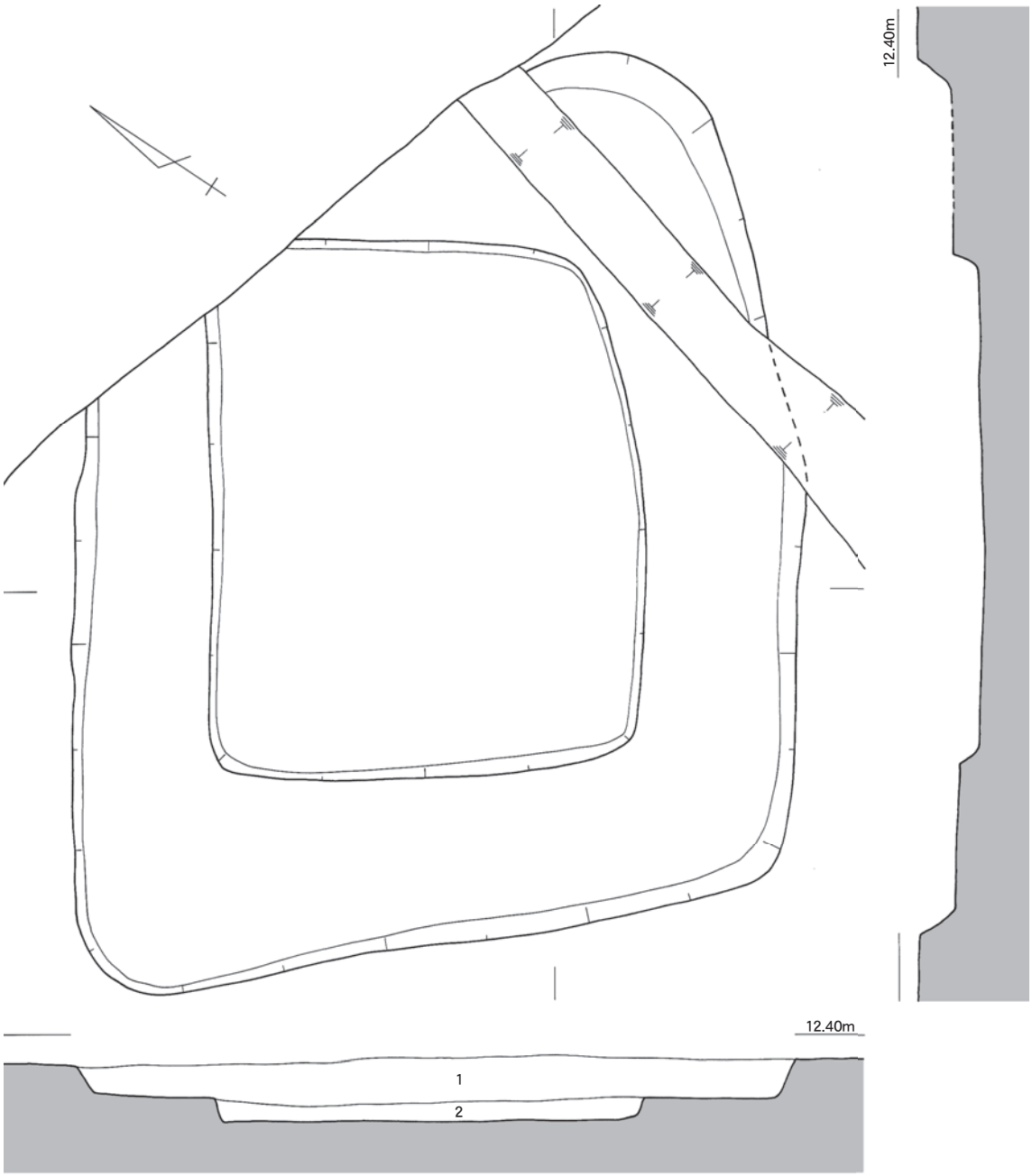
埋没状況　上から、暗灰茶褐色礫混じり極細砂質シルト、暗茶褐色極細砂混じりシルトの２層からなる（第 110 図）。いずれもその層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土器と石器が出土している。

土　器　多量に出土している（第 112 図）。当住居跡出土土器は、大きく２つに分類できる。

一つは、北隅を中心に出土した土器群（土器溜：第 113 図）である。土器溜（342 ～ 418：図版 15 ～ 21）については、当住居跡が廃絶後に一括で廃棄された土器群と考えられるものである。その堆積の中心が北側にあることから、北側から廃棄されたものと考えられる。その内容としては、甕が圧倒的に多く出土している。

後者は、住居跡全体から出土しているが、特に高床部西隅と床面西隅から比較的まとまって出土している（第 112 図）。当住居の機能時に使用されていた土器群と考えられる。



1. 暗灰茶褐色礫混じり極細砂質シルト
2. 暗茶褐色極細砂混じりシルト

0　3m

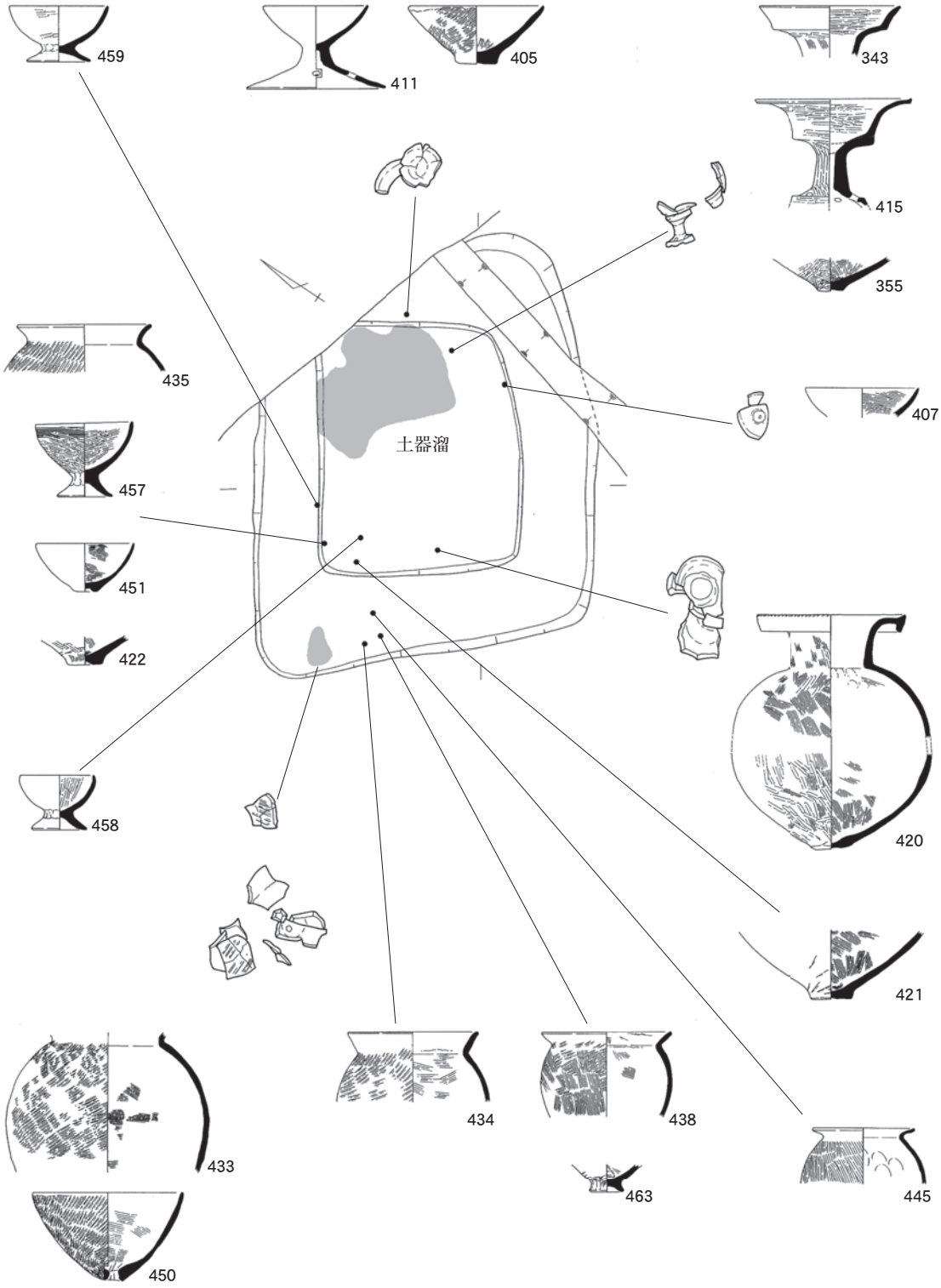
第 110 図　ＳＨ 28

土器溜　　壺・甕・鉢・高坏・器台が出土している（図版 15 ～ 21）。

壺　　複合口縁壺・広口壺・短頸壺・底部・直口壺が出土している（第 114 図）。

複合口縁壺は、342 と 343 の 2 個体が出土している。342 は、口縁部上段が直立気味に立ち上がる。口縁部上段外面には櫛描波状文が飾られている。343 は、外傾する

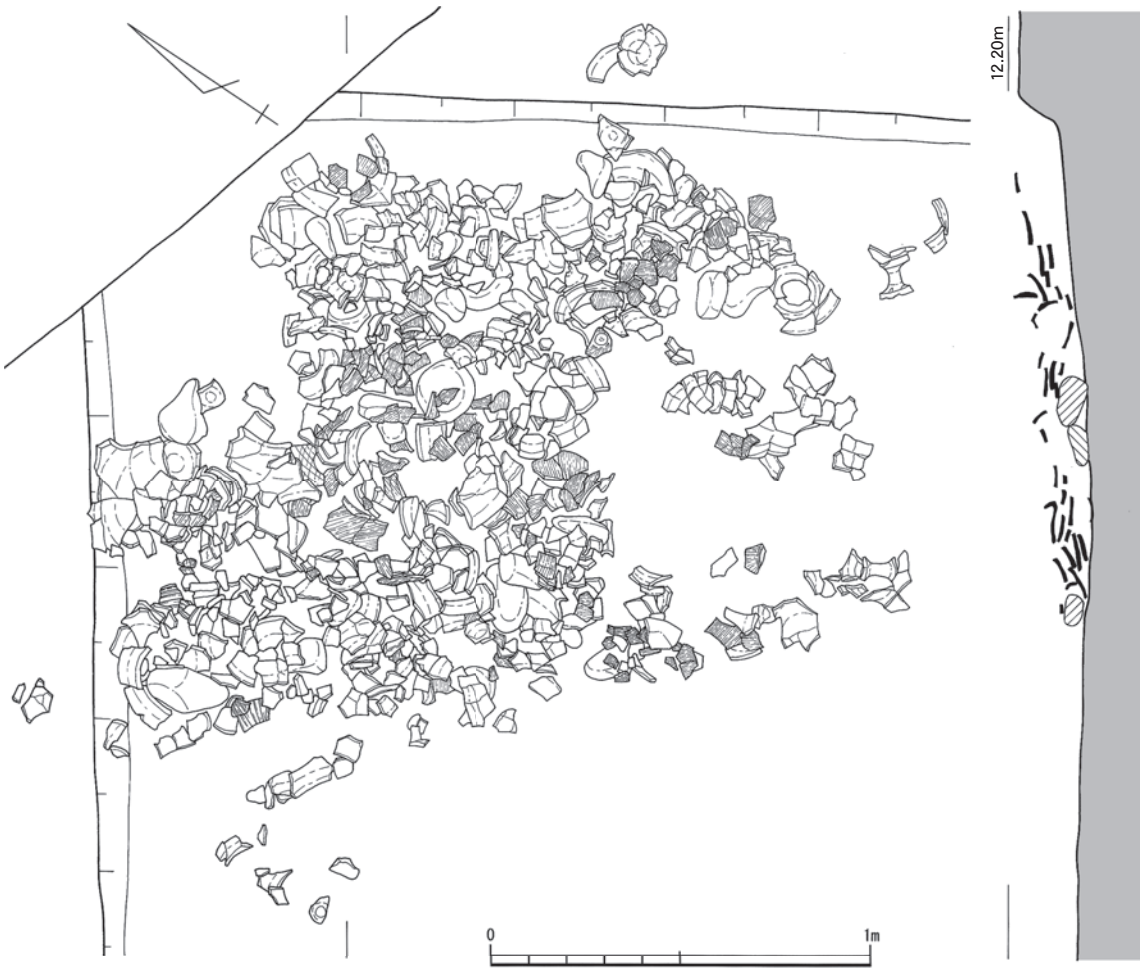
第 111 図　土器溜の検出



第 112 図　ＳＨ 28　土器出土位置

頸部に対して、口縁部上段も外反する。口縁部内面はヘラミガキにより仕上げられているが、装飾は認められない。

広口壺は、344 ～ 347・351 の 5 個体が出土している。344 は、直立する頸部に対して口縁部が大きく外反する。口頸部内面にヘラミガキの痕跡が認められる。また、体部外面にもヘラミガキの痕跡が認められる。351 も形態的には 344 とほぼ同様の特徴が認められる。



第 113 図　ＳＨ 28 土器溜

口縁部から体部中位まで残存し、ハケ調整を基調に仕上げられ、外面にはヘラミガキが加えられている。

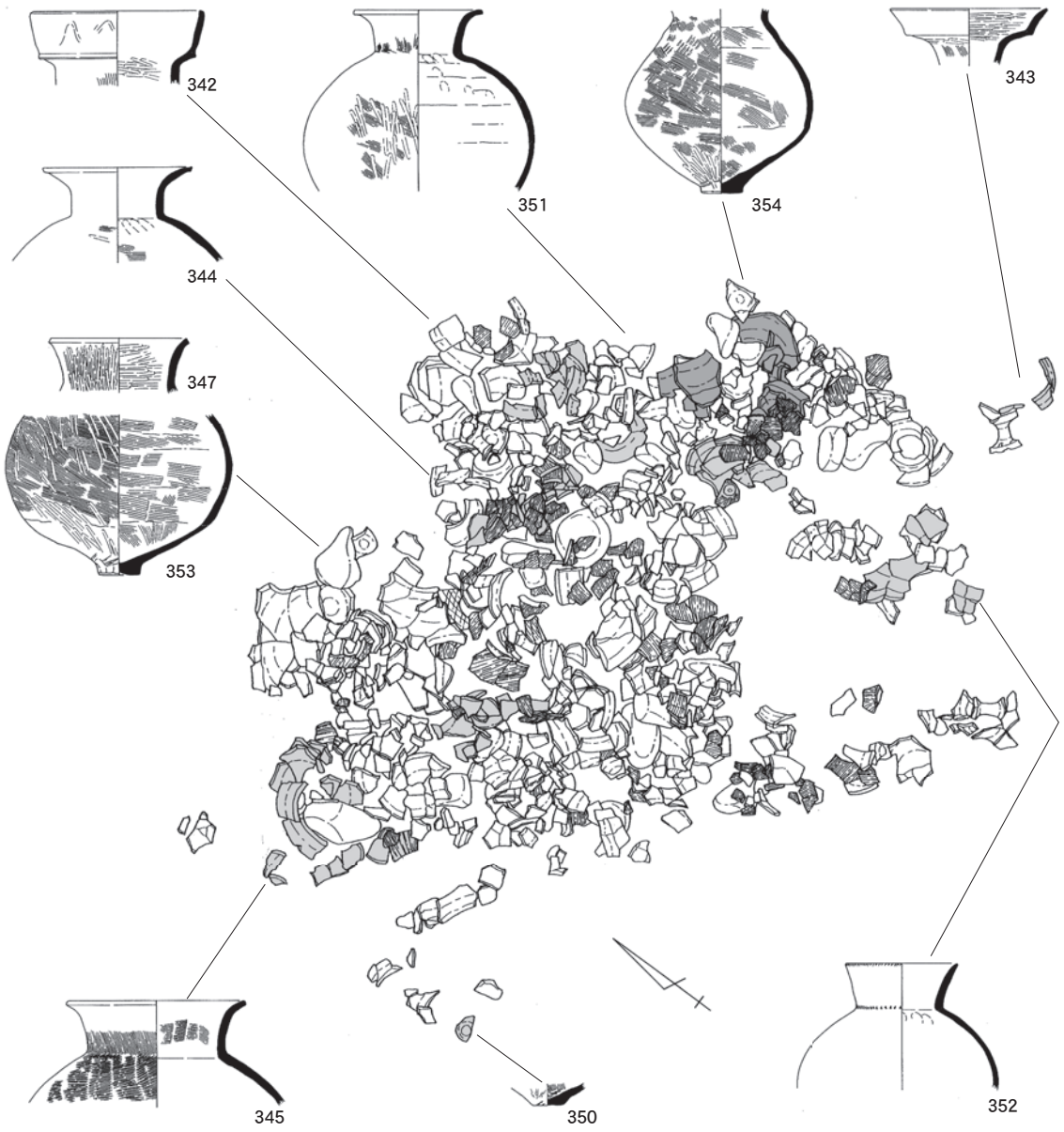
345 は、体部の規模に対して口径が大きい点が特徴的である。直立する頸部に対して口縁部がわずかに外反する。体部は叩き成形により仕上げられている。346 は口縁部のみの残存で、内外面ともハケ調整を基調に仕上げられている。347 は 346 と同形態であるが、口縁端部に端面を有する。内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。

この他、353 の体部についても、その特徴から広口壺の体部と考えられる。底部は突出した平底をなし、底部中央がわずかに窪む。体部は内外面ともハケ調整を基調として仕上げられ、外面にはヘラミガキが暗文状に施されている。

短頸壺は、348 と 349 の２個体出土している。348 は、器高 9.35㎝と小型の壺で、完形に復元されている。底部はわずかに平底形態を留めている。

底部は、350 と 355 の２個体が出土している。わずかに平底形態をとるもので、叩き成形により仕上げられている。355 は叩き整形後、ヘラミガキにより仕上げられている。

直口壺は、352 の１個体が出土している。球形の体部に対して、口縁部が斜外方に直線的にのびるものである。口縁外端部にはキザミ目が、頸部外面には刺突文が施文されている。全体的に磨滅が著しく、調整は観察できない。



第 114 図　ＳＨ 28 土器溜　壺出土位置

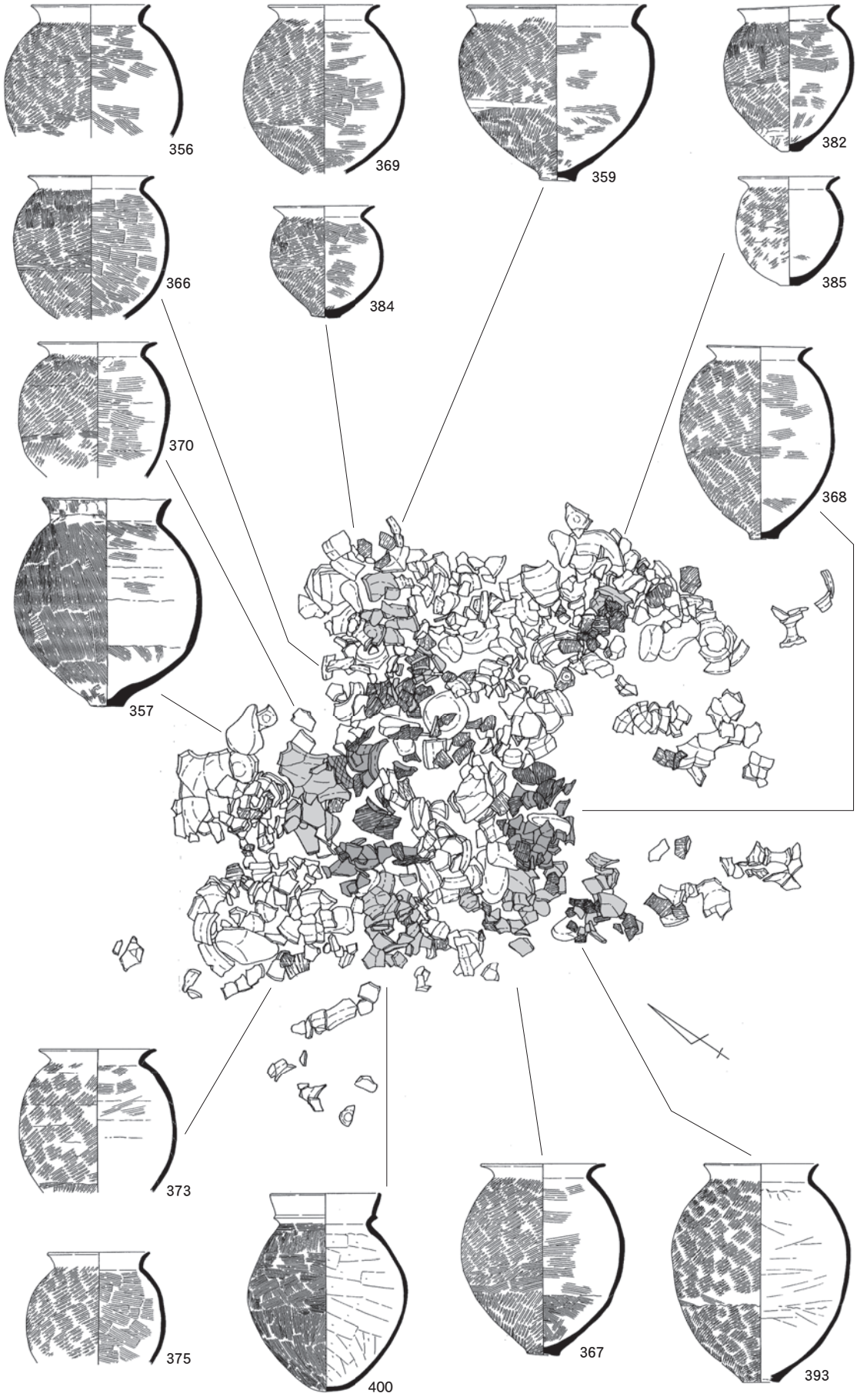
また、354 についても直口壺の体部と考えられる。叩き成形を基調に整形され、ハケ調整により仕上げられている。底部付近にはヘラミガキが加えられている。

甕　Ｖ様式系甕と山陰系甕が出土している（第 115 図）。

山陰系甕は、400 の１個体である。完形に復元できた個体で、体部は倒卵形をなし、底部は尖り底をなしている。体部内面はヘラ削り、外面はハケ調整により仕上げられている。口縁部の屈折部外面は断面三角形の突帯状をなすが、比較的シャープに仕上げられている。外面は被熱により赤変し、煤の付着が認められる。在地産と考えられる（第４章第２節）。

Ｖ様式系は、356 ～ 399 の 44 個体出土している。これらの甕の基本的な成形技法等は、同じ特徴が認められる。体部外面を叩き整形、内面をハケ調整後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。個体によっては、体部外面の叩き整形後、ハケ調整が加えられている。

ただし、体部内面の調整において、393 のようにハケ調整が認められず、ヘラナデにより



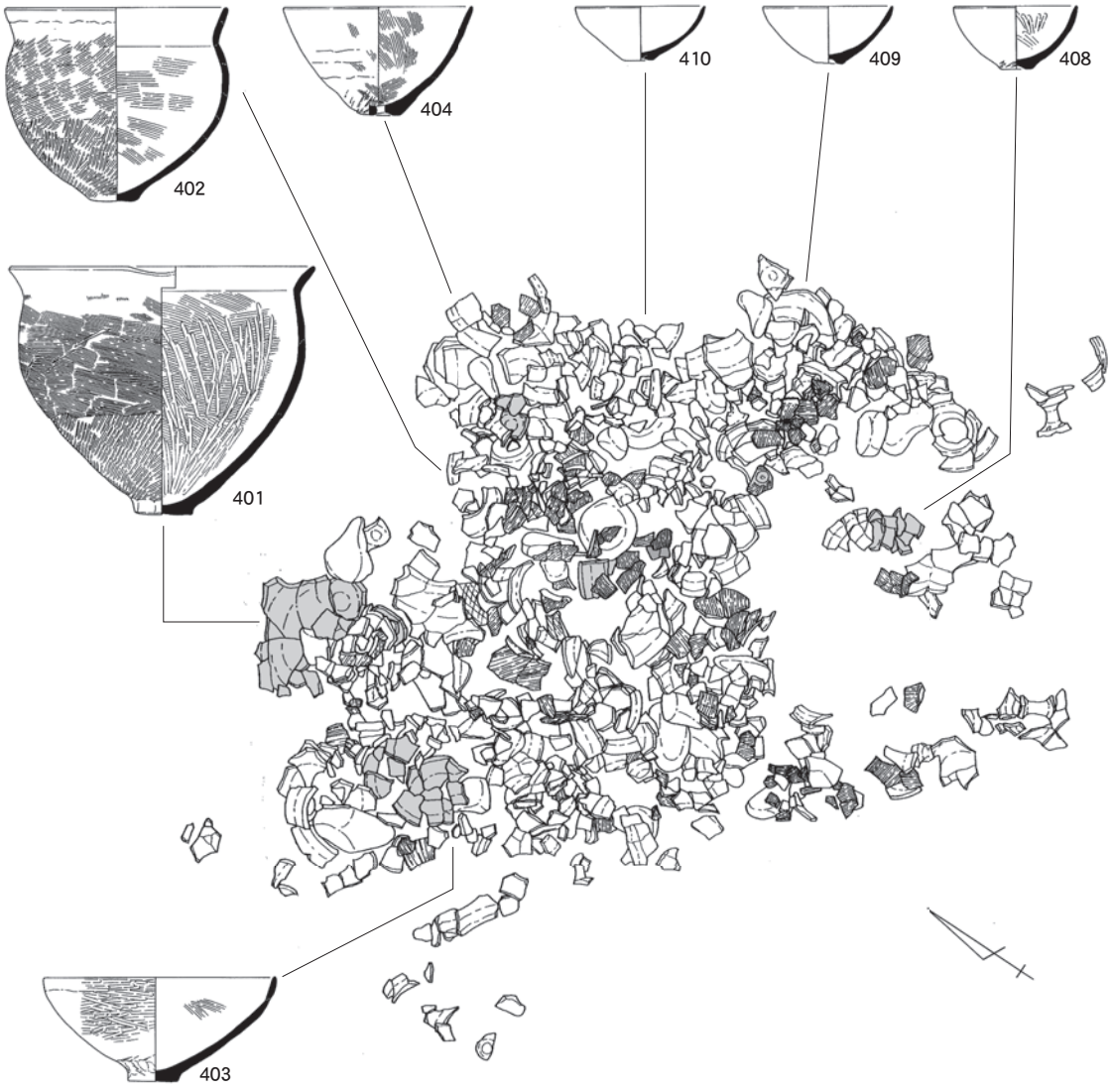
第 115 図　ＳＨ 28 土器溜　甕出土位置

仕上げられているものも出土している。

体部外面については、364 は部分的ではあるが、ヘラミガキが加えられている。

この他、体部下半の整形と上半の整形との間に時間的不連続が認められる個体が少なからず認められる。この不連続部分の外面には、横方向のハケ調整が加えられている（写真図版 77 ～ 80・83 ～ 85）。356・361・363・364・366 ～ 370・373・377・382・384・393・394・396 がこの例である。この他、359 は、ハケ調整ではなく横方向の弱いヘラ削りが加えられている。359 は、底部についてもヘラ削りにより仕上げられている（写真図版 76）。また、374 は、弱いナデ調整が加えられている。ただし、いずれの個体も、内面には不連続部を観察することはできない。底部は、基本的に平底形態をとり、多くは中央部が窪む傾向にある。ただし、361 はわずかに平底形態を留めるもので、尖り底に近い。382 についても同様である。385 は、丸底に近い形態である。さらに、388 は尖り底形態をなしている。また、364・390・391 の底面には木の葉状圧痕が認められる。

法量的には、大きく大型・中型・小型に分類できる。大型としては 356 ～ 364・393、中型としては 365 ～ 383、小型としては 384 ～ 388 が該当する。



第 116 図　ＳＨ 28 土器溜　鉢出土位置

また、体部外面が被熱により赤変している個体が目立つ。357・359 ～ 361・365・366・370・372・374・376 ～ 378・381・382・384・385・396・399 が該当する。さらに、364 は、底部が赤変している。この他、375・381 は被熱による剥離が顕著である。

なお、359 については、形態的に鉢の可能性も考えられるが、外面の煤の付着・被熱痕から、甕として報告する。387 は、底部に径８㎜の穿孔が焼成前に行われている。

鉢　く字形口縁鉢・直口鉢・台付鉢・椀形鉢が出土している（第 116 図）。

く字形口縁鉢は 401 と 402 の２個体が出土している。401 は、口径 32.4㎝・器高 26.5㎝と大型の鉢で、ほぼ完存する。体部は、下半が叩き整形により、上半がハケ調整により、上半と下半との間が不連続である（写真図版 85）。内面はハケ調整を基調とし、ヘラミガキが暗文状に加えられている。また、口縁部の１箇所が片口となっている。402 は、体部から口縁部にかけて叩き整形により仕上げられている。底部はわずかに平底をなすが、丸底傾向にある。

直口鉢は、403 ～ 405 の３個体出土している。いずれも形態的特徴を異にする。403 は、口径 24.4㎝と大型の鉢である。口径に対して器高が低く、口縁部が体部に対して上方に屈曲している。外面は横方向のヘラミガキにより仕上げられているが、被熱により赤変している。404 は、403 とは逆で口径に対して器高が高い特徴が認められる。体部から口縁部まで直線的で、叩き整形後、内外面ともハケ調整を基調に仕上げられている。また底部中央部には径９㎜の焼成前の穿孔が認められる。405 は、突出した平底から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。叩き整形を基本に仕上げられている。底部中央はわずかに窪んでいる。

台付鉢は、406 の１個体が出土している。台部を中心に残存し、台部はユビオサエにより整形されている。

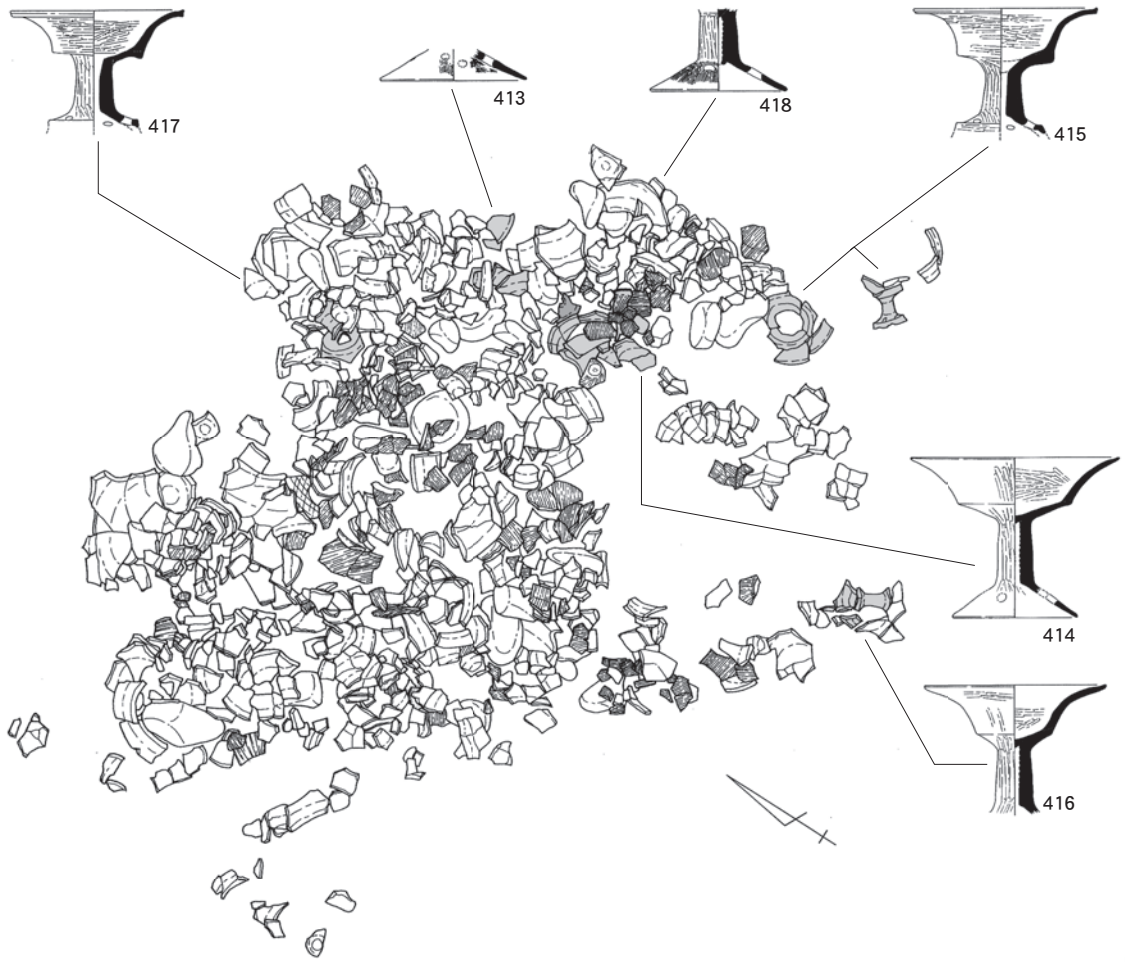
椀形鉢は、407 ～ 410 の４個体出土している。407 は、口径に対して器高が浅いタイプである。逆に 408 は、口径に対して器高が深いタイプで、底部は輪台状をなしている。器表面の剥離が顕著であるが、内面にヘラミガキがわずかに観察できる。また、外面底部付近には工具の当り痕が認められる。409 と 410 の底部も輪台状をなす。409 は内外面ともナデ調整により仕上げられている。

高坏　椀形高坏と有稜高坏が出土している（第 117 図）。

椀形高坏は、411 ～ 413 の３個体が出土している。411 は、坏部が比較的直線的で、脚部は大きく開く。脚部には円形の透かしが２箇所残存し、当初は４箇所に開けられていたものと考えられる。

412 は小型の精製高坏である。坏部は椀形をなすが、体部に対して口縁部が上方に立ち上がる。内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。脚部は大きく開き、円形の透かしが２箇所残存する。当初は４箇所に開けられていたものと考えられる。脚部外面の一部にはヘラミガキが認められる。413 は、その形態から椀形高坏の脚部と考えられる。円形の透かしが２箇所残存し、当初は４箇所に開けられていたものと考えられる。

有稜高坏は、414 ～ 416・418 の４個体出土している。414 は、完形に復元できた個体である。坏部は、浅い体部に対して口縁部が大きく外反する。内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。脚部は直立する脚柱部から裾部が短く開く。裾部には円形の透かしが１箇所



第 117 図　ＳＨ 28 土器溜　高坏・器台出土位置

に残存する。415 は、414 と比較して口縁部の外反度が大きい。また、脚部の裾部が屈曲している。全体的にヘラミガキにより仕上げられている。脚裾部には円形の透かしが５箇所開けられている。416 も基本的には 415 と同様の形態的特徴をなし、ヘラミガキにより仕上げられている。418 は脚部のみの残存である。414 と同タイプと考えられる。脚柱部はヘラミガキ、脚裾部はハケ調整により仕上げられている。

器台　417 の１個体が出土している。基本的な形態は、高坏の 415 と同じである。脚柱部が中空であることから器台と判断したものである。坏部内外面・脚柱部外面はヘラミガキにより仕上げられている。脚裾部は屈曲し、その上側に円形の透かしが４個残存する。当初は５箇所に開けられていたものと考えられる。

土器溜以外　壺・甕・鉢・高坏・器台が出土している（図版 21 ～ 23）。

壺　複合口縁壺・広口壺・長頸壺・短頸壺が出土している。

複合口縁壺は 419 の１個体が出土している。頸部を中心に残存する。

広口壺は 420 の１個体が出土している。体部中位を除いて、ほぼ完形に復元できた個体である。口縁端部は粘土の貼り付けにより口縁部に直交する端面を有し、その頂部にキザミ目が刻まれている。体部外面はハケ調整を基調とし、その後ヘラミガキが加えられている。ただし、全面ではなく、かつ弱いものである。

この他、421・422・430 についても、広口壺の一部の可能性が考えられる。430 の体部上

部にはヘラミガキがわずかに観察できる。

頸部が直立する広口壺は、423 ～ 427 の５個体が出土している。直立する頸部に対して口縁部が外反するものである。いずれもハケ調整を基調とし、仕上げられている。このなかで、425 の外面は、ヘラミガキにより仕上げられている。

長頸壺は、428 の１個体が出土している。口縁部を中心に残存し、内外面ともハケ調整により仕上げられている。

短頸壺は、429 の１個体が出土している。口径 7.45㎝、器高 9.2㎝と小型の壺である。全体的に磨滅が著しいが、ナデ調整を基調として仕上げられている。底部は尖り底傾向にあり、中央部はわずかに窪んでいる。

甕　431 ～ 449 の 19 個体出土している。Ｖ様式系に分類され、体部外面が叩き整形、内面がハケ調整を基調として仕上げられているものと（431 ～ 444）、外面全面がハケ調整により仕上げられているもの（445・446）、とが認められる。この他、法量的に大型（431 ～ 437）と小型（438 ～ 449）に分類できる。

このなかで、437 は完形に復元できた個体で、底部は丸底化傾向にある。体部外面は叩き整形後、部分的に縦方向のハケ調整が加えられている。また、体部外面は被熱により赤変している。

また叩き整形により仕上げられているタイプのなかには、438・444 のように、体部外面に叩き整形後ハケ調整が加えられている個体が認められる。444 は丸底化の傾向が顕著で、下半外面は被熱により赤変している。

外面全面がハケ調整により仕上げられている 445 と 446 は、タテ方向のハケにより仕上げられている。ただし、口縁部の特徴は異なり、445 は内湾傾向にあるのに対し、446 は外反する頸部に対して斜上方に大きく引き延ばされている。

この他、447 については、口径 8.5㎝と小型で、上記の甕とは特徴を異にする。口縁部は 446 のように、上方に大きく引き延ばされている。

なお、一括土器群で認められた体部下半の整形と上半の整形との間に時間的不連続が認められる個体は、１点も出土していない。

鉢　直口鉢・く字形口縁鉢・台付鉢が出土している。

直口鉢は、450 ～ 454 の５個体が出土している。法量的な差が認められ、450 のように中型のものと、451 ～ 454 のように小型のものに分類できる。

中型の 450 は、外面全面が叩き整形により仕上げられ、体部から口縁部にかけてわずかに内湾傾向にある。底部中央には、焼成前に開けられた穿孔が認められる。

小型の鉢は、内面がハケ調整、外面がナデ調整により仕上げられている。454 を除いては底部中央部が窪んでいる。また、いずれも叩き整形痕は認められない。

く字形口縁鉢は、台部が付かないもので、455 と 456 の２個体が出土している。ただし、456 に関しては、台部が付く可能性も考えられる。455 は、底部が丸底傾向にあり、全体的に小型丸底鉢に近い形態をなす。体部内外面がヘラミガキにより仕上げられている。また、体部外面には煤の付着が認められる。456 外面もヘラミガキにより仕上げられている。

台付鉢は、457 ～ 463 の７個体出土している。口縁部が残存する 457 ～ 459 については、

椀形の体部に台が付けられている。

457 は、体部外面をハケ調整後、体部内外面がヘラミガキにより仕上げられている。458 の体部についても、内面がヘラミガキにより仕上げられ、外面についてもヘラミガキの痕跡が認められる。459 についても、体部外面にヘラミガキの痕跡が認められる。

この他、460 の体部外面がヘラミガキにより仕上げられるとともに、体部内面もヘラナデにより仕上げられている。462 の体部内面もヘラナデにより仕上げられている。463 については、他の台付鉢と比較して台部高が低いが、鉢の底部と考えている。

高坏　有稜高坏が出土している。体部に対して口縁部が直線的にのびるタイプと、口縁部が段もしくは屈曲してのびるタイプが認められる。この他、脚部片が出土している。

464 と 465 は、体部に対して口縁部が直線的に斜上方へのびるタイプである。464 は、内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。

466 と 467 は、口縁部が途中で外反もしくは屈曲している。466 は、口縁部が外反するタイプで、口縁端部は上方につまみあげられている。内面はヘラミガキにより仕上げられているが、外面はハケ調整のみ観察できる。467 は、口縁部が明確に屈曲する。内外面とも横方向を基調としたヘラミガキにより仕上げられ、口縁部上半は横ナデにより仕上げられている。

468 は、体部と口縁部境に段が認められる。口縁部外面はヘラミガキにより仕上げられ、体部外面についてもヘラミガキの痕跡が認められる。内面は横ナデ調整により仕上げられている。

脚部は、469 ～ 473 の５個体出土している。469 と 470 は直立する柱状部を有するものである。外面は、ヘラミガキもしくはヘラナデにより仕上げられている。471 も直立する柱状部を有するものであるが、裾部中央が屈曲する。屈曲部の上側には、径９㎜～ 1.4㎝の円形の透かしが４方に穿たれている。472 も同タイプの脚部で、屈曲部の上側と下側に円形の透かしが開けられている。小片のため、透かしの個数の復元は困難である。

なお、473 は、椀形高坏の脚部の可能性が考えられるものである。円形の透かしが、１箇所に開けられている。外面はヘラミガキにより仕上げられている。

器台　474 ～ 476 の３個体出土している。474 は、受け部を中心に残存し、端部は肥厚し端面を有する。端面には径 6.5㎜の竹管文が等間隔で押されている。内外面ともハケ調整により仕上げられている。475 は、474 と比較して小型の器台である。受け部を中心に残存し、横ナデ調整により仕上げられている。476 は、裾部を中心に残存する。内面ともハケ調整により仕上げられている。

石　器　石鏃１点（Ｓ８）が出土している（図版 26）。埋土上層から出土している。凹基式に分類されるサヌカイト製の打製石鏃で、先端をわずかに欠く。残存長 1.95㎝を測り、基部幅は 1.55㎝である。中央部の厚さは 3.1㎜を測る。0.8 ｇ。

時　期　出土土器から、弥生Ⅱ期－２（弥生後期）に位置付けられる。

ＳＨ 29（写真図版 40・41）

検出状況　調査区中央部北側で検出した（第 104 図）。Ｃ区中央住居跡群中に位置する（第 105 図）。ＳＨ 28 検出後、その床面を掘り下げた段階で検出した住居跡である。多くはＳＨ 28 掘削の際に削平を受け、南西辺から南東辺にかけて検出できたに過ぎない。その立ち上がりも、わずか５㎝程である。このほか、中央土坑と主柱穴を検出したが、その位置関係から、住居跡の北側の一部は調査区外に拡がっていたものと考えられる。また、南西辺については、主柱穴との関係から、その西端は住居跡西隅に近いものと考えられる。

形状・規模　平面形は、方形もしくは長方形をなすものと考えられる（第 118 図）。検出した南西辺と南東辺は直角関係にはなく、全体に歪んだ形状をなしている。南西辺で 3.70 ｍ、南東辺で 1.10 ｍ検出している。この他、住居跡中央部床面における検出面からの深さは５㎝を測り、住居跡中央部における床面の標高は 11.80 ｍである。

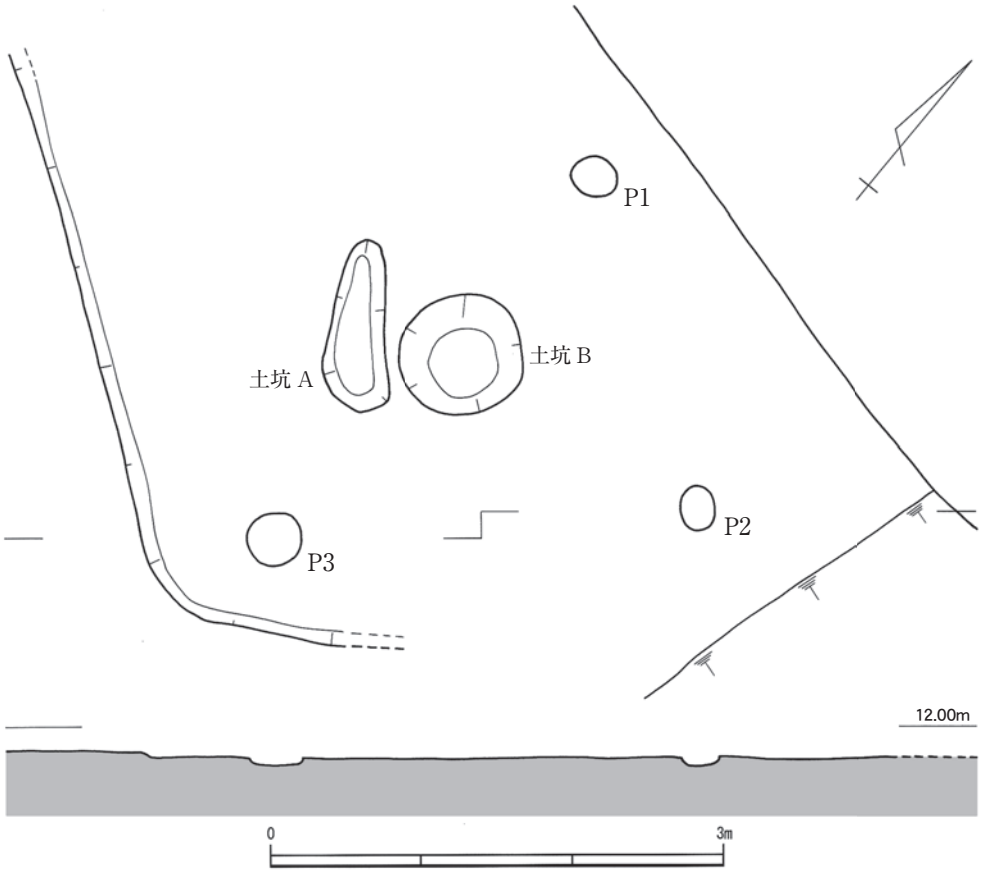
付属施設　主柱穴と中央土坑を検出した。

主柱穴　３穴（Ｐ１～Ｐ３）検出した。当初は、４穴あったものと考えられるが、西隅の１穴については検出できなかった。平面形は、３穴とも円形をなし、その規模はＰ１が 28㎝、Ｐ２が 22㎝、Ｐ３が 36㎝である。また、床面からの深さはいずれも５㎝である。なお、柱痕は検出されなかった。

この他、柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間・Ｐ２－Ｐ３間ともに 2.30 ｍである。

中央土坑　土坑Ａと土坑Ｂからなる、いわゆるイチマル土坑である（第 119 図）。

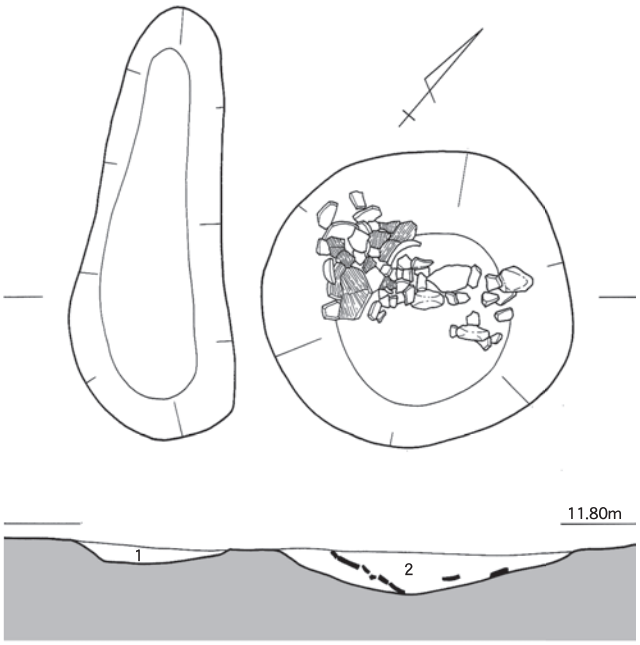
土坑Ａは、溝状をなす土坑で、土坑Ｂの南西側に位置する。北西－南東方向に主軸を取る。



第 118 図　ＳＨ 29

その規模は、主軸方向で 1.13 m、その直交方向で 42㎝を測る。横断面は浅い皿形をなし、最深部における床面からの深さは６㎝である。土坑内には、炭片のみが堆積していた。

土坑Ｂは、円形をなす土坑で、土坑Ａの北東側に位置する。主軸は土坑Ａとほぼ一致する。その規模は、主軸方向で 78㎝、その直交方向で 82㎝を測る。横断面は土坑Ａより深い皿形をなし、最深部における床面からの深さは 11㎝である。土坑内には暗褐色シルト混じり細砂１層が堆積していた。また、土坑内に落ち込むような状況で土器がまとまって出土している（480 ～ 486：図版 23・24）。



第 119 図　ＳＨ 29　中央土坑

出土遺物　弥生土器の甕と脚台が出土している（図版 23・24）。いずれも、中央土坑Ｂから出土している（第 119 図）。

甕は、480 ～ 485 の６個体出土している。いずれも、外面叩き整形によるＶ様式系の甕である。内面はハケ調整により仕上げられている。

このなかで 482 は、内面下半にヘラ削りが加えられている。483 はほぼ完存する個体で、底部は平底をなす。体部上半と下半の間に不連続部が認められ、この外面に横方向のハケ調整が加えられている。外面は、被熱により赤変している。

484 は、叩き整形後、内外面ともハケ調整により仕上げられている。底部は、ヘラナデにより尖り底をなす。485 も、尖り底をなす体部片である。内外面ともナデ調整により仕上げられているが、外面にわずかに叩き痕とハケ目が認められる。

脚台は 486 の１個体である。脚部を中心に残存し、その形態から台付鉢の脚台と考えられる。全体的に磨滅のため調整は観察できない。

時　期　出土土器から、弥生Ⅱ期－２（弥生後期）に位置付けられる。

３．柱穴

はじめに　ここでは、建物を構成しない柱穴において、良好な資料が出土したものが数穴認められる。そこで、これらの柱穴について、出土遺物を中心に報告する。本項では、３穴（Ｐ 09 ～Ｐ 11）について報告する。

P 09

検出状況　調査区中央部で検出した（第 104 図）。C区中央住居跡群の南側に位置する。

出土遺物　弥生時代の甕と高坏が出土している（図版 24）。

甕は 489 の 1 個体が出土している。底部から体部にかけて残存し、内面はヘラ削りにより仕上げられている。また、外面にはヘラミガキが加えられて、被熱により赤変している。

高坏は 490 の 1 個体が出土している。水平口縁高坏の口縁部片である。口縁部は、内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。

時　期　出土遺物から判断して、弥生Ⅰ期－３と考えられる。

P 10

検出状況　調査区東部で検出した（第 104 図）。P 11 の西側に位置する。

出土遺物　弥生時代の壺（487）が出土している（図版 24）。広口壺の口縁部で、内面にはヘラミガキ後断面蒲鉾形の突帯が貼り付けられている。突帯の頂部にはキザミ目が刻まれている。また、口縁端部は端面を有し、その上下頂部にもキザミ目が刻まれている。

時　期　出土遺物から判断して、弥生Ⅰ期－２（弥生時代中期）と考えられる。

P 11

検出状況　調査区東部で検出した（第 104 図）。P 10 の東側に位置する。

出土遺物　土師器の高杯（488）が出土している（図版 24）。有稜高杯の杯部で、内外面の調整は磨滅のため観察できない。

時　期　出土遺物から判断して、古墳時代と考えられる。

４. 井戸

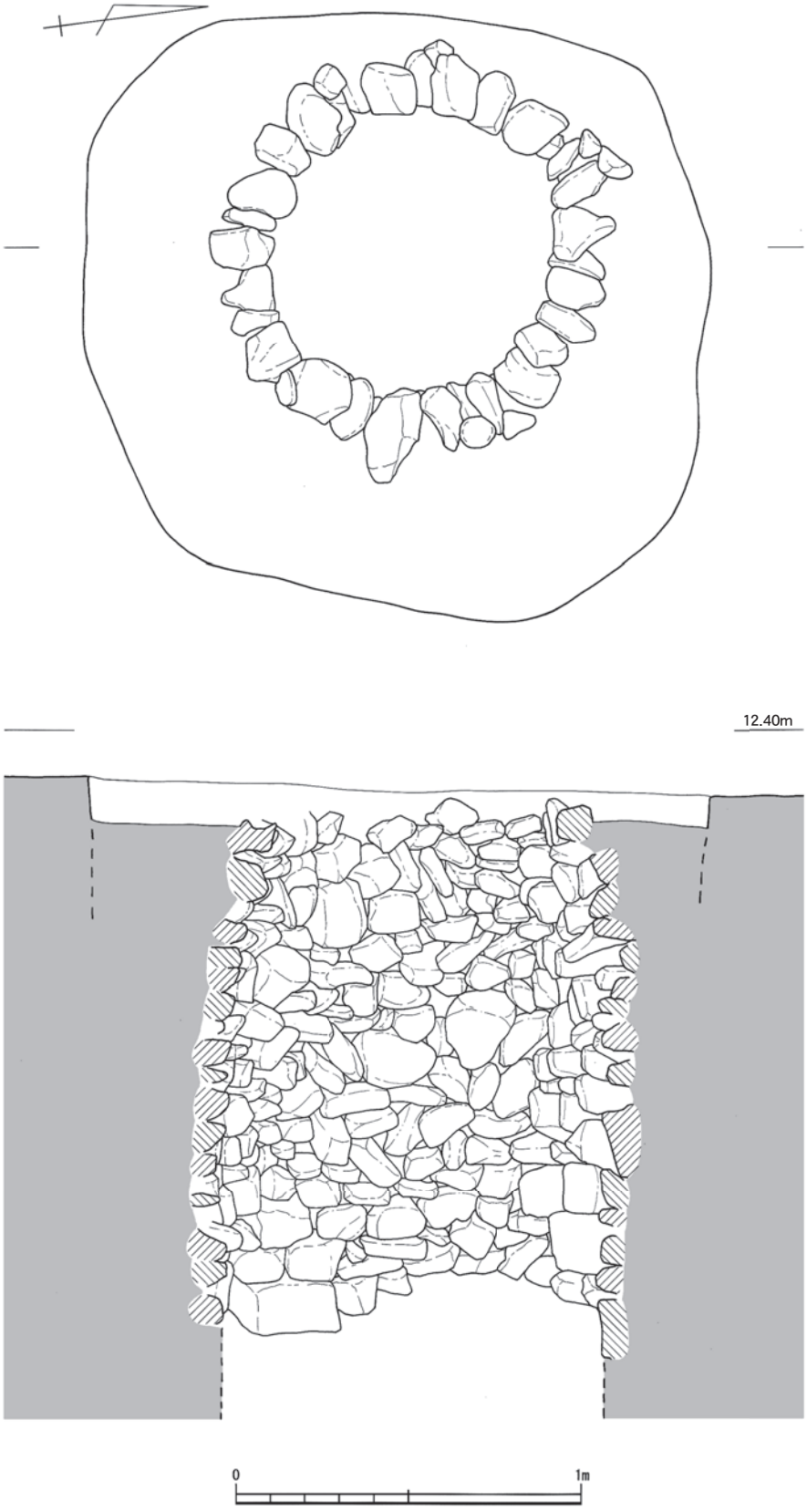
はじめに　ＳＥ 01 の 1 基検出している。

ＳＥ 01（写真図版 42）

検出状況　調査区中央部で検出した（第 104 図）。住居跡群の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。なお、この井戸の検出にあたっては、検出面から 1.5 ｍまでは、井戸枠内に入り検出し、井戸枠の検出･写真撮影･実測をおこなった。

その後、井戸の底まではかなり深いことが明らかとなり、安全上の問題から、上記の段階より深く掘り下げることを中止し、井戸全体を断ち割り、断面の観察をすることとした。しかし、断

第 120 図　ＳＥ 01 の調査



第 121 図　ＳＥ 01

ち割り作業の途中地下からの湧水が激しく、良好な状態での写真撮影･実測をおこなう前に、崩壊してしまった。このため、写真撮影・実測が不十分な状況のままである。

掘り方　平面形は隅丸方形をなす(第 121 図)。南北方向に主軸をとり、その規模は主軸方向で 1.82 m、その直交方向で 1.73 mを測る。

井　筒　石が円筒形に積み上げられている。その内径は、上面で 80㎝を測る。使用された石は、河原石からなる。その大きさは、５㎝大～ 30㎝大と、一定していない。基本的に、本遺跡の基盤をなす礫層中から入手したものと考えられる。

底部については、湧水が激しく、十分記録することはできなかった。石組上面から 2.4 m が底部にあたり、その標高は 11.80 mである。

出土遺物　井筒内から染付磁器・備前焼甕・須恵器甕が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。染付磁器は 18 世紀代に、備前焼は 15 世紀代に、位置付けられるものである。

この他、井筒内から茎状の鉄製品(Ｍ７)が出土している(図版 26)。残存長 9.18㎝を測り、断面は 6.3㎜× 6.8㎜の円形をなす。

時　期　出土遺物から判断して、近世と考えられる。

５．土坑

はじめに　４基(ＳＫ 16 ～ＳＫ 19)検出している(第 104 図)。

ＳＫ 16(写真図版 43)

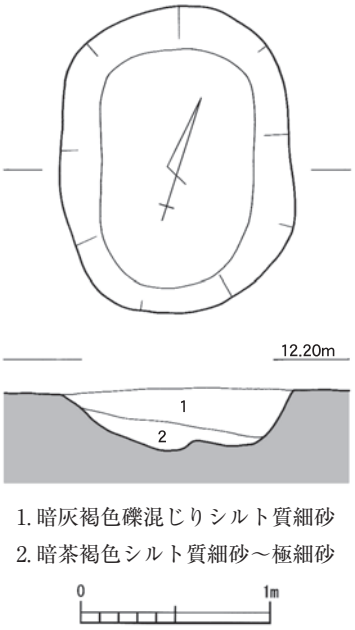
検出状況　調査区西半部で検出した（第 104 図)。ＳＤ 09 の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は、隅丸長方形をなす（第 122 図)。ほぼ南北方向に主軸をとり、その規模は主軸方向で 1.62 m、その直交方向で 1.23 mを測る。横断面は逆台形をなすが、底部は一部二段になっている。最深部における検出面からの深さは 33㎝である。

埋没状況　埋土は、上から暗灰褐色礫混じりシルト質細砂、暗茶褐色シルト質細砂～極細砂の２層からなる（第 122 図)。下層中には、炭片と焼土片が多く含まれていた。上層については人為的に埋められたものと考えられ、下層については流れ込んだ層と考えられる。

出土遺物　須恵器の高杯１個体 (493) が出土している (図版 24)。完形に復元できた個体で、杯部は杯Ｈ蓋を逆さにした形態をなす。脚部は杯部接合部から「八」字形に拡がり、端部は外方へつまみ出され、薄く仕上げられている。

時　期　出土遺物から判断して、古墳Ｉ期新相と考えられる。



1. 暗灰褐色礫混じりシルト質細砂
2. 暗茶褐色シルト質細砂～極細砂

第 122 図　ＳＫ 16

ＳＫ 17（写真図版 43）

検出状況　調査区中央部北端で検出した（第 104 図）。Ｃ区中央住居跡群中に位置し、ＳＨ 27 に切られている。このため、検出できたのは全体の 1/2 に限られる。

形状・規模　平面形は、楕円形をなしていたものと考えられる。北西－南東方向に主軸をとり、その規模は主軸方向で 90㎝検出した。その直交方向は 1.20 ｍを測る。横断面はＵ字形をなすが、底部は一部二段になっている。最深部における検出面からの深さは 46㎝である。

埋没状況　埋土は、暗褐色シルト混じり極細砂１層からなる。埋土中には中礫が混入し、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　弥生土器の甕と鉢が出土している。

甕は、外面が叩き整形による体部片が出土している。鉢は、491 の１個体が出土している（図版 24）。椀形の鉢で、底部は丸底に近い尖り底をなす。内面はヘラミガキにより仕上げられ、外面にもヘラミガキ痕が認められる。

時　期　出土遺物から判断して、弥生Ⅱ期－３（庄内期）と考えられる。

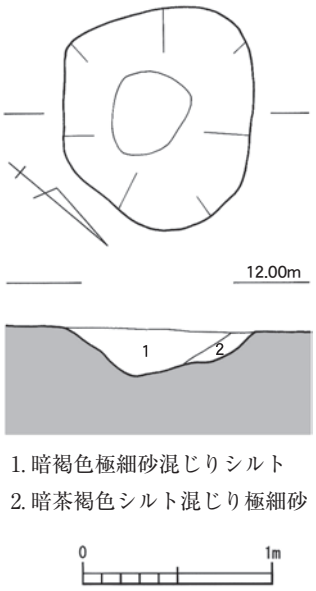
ＳＫ 18

検出状況　調査区中央部北端で検出した（第 104 図）。ＳＨ 28 と切り合い関係にあり、ＳＨ 28 を切っている。このため、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形は隅丸長方形を基本形とするが、全体的に歪んだ形状をなしている（第 123 図）。北東－南西方向に主軸をとり、その規模は主軸方向で 1.18 ｍ、その直交方向で１ｍを測る。横断面はＵ字形をなすが、底部の一部は二段になっている。最深部における検出面からの深さは 46㎝である。

埋没状況　埋土は、上から暗褐色極細砂混じりシルト、暗茶褐色シルト混じり極細砂の２層からなる（第 123 図）。下層中には焼土塊が混入していた。両層とも、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　弥生土器の甕と高坏が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。甕は、外面が叩き整形による体部片が出土している。



第 123 図　ＳＫ 18

時　期　出土遺物から判断して、弥生Ⅱ期－２（弥生時代後期後半）と考えられる。

ＳＫ 19

検出状況　調査区南東部で検出した（第 104 図）。他の遺構との切り合い関係は認められず、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形は、楕円形をなす。北西－南東方向に主軸をとり、その規模は主軸方向で 94㎝、その直交方向で 70㎝を測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは９㎝である。

出土遺物　須恵器の蓋(492)が出土している。天井部から口縁部にかけて屈曲する特徴が認められる。杯Ｈ蓋とは特徴を異にしている。

時　　期　出土遺物から判断して、古墳Ｉ期と考えられる。

５．溝

はじめに　４条(ＳＤ 07 ～ＳＤ 10)検出している。

ＳＤ 07

検出状況　調査区南西隅で検出した（第 104 図)。ＳＤ 08 の南側に位置する。ほぼ東西方向に直線的にのびる溝で、ＳＤ 09 と切り合い関係にあり、東側がＳＤ 09 に切られている。西側は、調査区外へ延びている。

形状・規模　検出した長さは 40㎝である。検出面における幅は、63㎝を測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは、11㎝である。

埋没状況　暗橙色シルト質極細砂、１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土遺物から時期の判断はできない。ＳＤ 09 との切り合い関係等から判断して、弥生時代と考えられる。

ＳＤ 08

検出状況　調査区西端で検出した（第 104 図)。ＳＤ 07 の北側に位置する。ほぼ東西方向に直線的にのびる溝で、ＳＤ 09 と切り合い関係にあり、ＳＤ 09 に切られている。検出した位置関係から判断して、Ａ区のＳＤ 05 の延長の可能性が考えられる。

形状・規模　検出した長さは 60㎝である。検出面における幅は、47㎝を測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは、18㎝である。

埋没状況　暗褐色シルト質極細砂、１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

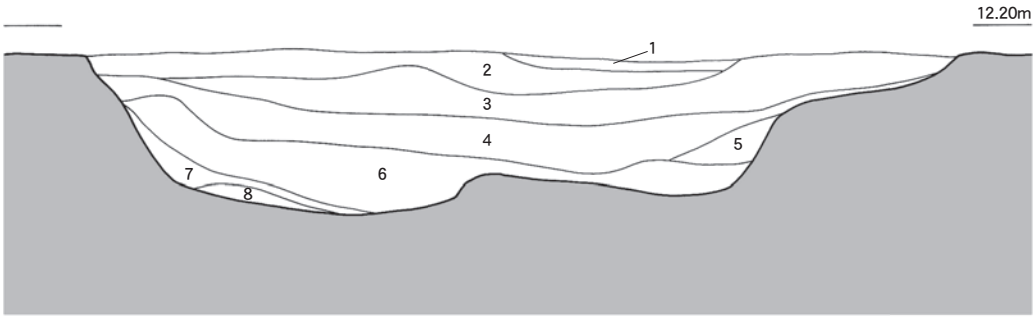
出土遺物　弥生土器の甕が出土している。527 は、口縁部に粘土紐を貼り付け、逆Ｌ字形をなす。529 は口縁部が如意形をなすものである。体部外面には、４帯の櫛描直線文が一部を重複させ描かれている。その後、半截竹管による波状文が２帯加えられている。

時　　期　出土遺物から判断して、弥生Ｉ期－１と考えられる。

ＳＤ 09(写真図版 43)

検出状況　調査区西端で検出した(第 104 図)。ほぼ南北方向に直線的にのびる溝で、ＳＤ 07・ＳＤ 08 を切っている。また、両端は調査区外へのびている(第 124 図)。

第 124 図　ＳＤ 09 の調査



1. 灰色砂礫（洪水層）
2. 暗黄灰褐色極細砂混じりシルト（土壌層）
3. 暗黒灰色シルト質極細砂（土壌層）
4. 暗灰色極細砂質シルト（土壌層）
5. 暗褐灰色礫混じり細砂（洪水層）
6. 黒灰色砂礫（土壌層）
7. 暗褐色細砂（洪水層）
8. 暗灰色礫（洪水層）

第 125 図　ＳＤ 09 断面

形状・規模　検出した長さは 13.00 ｍである。検出面における幅は、中央部で 5.65 ｍ、南端部で 4.85 ｍを測るが、北端部は 8.50 ｍと広くなっている。当溝は、東側肩部は２段にわたって掘られ、西側は１段にわたって掘られている。その横断面は、逆台形をなす（第 125 図）。最深部における検出面からの深さは、１ｍである。なお、底部の標高は、北端部で 11.01 ｍ、南端部で 10.98 ｍと、ほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、８層からなる（第 125 図）。基本的に洪水に起因して堆積した層と、その後土壌化した層からなる。特に、６層と８層は土石流による堆積と考えられ、５㎝大～ 10㎝大の礫が主体を占めている。５層についても、５㎝大の礫が多く含まれ、同様の起因による堆積と考えられる。

出土遺物　下層から弥生時代中期の土器が、上層から弥生時代後期の土器が出土している（図版 24・25）。

下層出土土器　壺・甕・高坏が出土している。

壺　494 ～ 502 の９個体出土している。494 は広口壺の口縁部で、直立する頸部に対して口縁部が外反する。直立する端面を有し、ヘラにより格子状に刻まれている。495 は、無頸壺である。口頸部外面には断面三角形の突帯が５条貼り付けられている。また、下端突帯の下側には櫛描直線文が引かれている。496 は、体部中位を中心に残存する。櫛描直線文と櫛描波状文が描かれている。櫛描直線文は６条以上、櫛描波状文は５条からなる。最下層から出土している。497 は、広口壺の口縁部である。加飾は認められない。最下層から出土している。

498 ～ 502 は底部片である。この中で、498 は、その形態的特徴から鉢の可能性も考えられる。499 の底部は、叩き整形後ナデ調整が加えられている。500 は、最下層から出土している。

甕　503 ～ 512 の 10 個体が出土しているが、いずれも中期初頭に位置付けられるものである。503 は如意形口縁をなすもので、外面には３帯の櫛描直線文とその下側に刺突列点文が飾ら

れている。体部内面にもヘラミガキが加えられている。505の体部外面には３帯以上の櫛描直線文が飾られている。櫛描直線文は７本を単位としている。506は、体部外面に上から、櫛描直線文４帯が描かれ、その上に半截竹管による波状文１帯が、櫛描直線文の下端に半截竹管による波状文２帯が描かれている。下端の半截竹管２帯は、波長が同じことから、同時に描かれた可能性が考えられる。また、櫛描直線文は上から一部を重ねながら施文されている。

底部は507～512の６個体出土している。507は、体部から底部にかけて残存し、底部中央には焼成後に穿孔が行われている。体部内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。胎土の特徴から、中期初頭に位置付けられる。他の底部片についても、胎土に同様の特徴が認められる。

高坏　513～515の３個体出土している。513は大型高坏の口縁部で、外面には凹線文が５条引かれている。514は、口縁部が水平方向に屈曲する半球形の高坏である。体部は内外面ともハケ調整を基調として仕上げられている。体部内面底部のハケは、他とは異なり目の粗い原体が使用されている。

515は脚部のみ残存する。外面には、櫛描直線文が間隔をあけて上下２段にわたり描かれている。内面はヘラ削りにより仕上げられている。

上層出土土器　甕・脚部・鉢が出土している。

甕　いわゆるＶ様式系甕と播磨型甕の２タイプが出土している。

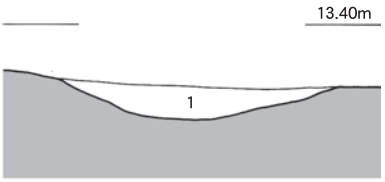
Ｖ様式系甕は、516～521の６個体が出土している。体部外面を叩き整形により仕上げる点を特徴とするものである。内面は、ナデもしくはハケ調整を基本とするが、521のようにヘラ削りにより仕上げられているものも出土している。520については、その形態から、壺の可能性も考えられる。

播磨型甕は、522～524の３個体出土している。522は、体部内面が横方向のヘラナデにより仕上げられている。外面はハケ調整により仕上げられているが、頸部付近と体部では異なる原体が用いられている。523は、底部から体部にかけて残存するが、外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。524は、522と同様の特徴が認められる。

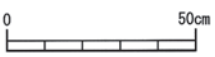
脚部　525の１個体が出土している。台付鉢の可能性が考えられる。脚部上位には円形の透かしが２箇所認められるが、当初は３箇所に穿たれていたものと考えられる。脚端部内面は横方向のヘラナデにより仕上げられている。

鉢　526と517の２個体が出土している。517は底部中央に径８㎜の穿孔が焼成前に穿たれている。526は底部から体部にかけて残存し、その形態から鉢と判断したものである。底部中央がわずかに窪み、木の葉痕が認められる。

時　期　出土遺物から、弥生Ⅰ期－１には掘削され、弥生Ⅱ期－２に埋没したと考えられる。



1.灰色礫混じりシルト質極細砂



第126図　ＳＤ10断面

ＳＤ10

検出状況　調査区中央部で検出した（第104図）。ほぼ南北方

向にやや弧状にのびる溝で、住居跡群・ＳＥ01と切り合い関係にある。住居跡群を切り、ＳＥ01に切られている。また、南側では後世の撹乱を受けている。しかし、ほぼ全容が理解できる状況で検出されている。なお、当溝は両端とも調査区外へのびている。

形状・規模　検出した長さは14.70ｍである。検出面における幅は、中央部で1.10ｍ、南端部で45㎝を測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは10㎝である（第126図）。なお、底部の標高は、中央部で12.23ｍ、南端部で12.30ｍと、わずかに南側へ傾斜が認められる。

埋没状況　埋土は、灰色礫混じりシルト質極細砂１層からなる。埋土中に５㎝以下の礫が含まれ、その層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の甕の体部片が出土している。

時　　期　ＳＨ26との切り合い関係から判断して、古墳Ⅱ期と考えられる。

６．包含層

はじめに　遺構には伴わないが、比較的良好な資料が出土している。これらの資料について、包含層出土遺物として報告する。出土資料としては、弥生土器と須恵器が出土している（図版25）。

弥生土器　中期初頭と後期末の土器が出土している。

中期初頭の土器としては、甕と壺が出土している。甕は、527と529の２個体が出土している。壺は、528の１個体が出土している。体部のみの残存で、その形態から細頸壺の一部と考えられる。外面には、上から、櫛描波状文・櫛描直線文・櫛描波状文・櫛描直線文・櫛描波状文・刺突列点文が飾られている。刺突列点文は、３個が一組となっている。

後期末の土器は、複合口縁壺２個体（530・531）と甕（532）が出土している。530は、大型の壺である。頸部内面は、ハケ調整後、その表面に粘土を貼り付け、形態が整えられている。531は、内外面とも磨滅が著しく、詳細な調整を観察することはできない。甕は口縁部を中心に残存する、Ｖ様式系の甕と考えられる。内外面とも磨滅が著しく、調整は観察できない。

この他、包含層からでなく遺構に伴うことは明らかであるが、その遺構を特定できない遺物が出土している。477～479の３個体であるが、ＳＨ28もしくはＳＨ27のどちらかに伴うものであるが、特定できないものである。477は甕の口縁部、478は甕の底部、479は鉢の底部である。いずれも、後期後半～庄内式期に位置付けられるものである。

須恵器　杯Ｈ蓋・杯Ｈ・𤭯が出土している。

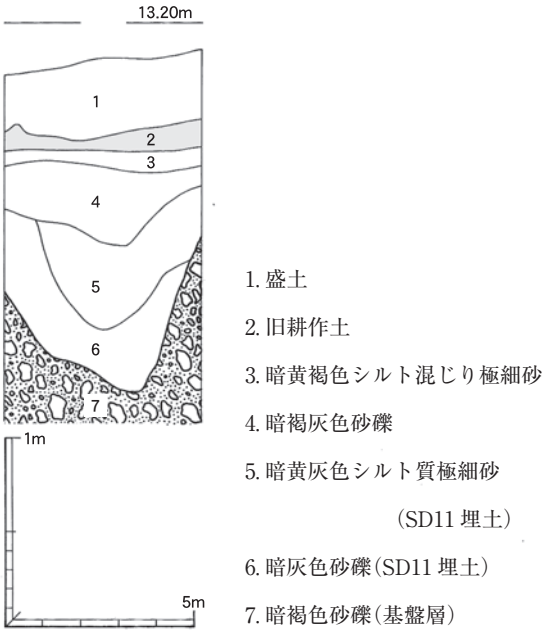
杯Ｈ蓋は、533の１個体が出土している。完形に復元できた個体で、天井部はヘラ切り後未調整である。杯Ｈは、534と535の２個体が出土している。法量的な差は認められるが、形態的な特徴はほぼ同じである。𤭯（536）は、体部のみ残存し、完存する。体部下半から底部にかけては粗い静止ヘラ削りにより仕上げられているが、一部回転が利用されている。体部中位には径1.5㎝の孔が開けられている。

第５節　Ｄ区の調査

１．概要

はじめに　当地区は、5.30 m × 6.00 mと、大変狭い調査区である。

基本土層　当区の基本土層は、上から、盛土・旧耕作土層、砂礫層・基盤層からなる（第 127 図）。砂礫層については、自然堆積によるものである。ただし、調査区の大半はＳＤ 11 内であったため、基盤層については、一部で検出されたに過ぎない。基本的には、砂礫層からなる。なお、他の調査区で認められたいわゆる土壌層は、認められなかった。



第 127 図　Ｄ区基本土層図

遺構の検出　当地区では、明確な遺構は検出されていない。ただし、自然堆積層下で土器を多く含む層（第 127 図：第５層・６層）を確認し、断面観察の結果溝状を呈することが明らかとなった。このため、当地区全体が溝内に位置するものと判断したものである。

２．溝

ＳＤ 11

検出状況　先述したように、当地区全体が溝内にあたるため、全体の概要等は不明である。

埋没状況　２層からなる（第 127 図）。

出土遺物　弥生土器の壺・甕・鉢・高坏・蓋が出土している（図版 27・28）。

壺　受口壺・短頸壺・広口壺・体部片・体部～底部片が出土している。

受口壺は、537 の１個体が出土している。口縁部のみの残存で、斜方向に直線的にのび、端部が直立する。屈曲部外面にはヘラによるキザミ目が刻まれている。

第 128 図　ＳＤ 11 断面

短頸壺は、538 の１個体が出土している。口縁部を中心に残存し、く字形に屈曲し、端部が上下方向に拡張されている。端面には４条の凹線が引かれた後、ヘラ描きによる斜行文が刻まれている。

広口壺は、539 と 540 の２個体が出土している。539 は、頸部に対して口縁部が大きく外反し、明確な端面を有する。端面には凹線が１条引かれるとともに、端面上端にはキザミ目が刻まれている。また、口縁部内面には断面台形の突帯が１条貼り付けられている。貼り

付けに際し、ヘラにより押さえられた結果、突帯上面は波状を呈している。540 は、口縁部が外反し、端部を下方へ大きく拡張させている。端面にはヘラにより斜行文が刻まれ、その上に円形浮文(径１㎝～ 8.5㎜)が貼り付けられている。３個が単位となっている。

体部片は、541 と 542 の２個体が出土している。541 は、体部上半を中心に残存し、頸部には指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。また、その下側には櫛描直線文が２帯、櫛描波状文が１帯描かれている。櫛描文は 11 本を単位としている。542 は、頸部に断面三角形の突帯が２条貼り付けられている。突帯下には、櫛描直線文２帯と櫛描波状文１帯が描かれている。櫛描文は８本を単位としている。

体部～底部は、543 ～ 547 の５個体出土している。544 は、口頸部以外が残存する。体部中位にはヘラによる斜行文が刻まれている。その下側は横方向のヘラミガキにより、さらに底部付近は縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。

甕　　口縁部片と底部片が出土している。

口縁部片は、548・549・551 の３個体が出土している。548 は大型の甕で、口縁部の器壁が体部より厚く造られている。549 は小型の甕で、全体が薄く仕上げられている。551 は、口縁部から体部にかけて残存し、体部が球形に近い特徴が認められる。外面は、被熱により赤変している。全体的に磨滅が著しく、調整は観察できない。

底部は、550・552 ～ 554 の４個体が出土している。基本的には、口縁部片と同タイプの甕の底部と考えられる。550 の底部中央には、焼成前の穿孔が認められる。下→上方向に穿たれている。552 は、内面がヘラ削りにより仕上げられている。外面は、被熱により赤変している。

鉢　　555 の１個体が出土している。口縁部を欠くが、その形態から鉢と判断したものである。外面はヘラナデにより仕上げられている。また底部は、指オサエにより仕上げられている。

高坏　　556 ～ 558 の３個体が出土している。556 は、体部から脚部にかけて残存し、外面全面がヘラミガキにより仕上げられている。脚部内面もヘラナデにより仕上げられている。557 は、脚部がほぼ完存する。内外面とも磨滅が著しく、調整は観察できない。558 は、脚裾部を中心に残存する。外面には竹管文が２段にわたり等間隔に押されている。

蓋　　559 の１個体が出土している。口縁部内面に煤の付着が認められる。被熱により、器表面の劣化が顕著である。

時　期　　出土土器から判断して、弥生Ⅰ期－２～Ⅰ期－３と考えられる。

２．包含層

はじめに　　遺構には伴わないが、比較的良好な資料が出土している。これらの資料について、包含層出土遺物として報告する。出土資料としては、弥生土器と金属製品が出土している（図版 28)。

土器　　中期の土器と後期の土器が出土している。

中期　　壺と甕が出土している。

壺　　短頸壺(560)が出土している。頸部には指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。

甕　　561 ～ 564 の４個体出土している。561 はほぼ完存するもので、器高 40.5㎝と大型の甕である。底部中央には径 1.6㎝の穿孔が焼成後に開けられている。体部外面はヘラミガキ、内

面はヘラ削りにより仕上げられている。外面は被熱により赤変している。562 と 563 は小型の甕である。562 の体部内面下半はヘラ削りに近いヘラナデにより仕上げられている。564 は、体部外面に横方向のヘラミガキが認められるが、体部下半がヘラ削りにより仕上げられていることから、甕と判断したものである。

後期　壺・鉢・底部片・甕が出土している。

壺　565 と 566 が出土している。565 は、口縁部以外が残存する。広口壺の一部と考えられる。体部はハケ調整後ヘラミガキにより仕上げられている。

鉢　567 の１個体が出土している。台付鉢に分類されるもので、口縁部はく字形に屈曲する。体部内面はヘラナデ、外面はヘラミガキにより仕上げられている。

底部片は 568 の１個体が出土している。底部中央に径 1.10㎝の穿孔が認められ、焼成前に開けられている。有孔鉢の可能性が考えられる。

甕　569 の１個体が出土している。口径 11.2㎝、器高 12.4㎝と小型の甕で、全体的に手づくねにより整形されている。外面はナデ調整、内面は板ナデ調整により仕上げられている。

金属製品　寛永通宝が１点（Ｍ９）出土している。全体の 3/4 が残存し、径 2.35㎝を測る。

第４章　分析・鑑定

第１節　市之郷遺跡の岩石同定

藤根　久(パレオ・ラボ)

１．はじめに

市之郷遺跡は、姫路市日出町３丁目 18 番地内に所在する弥生時代および古墳時代からなる遺跡である。調査では、弥生時代後期と古墳時代後期を中心とした住居跡が検出された。

ここでは、出土した石器(砥石)と管玉の石材同定を行った。

２．試料と方法

試料は、市之郷遺跡から出土した石器(砥石)1 点と管玉１点である(第 12 表)。

各試料は、非破壊で実体顕微鏡を用いて色調、組織、構成鉱物の特徴について観察し、岩石の同定を行った。

なお、各岩石は、実体顕微鏡を用いて代表的な部分の拡大写真を撮影した。

第 12 表　市之郷遺跡出土石製品の特徴と岩石名

遺跡名	遺物名	出土地点	色調	組織の特徴	その他	岩石名
市之郷遺跡Ⅳ	Ｓ７(砥石)	SH23	にぶい黄橙色(10YR7/2)	砂岩質	硬質	凝灰岩
	Ｓ９(管玉)	SH27	明オリーブ灰色(5GY7/1)	シルト質	軟質	緑色凝灰岩

３．結果および考察

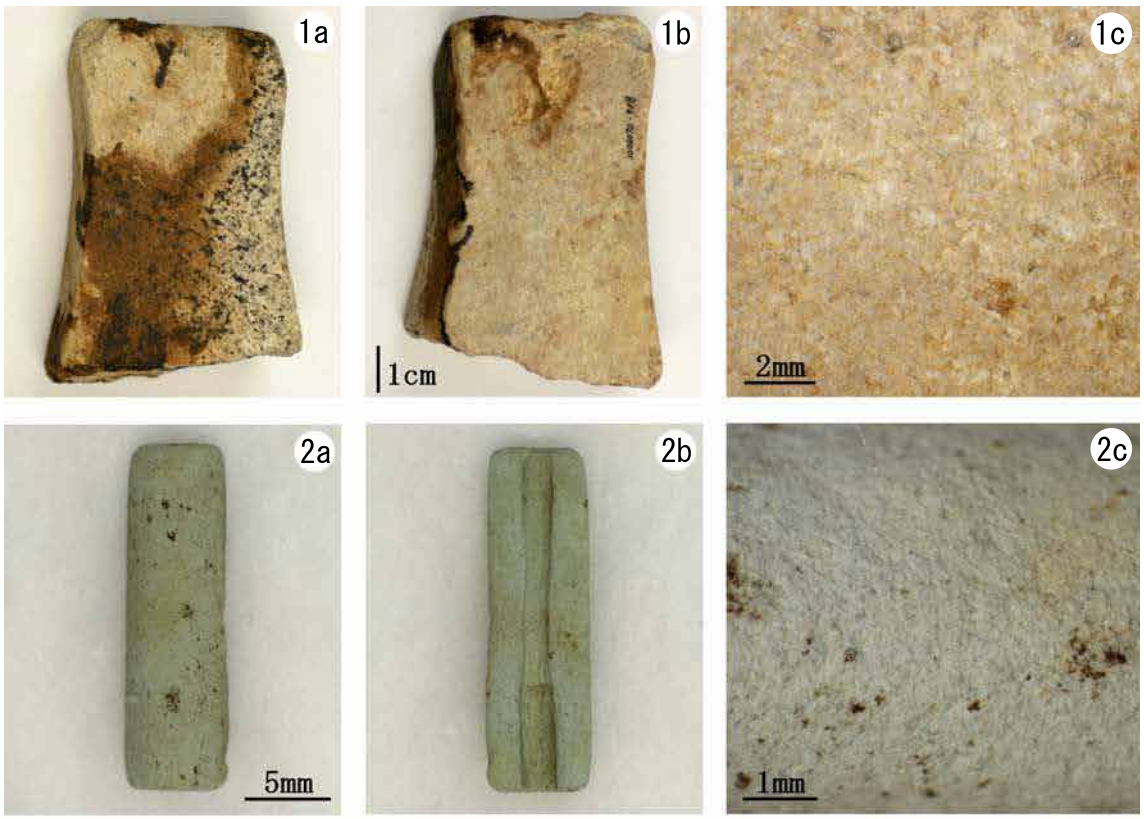
実体顕微鏡を用いて岩石の同定を行った結果、砥石(Ｓ７)が硬質白色系の凝灰岩、管玉(Ｓ９)が軟質の緑色凝灰岩であった。なお、硬質白色系の凝灰岩は、姫路市の周辺域において白亜紀～古第三紀の凝灰岩類が分布することから(日本の地質『近畿地方』編集委員会編，1992)、これら岩石を利用したものと考えられる。

４．おわりに

市之郷遺跡から出土した石器(砥石：Ｓ７)と管玉(Ｓ９)について、実体顕微鏡を用いて岩石の同定を行った。その結果、市之郷遺跡から出土した石器(砥石)が硬質白色系の凝灰岩、管玉が軟質の緑色凝灰岩であった。

引用文献

日本の地質『近畿地方』編集委員会編(1992)日本の地質 6「近畿地方」，297，共立出版



1a・1b. Ｓ７（砥石）　1c. Ｓ７の拡大写真　　2a・2b. Ｓ９管玉　　2c. Ｓ９の拡大写真

第 129 図　市之郷遺跡出土石製品と実体顕微鏡写真

第２節　市之郷遺跡出土土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、姫路市に所在する市之郷遺跡から出土した庄内期の土器について、その材質（胎土）の特性を明らかにし、その生産や供給事情に関わる資料を作成する。市之郷遺跡は、播磨平野南東部を流れる市川下流域の右岸に位置する。

今回の試料では特に推定産地等の発掘調査所見は示されていないが、既存の地質資料から推定される地域性を検討する。また、今回の試料は、１基の竪穴住居跡から出土しているが、器種には壺、甕、鉢の３種類の属性が示されていることから、これらの所見と胎土との対応関係も検討する。

1. 試料

試料は、市之郷遺跡から出土した庄内期とされる土器の土器片 16 点である。全点ともに、C 区で検出された竪穴住居跡ＳＨ 28 から出土したとされており、試料には、報告 No. が付されている。器種の内訳は、壺が３点、甕が９点、鉢が４点である。各試料の No. と出土遺構および時期と器種を一覧にして第 13 表に示す。

2. 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

第 13 表　試料一覧および胎土分類結果

No.	地区	出土遺構	時代	器種	鉱物・岩石			粒径組成						砕屑物		
					F3	F6	K2	1	2	3	4	5	6	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
345	C 区	SH28	庄内期	壺			■					■		■		
347	C 区	SH28	庄内期	壺	■		■					■		■		
348	C 区	SH28	庄内期	壺				■							■	
357	C 区	SH28	庄内期	甕			■				■			■		
362	C 区	SH28	庄内期	甕	■								■		■	
364	C 区	SH28	庄内期	甕	■						■				■	
367	C 区	SH28	庄内期	甕	■						■				■	
370	C 区	SH28	庄内期	甕	■							■				■
374	C 区	SH28	庄内期	甕		■					■				■	
381	C 区	SH28	庄内期	甕		■					■				■	
384	C 区	SH28	庄内期	甕		■					■				■	
400	C 区	SH28	庄内期	甕	■					■						■
401	C 区	SH28	庄内期	鉢	■						■				■	
402	C 区	SH28	庄内期	鉢	■						■				■	
403	C 区	SH28	庄内期	鉢		■			■					■		
409	C 区	SH28	庄内期	鉢		■							■	■		

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に 0.03㎜の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて 0.5㎜間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3. 結果

観察結果を第 14 表～第 16 表・第 130 図～第 138 図に示す。これまでの兵庫県下の遺跡出土土器胎土分析において設定した鉱物片および岩石片の種類構成による胎土分類では、Ａ類からＮ類までの種類が設定され、さらに、各種類について副次的な鉱物や岩石の種類によって細分もしている。今回の結果も、その基準に従って分類してみると以下のようになる。

No.345 と No.347 の２点の壺の試料は、火山ガラスが突出して多い組成が特徴である。また、火山ガラスの形態は、平板状のいわゆるバブル型がほとんどを占めている。火山ガラス以外の砂粒としては、石英と斜長石の鉱物片を少量～微量伴い、岩石片ではチャートや頁岩などの堆積岩類と凝灰岩および流紋岩・デイサイトなどの火砕岩類を微量含む。火山ガラスの多い組成は、これまでの分類では、A2 類と K2 類の２種類がある。これらのうち、A2 類は、堆積岩類、火砕岩類および花崗岩類の３種類の岩石片を含むことが特徴とされ、K2 類は、堆積岩類と火砕岩類の２種類が特徴とされた。したがって、上述した今回の２点の壺の試料は、いずれも K2 類に分類される。さらに、今回の試料では、甕の No.357 も、堆積岩類は計数されていないが、全体的に砂の量が少ないことも考慮すれば、同様に K2 類に分類される。

No.348 の壺の試料については、計数された砂粒の数が少ないが、それでも傾向をみるならば、鉱物片では石英が最も多く、次いで斜長石が多く、少量のカリ長石を伴うという組成が認められる。岩石片では、チャート、頁岩、砂岩の堆積岩類、凝灰岩、流紋岩・デイサイトの火砕岩類、多結晶石英と花崗岩類の岩石片が含まれるが、それらの中では流紋岩・デイサイトの多い傾向が認められる。後述する地質学的背景から、流紋岩・デイサイトは凝灰岩と同様に評価できるとすれば、No.348 の岩石片組成は、凝灰岩の多い傾向を示す F 類に分類される。さらに F 類の中では、石英の鉱物片が凝灰岩の岩石片より多い組成である F3 類に分類することができる。

No.362 の甕の試料は、石英の鉱物片の多い組成が特徴であるが、それに加えて岩石片では凝灰岩が他の岩石片に比べると多い傾向のあることが指摘できる。したがって、本試料も上述した No.348 と同様の F3 類に分類される。さらに、同様の組成に分類できる試料は、甕の試料では、No.364、No.367、No.370、No.400 であり、鉢の試料でも、No.401 と No.402 の２点は F3 類に分類できる。

上述した K2 類または F3 類に分類されなかった試料は、甕では No.374、No.381、No.384 の３点であり、鉢では No.403 と No.409 の２点である。これらの試料の鉱物･岩石組成は､石英の鉱物片が最も多いことや、岩石片の中では凝灰岩が多いこと、さらに堆積岩類や花崗岩類の岩石片を伴うことなど、上述の F3 類と共通した特徴が見出せるが、F3 類の組成と異なる点として、火山ガラスの含有量が比較的高いことがあげられる。これまでの分析例において、F 類の中で火山ガラスを特徴的に含む組成は F6 類とされている。今回の K2 類または F3 類に分類されなかった試料は、いずれも F6 類に分類されるとしてよい。

第 14 表　薄片観察結果(1)

No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																									合計
			鉱物片							岩石片														その他				
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	酸化鉄結核	植物珪酸体	
345 壺	砂	細礫																								0
		極粗粒砂	1										3	1	1	1				1						8
		粗粒砂											1													2
		中粒砂		1	1							1		1												4
		細粒砂	3		2											1						8				14
		極細粒砂	2		3																	8				13
		粗粒シルト	1		1																	2			3	7
		中粒シルト																								0
	基質																									484
	孔隙																									11
	備考		基質は雲母粘土鉱物質で淡褐色を示す。火山ガラスはほとんどがバブルウォール型で、軽石型はごく微量。																							
347 壺	砂	細礫																								0
		極粗粒砂																								0
		粗粒砂									1		1										1			3
		中粒砂			1								1	1								5	1			9
		細粒砂	1		1											1						19				22
		極細粒砂	1		2																	17				20
		粗粒シルト	3		1																	12			2	18
		中粒シルト																								0
	基質																									620
	孔隙																									39
	備考		基質は雲母粘土鉱物質で淡褐色を示し、やや有機質で黒褐色を示す部分も認められる。 火山ガラスはほとんどがバブルウォール型で、軽石型はごく微量。																							
348 壺	砂	細礫																								0
		極粗粒砂	1							1	1						1									4
		粗粒砂	5								2	1		4		3						1				16
		中粒砂	4							1			1	3		1	1					1				12
		細粒砂	8	1	2						1												1			13
		極細粒砂	4	1	3																				1	9
		粗粒シルト	5		6																					11
		中粒シルト																								0
	基質																									319
	孔隙																									9
	備考		基質は雲母質。流紋岩・凝灰岩は結晶質。																							
357 甕	砂	細礫											1													1
		極粗粒砂											1	2						1						4
		粗粒砂																								0
		中粒砂			3																	6				9
		細粒砂	6		2																	8				16
		極細粒砂	4		1																	2			1	8
		粗粒シルト	6						1																2	9
		中粒シルト	1																							1
	基質																									340
	孔隙																									9
	備考		基質は雲母質で淡褐色を示す。																							
362 甕	砂	細礫																								0
		極粗粒砂										1	4		2											7
		粗粒砂	3											2							2					7
		中粒砂	9	1	2					2			1			6					1					22
		細粒砂	11	1	2					1			4	2		4										25
		極細粒砂	16	1	2								2													21
		粗粒シルト	20	1	8																					29
		中粒シルト	5		2																					7
	基質																									463
	孔隙																									17
	備考		基質は淡褐色の粘土鉱物、石英、長石類のシルトから主に構成されている。 凝灰岩、流紋岩は結晶質。珪化岩は、凝灰岩・流紋岩が原岩とみられる。																							
364 甕	砂	細礫																								0
		極粗粒砂	1										3		1		2				1					8
		粗粒砂								1			2	1		1					1					6
		中粒砂	5							2			2			1	1									11
		細粒砂	9	1	3								1			5	1					1				21
		極細粒砂	8		1											1										10
		粗粒シルト	4		4																				3	11
		中粒シルト	1																							1
	基質																									349
	孔隙																									14
	備考		基質は雲母粘土鉱物質。凝灰岩、流紋岩は結晶質。火山ガラスはバブルウォール型。																							

第 15 表　薄片観察結果(2)

No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																									合計
			鉱物片							岩石片														その他				
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	酸化鉄結核	植物珪酸体	
367	砂	細礫																									0
褄		極粗粒砂												1		1			1	2							5
		粗粒砂		1									6	1		2											10
		中粒砂	11	1						1	1		6	3		3	1		1								28
		細粒砂	24	5	6				1				6	2		8	1										53
		極細粒砂	19	4	11		1						2			2											39
		粗粒シルト	15		2																						17
		中粒シルト																									0
	基質																										619
	孔隙																										23
	備考		基質は雲母粘土鉱物質で、淡褐色～褐色を示す。凝灰岩、流紋岩は結晶質。																								
370	砂	細礫																									0
褄		極粗粒砂	3								1		5		1			1									11
		粗粒砂	2	1						1	1		4		1	2	1	1	2	2	1						19
		中粒砂	8								1		5	5		2	2										23
		細粒砂	13	3	3								4			1	1					1					26
		極細粒砂	14	5	4			1			1		1			3											29
		粗粒シルト	11	1																						1	13
		中粒シルト																									0
	基質																										440
	孔隙																										18
	備考		基質は雲母粘土鉱物質。火山ガラスはバブルウォール型。凝灰岩、流紋岩は結晶質。変質岩は火山岩(安山岩)の風化岩。																								
374	砂	細礫																									0
褄		極粗粒砂	1								1		5						1	1							9
		粗粒砂	1										5											1			7
		中粒砂	3			1				1			6			1						3					15
		細粒砂	13		4	1	1			1			8			8	1					4					41
		極細粒砂	9		6								1														16
		粗粒シルト	6		4				1																	1	12
		中粒シルト																									0
	基質																										420
	孔隙																										12
	備考		基質は雲母粘土鉱物、褐色粘土鉱物で埋められ、淡褐色～褐色を示す。凝灰岩は結晶質。火山ガラスはバブルウォール型。																								
381	砂	細礫																									0
褄		極粗粒砂	1											2	1					2							6
		粗粒砂	2								3		6						1		2						14
		中粒砂	3										4	2		1			2		1						13
		細粒砂	7		4					1			2	2		1						4					21
		極細粒砂	3		2																						5
		粗粒シルト	4																								4
		中粒シルト	1																								1
	基質																										254
	孔隙																										11
	備考		基質は雲母質で淡褐色を示す。花崗岩の一部には、微文象状組織を示すものがごく僅かに認められる。 凝灰岩、流紋岩は結晶質。火山ガラスはバブルウォール型。変質岩は、火山岩の風化岩。																								
384	砂	細礫																									0
褄		極粗粒砂	1										3	1													5
		粗粒砂	1										3	1		1					1	1					8
		中粒砂	2		2					1	1		4	4		2			1								17
		細粒砂	13		7	1				1			1			3						4					30
		極細粒砂	9	2	4											1						1					17
		粗粒シルト	8	1	2																					1	12
		中粒シルト																									0
	基質																										394
	孔隙																										12
	備考		基質は雲母粘土鉱物質で淡褐色を示す。凝灰岩・流紋岩は結晶質。火山ガラスはバブルウォール型。																								
400	砂	細礫																									0
褄		極粗粒砂																									0
		粗粒砂	2							1	2	1	2	3					2	1	2						16
		中粒砂	2	1	5						4	1	11	1		1			2	2	1						31
		細粒砂	5		2						2		5			2			3								19
		極細粒砂	1		4					1						1											7
		粗粒シルト	2		2																						4
		中粒シルト			1																						1
	基質																										254
	孔隙																										4
	備考		基質は雲母粘土鉱物で埋められ、褐色を示す。凝灰岩、流紋岩は結晶質。変質岩は、頁岩などの風化岩。																								

第 16 表　薄片観察結果(3)

No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																								合計
			鉱物片							岩石片														その他				
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	酸化鉄結核	植物珪酸体	
401 鉢	砂	細礫								1																1
		極粗粒砂									1		2													3
		粗粒砂	2		1						1		3			1			1		1	1				11
		中粒砂	9			1					1		10			2			4							27
		細粒砂	13		5					1	2		8			1										30
		極細粒砂	11	1	9		1				1					1										24
		粗粒シルト	4		6																					10
		中粒シルト	1																							1
	基質																									478
	孔隙																									17
	備考		基質は雲母粘土鉱物質で、淡褐色を示す。微細な有機物も散在する。凝灰岩は結晶質。																							
402 鉢	砂	細礫											1													1
		極粗粒砂	1										5						3	2						11
		粗粒砂	2										6	2				1			1					12
		中粒砂	7										6			1					2					16
		細粒砂	12	1	1								7			2						1				24
		極細粒砂	8	1	4		1									2										16
		粗粒シルト	9		3																				1	13
		中粒シルト	2																							2
	基質																									434
	孔隙																									16
	備考		基質は雲母粘土鉱物質で淡褐色を示す。凝灰岩、流紋岩は結晶質。 火山ガラスはバブルウォール型。変質岩は火山岩の風化岩。弱酸化した角閃石が認められる。																							
403 鉢	砂	細礫											1								1					2
		極粗粒砂	1								1		4	1		1										8
		粗粒砂	5								2		4	1	1	1			3		2					19
		中粒砂	3		2			1			1		1	1		2						1				12
		細粒砂	9	1	2	1				1			1			1						4				20
		極細粒砂	9		3											3						2				17
		粗粒シルト	5		4																				2	11
		中粒シルト			1																					1
	基質																									559
	孔隙																									7
	備考		基質は主に褐色粘土鉱物と雲母粘土鉱物によって埋められている。 火山ガラスはバブルウォール型。流紋岩、凝灰岩は結晶質。珪化岩は、凝灰岩、頁岩が原岩とみられる。																							
409 鉢	砂	細礫																	1							1
		極粗粒砂											1	1			1									3
		粗粒砂																								0
		中粒砂	3		2								2			1										8
		細粒砂	1		4						1					1						5				12
		極細粒砂			2																	2				4
		粗粒シルト	8		7																					15
		中粒シルト	3		1																					4
	基質																									376
	孔隙																									7
	備考		基質は、褐色粘土鉱物、雲母粘土鉱物、石英・長石類のシルトなどで主に埋められている。 火山ガラスはバブルウォール型。流紋岩、凝灰岩は結晶質。																							

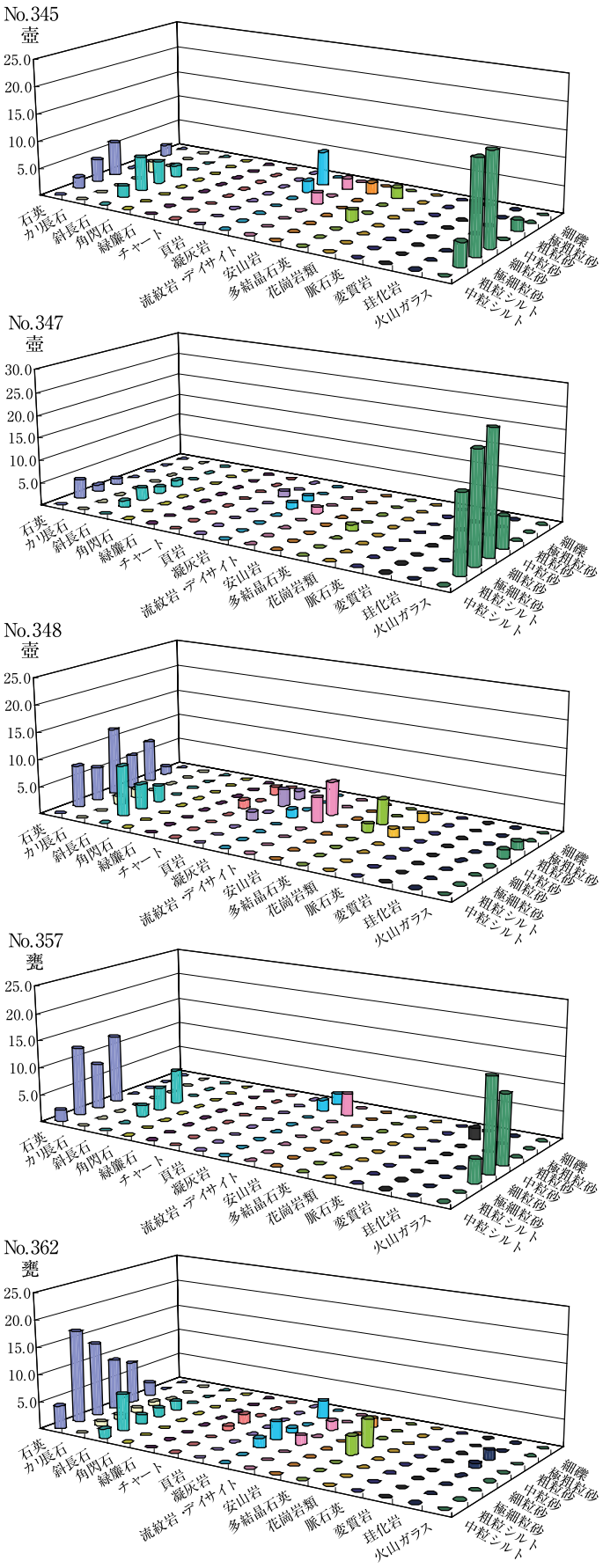
次に各試料の砂分全体の粒径組成をみると、モードを示す粒径は試料により異なる。ここでは、モードを示す粒径により、粗粒傾向の組成から細粒傾向の組成に向かって、順に１類から６類までの分類を設定した。各分類の内容とそれに分類される試料を以下に示す。

１類：粗粒砂をモードとする。No.348。

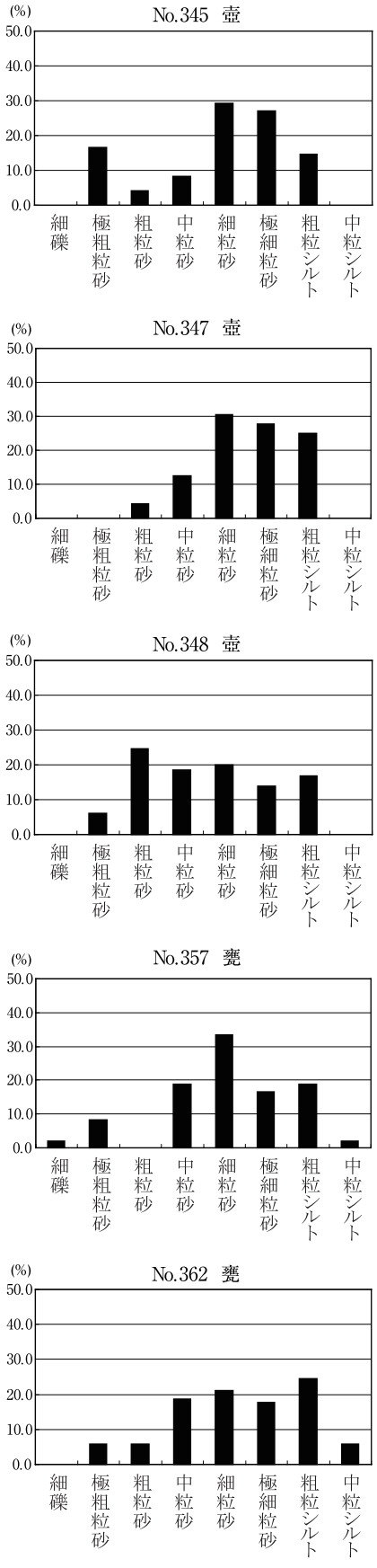
２類：粗粒砂と細粒砂の両者をモードとする。No.403。

３類：中粒砂をモードとする。No.400。

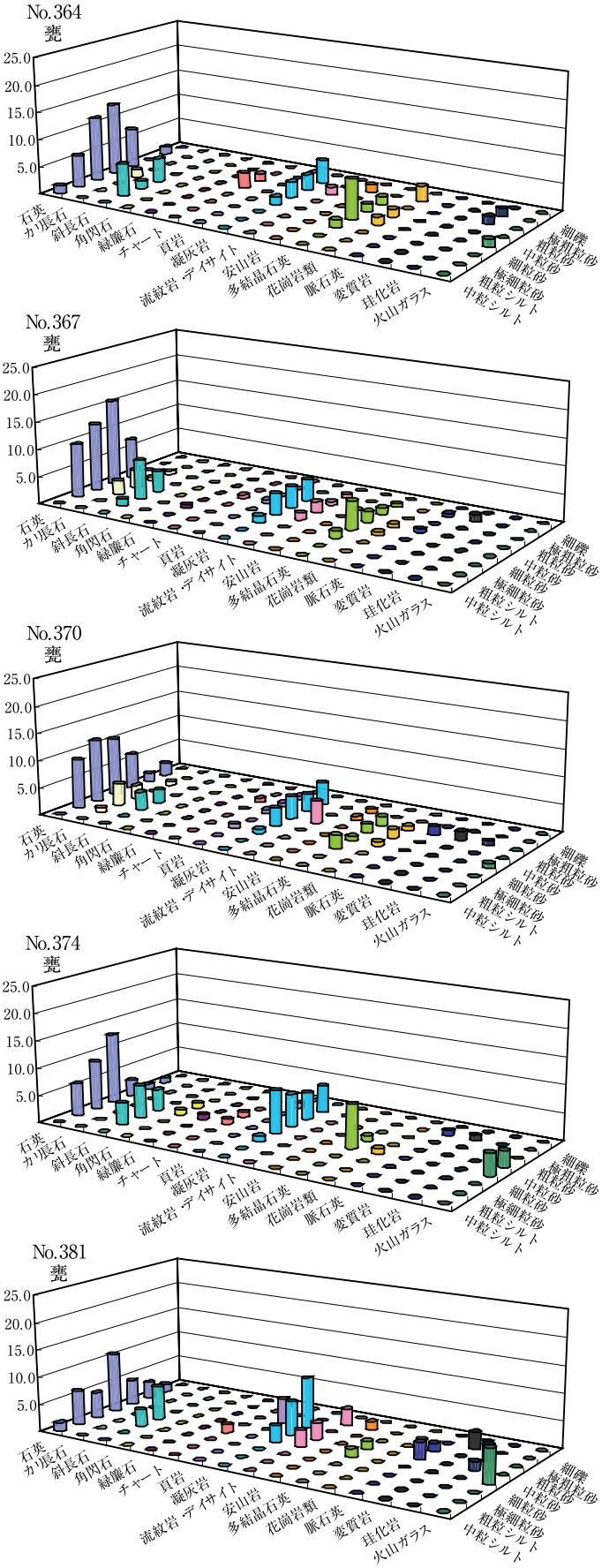
４類：細粒砂をモードとする。No.357、364、367、374、381、384、401、402。



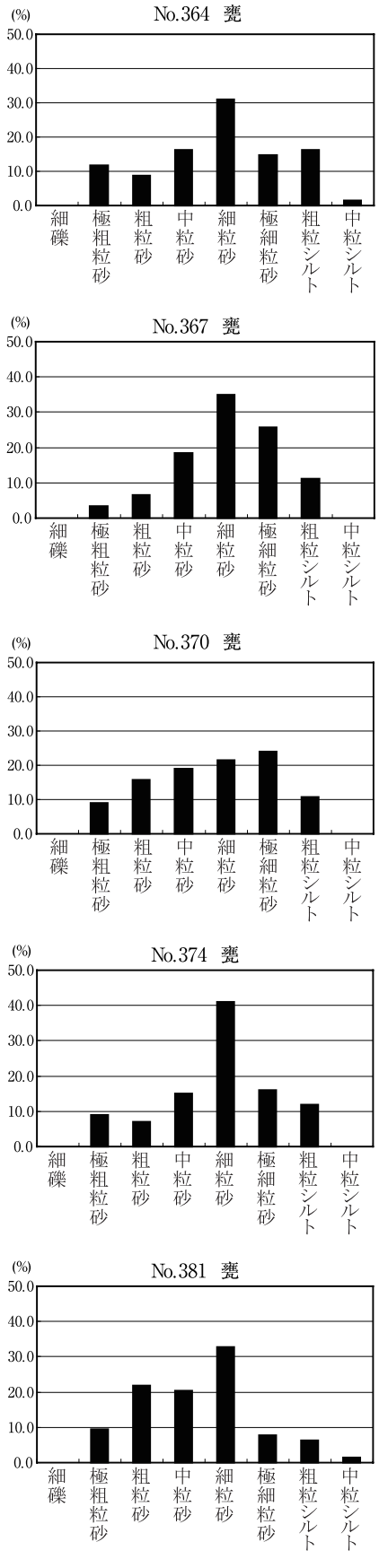
第 130 図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（1）



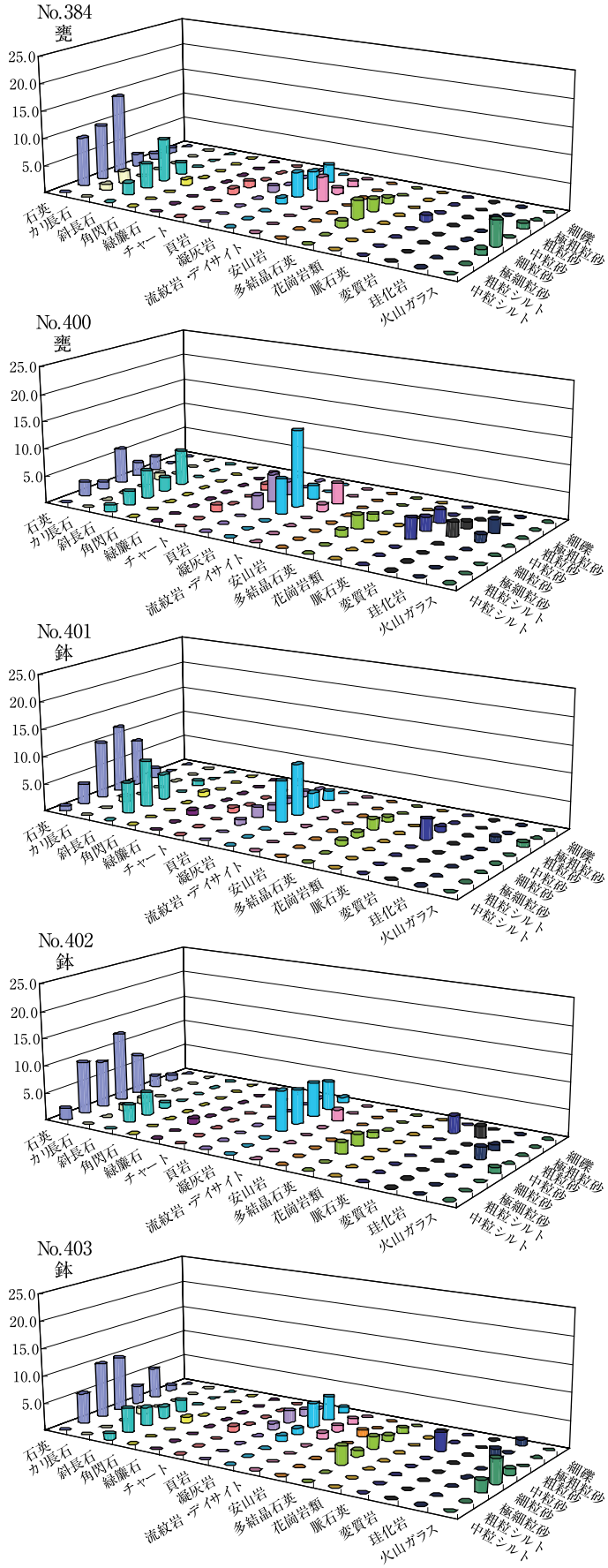
第 131 図　胎土中の砂の粒径組成（1）



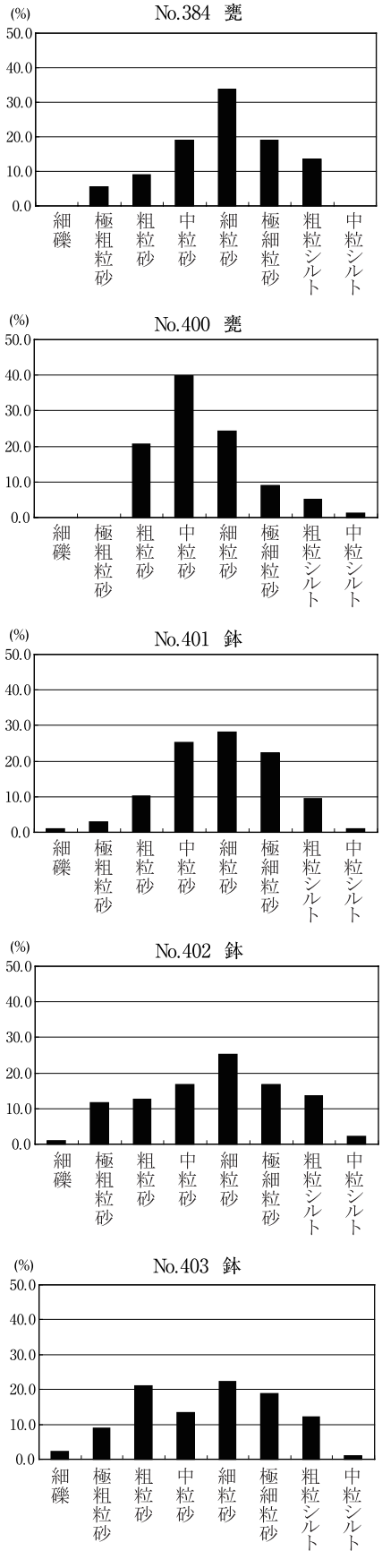
第 132 図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)



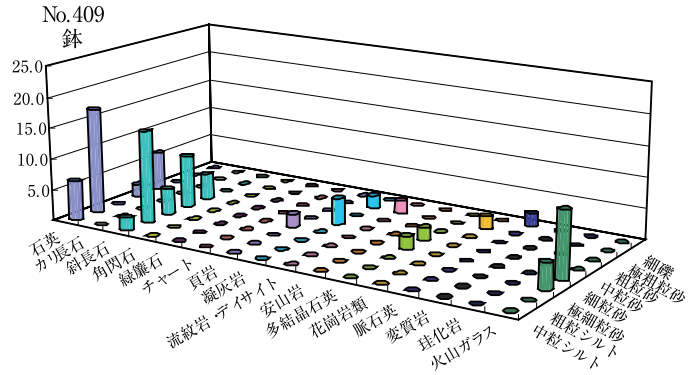
第 133 図　胎土中の砂の粒径組成(2)



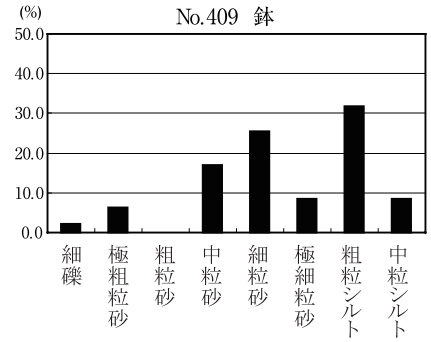
第 134 図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(3)



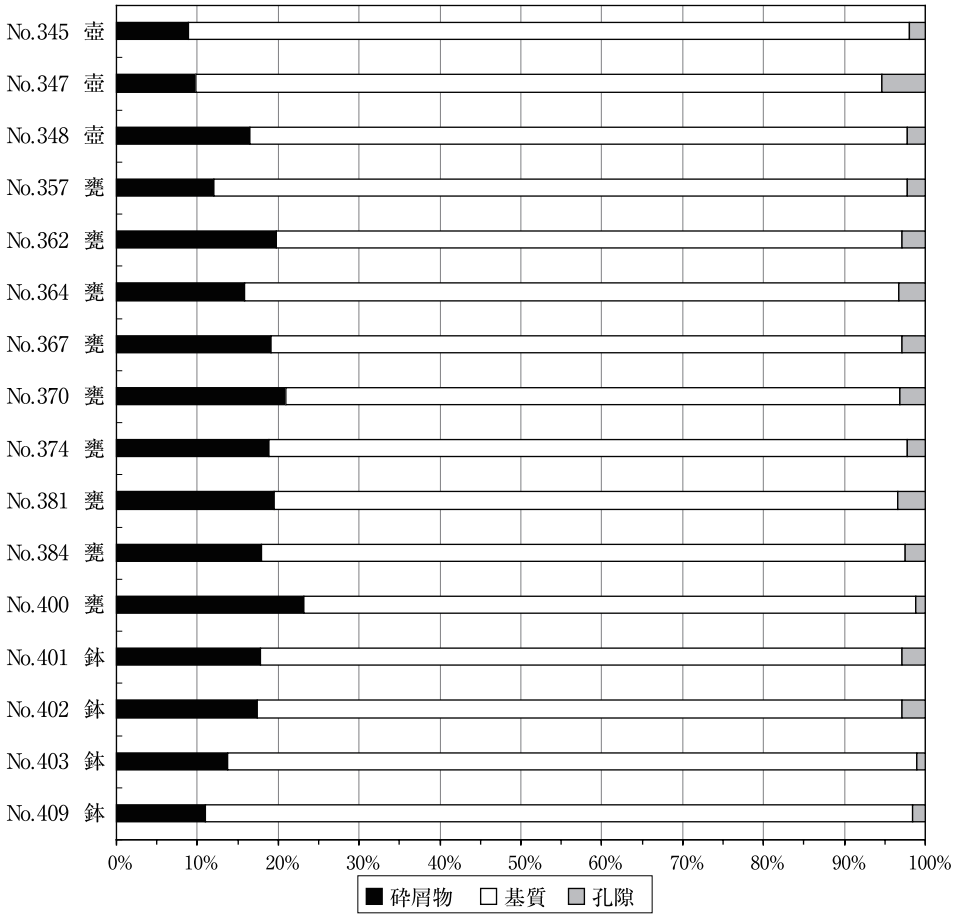
第 135 図　胎土中の砂の粒径組成(3)



第 136 図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（4）



第 137 図　胎土中の砂の粒径組成（4）



第 138 図　砕屑物・基質・孔隙の割合

５類：極細粒砂をモードとする。No.345、347、370。

６類：粗粒シルトをモードとする。No.362、409。

砕屑物･基質･孔隙の割合では、砕屑物の割合が 15% 未満、15 ～ 20% と 20 ～ 25% で３分することができる。順にⅠ類～Ⅲ類とすると、今回の試料では以下の通りに分けられる。

Ⅰ類：No.345、347、357、403、409

Ⅱ類：No.348、362、364、367、374、381、384、401、402

Ⅲ類：No.370、400

なお、上述した各試料の鉱物・岩石組成、粒径組成および砕屑物の量比における各分類結果は、一覧にして第 13 表に併記する。

4. 考察

(1)胎土の鉱物・岩石組成と市之郷遺跡の地質学的背景

姫路市南東部すなわち北を JR 山陽本線に、東を市川に、西を夢前川に囲まれた沖積低地では、これまでに豆腐町、南通り、飯田、池ノ下の各遺跡から出土した土器の胎土分析を行っている。試料とされた土器は、豆腐町遺跡では奈良時代後半の土師器、南通り遺跡は弥生時代後期の弥生土器であるが、飯田遺跡および池ノ下遺跡では、今回と同様の庄内期の土器である。また、各遺跡の位置関係は、市之郷遺跡は上述した範囲の北東部に位置し、豆腐町遺跡は北部、南通り遺跡は南東部、飯田遺跡はほぼ中央部、池ノ下遺跡は西部にそれぞれ位置すると言える。

各遺跡における分析結果を比較すると、遺跡によって多く認められる鉱物・岩石組成の分類が異なっている状況が窺える。具体的には、西部および中央部の池ノ下遺跡と飯田遺跡では、F6 類の試料が多い傾向があり、それに少数伴う分類として、池ノ下遺跡では F3 類、飯田遺跡では A2 類となっている。北部の豆腐町遺跡では K2 類の多い傾向が窺える。南東部の南通り遺跡では試料数が 4 点のみであり、傾向は把握できないが、出現した分類はＢ類、C5 類、D3 類、F3 類の各分類であり、F6 類は認められていない。これらの結果に対して、北東部の本遺跡では、F3 類の多い傾向が示され、F3 類よりやや少ない F6 類、さらに少ない K2 類という結果となった。これだけの結果ではあるが、上述した沖積低地の範囲内でも、土器胎土に地域性のあることが推定される。特に、中央部から西側では F6 類主体、東側では F3 類主体という傾向が看取される。

ここで、猪木(1981)、日本の地質「近畿地方」編集委員会(1987)、山元ほか(2000)などの地質記載から、上述した範囲の地質学的背景を考慮すると、まずＦ類を構成している凝灰岩および流紋岩･デイサイトは、いずれも結晶質であることから、姫路市内に独立丘状に分布する丘陵を構成している中生代白亜紀の相生層群の中の伊勢層や、市川および夢前川中流域の山地を構成している同じ相生層群中の広峰層、さらに夢前川の上流域の山地を構成している相生層群中の夢前層などに由来すると考えられる。また、Ｆ類には堆積岩類が含まれているが、これら堆積岩類は、市川上流域の山地や夢前川上流域の山地を構成する古生代ペルム紀の超丹波帯や中生代ジュラ紀の丹波帯に由来すると考えられる。さらに、Ｆ類に微量～少量伴われる花崗岩類は、桜山貯水池を囲んでいる丘陵を構成している白亜紀 - 古第三紀の斑状角閃石黒雲母花崗閃緑岩(桜山岩体)に由来するものであろう。したがって、上述した範囲の沖積低地全体でＦ類が主体を占めるという胎土分析結果は、その地質学的背景をよく反映していると言える。

次に F3 類と F6 類の地域性と地質学的背景との関係については、両分類の違いとなっているバブル型火山ガラスの由来を考える必要がある。豆腐町遺跡や飯田遺跡の報告でも述べたように、降下テフラに由来する細粒の火山ガラスは、沖積低地の堆積物中では保存されにくいと考えられることから、その由来は、丘陵の谷間や周縁に形成された山麓緩斜面堆積物（山元ほか,2000）であると考えられる。したがって、上述した範囲の沖積低地西側において火山ガラスの多い F6 類が多く認められるという傾向は、山麓緩斜面堆積物が分布する丘陵に近いことに由来すると考えることができる。なお、F6 類よりもさらに火山ガラスの多い組成である K2 類については、現時点では丘陵に近いとは言えない北部の豆腐町遺跡や北東部の本遺跡でしか認められておらず、上述した地質学的背景とは整合しない。その解釈として、例えば豆腐町遺跡ではその試料が奈良時代の土師器であることから、その製作地あるいは材料採取地が必ずしも遺跡周辺ではなかったと考えられ、本遺跡の場合は、その試料数が少ないことから、丘陵周辺で作られた土器が移動してきたことを示唆している可能性があると考えられる。以上述べた胎土の局所的な地域性について、

より確かな見解を得るためには、自然堆積物の分析も含めた周辺における分析事例の蓄積をしながら検討を重ねる必要がある。

(2)土器の器種と胎土との対応関係

器種ごとに、胎土の鉱物・岩石組成の分類結果をみると、壺３点のうち、２点はK2類であり、１点はF3類である。一方、甕は９点のうち、５点がF3類であり、３点がF6類、１点がK2類という構成であり、鉢４点はF3類とF6類が２点ずつという構成になっている。この結果をみる限りにおいては、器種ごとに胎土の鉱物・岩石組成の傾向が存在する可能性が高い。これらの結果に上述したF3類とF6類の地域性を重ねると、市之郷遺跡においてはF3類の方が、地元産という傾向がより強いことになるから、甕は地元産の傾向が強く、鉢は地元産と西側産が同程度、壺は西側産の傾向が強い器種とみることもできる。さらに、同じF3類の胎土でも、壺と甕では粒径組成が大きく異なるが、甕と鉢では粒径組成もほぼ同様であり、F6類の胎土では、甕と鉢との間で粒径組成の違いが認められる。

今回の試料は、同一の竪穴住居跡から出土した土器であるが、鉱物・岩石組成では３種類の異なる胎土の土器が混在し、これに粒径組成の違いを合わせれば、少なく見積もっても５～６種類の異なる胎土の土器が混在していると考えられる。しかも、胎土の違いは器種との相関性もあることが示唆された。このような状況は、市之郷遺跡を含む播磨平野南東部における庄内期の土器の生産と供給に関わる何らかの事情を示している可能性が高い。今後のこの地域における発掘調査事例からの考古所見の進展とともに、今回のような胎土分析結果を再評価、再検討していきたいと考える。

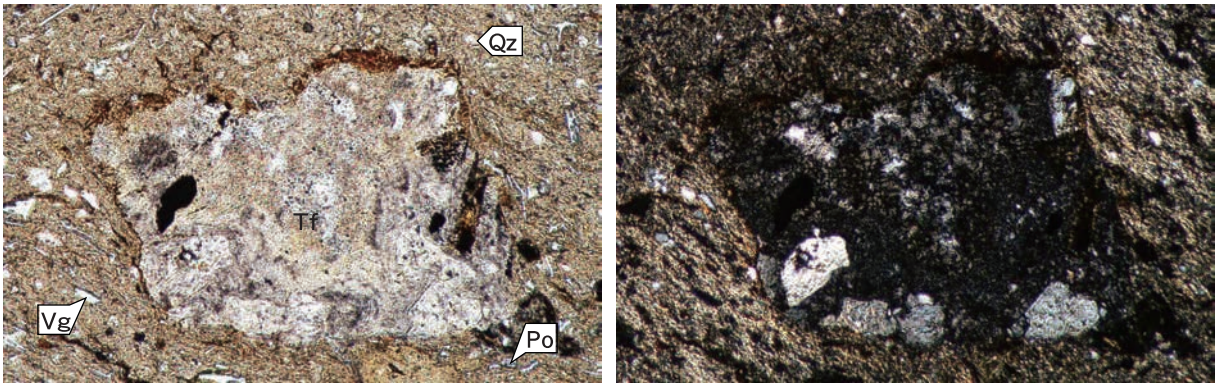
引用文献

猪木幸男,1981,20万分の１地質図幅「姫路」. 地質調査所.

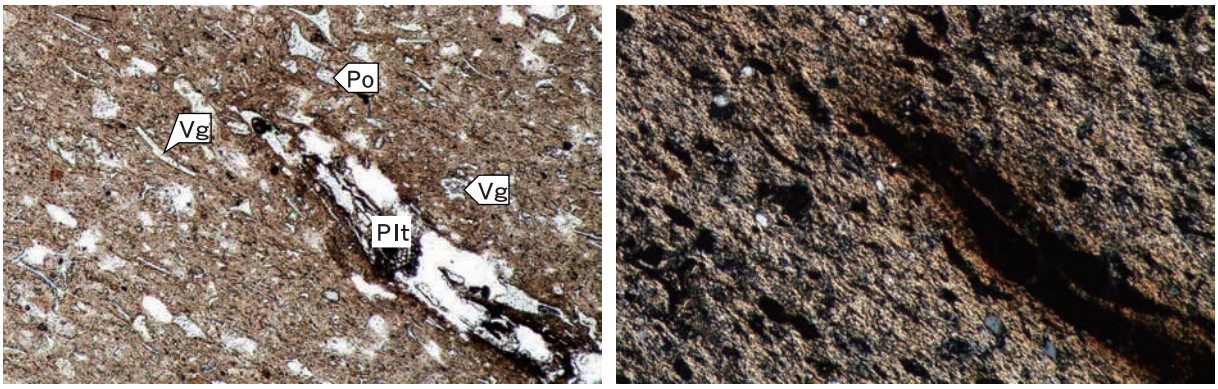
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－. 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.

日本の地質「近畿地方」編集委員会,1987,日本の地質６　近畿地方. 共立出版,297p.

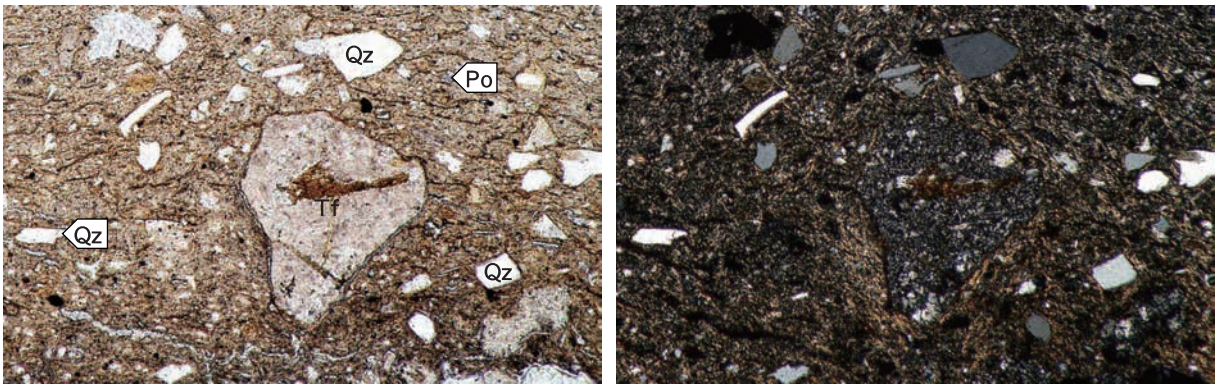
山元孝広・栗本史雄・吉岡敏和,2000,龍野地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の１図幅),地質調査所,66p.



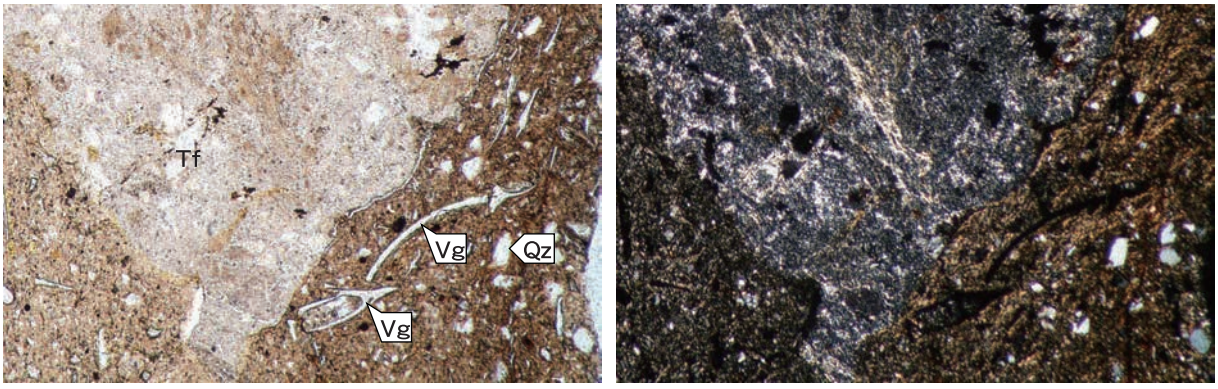
1.No.345(C区　SH28　庄内期　壺)



2.No.347(C区　SH28　庄内期　壺)



3.No.348(C区　SH28　庄内期　壺)

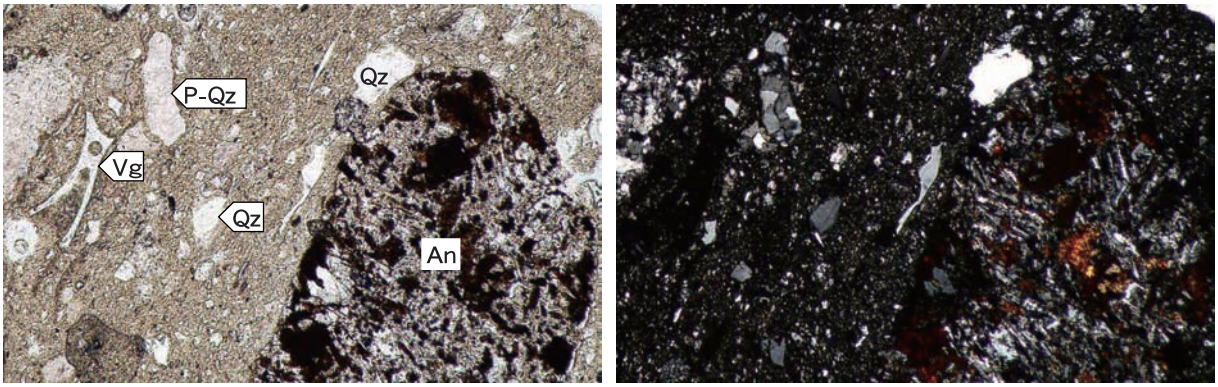


4.No.357(C区　SH28　庄内期　甕)

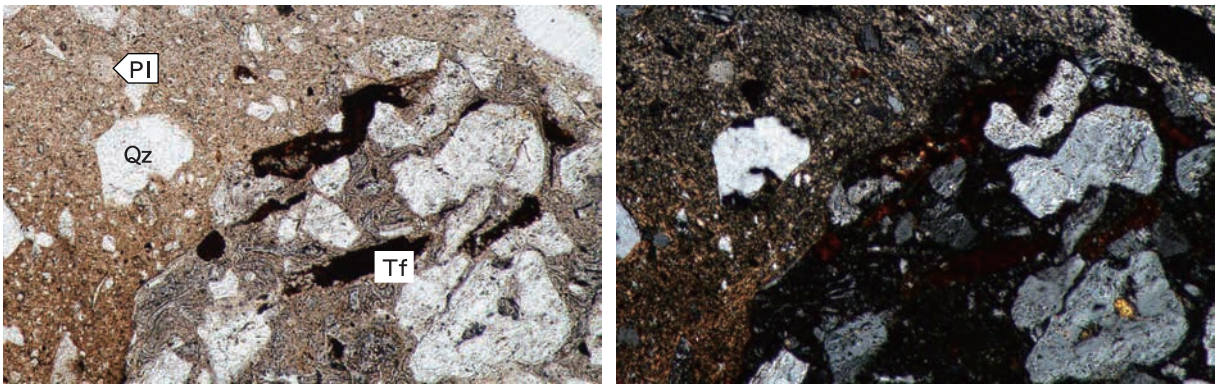
0.5mm

Qz:石英．Tf:凝灰岩．Vg:火山ガラス．Po:植物珪酸体．Plt:植物片．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

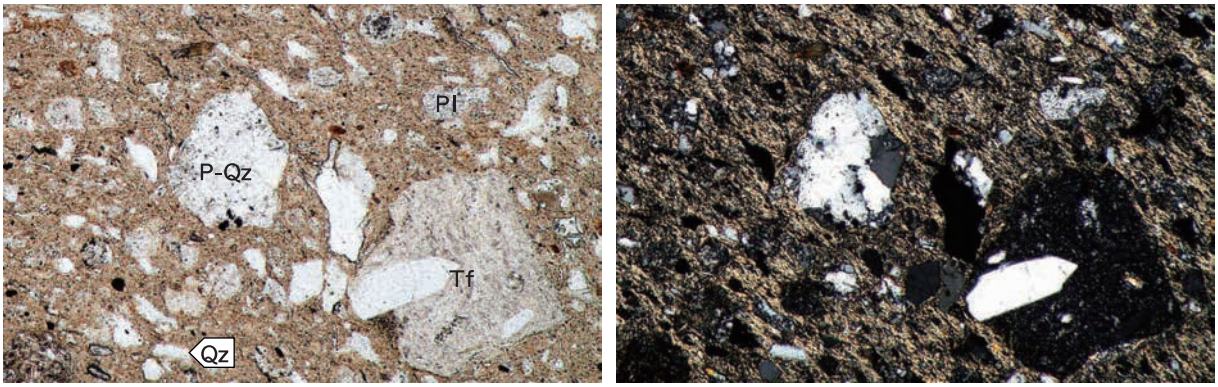
第 139 図　胎土薄片(1)



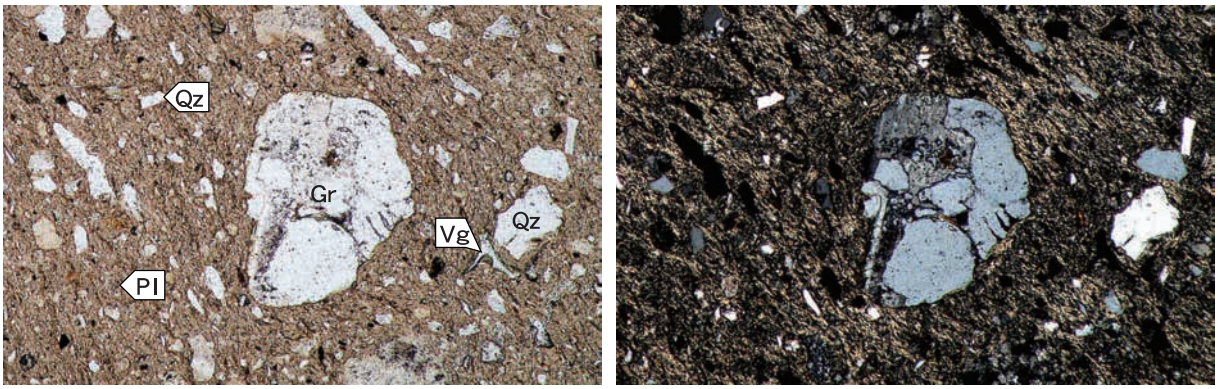
5.No.362(C区　SH28　庄内期　甕)



6.No.364(C区　SH28　庄内期　甕)



7.No.367(C区　SH28　庄内期　甕)

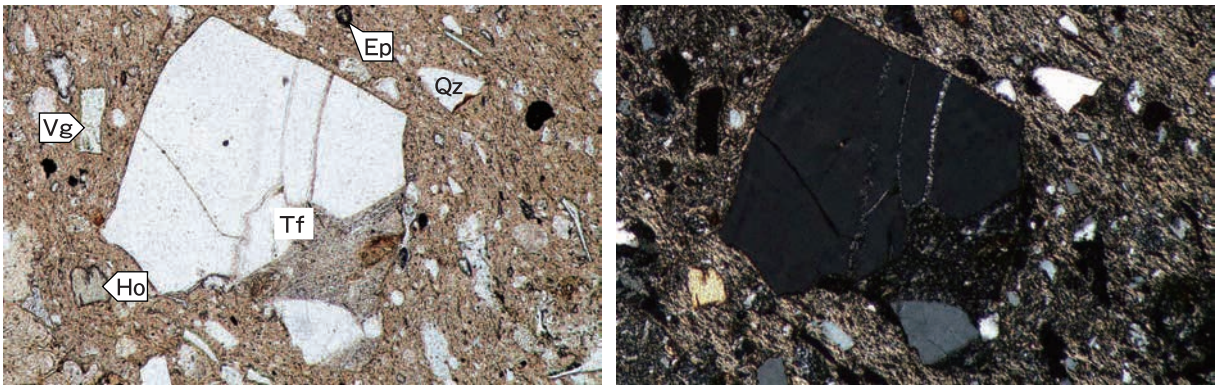


8.No.370(C区　SH28　庄内期　甕)

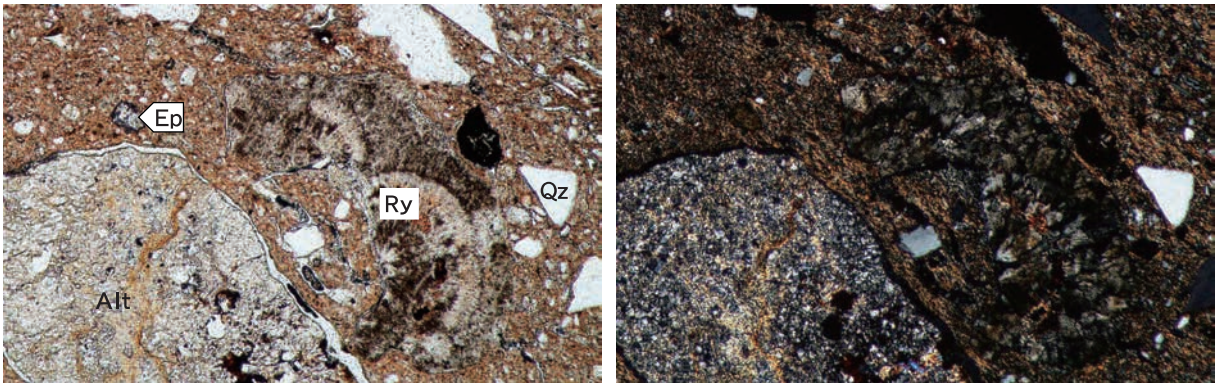
0.5mm

Qz:石英．Pl:斜長石．Tf:凝灰岩．An:安山岩．P-Qz:多結晶石英．Gr:花崗岩．
Vg:火山ガラス．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

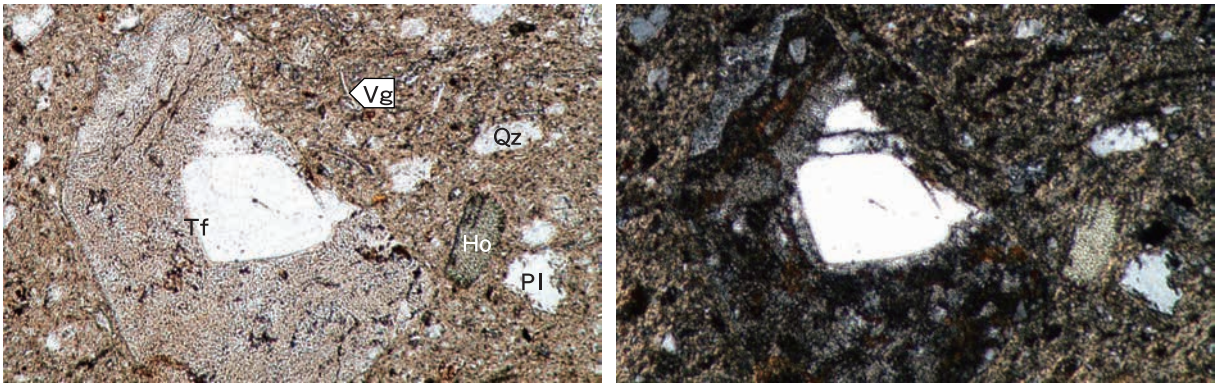
第 140 図　胎土薄片 (2)



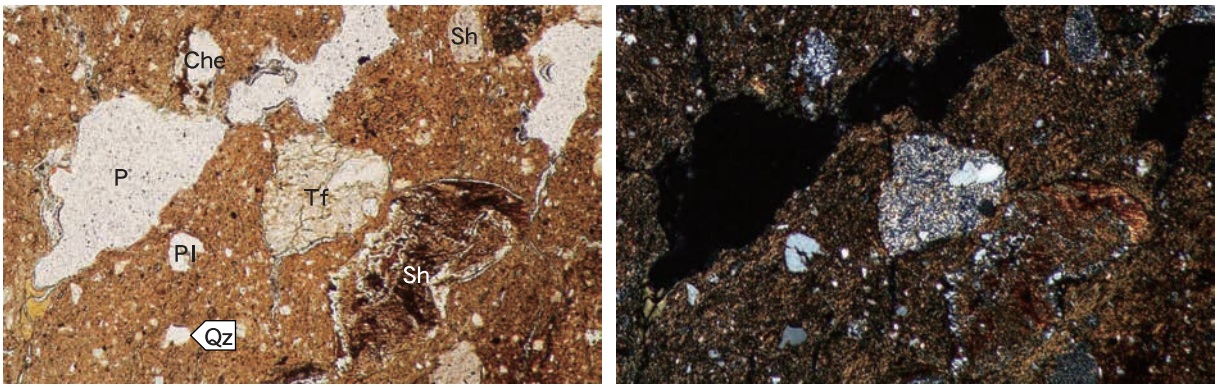
9.No.374(C区　SH28　庄内期　甕)



10.No.381(C区　SH28　庄内期　甕)



11.No.384(C区　SH28　庄内期　甕)

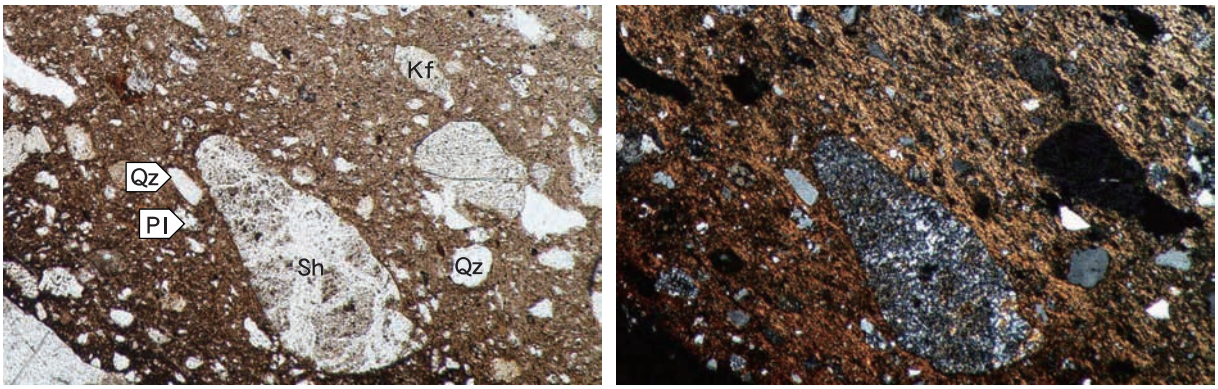


12.No.400(C区　SH28　庄内期　甕)

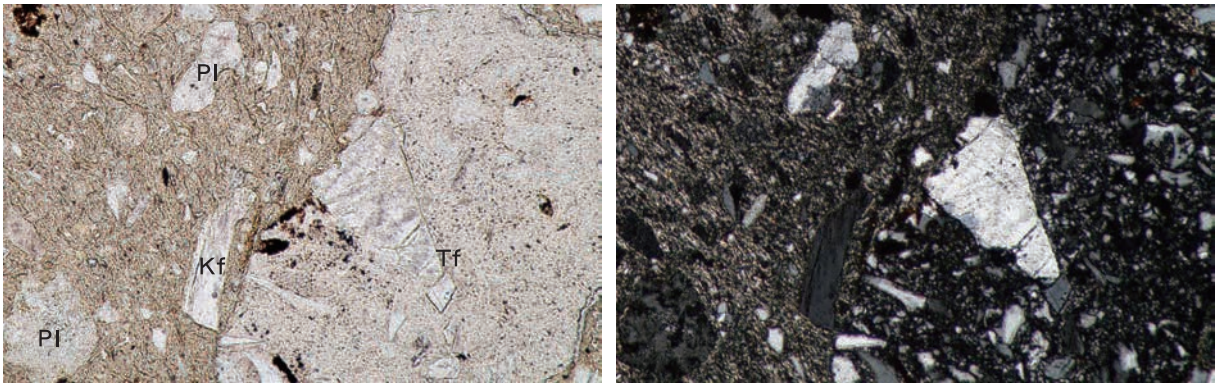
0.5mm

Qz:石英．Pl:斜長石．Ho:角閃石．Ep:緑レン石．Che:チャート．Sh:頁岩．Tf:凝灰岩．
Ry:流紋岩．Alt:変質岩．Vg:火山ガラス．P:孔隙．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

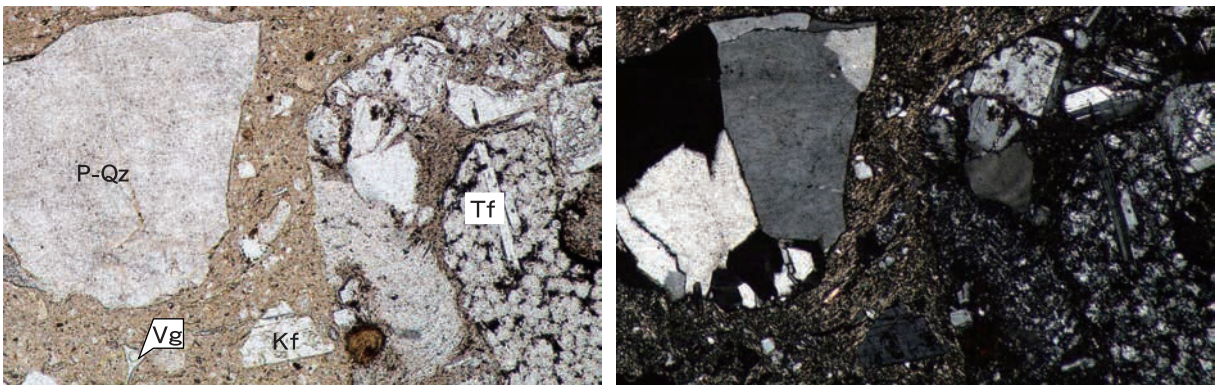
第 141 図　胎土薄片(3)



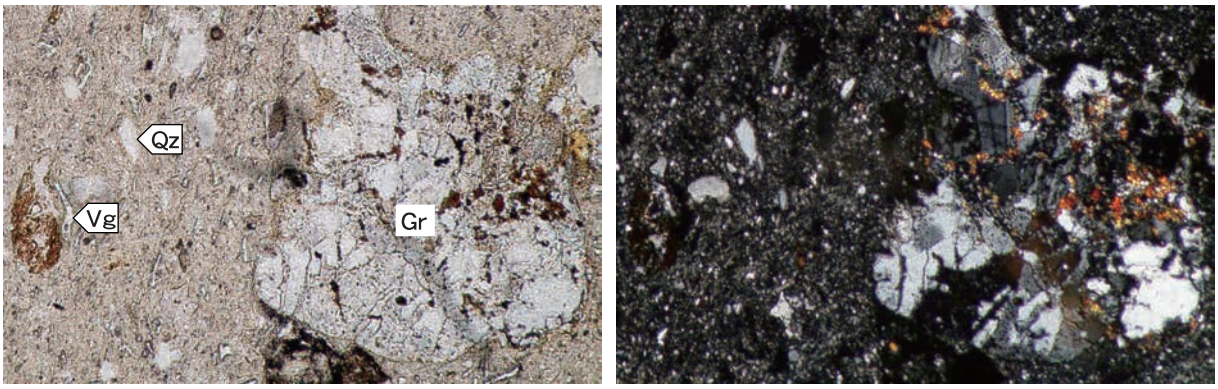
13.No.401(C区　SH28　庄内期　鉢)



14.No.402(C区　SH28　庄内期　鉢)



15.No.403(C区　SH28　庄内期　鉢)



16.No.409(C区　SH28　庄内期　鉢)

0.5mm

Qz:石英．Kf:カリ長石．Pl:斜長石．Sh:頁岩．Tf:凝灰岩．P-Qz:多結晶石英．Gr:花崗岩．
Vg:火山ガラス．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

第 142 図　胎土薄片(4)

第５章　遺物のまとめ

第１節　弥生土器

はじめに　中期と後期の土器が出土している。量的には後期の土器が圧倒的である。本節では、後期を中心に、検討することにする。なお、土器の編年については、大手前大学史学研究所『弥生土器集成と編年－播磨編－』2007(1)（以下、「集成と編年」）に依拠している。

１．中期

はじめに　中期初頭と中期後半の土器が出土している。中期の土器については、『市之郷遺跡Ⅲ』において検討が行われている。本節では、『市之郷遺跡Ⅲ』の分析をもとに、検討していくことにする。

(1)中期初頭

Ｂ区基盤層・ＳＤ09・Ｃ区包含層から出土している。器種としては、壺と甕に限られる。

壺　Ｂ区基盤層中とＣ区包含層から出土している。いずれも広口壺に分類されるものである。

Ｂ区基盤層からは309と310の２個体が出土している。309は、頸部に多条の沈線と櫛描波状文が施され、Ⅱ期前半に位置付けられるものである。310についても、櫛描波状文と櫛描直線文等の加飾が認められ、Ⅱ期後半に位置付けられる。

Ｃ区包含層からは528の１個体が出土している。櫛描波状文と櫛描直線文により加飾されたもので、Ⅱ期後半に位置付けられる。

甕　ＳＤ09とＣ区包含層から出土している。ＳＤ09出土資料は、如意形口縁をなし、体部に多条のヘラ描沈線が施されるもので、Ⅱ－２期～Ⅱ－３期に位置付けられる。Ｃ区包含層出土資料(529)についても同様である。

小結　以上から、基盤層中から出土した壺が最も古く位置付けられ、他はⅡ期後半を中心とした時期に位置付けられる。

(2)中期中葉～後半

はじめに　ここでは、遺構に伴う資料を中心に検討する。ＳＨ12・ＳＫ01・ＳＨ20・Ｐ09・Ｐ10・ＳＤ09・ＳＤ11出土資料が該当する。以下、遺構ごとにその時期を検討していく。時期については、『市之郷遺跡Ⅲ』を基準とする。

ＳＨ12　広口壺・無頸壺・甕の各器種が出土している。このなかで、広口壺（57）は広口壺Ａｄに分類されるもので、Ⅳ－３期に位置付けられている。ただし、頸部に指頭圧痕文突帯が貼り付けられていないことから、より遡る可能性が考えられる。無頸壺については、Ⅳ期前半に位置付けられるものである。以上から、Ⅳ期前半に位置付けられる。

ＳＫ01　甕と高坏が出土している。高杯は「高坏Ａａ」に分類されるもので、「集成と編年」ではⅢ期に位置付けられている。その形態から、Ⅲ－２期と考えられる。

ＳＨ 20　広口壺と甕が出土している。広口壺に関しては、櫛描波状文と櫛描直線文が加飾されⅡ期まで遡る可能性も考えられる。しかし、甕の口縁部の特徴からⅢ期まで下がるものと考えられる。

Ｐ 09　高坏が出土している。本遺構出土高坏は、『市之郷遺跡Ⅲ』では報告されていないもので、「集成と編年」ではⅣ－３期に位置付けられている。

Ｐ 10　広口壺が出土している。『市之郷遺跡Ⅲ』では広口壺Ｃｄに分類されているもので、Ⅲ－２期に位置付けられている。

ＳＤ 09　壺・甕・高坏が出土している。

壺に関しては、広口壺と無頸壺が出土している。これらの壺は、『市之郷遺跡Ⅲ』では報告されていないタイプである。広口壺の 494 はⅢ期に位置付けられるものと考えられる。

高坏は、514 については、Ⅲ－２期に位置付けられる。一方 513 については、Ⅳ－３期に位置付けられる。

以上から、本遺構出土資料については、Ⅲ期とⅣ期の２期にわたるものと考えられる。

ＳＤ 11　壺・甕・高坏・蓋が出土している。

壺に関しては、受口壺・広口壺・短頸壺が出土している。受口壺は『市之郷遺跡Ⅲ』では受口壺Ａａに分類され、Ⅳ－２期からⅣ－３期に位置付けられている。広口壺の 539 は、『市之郷遺跡Ⅲ』では報告されていないタイプで、「集成と編年」ではⅢ－２期に位置付けられている。短頸壺については、『市之郷遺跡Ⅲ』では「短頸壺Ｂｃ」に分類されⅣ－３期に位置付けられている。

甕については、口縁部が単純なく字形をなすことから、Ⅲ期に位置付けられるものである。高坏の 556 については、その形態的特徴から、Ⅲ－１期まで遡る可能性が考えられる。

以上から、本遺構出土資料に関しては、Ⅲ期とⅣ－３期の２時期に分類できるものと考えられる。

その他　以上検討した遺構以外に、ＳＫ 02 出土土器はⅢ期に、ＳＫ 09 下層出土土器はⅣ期に、それぞれ位置付けられる。

小　結　以上から、中期中葉の遺構については、Ⅲ期とⅣ期の大きく２時期の資料に分類できることが明らかとなった。Ⅲ期についてはⅢ－２期に、Ⅳ期に関してはⅣ－３期に、多くの遺構の時期が集中している。

また、『市之郷遺跡Ⅲ』と時期的には平行するが、『市之郷遺跡Ⅲ』で認められなかった型式が少なからず出土していることが明らかとなった。

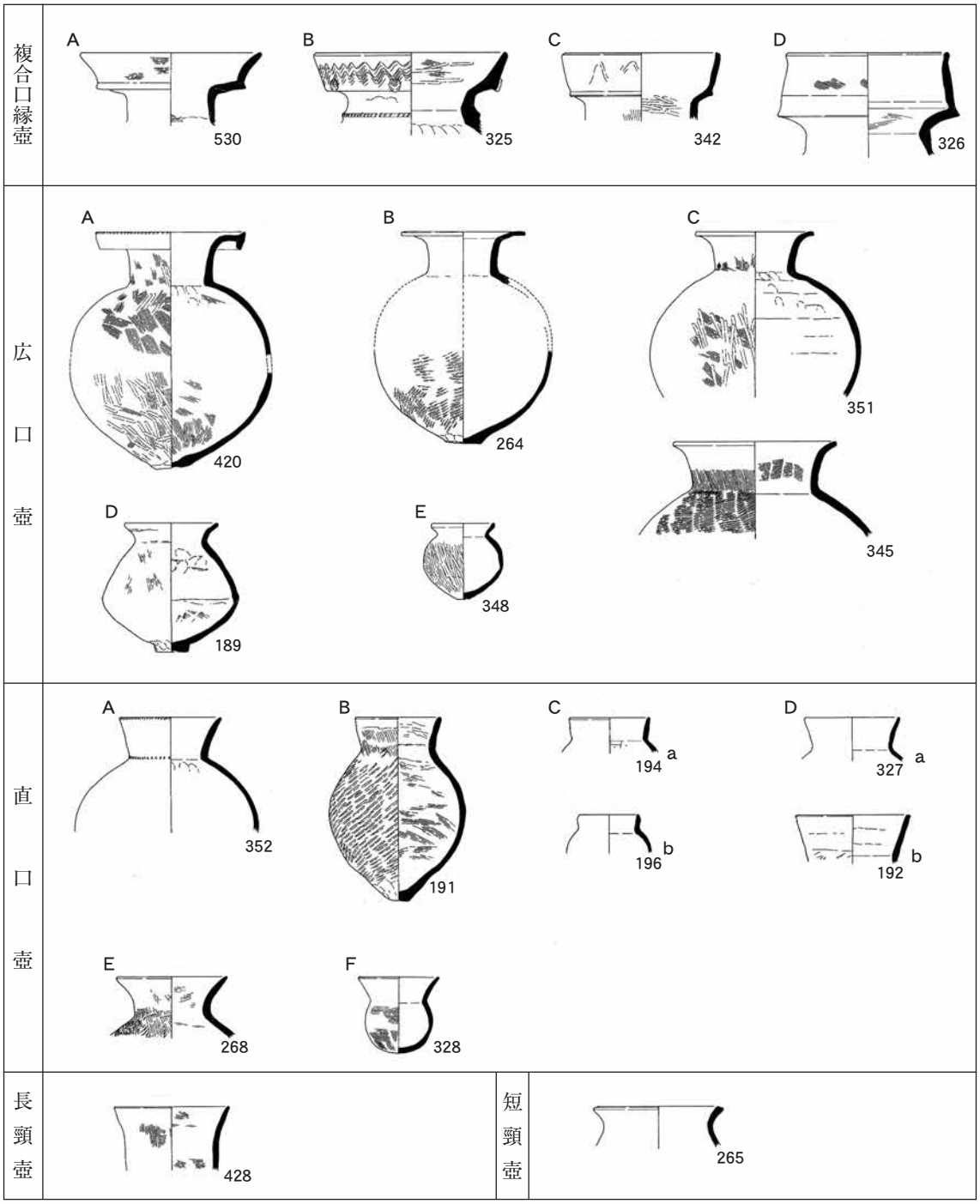
２．後期

はじめに　当該期の資料に関しては、ＳＨ 28 土器溜出土資料をはじめとして、良好な資料が多量に出土している。そこで、器種ごとに分類し、その時期を中心に検討を加えていくことにする。

(1)土器の分類

出土器種　壺・甕・鉢・高坏・器台・蓋・製塩土器が出土している。

壺　複合口縁壺・広口壺・直口壺・長頸壺・短頸壺が出土している（第 143 図）。



第 143 図　弥生後期壺形土器の分類

複合口縁壺　　Ａ～Ｄの４タイプに細分できる。

Ａ　　直立する頸部に対して、口縁部下半が水平方向にのび、上半が外反するもの。口縁部外面に加飾は認められない。343・419・530・531。

Ｂ　　外反する頸部に対して、口縁部下半・上半ともに斜上方にのびるもの。口縁部外面には加飾が認められる。325。

Ｃ　　直立する頸部に対して、口縁部下半が斜上方にのび、上半が内湾気味に立ち上がるもの。口縁部外面には加飾が認められる。342。

Ｄ　　外反する頸部に対して、口縁部下半が水平方向にのび、上半が内傾気味に直線的に立ち

上がるもの。讃岐型壺。326。

広口壺　Ａ～Ｅの５タイプに細分できる。

A　直立する頸部に対して、口縁部が大きく外反し、端部を上下に拡張させ面を有するもの。体部は長胴気味の球形。底部は丸底に近い。420。

B　基本的形態はＡと同じであるが、口縁端部を拡張させない。底部は丸底に近い。体部は叩き整形を基本に仕上げられている。264。

C　斜上方に直線的にのびる頸部に対して、口縁部下半が大きく外反するもの。口縁端部は、丸く仕上げられるもの(195・345・346・351)と、端面を有するもの(267・344・347・423～427)が認められる。また、法量的な差も認められる。

D　頸部から口縁部にかけて、短く直線的に開くもの。体部は算盤玉形をなし、底部は突出した平底形態をなす。189。

E　口縁部がく字形をなすもの。体部は倒卵形をなし、底部は尖り底形態をなす。348・349。

直口壺　Ａ～Ｆの６タイプに細分できる。

A　球形の体部に対して、口縁部が斜上方に直線的にのびるもの。体部と頸部の境が明確である。端部は外反気味で、薄く仕上げられる。352。

B　倒卵形の体部に対して、口縁部がほぼ直立気味に直線的に立ち上がるもの。底部は尖り底に近い。叩き整形を基本とする。191。

C　口縁部が短く直立するもの。口縁部が直線的なもの（ａ：193・194）と、やや内湾傾向にあるもの(ｂ：196・429)、とに細分できる。

D　口縁部が斜上方に直線的に立ち上がるもの。端部を丸く仕上げるもの（ａ：327）と、端面が認められるもの(ｂ：192)、とに細分できる。

E　外反する頸部に対して、口縁部が斜上方にやや内湾気味にのびるもの。端部は薄く仕上げられている。268。

F　球形の体部に対して､口縁部が斜上方に大きく立ち上がるもの。端部は薄く仕上げられる。328。

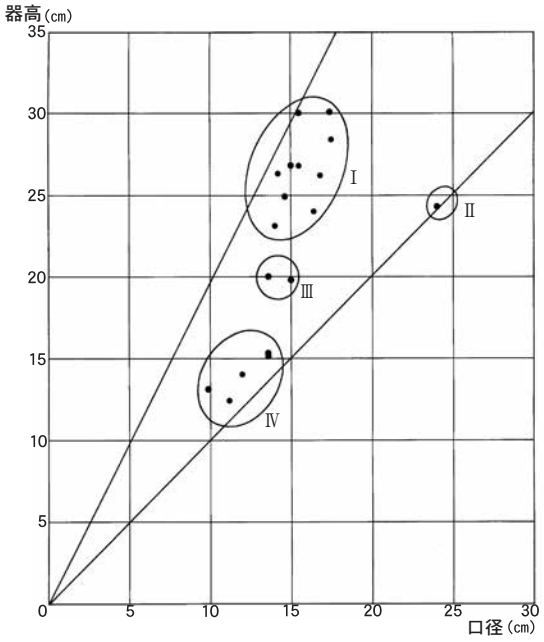
長頸壺　428の１点のみである。口縁部は直口する。

短頸壺　265の１点のみである。口縁部は外反する頸部に対してわずかに立ち上がる。

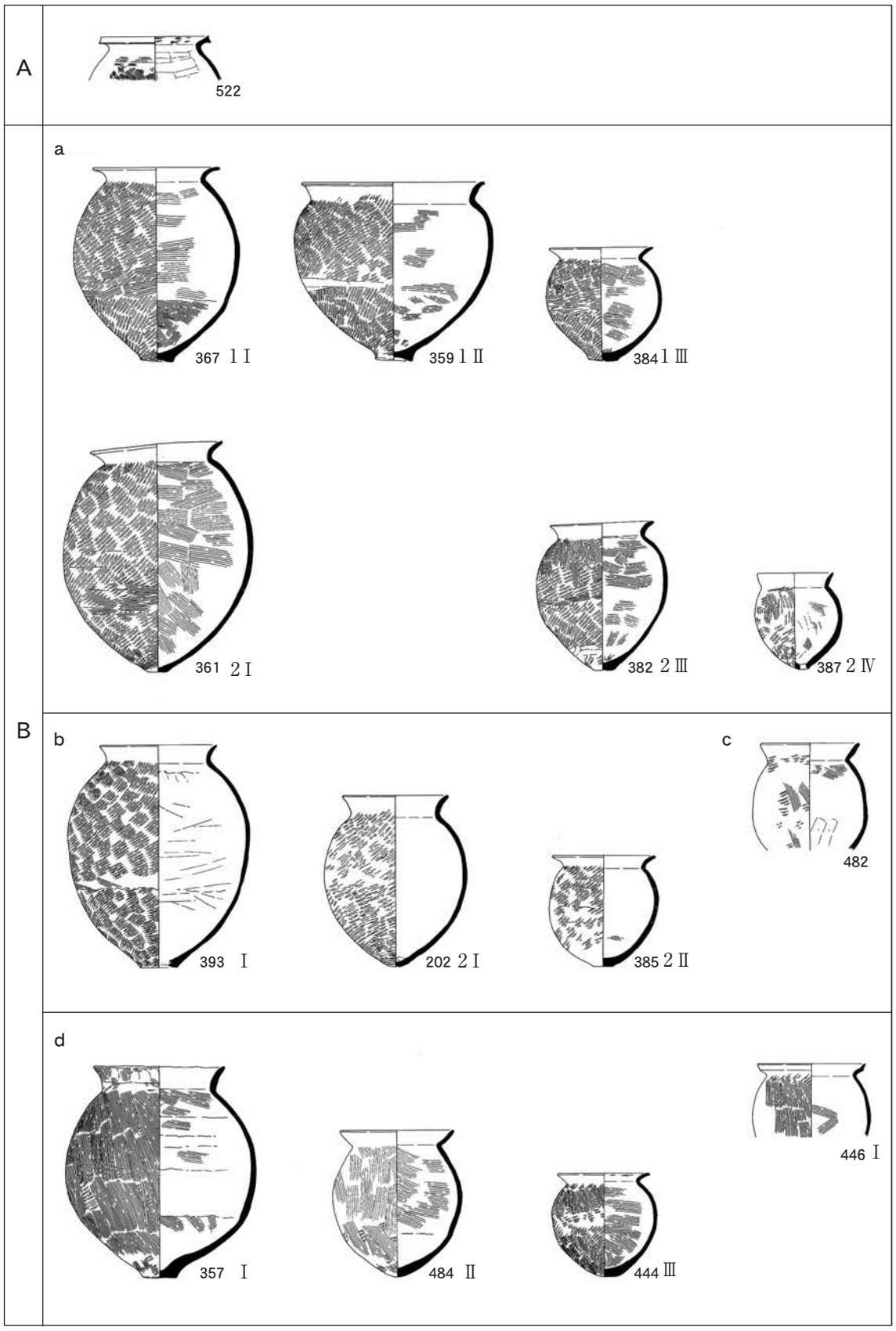
甕　５タイプ（甕Ａ～甕Ｅ）に分類できる（第145図・第146図）。

A　体部内面を横方向のヘラ削りにより仕上げ、外面をハケ調整により仕上げるもの。522・524。523についても当タイプに分類されるものと考えられる。

B　いわゆるＶ様式系の甕で、外面叩き整形を基本とする。内外面の仕上げによりさらに５タイプ(ａ～ｅ)に細分できる。

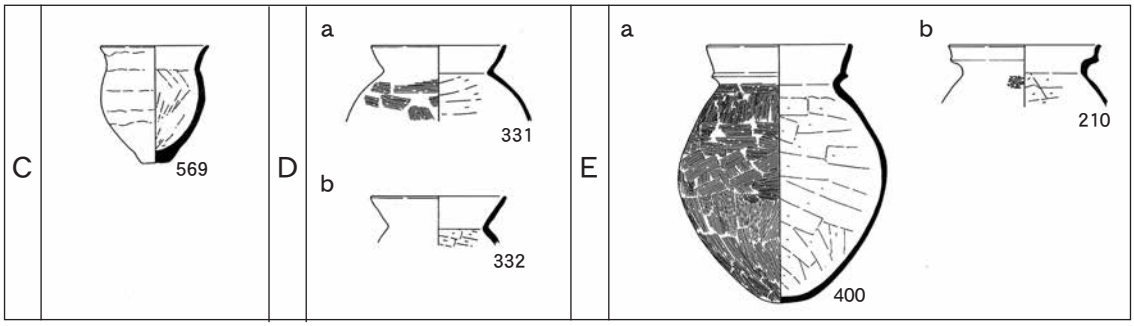


第144図　弥生後期甕Ｂａの法量分布



第 145 図　弥生後期甕の分類(1)

a　　外面は叩き整形､内面はハケ調整により仕上げられるもの。底部が平底形態をとるもの(ａ1)と、尖り底形態をとるもの(ａ2)、とが認められる。また、法量的にも差が認められ、大



第 146 図　弥生後期甕の分類(2)

型(Ⅰ・Ⅱ)・中型(Ⅲ)・小型(Ⅳ)の３タイプに分類できる(第 144 図)。ただし、ａ１においては小型のものは認められない。

b　外面はＢａ同様叩き整形により仕上げられるが、内面はナデ調整を基調に仕上げられるもの。底部は平底形態と尖り底形態が認められる。

c　外面はＢａ同様叩き整形により仕上げられるが、内面にヘラ削りが加えられるもの。482。

d　内面はＢａ同様ハケ調整により仕上げられるが、外面は叩き整形後ハケ調整が加えられるもの。外面のハケは一部に限られるものではなく、ほぼ全面に加えられるもの。底部は平底形態と尖り底形態が認められる。

e　内外面の調整はＢｄと同じであるが、口縁部が受口状をなすもの。446。

C　形態的には甕Ｂと同じであるが、外面に叩き整形痕が認められないもの。569。

D　いわゆる布留式甕。口縁端部に端面が認められるもの(ａ:331)と、認められないもの(ｂ:332)に細分できる。

E　いわゆる山陰系甕。典型的な山陰系甕(ａ:208･209･400)と口縁部の特徴が異なるもの(ｂ:210)が出土している。Ｅｂについては、搬入品ではなく、在地産と考えられる。

鉢　く字口縁鉢・直口鉢・有孔鉢・小型丸底鉢に分類できる(第 147 図)。

く字口縁鉢　口縁部がく字形をなすもの。底部が平底形態をとるもの(Ａ:401･402)と、台付のもの(Ｂ:456・567)、に分類できる。

直口鉢　６タイプ(Ａ～Ｆ)に分類できる。

A　底部が突出した平底形態をとるもの。器高に対して口径が大きなもの（ａ：403)、器高に対して口径が小さなもの(ｃ:218)、その中間形態(ｂ:334･405)、の３タイプに細分できる。

B　底部は突出しないが、明確な平底をなすもの。223。

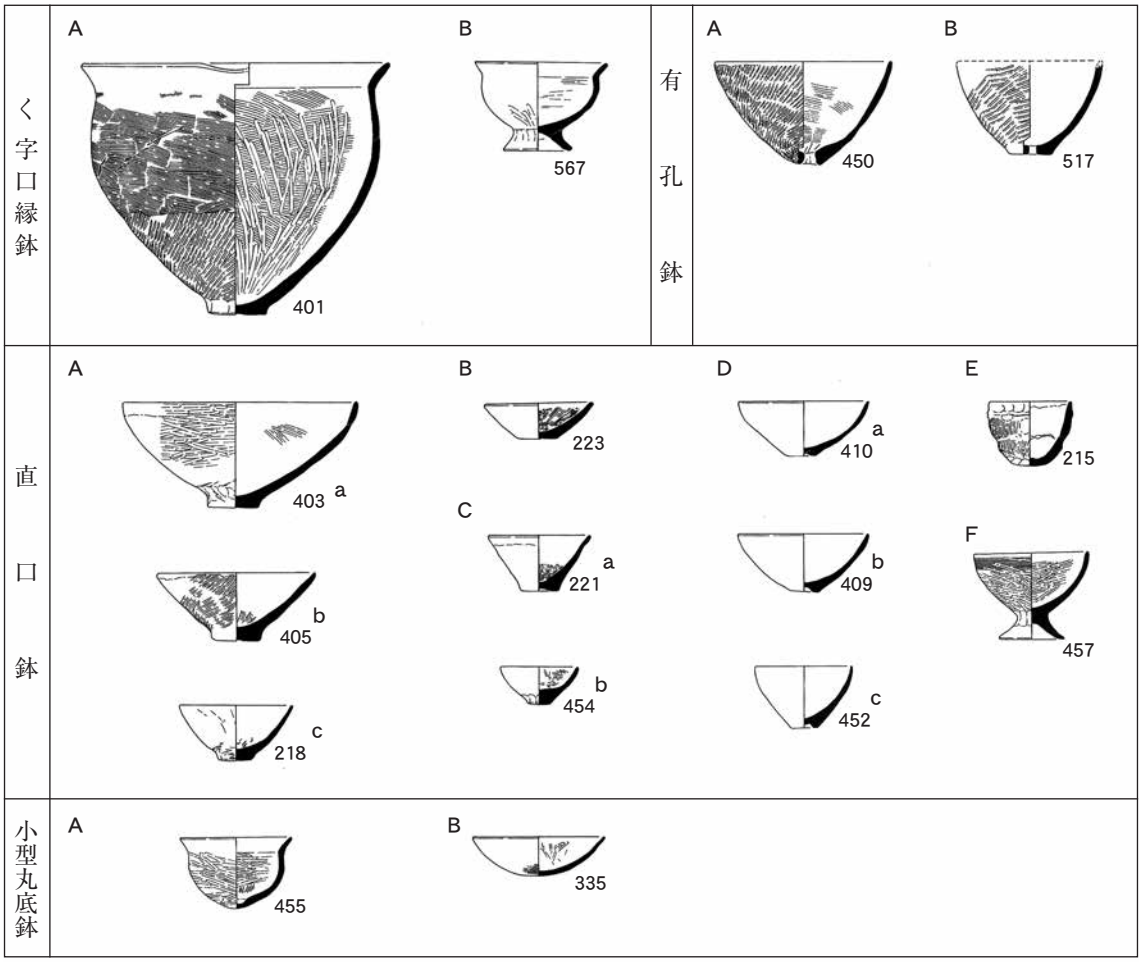
C　直口鉢Ｂに対して底部が不安定な平底形態をなすもの。体部から口縁部にかけて直線的なもの(ａ：221)と、椀形をなすもの(ｂ：454)、に細分できる。

D　底部が尖り底形態に近く、中央部が窪むもの。器高に対して口径が大きなもの(ａ：410)、器高に対して口径が小さなもの（ｃ：217・408・451 ～ 453)、その中間形態（ｂ：409）の３タイプに細分できる。

E　底部が丸底形態をなすもの。215。213 についても、当タイプの可能性が考えられる。

F　台が付くタイプ。457。

有孔鉢　ＡタイプとＢタイプに分類できる。両タイプとも叩き整形を基本としている。



第 147 図　弥生後期鉢の分類

A　　口径に対して器高が低いもの。404・450。

B　　口径に対して器高が高いもの。517。

小型丸底鉢　　ＡタイプとＢタイプに分類できる。

A　　いわゆる小型丸底である。455。

B　　浅い椀形をなすもの。335。

高坏　　椀形高坏・有稜高坏・有段高坏に分類できる（第 148 図）。

椀形高坏　　ＡタイプとＢタイプに分類できる。

A　　坏部が全体的に直線的なもの。411。

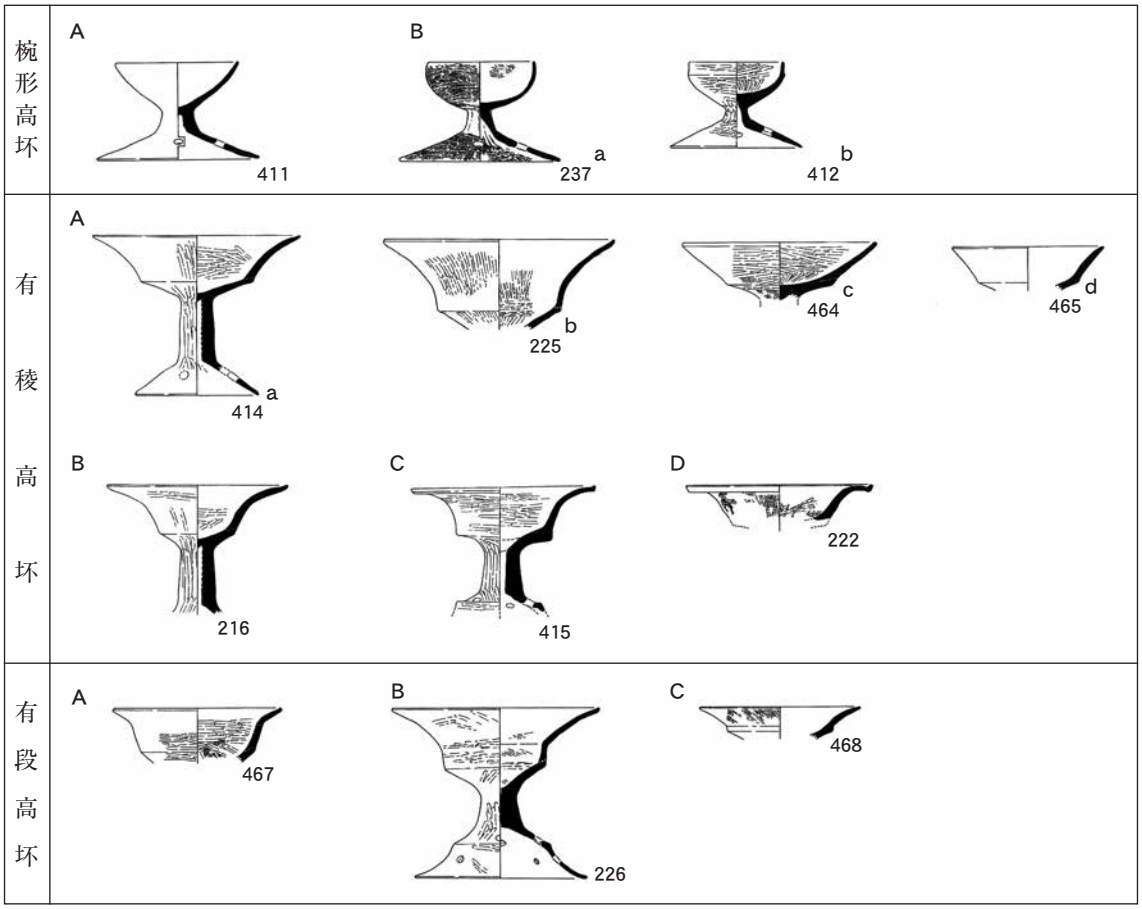
B　　口縁部が直立傾向にあるもの。内外面ともヘラミガキによりていねいに仕上げられている。体部から口縁部にかけてスムーズに変化するもの（237）と、外面に段が認められるもの（412）、に細分できる。

有稜高坏　　４タイプ（Ａ～Ｄ）に分類できる。

A　　直線的な体部に対して、口縁部が外反傾向にあるもの。口径に対して坏部高が深いもの（ａ：414）、ａよりさらに深いもの（ｂ：225）、ａとは逆に浅く口縁部が直線的なもの（ｃ：464）、ｃ同様浅いが口縁部が外反傾向にあるもの（ｄ：465）、に細分できる。

B　　坏部の形態が、ＡとＣの中間形態のもの。416。

C　　体部から口縁部への変換部の径が小さく、脚部も中位で段が付くもの。415。



第 148 図　弥生後期高坏の分類

D　　口縁部が大きく外反し、端部が上方につまみあげられるもの。228・466。

有段高坏　　３タイプ（Ａ～Ｃ）に分類できる。

A　　口縁部が途中で屈曲するもの。467。

B　　体部と口縁部の境が段をなし、境部分が直立し内外面ともに段が形成されているもの（226）。脚部にも段が認められる。

C　　外面のみに段が認められるもの（468）。

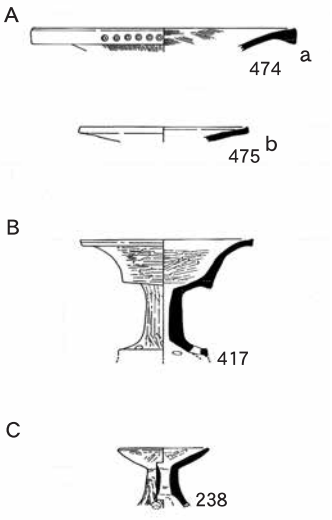
器台　　３タイプ（Ａ～Ｃ）に分類できる（第 149 図）。

A　　受部が大きく水平近くに開くタイプ。大型（ａ：474）と小型（ｂ：475）に細分できる。

B　　高坏形をなすもの。417。脚柱部が中空である以外、有稜高坏Ｃと形態的には全く同じである。

C　　いわゆる小型器台。中空である。238。

その他　　蓋（239）と製塩土器（224）が出土している。



第 149 図　弥生後期器台の分類

(2) 各型式の時期

はじめに　　ここでは、上記の器種分類をもとに、時期の検討を行いたい。時期の特定できるものを抽出し、これをもとに、当該期の遺構の時期を特定していくことにする。なお、時期の検討にあたっては、基本的には「集成と編年」に準拠していく。

壺　　時期の特定できるのは、複合口縁壺・広口壺・直口壺である。

複合口縁壺　基本的に庄内期に位置付けられるものである。この中で、複合口縁壺Ａはその後半に、同Ｂは前半に、その時期的中心が位置付けられている。

広口壺　　時期を特定できるのは、広口壺Ｃ・同Ｄで、いずれも庄内期に位置付けられる。この他、広口壺Ｂについても、庄内期を中心とした時期に位置付けられるものと考えられる。一方、広口壺Ａについては、Ⅴ－３期もしくはⅤ―４期に位置付けられる。

直口壺　　時期を特定できるのは、直口壺Ａで、庄内期後半に位置付けられる。直口壺Ｆについても、丸底をなすことから、庄内期以降に位置付けられるものと考えられる。

甕　　甕Ａについては、Ⅴ－１期もしくはⅤ－２期に位置付けられる。甕Ｄについては、布留式期に位置付けられる。甕Ｂについては、底部形態が尖り底に近いもの(甕Ｂａ２・甕Ｂｂ・甕Ｂｄ)は、庄内期前半に位置付けられるものと考えられる。平底形態をとるもの(甕Ｂａ1)については、Ⅴ－５期を中心とした時期に位置付けられる。

この他、甕Ｅについては、山陰系の甕である。搬入品かどうかは別として、甕Ｅａについては庄内期に位置付けられるものと考えられる。

鉢　　時期の特定できるのは、く字口縁鉢・有孔鉢である。

く字口縁鉢　Ａについては、Ⅴ－４期を中心とした時期に位置付けられる。

有孔鉢　　東播磨ではⅤ－５期から庄内期を中心とした時期に位置付けられている。底部形態の特徴から判断して、当該期に位置付けられるものと考えられる。

高坏　　各形式とも庄内期の範囲で理解できるものである。

椀形高坏　Ｂが坏部と脚部の接合が付加充填法によることから、庄内期後半に位置付けられる。

有稜高坏　各タイプとも時期の特定は困難であるが、いずれも庄内期の範疇で理解できるものである。

有段高坏　Ｂの類例が川島遺跡 20 溝にみられ、「集成と編年」においては庄内３に位置付けられている。

器台　　器台Ｂと器台Ｃについては、庄内期のなかで理解できるものである。両タイプとも庄内期後半に位置付けられるものと考えられる。器台Ａａについては、Ⅴ－４期を中心とした時期に位置付けられるものと考えられる。

製塩土器　224 の１個体であるが、湊遺跡(大阪府泉佐野市)に類例を求めることができ、庄内期を中心とした時期に位置付けられている(2)。

(3)遺構の時期

当該期の主な遺構の時期について検討を加えていくことにする。対象とするのは、ＳＨ 22・ＳＨ 27・ＳＨ 28・ＳＨ 29・ＳＫ 15 である。

ＳＨ 22　　甕Ｂｂ２・甕Ｅａ・有稜高坏Ａｂ・椀形高坏Ｂａ・器台Ｃ・製塩土器の出土から、庄内期に位置付けられる。甕Ｂｂ２から判断するとその前半と考えられるが、高坏・器台の特徴から、庄内期後半に位置付けられるものと考えられる。

ＳＨ 27　　甕Ｄａ・同Ｄｂの出土から、布留式期に位置付けられる。

ＳＨ 28　　当該資料については、土器溜出土資料とそれ以外の２群にわけて検討する。

土器溜　　広口壺Ｃ・直口壺Ａ・甕Ｅａ・椀形高坏Ｂｂ・器台Ｂの出土から、庄内期の範疇で理解できる資料と考えられる。

土器溜以外　広口壺ＡはＶ－３もしくはＶ―４期に位置付けられる。この他、器台Ａａについても、Ｖ－４期を中心とした時期に位置付けられている。さらに、長頸壺についても、Ｖ期の範疇で理解できるものである。有孔鉢についても、Ｖ期後半で理解できるものである。

一方、庄内期の範疇で理解できる器台Ｂや複合口縁壺も出土している。しかし、後者の土器の多くは土器溜の近くからの出土である（第 112 図）。したがって、これらの土器については、土器溜の一部と理解することができる。さらに、出土位置を特定できなかったが、底部が尖り底の甕Ｂについても、上記と同様に位置付けることが可能と考えられる。

以上から、土器溜以外の土器については、Ｖ期後半を中心とした時期と理解できるのではないかと考えられる。

小結　　以上から、ＳＨ 28 が機能していたのはＶ期後半と考えられ、庄内期には機能を失い、一括土器群が廃棄されたものと考えられる。

ＳＨ 29　　甕Ｂの底部形態から、弥生Ⅱ期－２と考えられる。

ＳＫ 15　　広口壺Ｂから庄内期に位置付けられる。脚部片についても、当該期の資料と考えられる。

ＳＤ 06　　甕Ｂの底部形態から、Ｖ期と考えられる。

小結　　以上から、ＳＨ 28（土器溜以外）がＶ期、ＳＨ 22・ＳＨ 28（土器溜）・ＳＨ 29 が庄内期、ＳＨ 27 が布留式期と、大きく３時期にわけることができる。

ただし、ＳＨ 29 の時期については、ＳＨ 28 との切り合い関係、イチマル土坑の存続時期などが問題となってくる。

この他、ＳＤ 09 については、Ⅰ期とＶ期の遺物が出土している。

(4)他の特徴

他地域系の土器　庄内期の資料中において、山陰系の土器が認められた。その一方、いわゆる庄内式甕は、小片も含めて１点も出土していないことを明記しておきたい。『市之郷遺跡Ⅰ』・『市之郷遺跡Ⅲ』では少なからず出土しており、特徴を異にしている。

製塩土器　　この他、庄内期のＳＨ 22 から、脚台Ⅱ式の製塩土器が出土している。当タイプの製塩土器は、当該資料が初めての出土である。

３．まとめ

これまでの検討結果から、中期においては３期に、後期においては布留式期まで含めて４期に分けることができた。

〔註〕

(1)大手前大学史学研究所『弥生土器集成と編年－播磨編－』2007

(2)中村淳磯「泉州地域における土器製塩の問題」『大阪文化財論集Ⅱ』財団法人大阪文化財センター 2002

第２節　古墳時代の土器

土師器と須恵器が出土している。これらの土器の多くは、須恵器の特徴から、６世紀後半～７世紀前半に位置付けられるものである。

１．土師器

はじめに　比較的バリエーションをもって多く出土している。ここでは、器種分類をおこない、市之郷遺跡における土師器の特徴を明らかにしていきたい。

(1)器種分類

甕・高杯・椀・鉢・堝・甑他が出土している(第 150 図)。

甕　体部が長胴タイプ(甕Ａ)と丸胴タイプ(甕Ｂ)に分類できる。

甕Ａ　口縁部がく字形をなすタイプ(Ａａ)と、受口状をなすタイプ(Ａｂ)に細分できる。また、甕Ａａは、内面がヘラ削りにより仕上げられるａ2(55)と、ハケ調整も加えられるａ1(14)に分類できる。

甕Ｂ　球形の体部に口縁部が短く、く字形をなすタイプ(Ｂａ：75・136・247・249・251・263)、口縁部が短く受口状をなすタイプ（Ｂｂ：248・250)、口縁部が長く直線的なタイプ（Ｂｃ：79・80)、に細分できる。

甑　口縁端部を丸く収めるタイプ(Ａ：73)と、端面を有するタイプ(Ｂ)に分類できる。また、甑Ｂについては、端面が水平なもの（Ｂａ：128）と、内傾するもの（Ｂｂ：258・74）に細分できる。

このほか把手も出土している（140・148）が、舌状をなすタイプで、牛角状を呈するものは出土していない。

椀　５タイプ(Ａ～Ｅ)に分類できる。

椀Ａ　口縁部から体部が半球形をなし、底部は丸底をなすもの(76・130・131)。

椀Ｂ　基本的な形態は椀Ａと同じであるが、口縁部が外反傾向にあるもの(253)。

椀Ｃ　口径に対して浅い皿形のもの(113・279)。

椀Ｄ　椀Ｃとは逆に、口径に対して深いタイプ(261)。

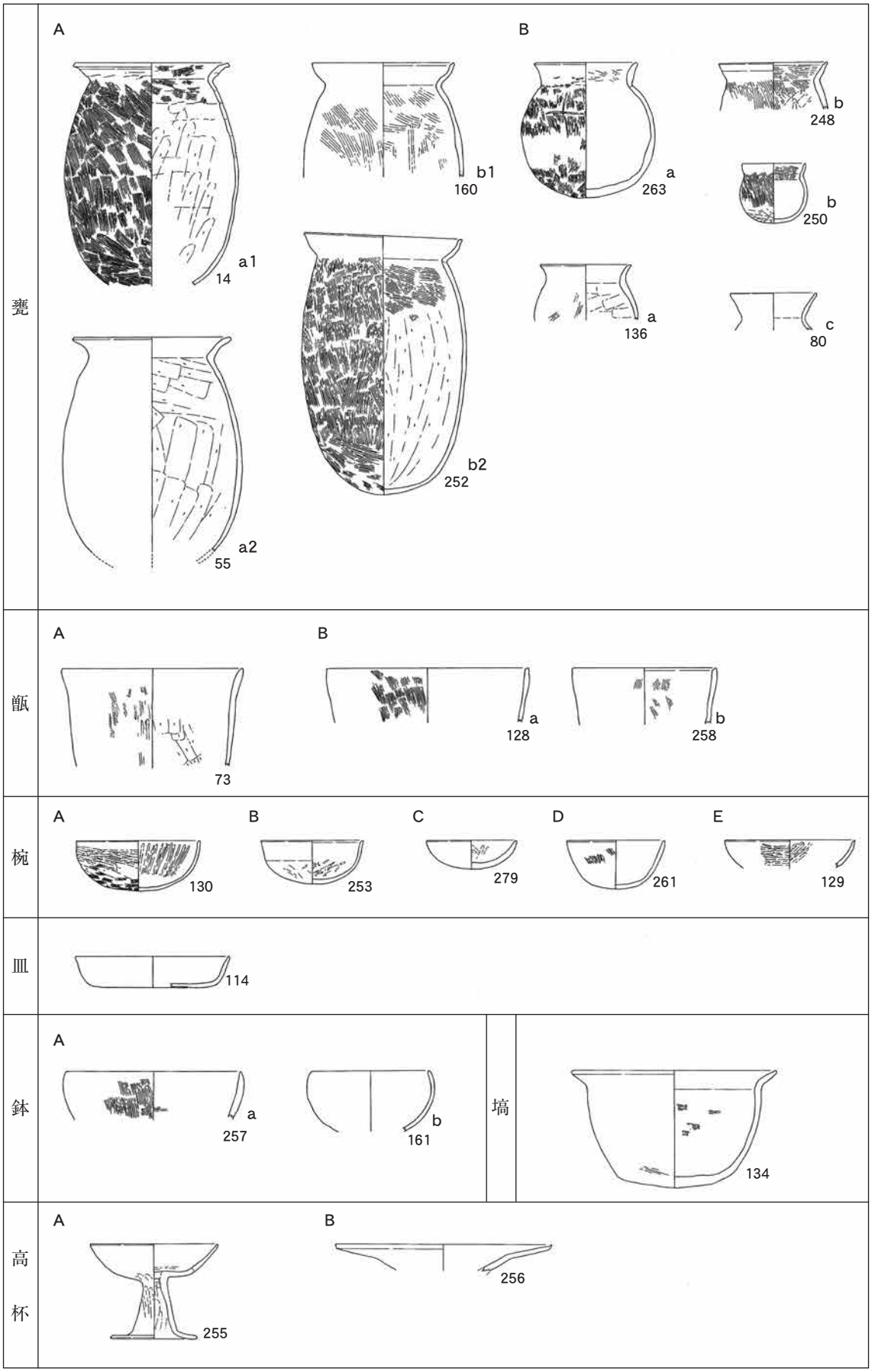
椀Ｅ　椀Ｃよりさらに、口径に対して浅いタイプで、口縁端部が外反傾向にあるもの(129)。

皿　114 の１個体が出土している。

鉢　口縁部が直立気味のもの(ａ：257)と、内湾傾向にあるもの(ｂ：161)に細分できる。

堝　134 の１個体が出土している。

高杯　有稜高杯(高杯Ａ：32・43・52・255)と皿形高杯(高杯Ｂ：256)に分類できる。この他、脚部も出土している。



第 150 図　古墳時代土師器の分類

２．須恵器

(1)器種分類

杯身・杯蓋・杯Ｈ・杯Ｈ蓋・高杯・壺・横瓶・提瓶・平瓶・甕・鉢・甑が出土している(第151図)。

杯身　66の１個体が出土している。ＭＴ15型式に位置付けられるものである。

杯蓋　162の１個体が出土している。ＴＫ23型式に位置付けられるものである。

杯Ｈ　杯Ｈ蓋とともに、最も多く出土している。法量的に、口径が15.0㎝～7.3㎝と、差が認められる(第152図)。時期的な問題を含めた詳細については次項において検討する。

杯Ｈ蓋　杯Ｈとともに、最も多く出土している。法量的に、口径16.9㎝～10.2㎝と、差が認められる(第154図)。時期的な問題を含めた詳細については次項において検討する。

高杯　ＴＫ23型式前後に位置付けられるタイプ（Ａ）と、ＴＫ43型式以降のもの（Ｂ）に分類できる。前者は120の１個体のみである。

高杯Ｂについては、長脚タイプ(ａ)と短脚タイプに分類できる。ａタイプについては、２タイプ(ａ1・ａ2)に細分できる。ａ1は、284～286の３個体で、共にＳＤ06から出土している。ａ2は、176の１個体である。ＭＴ15型式を中心とした時期と考えられる。

ｂタイプは、脚部がハ字形に開くタイプ（ｂ1：493）と大きく外反したより短脚なタイプ(ｂ2：29・304)に細分できる。

なお、36については台付壺の脚端部の可能性が考えられる。

壺　有蓋壺と無蓋壺が出土している。前者は、３個体（178・179・295）出土しているが、３個体とも法量が異なる。後者は、64の１個体が出土している。

平瓶　106の１個体で、口縁部のみ残存する。

提瓶　146の１個体で、口縁部のみ残存する。

横瓶　324の１個体で、口縁部から体部にかけて残存する。体部の仕上げにおいて、カキメが認められない。

甕　口縁端部の特徴から、玉縁状をなすタイプ（323)、方形をなすタイプ（135)、折り返されるタイプ(294)に分類できる。

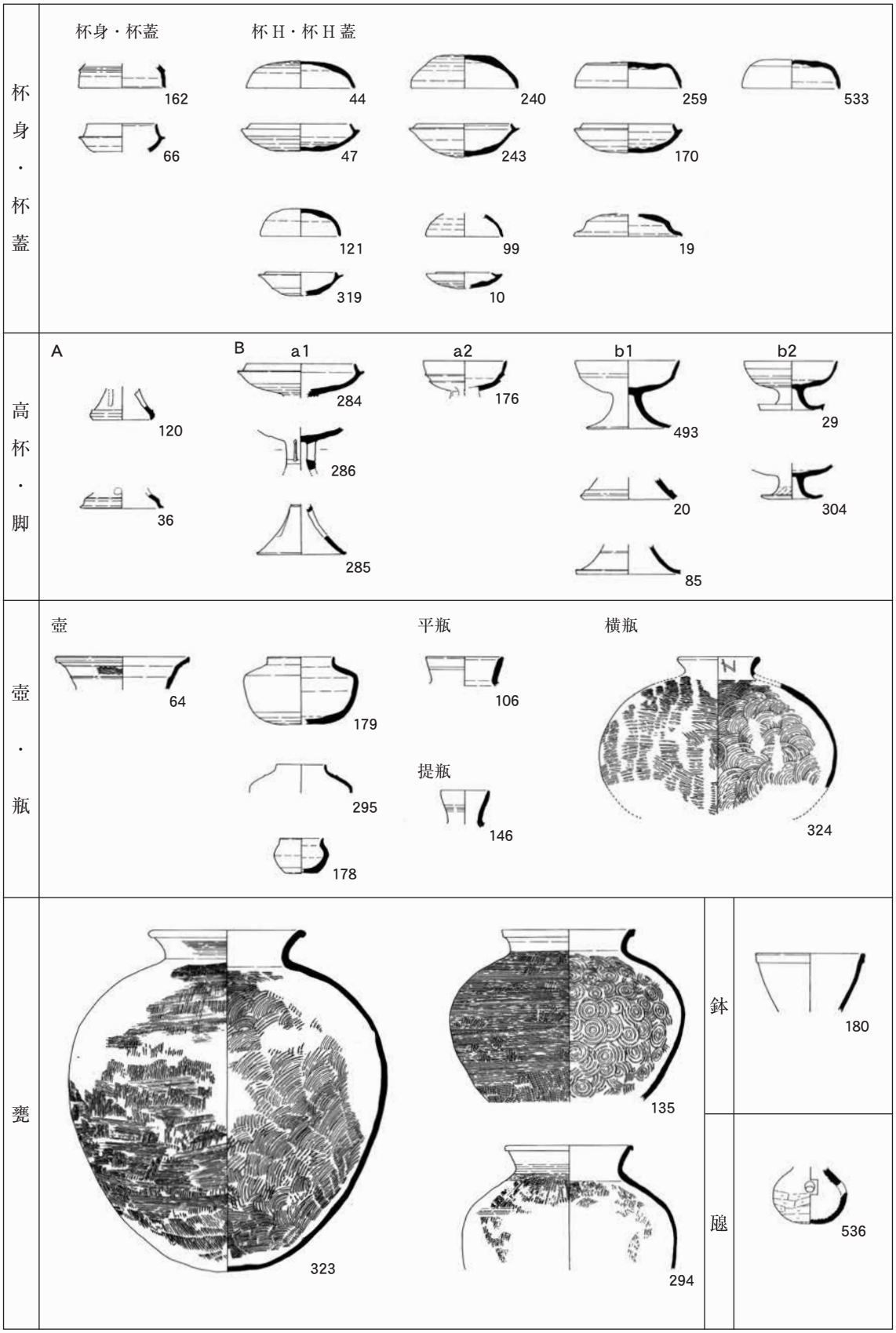
鉢　180の１個体が出土している。

甑　536の１個体が出土している。底部が静止ヘラ削りにより仕上げられているが、体部は小型である。

(2)時期の検討

はじめに　まず住居跡群の時期について検討していく。時期の検討にあたっては、編年観が確立されている杯Ｈおよび杯Ｈ蓋を基準とする。今回報告する杯Ｈおよび杯Ｈ蓋については、概ねＴＫ43型式からＴＫ217型式のなかで理解できるものである。

ところで、当該期の須恵器の杯Ｈおよびこれとセットとなる杯Ｈ蓋の編年においては、その口径が時期とともに縮小傾向にあるといわれている[(1)]。そこで、特にＡ区で複雑な切り合い関係をもって検出されている住居跡群の切り合い関係と、出土した杯Ｈおよび杯Ｈ蓋の口径の変化の対応関係を、一つの検討材料としたい。



第 151 図　古墳時代須恵器の分類

また、上記住居跡群以外の住居跡、およびＢ区・Ｃ区の住居跡についても、Ａ区住居跡群との関係において検討していくことにする。

杯Ｈ・蓋の法量　杯Ｈおよび杯Ｈ蓋それぞれについて、口径の大きな順に並べ、出土遺構との対応関係を図示したのが第 152 図～第 155 図である。地区・住居跡群単位で検討してみたい。

Ａ区　西側住居跡群・中央住居跡群・東側住居跡群の３つの住居跡群からなる。

西側住居跡群　出土須恵器を中心にみると、ＳＨ 03 とＳＨ 01 がＴＫ 209 型式に、ＳＨ 02 がＴＫ 43 型式～ＴＫ 217 型式に位置付けられる。このなかで、ＳＨ 02 については、土器型式にかなりの時間幅が認められる（第 156 図・第 157 図）。

そこで、杯Ｈおよび杯Ｈ蓋の法量分布（第 152 図～第 155 図）を検討してみたい。まず、杯Ｈ蓋においてはＳＨ 03 が古く位置付けられる。また、ＳＨ 01 とＳＨ 02 とでは、ＳＨ 02 に新しい傾向の杯Ｈ蓋が認められる。さらに杯Ｈについては、ＳＨ 02 とＳＨ 03 の間において、ＳＨ 03 →ＳＨ 02 の関係を確認することができる。

以上出土須恵器から、ＳＨ 03 →ＳＨ 01 →ＳＨ 02 と新古関係を捉えることができる。これは、検出時に把握した切り合い関係と一致するものである。このなかで、大きくはＳＨ 03 とＳＨ 01 が古く、ＳＨ 02 が新しく位置付けられるものと考えられる。

中央住居跡群　出土須恵器を中心にみると、ＳＨ 06 がＴＫ 209 型式に、ＳＨ 11 がＴＫ 43 型式～ＴＫ 217 型式に、ＳＨ 07 ～ＳＨ 10 がＴＫ 217 型式に位置付けられる（第 156 図～第 159 図）。このなかで、ＳＨ 11 については、土器型式にかなりの時間幅が認められる。

そこで杯Ｈ蓋の法量分布（第 154 図・第 155 図）を検討してみると、ＳＨ 11 が最も古く位置付けられる。逆にＳＨ 10 が最も新しく位置付けられる。

次に、杯Ｈにおいては、まずＳＨ 09 が最も新しく位置付けられる（第 152 図・第 153 図）。また、ＳＨ 06 →ＳＨ 11 →ＳＨ 07 の順に法量変遷を捉えることができる。

ところで、検出時の切り合い関係においては、ＳＨ 06 →ＳＨ 11 →ＳＨ 08 →ＳＨ 10 →ＳＨ 07 →ＳＨ 09 の順に建て替えられている。

このように、検出時の切り合い関係から判断した前後関係と、杯Ｈ･杯Ｈ蓋の法量変遷は、一致しない。当住居跡群の５回に及ぶ建替えは、限られた時期のなかで行われたものと理解したい。このなかで、ＳＨ 06 とＳＨ 11 を古い一群、ＳＨ 07 ～ＳＨ 10 を新しい一群として、理解できるのではないかと考えられる。

東側住居跡群　出土須恵器から、ＳＨ 17 がＴＫ 209 型式に、ＳＨ 18 がＴＫ 43 型式～ＴＫ 217 型式に、ＳＨ 19 がＴＫ 217 型式に位置付けられる（第 158 図・第 159 図）。出土須恵器からみると、杯Ｈ蓋においてＳＨ 17 →ＳＨ 18 →ＳＨ 19 の順に法量が小さくなる傾向が認められる（第 154 図・第 155 図）。

ところで、検出時に把握した切り合い関係では、ＳＨ 19 →ＳＨ 18 →ＳＨ 17 の順に建て替えられたと理解している。

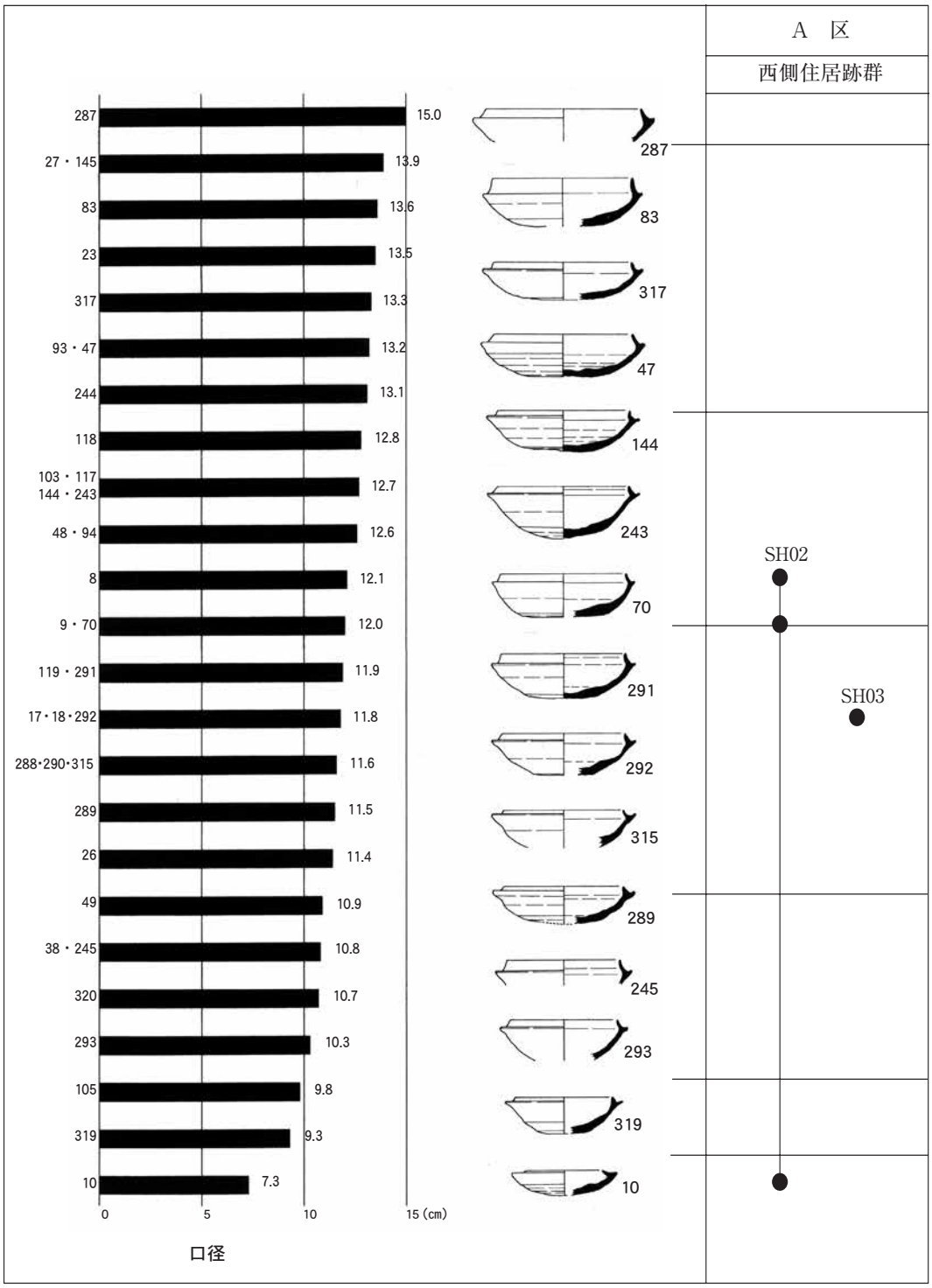
以上から、検出時の切り合い関係と杯Ｈ蓋の法量変化は一致しない。よって、当住居跡群に関しても、中央住居跡群同様、建て替えは須恵器の同一型式のなかで行われたものと理解したい。３棟の住居跡はほぼ同一時期のものと理解したい。

他の住居跡　ＳＨ 14・ＳＨ 15 についてはＴＫ 209 型式～ＴＫ 217 型式に位置付けられるものと考えられる（第 158 図・第 159 図）。これは、住居跡群の新しい時期に対応するものと考えられる。

ＳＨ 04 についても同様の時期と考えられる（第 156 図・第 157 図）。

B区　　ＳＨ 23 ～ＳＨ 25 が対象となる（第 160 図・第 161 図）。ＳＨ 23 はＴＫ 43 ～ＴＫ 209 型式に対応し、Ａ区中央住居跡群の古い段階とほぼ併行する（第 152 図～第 155 図）。ＳＨ 24 については、ＴＫ 10 型式の新しい段階まで遡る可能性が考えられる。これは、調査時に確認した切り合い関係と一致するものである。

この他、当区のＳＤ 06 出土資料（第 162 図）をみると、杯Ｈ蓋・杯Ｈともに、ＳＨ 23 より新しい傾向にある。

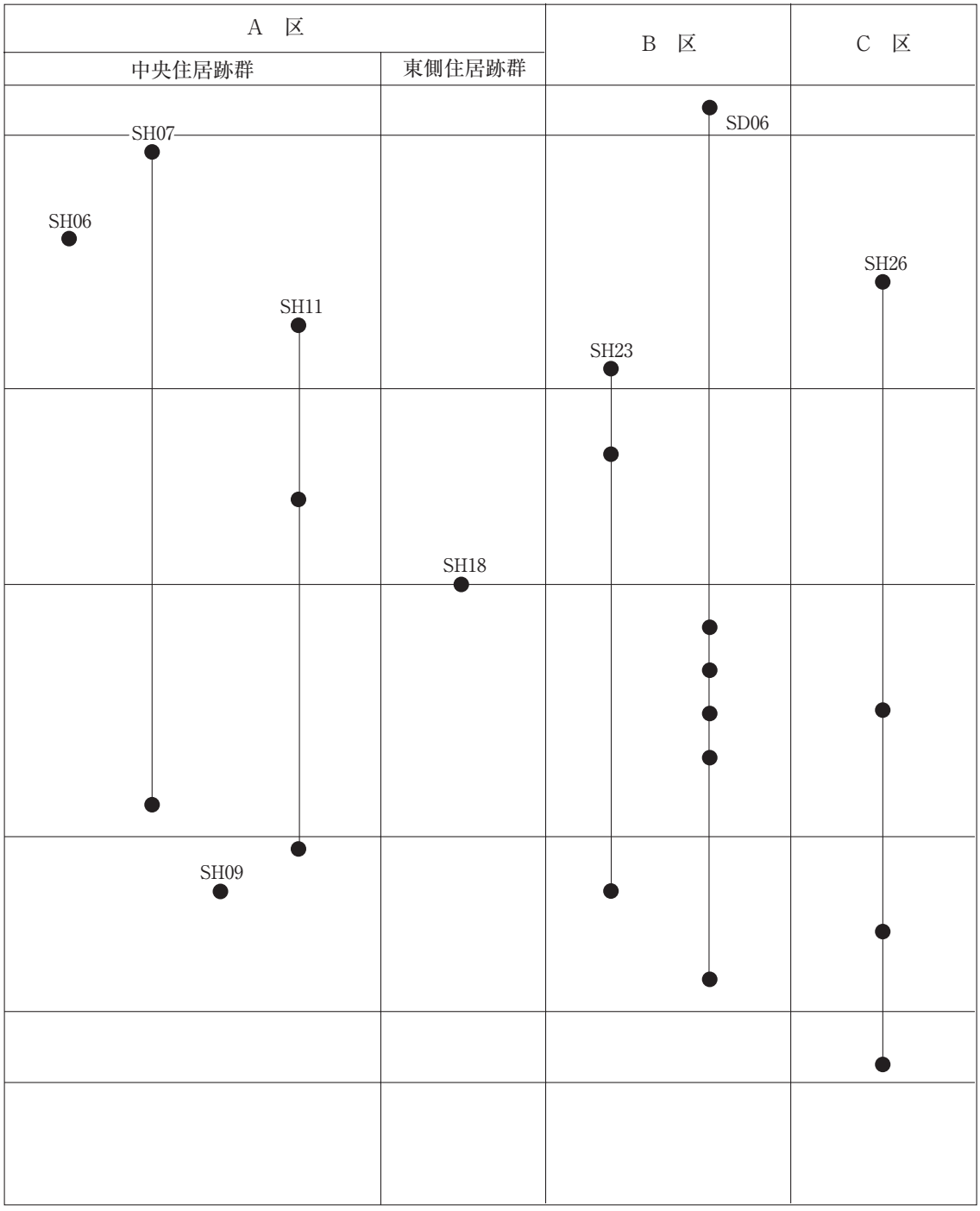


第 152 図　杯Ｈの法量（1 － 1 ）

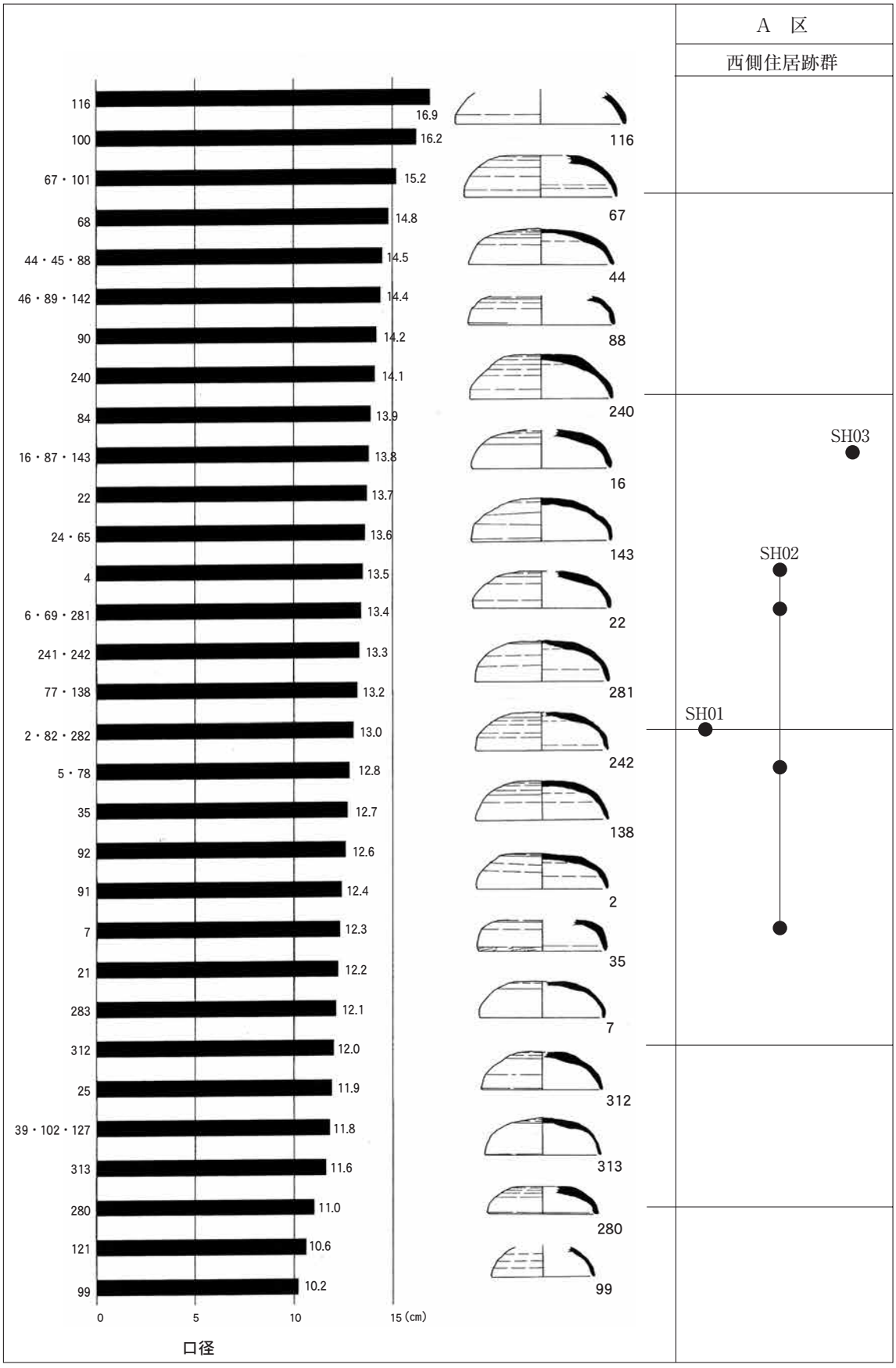
C区　　ＳＨ 26 が対象となる（第 162 図）。ＴＫ 43 ～ＴＫ 209 型式に対応し、杯Ｈ蓋をみると、Ａ区住居跡群のなかでは最も新しい段階に位置付けられる（第 154 図・第 155 図）。また、杯Ｈについても全体的に新しい傾向にある（第 152 図～第 153 図）。

他の遺構の時期　竪穴住居を中心に、その時期について検討してきた。そこで、ここでは上記以外の遺構の時期について検討してみたい。

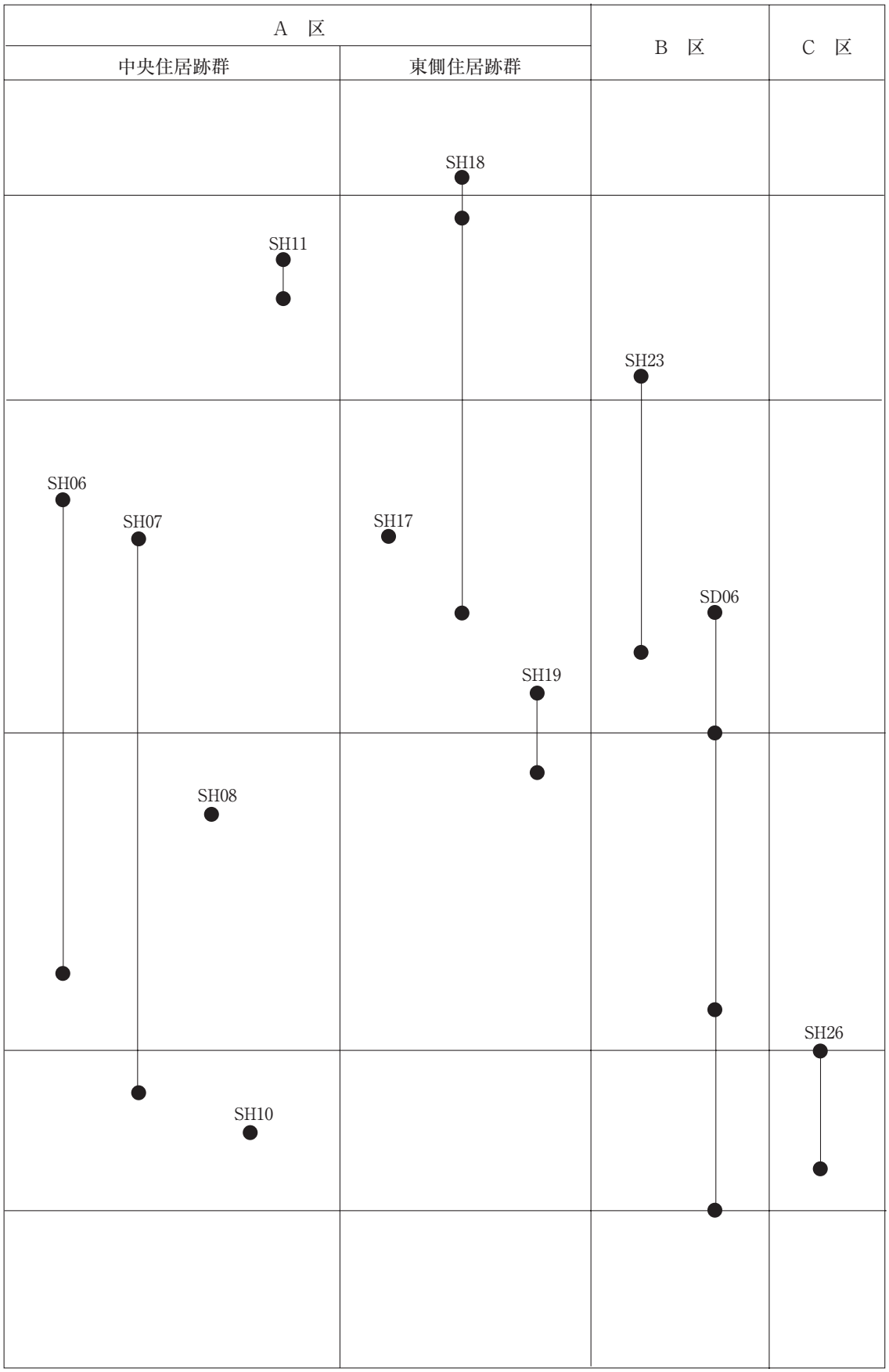
掘立柱建物　ＳＢ 01 出土杯Ｈをみると、型式的には竪穴住居と同じである（第 152 図・第 153 図）。しかし、西側竪穴住居跡群を切っていることから、これらより新しい段階に位置付けられる。ＳＢ 03 ～ＳＢ 05 についても同様に考えたい。



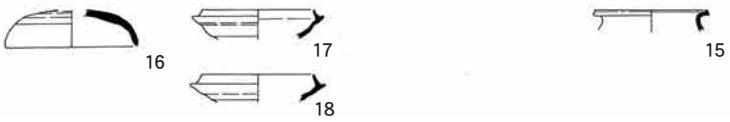
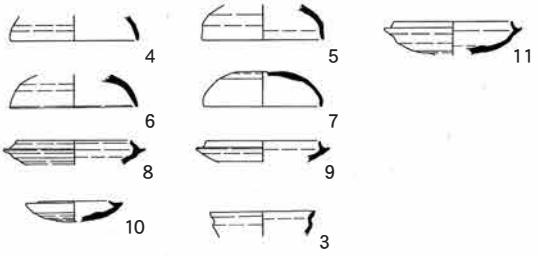
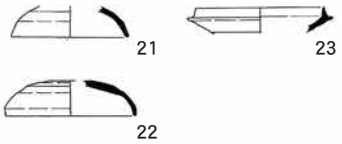
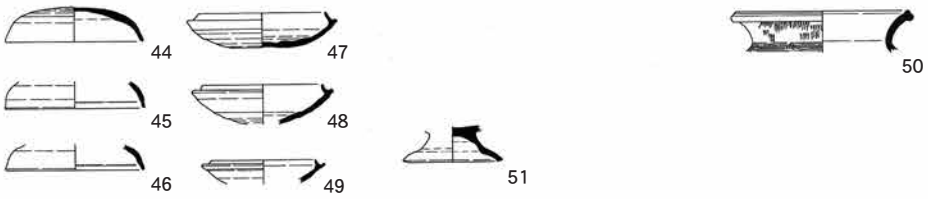
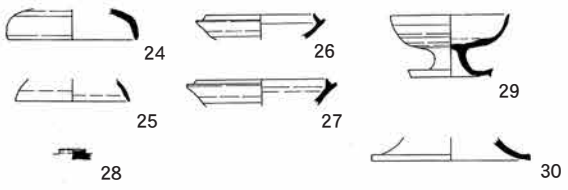
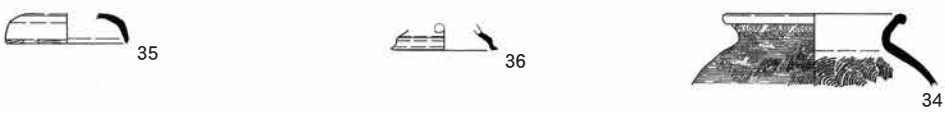
第 153 図　杯Ｈの法量（1 － 2）



第 154 図　杯Ｈ蓋の法量(2 － 1)

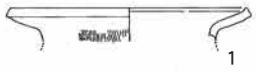


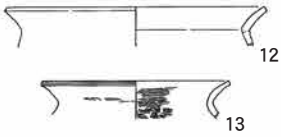
第 155 図　杯Ｈ蓋の法量（2 － 2）

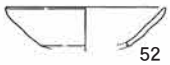
			須　　恵　　器
A区	西側住居跡群	SH03	
		SH01	
		SH02	
	SH04		
	中央住居跡群	SH06	
		SH11	
		SH07	
		SH08	

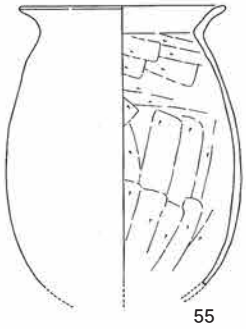
第 156 図　古墳時代一括資料（1 － 1）

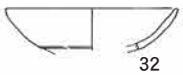
土　　師　　器



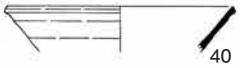
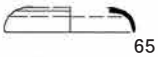




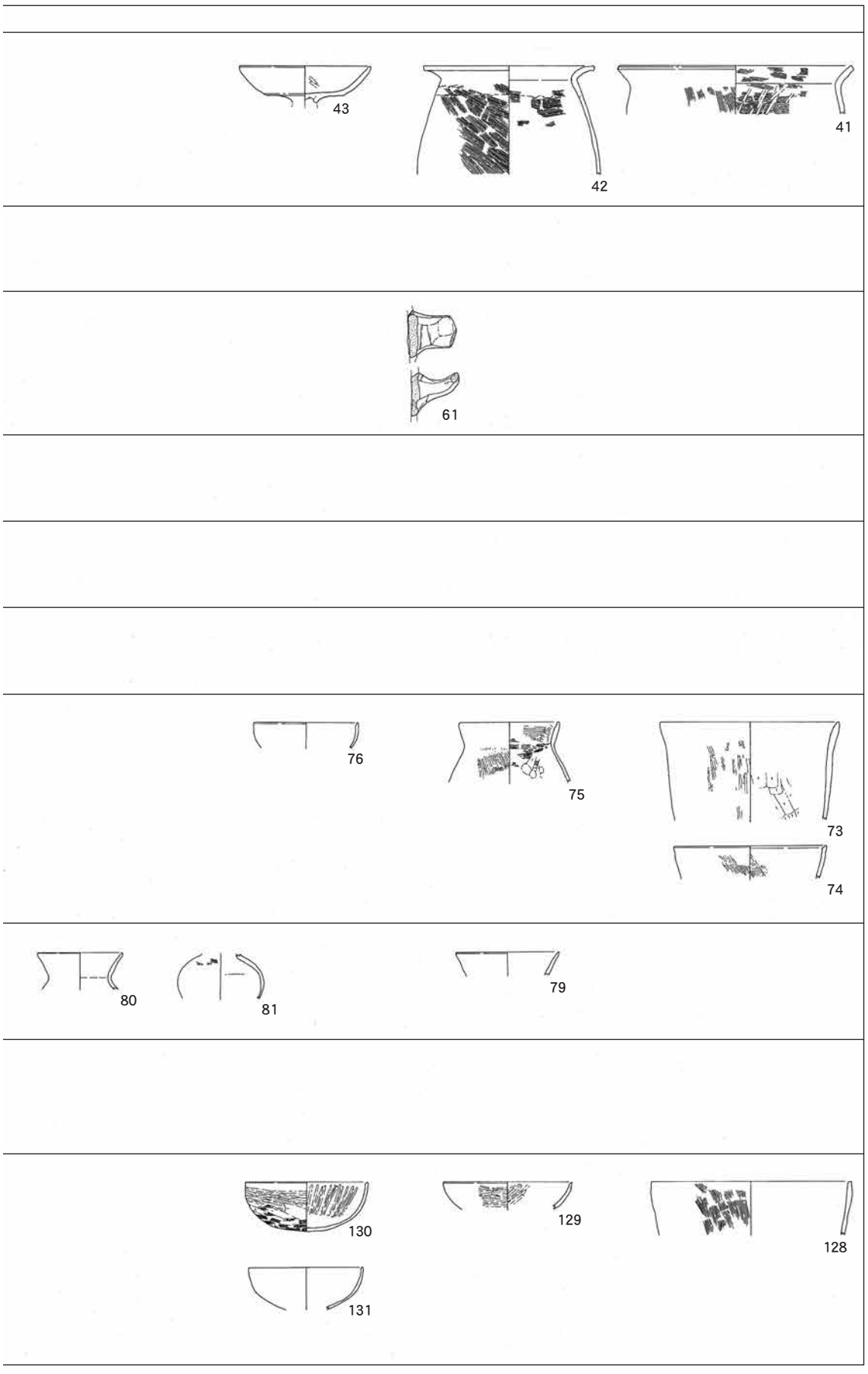




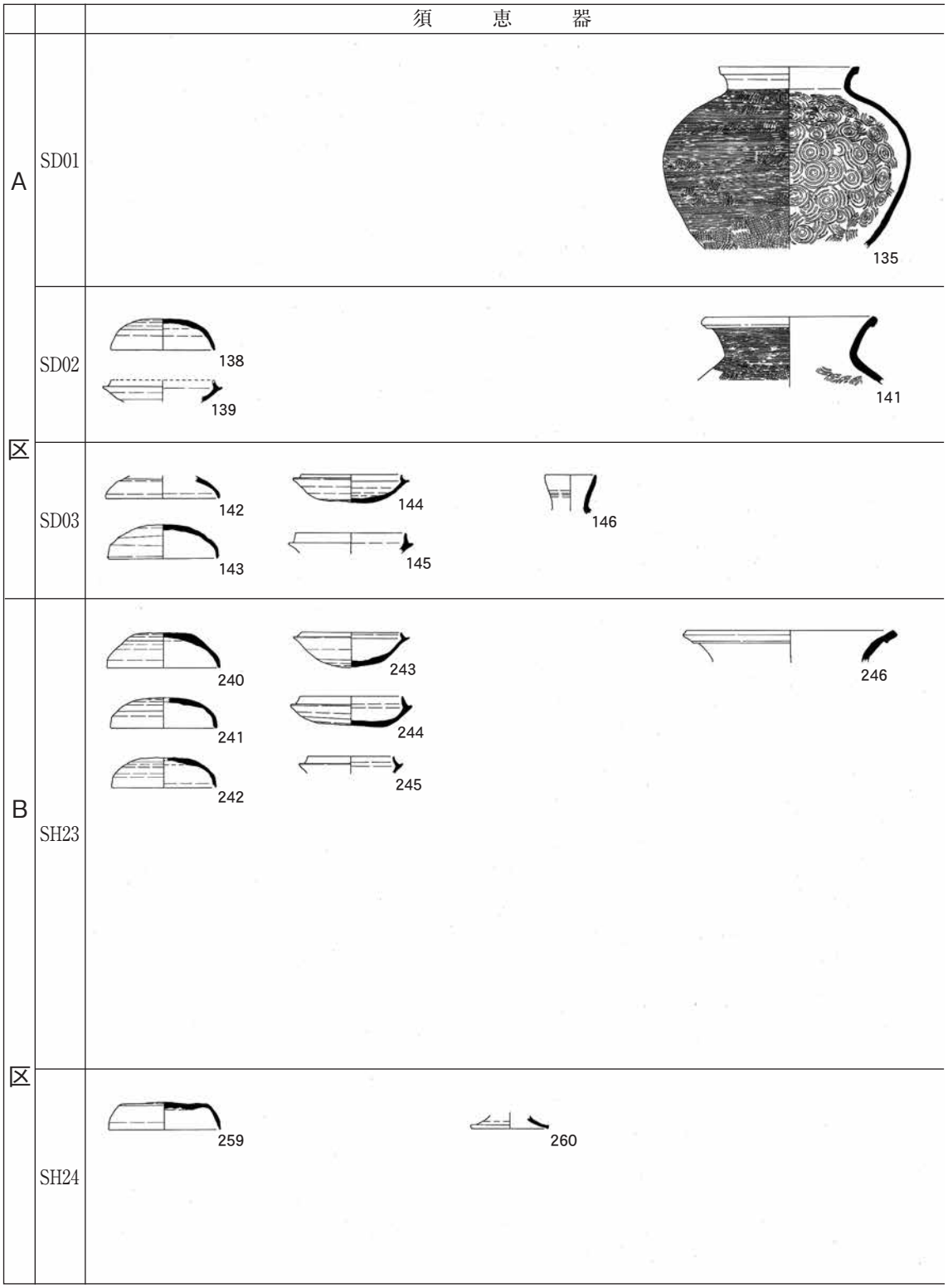
第 157 図　古墳時代一括資料（1 － 2）

			須　　恵　　器
A区	中央住居跡群	SH10	39　  40
		SH09	37　 38
	SH14		62
	SH15		63
	SH16		64
	東側住居跡群	SH17	 65　 66
		SH18	67　 70　 71 68　 72 69
		SH19	77 78
	SK08		117　 118 119　 120
	SK11		127　 126　 125

第 158 図　古墳時代一括資料(2 － 1)



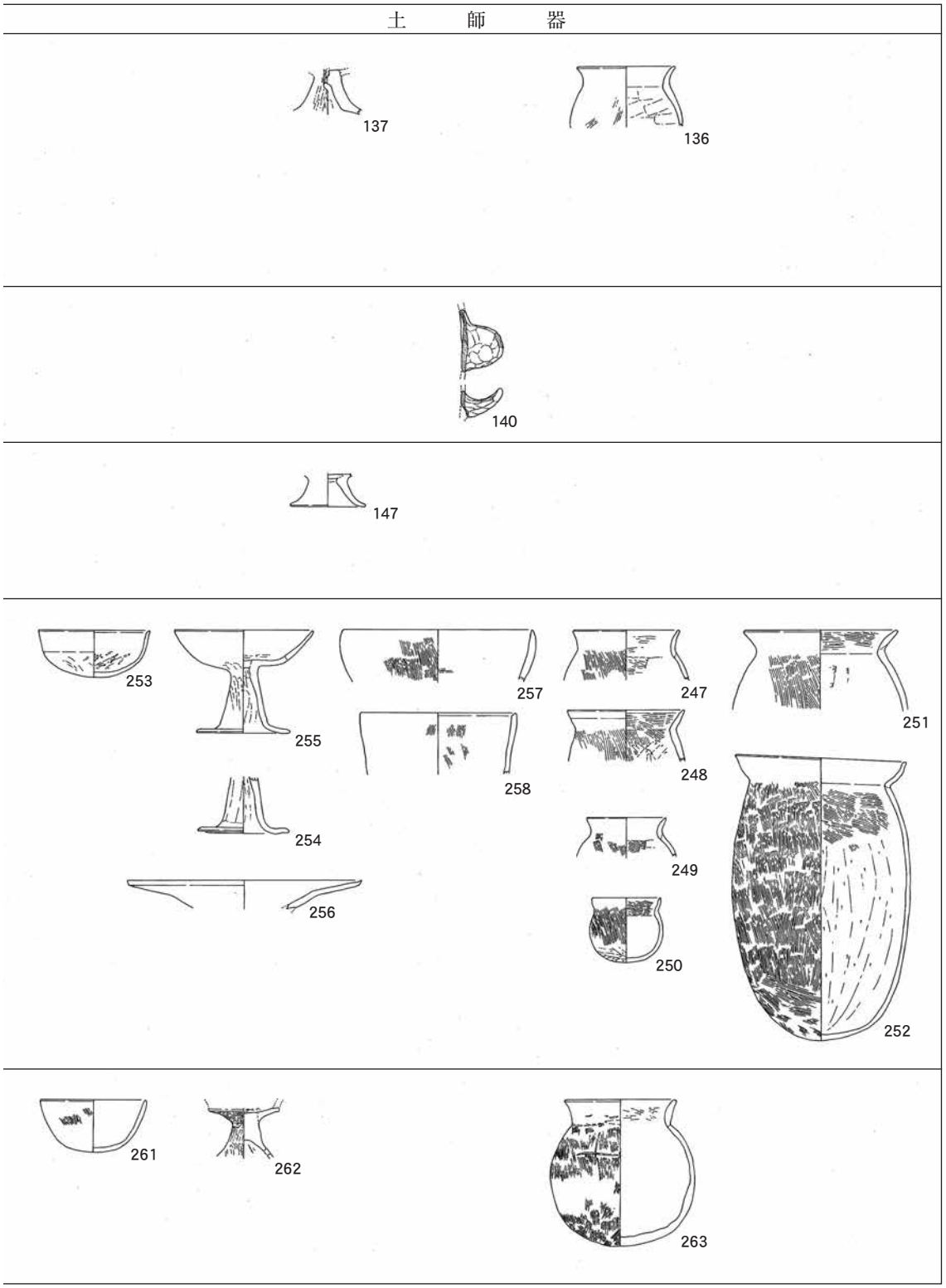
第 159 図　古墳時代一括資料(2 － 2)



第 160 図　古墳時代一括資料（３－１）

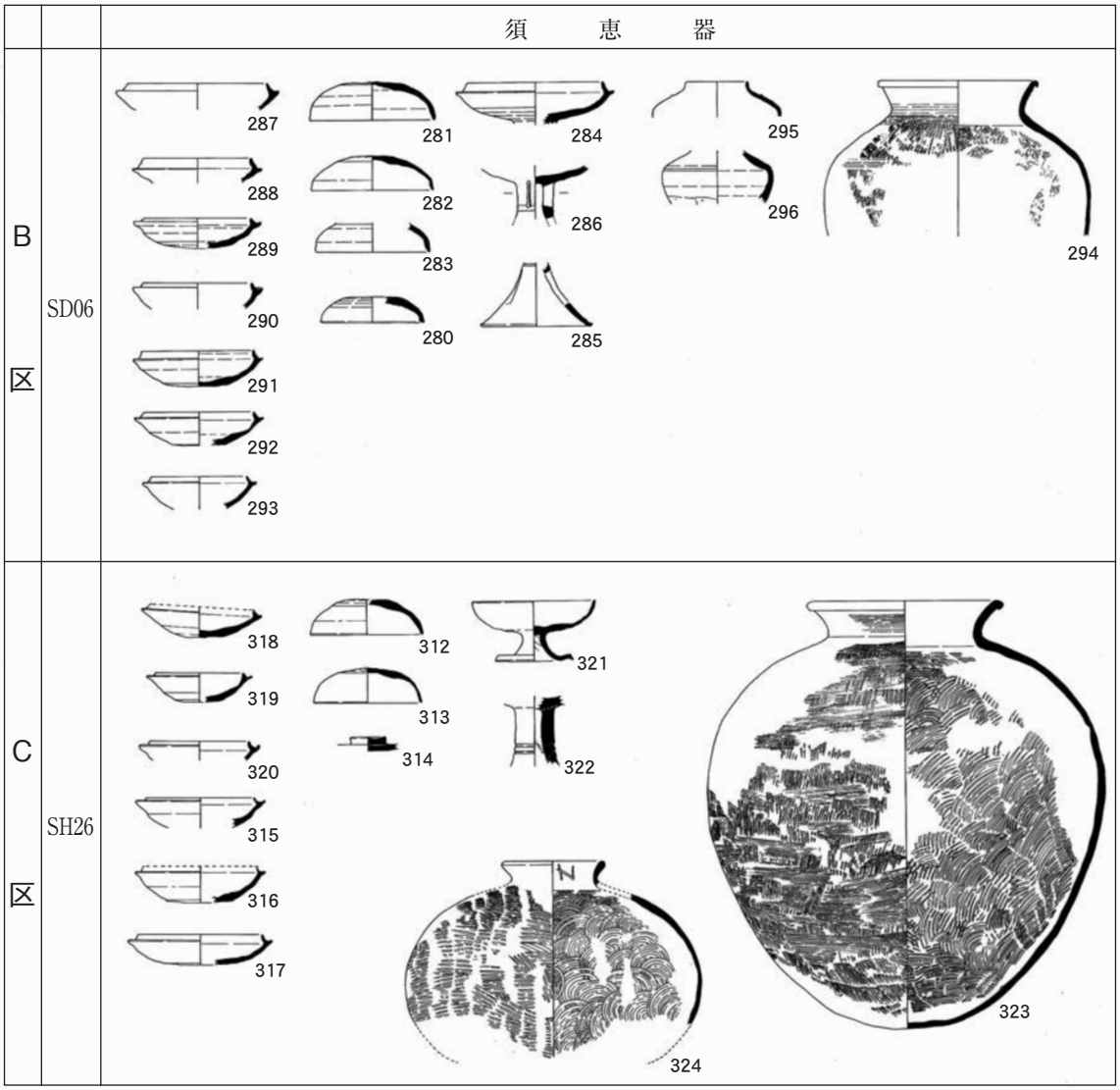
土坑　　ＳＫ 08 はＴＫ 209 型式に、ＳＫ 09 とＳＫ 11 はＴＫ 217 型式に位置付けられるものと考えられる。杯Ｈ蓋から判断すると、ＳＫ 09・ＳＫ 11 については、型式的には竪穴住居跡群の最も新しい型式と併行する（第 152 図～第 155 図）。

溝　　ＳＤ 02 はＴＫ 43 型式に、ＳＤ 03 はＴＫ 209 型式に位置付けられるものと考えられる。よって、ＳＤ 02 が住居跡群の古い段階に、他が新しい段階に対応するものと考えられる。



第 161 図　古墳時代一括資料（３－２）

小結　　Ａ区～Ｃ区で検出した古墳時代の竪穴住居跡については、切り合い関係では前後関係を理解することができるが、須恵器の型式に対応させた明確な段階設定は困難である。いずれにしても、ＴＫ 43 型式からＴＫ 217 型式の範疇で理解できるものである。このなかで、明確ではないが、傾向としてＴＫ 43 型式からＴＫ 209 型式までの古段階と、ＴＫ 217 型式の新段階に分けることが可能である。



第 162 図　古墳時代一括資料(4)

３．その他

以上、主に須恵器を対象に当該期の土器について、年代を中心に検討してきた。以下、上記以外に明らかとなった点について、列記しておきたい。

まず、土師器・須恵器ともに、いわゆる渡来系遺物は小片も含めて出土していない。ただし、土師器の甕Ａについては、韓式系甕の影響下にあるものと考えられる。甑についても、特に口縁部に端面を有する甑Ｂは、韓式系甑の影響が考えられる。

さらに、鉢についても、類似形態のものが久宝寺北遺跡から出土しており、韓式土器の平底鉢として報告されている(2)。したがって、市之郷遺跡出土の鉢についても、韓式土器そのものではないが、その影響下にあるものと理解したい。

〔註〕

(1)近つ飛鳥博物館『年代のものさし－陶邑の須恵器』2006

(2)寺川史郎・金光正裕『久宝寺北　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』財団法人　大阪文化財センター　1987

第６章　遺構のまとめ

第１節　弥生時代の遺構

１．遺構の変遷

はじめに　　中期(弥生Ⅰ期)と後期(弥生Ⅱ期)に大きく分けられる。

(1)中期

概要　　当期については、弥生Ⅰ期－１（Ⅱ期）から弥生Ⅰ期－３（Ⅳ期）の３時期からなる。各期の遺構の変遷は以下のとおりである(第163図・第164図)。

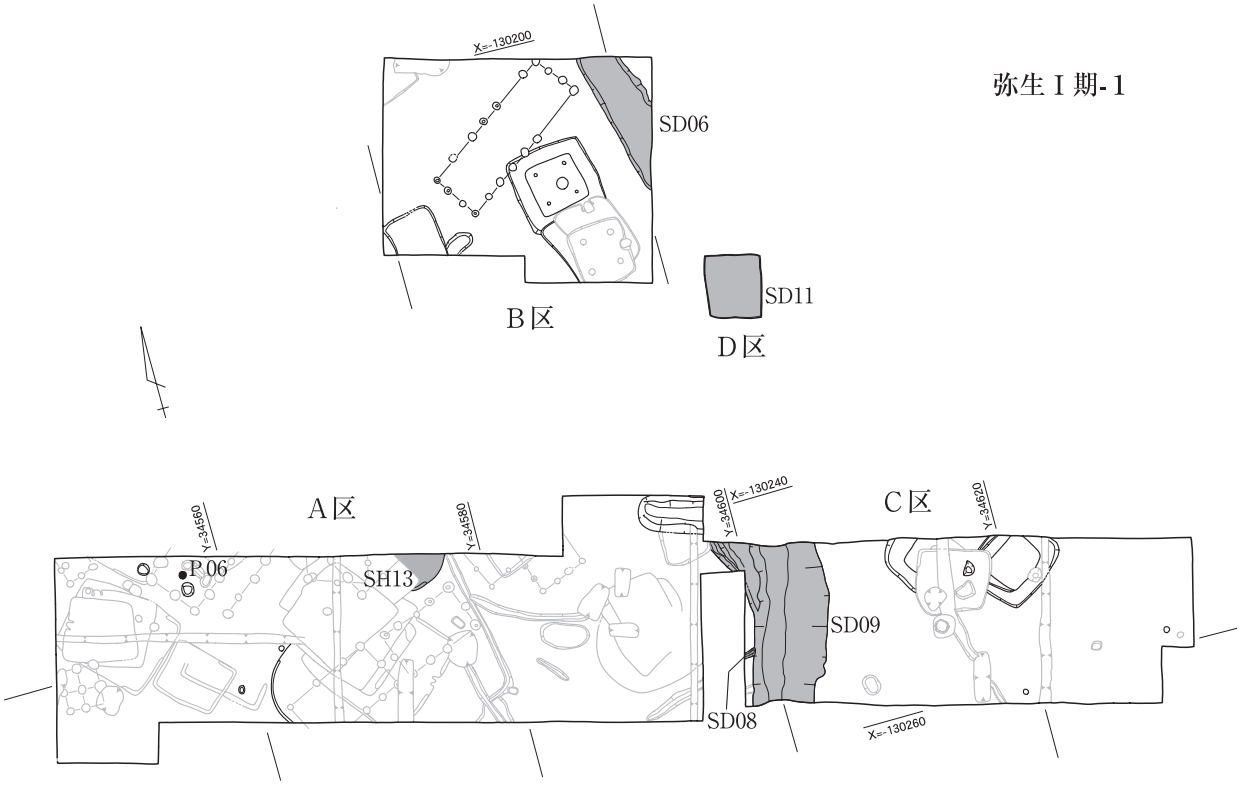
弥生Ⅰ期－１　該当する遺構は、A区のＰ06・ＳＨ13とC区のＳＤ08・ＳＤ09に限られる(第163図)。ただし、ＳＤ06・ＳＤ11についても、当期まで遡るものと考えられる。これについては、後述する。

弥生Ⅰ期－２　A区ではＳＫ01・ＳＫ02が、B区ではＳＨ20が、C区では、Ｐ10と前期から引き続きＳＤ09が存続している。さらに、D区のＳＤ11が該当する(第164図)。

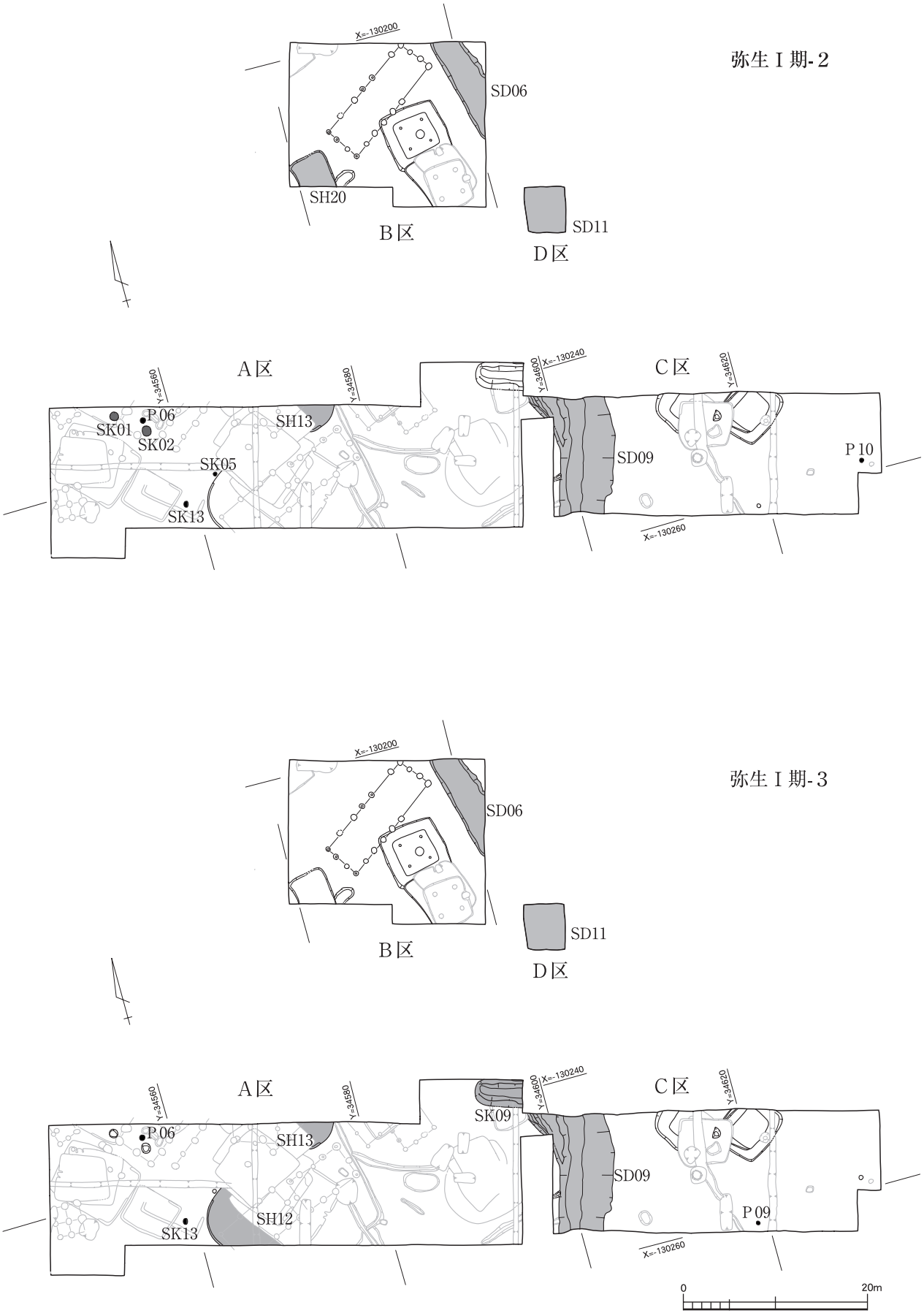
この他、ＳＫ05についても、図化できなかったが出土土器から判断して、当該期に位置付けられるものと考えられる。また、ＳＤ06についても、後述する理由から、当期にも機能していた可能性が考えられる。

弥生Ⅰ期－３　A区ではＳＨ12とＳＫ09が、C区ではＰ09が該当する（第164図)。この他、ＳＤ06・ＳＤ09・ＳＤ11が前期から継続している。

以上の他、ＳＫ13については弥生Ⅰ期－２もしくは弥生Ⅰ期－３に、ＳＨ13とＰ06については弥生Ⅰ期－１から弥生Ⅰ期－３に、位置付けられる。



第163図　遺構の変遷　弥生時代中期(1)



第 164 図　遺構の変遷　弥生中期(2)

(2)後期

概要　前章での検討結果から、弥生Ⅱ期－１（Ⅰ期）・弥生Ⅱ期－２（Ⅴ期）・弥生Ⅱ期－３（庄内期）・弥生Ⅱ期－４（布留式）の４時期からなる（第165図・第166図）。

弥生Ⅱ期－１　ＳＤ09のみが該当する。前代から存続していたものと考えられる。また、後述する理由から、ＳＤ06とＳＤ11についても、当期においても機能していたものと考えられる。

弥生Ⅱ期－２　Ｂ区のＳＨ25、Ｃ区のＳＨ28とＳＨ29が該当する（第165図）。ＳＨ29については、出土土器の検討では庄内期と位置付けられたが、ＳＨ28の下層で検出されていることから、ＳＨ28よりは古く位置付けられるものと考えられる。ただし、ＳＨ28とＳＨ29は平面的に重複することから、同時期に存在したと考えることはできない。したがって、当期のなかで、ＳＨ29→ＳＨ28と建て替えられたものと考えたい。

また、ＳＫ18についても、出土土器から判断して当該期の遺構と考えられる。しかし、ＳＨ28・ＳＨ29と平面的に重複するため、両住居跡とは同時期とは捉え難い。切り合い関係から、ＳＨ28に続く時期と考えられる。

この他、ＳＤ09内からも当該期の土器が出土している。ＳＤ09内からは次期の土器が出土していないことから、当期でほぼ埋没したものと考えられる。

弥生Ⅱ期－３　Ｂ区のＳＨ22とＳＫ15、Ｃ区のＳＫ17が該当する。Ａ区では当期の遺構は認められない。この他、ＳＨ28内土器溜出土土器が当期に該当することから、当該期にＳＨ28が機能しなくなったものと考えられる（第166図）。

弥生Ⅱ期－４　Ｂ区のＳＢ10とＣ区のＳＨ27が該当する（第166図）。両遺構は、比較的離れた位置関係にあるが、その方向性がほぼ一致する点は注目される。なお、ＳＢ10については、次項で検討する。

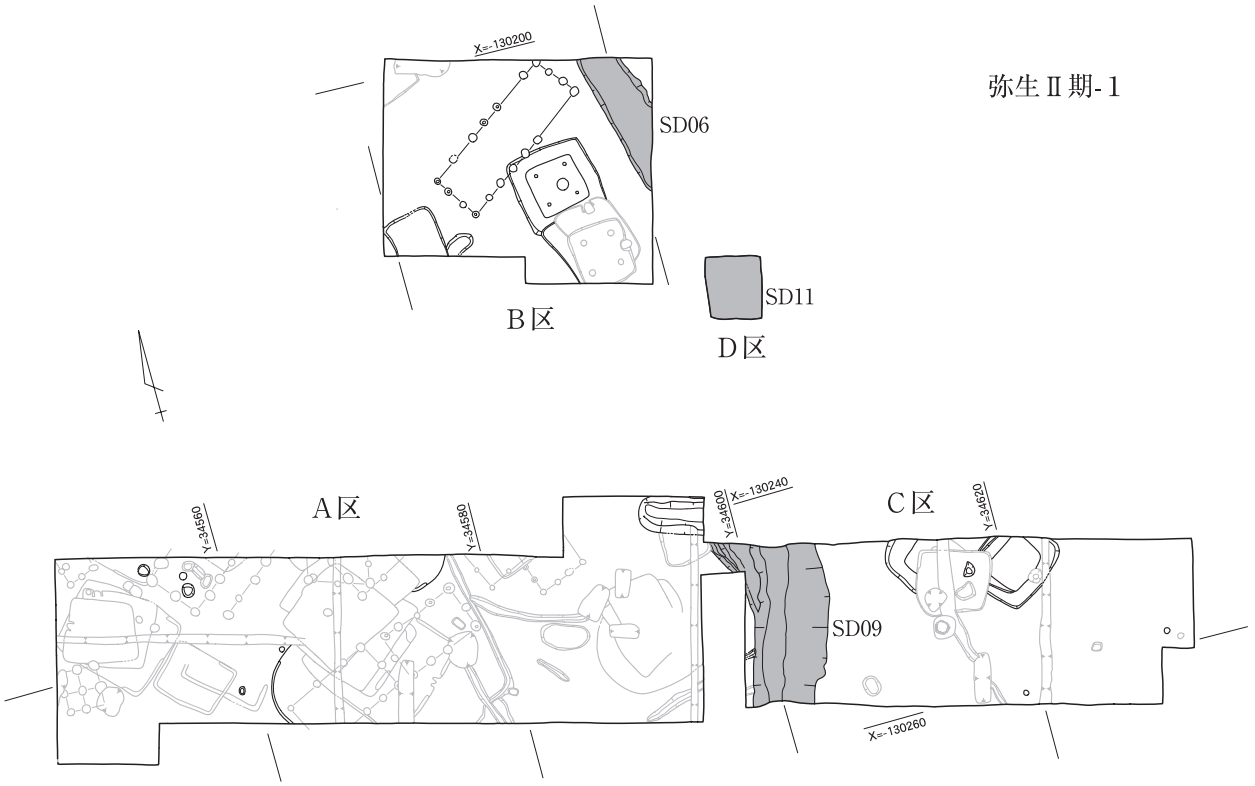
(3)小結

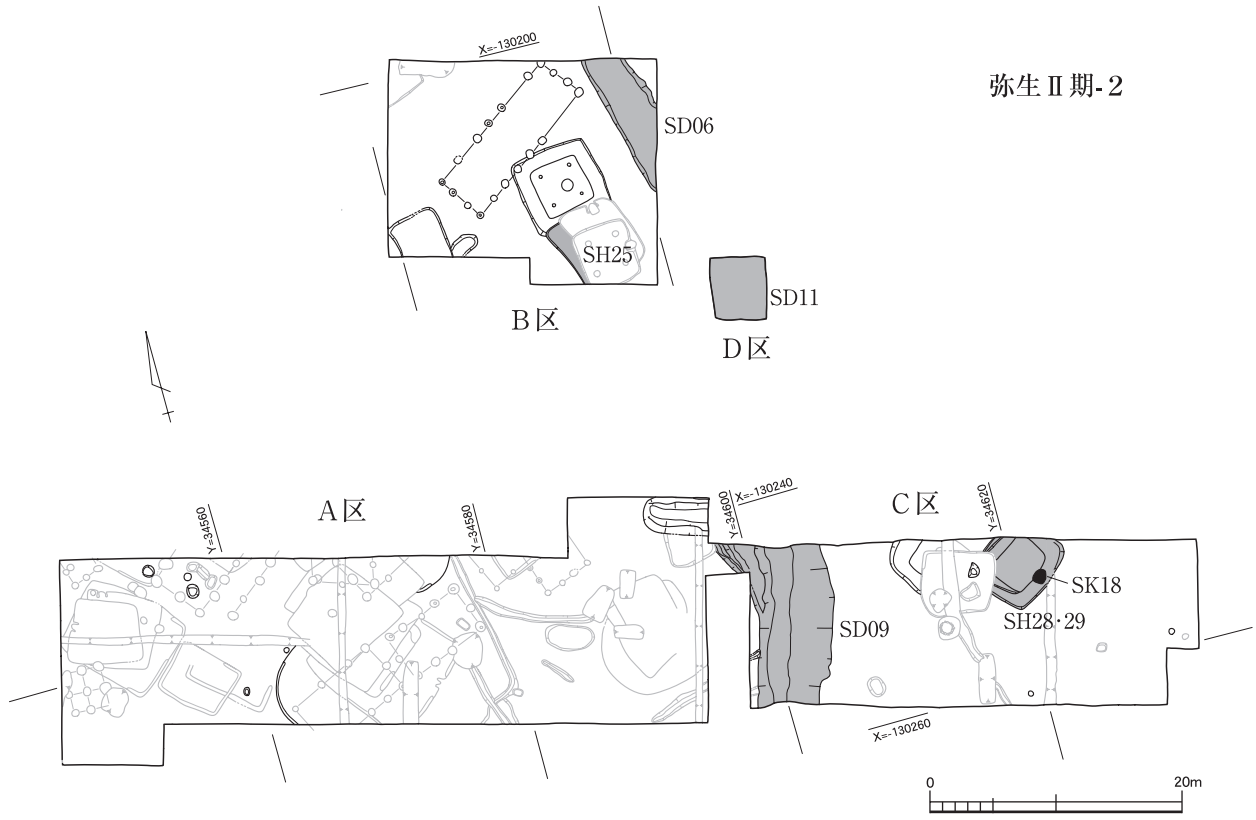
以上、中期と後期の遺構の変遷についてまとめてきた。

中期　各時期をとおして遺構が存在するが、きわめて希薄である。特に、弥生Ⅰ期－１においては、ＳＤ09に限られる。よって、当期においては、集落の縁辺部と位置付けられる。弥生Ⅰ期－２・弥生Ⅰ期－３になると、遺構がＡ区・Ｂ区に広がる。両地区において住居跡が検出されていることから、弥生Ⅰ期－１より集落の中心部へと変遷していった様子を伺うことができる。

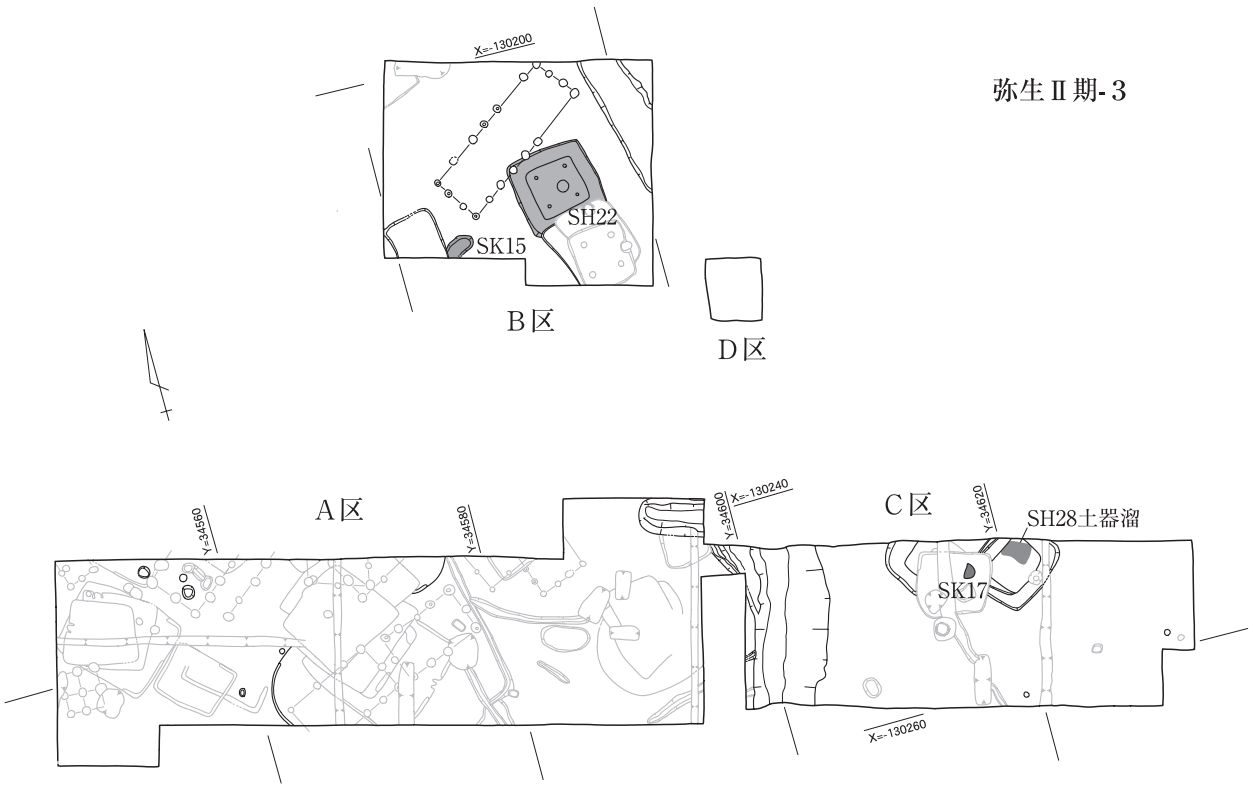
後期　弥生Ⅱ期－１を除く各時期に住居跡が存在するが、住居跡以外の遺構が、ＳＤ09と一部の土坑に限られている。住居跡についても、弥生Ⅱ期－２（Ⅴ期）に３棟検出された以外は、各期１棟のみである。

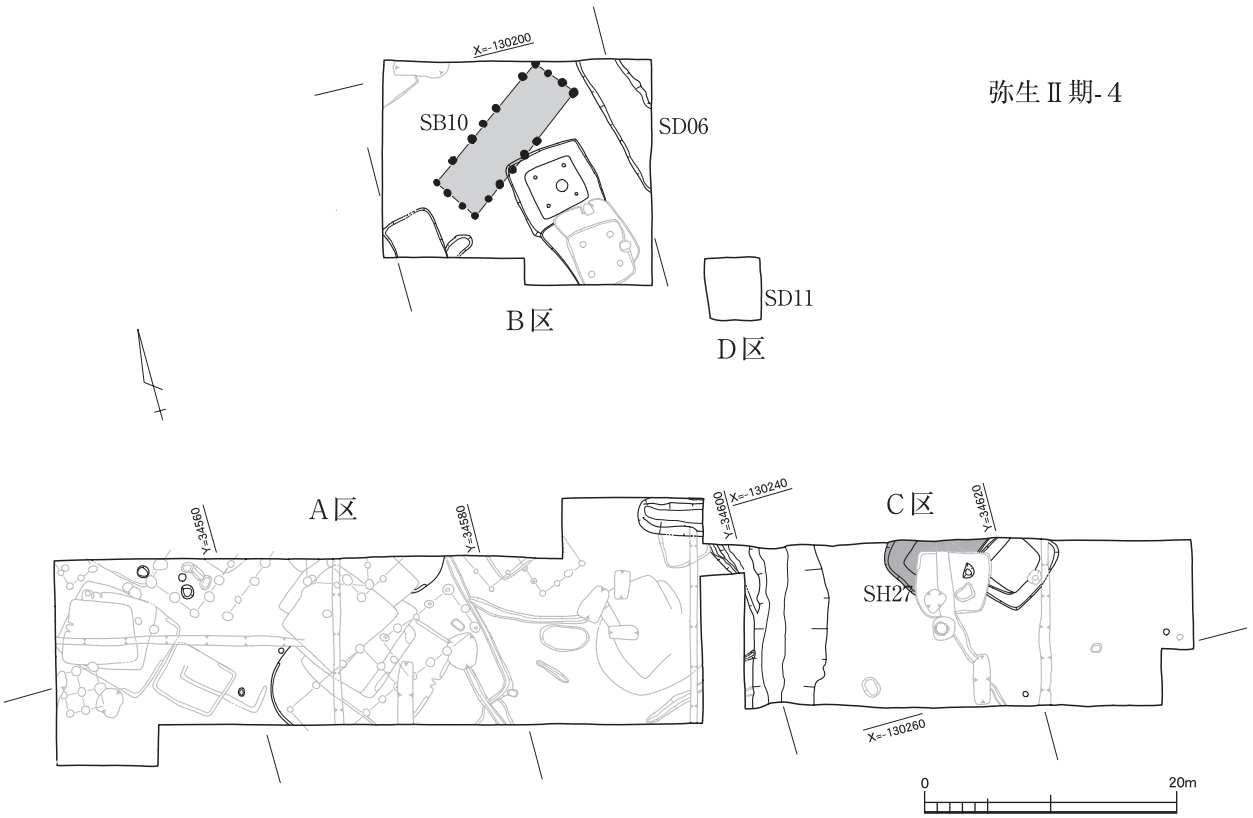
また、ＳＢ10については、掘り方内から出土した土器は小片に限られ、時期の特定できる遺物が全く出土していない。少なくとも、須恵器片は１点も出土していない。これは、他の古墳時代の掘立柱建物跡とは大きく特徴を異にする。したがって、他の掘立柱建物跡よりは古く位置付けられるものと考えられる。さらに、庄内期のＳＨ22を切っていることから、弥生Ⅱ期－３（庄内期）より新しく位置付けられる。以上から、弥生Ⅱ期－４（布留式期）に位置付けるのが妥当ではないかと判断したものである。





第 165 図　遺構の変遷　弥生後期(1)





第 166 図　遺構の変遷　弥生後期(2)

小結　　以上、遺構の変遷過程から、中期においてはＡ区にその中心があったものと考えられる。後期になると、東側・北側へ拡散し、Ａ区には存在しなくなる傾向を見ることができる。

２．主な遺構について

ここでは、竪穴住居跡・ＳＢ 10・ＳＤ 09 について検討したい。

竪穴住居　　弥生時代の竪穴住居跡は、中期がＳＨ 12・ＳＨ 13・ＳＨ 20 の３棟に限られる。ＳＨ 13 の時期を特定できないが、一時期に多くても２棟に限られる。今回報告する調査地一帯では、集落の規模は大きくはなかったものと推定される。

後期においても、ＳＨ 22・ＳＨ 25・ＳＨ 27 ～ＳＨ 29 の５棟である。出現するのは後期後半(弥生Ⅱ期－２)以降で、Ⅱ期－２の３棟以外は、１棟ずつに限られる。したがって、後期の集落についても、大規模といえる状況ではなかったものと考えられる。また、当期の竪穴住居跡の分布状況をみると、Ａ区では１棟も検出されていない。中期においては、集落の中心であったと考えられるＡ区の周辺に拡散した状況と考えられる。

ＳＢ 10　　布留式に位置付けられた掘立柱建物跡であるが、３間×７間と大型の建物である。当該期の大型建物については例があまりなく、その性格を論ずることは困難である。また、周囲に当該期の遺構がＣ区のＳＨ 27 に限られる。このため、大型の掘立柱建物を中心に大規模な集落があったと考えることも困難である。今後の課題としたい。

ＳＤ 09　　弥生Ⅰ期－１から弥生Ⅱ期－２までと、比較的長期にわたり機能したと考えられる溝である。特に、中期においては、一部の小規模な遺構（Ｐ 09・Ｐ 10）を除いて、当溝の西側に遺構の分布が限られる。このため、ＳＤ 09 は中期においては、その集落の東の端に位置していた可能性が考えられる。つまり、環濠的機能を果たしていたのではないかと考えられる。そして、ＳＤ 09 の東側に想定される完新世段丘Ⅰ面との境（段丘崖）に沿う微凹地を利用した溝と考えられる。

その後、ほぼ埋没し機能を失う弥生Ⅱ期－２において、その動きに呼応するかのようにその東側にＳＨ 28･ＳＨ 29 が建てられる。このことも、ＳＤ 09 が果たした機能をものがたっているものと考えられる。

なお、Ｂ区のＳＤ 06 とＤ区の溝ＳＤ 11 については、位置的にＳＤ 09 の北側延長上にあたる。このため、両溝については、ＳＤ 09 と同一遺構の可能性が高いものと考えられる。したがって、土器は出土していないものの、ＳＤ 06 については弥生Ⅰ期－１段階から存在していたものと考えたい。よって、第 163 図～第 165 図にはこれを反映させている。

第２節　古墳時代の遺構

１．遺構の変遷

はじめに　前章での検討結果から、遺構相互の切り合い関係が顕著であるにもかかわらず、出土土器からは明確に段階設定を行うことは困難である。しかし、調査の結果、掘立柱建物が竪穴住居を切っていることは明らかである。したがって、竪穴住居跡の段階と掘立柱建物の段階の大きく２時期（Ⅰ期・Ⅱ期）に分けることが可能である。さらにⅠ期については、出土土器の検討から、古相と新相に分けることができる。

(1)古墳Ⅰ期(第 167 図)

Ａ区　竪穴住居跡では、西側住居跡群・中央住居跡群・東側住居跡群を中心に検討する。他に、土坑と溝について検討する。

西側住居跡群　前章での検討結果および調査時の検出状況から、ＳＨ 03 →ＳＨ 01 →ＳＨ 02 と建替えられている。これらの建替えは短期間と考えられるが、ＳＨ 03 とＳＨ 01 が古相に、ＳＨ 02 が新相に位置付けられる。

中央住居跡群　前章での検討結果および調査時の検出状況から、ＳＨ 06 →ＳＨ 11 →ＳＨ 08 →ＳＨ 10 →ＳＨ 07 →ＳＨ 09 と建替えられている。このなかで、ＳＨ 06 とＳＨ 11 が古相に、ＳＨ 07 ～ＳＨ 10 が新相に位置付けられる。

東側住居跡群　調査時の検出状況からは、ＳＨ 19 →ＳＨ 18 →ＳＨ 17 の順に建て替えられたと理解した。しかし、前章での検討結果からは全く逆の建替えが考えられた。いずれにせよ、土器からみると大きな時期差は認めがたく、ＳＨ 19 →ＳＨ 18 →ＳＨ 17 の順に建て替えられたものと考えたい。ただし、その建替えは短期間での出来ごとで、ＳＨ 17 ～ＳＨ 19 の３棟とも古相に位置付けられる。

他の住居跡　ＳＨ 14 とＳＨ 15 については古相に、ＳＨ 04 については新相位置付けられる。この他、ＳＨ 16 については、時期の特定は困難である。ただし、検出時の切り合い関係から、ＳＨ 05 →ＳＨ 04 と建て替えられたことは明らかである。

他の遺構　柱穴では、Ｐ 03・Ｐ 05・Ｐ 07・Ｐ 08 が古相に、Ｐ 01・Ｐ 04 が新相に位置付けられる。Ｐ 02 については、当期に位置付けられるが、古相・新相の区別は困難である。

土坑では、ＳＫ 07･ＳＫ 08･ＳＫ 10 が古相に、ＳＫ 09 が新相に位置付けられる。この他、ＳＫ 03・ＳＫ 04・ＳＫ 06・ＳＫ 14 については、当該期に位置付けられるが、古相・新相の区別は困難である。

溝では、ＳＤ 02 が古相に、ＳＤ 01・ＳＤ 03 が新相に位置付けられる。また、ＳＤ 04 については、古相・新相の区別は困難である。

Ｂ区　竪穴住居跡では、ＳＨ 21・ＳＨ 23・ＳＨ 24 が検討対象となる。前章で検討した切り合い関係から、最も新しく位置付けられるＳＨ 23 が古相に位置付けられる。このため、ＳＨ 24 についてもより古く位置付けられる。土器が出土しているＳＨ 24 については、今回の調査で検出された当該期の住居跡群のなかでも、古く位置付けられる。そしてＳＨ 24 との切り合い関係から、ＳＨ 23 が最も古く位置付けられる。

よって、ここでは、ＳＨ 21・SH23・ＳＨ 24 の３棟とも古相に位置付けておきたい。調査時の検出状況通り、ＳＨ 24 →ＳＨ 23 の順に建替えられたものと考えられる。なお、ＳＨ 21 については、時期の特定は困難である。

この他、前章での検討結果からＳＤ 06 が新相に位置付けられる。ただし、ＳＤ 06 については、前節では弥生Ⅱ期－２にその機能を失うものと判断した。これは、ＳＤ 06 と同一機能と判断したＳＤ 09・ＳＤ 11 からは当期の遺物が全く出土していないからである。したがって、当期のＳＤ 06 については、基本的に当溝埋没後、凹地となっていた結果と考えたい。

Ｃ区

竪穴住居跡では、ＳＨ 26 が対象となり、前章での検討結果から、新相に位置付けられる。さらに、新相の住居跡のなかでも、最も新しく位置付けられる。

なお、住居跡以外の遺構は検出されていない。

(2)古墳Ⅱ期(第 168 図)

概要

当該期の掘立柱建物跡が該当する。この他、ＳＫ 11 については竪穴住居との位置関係から判断して、同時期に存在したとは考えがたく、掘立柱建物跡と同段階と考えたい。

掘立柱建物

その方向性および位置関係から、ＳＢ 03 とＳＡ 01(建物群１)、ＳＢ 04・ＳＢ 05 とＳＢ 09(建物群２)、ＳＢ 07 とＳＢ 08(建物群３)、の建物群を抽出することができる。

出土土器から判断すると、建物群１と建物群２では、ＳＢ 03 よりＳＢ 05 の方が新しい傾向にある。よって、建物群１から建物群２へと変遷したものと考えられる。特に、建物群２は、いわゆる官衙風配置をとるもので、注目される。

この他、ＳＢ 01 については、出土土器から建物群２より古く、建物群１より新しく位置付けられる。以上から、建物群１を古墳Ⅱ期－１、ＳＢ 01 を古墳Ⅱ期－２、建物群２を古墳Ⅱ期－３とする。

なお建物群３については、出土土器から建物群１・２との関係を理解することは困難である。ＳＢ 02・ＳＢ 06 についても同様である。

他の遺構

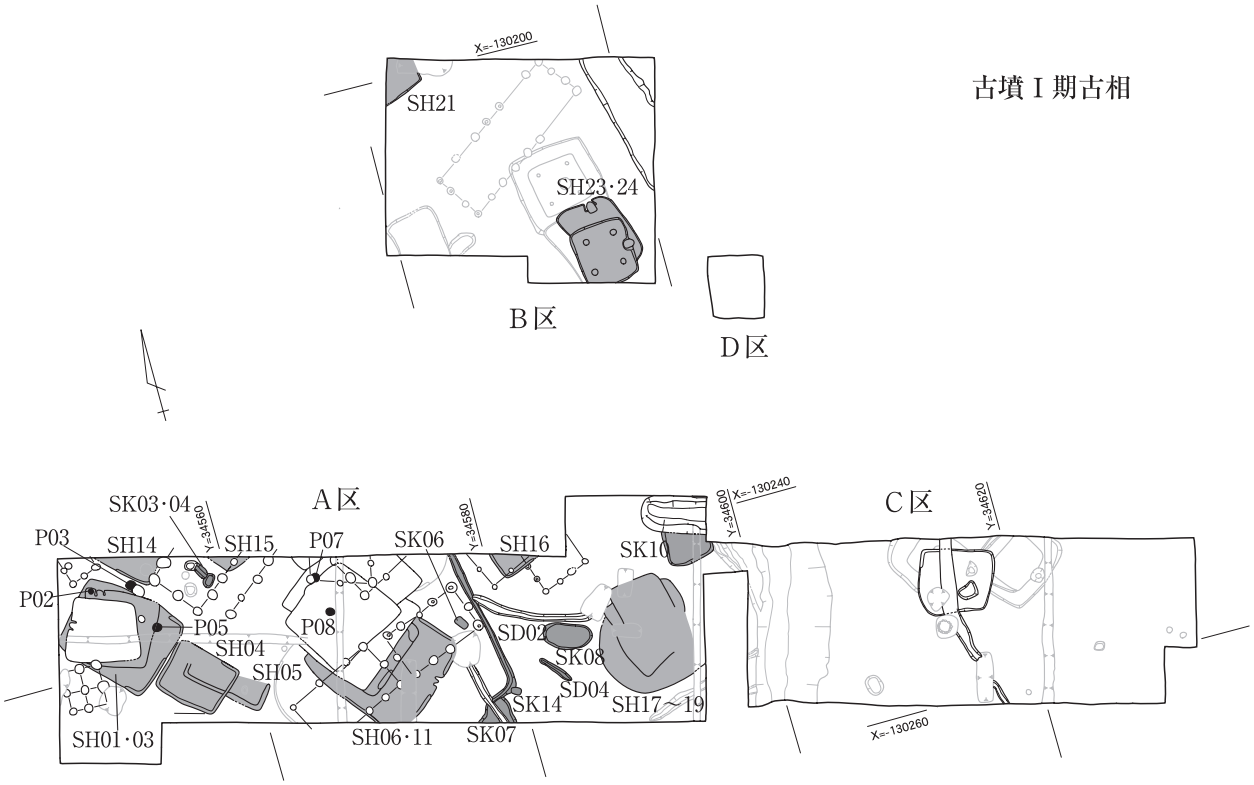
ＳＫ 11 については、出土土器から判断すると、竪穴住居跡と時期的な差は認められない。しかし、竪穴住居跡との位置関係から判断して同時期に存在したとは考えがたく、掘立柱建物跡と同段階と考えたい。

この他、ＳＫ 12 についても、瓦が出土していることなどから、当該期に位置付けられるものと考えられる。

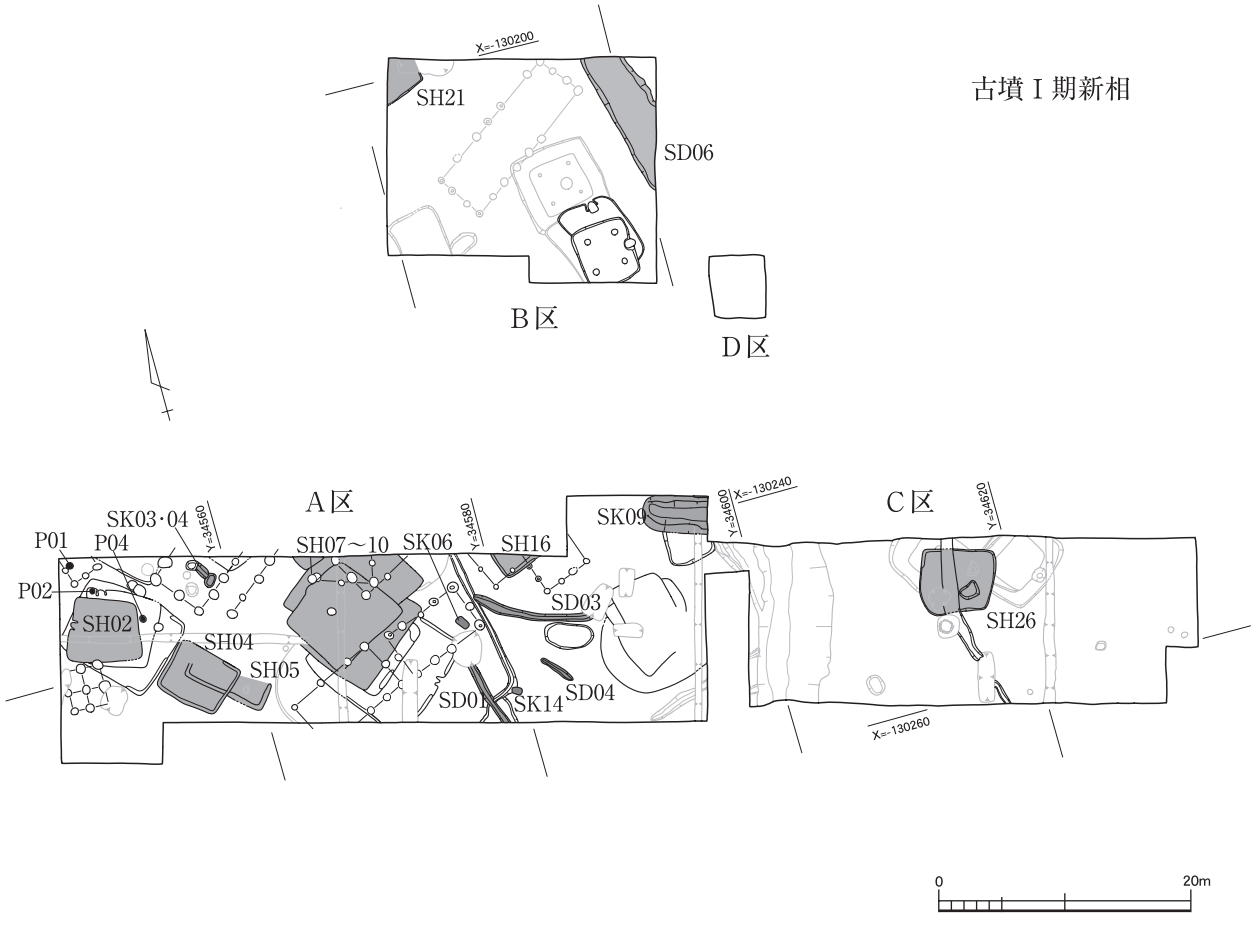
(3)まとめ

まず、当期の前段階の弥生後期の遺構分布と比較して、その分布の中心が再びＡ区となる点を指摘することができる。特に、古墳Ⅰ期においては、Ｂ区・Ｃ区にも住居跡が認められた。これに対して、古墳Ⅱ期になるとＣ区のＳＤ 10 を除いてＡ区に限られる傾向にある。ただし、このような傾向の要因を明らかにすることは、現時点では困難である。

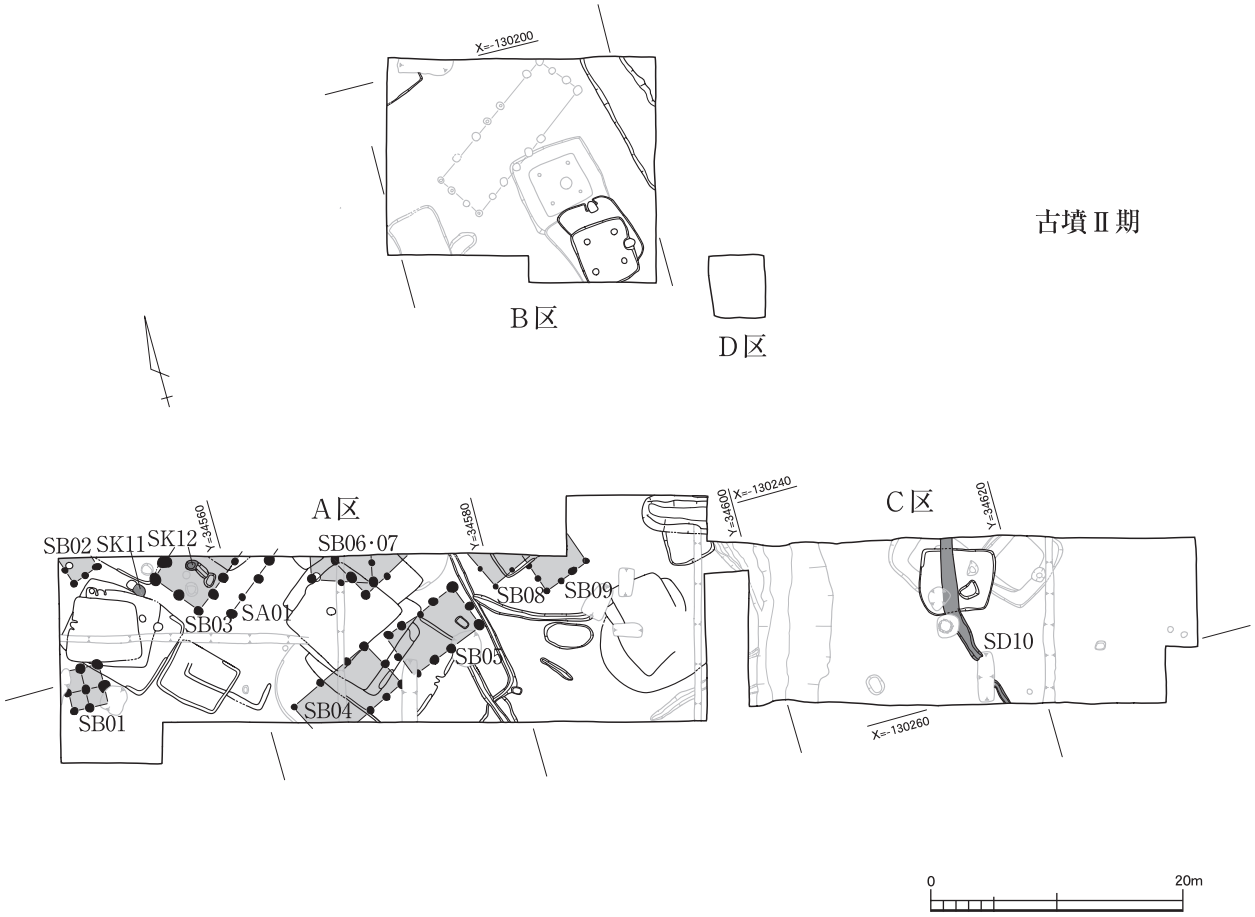
古墳Ⅰ期古相



古墳Ⅰ期新相



第 167 図　遺構の変遷　古墳時代（1）



第 168 図　遺構の変遷　古墳時代(2)

第 17 表　古墳時代竪穴住居跡一覧

No.	時　期	地　区	建物群	規　模		付属施設
				一辺	面積(㎡)	
ＳＨ 01	古墳Ⅰ期古相	Ａ区	西側住居跡群	5.60 × 5.67	31.78	主柱穴・カマド
ＳＨ 02	古墳Ⅰ期新相	Ａ区	西側住居跡群	4.60 × 5.74	26.40	主柱穴・カマド・周壁溝
ＳＨ 03	古墳Ⅰ期古相	Ａ区	西側住居跡群	8.48 × 6.84	58.00	主柱穴・周壁溝
ＳＨ 04	古墳Ⅰ期新相	Ａ区		4.45 × 5.24	23.31	主柱穴・カマド痕・周壁溝
ＳＨ 05	古墳Ⅰ期新相	Ａ区		6.26 ×(2.36)	－	主柱穴・周壁溝
ＳＨ 06	古墳Ⅰ期古相	Ａ区	中央住居跡群	6.93 × 6.63	45.94	カマド・周壁溝
ＳＨ 07	古墳Ⅰ期新相	Ａ区	中央住居跡群	6.40 × 7.05	45.12	主柱穴・カマド
ＳＨ 08	古墳Ⅰ期新相	Ａ区	中央住居跡群	8.07 × 6.40	51.64	
ＳＨ 09	古墳Ⅰ期新相	Ａ区	中央住居跡群	(1.47) ×(1.90)	－	周壁溝
ＳＨ 10	古墳Ⅰ期新相	Ａ区	中央住居跡群	7.65 × 8.68	66.40	カマド
ＳＨ 11	古墳Ⅰ期古相	Ａ区	中央住居跡群	9.85 × 9.87	97.22	カマド・周壁溝
ＳＨ 14	古墳Ⅰ期古相	Ａ区		(1.90) ×(4.30)	－	周壁溝
ＳＨ 15	古墳Ⅰ期古相	Ａ区		(1.50) ×(1.20)	－	
ＳＨ 16	古墳Ⅰ期	Ａ区		(2.45) ×(2.15)	－	周壁溝
ＳＨ 17	古墳Ⅰ期古相	Ａ区	東側住居跡群	4.20 ×(4.00)	－	主柱穴・カマド
ＳＨ 18	古墳Ⅰ期古相	Ａ区	東側住居跡群	6.08 × 5.08	－	主柱穴・カマド
ＳＨ 19	古墳Ⅰ期古相	Ａ区	東側住居跡群	(6.00) ×(8.00)	－	
ＳＨ 21	古墳Ⅰ期	Ｂ区		(3.20) ×(3.00)	－	
ＳＨ 23	古墳Ⅰ期古相	Ｂ区	中央住居跡群	4.41 × 5.04	22.22	主柱穴・カマド
ＳＨ 24	古墳Ⅰ期古相	Ｂ区		4.50 ×(5.90)	－	カマド
ＳＨ 26	古墳Ⅰ期新相	Ｃ区		5.33 × 5.90	31.44	周壁溝・土坑

２．竪穴住居跡と掘立柱建物跡について

ここでは、当期を代表する遺構である、竪穴住居跡と掘立柱建物跡について、その概要をまとめておきたい。

竪穴住居

当該期の竪穴住居跡は、計 21 棟検出されている（第 17 表）。Ａ区が 17 棟と大半を占め、Ｂ区が３棟で、Ｃ区はわずか１棟である。当該期の竪穴住居跡の特徴として、数地点で複雑に切り合って検出されたことである。具体的には、Ａ区で３箇所（西側住居跡群・中央住居跡群・東側住居跡群）、Ｂ区で１箇所（ＳＨ 23・ＳＨ 24）認められた。これにＣ区のＳＨ 26 を加えた５箇所で各１棟ずつ住居が存在していたものと考えられる。

この中で、Ａ区中央住居跡群を構成する竪穴住居跡は、他の住居跡と比較して全体的に大型の住居跡からなる点が特徴的である。特にＳＨ 11 については、その面積が 97.22㎡と、これまで市之郷遺跡で検出された当該期の竪穴住居跡のなかでは、最も大型の住居である。当地区の中心的な住居と位置付けることが可能と考えられる。

時期的に大きな差は認められず、良好な状態で検出された住居跡については、造り付けのカマドが備えられている。ただし、ＳＨ 23 を除いては、良好な状態では残存していなかった。この他、ＳＨ 26 を除いては、住居跡内には土坑等は認められなかった。

掘立柱建物跡

計９棟検出されている（第 18 表）。いずれもＡ区に限られる。ＳＢ 01 が総柱構造である以外は、全て側柱構造となっている。基本的には梁行２間のものがほとんどである。

このなかで、官衙風配置をとる建物群２は注目される。この建物群の棟軸方向は、概ねＮ 22° ＷからＮ 25° Ｗを示し、市之郷遺跡Ⅲの棟軸方向ｃタイプに相当する。この方向は、当地に残存する飾磨郡条里の方向性とほぼ一致するものである。逆に、市之郷廃寺の棟軸方向とは異なるものである。

第 18 表　古墳時代掘立柱建物跡一覧

建物№	構　造	規　模			棟軸方向	時　期
		梁行×桁行	平面規模	面積(㎡)		
ＳＢ 01	総柱	２間×２間	2.90 × 3.20	9.28	Ｎ２° Ｗ	古墳Ⅱ期
ＳＢ 02	側柱	２間×（１間）	2.25 ×	−	Ｎ 21° Ｗ	古墳Ⅱ期
ＳＢ 03	側柱	２間×（３間）	4.50 ×（4.85）	−	Ｎ 51° Ｅ	古墳Ⅱ期
ＳＢ 04	側柱	２間×（３間）	4.20 ×（7.30）	−	Ｎ 65° Ｗ	古墳Ⅱ期
ＳＢ 05	側柱	２間×４間	3.70 × 6.25	23.12	Ｎ 22° Ｗ	古墳Ⅱ期
ＳＢ 06	側柱	２間×（１間）	5.25 ×（1.50）	−	Ｎ 16° Ｅ	古墳Ⅱ期
ＳＢ 07	側柱	２間×（１間）	3.80 ×（2.25）	−	Ｎ 24° 30′Ｗ	古墳Ⅱ期
ＳＢ 08	−	（１間）×（１間）	（1.85）×（1.85）	−	Ｎ 25° Ｗ	古墳Ⅱ期
ＳＢ 09	側柱	３間×（２間）	3.90 ×（2.35）	−	Ｎ 23° 30′Ｗ	古墳Ⅱ期

第３節　総括

最後に、本書で報告した調査成果について箇条書きにし、本報告のまとめとしたい。

１．市之郷遺跡は、市川右岸に形成された遺跡である。遺跡は、大きく西側の地区と東側の地区に分かれるが、本報告の調査地は東側に位置する。

２．検出した遺構は、大きく弥生時代と古墳時代からなる。

３．弥生時代の遺構は、中期と後期からなる。中期については、その前葉（弥生Ⅰ期－１）から後葉の各時期の遺構が検出されている。主な遺構としては、竪穴住居跡・土坑・溝などである。

後期については、その初頭（弥生Ⅱ期－１）から布留式段階（弥生Ⅱ期－４）までの遺構が検出されている。ただし、後期の中葉については、遺構は検出されていない。検出された遺構は、竪穴住居跡が中心である。このなかで、布留式段階の大型の掘立柱建物跡が注目される。

４．古墳時代の遺構は、６世紀後半から７世紀前半に限られる。このなかで、大きく竪穴住居跡を中心とした時期（古墳Ⅰ期）と、掘立柱建物跡を中心とした時期（古墳Ⅱ期）、に分けることができる。前者が６世紀後半、後者が７世紀前半に位置付けられるものである。特に、前者の竪穴住居跡は、数地点で複雑に切り合い関係をもち、短期間に数度にわたり建て替えが行われている。

５．出土遺物としては、庄内期を中心とした遺物が多量に出土している。一括性が認められ、当地における当該期の良好な資料として位置付けられるものである。

出土土器観察表

出土土器観察表 1

No.	地区	報告 遺構	種別	器種	口径 (cm)	頸径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存状況	焼成	色　調
1	A区	S H 01	土師器	甕	25.00	18.20			3.50	口縁部 1/8		にぶい橙
2	A区	S H 01	須恵器	杯H蓋	13.00				3.60	体部 3/4 口縁部わずか	普通	灰
3	A区	S H 02	須恵器	鉢	11.00	10.20	10.50		2.60	口縁部わずか	普通	灰白
4	A区	S H 02	須恵器	杯H蓋	13.50				2.60	口縁部 1/10	不良	灰白
5	A区	S H 02	須恵器	杯H蓋	12.80				3.70	口縁部 1/10	不良	灰白
6	A区	S H 02	須恵器	杯H蓋	13.40				3.40	口縁部 1/10	普通	灰白
7	A区	S H 02	須恵器	杯H蓋	12.30				3.70	口縁部 1/3	普通	にぶい赤褐 ～にぶい褐
8	A区	S H 02	須恵器	杯H	12.11				2.60	口縁部 1/10	普通	灰
9	A区	S H 02	須恵器	杯H	12.00				2.25	口縁部 1/10	やや不良	灰白
10	A区	S H 02	須恵器	杯H	7.30				2.15	1/2 弱	普通	灰～灰白
11	A区	S H 02	須恵器	高杯	12.40				3.50	口縁部 1/5	普通	灰白
12	A区	S H 02	土師器	甕	27.00	24.00			4.30	口縁部 1/8		にぶい黄橙
13	A区	S H 02	土師器	甕	19.50	16.20			4.00	口縁部 1/6		にぶい橙
14	A区	S H 02	土師器	甕	21.00	16.80	24.00		30.80	口縁部 2/3		橙
15	A区	S H 03	須恵器	壺	11.80	10.30			2.35	口縁部わずか	普通	灰白
16	A区	S H 03	須恵器	杯H蓋	13.80				3.90	口縁部 1/8	不良	灰白
17	A区	S H 03	須恵器	杯H	11.80				3.10	口縁部 1/4	普通	灰
18	A区	S H 03	須恵器	杯H	11.80				2.90	口縁部 1/10	普通	灰白
19	A区	S H 04	須恵器	蓋	14.50				3.00	口縁部 1/6	普通	灰
20	A区	S H 04	須恵器	脚部				12.00	3.00	脚部 1/4	普通	灰白
21	A区	S H 06	須恵器	杯H蓋	12.20				3.30	口縁部 1/8	やや不良	灰白
22	A区	S H 06	須恵器	杯H蓋	13.70				3.75	口縁部 1/10 天井部 1/4	普通	灰
23	A区	S H 06	須恵器	杯H	13.50				2.70	口縁部 1/10	普通	灰
24	A区	S H 07	須恵器	杯H蓋	13.60				3.25	口縁部 1/10	不良	灰
25	A区	S H 07	須恵器	杯H蓋	11.90				2.30	口縁部 1/10	普通	灰

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。	口縁部外面煤付着	1	
1㎜以下の長石含む	外面：天井部ヘラ切り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		1	44
1㎜大の長石わずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		1	
1㎜以下の長石含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		1	
0.5㎜以下の長石含む	外面：天井部～口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		1	
1㎜大の長石含む	外面：天井部～口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		1	
0.5～1.5㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：天井部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		1	44
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：体部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。"		1	
0.5㎜以下の長石含む	外面：底部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		1	
0.5㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：底部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		1	44
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：体部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		1	44
2㎜以下の長石・チャート・石英含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		1	
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部～頸部ハケ→口縁部横ナデ。		1	
1～2㎜大の長石・チャート・クサリレキ含む	外面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→体部上半ハケ→ナデ→口縁部ハケ→横ナデ。		1	44
1㎜大の長石わずかに含む	外面：口頸部回転ナデ。 内面：口頸部回転ナデ。		1	
2㎜以下の長石わずかに含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ→天井部ナデ。		1	44
1㎜以下の長石含む	外面：底部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		1	44
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：底部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		1	
1㎜以下の長石含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ→天井部ナデ。	内面に自然釉	1	45
1㎜大の長石・チャートわずかに含む	外面：脚部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。		1	45
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		1	45
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		1	45
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：底部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		1	
2㎜以下の長石・チャート含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		1	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部回転ナデ。		1	

出土土器観察表２

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
26	A区	ＳＨ07	須恵器	杯H	11.40				2.70	口縁部1/5	普通	灰白
27	A区	ＳＨ07	須恵器	杯H	13.90				2.80	口縁部1/8	普通	灰
28	A区	ＳＨ07	須恵器	蓋					1.10	つまみ完存	やや不良	灰白
29	A区	ＳＨ07	須恵器	高杯	12.40	3.20		8.90	6.60	体部～脚部完存	普通	灰
30	A区	ＳＨ07	須恵器	高杯				16.70	2.40	脚部1/8	普通	灰
31	A区	ＳＨ07	土師器	甕	27.70	25.00			5.40	口縁部1/10		橙
32	A区	ＳＨ07	土師器	高杯	17.90				4.40	口縁部1/8		橙
33	A区	ＳＨ07	土師器	小型丸底壺	10.00	8.30			4.70	口縁部1/6		浅黄橙
34	A区	ＳＨ08	須恵器	甕	18.40	16.00			7.70	口縁部1/3	普通	灰白
35	A区	ＳＨ08	須恵器	杯H蓋	12.70				3.10	口縁部1/8	不良	灰白
36	A区	ＳＨ08	須恵器	高杯				11.20	1.90	脚部わずか	普通	灰
37	A区	ＳＨ09	須恵器	杯H蓋	13.40				2.00	口縁部1/10	やや不良	灰白
38	A区	ＳＨ09	須恵器	杯H	10.80				1.70	口縁部1/6	不良	灰黄
39	A区	ＳＨ10	須恵器	杯H蓋	11.80				2.45	口縁部わずか	やや不良	灰白
40	A区	ＳＨ10	須恵器	鉢	23.80				4.80	口縁部1/12	やや不良	灰白
41	A区	ＳＨ10	土師器	甕	32.20	29.40			6.70	口縁部1/10		にぶい橙
42	A区	ＳＨ10	土師器	甕	23.60	18.90	25.50		15.10	口縁部1/6 体部2/3		にぶい橙
43	A区	ＳＨ10	土師器	高杯	18.00	3.40			5.10	口縁部1/4		橙
44	A区	ＳＨ11	須恵器	杯H蓋	14.50				3.70	口縁部1/4 天井部完存	不良	灰白
45	A区	ＳＨ11	須恵器	杯H蓋	14.50				2.80	口縁部1/10	不良	灰黄
46	A区	ＳＨ11	須恵器	杯H蓋	14.40				2.70	口縁部1/10弱	不良	灰白
47	A区	ＳＨ11	須恵器	杯H	13.20				3.65	ほぼ完存	やや不良	灰白
48	A区	ＳＨ11	須恵器	杯H	12.60				4.20	口縁部1/4	普通	灰
49	A区	ＳＨ11	須恵器	杯H	10.90				2.50	口縁部1/10	やや不良	灰
50	A区	ＳＨ11	須恵器	甕	18.00	14.70			4.40	口縁部1/8	やや不良	灰白

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1～2㎜大の長石含む	外面：底部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		1	
1㎜大の長石わずかに含む	外面：底部ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		1	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：つまみ回転ナデ。 内面：天井部回転ナデ。		1	
1㎜大の長石含む	外面：脚部回転ナデ。杯部下半回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。杯部回転ナデ。		1	45
1㎜大の長石わずかに含む	外面：脚部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。		1	
2㎜以下の長石・チャート多く含む	外面：口頸部ハケ→ナデ。 内面：口頸部ハケ→ナデ。		1	
1㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		1	
1㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		1	45
1㎜大の長石含む	外面：体部叩き→カキメ→口縁部回転ナデ。 内面：体部当具痕→口縁部回転ナデ。		2	46
2㎜以下の長石わずかに含む	外面：天井部ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		2	
1㎜以下の長石含む	外面：脚部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。		2	45
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		2	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		2	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		2	
2㎜以下の長石・チャートわずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		2	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ヘラミガキ→口縁部ハケ→ナデ。		2	46
1㎜大の長石・石英・チャート含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。		2	46
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：杯部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		2	46
1～2㎜大の長石わずかに含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部横ナデ。 内面：天井部～口縁部横ナデ。		2	46
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		2	
1㎜以下の長石・チャートわずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		2	
1㎜大の砂粒含む	外面：底部～体部ヘラ切り→回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ→底部ナデ。		2	46
1㎜大の長石含む	外面：底部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：底部ヘラナデ→体部～口縁部回転ナデ。		2	46
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		2	
3㎜以下の長石含む	外面：体部～頸部叩き→体部カキメ・頸部横ナデ→口縁部回転ナデ。 内面：体部ナデ→口頸部回転ナデ。		2	47

出土土器観察表３

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
51	A区	ＳＨ 11	須恵器	高杯		4.80		10.50	3.80	脚部完存	やや不良	灰白
52	A区	ＳＨ 11	土師器	高杯	16.80				4.20	口縁部 1/4		にぶい黄橙
53	A区	ＳＨ 11	土師器	高杯		3.40			8.90	筒部ほぼ完存		橙
54	A区	ＳＨ 11	土師器	高杯		3.20			9.10	脚部完存		橙
55	A区	ＳＨ 11	土師器	甕	21.40	17.20	24.80		29.90	ほぼ完存		浅黄橙
56	A区	ＳＨ 12	弥生	壺	14.60	10.20			4.10	口縁部 1/5		浅黄橙
57	A区	ＳＨ 12	弥生	壺	15.30	9.40	22.10		20.90	口縁部 2/3 体部 1/3		浅黄橙
58	A区	ＳＨ 12	弥生	壺				8.40	15.20	底部 2/3		にぶい橙
59	A区	ＳＨ 12	弥生	甕				5.90	4.10	底部 1/2		浅黄橙
60	A区	ＳＨ 12	弥生	壺		10.40			6.50	接合部完存		淡赤褐
61	A区	ＳＨ 14	土師器	甑					5.90	把手完存		浅黄橙
62	A区	ＳＨ 14	須恵器	杯Ｈ					2.35	口縁部わずか	普通	灰白
63	A区	ＳＨ 15	須恵器	杯Ｈ蓋					2.30	口縁部わずか	普通	灰
64	A区	ＳＨ 16	須恵器	壺	17.80	12.40			4.40	口縁部わずか	良好	灰
65	A区	ＳＨ 17	須恵器	杯Ｈ蓋	13.60				2.65	口縁部 1/7	普通	灰
66	A区	ＳＨ 17	須恵器	杯身	9.20				3.80	口縁部 1/8	普通	灰
67	A区	ＳＨ 18	須恵器	杯Ｈ蓋	15.20				4.20	口縁部 1/3	やや不良	灰白
68	A区	ＳＨ 18	須恵器	杯Ｈ蓋	14.80				2.70	口縁部 1/9	普通	灰～灰白
69	A区	ＳＨ 18	須恵器	杯Ｈ蓋	13.35				2.70	口縁部 1/9	やや不良	灰白
70	A区	ＳＨ 18	須恵器	杯Ｈ	12.00				3.70	口縁部 3/4	不良	灰白
71	A区	ＳＨ 18	須恵器	高杯					3.70	杯部 1/6	不良	灰白
72	A区	ＳＨ 18	須恵器	高杯				13.00	2.70	脚部 1/7	不良	灰白
73	A区	ＳＨ 18	土師器	甑	24.80				13.55	口縁部 1/4		浅黄橙
74	A区	ＳＨ 18	土師器	甑	21.00				4.60	口縁部わずか		橙
75	A区	ＳＨ 18	土師器	甕	13.50	12.50			8.40	口縁部 1/4		褐～黄褐

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1㎜以下の長石含む	外面：脚部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。体部回転ナデ。	脚高 2.9cm	2	47
1㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部磨滅。口縁部横ナデ。		2	47
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：脚部ヘラミガキ。 内面：脚部絞り目→ナデ。		2	
1㎜大の長石・チャートわずかに含む	外面：脚部ヘラミガキ。 内面：脚部しぼり目→脚裾部横ナデ。		2	
1㎜大のチャート・石英・長石含む	外面：体部ヘラ削り→ハケ→ヘラナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→口縁部横ナデ。	外面下半煤付着	2	47
2㎜以下の長石・チャート・石英やや多く含む	外面：口頸部磨滅。 内面：口頸部磨滅。		3	47
1㎜大のチャート・石英多く含む	外面：体部ハケ→体部中位ヘラミガキ→頸部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		3	47
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：体部ハケ→ナデ。	外面煤付着	3	
1～2㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ナデ。		3	
1～3㎜大の長石･チャート・クサリレキ含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		3	48
1㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：指オサエ→ナデ。 内面：ナデ。		3	48
2㎜以下の長石わずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		3	
0.5㎜以下の長石わずかに含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		3	
1㎜大の砂粒わずかに含む	外面：口頸部回転ナデ。 内面：口頸部回転ナデ。		3	48
1㎜大の長石含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		3	
0.5㎜以下の長石わずかに含む	外面：底部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		3	
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：天井部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		3	48
1㎜大の砂粒わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		3	
1㎜大の砂粒わずかに含む	外面：体部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		3	
0.5～3㎜大の長石･チャート･石英わずかに含む	外面：底部ヘラ切り→回転ナデ→体部～口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		3	48
1㎜大の砂粒わずかに含む	外面：体部回転ナデ。 内面：底部当具痕→底部～体部回転ナデ。		3	
1㎜大の砂粒わずかに含む	外面：脚部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。		3	
5㎜大のチャート多く含む	外面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→体部上半横ナデ。口縁部磨滅。		3	49
1㎜大のチャート・石英含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		3	49
1㎜大のチャートわずかに含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→指オサエ・ヘラ削り→口縁部ハケ。		3	49

出土土器観察表４

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
76	A区	ＳＨ 18	土師器	椀	14.40				3.55	口縁部 1/10		橙～浅黄橙
77	A区	ＳＨ 19	須恵器	杯Ｈ蓋	13.20				2.55	口縁部 1/12 弱	やや不良	灰白
78	A区	ＳＨ 19	須恵器	杯Ｈ蓋	12.80				2.00	口縁部わずか	普通	灰白
79	A区	ＳＨ 19	土師器	甕	14.30	11.50			3.40	口縁部 1/8		にぶい橙
80	A区	ＳＨ 19	土師器	壺	11.60	8.60			5.20	口縁部 1/6		浅黄橙
81	A区	ＳＨ 19	土師器	壺		5.80	12.00		6.40	体部 1/3		橙
82	A区	ＳＢ 01－Ｐ７	須恵器	杯Ｈ蓋	13.00				2.80	口縁部 1/10	不良	灰白
83	A区	ＳＢ 01－Ｐ２	須恵器	杯Ｈ	13.60				4.10	体部 1/5	不良	灰白～浅黄
84	A区	ＳＢ 03－Ｐ２	須恵器	杯Ｈ蓋	13.90				2.10	口縁部 1/12	普通	灰
85	A区	ＳＢ 03－Ｐ６	須恵器	高杯				14.00	3.95	脚部 1/4	不良	灰白
86	A区	ＳＢ 04－Ｐ２	須恵器	壺	19.00	16.00			3.20	口縁部 1/10	普通	灰
87	A区	ＳＢ 04－Ｐ６	須恵器	杯Ｈ蓋	13.80				1.75	口縁部わずか	普通	灰白
88	A区	ＳＢ 05－Ｐ８	須恵器	杯Ｈ蓋	14.50				2.90	口縁部 1/10	普通	灰白
89	A区	ＳＢ 05－Ｐ８	須恵器	杯Ｈ蓋	14.40				2.90	口縁部 1/8	普通	灰白
90	A区	ＳＢ 05－Ｐ９	須恵器	杯Ｈ蓋	14.20				1.65	口縁部わずか	普通	オリーブ灰
91	A区	ＳＢ 05－Ｐ６	須恵器	杯Ｈ蓋	12.40				1.95	口縁部 1/10	やや不良	灰白
92	A区	ＳＢ 05－Ｐ３	須恵器	杯Ｈ蓋	12.60				2.75	口縁部わずか	普通	灰白
93	A区	ＳＢ 05－Ｐ９	須恵器	杯Ｈ	13.20				2.00	口縁部わずか	普通	灰白
94	A区	ＳＢ 05－Ｐ５	須恵器	杯Ｈ	12.60				2.60	口縁部 1/10 弱	普通	灰
95	A区	ＳＢ 05－Ｐ２	須恵器	杯Ｈ					2.80	受部 1/10	普通	灰
96	A区	ＳＢ 05－Ｐ９	須恵器	杯Ｈ				5.00	2.40	底部完存	普通	灰白
97	A区	ＳＢ 05－Ｐ３	須恵器	提瓶	7.00				3.50	口縁部 1/8	普通	灰白
98	A区	Ｐ 06	弥生	底部				5.80	3.40	底部 1/4		にぶい黄橙～にぶい橙
99	A区	Ｐ 01	須恵器	杯Ｈ蓋	10.20				3.00	口縁部 1/8	普通	灰白
100	A区	Ｐ 07	須恵器	杯Ｈ蓋	16.20				2.50	口縁部 1/8	不良	灰白

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1㎜大の石英・チャート多く含む	外面：体部磨滅。口縁部横ナデ。 内面：体部磨滅。口縁部横ナデ。		3	49
1㎜以下の長石含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		3	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		3	
1㎜以下の長石・チャート・石英含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		3	
1～2㎜大の長石・チャートやや多く含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		3	
1㎜以下の長石・チャートわずかに含む	外面：体部磨滅。 内面：体部ナデ。		3	
5㎜以下の長石わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		3	
2㎜以下の長石含む	外面：底部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		3	
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。	口縁端部煤付着	3	
1㎜以下の長石含む	外面：脚部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。		3	50
2㎜以下の長石わずかに含む	外面：口頸部回転ナデ。 内面：口頸部回転ナデ。		4	50
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		4	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		4	
2㎜以下の長石・チャートわずかに含む	外面：天井部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		4	50
0.5㎜大の長石わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		4	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		4	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：体部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		4	
2㎜以下の長石わずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		4	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		4	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：体部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		4	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：底部ヘラ切り→体部回転ナデ。 内面：底部～体部回転ナデ。		4	50
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		4	
1㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部ナデ。 内面：底部～体部ナデ。	内面煤付着	4	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：天井部～口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		4	
1㎜大の長石・チャートわずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		4	

出土土器観察表５

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
101	A区	P 03	須恵器	杯H蓋	15.20				2.20	口縁部 1/10	不良	灰白
102	A区	P 08	須恵器	杯H蓋	11.80				2.60	口縁部 1/10	普通	灰～灰白
103	A区	P 05	須恵器	杯H	12.70				2.80	口縁部 1/6	普通	灰白
104	A区	P 05	須恵器	杯H				7.50	1.70	底部 1/12	普通	灰白
105	A区	P 04	須恵器	杯H	9.80				2.10	口縁部 1/8	普通	灰白
106	A区	P 04	須恵器	壺	10.00	8.80			3.95	口縁部 1/4	普通	灰
107	A区	P 02	土師器	甕	13.20	12.00			3.90	口縁部 1/6		浅黄橙～橙
108	A区	SK 01	弥生	甕	23.80	22.00	25.00		7.20	口縁部 1/6		灰白～橙
109	A区	SK 01	弥生	甕	20.20	18.30			7.40	口縁部わずか		灰白～淡黄
110	A区	SK 01	弥生	高坏	24.60	23.30			10.40	口縁部 1/3		浅黄橙～黄橙
111	A区	SK 02	弥生	蓋	23.70				5.90	口縁部 1/12		浅黄橙～黄橙
112	A区	SK 02	弥生	甕				5.80	9.30	底部 1/3		浅黄橙
113	A区	SK 03	土師器	椀	14.40				4.20	口縁部 1/8		橙～にぶい黄橙
114	A区	SK 04	土師器	皿	20.80			16.50	4.35	口縁部 1/12 底部 1/4		浅黄橙～橙
115	A区	SK 04	須恵器	壺	39.40	37.60			7.90	口縁部 1/5	普通	灰白～にぶい黄
116	A区	SK 07	須恵器	杯H蓋	16.90				3.20	口縁部 1/8	普通	灰～灰白
117	A区	SK 08	須恵器	杯H	12.70				2.95	口縁部 1/10	やや不良	灰白
118	A区	SK 08	須恵器	杯H	12.80				2.20	口縁部 1/10	不良	灰白
119	A区	SK 08	須恵器	杯H	11.90				2.55	口縁部 1/10	普通	灰白
120	A区	SK 08	須恵器	高杯				7.60	4.20	脚部 1/3	良好	青灰
121	A区	SK 09	須恵器	杯H蓋	10.60				3.70	天井部完存 口縁部わずか	不良	灰白
122	A区	SK 09	弥生	底部				5.40	4.30	底部 1/4		橙
123	A区	SK 09	弥生	壺				8.80	3.65	底部 1/6		灰白
124	A区	SK 10	須恵器	杯H					3.10	口縁部 1/10	普通	灰白～褐灰
125	A区	SK 11	須恵器	甕	19.80	15.60			6.30	口縁部 1/6	普通	灰白～灰黄

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		4	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：天井部～口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		4	
1㎜以下の長石・チャートわずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		4	50
0.5㎜以下の長石わずかに含む	外面：底部ヘラ切り後ヘラ削り→体部回転ナデ。 内面：底部～体部回転ナデ。		4	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		4	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：口頸部回転ナデ。 内面：口頸部回転ナデ。		4	50
1㎜大の長石・石英・チャートやや多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部磨滅。口縁部ハケ。		4	
2㎜以下のチャートやや多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		4	
1㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：体部磨滅。口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→ハケ→口縁部横ナデ。		4	
1㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：体部ハケ→ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		4	50
1㎜大の石英・チャート多く含む	外面：磨滅。 内面：口縁部横ナデ。		4	
2㎜以下の長石・チャートわずかに含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		4	
6㎜以下の石英・チャート・長石含む	外面：体部ナデ→口縁部ハケ→横ナデ。 内面：体部ヘラミガキ→口縁部ハケ→横ナデ。		4	51
0.5～1㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		4	51
1㎜大のチャート含む	外面：体部カキメ→口縁部回転ナデ。 内面：体部当具痕→口縁部回転ナデ。		4	51
1㎜大の砂粒多く含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		5	51
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		5	
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		5	
1～2㎜大の長石わずかに含む	外面：底部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		5	
2㎜以下の砂粒含む	外面：脚部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。		5	51
1㎜大の長石含む	外面：天井部ヘラ切り→回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		5	
3㎜以下の長石・チャート含む	外面：底部指オサエ→体部ナデ。 内面：磨滅。		5	
2㎜以下の長石・チャート・石英やや多く含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ナデ。		5	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：底部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		5	
1㎜大の長石わずかに含む	外面：体部叩き→カキメ→口縁部回転ナデ。 内面：体部当具痕→口縁部回転ナデ。		5	51

出土土器観察表６

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
126	A区	ＳＫ 11	須恵器	壺						体部わずか	普通	灰
127	A区	ＳＫ 11	須恵器	杯H蓋	11.80				2.80	口縁部 1/8	普通	灰白
128	A区	ＳＫ 11	土師器	甑	27.80				7.50	口縁部 1/10		浅黄橙
129	A区	ＳＫ 11	土師器	鉢	17.80				3.80	口縁部 1/12		橙
130	A区	ＳＫ 11	土師器	椀	16.90				6.90	ほぼ完存		にぶい橙
131	A区	ＳＫ 11	土師器	鉢	15.80				5.90	口縁部 1/6		浅黄橙
132	A区	ＳＫ 13	弥生	底部				7.70	1.80	底部 1/6		浅黄橙
133	A区	ＳＫ 12	瓦	丸瓦						一部	不良	橙～灰白
134	A区	ＳＫ 14	土師器	堝	28.00	24.00	24.00		16.30	口縁部わずか 底部完存		浅黄橙～にぶい黄橙
135	A区	ＳＤ 01	須恵器	甕	17.70	15.60	31.60		23.30	口縁部～体部 ほぼ完存	やや不良	灰白
136	A区	ＳＤ 01	土師器	甕	12.30	11.00	14.30		7.80	口縁部 1/4		にぶい橙～灰黄褐
137	A区	ＳＤ 01	土師器	高杯		3.45			5.70	接合部完存		浅黄橙
138	A区	ＳＤ 02	須恵器	杯H蓋	13.20				4.00	口縁部 1/5	やや不良	灰白
139	A区	ＳＤ 02	須恵器	杯H					2.70	体部 1/8	普通	灰白
140	A区	ＳＤ 02	土師器	甑					3.80	把手片方完存		浅黄橙
141	A区	ＳＤ 02	須恵器	甕	21.30	16.80			8.65	口縁部ほぼ完存	不良	灰白～灰
142	A区	ＳＤ 03	須恵器	杯H蓋	14.40				2.90	口縁部 1/8	普通	灰～灰白
143	A区	ＳＤ 03	須恵器	杯H蓋	13.75				4.40	口縁部 3/4	普通	灰白
144	A区	ＳＤ 03	須恵器	杯H	12.70				3.60	ほぼ完存	普通	灰
145	A区	ＳＤ 03	須恵器	杯H	13.90				2.60	口縁部 1/7	やや不良	灰白
146	A区	ＳＤ 03	須恵器	壺	6.35	4.60			5.00	口縁部ほぼ完存	普通	灰～灰白
147	A区	ＳＤ 03	土師器	高杯		4.90		9.60	4.20	脚部完存 底部 1/4		橙
148	A区	ＳＤ 05	土師器	甑					5.80	把手片方完存		にぶい黄橙
149	A区	包含層	弥生	壺				8.00	3.70	底部 1/4		浅黄橙
150	A区	包含層	弥生	壺				9.00	3.80	底部 1/4		灰白～浅黄橙

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1㎜大の長石含む	外面：体部叩き。 内面：体部当具痕・	窯着有	5	51
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：天井部～口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		5	
1㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部～口縁部ハケ。 内面：磨滅。		5	
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部～口縁部ヘラミガキ。 内面：体部～口縁部ヘラミガキ。		5	
1～3㎜大の長石・チャート含む	外面：底部～体部ナデ→体部ヘラ削り→ハケ→口縁部ハケ→ヘラミガキ→横ナデ。 内面：底部ナデ→口縁部横ナデ→ヘラミガキ。		5	52
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		5	
2㎜以下の長石・チャート・石英やや多く含む	外面：体部ハケ。 内面：底部～体部ナデ。		5	
1㎜大の長石他含む	凸面：ナデ。 凹面：糸切り・布目。		5	53
1㎜大の長石・チャート含む	外面：底部指オサエ→ナデ→体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：底部指オサエ→ナデ→体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。	体部外面中位煤付着	5	
1～2㎜大の長石・チャートわずかに含む	外面：体部叩き→カキメ→口縁部回転ナデ。 内面：体部当具痕→口縁部回転ナデ。		5	52
1㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→口縁部横ナデ。		5	52
1㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：脚部ヘラミガキ。 内面：脚部ナデ。		5	
2㎜以下の長石わずかに含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。	ヘラ記号	6	52
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：底部ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		6	
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：把手指オサエ→ナデ。 内面：ナデ。		6	53
0.5㎜大の長石・石英・チャート含む	外面：口頸部叩き→カキメ→口縁部回転ナデ。 内面：体部当具痕→口頸部回転ナデ。		6	53
2㎜以下の長石わずかに含む	外面：天井部ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		6	53
2㎜大の砂粒わずかに含む	外面：天井部回転ヘラ削り→ナデ→体部～口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ→天井部ナデ。		6	54
1～3㎜大の長石わずかに含む	外面：底部ヘラ切り→ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		6	54
0.5㎜以下の長石わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		6	
0.5㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：口頸部回転ナデ。 内面：口頸部回転ナデ。		6	54
1㎜大の長石・石英・チャート含む	外面：脚部横ナデ。 内面：脚部横ナデ。体部ナデ。		6	54
1㎜大の長石・チャートやや多く含む	外面：指オサエ→ナデ。 内面：ハケ→ナデ。		6	54
1～3㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：ナデ。 内面：ヘラミガキ。		6	
2㎜以下の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：体部磨滅。		6	

出土土器観察表７

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
151	A区	包含層	弥生	壺				7.60	4.80	底部 1/4		にぶい橙～灰白
152	A区	包含層	弥生	甕				5.50	5.15	底部完存		褐灰～にぶい橙
153	A区	包含層	弥生	甕				4.80	3.20	底部 2/3		浅黄橙
154	A区	包含層	弥生	甕				5.50	1.20	底部 1/4		にぶい橙
155	A区	包含層	弥生	甕	21.30	19.00			5.50	口縁部 1/8		にぶい橙
156	A区	包含層	弥生	甕	13.00	11.40			3.70	口縁部 1/10		にぶい橙
157	A区	包含層	弥生	脚部				11.60	3.00	脚部 2/3		にぶい黄橙
158	A区	包含層	弥生	脚部				9.10	4.80	脚部 1/3		にぶい橙
159	A区	包含層	土師器	高杯		3.70		10.60	5.90	脚部 1/2		橙
160	A区	包含層	土師器	甕	19.40	16.00	22.20		15.80	口縁部 1/6		橙
161	A区	包含層	土師器	鉢	16.00		17.60		8.40	口縁部 1/4		浅黄橙
162	A区	包含層	須恵器	杯蓋	11.60				3.20	口縁部 1/8	不良	灰白
163	A区	包含層	須恵器	杯H蓋					2.50	口縁部わずか	普通	灰白
164	A区	包含層	須恵器	杯H蓋	14.60				4.00	口縁部 1/3	やや不良	灰白
165	A区	包含層	須恵器	杯H蓋	15.30				2.95	口縁部 1/10	普通	灰～灰白
166	A区	包含層	須恵器	杯H蓋	13.70				2.80	口縁部 1/7	普通	青灰
167	A区	包含層	須恵器	杯H蓋	12.90				2.50	口縁部 1/10	普通	灰白
168	A区	包含層	須恵器	杯H	13.70				3.90	口縁部 1/5	普通	灰白～青灰
169	A区	包含層	須恵器	杯H	13.20				3.10	口縁部 1/4	普通	灰白
170	A区	包含層	須恵器	杯H	12.10				3.90	ほぼ完存	普通	灰
171	A区	包含層	須恵器	杯H	12.00				2.90	口縁部 1/6	やや不良	灰白
172	A区	包含層	須恵器	杯H	12.40				3.10	口縁部 1/5	不良	灰白
173	A区	包含層	須恵器	杯H	12.60				2.35	口縁部わずか	普通	灰白
174	A区	包含層	須恵器	杯H	12.00				2.80	口縁部 1/11	普通	灰
175	A区	包含層	須恵器	杯A	12.80			6.10	3.70	1/4	やや不良	灰白

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
2㎜以下の長石・チャート・石英含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ナデ。		6	
0.5～1㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：体部磨滅。 内面：体部ヘラ削り。		6	54
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：底部指オサエ→体部ナデ。		6	
1㎜以下の長石・チャート・石英含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		6	
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		6	55
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	6	
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：脚部ヘラミガキ→脚裾部横ナデ。 内面：脚部ナデ→脚裾部ヘラ削り。		6	
1㎜大の長石・チャートやや多く含む	外面：脚部ナデ。 内面：脚部指ナデ→裾部横ナデ。		6	
1～2㎜大の長石・チャートやや多く含む	外面：脚部ハケ。 内面：脚部ヘラ削り→裾部横ナデ。		6	
1.5㎜以下の長石・チャート含む	外面：体部ハケ→肩部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		6	55
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		6	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		6	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		6	
1㎜大の砂粒わずかに含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ→天井部ナデ。		6	
1㎜大の長石わずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		6	
1㎜大の長石わずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		6	
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		6	
1㎜大の長石わずかに含む	外面：底部～体部回転ヘラ削り→ナデ→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		6	
1㎜大の砂粒わずかに含む	外面：底部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		6	
1㎜以下の長石含む	外面：底部～体部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		6	55
1㎜以下の長石・チャートわずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		6	55
1㎜大の砂粒わずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		6	
0.5㎜以下の長石わずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		6	
1㎜大の砂粒多く含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		6	
1㎜大の砂粒わずかに含む	外面：底部回転ヘラ切り→ナデ→体部～口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ→底部ナデ。		7	55

出土土器観察表８

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
176	A区	包含層	須恵器	高杯	11.10				4.10	口縁部 1/4	普通	灰白
177	A区	包含層	須恵器	壺			10.90		5.50	体部 1/4	普通	灰～灰白
178	A区	包含層	須恵器	壺	5.80	5.90	7.30	4.50	4.75	1/2	普通	灰白
179	A区	包含層	須恵器	壺	8.80	9.20	15.40		9.00	1/3	普通	灰白
180	A区	包含層	須恵器	鉢	13.90				7.90	口縁部 1/7	普通	灰～灰白
181	A区	包含層	須恵器	壺	11.40	9.40			4.85	口縁部 1/12	普通	灰～灰白
182	A区	包含層	須恵器	壺	12.00	9.80			4.40	口縁部 1/4	やや不良	灰白
183	A区	包含層	須恵器	鉢	31.00				5.40	口縁部 1/12	不良	灰白
184	A区	包含層	瓦	丸瓦						一部	不良	灰
185	B区	ＳＨ 20	弥生	壺					7.40	体部わずか		にぶい橙～黄灰
186	B区	ＳＨ 20	弥生	底部				8.00	3.90	底部 1/6		橙～にぶい黄橙
187	B区	ＳＨ 20	弥生	甕	19.00	17.20			4.15	口縁部 1/10		にぶい橙
188	B区	ＳＨ 20	弥生	甕				6.00	2.20	底部 1/2		にぶい黄橙
189	B区	ＳＨ 22	弥生	壺	11.20	8.70	16.70	4.00	15.90	ほぼ完存		橙
190	B区	ＳＨ 22	弥生	壺					3.00	口縁部わずか		橙～にぶい褐
191	B区	ＳＨ 22	弥生	壺	10.20	9.00	16.70	2.40	22.70	ほぼ完存		浅黄橙
192	B区	ＳＨ 22	弥生	壺	13.30	10.90			6.00	口縁部 1/5		淡橙～にぶい黄橙
193	B区	ＳＨ 22	弥生	壺	10.75	10.30			3.70	口縁部 1/4		にぶい橙～浅黄橙
194	B区	ＳＨ 22	弥生	壺	9.70	9.30			4.40	口縁部 1/4		黄灰
195	B区	ＳＨ 22	弥生	壺	15.00				3.90	口縁部 1/6		淡黄～灰
196	B区	ＳＨ 22	弥生	壺	7.10	7.40	10.40		4.70	口縁部 1/3		浅黄橙～灰白
197	B区	ＳＨ 22	弥生	壺				4.50	2.40	底部完存		灰白
198	B区	ＳＨ 22	弥生	壺				1.80	1.90	底部完存		にぶい褐
199	B区	ＳＨ 22	弥生	壺				4.10	4.05	底部 1/4		灰黄褐～にぶい橙
200	B区	ＳＨ 22	弥生	壺				4.10	3.25	底部完存		にぶい黄橙

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1㎜以下の長石含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		7	56
1㎜大の砂粒多く含む	外面：体部下半回転ヘラ削り→体部上半回転ナデ。 内面：体部回転ナデ。		7	56
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：体部下端ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。	底部ヘラ切り	7	56
1㎜以下の長石わずかに含む	外面：底部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		7	56
1～2㎜大の砂粒多く含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		7	56
1㎜大の砂粒わずかに含む	外面：体部叩き頸部～口縁部回転ナデ。 内面：体部当具痕→頸部～口縁部回転ナデ。		7	
1㎜大の長石・チャートわずかに含む	外面：体部叩き→ナデ→口縁部回転ナデ。 内面：体部当具痕→口縁部回転ナデ。		7	56
1㎜大の石英・長石多く含む	外面：体部～口縁部回転ナデ→体部カキメ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		7	56
1㎜大の長石含む	凸面：玉縁部横ナデ→筒部ナデ。 凹面：布目。		7	57
1㎜以下の長石・チャート・石英含む	外面：体部ハケ。 内面：体部ハケ→ナデ。		9	59
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部磨滅。 内面：体部ナデ。		9	
1㎜以下の石英・チャート・長石含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		9	
1～2㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：体部剥離。		9	
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部上半ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部下半板ナデ・体部上半ユビナデ→口縁部横ナデ	体部下半外面に煤付着	9	59
1～2㎜大のチャート多量に含む	外面：口縁部ヘラミガキ→端部横ナデ。 内面：口縁部ヘラナデ。		9	59
1～3㎜大の長石・チャートやや多く含む	外面：体部叩き→底部ヘラ削り・頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→頸部板ナデ→口縁部横ナデ。	下半部被熱→赤変	9	59
3㎜大の石英・チャート多く含む	外面：頸部叩き。口縁部磨滅。口縁端部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→口縁部横ナデ。		9	
1～2㎜大のチャート含む	外面：口縁部ヘラナデ。 内面：磨滅。		9	
3㎜大の石英・クサリレキ多く含む	外面：体部磨滅。口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→口縁部横ナデ。		9	59
1～2㎜大のチャート・長石多く含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		9	
1～2㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：体部磨滅。口縁部指オサエ。 内面：体部～口縁部指オサエ。		9	59
1～2㎜大のチャート・長石含む	外面：体部下端ヘラナデ→体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラミガキ。		9	
1㎜以下の長石・石英・チャート含む	外面：底部～体部ナデ→体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ナデ。		9	
4㎜大の砂粒多く含む	外面：体部叩き。 内面：体部ハケ。		9	
1㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部叩き。 内面：体部ハケ。	外面煤付着 底部木葉文	9	60

出土土器観察表９

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
201	B区	SH 22	弥生	甕	17.30	13.40	21.30		18.10	口縁部～体部 2/3		にぶい橙
202	B区	SH 22	弥生	甕	14.00	12.00	19.40		23.10	口縁部～体部 1/3 底部完存		にぶい黄橙
203	B区	SH 22	弥生	甕	15.40	13.60			5.00	口縁部 1/5		淡赤橙～灰黄褐
204	B区	SH 22	弥生	甕	14.40	12.00			4.70	口縁部 1/6		浅黄橙
205	B区	SH 22	弥生	甕	13.50	11.60	15.20		12.60	口縁部～体部ほぼ完存		にぶい橙
206	B区	SH 22	弥生	甕				2.80	2.80	底部完存		にぶい橙
207	B区	SH 22	弥生	甕					3.15	底部完存		灰白～黄灰
208	B区	SH 22	弥生	甕	18.10	15.60			5.20	口縁部 1/12		橙～浅黄橙
209	B区	SH 22	弥生	甕	15.70	13.00			5.30	口縁部 1/2		橙
210	B区	SH 22	弥生	甕	15.90	13.15			6.55	口縁部 1/12		橙
211	B区	SH 22	弥生	甕				4.40	3.40	底部完存		にぶい橙
212	B区	SH 22	弥生	甕				4.40	3.55	底部完存		暗灰～黄灰
213	B区	SH 22	弥生	甕				3.15	7.70	底部完存		橙～灰黄
214	B区	SH 22	弥生	鉢				3.90	4.00	底部完存		浅黄橙
215	B区	SH 22	弥生	鉢	8.40				6.80	口縁部 1/6 体部 1/2		褐灰～暗灰
216	B区	SH 22	弥生	鉢		4.80		6.60	3.00	脚部完存		浅黄橙～灰白
217	B区	SH 22	弥生	鉢	11.80			3.20	6.50	口縁部 2/3 底部完存		橙
218	B区	SH 22	弥生	鉢	11.90			3.50	5.90	口縁部 1/3 底部完存		浅黄橙
219	B区	SH 22	弥生	鉢				4.30	5.15	底部完存		浅黄橙～灰白
220	B区	SH 22	弥生	鉢				3.80	3.95	底部完存		浅黄橙～橙
221	B区	SH 22	弥生	鉢	10.55			3.90	5.90	口縁部 2/3 底部完存		にぶい黄橙～橙
222	B区	SH 22	弥生	鉢	6.80			3.60	3.60	完存		暗灰黄
223	B区	SH 22	弥生	鉢	11.20			4.40	4.30	口縁部 1/4 体部～底部完存		橙～浅黄橙
224	B区	SH 22	弥生	製塩土器	15.30	5.00			33.20	底部以外ほぼ完存		にぶい褐
225	B区	SH 22	弥生	高坏	24.00				9.50	口縁部 1/6		浅黄橙～橙

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1～2㎜大の長石・チャート多く含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部外面下半煤付着・被熱→赤変	9	60
1～3㎜大のチャート・長石含多くむ	外面：体部叩き→体部中位ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。	体部外面下半に煤付着	9	60
5㎜大のチャート・石英多く含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラナデ→口縁部ハケ。		9	60
1㎜大のチャート・長石含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		9	
1～3㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：体部叩き→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部外面に煤付着	9	60
1～3㎜大の長石･チャート・クサリレキ含む	外面：底部～体部叩き。 内面：体部ハケ。	外面煤付着	9	
1～2㎜大の砂粒多く含む	外面：底部～体部叩き。 内面：底部～体部ナデ。		9	
1㎜大の長石・チャート多く含む	外面：口頸部横ナデ→ヘラナデ。 内面：体部ヘラ削り→口頸部横ナデ→ヘラナデ。		9	61
0.5～1㎜大の石英･長石･チャート含む	外面：頸部～口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→口縁部横ナデ。	在地産	9	60
1～2㎜大の砂粒多く含む	外面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→口縁部横ナデ。		9	
1～2㎜大の長石・石英・チャート・クサリレキ含む	外面：体部叩き。 内面：体部ヘラミガキ。	底部木葉文	9	61
3㎜大の砂粒多く含む	外面：磨滅。 内面：ヘラ削り→ナデ。		9	
4㎜大のチャート・石英他多量に含む	外面：体部叩き。 内面：体部ヘラナデ。	外面被熱により赤変	10	
4㎜大の石英・チャート多く含む	外面：底部～体部指オサエ・ナデ。 内面：底部～体部ナデ。		10	
0.5～3㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：体部ハケ→ナデ→底部ヘラ削り・口縁部指オサエ。 内面：底部～体部指オサエ→ナデ→口縁部指オサエ。		10	61
4㎜大のチャート・石英多く含む	外面：脚部指オサエ→ナデ。 内面：脚部ナデ。体部板ナデ。		10	
1㎜大のチャート・長石・石英含む	外面：体部～口縁部ナデ。 内面：体部～口縁部ナデ。		10	61
1～2㎜大のチャート含む	外面：底部～体部叩き→体部～口縁部ナデ。 内面：底部～口縁部ナデ。		10	61
1～2㎜大のチャート・長石・クサリレキ多く含む	外面：底部叩き。体部磨滅。 内面：底部～体部ヘラナデ。		10	61
1㎜大のチャート・雲母多く含む	外面：体部指オサエ。 内面：体部ナデ。		10	62
1.5㎜～0.5㎜大のチャート・長石・石英含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：底部ハケ→体部ナデ→口縁部横ナデ。		10	62
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：底部～口縁部ナデ。 内面：底部～口縁部ナデ。		10	62
0.5～3㎜大の石英・長石含む	外面：底部～体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部ハケ→口縁部横ナデ。		10	63
1～2㎜大のチャート・長石・雲母含む	外面：体部叩き→ハケ→底部ヘラナデ・口縁部指オサエ→ナデ。 内面:底部ハケ→ナデ。体部下半指オサエ･ナデ。体部上半ハケ。		10	62
0.5～3㎜大の石英･長石･チャート多く含む	外面：体部～口縁部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。内面：体部～口縁部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		10	63

出土土器観察表 10

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
226	B区	S H 22	弥生	高坏	21.80	3.70		18.20	18.10	ほぼ完存		にぶい橙
227	B区	S H 22	弥生	高坏				18.00	3.55	脚部1/4弱		橙～にぶい黄橙
228	B区	S H 22	弥生	高坏	19.40				3.75	口縁部1/5		灰黄褐～褐灰
229	B区	S H 22	弥生	高坏	16.80				3.30	口縁部1/2		橙
230	B区	S H 22	弥生	高坏	15.00				3.80	口縁部1/9		淡黄～にぶい黄橙
231	B区	S H 22	弥生	高坏					4.40	坏部1/4		灰黄褐～灰白
232	B区	S H 22	弥生	高坏					4.50	坏部1/4		浅黄橙～灰白
233	B区	S H 22	弥生	高坏		3.70			9.20	筒部完存		灰黄
234	B区	S H 22	弥生	高坏		3.60			6.80	筒部完存		橙
235	B区	S H 22	弥生	高坏	8.80				3.05	坏部1/4		橙
236	B区	S H 22	弥生	高坏		3.30			5.10	筒部完存		にぶい黄橙
237	B区	S H 22	弥生	高坏	11.00	2.35		16.60	10.50	口縁部3/4 脚部1/2		橙～黄橙
238	B区	S H 22	弥生	器台	9.30	3.20			6.30	口縁部～筒部ほぼ完存		浅黄橙
239	B区	S H 22	弥生	蓋	27.80				7.18	口縁部1/2		にぶい黄橙～褐灰
240	B区	S H 23	須恵器	杯H蓋	14.10				4.50	1/2	やや不良	灰白
241	B区	S H 23	須恵器	杯H蓋	13.30				3.90	1/3	良好	灰
242	B区	S H 23	須恵器	杯H蓋	13.30				3.80	1/3	不良	灰黄
243	B区	S H 23	須恵器	杯H	12.70				4.60	ほぼ完存	普通	灰白
244	B区	S H 23	須恵器	杯H	13.10				3.95	1/2	普通	灰白
245	B区	S H 23	須恵器	杯H	10.80				2.20	口縁部1/4	普通	灰
246	B区	S H 23	須恵器	甕	26.40				4.00	口縁部1/4	やや不良	黄灰～灰白
247	B区	S H 23	土師器	甕	13.30	12.40			6.40	口縁部1/8		にぶい橙～にぶい黄橙
248	B区	S H 23	土師器	甕	14.80	12.80			6.60	口縁部1/4		橙
249	B区	S H 23	土師器	甕	10.00	9.00			5.00	口縁部1/4		にぶい橙
250	B区	S H 23	土師器	甕	8.60	8.20	9.40		8.30	口縁部1/2 底部2/3		にぶい褐～にぶい橙

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1～2㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：ヘラミガキ。 内面：脚部ナデ。坏部ナデ。		10	63
4㎜大のチャート他多く含む	外面：脚部ヘラミガキ。 内面：脚部磨滅。	円孔（径 1.2cm）	10	
3㎜大のチャート多く含む	外面：坏部ヘラミガキ。 内面：坏部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		10	63
1～2㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：口縁部ヘラミガキ。口縁端部横ナデ。 内面：口縁部ハケ→ヘラミガキ。		10	
3㎜大のチャート多く含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		10	
1～2㎜大のチャート・長石多く含む	外面：磨滅。 内面：坏部ヘラミガキ。		10	
3㎜大のチャート・クサリレキ多く含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		10	
1～2㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：筒部ヘラミガキ。 内面：脚部ナデ。		10	
1～2㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：筒部ヘラミガキ。 内面：脚部ナデ。		10	
1～3㎜大のチャート多く含む	外面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		10	63
1㎜以下のチャート・石英・長石含む	外面：脚部ヘラ削り→筒部ヘラミガキ→体部ナデ。 内面：脚部ナデ。坏部ヘラミガキ。		10	
0.5㎜大のチャート・長石含む	外面：脚部ハケ→ヘラミガキ。接合部ナデ。坏部ハケ→ヘラミガキ。 内面：脚部ハケ。坏部ハケ。"	脚高 5.20cm	10	63
1㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：筒部ハケ→ヘラミガキ。受部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：受部ヘラミガキ。脚部ナデ。	円孔（径 1 cm）	10	63
0.5～3㎜大の石英・長石・チャートやや多く含む	外面：天井部ハケ→口縁部ナデ。 内面：天井部～口縁部ハケ→天井部ナデ。	口縁部内面煤付着	10	64
1～2㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：口縁部回転ナデ→天井部回転ヘラ削り。 内面：口縁部～天井部回転ナデ→天井部仕上げナデ。		11	64
1㎜大の長石含む	外面：口縁部回転ナデ→天井部回転ヘラ削り。 内面：口縁部～天井部回転ナデ調整→天井部仕上げナデ。		11	64
1～2㎜大の長石・石英・チャート含む	外面：口縁部回転ナデ→天井部回転ヘラ削り。 内面：口縁部～天井部回転ナデ→天井部仕上げナデ。		11	64
1㎜大の長石わずかに含む	外面：口縁部～体部回転ナデ→底部回転ヘラ削り。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		11	64
1㎜以下の長石含む	外面：口縁部～底部回転ナデ→底部ヘラ削り。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		11	64
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		11	
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		11	64
1～2㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部～口縁部板ナデ。	外面被熱→赤変	11	
1～2㎜大の長石・チャート・石英わずかに含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ヘラ削り→口縁部横ナデ。		11	64
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		11	64
1㎜大の長石・チャート・雲母・石英含む	外面：底部ヘラ削り→体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部ナデ→口縁部ハケ→横ナデ。		11	65

出土土器観察表 11

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
251	B区	SH 23	土師器	甕	19.20	16.20	22.30		10.50	口縁部 1/8		にぶい橙
252	B区	SH 23	土師器	甕	21.50	17.80	22.70		36.00	ほぼ完存		橙～にぶい黄橙
253	B区	SH 23	土師器	椀	14.00				6.00	口縁部 1/8		橙
254	B区	SH 23	土師器	高杯		3.40		11.60	7.20	脚部 1/3		橙
255	B区	SH 23	土師器	高杯	17.60	3.30		12.00	13.20	ほぼ完存		橙
256	B区	SH 23	土師器	高杯	29.80				3.70	口縁部 1/6		橙
257	B区	SH 23	土師器	鉢	24.00				6.70	口縁部わずか		浅黄橙
258	B区	SH 23	土師器	甑	19.80				7.90	口縁部わずか		橙
259	B区	SH 24	須恵器	杯H蓋	14.20				3.55	1/2	普通	黄灰
260	B区	SH 24	須恵器	高杯				10.00	1.70	脚部 1/4	普通	黄灰
261	B区	SH 24	土師器	椀	13.30				6.75	口縁部 1/10 底部完存		浅黄橙
262	B区	SH 24	土師器	高杯		3.30			6.50	脚部 1/2		にぶい橙～橙
263	B区	SH 24	土師器	甕	13.60	12.50	18.90		18.80	口縁部完存 体部 1/2		淡赤橙
264	B区	SK 15	弥生	壺	15.40	8.40	22.00	4.50	26.00	口縁部 1/3 底部ほぼ完存		浅黄橙
265	B区	SK 15	弥生	壺	14.70	13.30			5.10	口縁部 1/8		橙～にぶい黄橙
266	B区	SK 15	弥生	高坏		3.20		13.30	5.00	脚部 1/4		浅黄橙
267	B区	SD 06	弥生	壺	17.70				3.65	口縁部 1/7		にぶい橙
268	B区	SD 06	弥生	壺	13.30	9.30			7.60	口縁部ほぼ完存		浅黄橙
269	B区	SD 06	弥生	甕	21.40	19.00	23.80		9.35	口縁部 1/7		橙
270	B区	SD 06	弥生	甕	16.90	14.20	17.40		9.40	口縁部 ～体部 1/5		にぶい黄橙
271	B区	SD 06	弥生	甕	14.90	12.50			4.40	口縁部 1/4		淡黄
272	B区	SD 06	弥生	甕	12.00	11.30	14.50		9.45	口縁部 1/3		浅黄橙～にぶい橙
273	B区	SD 06	弥生	甕				4.30	3.75	底部完存		浅黄橙
274	B区	SD 06	弥生	甕				3.70	3.15	底部完存		浅黄橙
275	B区	SD 06	弥生	甕				4.50	2.60	底部完存		灰白

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1㎜以下の長石・チャート・石英含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部板ナデ→口縁部ハケ→ヘラナデ。		11	
1～2㎜大の長石・石英・チャート含む	外面：底部～体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部ヘラ削り→口縁部横ナデ。	体部～底部外面煤付着　二次焼成痕	11	65
1㎜大の長石・石英・チャート多く含む	外面：底部～体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部ナデ→口縁部横ナデ。		11	65
1㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：筒部ヘラナデ→裾部横ナデ。 内面：裾部ナデ→横ナデ。		11	
1～2㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：脚部ヘラミガキ→脚端部ヘラナデ。体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。 内面：脚部ナデ・体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		11	65
1㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		11	
0.5㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：口縁部ハケ→横ナデ。 内面：口縁部ナデ→横ナデ。		11	
2㎜以下の長石・チャート・石英含む	外面：体部磨滅。口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		11	
1㎜大の長石含む	外面：口縁部回転ナデ→天井部回転ヘラ削り。 内面：口縁部～天井部回転ナデ。		11	65
1㎜以下の長石含む	外面：脚部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。		11	
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：口縁部ハケ。 内面：底部～口縁部ナデ→口縁部横ナデ。		11	
1～2㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：脚部ヘラミガキ→体部ヘラミガキ。 内面：脚部ナデ。体部ヘラミガキ。	円孔（径7㎜）	11	66
1㎜大の長石・チャート・石英・雲母多く含む	外面：底部～体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部ナデ→口縁部ナデ・横ナデ。	体部外面煤付着 二次焼成痕	11	66
1～2㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：体部叩き→ナデ。 内面：底部～体部ナデ。	底部に木葉文	12	66
1～2㎜大の長石・クサリレキ・石英・チャート含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：頸部ナデ→口縁部横ナデ。		12	
0.5～4㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：脚部ハケ。 内面：磨滅。	円孔（径8㎜）	12	66
1～2㎜大のチャートわずかに含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：頸部ヘラナデ→口縁部横ナデ。		12	
1㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：体部叩き→頸部～体部ハケ→頸部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部ハケ→横ナデ。		12	66
1㎜大の石英・チャート多量に含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		12	
1～2㎜大の石英・チャート・長石多く含む	外面：体部叩き→ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラナデ→口縁部ハケ。	口縁部・体部外面煤付着	12	66
3㎜大の長石・チャート多く含む	外面：体部叩き。 内面：磨滅。		12	
1～2㎜大の石英・チャート多く含む	外面：体部～口縁部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラナデ→口縁部横ナデ。	外面煤付着	12	67
1～2㎜大のチャート他多く含む	外面：体部叩き。 内面：磨滅。		12	
5㎜以下のチャート・長石多く含む	外面：底部～体部叩き→底部横ナデ。 内面：底部～体部指オサエ・ヘラナデ。		12	
1～2㎜大のチャートわずかに含む	外面：体部叩き。 内面：底部～体部ヘラナデ。		12	

出土土器観察表 12

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
276	B区	SD 06	弥生	甕				4.90	3.90	底部 1/3		灰黄～浅黄橙
277	B区	SD 06	弥生	高坏				14.50	3.65	脚部 1/4		暗灰黄～にぶい橙
278	B区	SD 06	弥生	鉢		4.00		7.70	3.10	台部完存		浅黄橙
279	B区	SD 06	土師器	椀	12.20				3.90	1/2		にぶい黄橙～にぶい橙
280	B区	SD 06	須恵器	杯H蓋	11.00				2.80	1/7	普通	灰～灰白
281	B区	SD 06	須恵器	杯H蓋	13.40				4.20	2/3	不良	灰白
282	B区	SD 06	須恵器	杯H蓋	13.00				3.75	口縁部 1/12	普通	明青灰～青灰
283	B区	SD 06	須恵器	杯H蓋	12.10				3.10	1/3	普通	灰
284	B区	SD 06	須恵器	高杯	14.50				4.55	1/4	やや不良	黄灰～灰褐
285	B区	SD 06	須恵器	高杯				12.00	6.85	脚部 1/4	普通	灰～灰白
286	B区	SD 06	須恵器	高杯		4.20			5.80	脚部わずか	普通	灰
287	B区	SD 06	須恵器	杯H	15.00				2.80	口縁部わずか	不良	灰白
288	B区	SD 06	須恵器	杯H	11.55				2.70	口縁部 1/7	やや不良	灰白
289	B区	SD 06	須恵器	杯H	11.50				3.20	3/4	普通	灰褐
290	B区	SD 06	須恵器	杯H	11.60				2.80	口縁部わずか	普通	灰白
291	B区	SD 06	須恵器	杯H	11.90				3.90	2/3	不良	灰白
292	B区	SD 06	須恵器	杯H	11.80				3.60	1/4	普通	灰白
293	B区	SD 06	須恵器	杯H	10.30				3.50	1/4	普通	灰
294	B区	SD 06	須恵器	甕	17.00	14.40	29.00		16.75	口縁部 1/3	不良	淡黄
295	B区	SD 06	須恵器	壺	6.50	7.20			3.80	口縁部～体部わずか	普通	灰白
296	B区	SD 06	須恵器	壺			12.00		5.80	体部 1/2	普通	灰
297	B区	SB 10－P 16	弥生	壺				3.50	2.40	底部 2/3		灰黄褐
298	B区	SB 10－P 16	弥生	ミニチュア	3.55				2.00	底部 1/2		暗灰～灰黄
299	B区	包含層	須恵器	杯H蓋	13.50				3.70	口縁部 1/9	やや不良	灰白
300	B区	包含層	須恵器	杯H蓋	13.80				3.70	口縁部 1/7	普通	灰

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1～2㎜大の石英・長石多く含む	外面：体部叩き。 内面：底部～体部ヘラミガキ。		12	
1～2㎜大のチャート・石英多く含む	外面：磨滅。 内面：脚部横ナデ。		12	
7㎜以下の砂粒多く含む	外面：台部横ナデ。 内面：台部ナデ。	円孔（径5.5㎜）	12	67
1㎜以下の長石・チャート・石英含む	外面：底部～体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		12	67
1㎜大の砂粒多く含む	外面：天井部回転ヘラ削り→ナデ→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		12	
1㎜大の長石・チャート含む	外面：口縁部～天井部回転ナデ→天井部ヘラ切り→ナデ。 内面：口縁部～天井部回転ナデ。		12	67
0.5～2㎜大の石英・チャート・長石含む	外面：天井部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		12	
1㎜大の長石わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		12	67
1㎜大の長石多く含む	外面：体部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ→体部ナデ。		12	
1㎜大の砂粒わずかに含む	外面：脚部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。		12	67
0.5～1㎜大の石英・チャート・長石含む	外面：脚部～体部回転ナデ。 内面：体部回転ナデ。		12	
0.5㎜大の石英・長石含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		12	
1㎜大の砂粒多く含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		12	
1㎜以下の長石含む	外面：口縁部回転ナデ→底部回転ヘラ削り。 内面：口縁部～底部回転ナデ。		12	67
0.5㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		12	
0.5㎜大の長石含む	外面：口縁部～体部回転ナデ→底部ヘラ切り。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		12	67
1㎜大の長石含む	外面：口縁部～底部回転ナデ→底部ヘラ切り。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		12	68
1㎜大の砂粒わずかに含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		12	
1㎜大の砂粒わずかに含む	外面：体部叩き→カキメ→口縁部回転ナデ。 内面：体部当具痕→口縁部回転ナデ。		12	68
0.5㎜大の石英含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。	重ね焼痕あり	13	68
1㎜以下の長石含む	外面：回転ナデ→体部下半静止ヘラ削り。 内面：回転ナデ。		13	68
1～2㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部ハケ→ヘラミガキ。 内面：底部～体部ハケ。		13	
0.5～2㎜大の長石・石英・チャート含む	外面：底部～口縁部指オサエ。 内面：底部～口縁部指オサエ。		13	68
1㎜大の砂粒多く含む	外面：天井部回転ヘラ切り→ナデ→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ→天井部ナデ。		13	68
1㎜大の砂粒多く含む	外面：天井部回転ヘラ削り→ナデ→体部～口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		13	68

出土土器観察表 13

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色調
301	B区	包含層	須恵器	杯H	13.15				4.00	口縁部 1/5	普通	灰～灰白
302	B区	包含層	須恵器	杯H	13.00				4.30	ほぼ完存	普通	灰白
303	B区	包含層	須恵器	杯H	13.85				2.70	口縁部 1/5	普通	灰白
304	B区	包含層	須恵器	高杯		3.20		8.20	4.70	脚端部 1/4 脚部～杯部ほぼ完存	普通	灰白
305	B区	包含層	須恵器	杯B				11.20	2.10	底部 1/4	普通	灰～青灰
306	B区	包含層	須恵器	椀				7.00	2.10	底部 1/3	普通	灰～明青灰
307	B区	包含層	土製品	羽口						一部		浅黄橙
308	B区	包含層	弥生	高坏		3.60		12.50	8.15	脚部 1/4		にぶい黄褐～褐灰
309	B区	基盤層	弥生	壺	20.40	12.70			8.50	口縁部 1/3		浅黄橙
310	B区	基盤層	弥生	壺					8.10	体部わずか		橙
311	B区	基盤層	弥生	甕	20.80	18.20			4.30	口縁部わずか		にぶい黄橙
312	C区	SH 26	須恵器	杯H蓋	12.00				3.80	口縁部 1/2 弱	普通	灰
313	C区	SH 26	須恵器	杯H蓋	11.55				3.80	口縁部 1/2 強	普通	灰白
314	C区	SH 26	須恵器	杯蓋					1.55	つまみほぼ完存	普通	灰白
315	C区	SH 26	須恵器	杯H	11.60				3.25	口縁部 1/5	普通	灰白
316	C区	SH 26	須恵器	杯H					3.75	体部 ～底部 1/4	普通	灰白
317	C区	SH 26	須恵器	杯H	13.30				3.25	口縁部 1/3	普通	灰白
318	C区	SH 26	須恵器	杯H					3.50	口縁部わずか	不良	灰白
319	C区	SH 26	須恵器	杯H	9.30				3.20	口縁部 1/2 底部 3/4	普通	灰白～黄灰
320	C区	SH 26	須恵器	杯H	10.65				2.10	口縁部 1/6	普通	灰白～灰
321	C区	SH 26	須恵器	高杯	13.10	2.40		8.40	6.50	杯部 1/5 脚部 6/7	普通	灰白
322	C区	SH 26	須恵器	高杯		4.60			7.60	脚柱部 1/2	普通	青灰
323	C区	SH 26	須恵器	甕	19.80	16.60	43.00		46.15	体部 1/2 底部完存	普通	灰～灰白
324	C区	SH 26	須恵器	横瓶	10.60	9.20	32.10		21.15	口縁部 3/4	やや不良	灰白
325	C区	SH 27	弥生	壺	23.00	15.40			10.20	口縁部 1/4		橙

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1～2㎜大の長石わずかに含む	外面：底部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		13	
1㎜大の長石やや多く含む	外面：口縁部回転ナデ→底部回転ヘラ削り。 内面：口縁部～底部回転ナデ→底部仕上げナデ。		13	69
1㎜大の砂粒わずかに含む	外面：底部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		13	
1㎜大の長石含む	外面：脚部回転ナデ。杯部下半ヘラ削り→杯部上半回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。杯部回転ナデ→仕上げナデ。	脚高 3.20㎝	13	69
1㎜大のチャート多く含む	外面：底部～体部回転ナデ。 内面：底部～体部回転ナデ。		13	
1㎜大の長石わずかに含む	外面：体部回転ナデ。 内面：底部～体部回転ナデ→底部ナデ。	底部回転糸切り	13	69
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：ヘラ削り→ナデ。	復元径 6.5㎝（外）	13	69
0.5～1.5㎜大のチャート・長石含む	外面：脚部ハケ→ミガキ。脚端部横ナデ。 内面：脚部ハケ。		13	69
1～2㎜大の長石・チャート多く含む	外面：口頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：口頸部ナデ→口縁部横ナデ。		13	69
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部ナデ。 内面：体部ナデ。		13	69
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	外面煤付着	13	
微細な砂粒多く含む	外面：天井部回転ヘラ削り→ナデ→体部～口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		14	71
1～2㎜大の砂粒多く含む	外面：天井部回転ヘラ切り→ナデ→体部～口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ→天井部ナデ。		14	71
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：つまみ回転ナデ。天井部回転ヘラ削り。 内面：天井部当具痕→回転ナデ。		14	
1～2㎜大の砂粒多く含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		14	
1～5㎜大の砂粒含む	外面：底部回転ヘラ切り→ナデ→体部～口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		14	
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：底部ヘラ切り→ナデ→体部～口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ→底部ナデ。		14	71
1～2㎜大の砂粒多く含む	外面：底部回転ヘラ切り→体部回転ヘラ削り→ナデ→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		14	
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：底部回転ヘラ切り→ナデ→体部～口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ→底部ナデ。		14	71
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		14	
1㎜以下の砂粒多く含む	外面：脚部～口縁部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。杯部回転ナデ。		14	71
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：脚柱部回転ナデ。 内面：脚柱部横ナデ。		14	71
1㎜以下の砂粒多量に含む	外面：体部叩き→カキメ→口縁部回転ナデ。 内面：体部当具痕→口縁部回転ナデ。		14	71
0.5～1㎜大の砂粒含む	外面：体部叩き→ナデ→口縁部回転ナデ。 内面：体部当具痕→口縁部回転ナデ。		14	72
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：口頸部横ナデ。 内面：体部指ナデ→頸部ナデ→口頸部ハケ→ヘラミガキ。		15	72

出土土器観察表 14

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
326	C区	SH 27	弥生	壺	19.60	15.30			12.80	口頸部ほぼ完存		にぶい橙
327	C区	SH 27	弥生	壺	11.50	9.80			5.40	口縁部 1/6		浅黄
328	C区	SH 27	弥生	小型丸底壺	9.80	6.90	7.90		9.40	2/3		橙
329	C区	SH 27	弥生	甕				4.00	2.10	底部 1/2		にぶい橙
330	C区	SH 27	弥生	甕	16.50				2.80	口縁部 1/4		浅黄橙
331	C区	SH 27	弥生	甕	14.00	11.50			8.10	口縁部～体部 1/3		浅黄橙
332	C区	SH 27	弥生	甕	14.00	10.40			5.20	口縁部 1/4 弱		橙
333	C区	SH 27	弥生	甕	11.80	10.30	11.60		6.70	口縁部 1/6		にぶい橙
334	C区	SH 27	弥生	鉢	13.60			3.70	6.30	口縁部 1/8 底部完存		浅黄橙
335	C区	SH 27	弥生	鉢	13.80				4.10	2/3		にぶい黄橙
336	C区	SH 27	弥生	鉢				3.85	2.80	底部 2/3		灰白～浅黄橙
337	C区	SH 27	弥生	鉢				2.70	2.30	底部完存		明赤褐～橙
338	C区	SH 27	弥生	蓋					2.35	つまみ 2/3		灰白
339	C区	SH 27	弥生	ミニチュア	4.10	3.00	4.30		6.30	口縁部 1/4 底部完存		浅黄橙
340	C区	SH 27	弥生	脚台		4.60		9.50	3.70	脚部完存		浅黄橙
341	C区	SH 27	弥生	高坏		2.90		9.05	6.10	脚部 2/3		浅黄橙
342	C区	SH 28	弥生	壺	18.60	13.80			8.30	口縁部 1/8		橙
343	C区	SH 28	弥生	壺	17.30	6.60			6.30	口頸部 3/4		浅黄橙
344	C区	SH 28	弥生	壺	16.70	10.20			10.70	口縁部 1/6 体部 1/2		浅黄橙
345	C区	SH 28	弥生	壺	19.60	15.55			11.75	口縁部 1/2		にぶい黄橙～浅黄橙
346	C区	SH 28	弥生	壺	14.40	9.65			5.95	口縁部 1/3		浅黄橙～灰白
347	C区	SH 28	弥生	壺	15.00	12.40			6.10	口縁部 1/5		黄灰
348	C区	SH 28	弥生	壺	7.35	6.25	9.80	1.35	9.35	口縁部 1/8 底部完存		にぶい黄橙～灰白
349	C区	SH 28	弥生	壺	7.65	5.80			3.15	口縁部 4/5		浅黄橙～灰白
350	C区	SH 28	弥生	壺				3.70	2.40	底部完存		灰黄～浅黄橙

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1㎜以下の長石、微細な雲母含む	外面：口縁部ハケ→口頸部横ナデ。 内面：頸部指ナデ→口縁部下半ナデ→口縁部上半横ナデ。	口縁端部煤付着	15	72
0.5～2㎜大の石英・チャート・長石含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		15	
1㎜以下のチャート・長石・石英含む	外面：底部～体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部ナデ→口縁部横ナデ。		15	72
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部叩き→ナデ。 内面：底部～体部ナデ。		15	
0.5～1㎜大の長石・石英・チャート含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		15	
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→口縁部横ナデ。		15	72
0.5～1㎜大の石英・チャート・長石含む	外面：体部～口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→ナデ→口縁部横ナデ。		15	73
1㎜以下の長石・チャート・角閃石やや多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部～口縁部ハケ→肩部ナデ。	口縁部内面煤付着	15	73
1～2㎜大の長石・チャート多く含む	外面：体部ヘラナデ→口縁部横ナデ。 内面：底部～口縁部ハケ。		15	73
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：底部ハケ→体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：底部～口縁部ヘラミガキ。口縁部横ナデ。		15	73
0.5㎜大の石英・チャート・長石わずかに含む	外面：体部ナデ。 内面：底部～体部ナデ。		15	
0.5～1㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		15	
0.5～1㎜大の石英・チャート・長石含む	外面：つまみ指オサエ→天井部ナデ。 内面：磨滅。	つまみ径3.30㎝	15	
1㎜大の長石・チャート含む	外面：底部～体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部指ナデ→口縁部横ナデ。		15	73
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：脚部ヘラミガキ。 内面：脚部ナデ。体部不明。		15	73
0.5～3㎜大の石英・チャート・長石含む	外面：脚部ヘラミガキ。脚部下半横ナデ。 内面：脚部ヘラナデ→脚端部横ナデ。体部ナデ。		15	
1㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：頸部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		15	73
1～2㎜大のチャート・長石・石英含む	外面：頸部ハケ→口縁部ヘラミガキ→横ナデ。 内面：頸部ナデ→口縁部ヘラミガキ。		15	74
1～3㎜大の長石・チャート多く含む	外面：体部ハケ→ヘラミガキ。口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ・指ナデ。頸部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		15	74
0.5～2㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部叩き→頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→頸部ハケ→口縁部横ナデ。	胎土分析	15	74
0.5～3㎜大のチャート・長石・石英含む	外面：口頸部ハケ→口縁端部横ナデ。 内面：頸部ハケ→ナデ。		15	74
1～2㎜大の石英・チャート・長石わずかに含む	外面：口縁部横ナデ→口縁部ヘラミガキ。 内面：口縁部横ナデ→口縁部ヘラミガキ。	胎土分析	15	
0.5～4㎜大の石英・長石・チャート・雲母含む	外面：底部ナデ→体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。	胎土分析	15	74
0.5㎜～3㎝大のチャート・長石・石英含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		15	74
1㎜大の石英・長石・クサリレキ含む	外面：体部叩き→ヘラナデ。 内面：底部～体部ハケ。		15	

出土土器観察表 15

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色調
351	C区	SH 28	弥生	壺	14.10	9.70	25.90		20.40	口縁部完存 体部 1/2		浅黄橙
352	C区	SH 28	弥生	壺	12.30	9.70	22.80		14.30	口縁部 2/3 体部 1/3		灰白
353	C区	SH 28	弥生	壺			25.40	4.40	18.20	体部～底部ほぼ完存		にぶい黄橙～浅黄橙
354	C区	SH 28	弥生	壺		10.60	21.10	4.70	20.70	底部完存 体部 3/4		にぶい黄橙
355	C区	SH 28	弥生	壺				3.20	4.10	底部完存		灰白
356	C区	SH 28	弥生	甕	15.80	14.10	24.30		18.30	口縁部完存 体部 1/3		にぶい黄橙
357	C区	SH 28	弥生	甕	17.50	15.40	25.60	4.70	28.40	ほぼ完存		にぶい橙
358	C区	SH 28	弥生	甕	16.65	14.20	26.05		11.90	口縁部 3/4 体部 1/5		にぶい黄橙～淡赤橙
359	C区	SH 28	弥生	甕	24.00	22.00	27.00	5.00	24.30	口縁部 1/6 底部完存		にぶい橙～にぶい黄橙
360	C区	SH 28	弥生	甕	15.00	12.60	23.40	4.50	26.80	口縁部 1/3 底部完存		橙～にぶい黄橙
361	C区	SH 28	弥生	甕	17.40	14.40	25.70	2.60	30.10	ほぼ完存		浅黄橙
362	C区	SH 28	弥生	甕	16.00	13.60			9.50	口縁部 1/2		淡黄～灰
363	C区	SH 28	弥生	甕	15.70	13.30	22.60		18.60	口縁部 ～体部 4/5		浅黄橙
364	C区	SH 28	弥生	甕	15.50	13.30	23.20	4.50	26.80	ほぼ完存		にぶい黄橙
365	C区	SH 28	弥生	甕	16.00	13.00	19.20		12.70	口縁部 1/8 体部 1/4		にぶい黄橙
366	C区	SH 28	弥生	甕	16.80	14.20	21.20		19.80	口縁部 2/3 体部ほぼ完存		浅黄橙
367	C区	SH 28	弥生	甕	16.80	13.40	22.40	4.50	26.20	体部 1/3 底部完存		にぶい黄橙
368	C区	SH 28	弥生	甕	14.20	12.00	21.00	4.00	26.30	上半部ほぼ完存 下半部 1/2		浅黄橙
369	C区	SH 28	弥生	甕	15.20	12.30	22.10		23.20	口縁部 ～体部 1/4		にぶい黄橙～浅黄橙
370	C区	SH 28	弥生	甕	15.90	13.00	20.70		18.70	口縁部ほぼ完存 体部 2/3		にぶい橙
371	C区	SH 28	弥生	甕	15.90	13.30	21.40		14.00	口縁部ほぼ完存 体部 2/3		浅黄橙
372	C区	SH 28	弥生	甕	15.00	12.70	22.20		20.80	口縁部 2/3 体部ほぼ完存		にぶい黄橙
373	C区	SH 28	弥生	甕	15.50	12.60	21.50		19.80	口縁部 ～体部 1/3		にぶい黄橙
374	C区	SH 28	弥生	甕	13.20	11.20	21.00		17.30	口縁部 1/3		浅黄橙
375	C区	SH 28	弥生	甕	13.70	12.00	19.00		15.50	口縁部 3/4 体部 1/2		浅黄橙

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1～2㎜大の長石・チャート多く含む	外面：体部～頸部ハケ→体部ヘラミガキ・口縁部横ナデ。 内面：体部下半ナデ・体部上半指オサエ→口頸部横ナデ。		15	74
1㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		16	75
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：底部～体部ハケ→体部ヘラミガキ・底部指ナデ。 内面：底部～体部ハケ→底部ナデ。		16	75
1～2㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：体部叩き→ハケ。 内面:体部ハケ→頸部横ナデ。	外面煤付着・被熱により赤変	16	75
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部叩き→ヘラミガキ。 内面：底部～体部ハケ。		16	
1～2㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部叩き→ハケ・口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	外面煤付着	16	75
1～3㎜大の長石・チャート・石英・クサリレキ含む	外面：体部叩き→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。	外面被熱により赤変煤付着　胎土分析	16	76
0.5～2㎜大の石英・チャート・長石含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。		16	76
1～2㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：底部～頸部叩き→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着被熱により赤変	16	76
1～2㎜大の長石・石英・チャート多く含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	外面下半煤付着	16	77
1～2㎜大のチャート・長石含む	外面：体部叩き→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着･赤変･内面下半焦付き	17	77
4㎜以下のチャート・長石多く含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：磨滅。	胎土分析	17	
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	17	77
1㎜大の石英・チャート・長石含む	外面：体部叩き→体部上半ヘラミガキ・口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。	外面煤付着 胎土分析	17	78
1～2㎜大の長石・チャート・石英やや多く含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部外面被熱により赤変	17	78
1～2㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部叩き→体部上半ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着・赤変	17	78
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部叩き→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部下半～中位煤付着　胎土分析	17	78
1～2㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着 内面焦付き	17	79
1～2㎜橙のチャート・長石多く含む	外面：体部叩き→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→肩部ナデ→口縁部横ナデ。	外面煤付着	18	79
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面；体部叩き→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部下半外面被熱→赤変　煤付着　胎土分析	18	79
1㎜大のチャート・長石・石英含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	外面煤付着	18	79
1～2㎜大のチャート・長石・石英・雲母多く含む	外面：体部叩き→ハケ・口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部下半外面煤付着	18	79
1～3㎜大の長石･チャート･石英・クサリレキ多く含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	18	80
1㎜大の長石・石英・チャート含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	口縁部～体部煤付着赤変　胎土分析	18	80
1～2㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部外面下半被熱により剥離	18	80

出土土器観察表 16

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
376	C区	SH 28	弥生	甕	14.90	12.40	19.50		13.40	口縁部ほぼ完存 体部 2/3		浅黄橙
377	C区	SH 28	弥生	甕	12.70	11.00	17.30		12.60	口縁部 ～体部 2/3		にぶい黄橙
378	C区	SH 28	弥生	甕	18.30	14.70	20.80		11.40	口縁部 1/10 体部 1/6		にぶい橙～ にぶい黄橙
379	C区	SH 28	弥生	甕	14.20	11.40	19.80		9.10	口縁部 1/4		にぶい黄橙
380	C区	SH 28	弥生	甕	13.35	10.80	16.50		10.70	口縁部 3/4		褐灰～浅黄橙
381	C区	SH 28	弥生	甕	13.60	11.60	17.60		14.60	口縁部 1/2 体部 3/4		にぶい橙
382	C区	SH 28	弥生	甕	13.60	11.70	17.70	2.60	20.00	上半部ほぼ完存 下半部 3/4		浅黄橙
383	C区	SH 28	弥生	甕	12.60	10.80	17.10		16.05	口縁部 1/2 体部 3/5		褐灰～にぶい橙
384	C区	SH 28	弥生	甕	13.60	11.00	15.50	4.10	15.30	口縁部～体部 1/2 底部ほぼ完存		にぶい橙
385	C区	SH 28	弥生	甕	13.60	11.00	14.70	2.80	15.10	ほぼ完存		浅黄橙
386	C区	SH 28	弥生	甕	10.60	9.00	12.60		6.50	口縁部 1/12		灰白～灰黄褐
387	C区	SH 28	弥生	甕	9.90	8.90	11.80	1.30	13.10	ほぼ完存		浅黄橙
388	C区	SH 28	弥生	甕	10.70	9.40	12.00		11.60	口縁部 1/8 底部完存		浅黄橙
389	C区	SH 28	弥生	甕					6.55	底部 ～体部わずか		褐灰
390	C区	SH 28	弥生	甕				4.25	8.85	体部 2/5 底部完存		灰白～暗灰
391	C区	SH 28	弥生	甕				4.20	4.20	底部完存		にぶい黄橙
392	C区	SH 28	弥生	甕				3.90	2.60	底部完存		浅黄橙
393	C区	SH 28	弥生	甕	15.50	14.00	24.60	5.00	30.00	口縁部 1/4 底部 1/2		浅黄橙
394	C区	SH 28	弥生	甕			21.30	4.50	16.80	体部～底部ほぼ完存		にぶい黄橙
395	C区	SH 28	弥生	甕				4.20	11.30	底部 3/4		灰白～にぶい橙
396	C区	SH 28	弥生	甕				4.50	13.35	体部 ～底部完存		灰白
397	C区	SH 28	弥生	甕				3.90	7.70	底部完存		灰黄褐～褐灰
398	C区	SH 28	弥生	甕				3.50	7.65	底部完存		にぶい黄橙～褐灰
399	C区	SH 28	弥生	甕				4.50	5.90	底部完存		にぶい黄橙
400	C区	SH 28	弥生	甕	15.00	12.70	22.10		27.10	口縁部～体部上半 1/2 体部下半～底部ほぼ完存		にぶい橙

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1㎜大のチャート・長石含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着・被熱により赤変	18	80
1～2㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部叩き→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部外面被熱→赤変・煤付着	18	80
1～2㎜大の長石・チャート多く含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	外面被熱により赤変	18	
1～3㎜大の長石・チャートやや多く含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	18	81
0.5～1.5㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。	口縁部外面煤付着	18	81
1～2㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→肩部ナデ→口縁部横ナデ。	体部下半被熱により赤変　胎土分析	19	81
1～2㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：体部叩き→体部上半ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	19	81
0.5～3㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：体部叩き→ハケ・口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。		19	81
1～2㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部叩き→体部上半ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着 胎土分析	19	81
1～2㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部磨滅。口縁部横ナデ。	体部外面被熱により赤変・剥離・煤付着	19	82
1～2㎜大のチャート・石英多く含む	外面：体部叩き→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		19	82
1～2㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	底部中央穿孔（径8㎜）	19	82
1～2㎜大のチャート・長石多く含む	外面：体部下半叩き→ナデ。体部上半～口縁部ナデ。 内面：体部下半ナデ。体部上半～口縁部磨滅。		19	
1㎜大の石英含む	外面：体部叩き→ハケ。 内面：体部ハケ→ナデ。		19	
0.5～2㎜大の石英・チャート・長石含む	外面：体部叩き→底部ナデ。 内面：体部ハケ→底部ナデ。	底部木葉文	19	82
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：体部叩き。 内面：体部ハケ。	底部木葉文	19	82
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：体部ナデ。 内面：体部ハケ。		19	
1～2㎜大のチャート・長石・石英含む	外面：体部叩き→ナデ・口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。	外面煤付着・内面下半焦付き	19	83
1～2㎜大のチャート・長石含む	外面：体部叩き→ハケ。 内面：体部ハケ。	体部外面煤付着	19	83
0.5～3㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：体部叩き。 内面：体部ハケ→ナデ。		19	83
1～2㎜大の砂粒含む	外面：体部叩き→ハケ。 内面：ハケ。	体部外面被熱により赤変・煤付着	19	84
0.5～2㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：体部叩き。 内面：体部ハケ。	体部外面煤付着	19	83
0.5～4㎜大のチャート・長石・石英含む	外面：体部叩き→底部ナデ。 内面：底部指オサエ→体部ナデ。		20	84
1～2㎜大の長石・チャート・石英やや多く含む	外面：体部叩き。 内面：体部ハケ。	外面被熱により赤変	20	
1㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：底部～体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部ヘラ削り→底部ナデ・口縁部横ナデ。	山陰系・胎土分析・外面煤付着・赤変	20	84

出土土器観察表 17

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
401	C区	SH 28	弥生	鉢	32.40	29.50	30.60	6.20	26.50	ほぼ完存		にぶい黄橙
402	C区	SH 28	弥生	鉢	23.40	21.60	23.60	5.10	20.70	ほぼ完存		浅黄橙
403	C区	SH 28	弥生	鉢	24.40			5.30	11.20	ほぼ完存		灰黄
404	C区	SH 28	弥生	鉢	20.00			4.70	11.60	口縁部 1/3 底部完存		にぶい黄橙
405	C区	SH 28	弥生	鉢	16.50			4.95	7.25	口縁部 1/4 底部完存		灰白～浅黄橙
406	C区	SH 28	弥生	鉢		4.10		4.50	3.80	底部完存		にぶい黄橙～灰黄褐
407	C区	SH 28	弥生	鉢	13.80				3.60	口縁部 1/3		浅黄橙
408	C区	SH 28	弥生	鉢	12.90			3.40	6.80	口縁部 1/6 底部完存		浅黄橙
409	C区	SH 28	弥生	鉢	13.60			3.15	6.05	口縁部 1/4 底部完存		浅黄橙～淡黄
410	C区	SH 28	弥生	鉢	13.60			3.40	5.80	口縁部 1/8 口縁部完存		浅黄
411	C区	SH 28	弥生	高坏	12.75	3.33		16.85	10.30	口縁部 4/5 脚部 1/4		灰白～浅黄橙
412	C区	SH 28	弥生	高坏	9.80	2.20		13.80	9.15	口縁部 1/4 脚部 1/4		橙
413	C区	SH 28	弥生	高坏				15.50	3.35	裾部 1/4		にぶい黄橙
414	C区	SH 28	弥生	高坏	21.80	3.30		12.80	17.00	口縁部 1/4 筒部完存		灰白
415	C区	SH 28	弥生	高坏	19.20	3.60			13.30	口縁部～筒部 ほぼ完存		にぶい黄橙
416	C区	SH 28	弥生	高坏	18.90	3.35			13.70	口縁部 1/6 筒部完存		灰白
417	C区	SH 28	弥生	器台	18.10	3.30			12.30	口縁部 2/3		にぶい黄橙
418	C区	SH 28	弥生	高坏		3.70		13.95	8.70	脚部ほぼ完存		灰白～にぶい黄橙
419	C区	SH 28	弥生	壺					5.00	頸部 1/6		浅黄橙～にぶい橙
420	C区	SH 28	弥生	壺	18.50	10.20	25.00	5.10	29.30	口頸部 底部ほぼ完存 体部 1/4		橙
421	C区	SH 28	弥生	壺				5.10	8.60	底部完存		にぶい黄橙
422	C区	SH 28	弥生	壺				4.40	3.50	底部完存		橙～浅黄橙
423	C区	SH 28	弥生	壺	15.60	10.90			5.80	口縁部 1/4		にぶい黄橙
424	C区	SH 28	弥生	壺	15.50	11.00			4.40	口縁部 1/6		にぶい橙
425	C区	SH 28	弥生	壺	12.10	9.00			4.70	口縁部 1/6		浅黄橙

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1～2㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部叩き→体部上半ハケ→頸部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部ハケ→体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。	胎土分析	20	85
1～2㎜大のチャート・長石多く含む。	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	胎土分析	20	85
1～2㎜大のチャート・石英・長石多く含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。	外面一部煤付着 胎土分析	20	84
1～2㎜大のチャート・長石多く含む	外面：体部叩き→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	底部穿孔（径9㎜）	20	84
0.5～4㎜大の石英・チャート・長石・雲母多く含む	外面：体部～口縁部叩き→底部ナデ。 内面：底部ハケ。体部～口縁部磨滅。		20	86
1㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：脚部指オサエ→体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ハケ。		20	
1㎜大の長石・チャートやや多く含む	外面：体部ナデ。 内面：体部ハケ。		20	
1㎜大のチャート含む	外面：剥離。 内面：底部～口縁部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		20	86
0.5～4㎜大のチャート・長石・石英含む	外面：体部～口縁部ナデ→口縁端部横ナデ。 内面：底部～口縁部ナデ。	胎土分析	20	86
1～2㎜大の長石・チャート多く含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		20	86
0.5～3㎜大の長石・石英・チャート含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。	円孔（径1㎝）	20	86
1～2㎜大の石英・チャートやや多く含む	外面：脚部～口縁部ヘラミガキ→口縁端部横ナデ。 内面：体部～口縁部ヘラミガキ。	円孔（径1㎝）	20	86
1～2㎜大のチャート含む	外面：脚部横ナデ→ヘラミガキ。 内面：脚部ハケ。	円孔（径1.5cm）	20	
1～2㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：筒部～口縁部ヘラミガキ→口縁端部横ナデ。 内面：脚部ナデ。口縁部ヘラミガキ。	円孔（径1.1cm）	21	87
1～2㎜大の石英・チャート・長石・雲母含む	外面：口縁部～筒部ヘラミガキ。 内面：口縁部ヘラミガキ。脚部ナデ。	円孔（径9.5㎜）	21	87
1～2㎜大のチャート・長石・石英含む	外面：筒部～口縁部ヘラミガキ→口縁端部横ナデ。 内面：口縁部ヘラミガキ。		21	87
1㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：筒部～口縁部ヘラミガキ→口縁端部横ナデ。 内面：脚部ナデ。口縁部ヘラミガキ→口縁端部横ナデ。	円孔（径1㎝）	21	87
0.5～3㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：脚裾部ハケ→脚筒部ヘラミガキ。 内面：ナデ。	円孔（径1.3cm）	21	88
0.5～1㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：頸部横ナデ。 内面：頸部ナデ。		21	
1～2㎜大の長石・チャート多く含む	外面：底部～頸部ハケ→体部以下ナデ→ヘラミガキ・頸部～口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ナデ→口頸部横ナデ。"	図上復元	21	88
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部ナデ。 内面：底部～体部ハケ。		21	88
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部叩き→ヘラミガキ・ハケ。 内面：底部～体部ハケ。		21	
1～2㎜大のチャート・石英・長石わずかに含む	外面：口頸部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。 内面：口頸部ヘラナデ→口縁部横ナデ。		21	88
1㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：口頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：口頸部ハケ→口縁部横ナデ。		21	88
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：頸部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。		21	89

出土土器観察表 18

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
426	C区	SH 28	弥生	壺	11.00	7.80			4.00	口縁部 1/3		橙
427	C区	SH 28	弥生	壺	14.60	9.80			5.20	口縁部 1/7		浅黄橙
428	C区	SH 28	弥生	壺	14.00	11.20			7.90	口縁部 1/4		にぶい橙
429	C区	SH 28	弥生	壺	7.45	6.85	8.80	2.40	9.20	体部 2/3 底部 4/5		黄橙～橙
430	C区	SH 28	弥生	壺			27.20	4.40	12.50	底部完存		黒褐～浅黄
431	C区	SH 28	弥生	甕	20.00	16.00			4.20	口縁部わずか		にぶい橙
432	C区	SH 28	弥生	甕	17.40	15.00			7.10	口縁部 1/8		にぶい黄橙
433	C区	SH 28	弥生	甕		13.80	25.10		17.35	体部 1/6		淡黄～灰黄褐
434	C区	SH 28	弥生	甕	16.00	13.80	19.00		8.60	口縁部 1/3		橙
435	C区	SH 28	弥生	甕	16.20	14.00			5.90	口縁部 1/6		淡黄
436	C区	SH 28	弥生	甕	14.60	12.30	19.40		9.05	口縁部 3/5		浅黄橙～灰黄褐
437	C区	SH 28	弥生	甕	16.40	14.00	21.70		24.00	体部 1/2 底部完存		浅黄橙
438	C区	SH 28	弥生	甕	15.80	13.50	16.20		10.60	口縁部 1/8 体部 1/3		にぶい黄橙～にぶい橙
439	C区	SH 28	弥生	甕	14.20	13.00			4.90	口縁部 1/4		浅黄橙
440	C区	SH 28	弥生	甕	12.80	11.00	16.00		7.30	口縁部わずか 体部 1/6		にぶい橙
441	C区	SH 28	弥生	甕	14.40	12.60			4.90	口縁部 1/4		にぶい橙～灰白
442	C区	SH 28	弥生	甕	13.00	11.00	14.00		5.70	口縁部 1/4		浅黄橙
443	C区	SH 28	弥生	甕	13.00	11.00			3.70	口縁部わずか		にぶい黄橙
444	C区	SH 28	弥生	甕	12.00	9.80	14.20		14.00	ほぼ完存		橙～にぶい黄橙
445	C区	SH 28	弥生	甕	12.30	9.80	15.30		6.90	口縁部 1/6		にぶい橙
446	C区	SH 28	弥生	甕	14.30	12.00	15.80		10.00	口縁部 1/7		浅黄橙
447	C区	SH 28	弥生	甕	8.50	7.90	10.00		4.50	口縁部 1/7		浅黄橙
448	C区	SH 28	弥生	甕					2.20	底部 1/2		にぶい橙
449	C区	SH 28	弥生	甕					2.50	底部 2/3		にぶい黄橙
450	C区	SH 28	弥生	鉢	18.40				11.00	ほぼ完存		淡黄

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
0.5㎜大の長石・チャート含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：頸部磨滅。口縁部横ナデ。		21	
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：磨滅。		21	
1㎜大の長石他わずかに含む	外面：口頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：口頸部ハケ。		21	89
0.5～3㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部磨滅。口縁部指オサエ→ナデ。 内面：底部～体部ナデ→口縁部指オサエ→ナデ。		21	89
0.5～3㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部ヘラナデ。 内面：体部ハケ。		21	89
1㎜以下の長石・チャート・石英含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		22	
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	口縁部外面煤付着	22	
4㎜以下のチャート他多く含む	外面：体部叩き→頸部横ナデ。 内面：体部ハケ。	外面煤付着	22	
1㎜大のチャート含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		22	89
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部磨滅。口縁部横ナデ。		22	89
0.5～1.5㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		22	90
1㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：体部叩き→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	22	90
1～2㎜大の長石･チャート・クサリレキ含む	外面：体部叩き→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ナデ→口縁部ハケ→横ナデ。		22	
1～2㎜大の長石・チャート多く含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部磨滅。口縁部横ナデ。		22	
1～2㎜大のチャート・長石・クサリレキ含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		22	90
1～3㎜大の長石・チャート多く含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部磨滅。口縁部横ナデ。		22	90
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	22	
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。		22	
1～3㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部叩き→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	外面煤付着	22	90
1㎜大のチャート・石英・長石多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部指オサエ→肩部ナデ→口縁部横ナデ。		22	90
1㎜大の長石・チャート多く含む	外面：体部叩き→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		22	91
1㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部磨滅。口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		22	91
1～3㎜大の長石･チャート・クサリレキ含む	外面：底部～体部叩き→ナデ。 内面：底部～体部ナデ。		22	
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：底部～体部叩き。 内面：底部～体部ナデ・指オサエ→ハケ。		22	91
1～2㎜大のチャート・石英多く含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	底部穿孔（径1.10cm）	22	91

出土土器観察表 19

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
451	C区	SH 28	弥生	鉢	11.90			2.90	6.00	口縁部 1/2 底部 2/3		灰白
452	C区	SH 28	弥生	鉢	10.00			3.00	6.50	口縁部 1/3 底部完存		にぶい黄橙
453	C区	SH 28	弥生	鉢	9.80			2.40	5.70	1/2		にぶい黄橙
454	C区	SH 28	弥生	鉢	8.00			2.40	4.00	口縁部 1/4 底部完存		浅黄橙
455	C区	SH 28	弥生	鉢	11.60	10.00			7.50	口縁部 1/6 底部完存		にぶい黄橙
456	C区	SH 28	弥生	鉢	11.60	10.40			6.10	口縁部わずか 体部 1/3		灰白
457	C区	SH 28	弥生	台付鉢	11.80	3.10		6.80	9.30	ほぼ完存		浅黄橙
458	C区	SH 28	弥生	台付鉢	9.00	3.45		6.80	6.80	口縁部 1/4 脚部完存		にぶい橙
459	C区	SH 28	弥生	台付鉢	12.00	4.00		7.80	7.00	口縁部 1/3 脚部 2/3		橙
460	C区	SH 28	弥生	台付鉢		4.30		8.20	5.95	脚部 1/4		褐灰～灰黄褐
461	C区	SH 28	弥生	台付鉢				10.00	4.50	脚部 1/4		にぶい橙
462	C区	SH 28	弥生	台付鉢		4.30		9.70	5.10	裾部 1/2		にぶい橙～浅黄橙
463	C区	SH 28	弥生	台付鉢		3.70		4.20	3.50	底部完存		にぶい橙
464	C区	SH 28	弥生	高坏	20.20				6.00	体部完存		灰黄褐
465	C区	SH 28	弥生	高坏	15.60				5.65	口縁部 1/9		淡黄
466	C区	SH 28	弥生	高坏	17.30				4.40	坏部 1/7		褐灰～黄灰
467	C区	SH 28	弥生	高坏	17.60				5.80	口縁部 1/6		灰黄
468	C区	SH 28	弥生	高坏	16.90				3.45	口縁部 1/9		にぶい赤褐
469	C区	SH 28	弥生	高坏		4.10			8.85	脚柱部ほぼ完存		灰白
470	C区	SH 28	弥生	高坏		4.00			9.30	脚柱部完存		灰黄褐
471	C区	SH 28	弥生	高坏		2.80			9.35	脚柱部完存		灰白
472	C区	SH 28	弥生	高坏				17.20	2.60	脚部 1/5		灰白
473	C区	SH 28	弥生	高坏				16.20	2.50	脚部 1/6		橙
474	C区	SH 28	弥生	器台	27.50				2.40	口縁部わずか		浅黄橙
475	C区	SH 28	弥生	器台	17.50				1.55	口縁部 1/12		にぶい橙～灰黄褐

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
0.5～3㎜大のチャート・長石・石英含む	外面：体部磨滅。 内面：底部～口縁部ハケ→口縁部ナデ。		22	91
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：体部ナデ→口縁部指オサエ。 内面：底部～口縁部ナデ→口縁部指オサエ。		22	91
1㎜大の石英・チャート含む	外面：底部～口縁部ナデ→口縁部指オサエ。 内面：底部～口縁部ハケ。		22	91
1㎜大のチャート・長石含む	外面：底部～体部ナデ→口縁部指オサエ→ナデ。 内面：底部～体部ハケ→底部ナデ・口縁部指オサエ→ナデ。		22	92
1～2㎜大の長石・チャート・石英含む。	外面：底部～体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部下半ハケ→体部上半ヘラミガキ→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	23	92
1～3㎜大の長石・チャートわずかに含む	外面：体部ヘラナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		23	92
1㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：脚部ナデ→横ナデ→体部ヘラミガキ→口縁部ハケ→ヘラミガキ→横ナデ。 内面：脚部ナデ→横ナデ。体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。	脚高 2.6cm	23	92
1㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：脚部指ナデ→体部ヘラミガキ。 内面：脚部指ナデ。体部ヘラミガキ。	脚高 2.0cm	23	92
1～3㎜大の長石・チャート含む	外面：脚部～体部指オサエ→体部ヘラミガキ。 内面：脚部ナデ。体部磨滅。	脚高 1.7cm	23	92
0.5～1㎜大のチャート・長石含む	外面：脚部ナデ→体部ハケ→ヘラミガキ。 内面：脚部ナデ。体部ヘラナデ。	脚高 3.05cm	23	93
1㎜大のチャート・長石含む	外面：脚部ハケ。 内面：脚部ナデ。		23	
1㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：脚部ナデ。接合部指オサエ。体部ナデ。 内面：脚部ハケ。体部ナデ。	脚高 3.3cm	23	93
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部ヘラナデ→底部指オサエ。 内面：底部～体部ハケ→ナデ。		23	
1～2㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部～口縁部ハケ→ヘラミガキ→口縁端部横ナデ。 内面：体部～口縁部ハケ→ヘラミガキ。		23	93
6㎜以下のチャート・長石・石英多く含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		23	
1～2㎜大のチャート・長石・石英わずかに含む	外面：体部ハケ。 内面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		23	
0.5㎜以下の長石・チャートわずかに含む	外面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ヘラミガキ→口縁部横ナデ。	口縁部外面煤付着	23	93
1～2㎜大のチャート・石英わずかに含む	外面：口縁部ヘラミガキ。 内面：体部横ナデ。		23	93
1～2㎜大の石英・チャート多く含む	外面：脚柱部ヘラミガキ。 内面：磨滅。	円孔（径 9.5㎜）	23	93
5㎜以下の長石・チャート多く含む	外面：脚柱部ヘラナデ。 内面：磨滅。		23	94
4㎜以下のチャート・長石多く含む	外面：裾部ハケ。 内面：裾部横ナデ。	円孔（径 0.9～1.4cm）	23	94
3㎜以下の石英・長石・チャート多く含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。	円孔（径 1～1.3cm）	23	94
5㎜以下の長石・チャート多く含む	外面：脚部ヘラミガキ。 内面：脚部ハケ→横ナデ。	円孔（径 1.15～1.65cm）	23	
1㎜大の長石・チャートわずかに含む	外面：口縁部ハケ→横ナデ。 内面：口縁部ハケ。		23	94
1㎜大の雲母・角閃石多く含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。	生駒西麓産もしくは讃岐産	23	

出土土器観察表 20

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
476	C区	SH 28	弥生	器台				28.00	3.20	脚部 1/6		にぶい黄橙
477	C区	包含層（SH 27or SH 28）	弥生	甕	19.40	15.50			4.10	口縁部 1/6		橙
478	C区	包含層（SH 27or SH 28）	弥生	甕				3.50	2.50	底部完存		灰黄
479	C区	包含層（SH 27or SH 28）	弥生	鉢				3.50	2.80	底部完存		にぶい橙
480	C区	SH 29	弥生	甕	12.80	11.20	15.50		9.70	口縁部 1/4		にぶい橙
481	C区	SH 29	弥生	甕	15.80	13.60			3.60	口縁部 1/8		にぶい橙
482	C区	SH 29	弥生	甕	13.00	11.00	15.60		14.20	口縁部 3/4		にぶい橙
483	C区	SH 29	弥生	甕	14.60	12.10	22.50	4.00	24.90	ほぼ完存		にぶい黄橙
484	C区	SH 29	弥生	甕	15.00	11.90	17.40		19.80	口縁部 1/6 体部 1/3		にぶい橙
485	C区	SH 29	弥生	甕			15.30		13.50	体部 1/3		浅黄橙～橙
486	C区	SH 29	弥生	脚台		4.15		7.40	4.40	脚部完存		にぶい橙
487	C区	P 10	弥生	壺	19.70				1.85	口縁部 1/12		にぶい橙～暗灰黄
488	C区	P 11	土師器	高杯	20.10				2.90	口縁部 1/6		橙
489	C区	P 09	弥生	甕				6.35	6.60	底部完存		にぶい橙～灰白
490	C区	P 09	弥生	高坏	22.60				3.30	口縁部 1/4		橙～にぶい橙
491	C区	SK 17	弥生	鉢	9.60				5.00	口縁部 1/4 底部完存		橙
492	C区	SK 19	須恵器	蓋	13.90				1.85	口縁部わずか	不良	灰白
493	C区	SK 16	須恵器	高杯	13.90	3.70		10.80	9.20	口縁部 1/4 脚部ほぼ完存	不良	灰白
494	C区	SD 09	弥生	壺	18.50	13.00			5.20	口縁部 1/5		浅黄橙
495	C区	SD 09	弥生	壺	12.00				7.70	口縁部 1/4		橙
496	C区	SD 09	弥生	壺			15.60		4.90	体部 1/4		灰白
497	C区	SD 09	弥生	壺	10.40	8.00			2.90	口縁部 1/6		にぶい橙
498	C区	SD 09	弥生	壺				5.40	5.70	底部完存		にぶい橙
499	C区	SD 09	弥生	壺				5.70	4.20	底部完存		にぶい橙
500	C区	SD 09	弥生	壺				8.10	6.80	底部 3/4		にぶい橙

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
1㎜以下の石英・長石・チャートわずかに含む	外面：底部ハケ→端部横ナデ。 内面：底部ハケ。		23	
1㎜以下の長石・チャート・石英含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		23	94
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：底部ヘラナデ。 内面：底部～体部ハケ。	底部木葉文	23	
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：体部ナデ。 内面：底部～体部ナデ。		23	
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：体部磨滅。口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		23	94
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		23	
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：体部叩き→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部下半ヘラ削り→体部上半ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。	体部外面下半煤付着	23	
1～2㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部叩き→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	被熱により赤変煤付着	23	95
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：体部叩き→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。	外面煤付着	24	95
0.5～2㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部ナデ。 内面：体部ナデ。	外面被熱のため剥離	24	95
1～2㎜大の長石・チャート・石英やや多く含む	外面：不明。 内面：脚部横ナデ。体部不明。	脚高 2.5cm	24	95
1㎜大のチャートわずかに含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部ヘラミガキ。		24	95
1～2㎜大の長石・チャート・クサリレキ多く含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		24	
1㎜大のチャート多く含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：体部ヘラ削り。	外面被熱により赤変	24	
1㎜大の石英・長石多く含む	外面：体部指オサエ→ヘラ削り→ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部横ナデ→ヘラミガキ。		24	
1～2㎜大のチャート・石英含む	外面：底部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラミガキ。		24	96
0.5～1㎜大の石英・チャート含む	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。		24	
0.5㎜大の長石・チャート含む	外面：脚部～口縁部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。杯部回転ナデ。	脚高 5.2cm	24	96
1㎜大の長石・チャート多く含む	外面：頸部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		24	96
1㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：頸部ナデ→口縁部横ナデ。		24	96
1～2㎜大の長石・チャート・クサリレキわずかに含む	外面：体部ナデ・ハケ。 内面：体部ナデ。		24	96
1㎜大の長石・チャート含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		24	
1㎜大の長石・チャートわずかに含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ナデ。	外面・内面煤付着	24	
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ハケ→底部ナデ。		24	
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部磨滅。 内面：底部指オサエ→体部ナデ。		24	

出土土器観察表 21

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
501	C区	SD 09	弥生	壺				7.60	7.50	底部 1/3		浅黄橙～灰黄
502	C区	SD 09	弥生	壺				6.10	2.10	底部 1/6		灰白
503	C区	SD 09	弥生	甕	21.00	19.70	20.50		8.10	口縁部 1/8		浅黄橙
504	C区	SD 09	弥生	甕	21.20	19.70			4.80	口縁部 1/8		にぶい橙
505	C区	SD 09	弥生	甕	19.20	18.00	18.80		4.80	口縁部 1/10		灰白～浅黄橙
506	C区	SD 09	弥生	甕					12.60	口縁部わずか		灰白
507	C区	SD 09	弥生	甕				6.00	9.00	底部完存		黄灰～灰黄褐
508	C区	SD 09	弥生	甕				6.80	7.40	底部 1/4		にぶい橙～にぶい黄橙
509	C区	SD 09	弥生	甕				6.50	6.50	底部完存		にぶい橙
510	C区	SD 09	弥生	甕				5.00	7.60	底部 3/4		にぶい黄橙
511	C区	SD 09	弥生	甕				5.10	4.60	底部 1/6		橙～にぶい黄橙
512	C区	SD 09	弥生	甕				6.60	4.40	底部 1/2		褐灰
513	C区	SD 09	弥生	高坏	30.40				4.70	口縁部 1/10		にぶい橙
514	C区	SD 09	弥生	高坏	27.00				9.90	口縁部 1/8		にぶい橙
515	C区	SD 09	弥生	高坏					6.50	脚部 1/6		にぶい橙
516	C区	SD 09	弥生	甕	13.40	11.00			5.60	口縁部 1/4		にぶい黄橙
517	C区	SD 09	弥生	鉢				4.70	9.60	体部 1/3 底部ほぼ完存		にぶい褐
518	C区	SD 09	弥生	甕				4.00	4.20	底部 1/4		灰黄褐
519	C区	SD 09	弥生	甕				6.40	5.00	底部 1/2		にぶい黄橙
520	C区	SD 09	弥生	甕				5.20	3.80	底部完存		灰黄
521	C区	SD 09	弥生	甕				5.20	5.80	底部 1/2		にぶい橙～にぶい黄橙
522	C区	SD 09	弥生	甕	14.40	12.30			6.10	口縁部 1/4		浅黄橙～褐灰
523	C区	SD 09	弥生	甕				6.10	9.50	底部完存		浅黄橙
524	C区	SD 09	弥生	甕	15.00	12.80			4.60	口縁部 1/6		浅黄橙
525	C区	SD 09	弥生	脚部		2.80		8.10	5.10	脚部 1/4		灰黄

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
2㎜以下の長石・チャート・石英含む	外面：体部ハケ→ヘラミガキ。 内面：体部ヘラミガキ・ヘラナデ。		24	
2㎜以下の長石・チャート・石英含む	外面：磨滅。 内面：底部～体部ナデ。		24	
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：体部ハケ・ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		24	96
1㎜大の長石・チャート多く含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		24	
1～2㎜大の長石・チャート多く含む	外面：体部櫛描直線文→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		24	97
1～2㎜大の長石・チャート多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		24	96
1～2㎜大のチャート・長石多く含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：底部ナデ→体部ヘラミガキ。	底部中央穿孔 （径1.15㎝～1.80㎝）	24	97
2㎜以下の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部ハケ→ナデ。 内面：体部ナデ。		24	
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部ハケ。 内面：底部～体部ナデ。	内面炭化物付着	24	
1～2㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：磨滅。 内面：底部～体部ナデ。	底部外面被熱により赤変	25	
3㎜以下の長石・チャート・石英含む	外面：体部磨滅。 内面：体部磨滅。	外面被熱により赤変	25	
3㎜以下の長石・チャートやや多く含む	外面：体部ハケ。 内面：底部～体部ナデ。		25	
1㎜以下の長石・チャート・石英含む	外面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		25	
1～2㎜大の長石・チャート多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		25	
1㎜以下の長石・チャート・雲母含む	外面：脚部ナデ→下半ヘラミガキ。 内面：脚部ヘラ削り。		25	97
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：体部叩き→口縁部横ナデ。 内面：体部板ナデ→口縁部横ナデ。	外面煤付着	25	
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：体部叩き。 内面：体部ヘラナデ。	底部中央穿孔 （径8㎜）	25	97
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：体部叩き→指ナデ。 内面：体部ハケ。	外面煤付着・赤変	25	
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：体部叩き→ナデ。 内面：底部～体部ハケ。		25	
1～3㎜大の長石・チャート含む	外面：体部ナデ。 内面：底部～体部ハケ。		25	
3㎜以下の長石・チャート含む	外面：体部叩き。 内面：底部ナデ→体部ヘラ削り。		25	
1～2㎜大の砂粒多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラナデ→口縁部ハケ。		25	97
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：体部ハケ。 内面：体部ヘラ削り。	外面煤付着	25	
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→口縁部横ナデ。		25	
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：脚部ヘラミガキ。 内面：脚部ナデ→脚裾部ヘラナデ。	円孔（径8㎜）	25	97

出土土器観察表 22

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
526	C区	SD 09	弥生	鉢				3.40	3.70	底部完存		にぶい黄橙
527	C区	SD 08	弥生	甕	15.60	15.20			2.85	口縁部わずか		浅黄橙～灰白
528	C区	包含層	弥生	壺			16.50		10.70	体部 1/6		にぶい黄橙
529	C区	包含層	弥生	甕					7.50	口縁部わずか		浅黄橙
530	C区	包含層	弥生	壺	21.80	11.10			9.05	口縁部 1/4		にぶい褐～にぶい黄橙
531	C区	包含層	弥生	壺	18.05	9.10			5.95	口縁部 1/7		橙
532	C区	包含層	弥生	甕	13.70	10.90			2.75	口縁部 1/9		にぶい黄橙
533	C区	包含層	須恵器	杯H蓋	12.90				3.90	口縁部 2/3	普通	灰～灰白
534	C区	包含層	須恵器	杯H	14.60				3.55	口縁部 1/4	やや不良	灰白～灰
535	C区	包含層	須恵器	杯H	13.40				2.50	口縁部 1/9	不良	灰白
536	C区	包含層	須恵器	甕			10.05		7.70	体部完存	普通	灰白
537	D区	SD 11	弥生	壺	19.60				6.20	口縁部 1/8 弱		にぶい橙
538	D区	SD 11	弥生	壺	17.00	16.00			5.00	口縁部 1/6		にぶい黄橙
539	D区	SD 11	弥生	壺	14.60				4.50	口縁部 1/6		浅黄橙
540	D区	SD 11	弥生	壺	16.60	9.80			4.60	口縁部 1/8		にぶい橙
541	D区	SD 11	弥生	壺		12.90			7.60	体部わずか		にぶい黄橙
542	D区	SD 11	弥生	壺		9.80			7.60	頸部 1/4		にぶい橙
543	D区	SD 11	弥生	壺				10.30	14.00	底部 1/3		にぶい橙
544	D区	SD 11	弥生	壺			25.90	8.40	21.00	体部 1/4 底部 1/3		浅黄橙
545	D区	SD 11	弥生	壺				8.10	12.60	底部 3/4		浅黄橙
546	D区	SD 11	弥生	壺				7.40	5.00	底部 1/3		橙
547	D区	SD 11	弥生	壺				8.00	5.75	底部 1/3		にぶい橙～褐灰
548	D区	SD 11	弥生	甕	31.20	29.90			4.80	口縁部 1/8		にぶい黄橙
549	D区	SD 11	弥生	甕	20.70	18.30			3.90	口縁部 1/7		橙～浅黄橙
550	D区	SD 11	弥生	甕				6.00	4.20	底部完存		橙

胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
2㎜以下の長石・チャート含む	外面：体部ナデ。 内面：底部～体部ナデ。		25	
1～2㎜大のチャートわずかに含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部指ナデ。		25	
1㎜大の長石・チャートわずかに含む	外面：体部下半ヘラミガキ→体部上半ハケ。 内面：体部ハケ→頸部ナデ。		25	98
1～2㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		25	
0.5～5.5㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：頸部ヘラナデ→口縁部ハケ。 内面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。		25	
0.5～2.5㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：複合部横ナデ。 内面：磨滅。		25	
4㎜以下のチャート・石英多く含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		25	
0.5～2㎜大の石英・チャート・長石含む	外面：天井部ヘラ切り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		25	98
0.5～5㎜大の長石・石英・チャート含む	外面：底部ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		25	98
1㎜大のチャート多く含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。		25	
0.5㎜大の石英・チャート・長石含む	外面：底部～体部下半ヘラ削り→体部上半回転ナデ。 内面：底部～体部回転ナデ。	円孔（径1.5cm）	25	98
1㎜以下の長石・チャート・石英やや多く含む	外面：頸部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：頸部剥離。口縁部横ナデ。		27	99
1㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→肩部ナデ→口縁部横ナデ。		27	99
1～2㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：頸部磨滅。口縁部横ナデ。 内面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。		27	99
1㎜以下の長石・チャート多く含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：頸部ナデ→口縁部横ナデ。		27	99
1㎜以下の長石・チャート含む	外面：体部ハケ。 内面：体部ハケ→ナデ→頸部指ナデ。		27	99
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部～頸部ハケ→頸部横ナデ。 内面：体部ハケ→頸部～口縁部横ナデ。		27	99
1.5㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：底部ナデ→体部ナデ。		27	
1㎜大の長石・石英・チャート多く含む	外面：体部下半ヘラミガキ→体部上半ナデ。 内面：底部～体部ハケ→ナデ。		27	99
2㎜以下の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：底部指オサエ→体部ナデ。	内面煤付着	27	
1㎜以下の長石・石英・チャート・クサリレキ含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：底部ナデ→体部ハケ。	内面炭化物付着	27	
0.5～2㎜大の石英・チャート・長石多く含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：底部指オサエ→体部ハケ。		27	
1㎜大の長石・チャート含む	外面：体部磨滅。口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		27	
0.5～1㎜大の石英･長石･チャート多く含む	外面：体部～口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		27	
1～4㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：体部ナデ。	底部穿孔（径9㎜）	27	100

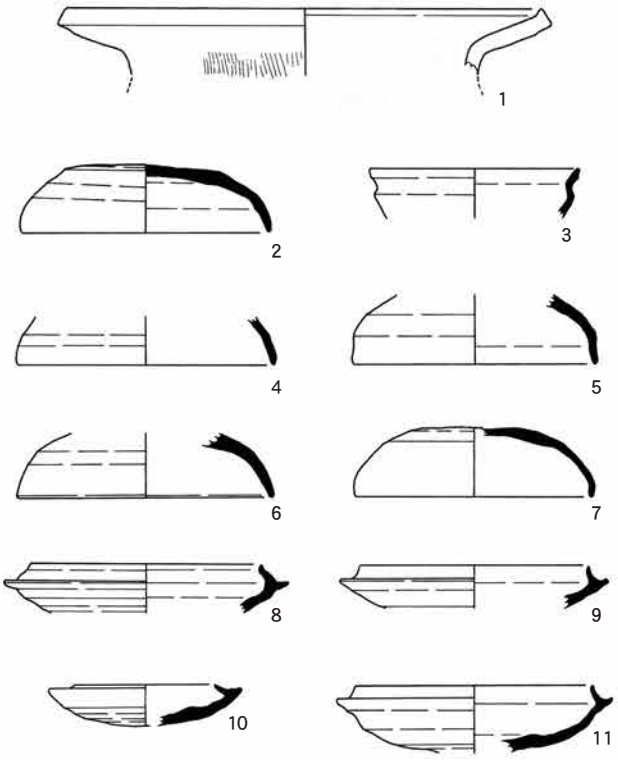
出土土器観察表 23

No.	地区	報告遺構	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状況	焼成	色　調
551	D区	ＳＤ 11	弥生	甕	19.00	17.80	19.60		11.10	口縁部 1/8		浅黄橙～褐灰
552	D区	ＳＤ 11	弥生	甕				9.20	6.00	底部 1/3		褐灰～赤褐
553	D区	ＳＤ 11	弥生	甕				7.60	10.90	底部完存		にぶい黄橙
554	D区	ＳＤ 11	弥生	甕				11.30	5.00	底部 1/3		にぶい橙
555	D区	ＳＤ 11	弥生	鉢				5.00	7.40	底部 1/3		灰黄褐
556	D区	ＳＤ 11	弥生	高坏		4.80			9.00	接合部 1/2		浅黄橙
557	D区	ＳＤ 11	弥生	高坏		3.84		14.00	11.60	脚柱部完存 裾部 1/8		橙
558	D区	ＳＤ 11	弥生	高坏				16.00	5.70	脚部 1/4		浅黄橙
559	D区	ＳＤ 11	弥生	蓋	19.40				6.80	口縁部 1/2 天井部完存		にぶい黄橙
560	D区	包含層	弥生	壺	22.00	17.70			5.80	口縁部 1/6		にぶい黄橙
561	D区	包含層	弥生	甕	27.00	25.00	31.60	7.90	40.50	ほぼ完存		浅黄橙
562	D区	包含層	弥生	甕	12.50	10.30	15.10		11.80	口縁部 1/3		にぶい橙
563	D区	包含層	弥生	甕				5.20	3.25	底部 2/3		にぶい黄褐～灰褐
564	D区	包含層	弥生	甕				8.00	13.20	底部 1/2		橙
565	D区	包含層	弥生	壺		5.50	14.10	2.00	13.20	体部 1/2 底部完存		にぶい橙
566	D区	包含層	弥生	壺				5.60	3.80	底部ほぼ完存		灰黄褐～浅黄橙
567	D区	包含層	弥生	鉢	13.75	12.30	11.80	7.30	9.40	口縁部 ～体部 1/4 脚部完存		浅黄橙
568	D区	包含層	弥生	底部					4.60	底部完存		浅黄橙～橙
569	D区	包含層	弥生	甕	11.20	9.70	11.00	3.20	12.40	ほぼ完存		にぶい橙
570	確認	包含層	弥生	壺	12.40	9.20			9.60	口縁部 1/6		浅黄橙
571	確認	包含層	土師器	高坏		4.00		16.20	8.50	脚柱部完存 裾部 1/4		橙
572	確認	包含層	土師器	高杯	30.20				11.80	口縁部 1/2		橙

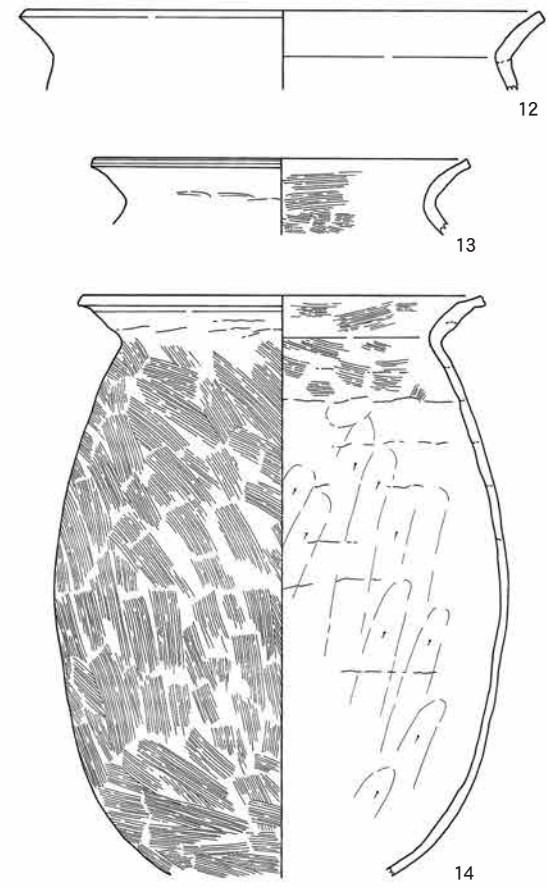
胎　　土	調　　整	備　　考	図版	写真図版
0.5～1㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：体部磨滅。口縁部横ナデ。 内面：体部磨滅。口縁部横ナデ。	外面被熱により赤変	27	
0.5～1㎜大の石英･長石･チャート多く含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：底部磨滅。体部ヘラ削り。	外面被熱により赤変	27	
1㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：体部ナデ。		27	100
1㎜以下の長石･石英･チャート含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：体部ヘラ削り。		27	
1㎜以下の長石・チャートわずかに含む	外面：底部指オサエ→体部ヘラナデ。 内面：底部指オサエ→体部ハケ→ナデ。		28	
1㎜大の長石・チャート含む	外面：脚部～体部ヘラミガキ。 内面：脚部ヘラナデ。体部ナデ。		28	100
1㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		28	101
1㎜大の長石・チャート多く含む	外面：脚部ヘラミガキ。脚端部横ナデ。 内面：脚部ナデ。脚端部横ナデ。		28	100
1㎜大の長石・石英・チャート多く含む	外面：体部～口縁部ハケ→ナデ。 内面：体部～口縁部ナデ→口縁部横ナデ。	口縁部内面煤付着 被熱により赤変	28	101
2㎜以下の長石・チャート・石英多く含む	外面：口縁部ヘラミガキ→口縁端部横ナデ。 内面：口縁部ハケ→ナデ。		28	101
1㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部ハケ→体部下半ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部下半ヘラ削り。体部上半ハケ→口縁部横ナデ。	底部穿孔（径1.6cm） 体部下半被熱により赤変・煤付着	28	101
1㎜以下の長石･チャート･石英やや多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部下半ヘラ削り→体部上半ヘラナデ→口縁部横ナデ。	体部外面煤付着	28	101
0.5～2㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラ削り。		28	
1㎜以下の長石･チャート･石英やや多く含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：底部ナデ→体部下半ヘラ削り→体部中位ナデ。		28	
1～2㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部ハケ→ヘラミガキ。 内面：体部ハケ→肩部指ナデ。		28	101
1～2㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部ナデ。 内面：底部ナデ。体部ハケ。		28	
1～2㎜大のチャート・長石含む	外面：脚部指ナデ→体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：脚部ナデ。体部ヘラナデ→口縁部横ナデ。	脚高2.0cm	28	101
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：底部ナデ・指オサエ→体部ナデ。 内面：底部指オサエ→底部～体部ハケ。	底部中央に穿孔（径1.1cm）	28	
1～2㎜大の長石・チャート含む	外面：体部～口縁部指オサエ→ナデ。 内面：体部板ナデ→肩部指ナデ→口縁部指オサエ→ナデ。		28	102
1㎜以下の長石・チャート・石英含む	外面：口頸部ハケ→口縁端部横ナデ。 内面：頸部ナデ→口縁部ハケ。		第13図	
1～2㎜大の長石・石英・チャート多く含む	外面：脚部ハケ→脚端部横ナデ。 内面：脚部指オサエ→ナデ。	内面煤付着	第13図	102
1㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：口縁部ナデ→横ナデ。 内面：口縁部ヘラミガキ。		第13図	

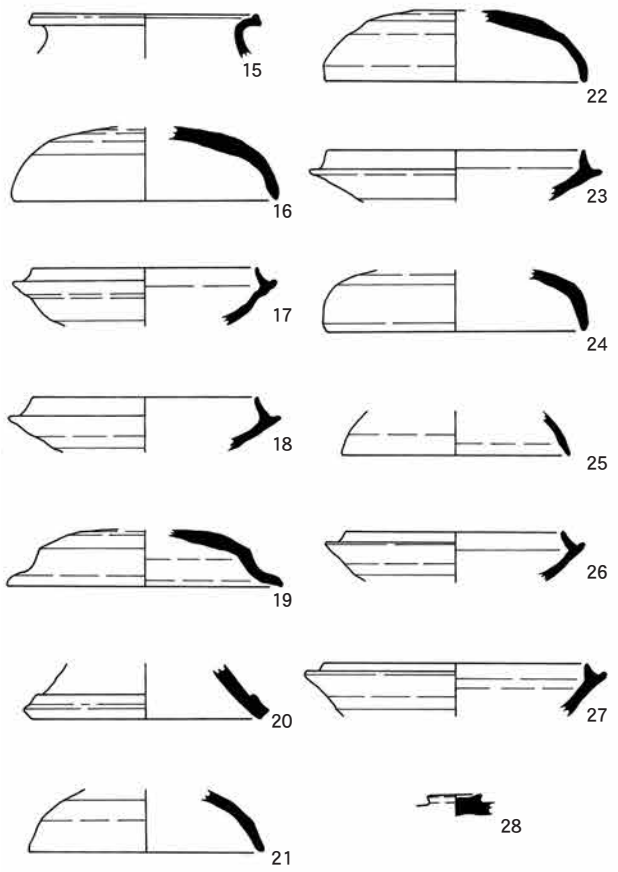
図　　版

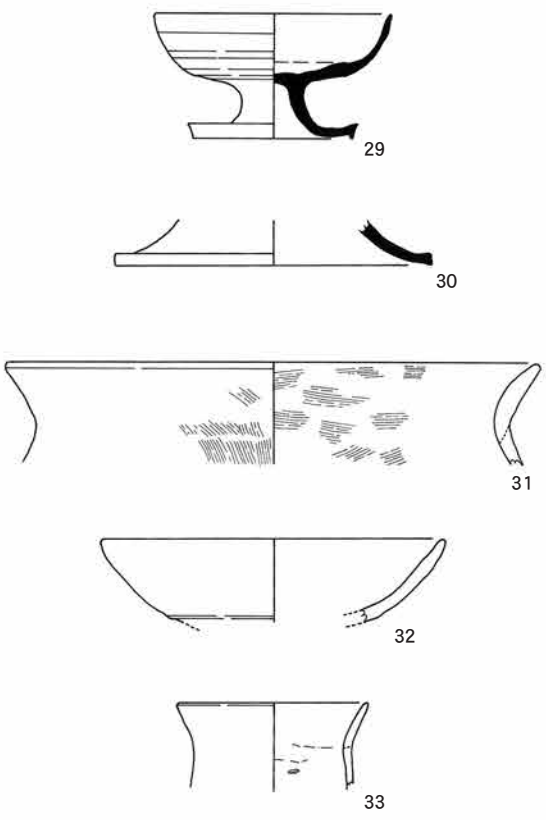
図版 1



1・2：SH01 出土土器　3 ～ 14：SH02 出土土器

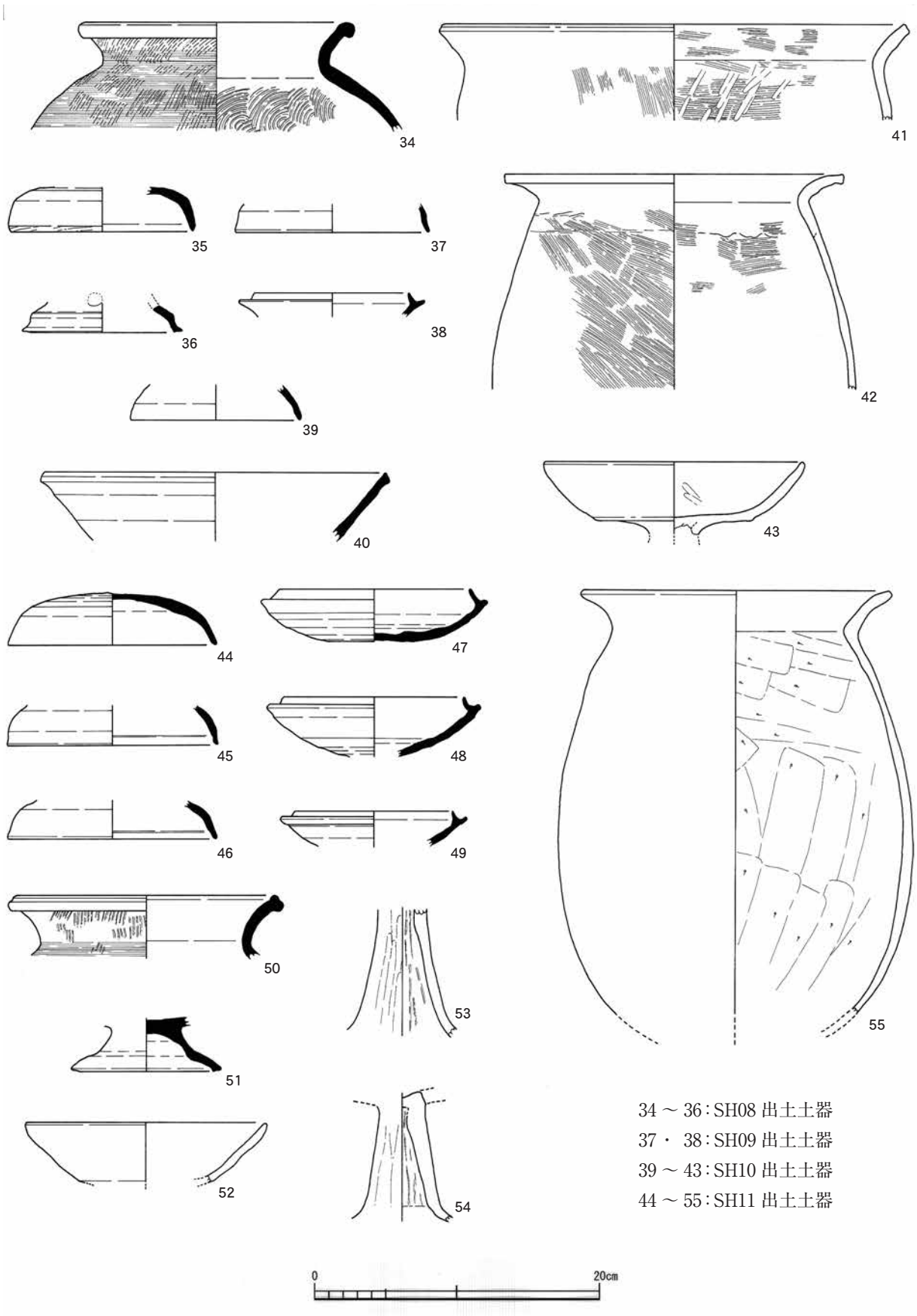






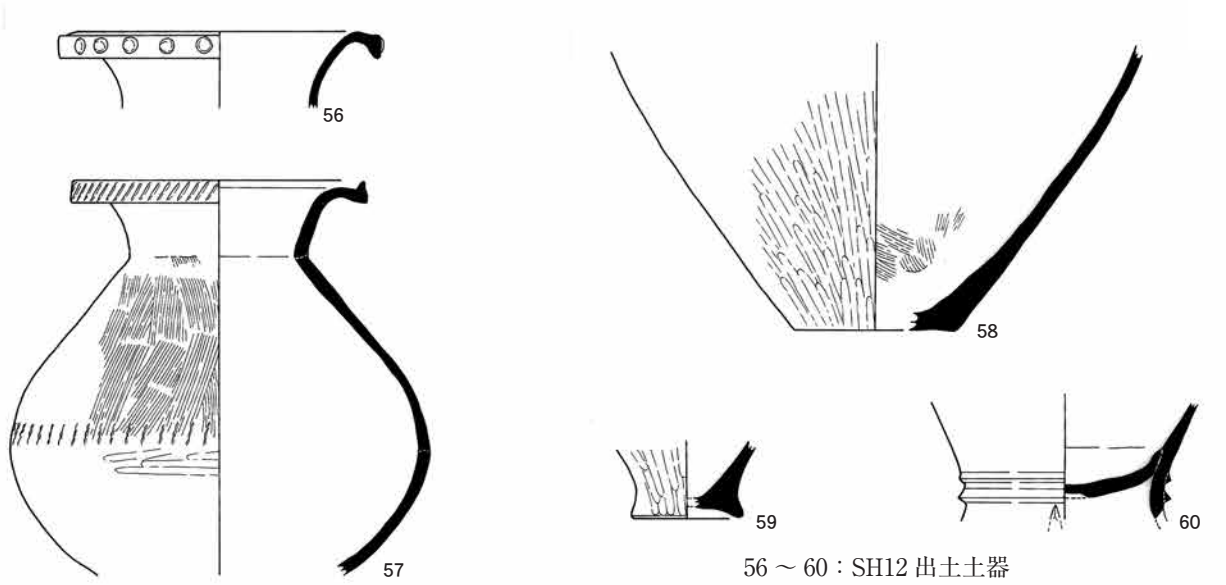
15 ～ 18：SH03 出土土器　19 ・ 20：SH04 出土土器
21 ～ 23：SH06 出土土器　24 ～ 33：SH07 出土土器

図版 2

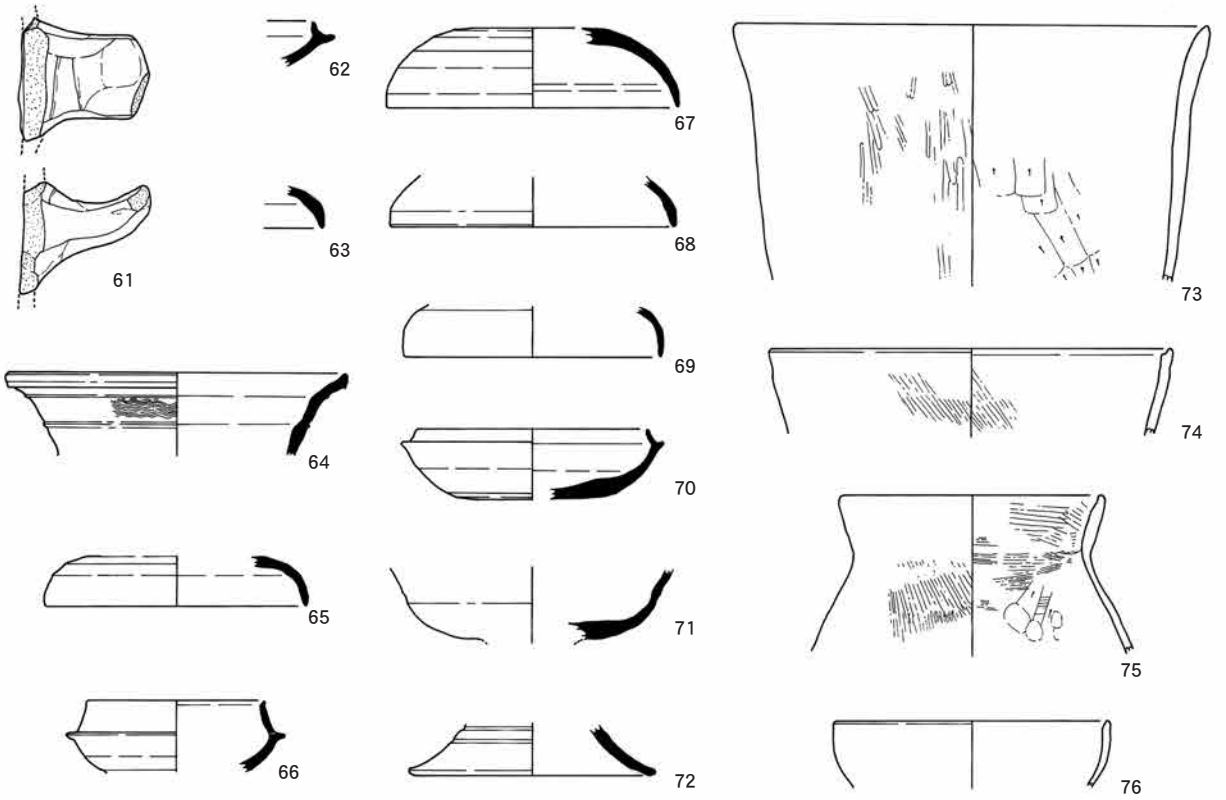


34 ～ 36：SH08 出土土器
37 ・ 38：SH09 出土土器
39 ～ 43：SH10 出土土器
44 ～ 55：SH11 出土土器

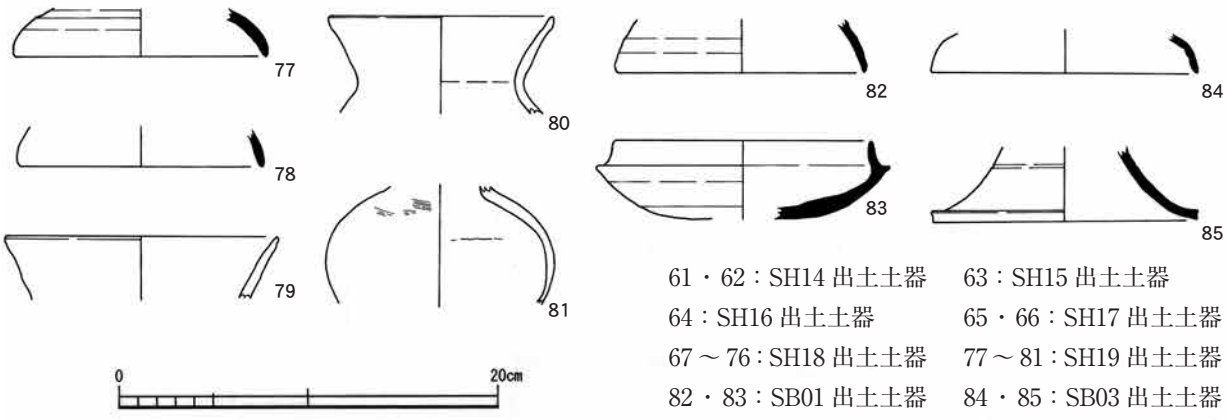
図版 3



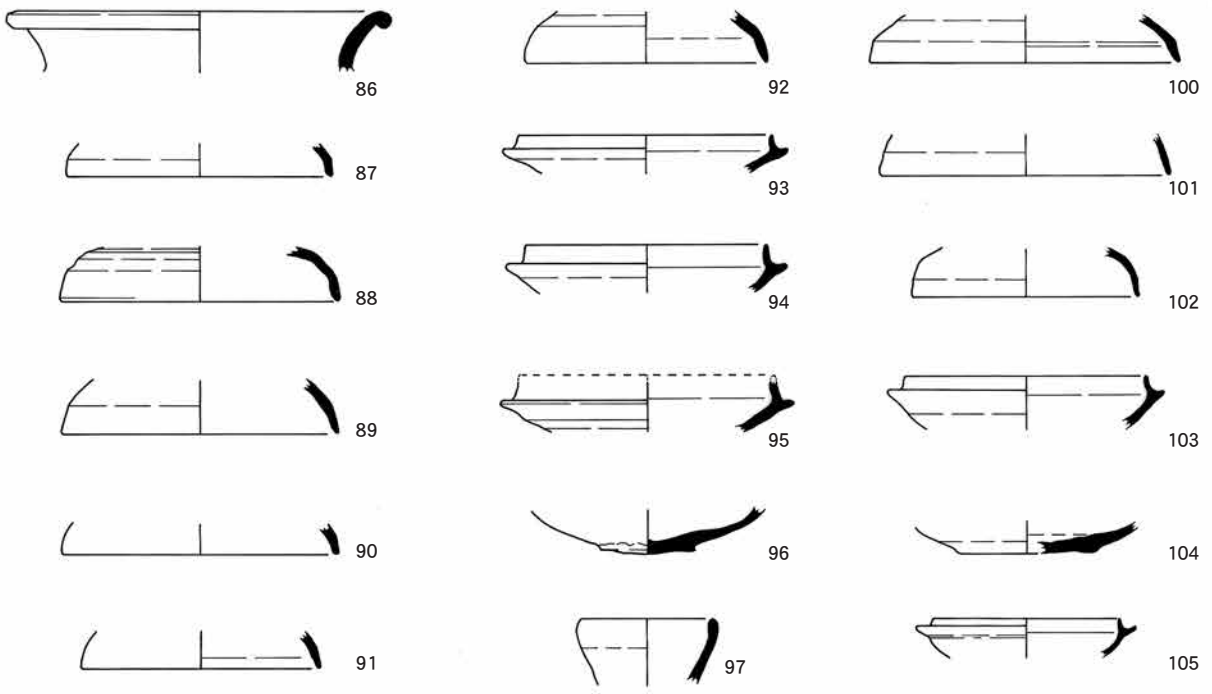
56 ～ 60：SH12 出土土器



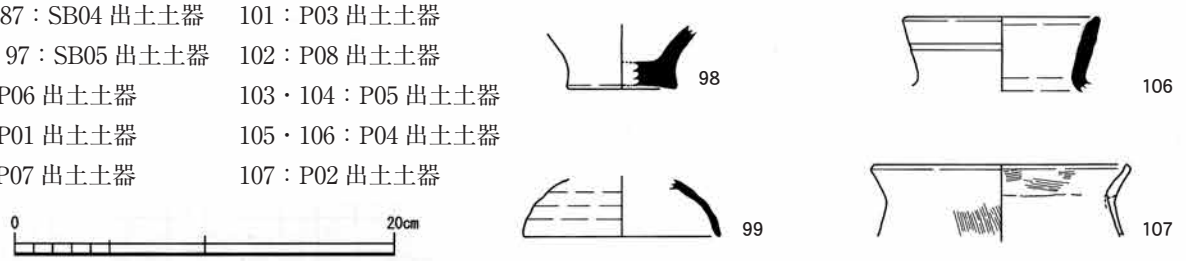
61・62：SH14 出土土器　63：SH15 出土土器
64：SH16 出土土器　65・66：SH17 出土土器
67 ～ 76：SH18 出土土器　77 ～ 81：SH19 出土土器
82・83：SB01 出土土器　84・85：SB03 出土土器

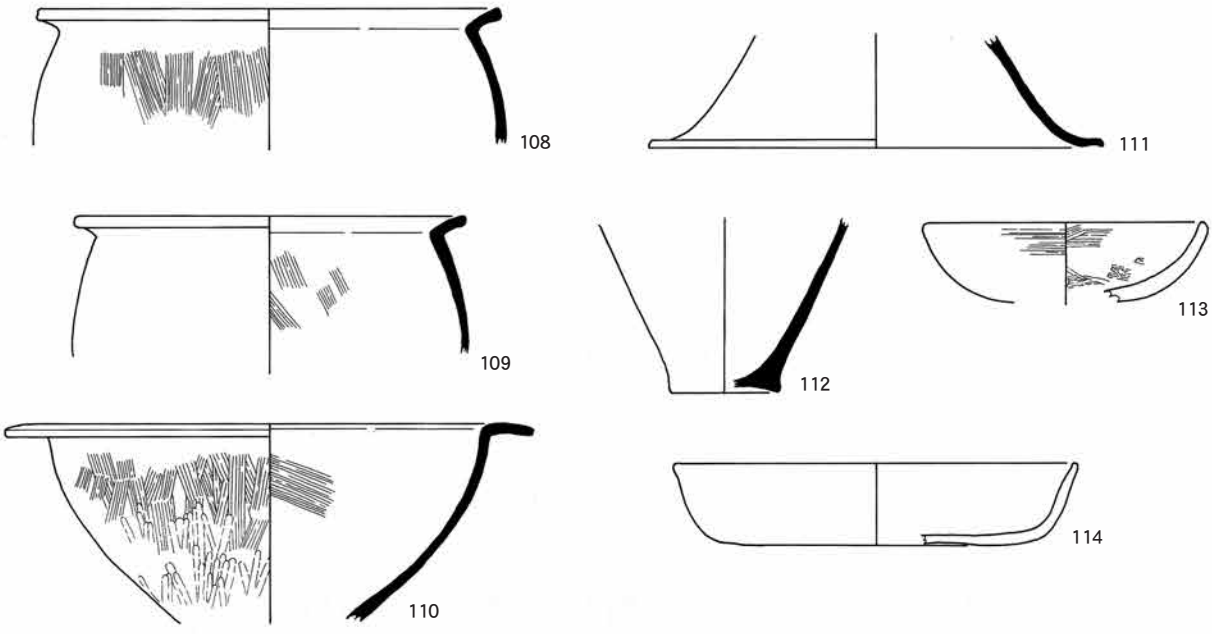


図版 4

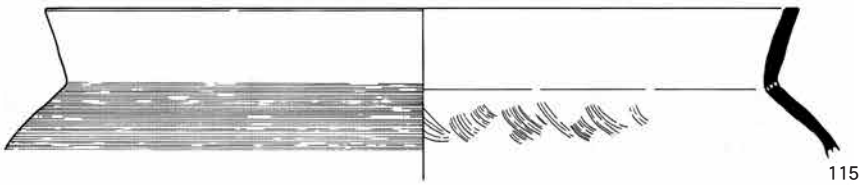


86・87：SB04 出土土器
88～97：SB05 出土土器
98：P06 出土土器
99：P01 出土土器
100：P07 出土土器
101：P03 出土土器
102：P08 出土土器
103・104：P05 出土土器
105・106：P04 出土土器
107：P02 出土土器

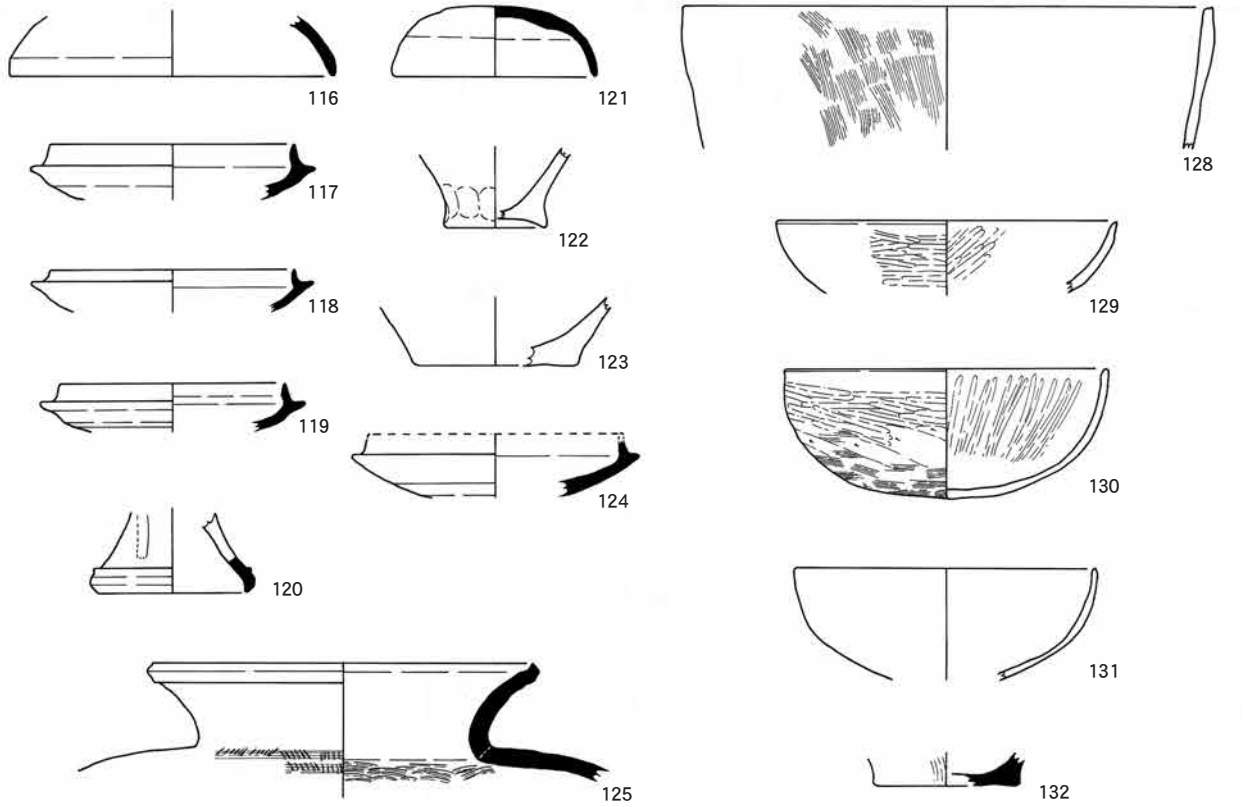


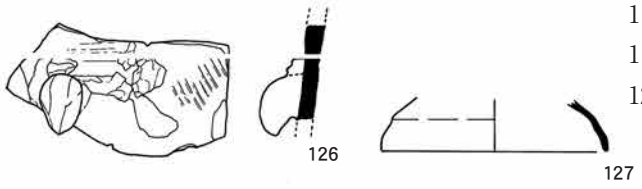


108～110：SK01 出土土器
111・112：SK02 出土土器
113：SK03 出土土器
114・115：SK04 出土土器

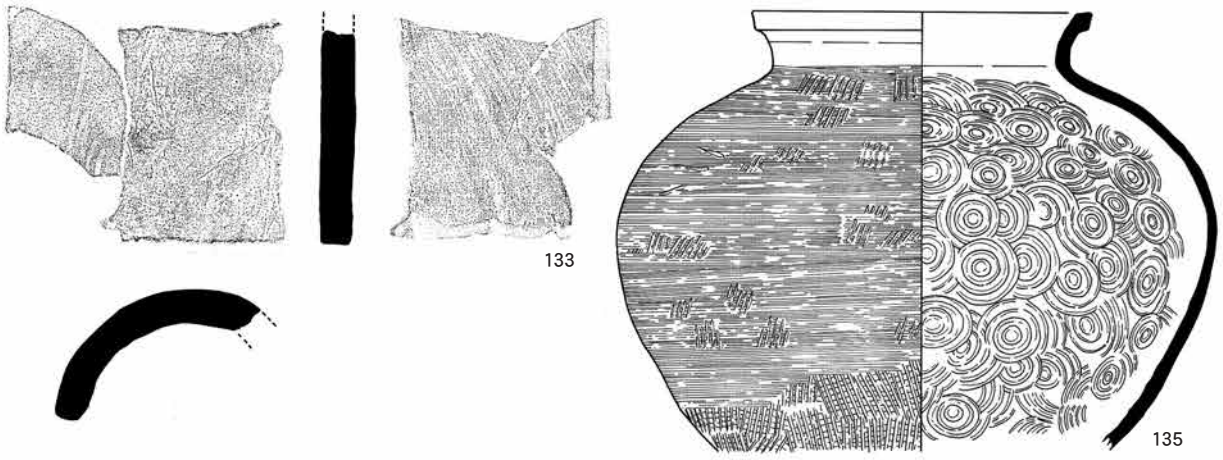


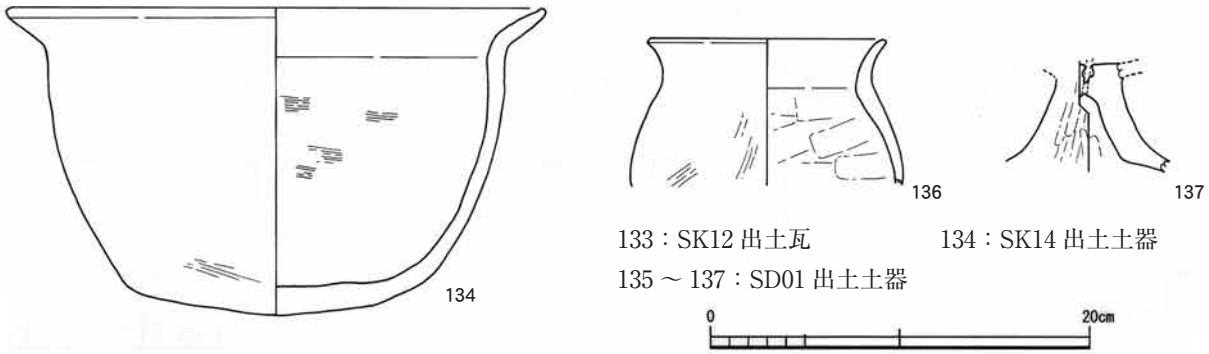
図版 5



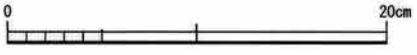


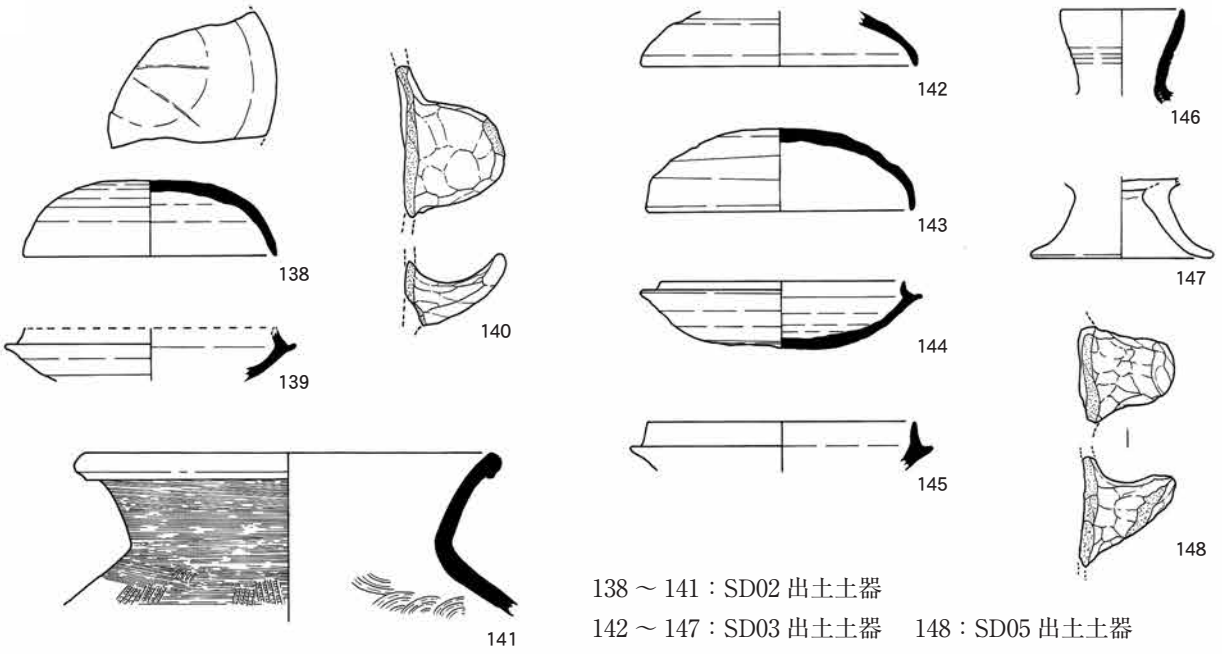
116：SK07 出土土器
117 ～ 120：SK08 出土土器
121 ～ 123：SK09 出土土器
124：SK10 出土土器
125 ～ 131：SK11 出土土器
132：SK13 出土土器



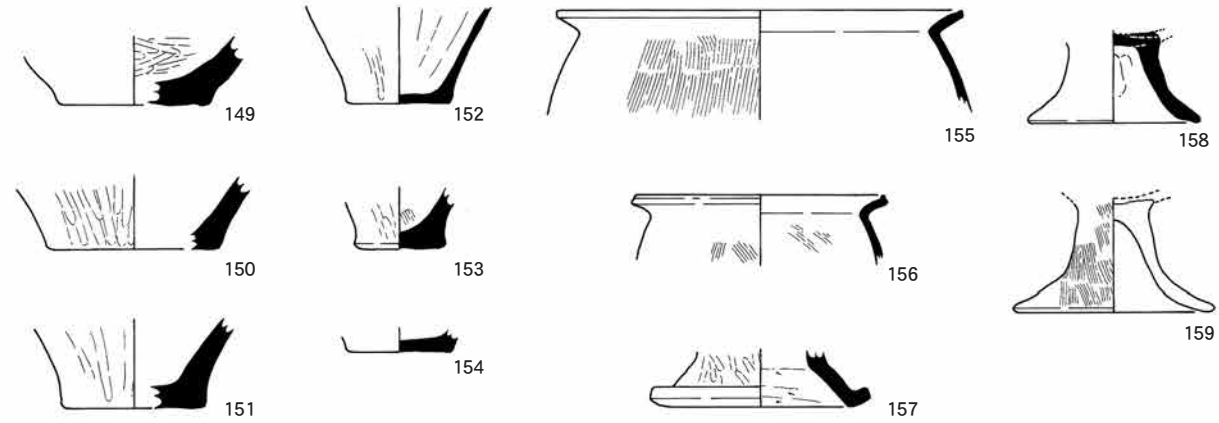


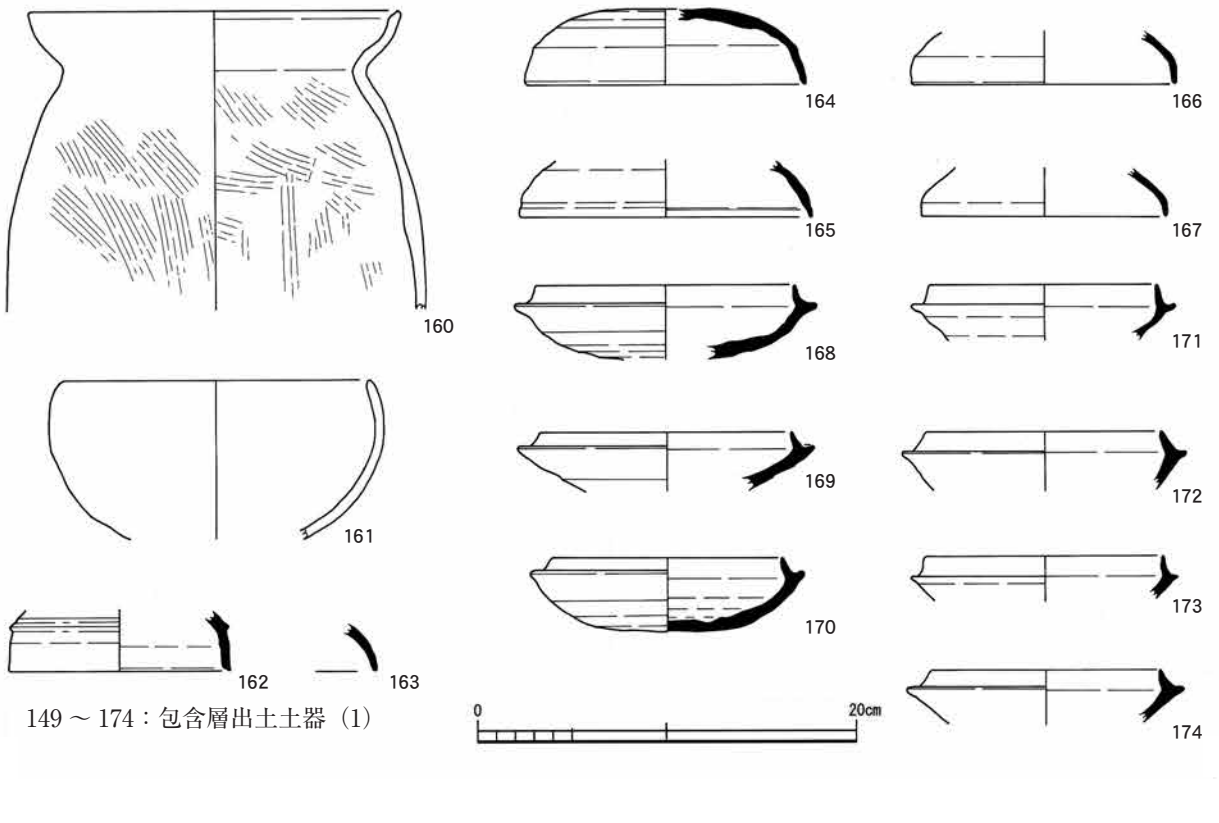
133：SK12 出土瓦
134：SK14 出土土器
135 ～ 137：SD01 出土土器





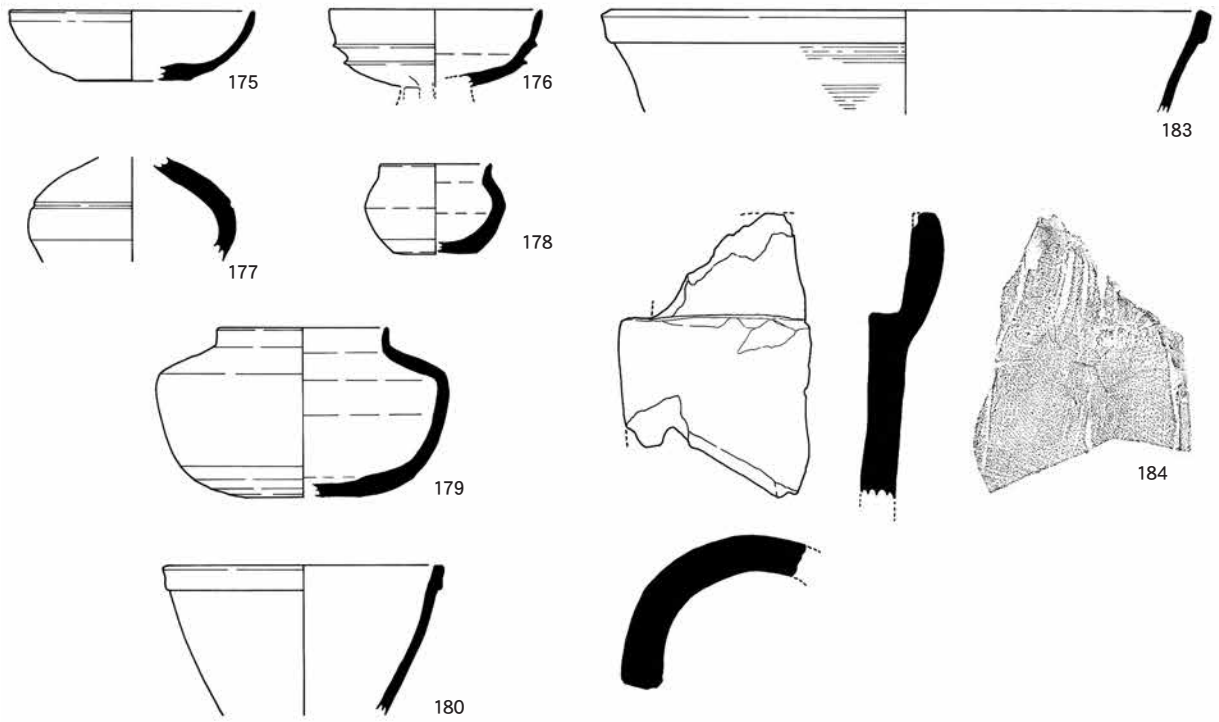
138 ～ 141：SD02 出土土器
142 ～ 147：SD03 出土土器　148：SD05 出土土器



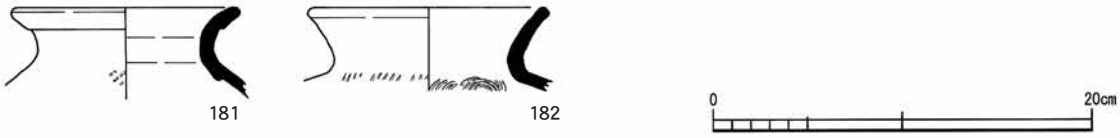


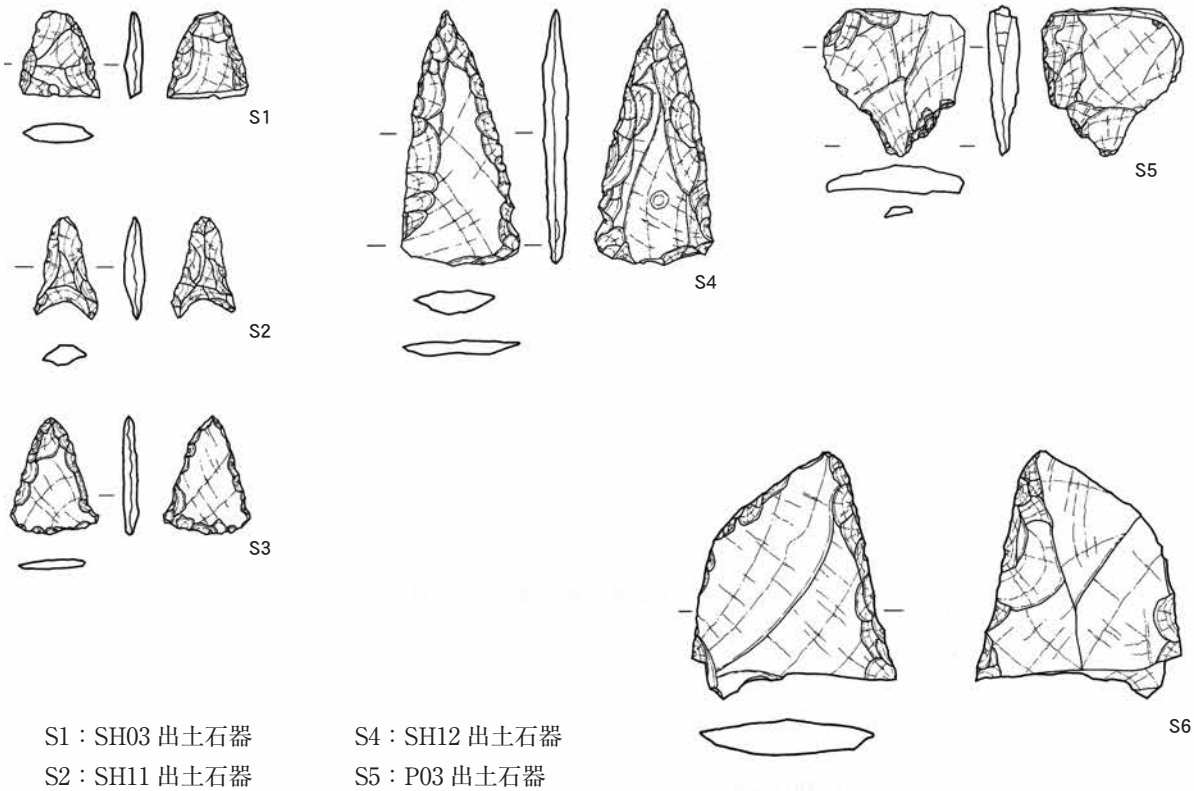
149 ～ 174：包含層出土土器（1）

図版 7



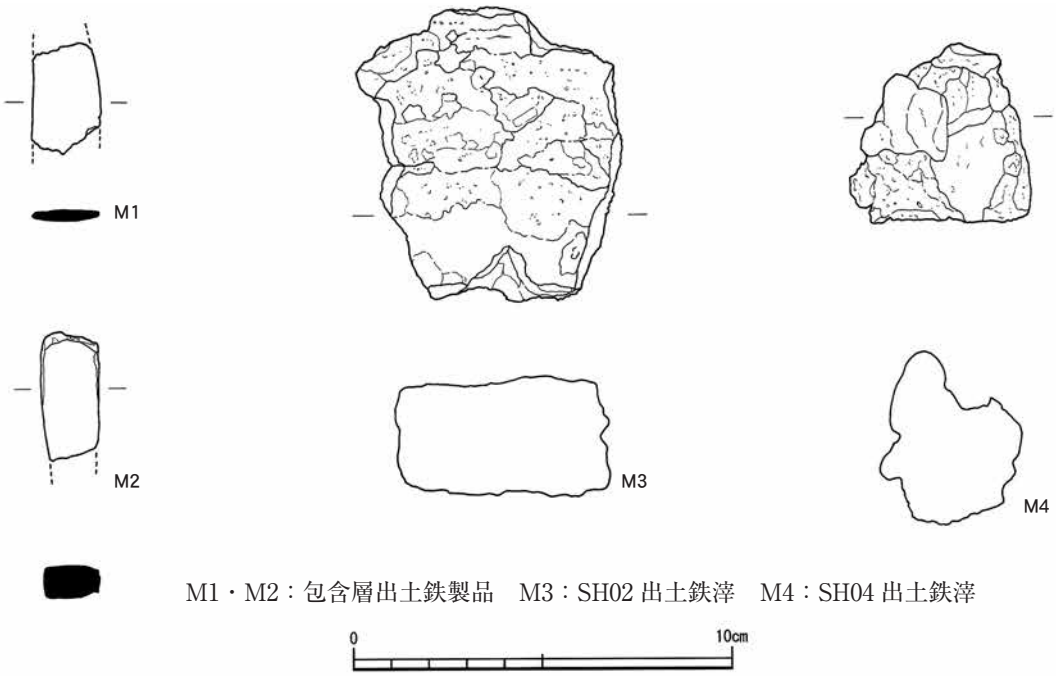
175 ～ 184：包含層出土土器（2）





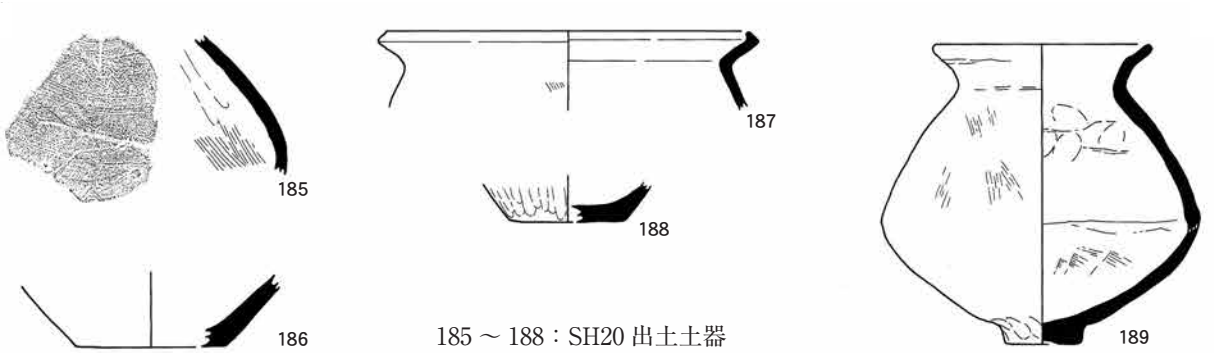
S1：SH03 出土石器
S2：SH11 出土石器
S3・S6：包含層出土石器
S4：SH12 出土石器
S5：P03 出土石器

図版 8

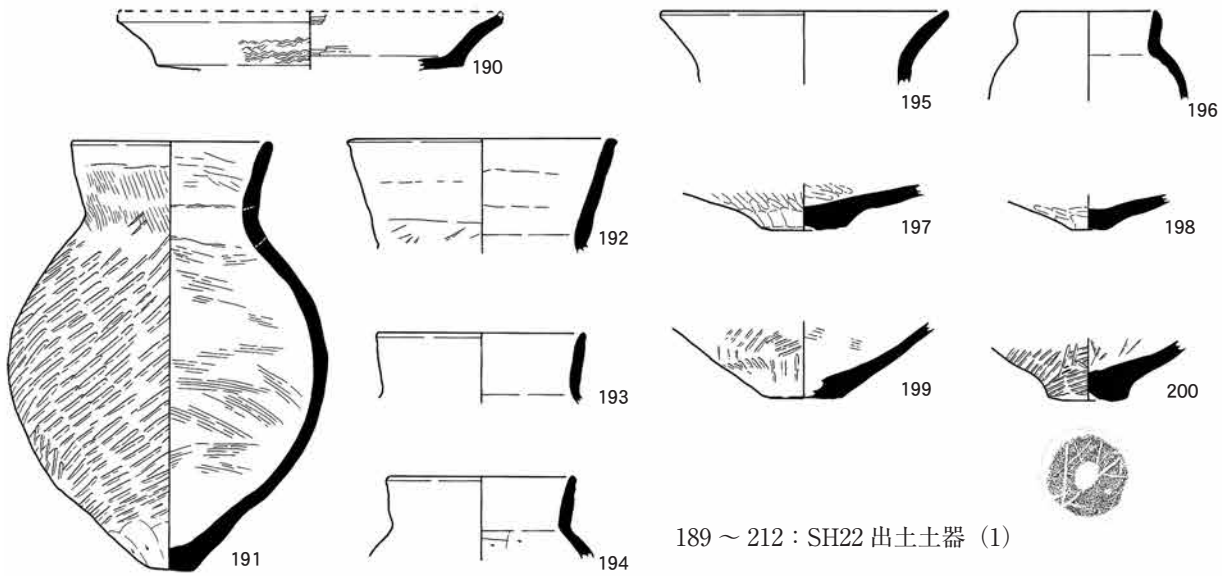


M1・M2：包含層出土鉄製品　M3：SH02 出土鉄滓　M4：SH04 出土鉄滓

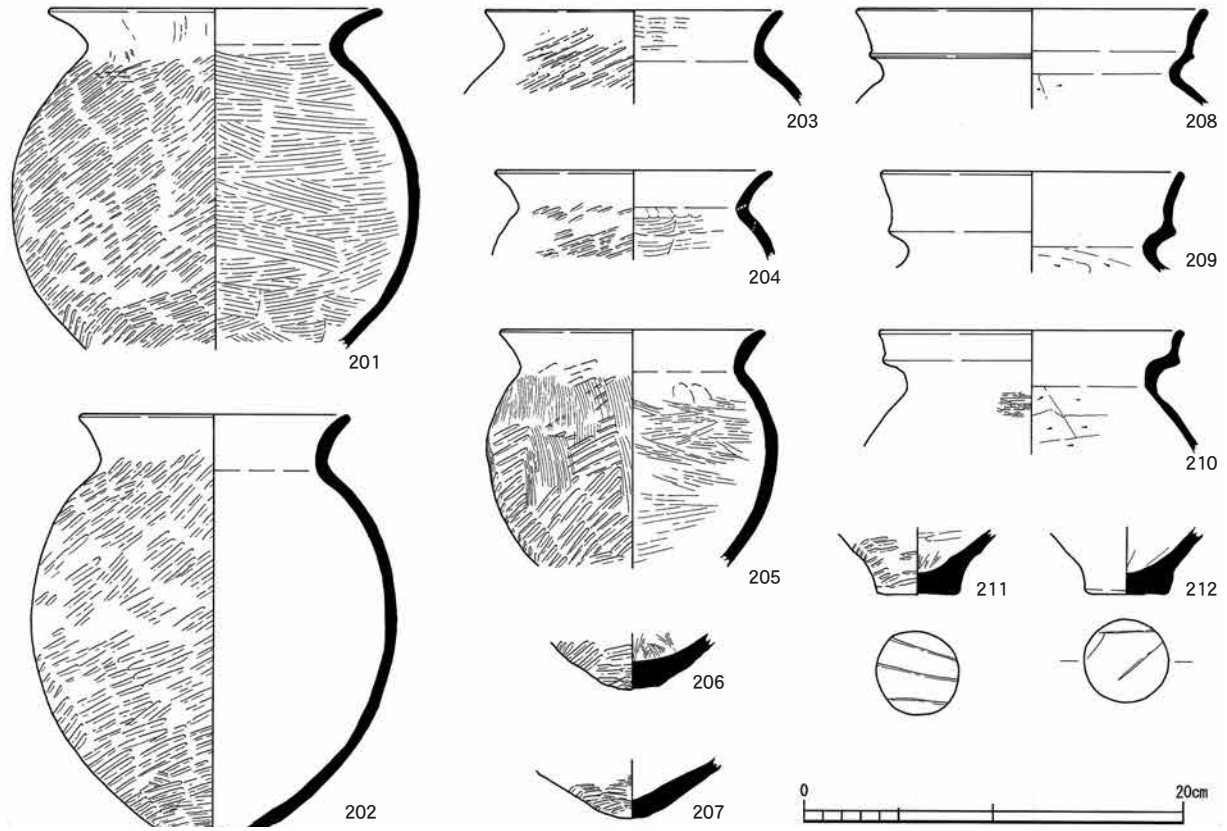
図版 9

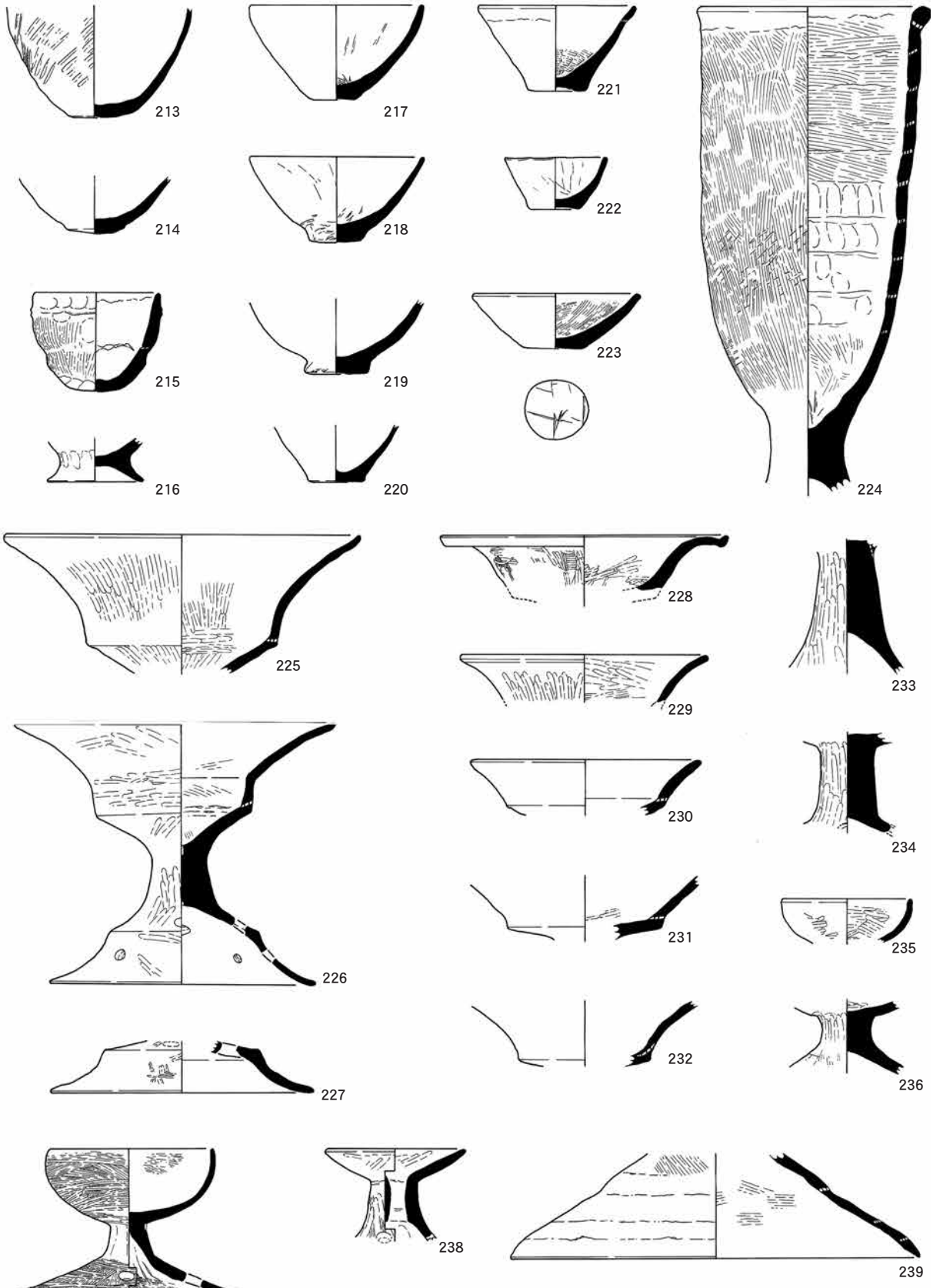


185 ～ 188：SH20 出土土器



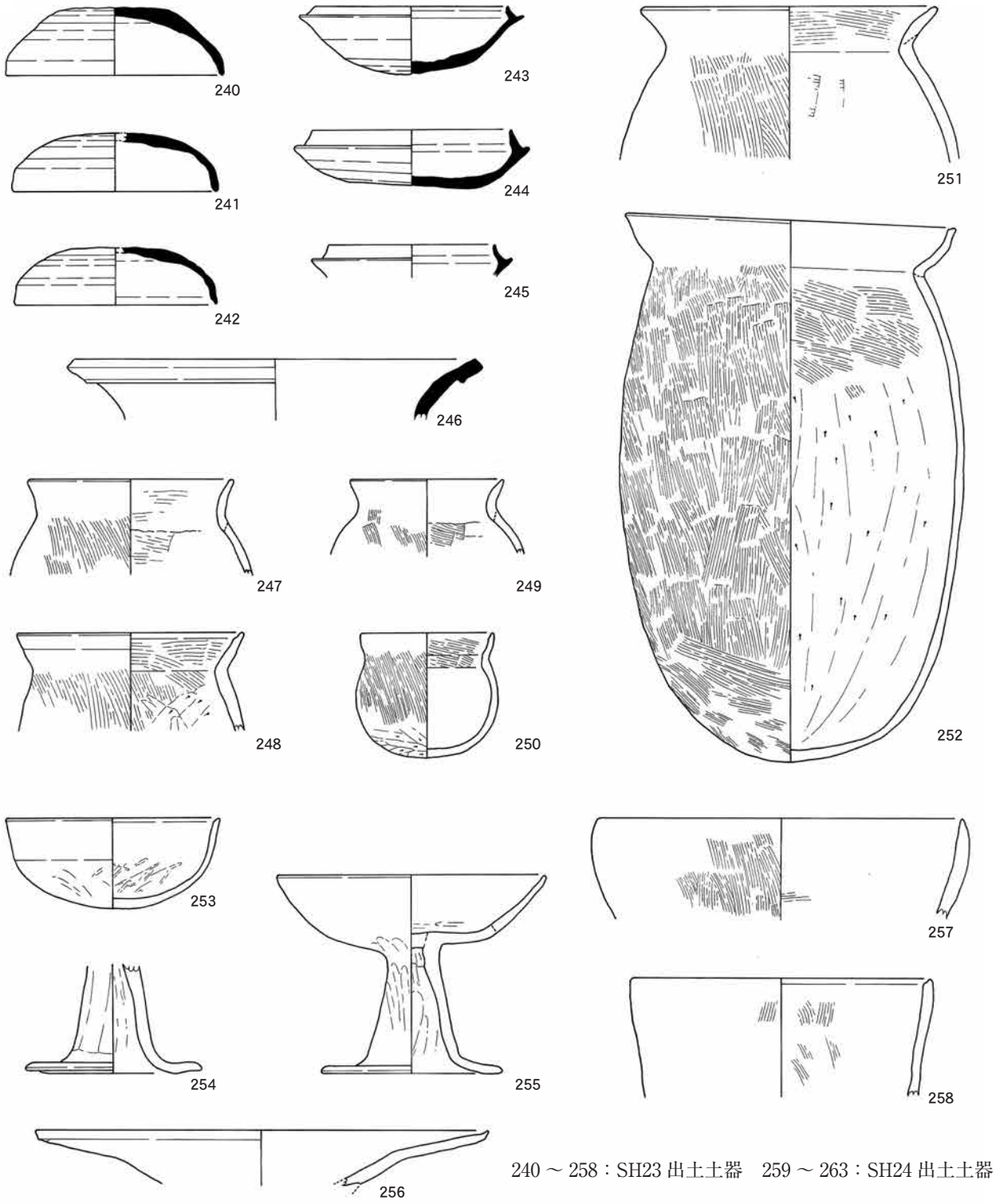
189 ～ 212：SH22 出土土器（1）



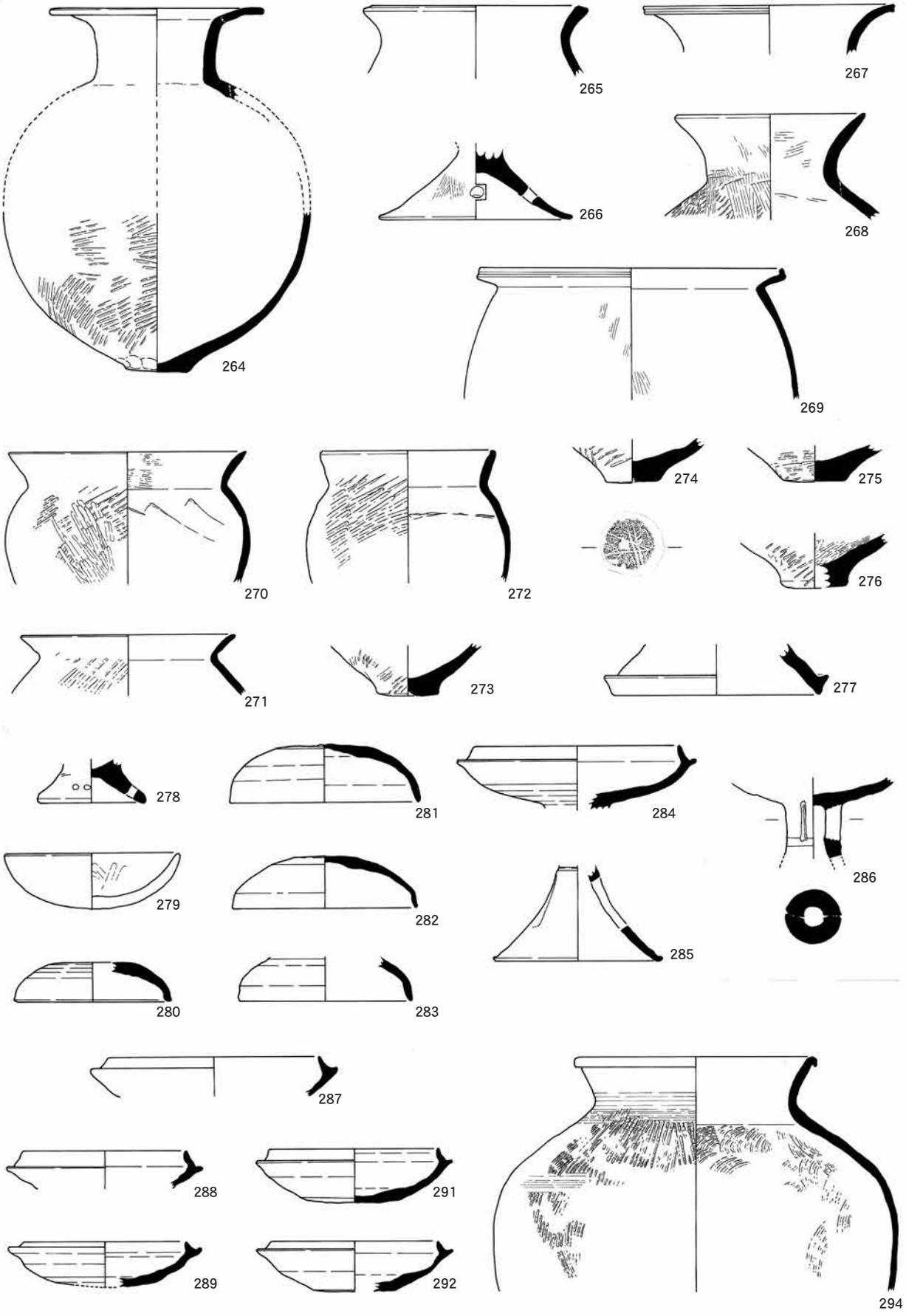


213 ～ 239：SH22 出土土器（2）

図版 11

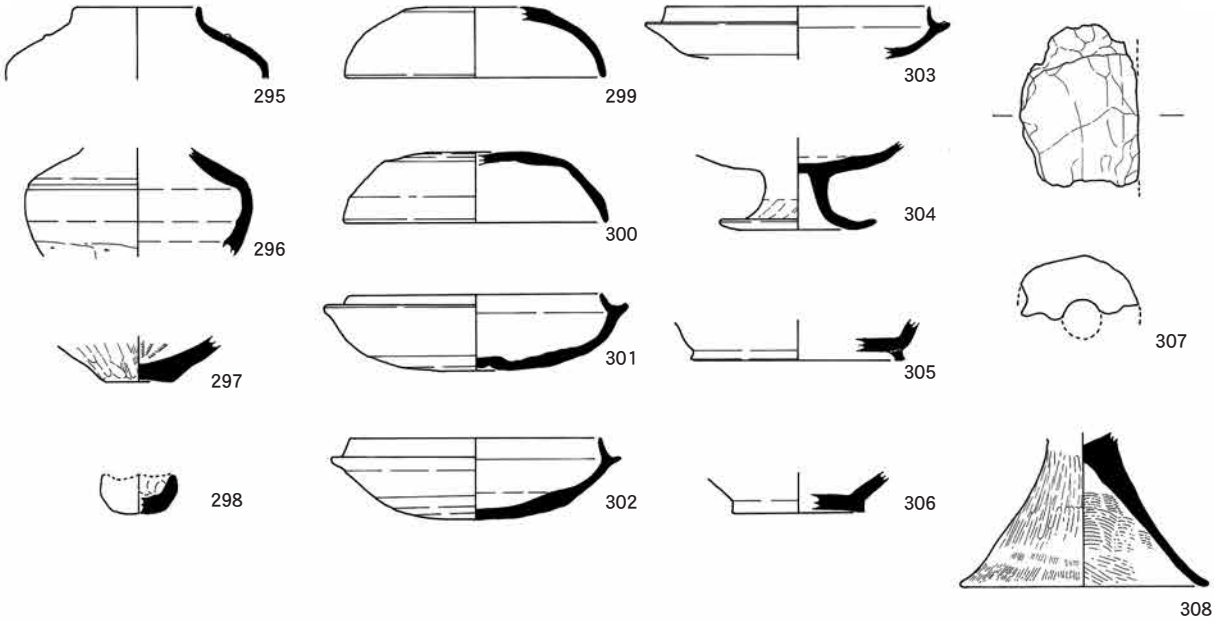


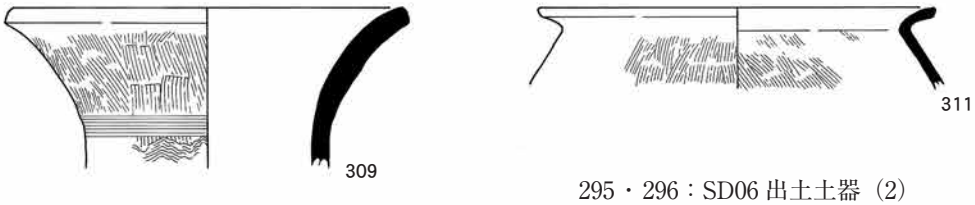
240 ～ 258：SH23 出土土器　259 ～ 263：SH24 出土土器



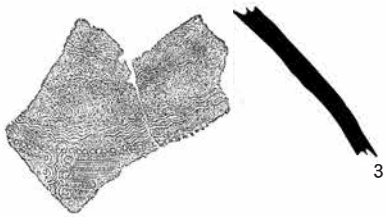
264 ～ 266：SK15 出土土器　267 ～ 294：SD06 出土土器（1）

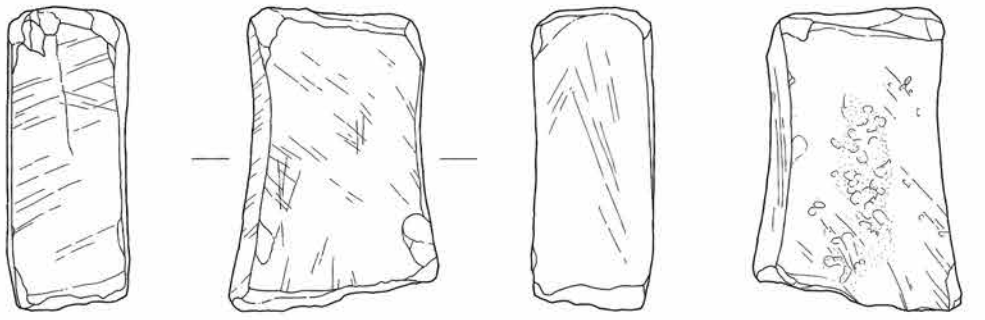
図版 13



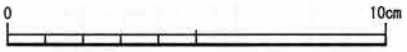


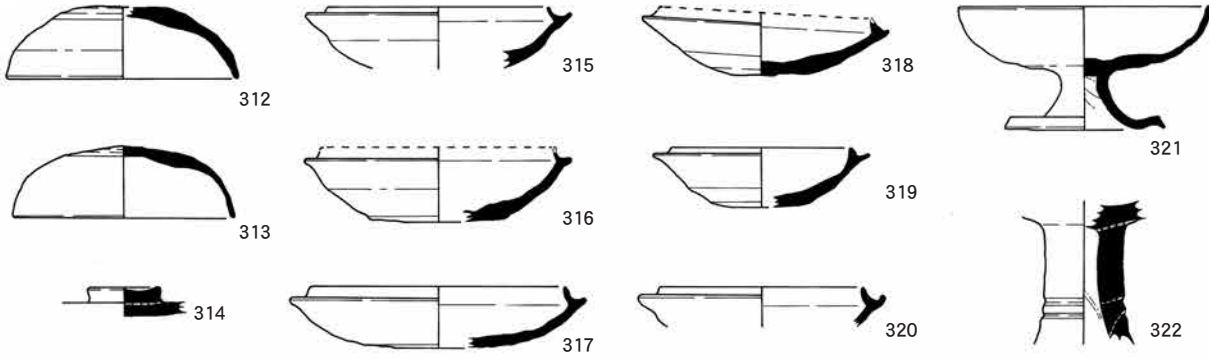
295・296：SD06 出土土器（2）
297・298：SB10 － P16 出土土器
299 ～308：包含層出土土器
309 ～311：基盤層出土土器

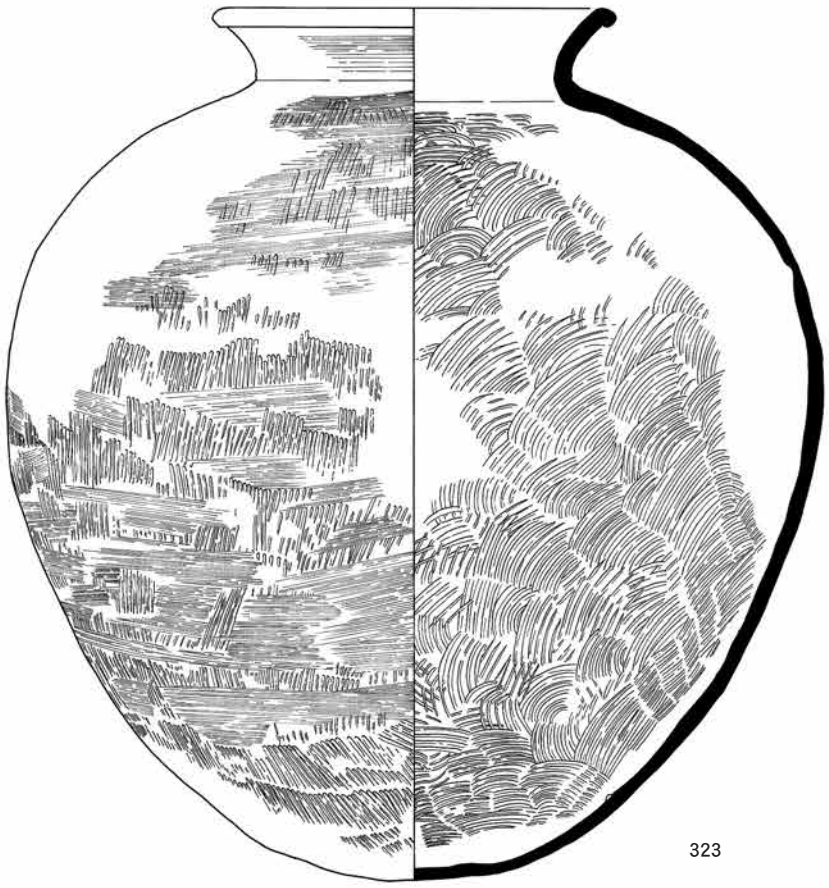


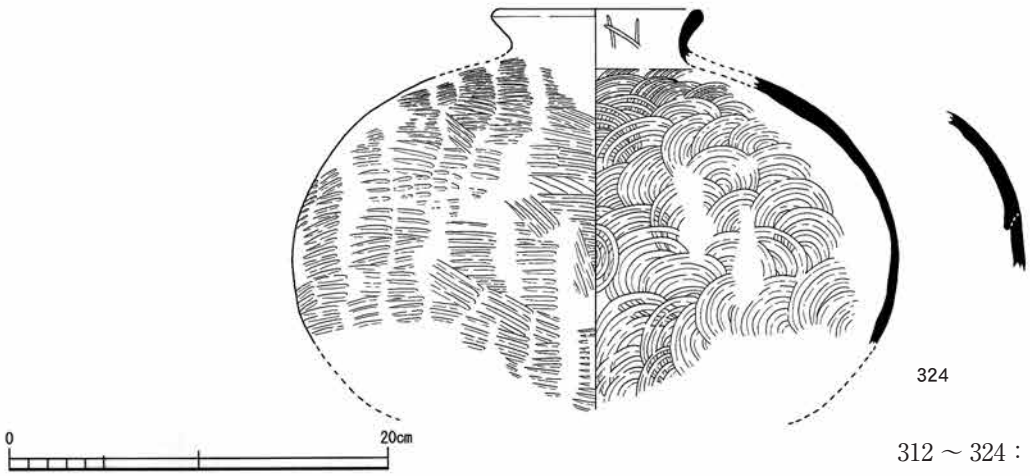


S7：SH23 出土石製品



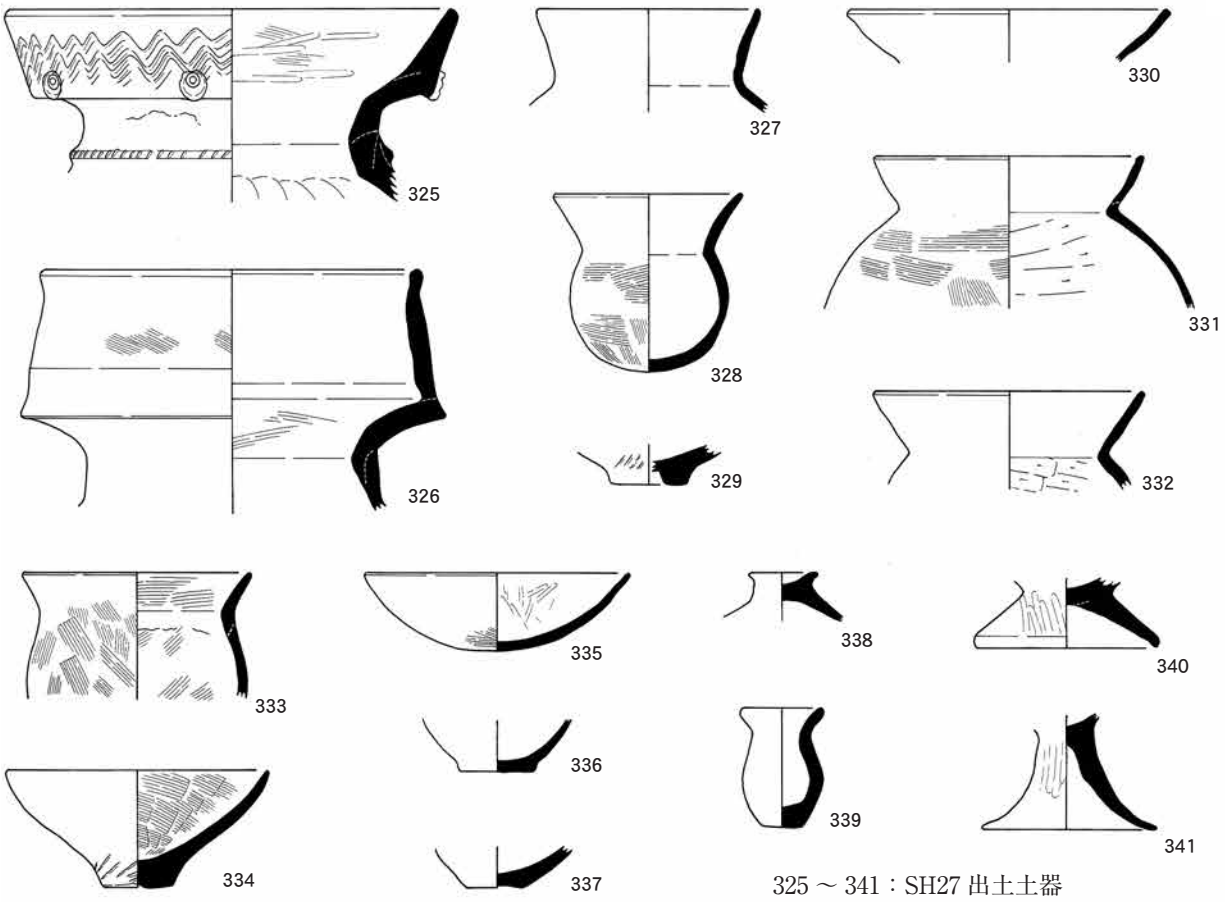




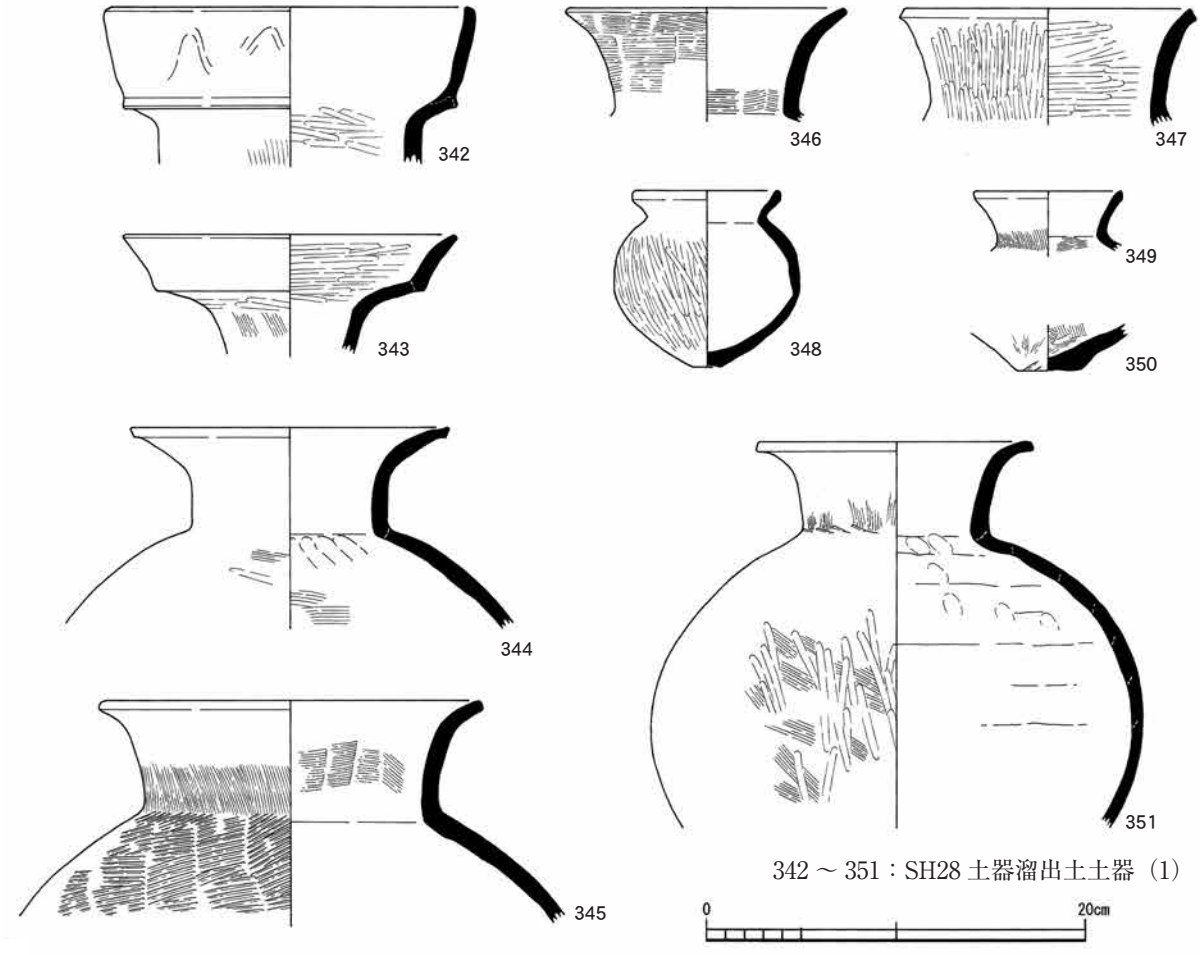


312 ～ 324：SH26 出土土器

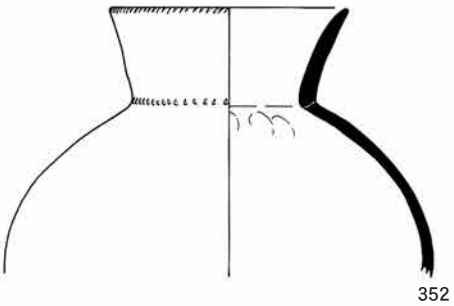
図版 15

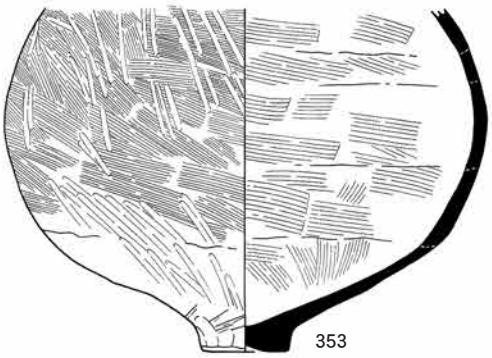


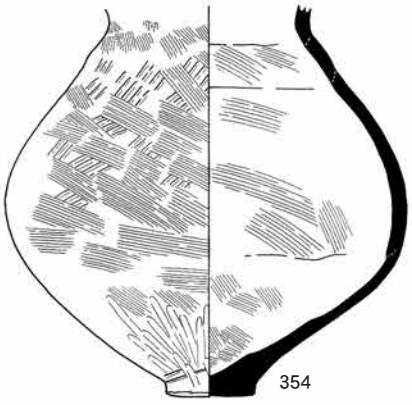
325 ～ 341：SH27 出土土器



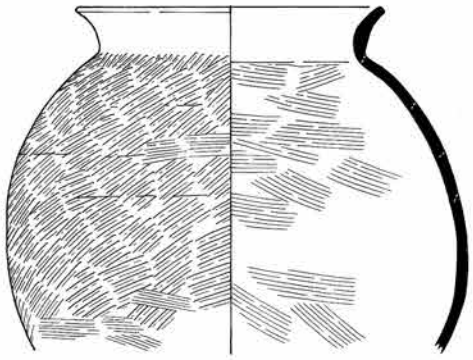
342 ～ 351：SH28 土器溜出土土器（1）

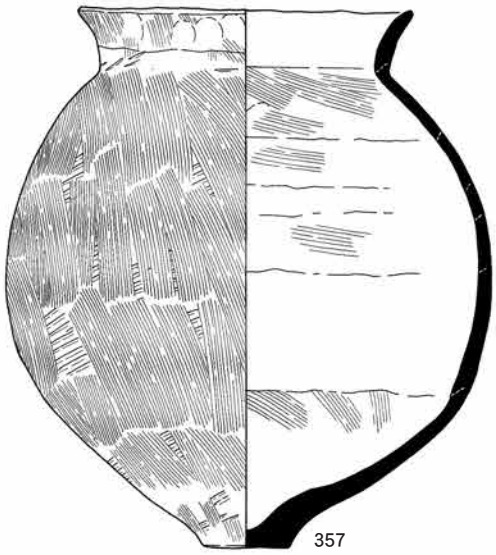

352

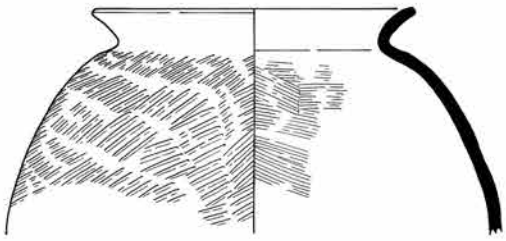

353

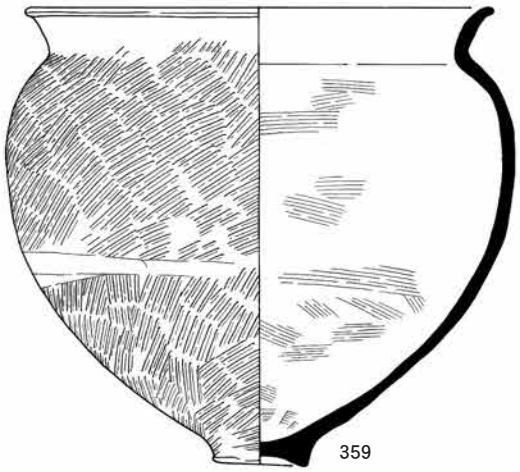

354

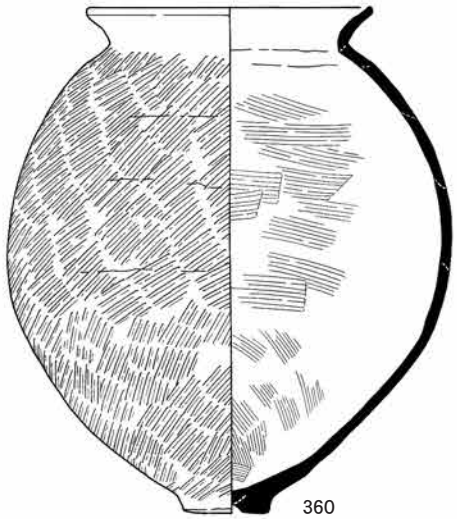
355


356


357

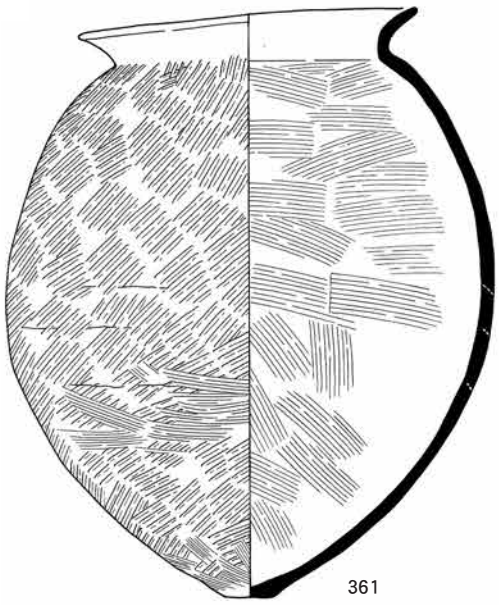

358

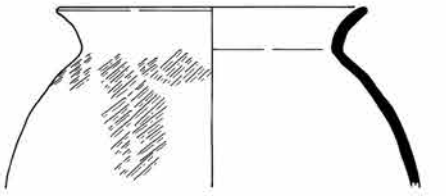

359

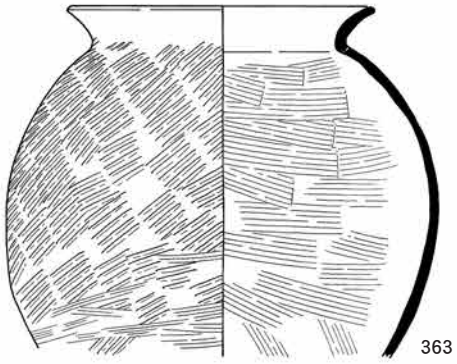

360

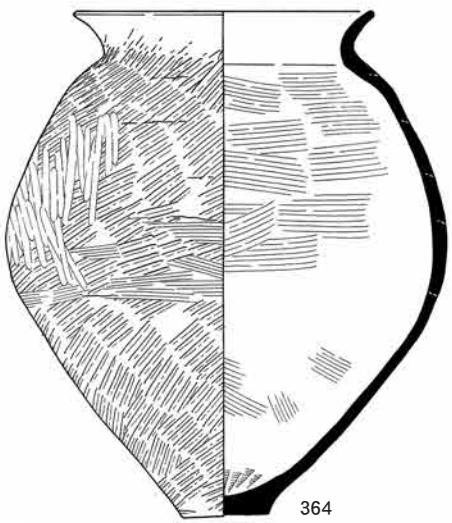
352 ～ 360：SH28 土器溜出土土器（2）

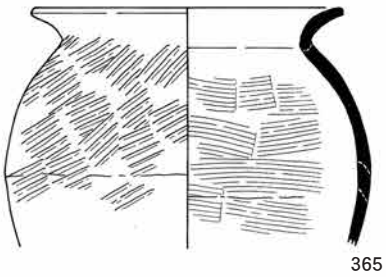
図版 17

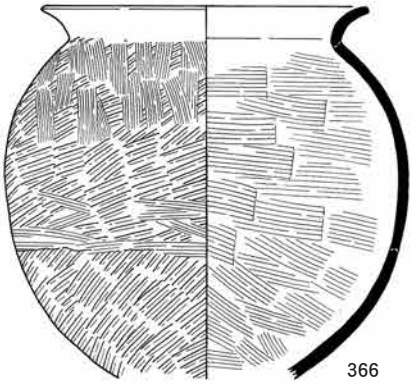


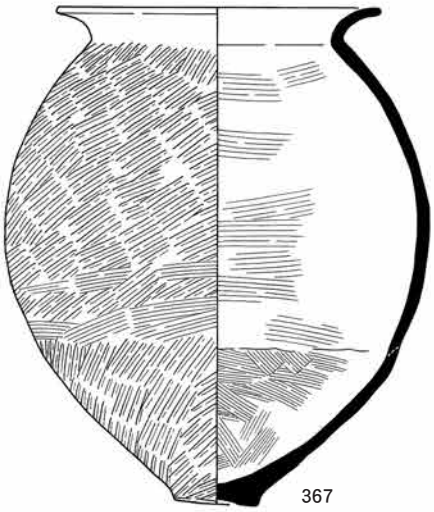


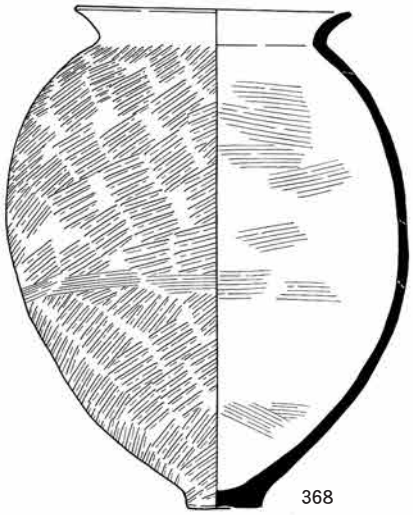




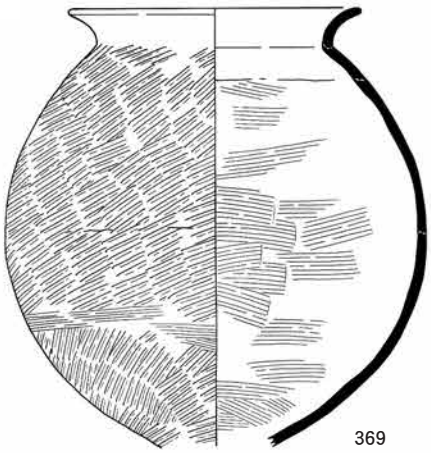


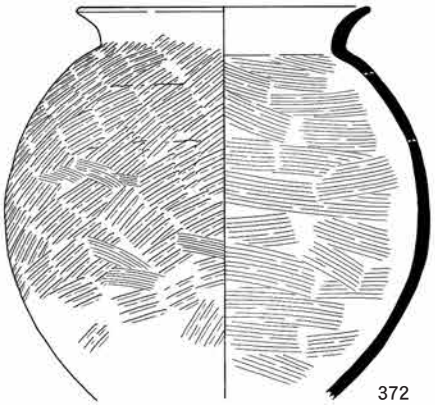


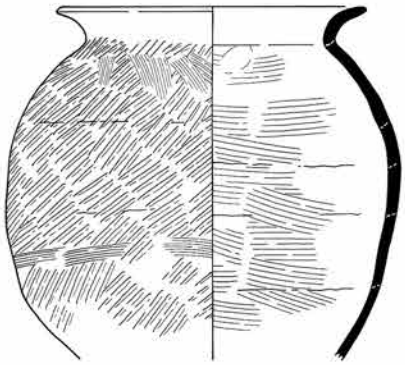


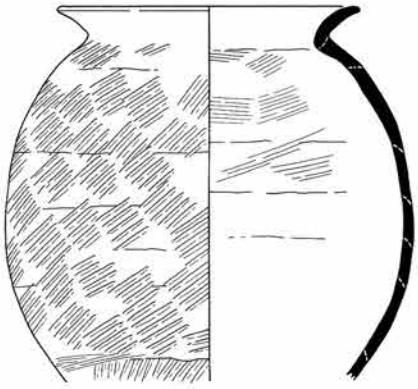


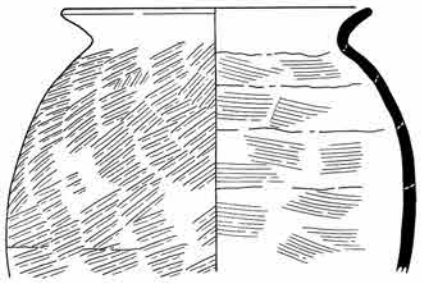
361 ～ 368：SH28 土器溜出土土器（3）

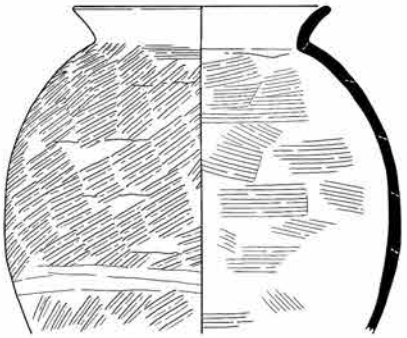

369


372

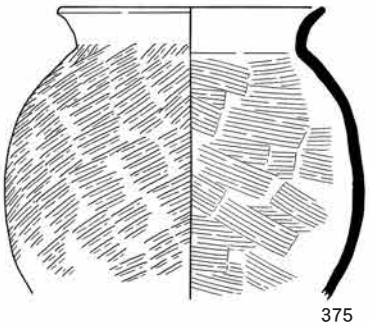

370

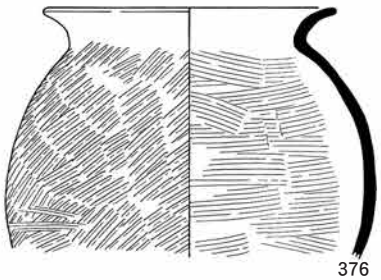

373

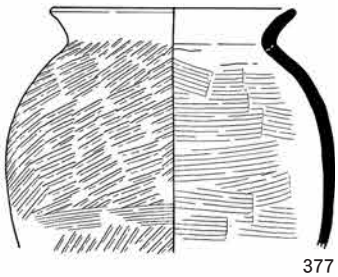

371

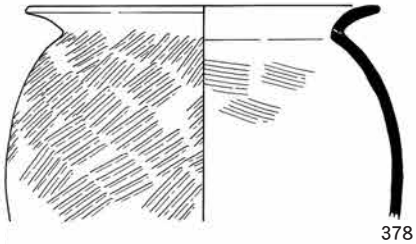

374

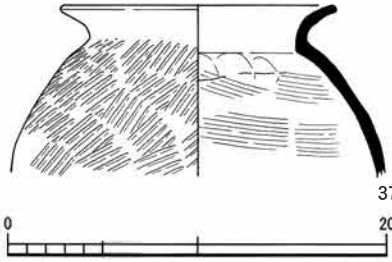
369 ～ 380：SH28 土器溜出土土器（4）

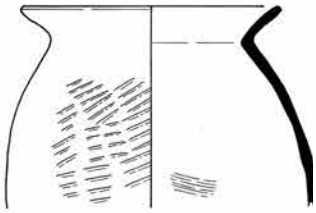

375


376

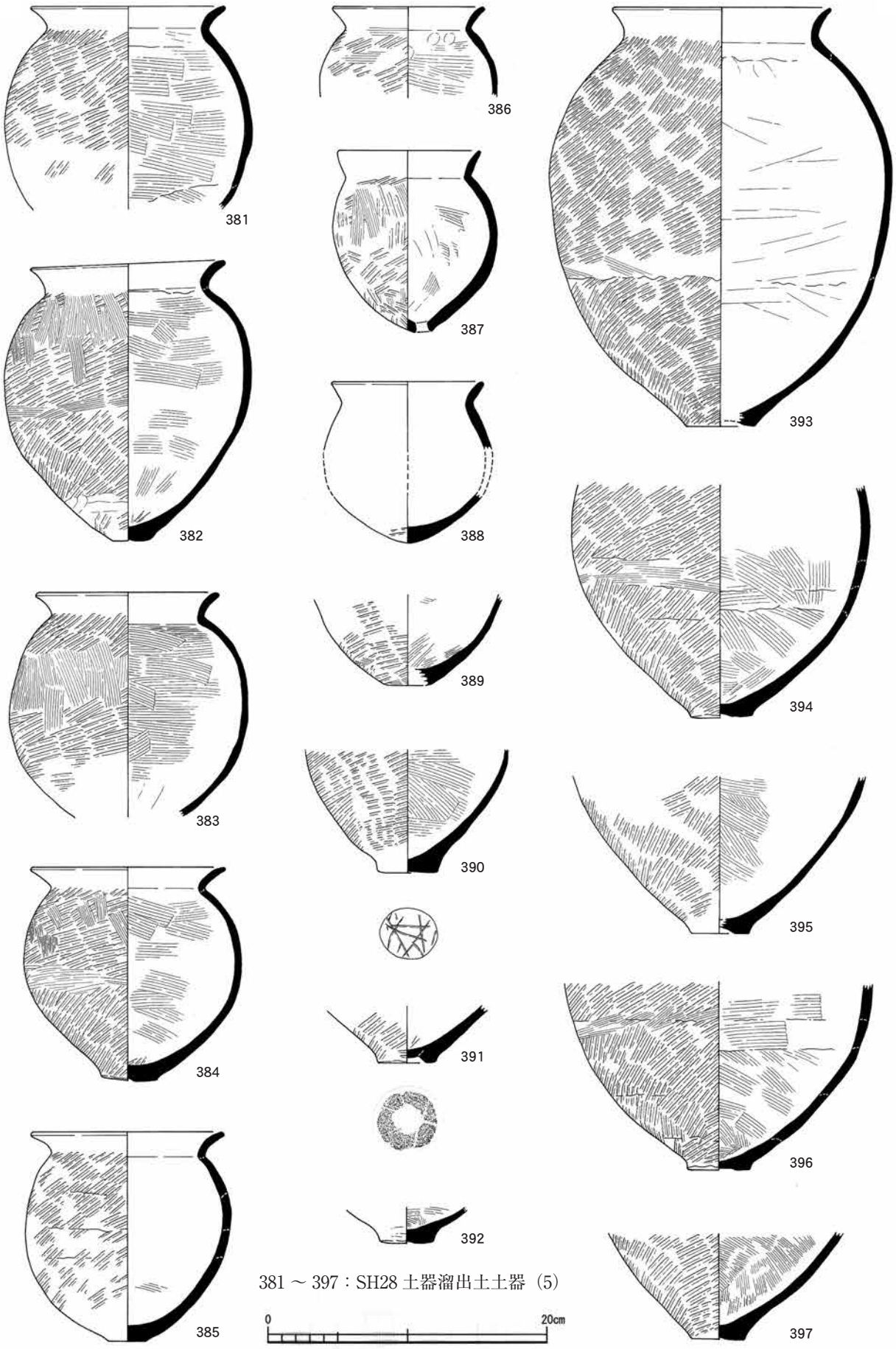

377


378

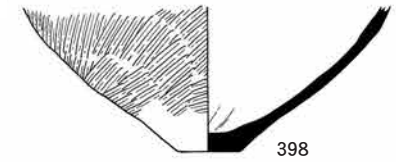

379


380

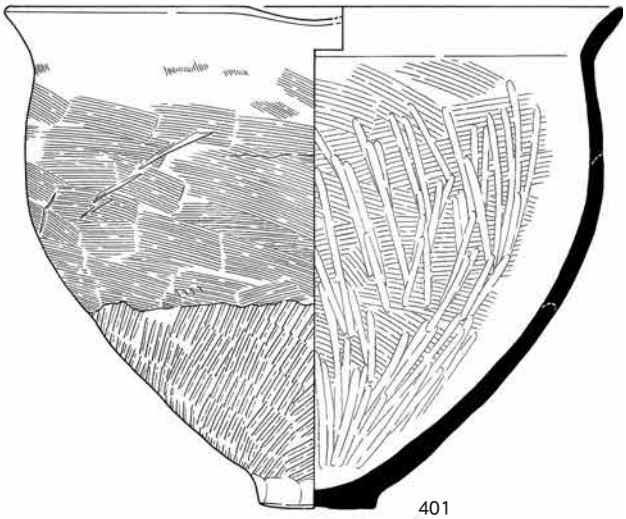
図版 19

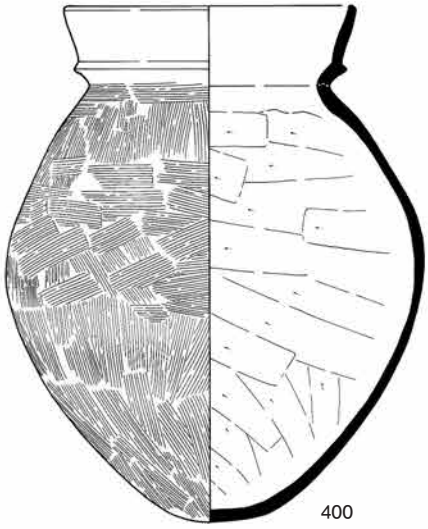


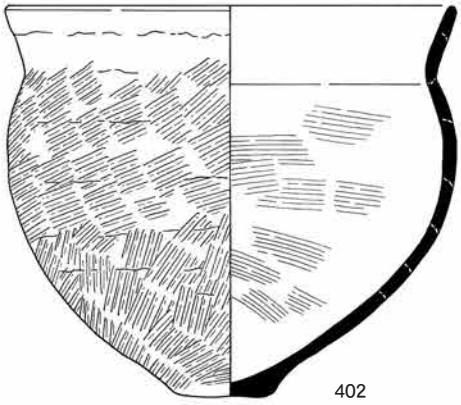
381 ～ 397：SH28 土器溜出土土器（5）

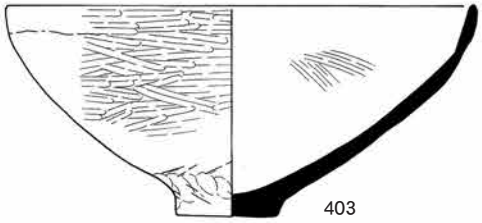

398

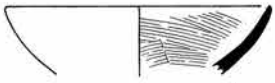
399


401

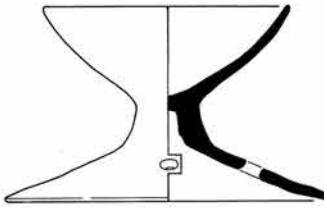

400

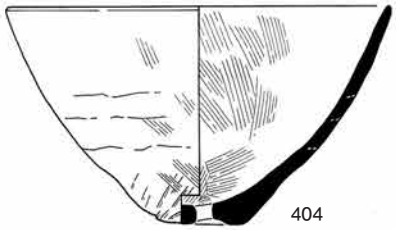

402

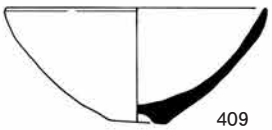

403

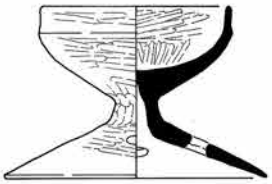

407

408

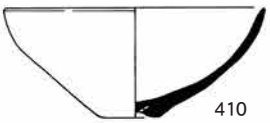

411


404


409


412

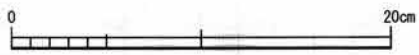
405


410

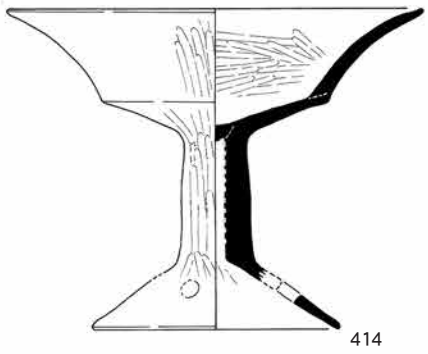
413

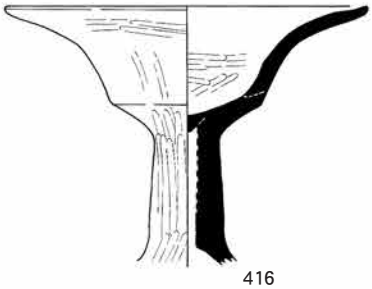
406

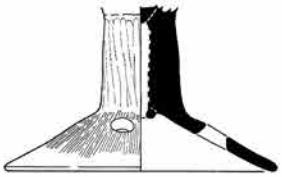
398 ～ 413：SH28 土器溜出土土器（6）

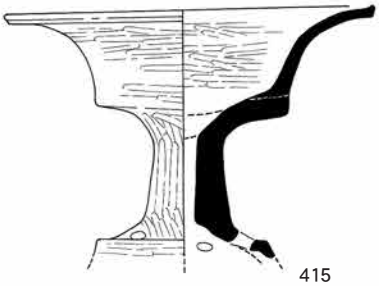


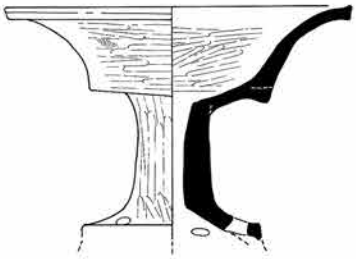
図版 21


414


416

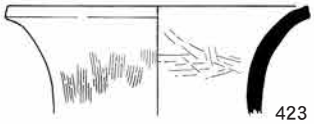

418


415

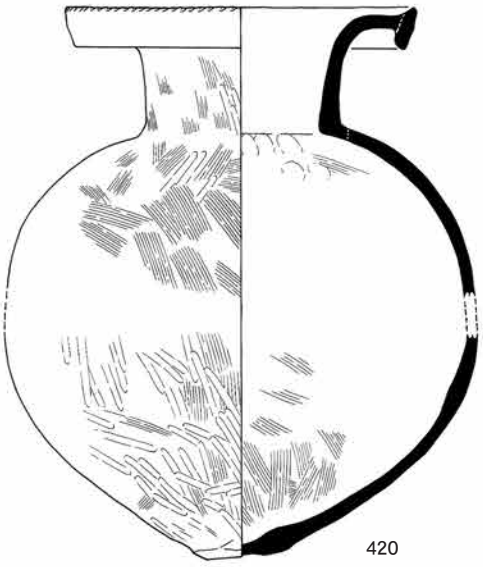

417

414 ～ 418：SH28
土器溜出土土器（7）

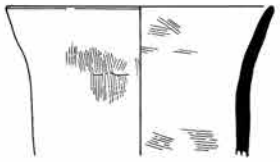
419


423

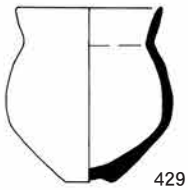
427

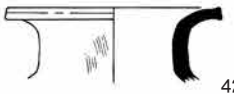

420

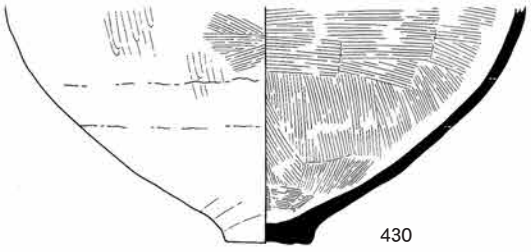
424


428

425


429

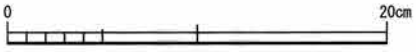

426

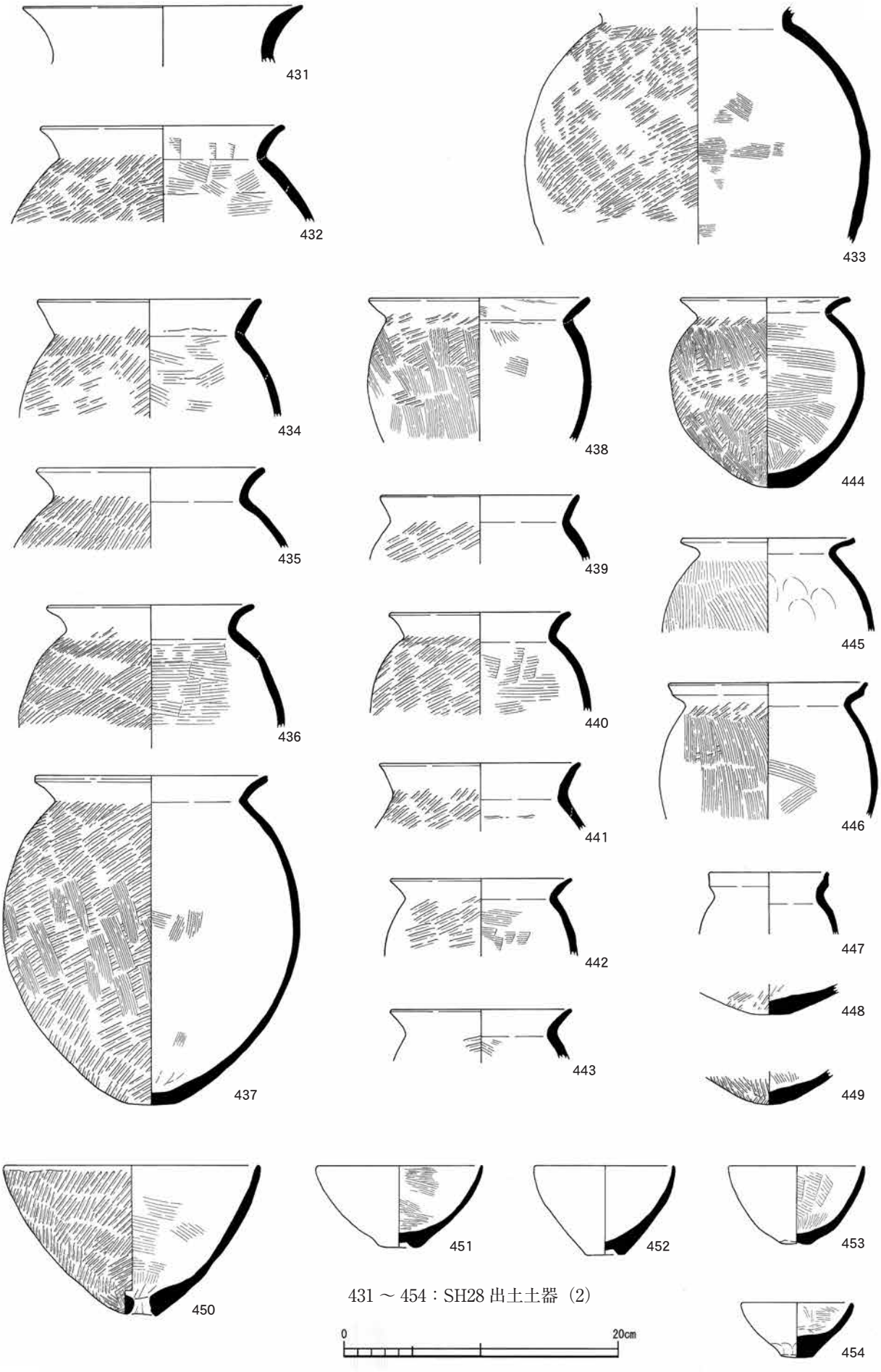

430

421

419 ～ 430：SH28 出土土器（1）

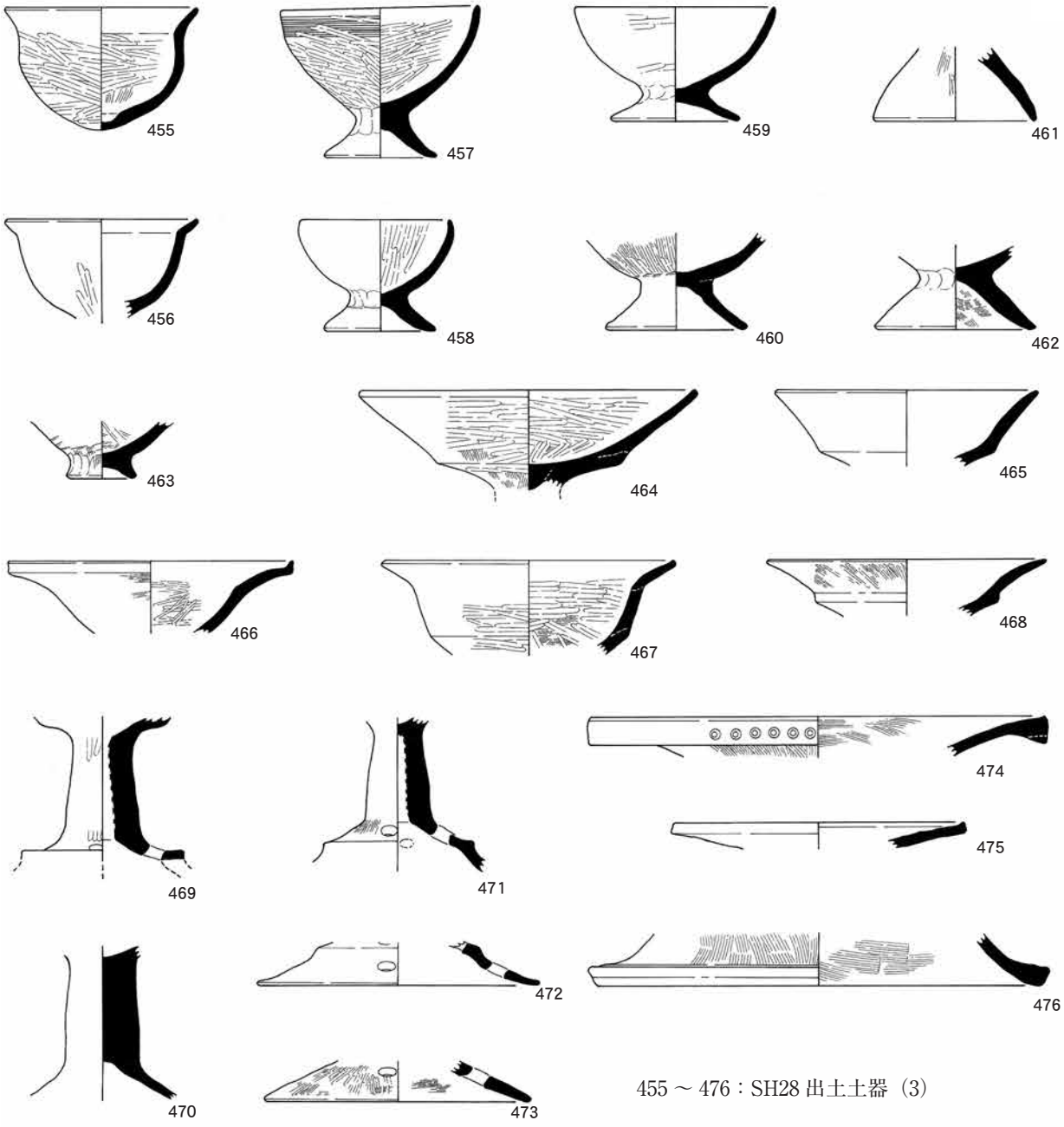
422





431 ～ 454：SH28 出土土器（2）

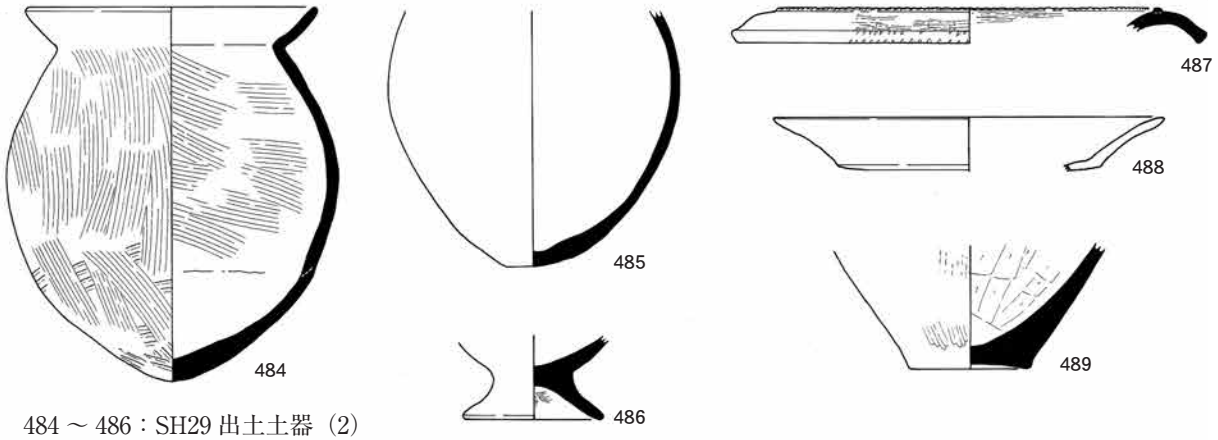
図版 23



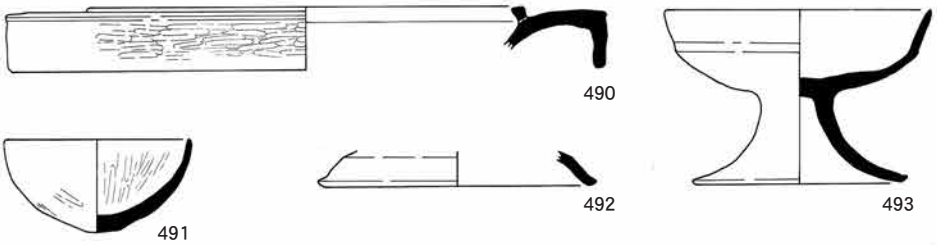
455 ～ 476：SH28 出土土器（3）

477 ～ 479：包含層（SH27・28）出土土器

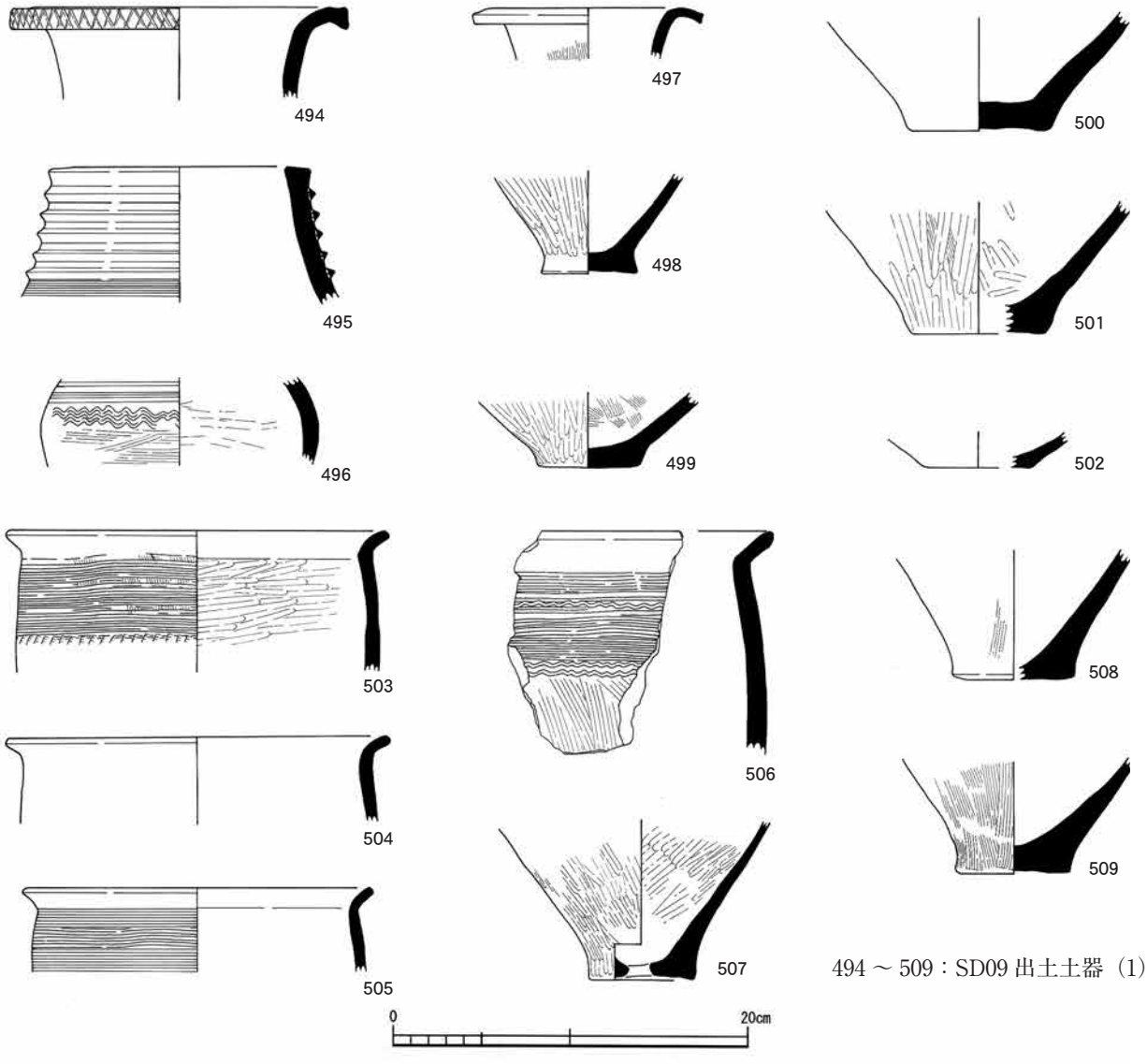
480 ～ 483：SH29 出土土器（1）



484 ～ 486：SH29 出土土器（2）

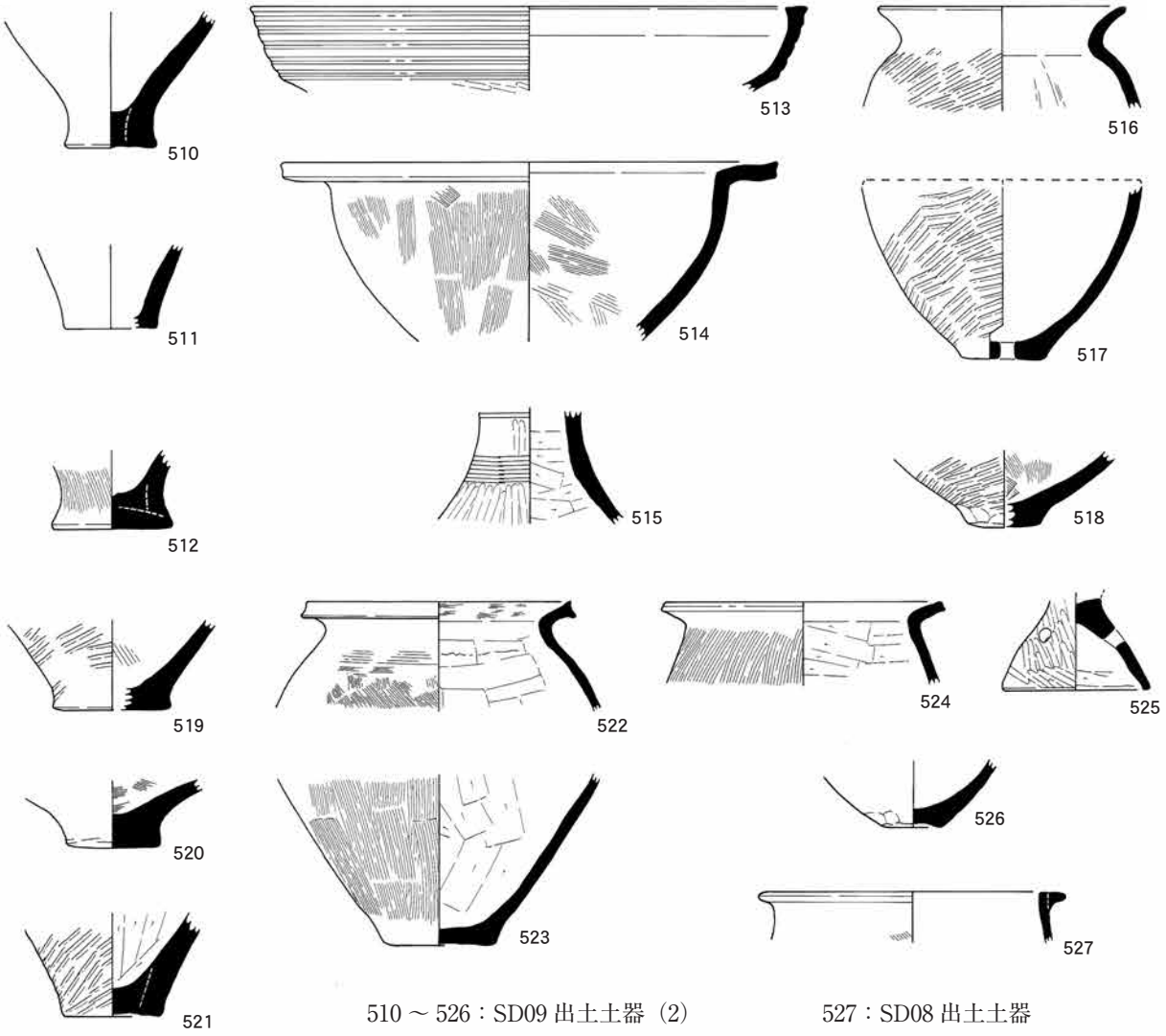


487：P10 出土土器
488：P11 出土土器
489・490：P09 出土土器
491：SK17 出土土器
492：SK19 出土土器
493：SK16 出土土器



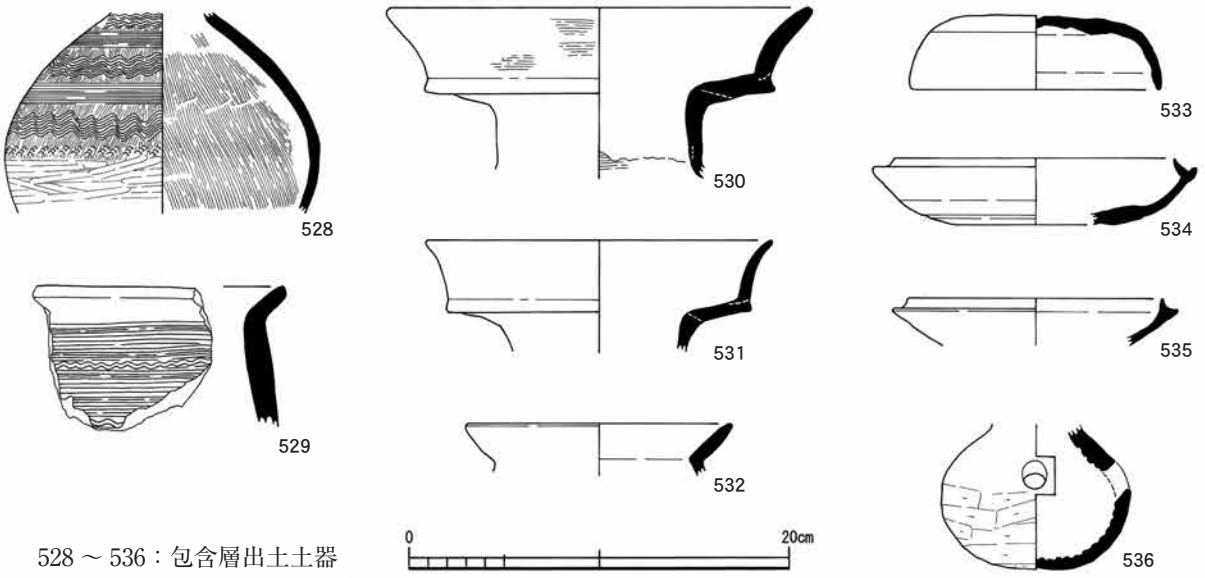
494 ～ 509：SD09 出土土器（1）

図版 25



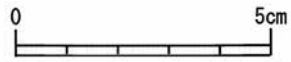
510 ～ 526：SD09 出土土器（2）

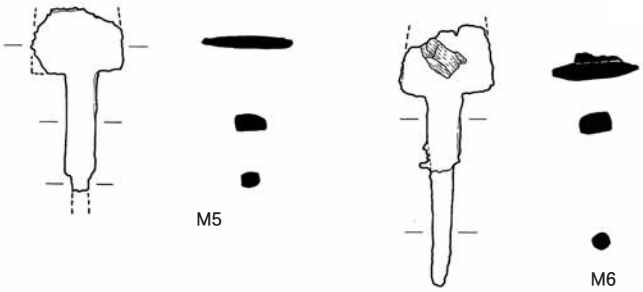
527：SD08 出土土器

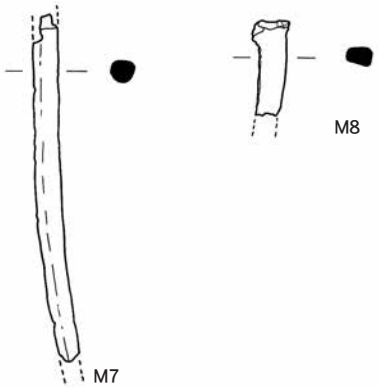


528 ～ 536：包含層出土土器

S8：SH28 出土石器
S9：SH27 出土石製品

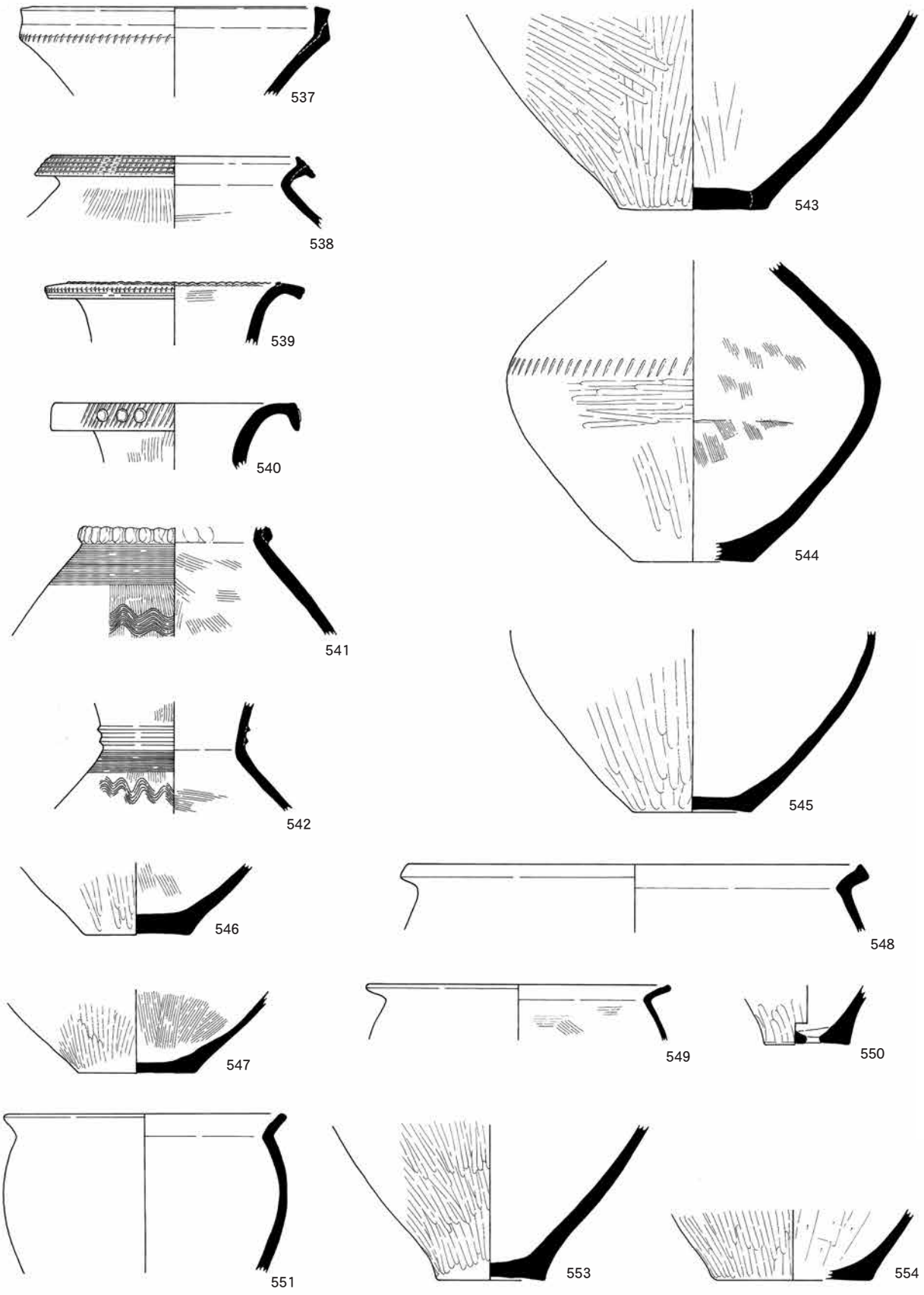




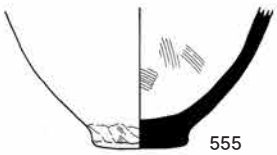


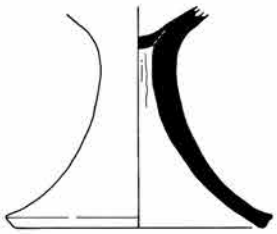
M5・M6：SH26 出土鉄製品
M7：SE01 出土鉄製品
M8：SH27 出土鉄製品

図版 27



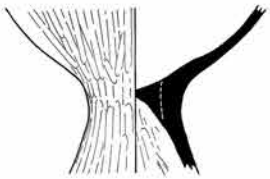
537 ～ 554：SD11 出土土器（1）

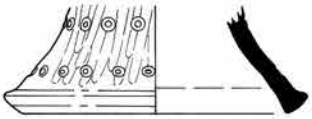

555

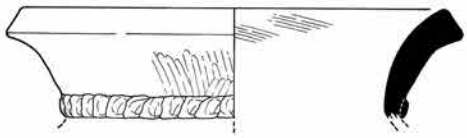

557

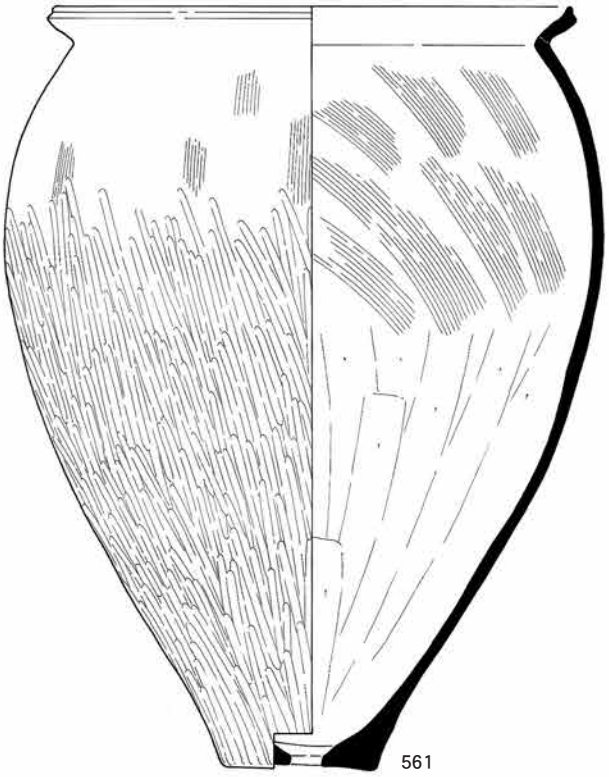
559

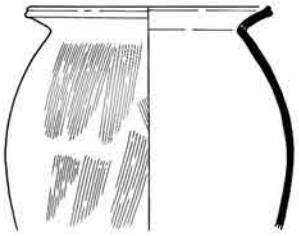
555 ～ 559：SD11 出土土器（2）


556

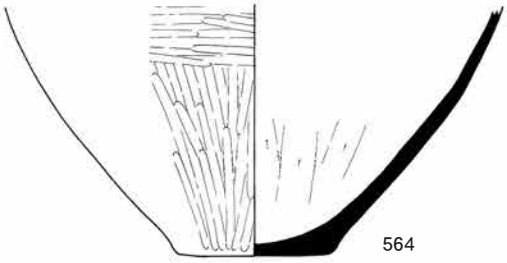

558

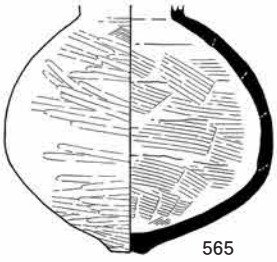

560

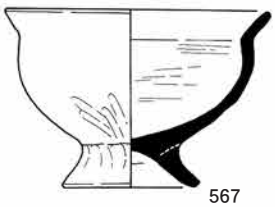

561

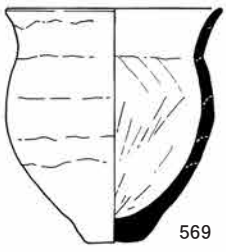

562

563


564


565


567


569

M9

566

568

560 ～ 569：包含層出土土器

M9：包含層出土銅銭

0 20cm

0 3cm

写 真 図 版

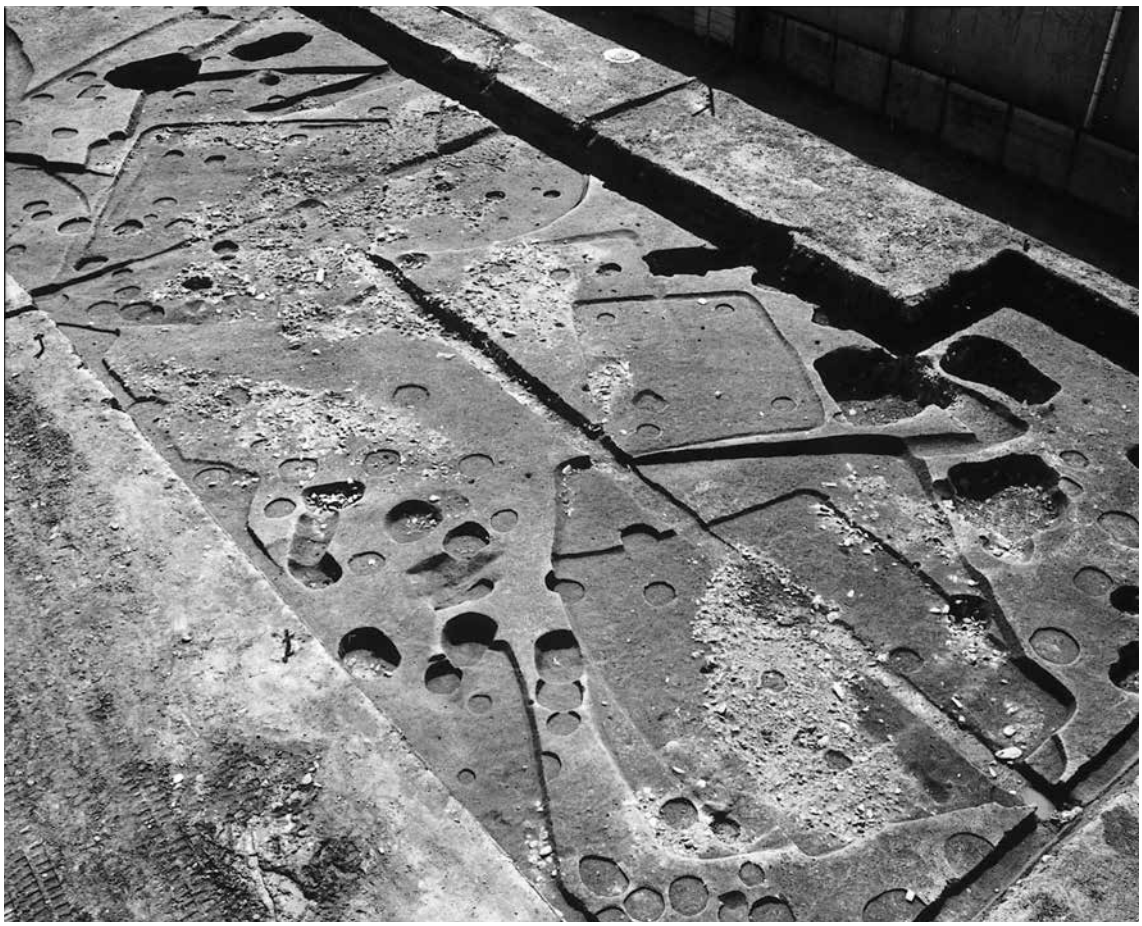
写真図版 1　遺構

A 区　俯瞰

A 区全景　北東から

A 区全景　北西から

写真図版３　遺構



西側住居跡群
～中央住居跡群
北西から

東側住居跡群
～中央住居跡群
北西から

SH01 全景
東から

SH01 全景
南から

写真図版 5　遺構

SH02 全景　東から

SH02 カマド
東から

（左）SH02 カマド
土器出土状況
東から
（右）SH02 カマド
土器出土状況
北東から

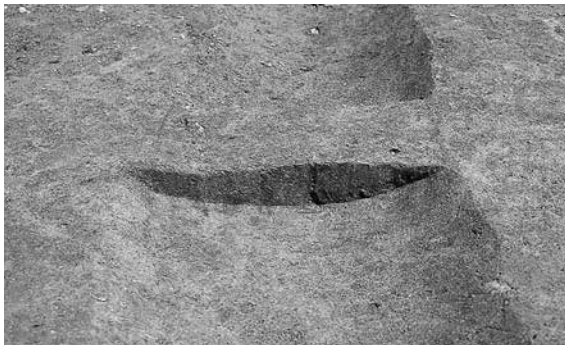
SH03 全景
南西から

SH03 全景
北西から

SH04 全景
南西から

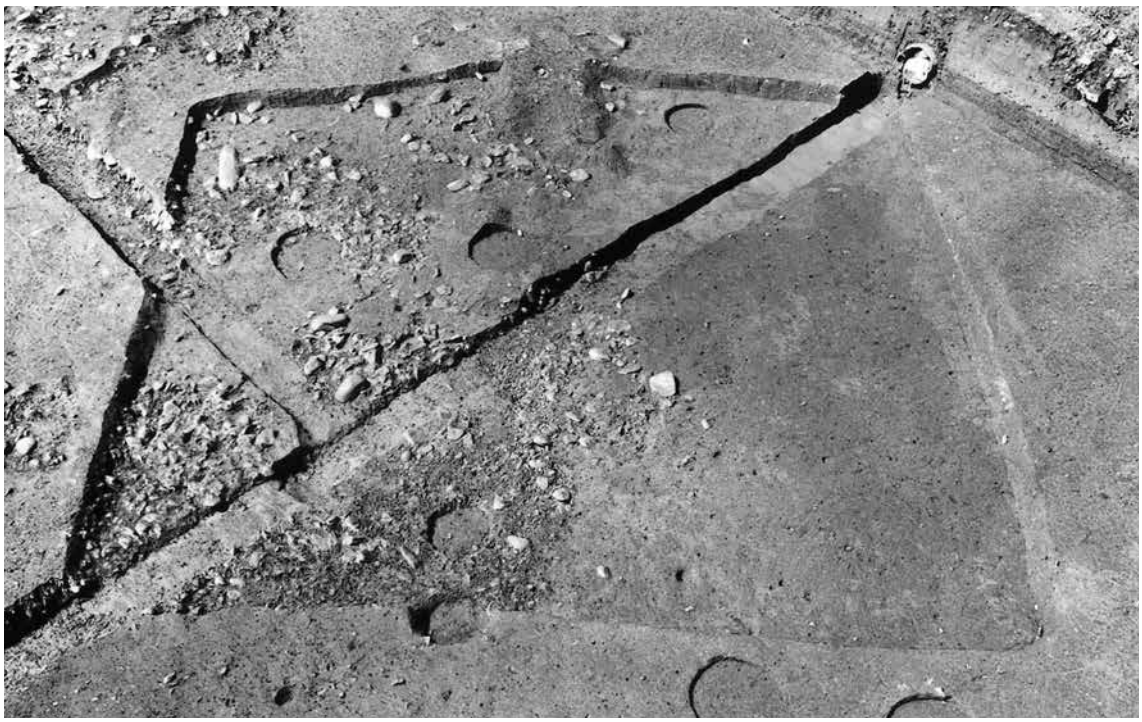
写真図版７　遺構

SH05 全景　北西から

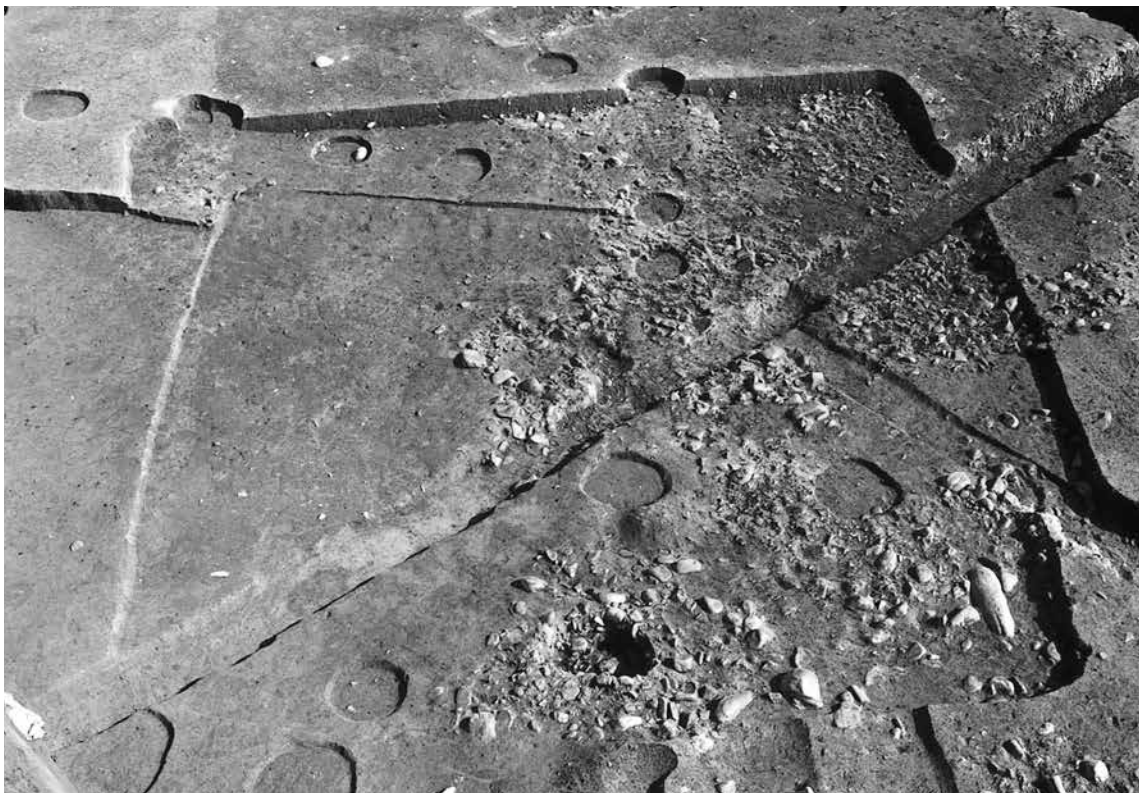


（左）SH05 周壁溝
　　断面　南から
（右）SH06 周壁溝
　　断面　南東から

SH06 全景
　　南東から



SH07 全景
南東から



SH08 全景
北西から

SH09 全景
南から

写真図版 9　遺構

SH10 全景
南東から

SH10 全景
南西から

（左）SH10 カマド
上面土器出土状況
東から
（右）SH10 カマド
土器出土状況
南東から

SH11 全景
北西から

SH11 カマド上面
北西から

SH11 カマド
縦断面　南西から

写真図版 11　遺構

（左）SH11
47 出土状況
南東から
（中）SH11
51 出土状況
南東から
（右）SH11
44 出土状況
南東から

SH12　炭化材
検出状況　北東から

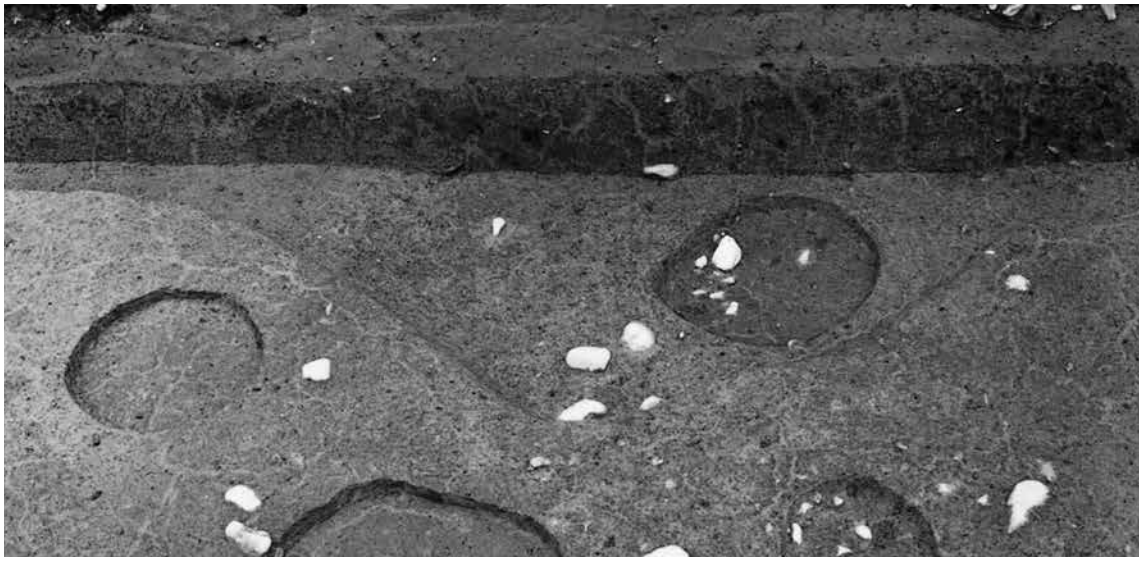
SH12 全景
北東から

（左）SH12
炭化材検出状況
南東から
（右）SH12
56・60 出土状況
南から

（左）SH12
57 出土状況
南西から
（右）SH12
58 出土状況
南西から

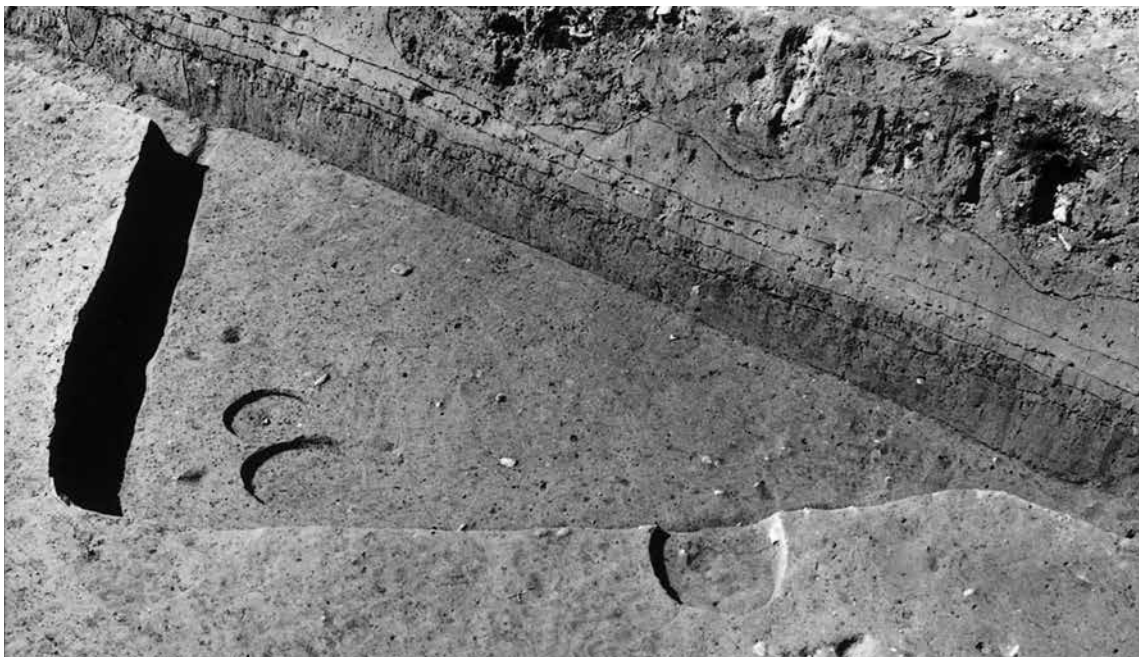
SH13 全景
北から

SH14 全景
南西から



SH15 全景
南から

写真図版 13　遺構



SH16 全景
南東から

SH16 全景
南から

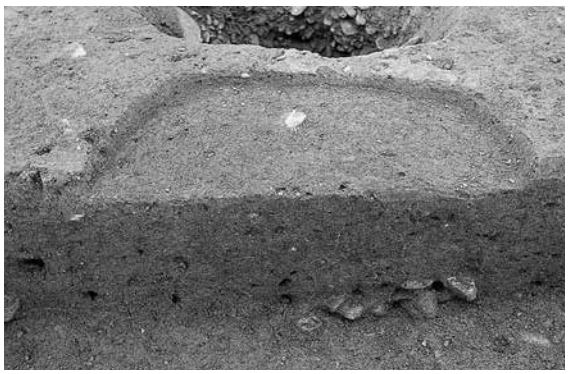
SH17 全景
南から

（左）SH17　P1 断面
北東から
（右）SH17　P2 断面
東から

SH18 全景
南から

SH19 全景
北から

写真図版 15　遺構



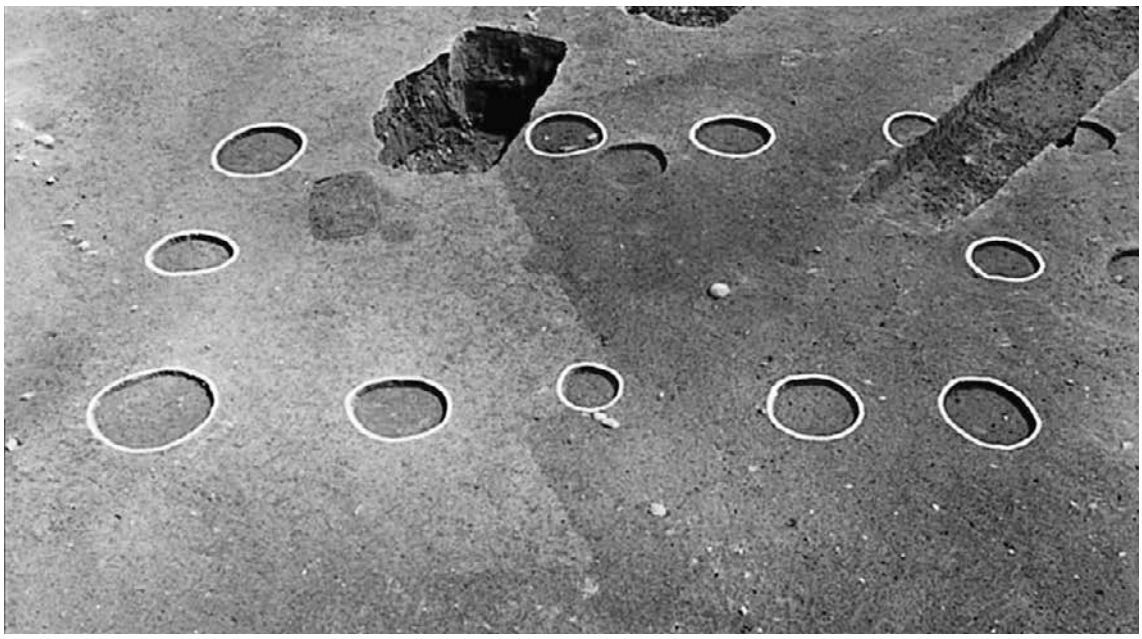
（左）SB01
P4 断面　南東から
（右）SB01
P5 断面　南東から

（左）SB01
P6 断面　南東から
（右）SB01
P7 断面　南東から

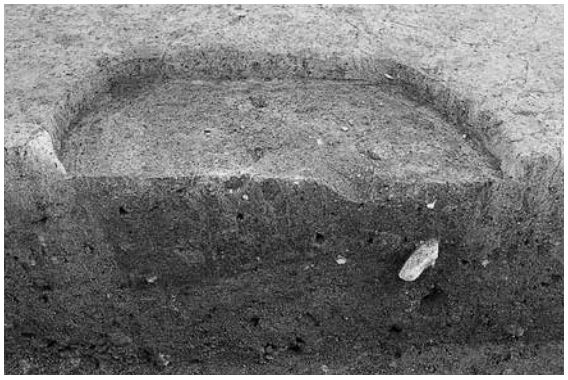
SB04・SB05 全景
北西から

SB04 全景　北から

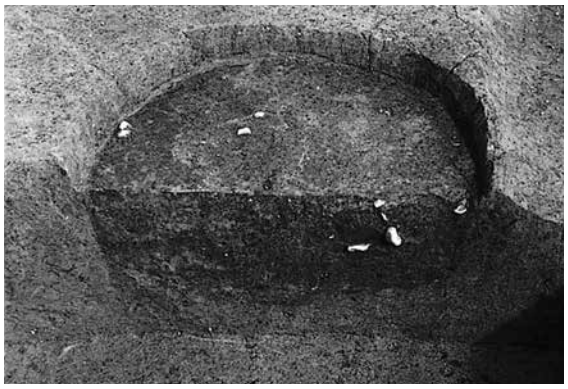
（左）SB04
P3 断面　東から
（右）SB04
P5 断面　北西から

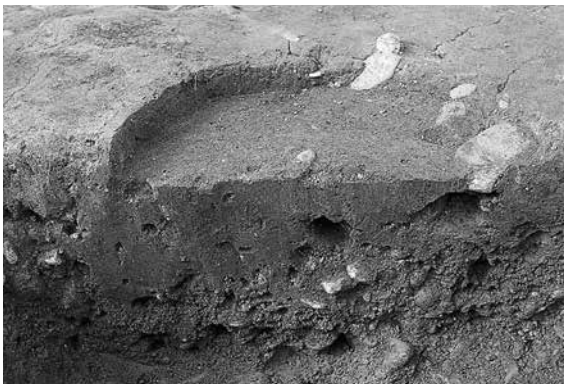


SB05 全景
北西から

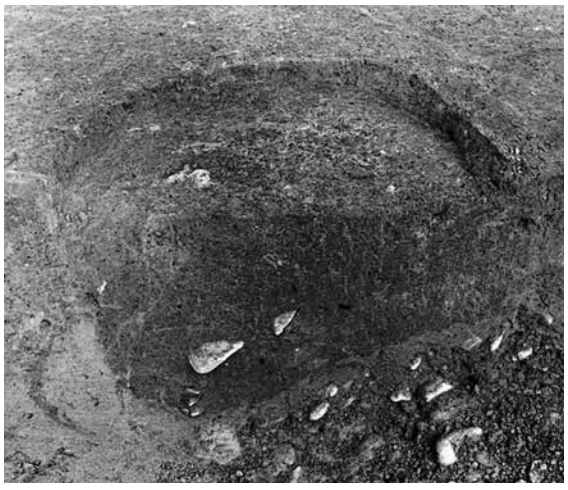


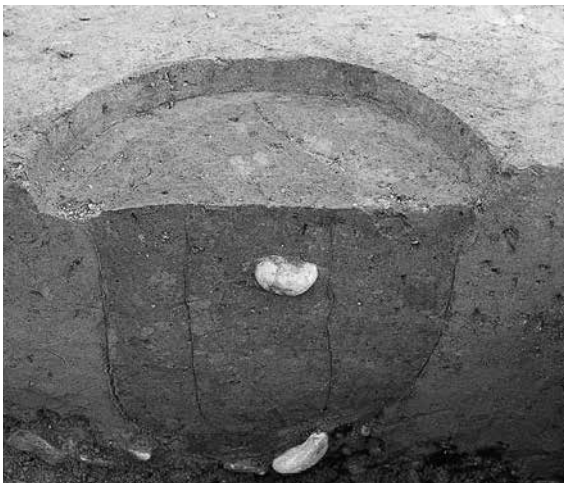
（左）SB05
P4 断面　北西から
（右）SB05
P5 断面　北西から





（左）SB05
P7 断面　南東から
（右）SB05
P9 断面　南東から

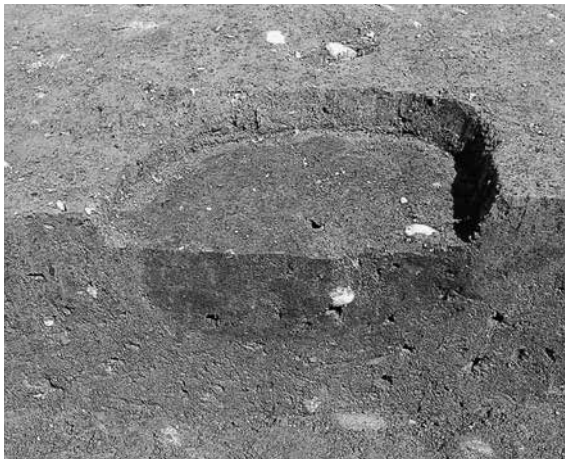


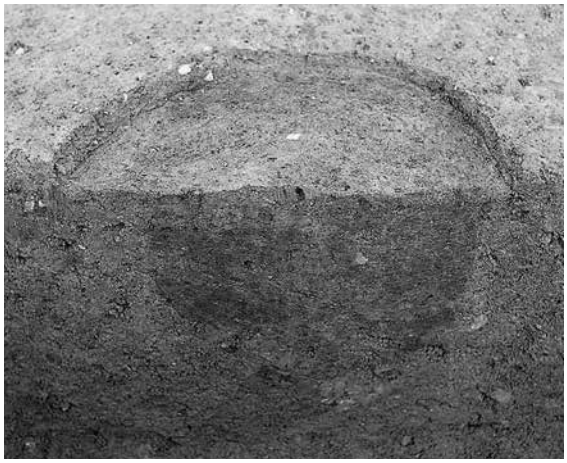


（左）SB05
P10 断面　西から
（右）SB07
P1 断面　南から

写真図版 17　遺構

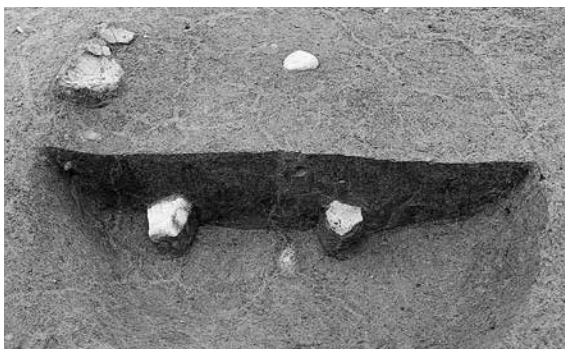
SB09 全景
南西から





（左）SB09
P4 断面　南東から
（右）SB09
P5 断面　南西から

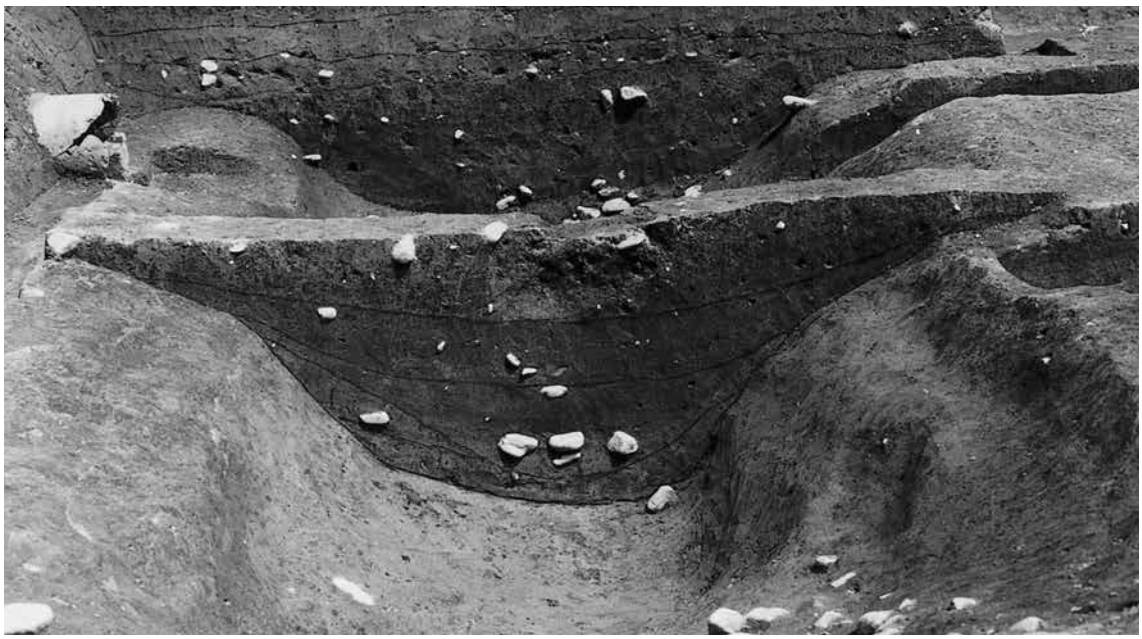
（左）SK01
土器出土状況
東から
（右）SK01　断面
西から



（左）SK02　断面
北から
（右）SK03　断面
北西から

（左）SK06 断面　南東から
（右）SK06 炭層断面　南東から

SK09 全景　南から



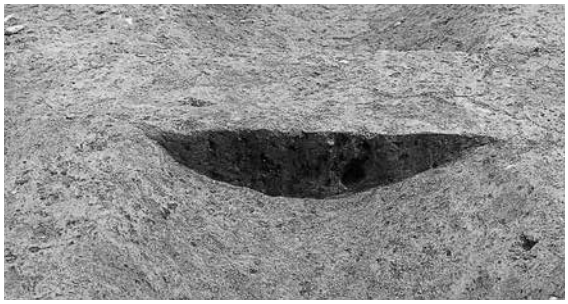
SK09 断面　西から

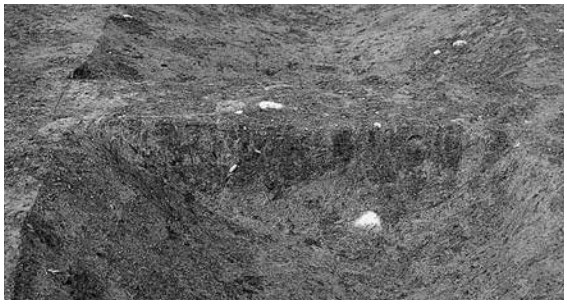
写真図版 19　遺構

（左）SD01 断面
南東から
（右）SD01 土器
出土状況　北西から

SD01 内土器出土状況
南西から

（左）SD03
144 出土状況
北から
（右）SD03
146 出土状況
北から

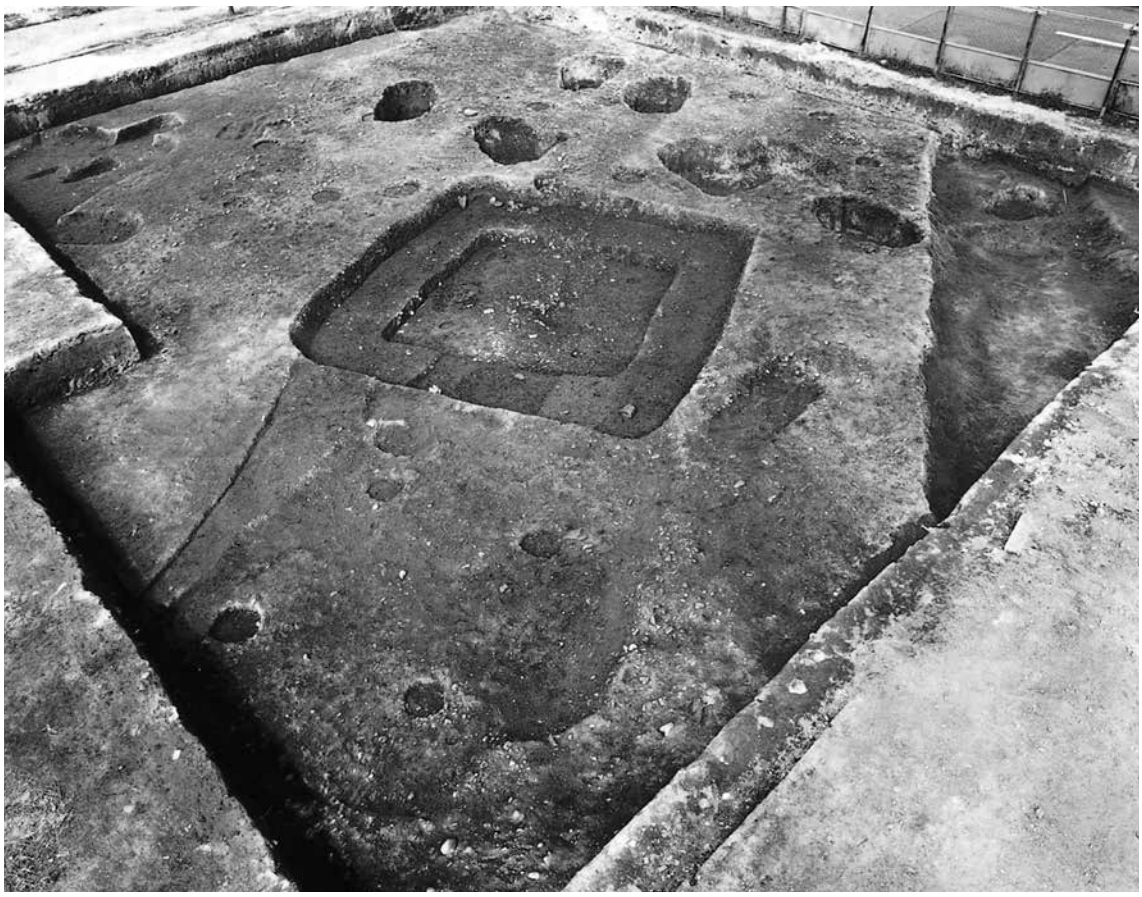




（左）SD04 断面
北西から
（右）SD05 断面
南西から

B 区俯瞰

写真図版 21　遺構



B 区全景　南東から

B 区全景　北東から

SH20 全景
南東から

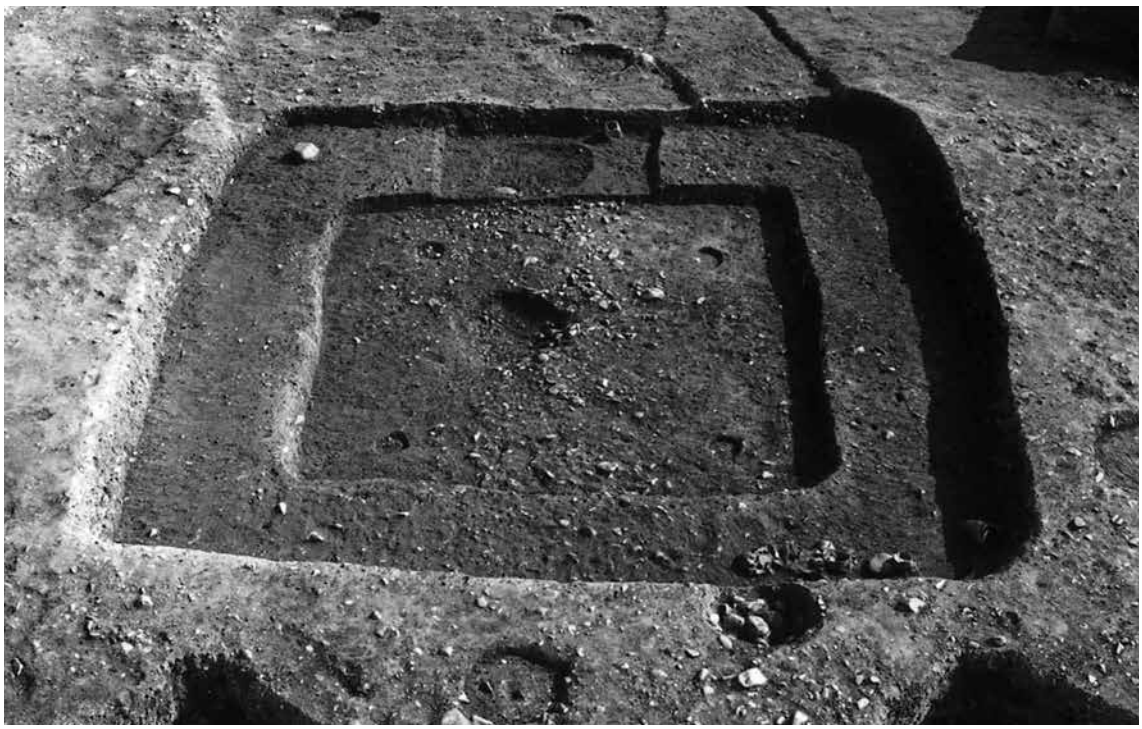
SH20 全景
北から

写真図版 23　遺構

SH21 全景　南東から

SH22 全景　南から

SH22 全景　東から



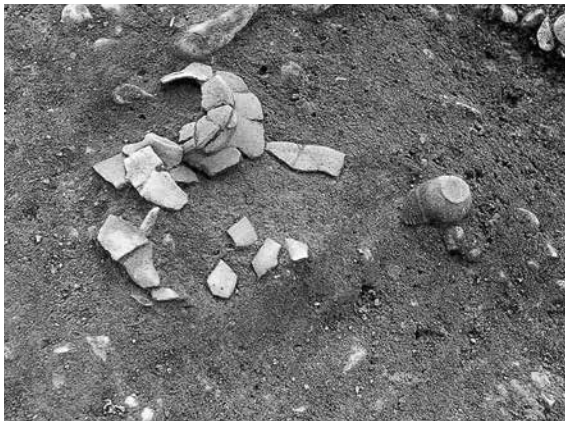
SH22 全景
北から

SH22　高床部
途切れ部　北から

（左）SH22
土坑 2 断面　北から
（右）SH22　189
出土状況　西から

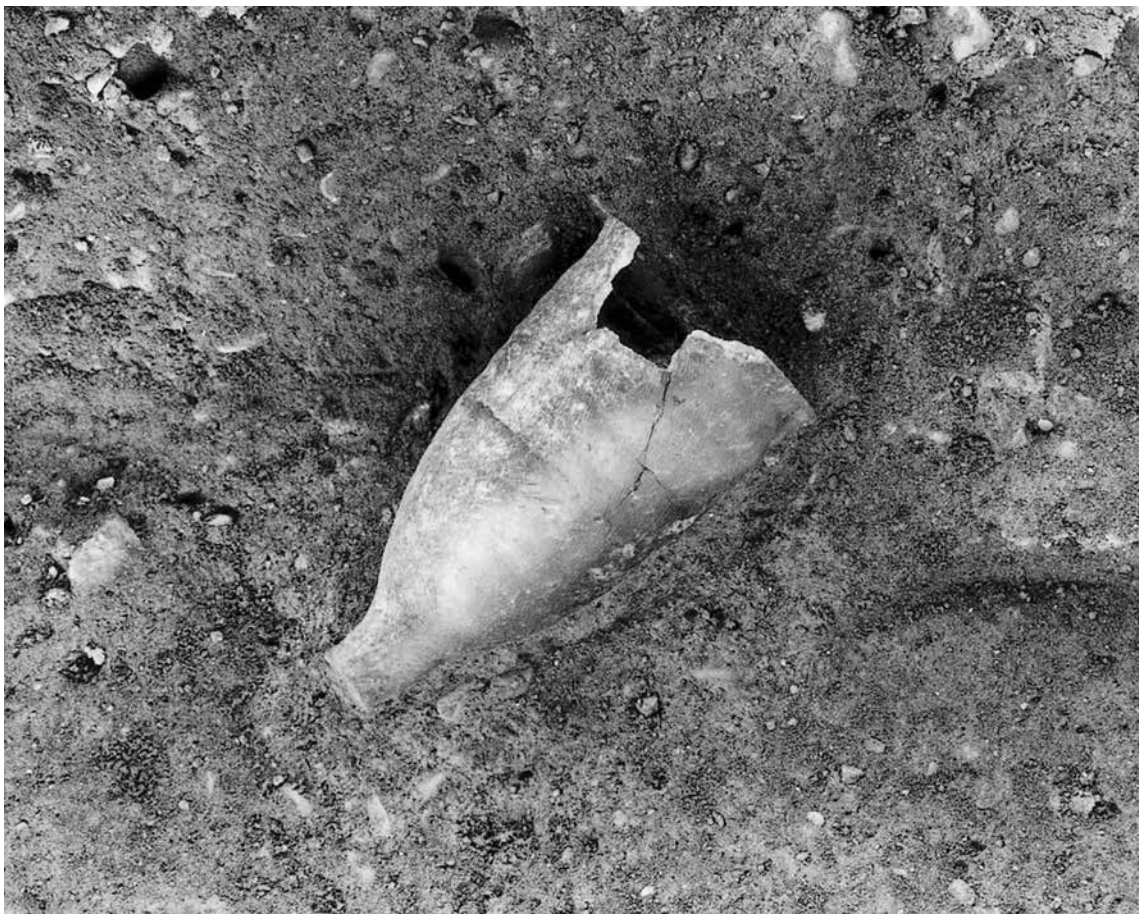
写真図版 25　遺構

SH22　中央土坑
北から



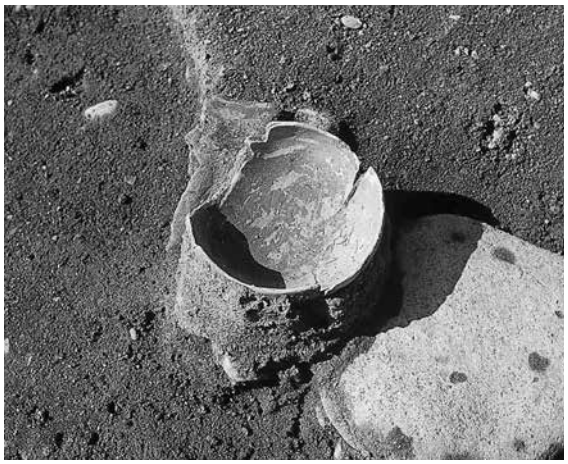
（左）SH22
226 出土状況
東から
（右）SH22
完掘状況
東から

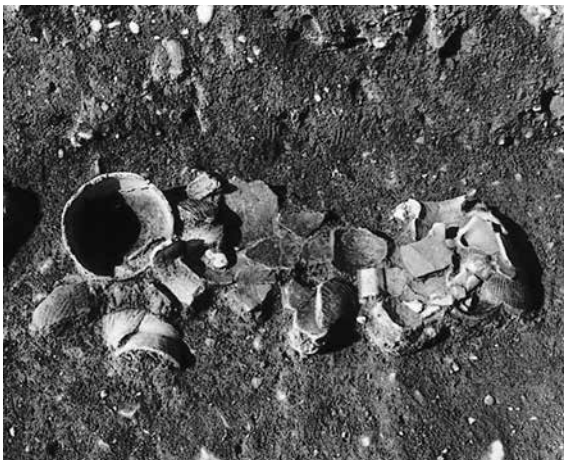
SH22　高床部
土器出土状況
南東から



SH22
224 出土状況
東から

SH22
高床部土器出土状況
南から





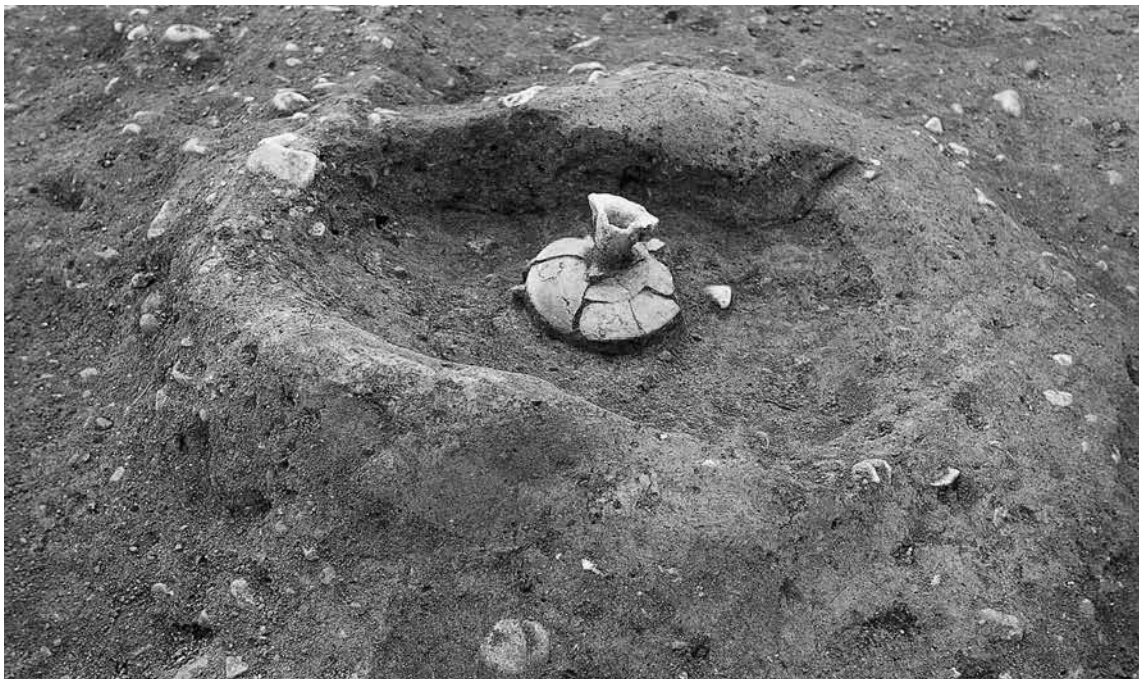
（左）SH22
237 出土状況
南から
（右）SH22
191・204・205
出土状況　南から

写真図版 27　遺構

SH23 全景　西から

SH23 全景　北から

SH23　カマド全景
西から



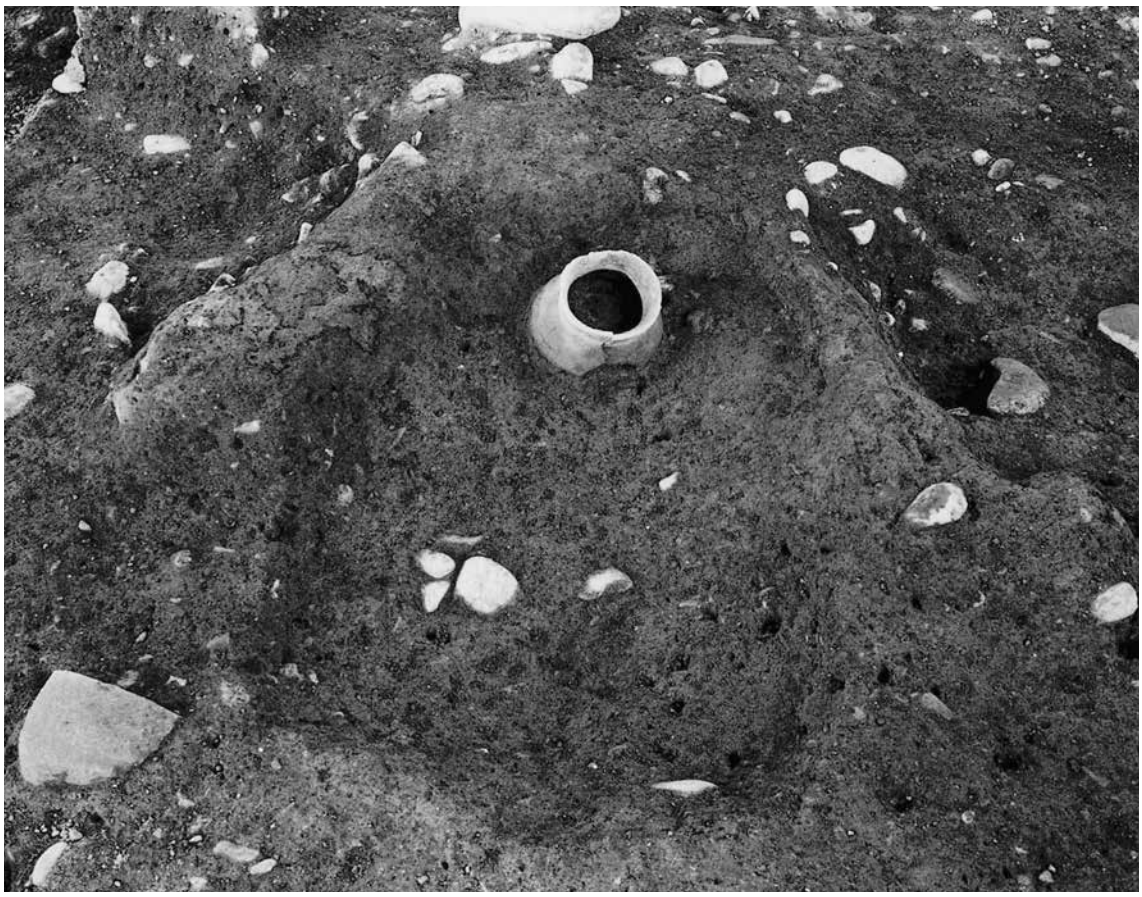
SH23　カマド全景
北から

（左）SH23 カマド
完掘後　西から
（右）SH23　P4
断面　西から

写真図版 29　遺構

SH24 全景　東から

SH24 全景　南から

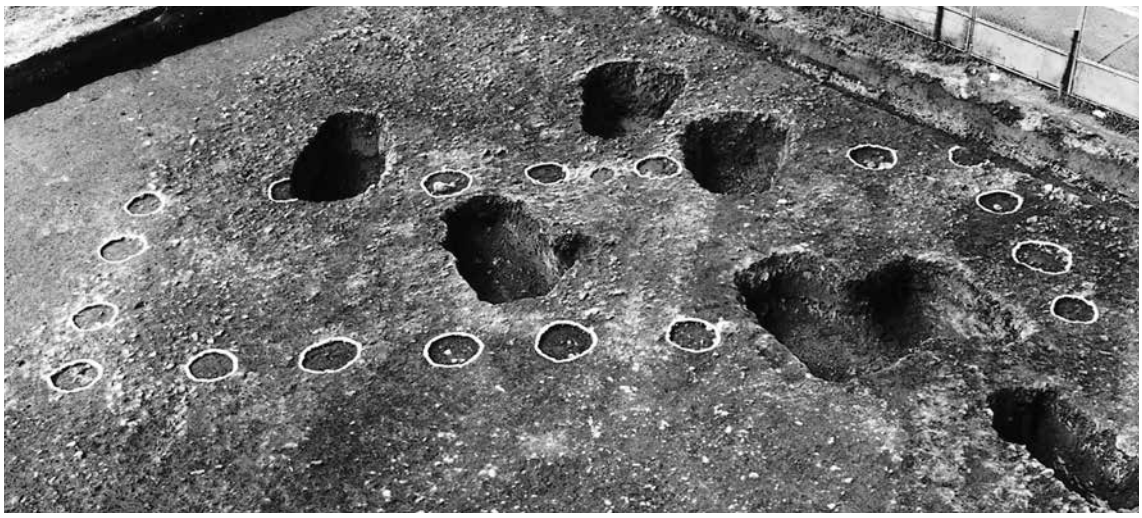


SH24　カマド全景
南から

SH24　カマド全景
南から

（左）SH24
カマド上面　南から
（右）SH24
カマド完掘　南から

写真図版 31　遺構



SB10 全景
南東から

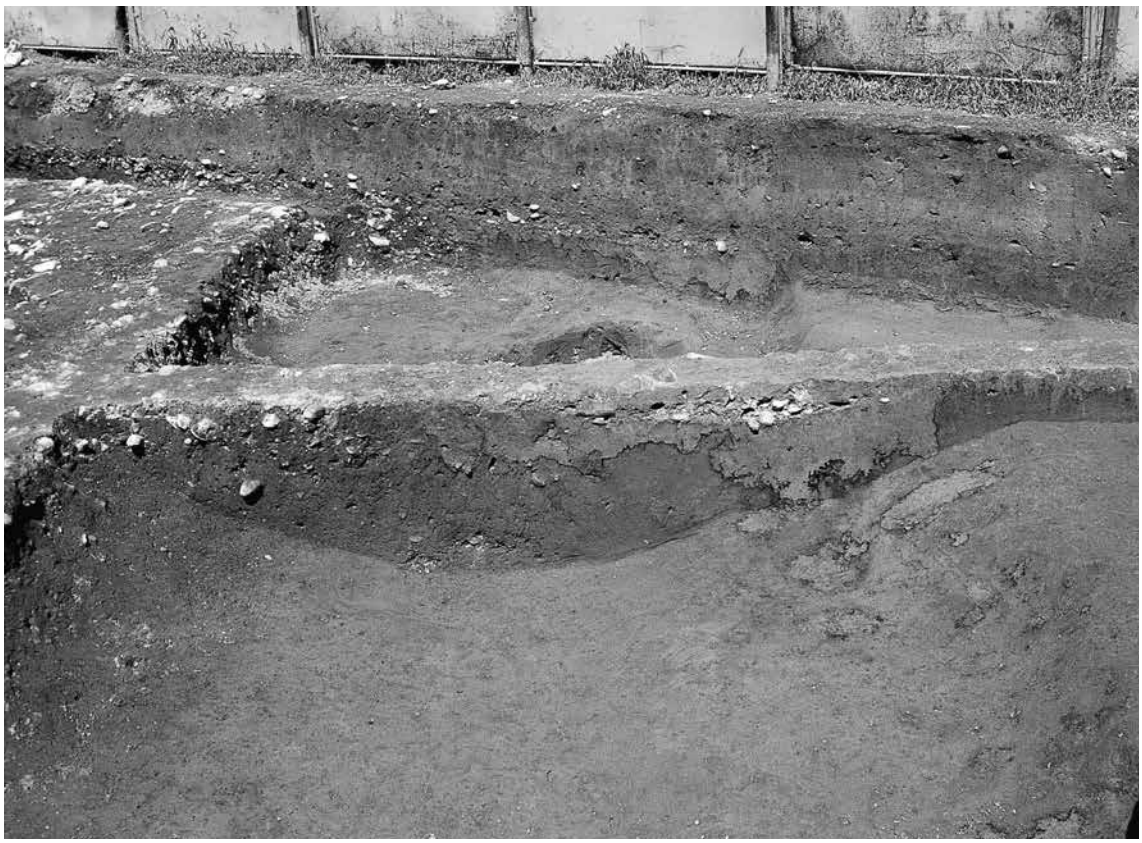
（左）SB10
P3 断面　南東から
（右）SB10
P4 断面　北西から

（左）SB10
P6 断面　北西から
（右）SB10
P7 断面　北西から

（左）SB10
P11 断面　北東から
（右）SB10
P13 断面　南東から

（左）SB10
P14 断面　南東から

（右）SB10
P18 断面　南東から



SD06 断面
南東から

写真図版 33　遺構

C 区俯瞰

C 区全景　南西から

C 区全景　南東から

写真図版 35　遺構

SH26 全景　南から

SH27 全景　北西から

SH28 全景
南西から

SH28 全景
北西から

写真図版 37　遺構

SH28
土器出土状況
南東から

SH28
土器出土状況
南西から

SH28　高床部
土器出土状況
北から

SH28　土器溜土器
出土状況　南から

SH28　土器溜土器
出土状況　東から

SH28　土器溜土器
出土状況　北から

写真図版 39　遺構

（左）SH28
420 出土状況
南東から
（右）SH28
459 出土状況
南から

SH28
土器溜土器出土状況
西から

SH28
土器溜土器出土状況
南から

SH29 全景　北東から

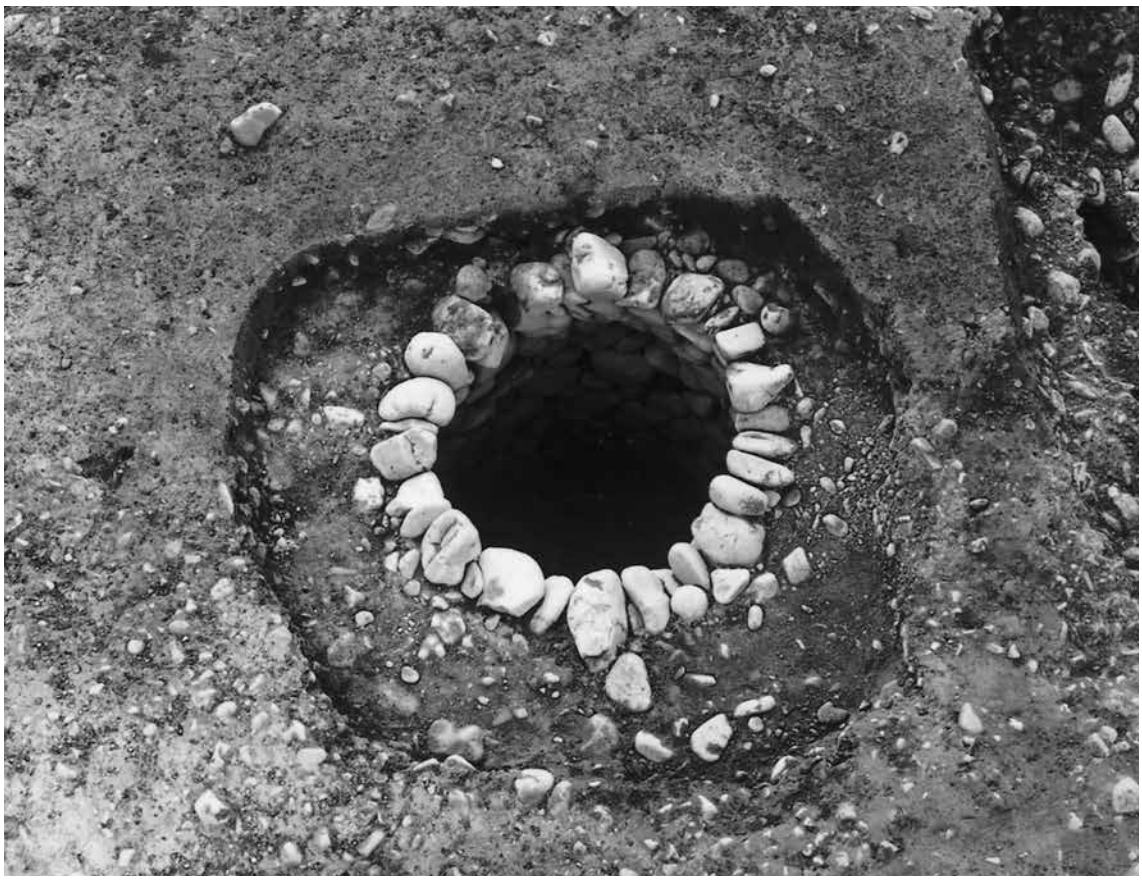
SH29 中央土坑
確認状況　南東から

SH29 中央土坑
横断面　南東から

写真図版 41　遺構

SH29 中央土坑
全景　南東から

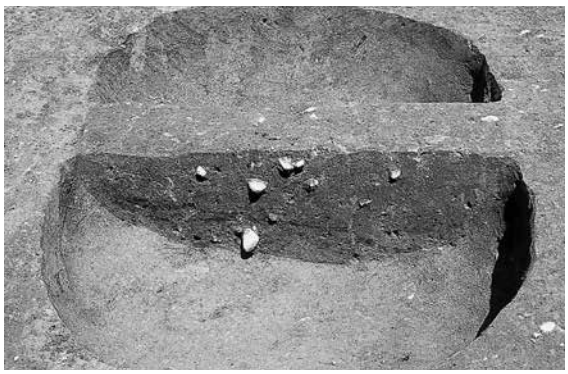
SH29 中央土坑 B
全景　南東から

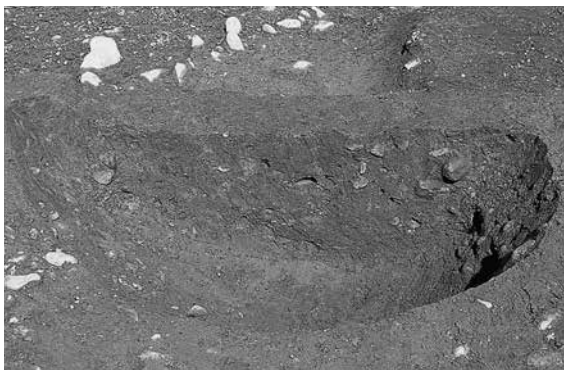


SE01 全景東から

SE01 石組　東から

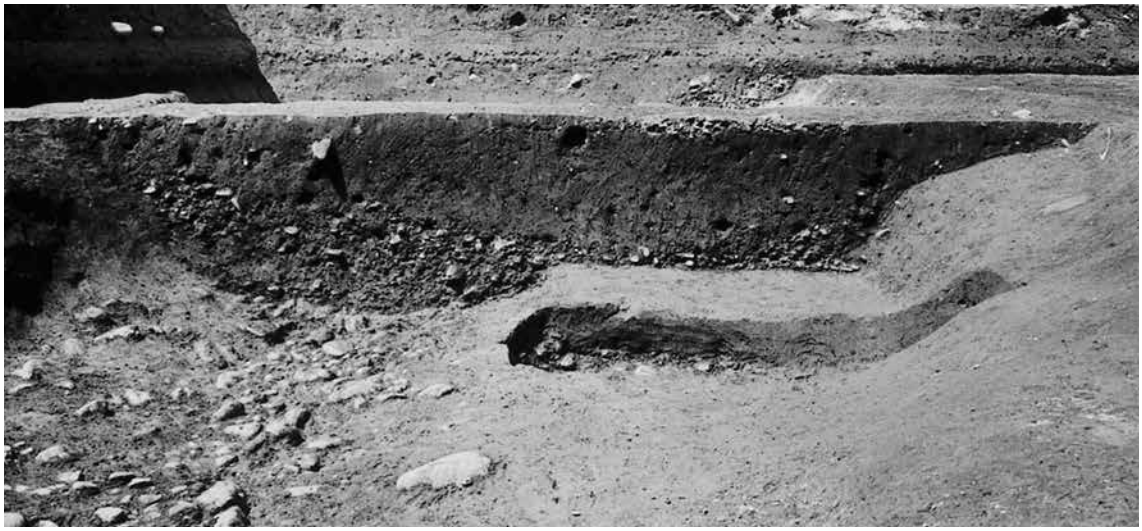
写真図版 43　遺構





（左）SK16 断面
南東から
（右）SK17 断面
南東から

SD09 全景　南から



SD09 断面　南から

2

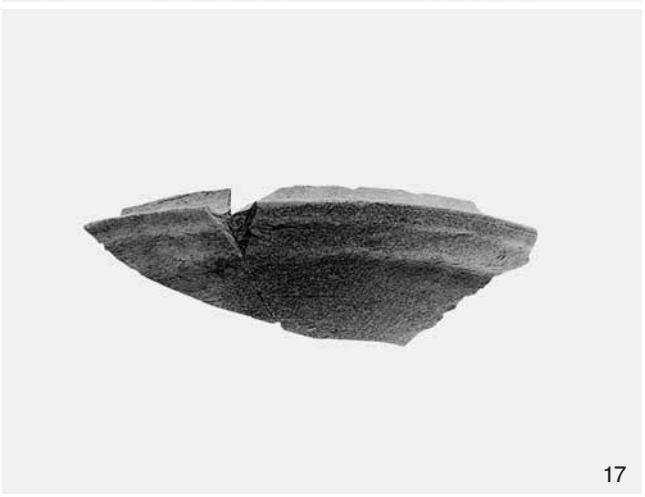
7

10

11

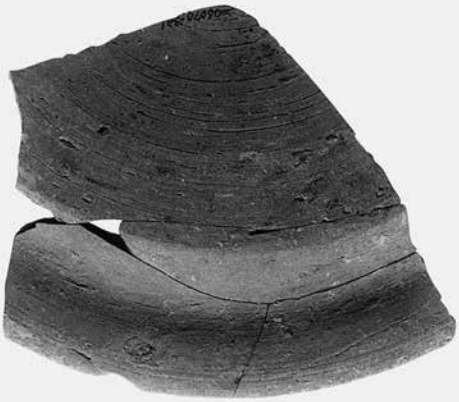
14

16


17

2：SH01 出土土器　7・10・11・14：SH02 出土土器　16・17：SH03 出土土器

写真図版 45　遺物



19

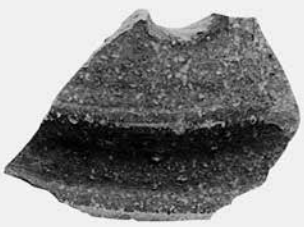
22

20

29

21

33



36

19・20：SH04 出土土器　21・22：SH06 出土土器　29・33：SH07 出土土器　36：SH08 出土土器

34

41

42

43

44

47

48

34：SH08 出土土器　41 ～ 43：SH10 出土土器　44・47・48：SH11 出土土器

写真図版 47　遺物

50

51

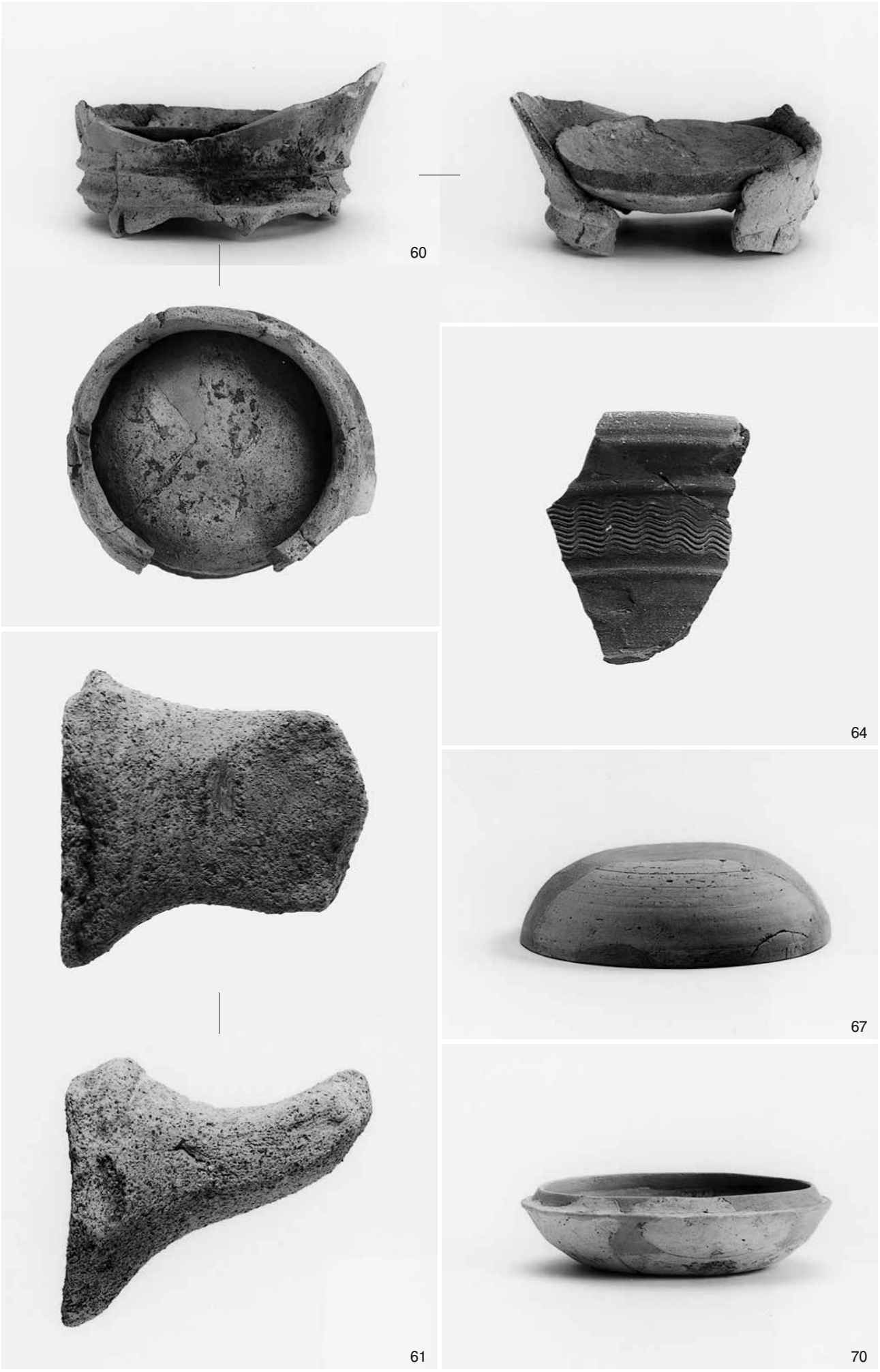
52

56

55

57

50 ～ 52・55：SH11 出土土器　56・57：SH12 出土土器



60：SH12 出土土器　61：SH14 出土土器　64：SH16 出土土器　67・70：SH18 出土土器

写真図版 49　遺物

73

74

75

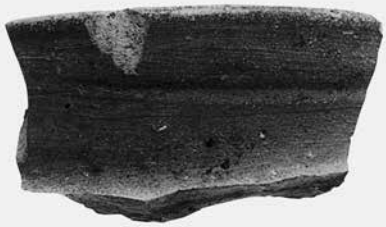
76

73 ～ 76：SH18 出土土器

85

103

86



106

89

110

96

85：SB03 出土土器　86：SB04 出土土器　89・96：SB05 出土土器　103：P05 出土土器
106：P04 出土土器　110：SK01 出土土器

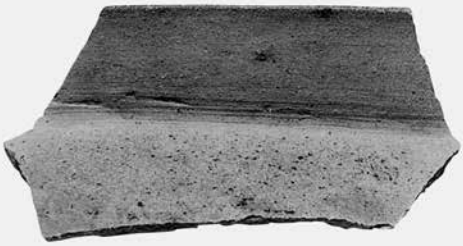
写真図版 51　遺物

113

120

114

125



115

126

116

113：SK03 出土土器　114・115：SK04 出土土器　116：SK07 出土土器　120：SK08 出土土器
125・126：SK11 出土土器

130

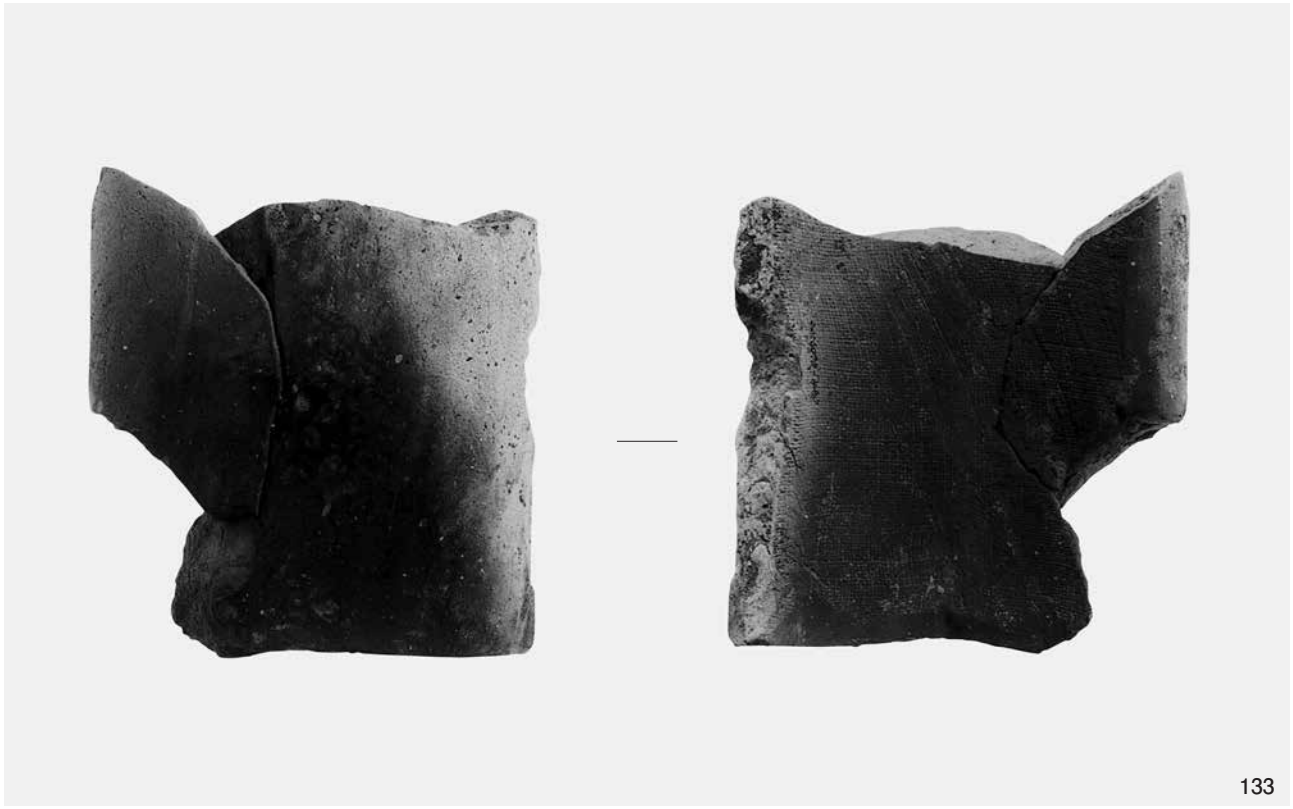
135

136

138

130：SK11 出土土器　135・136：SD01 出土土器　138：SD02 出土土器

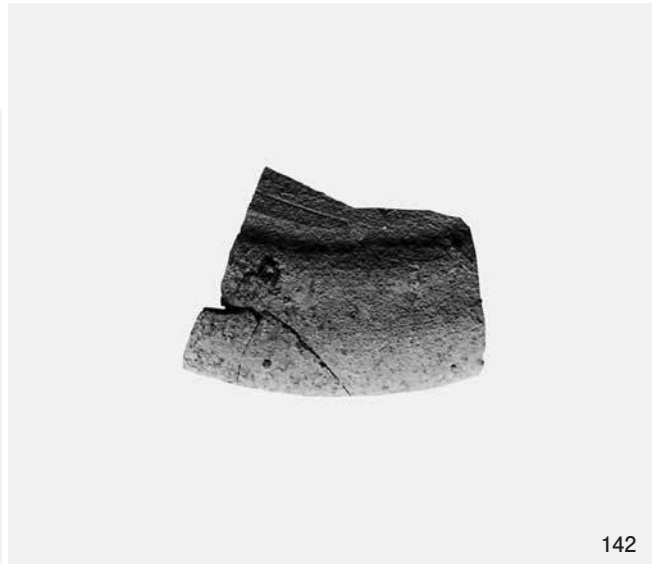
写真図版 53　遺物



133

140

141



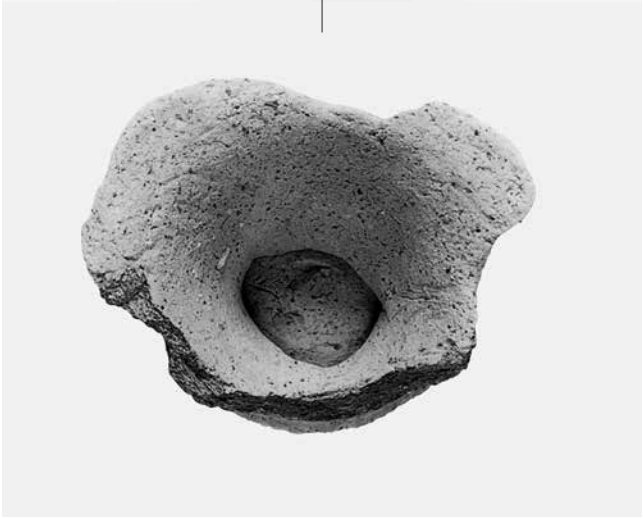
142

133：SK12 出土瓦　140・141：SD02 出土土器　142：SD03 出土土器

143

147

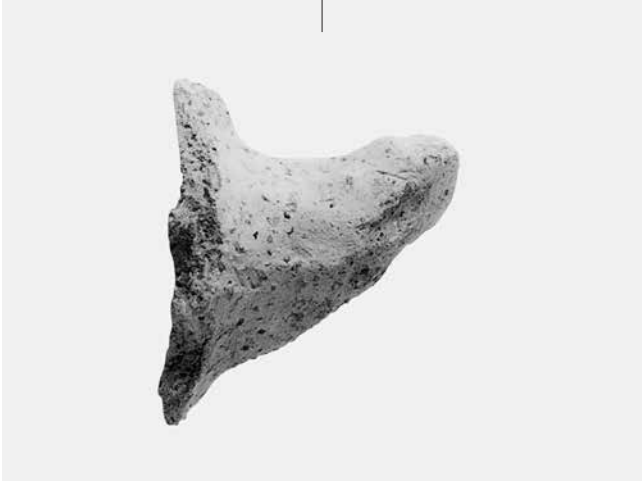
144



146

148

152



143・144・146・147：SD03 出土土器　148：SD05 出土土器　152：包含層出土土器

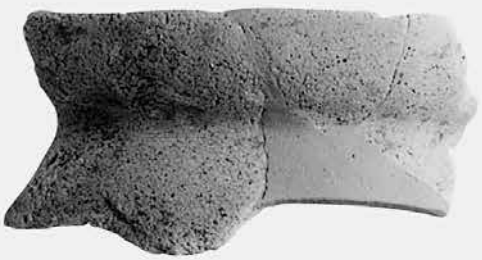
写真図版 55　遺物

155

171

170

175



160

155・160・170・171・175：包含層出土土器

176

177

178

182

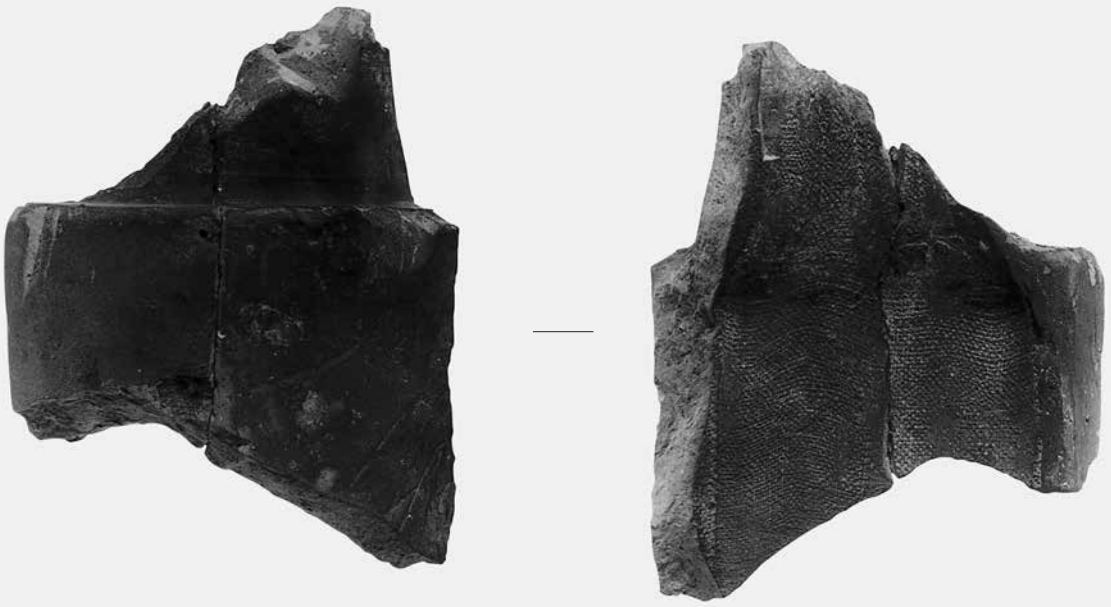
179

180

183

176 ～ 180・182・183：包含層出土土器

写真図版 57　遺物

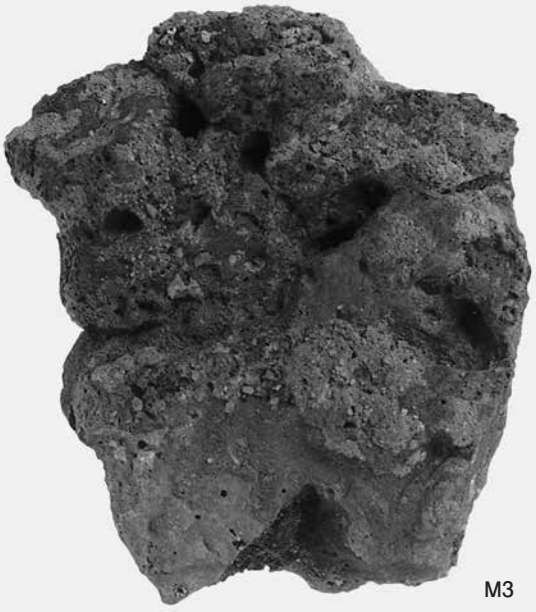


184

M1

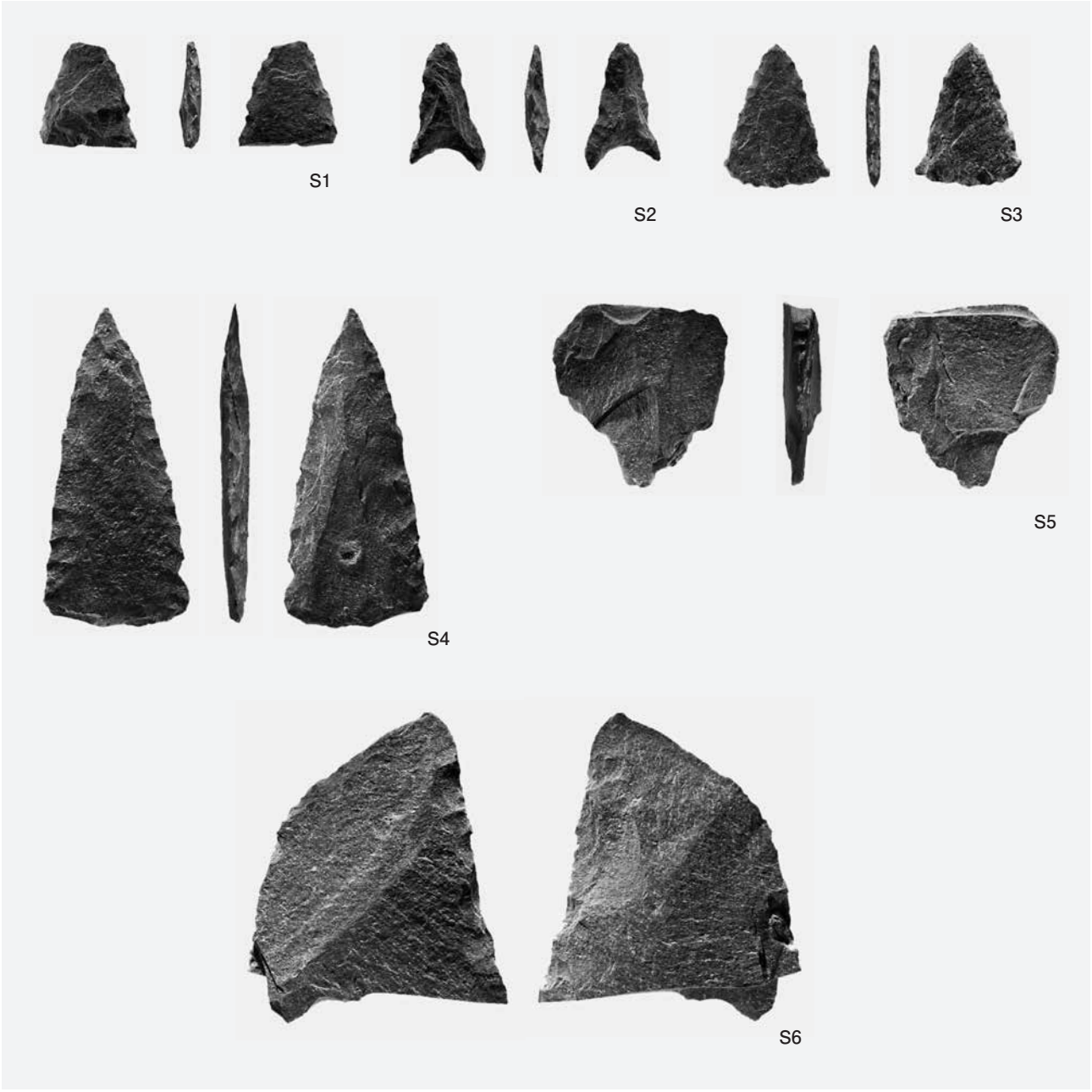
M2

M4



M3

184：包含層出土瓦　M1・M2：包含層出土鉄製品　M3：SH02 出土鉄滓　M4：SH04 出土鉄滓



S1：SH03 出土石器　S2：SH11 出土石器　S3・S6：包含層出土石器　S4：SH12 出土石器
S5：P03 出土石器

写真図版 59　遺物

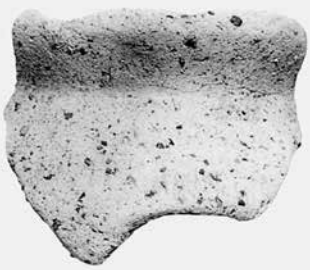
185

191

189

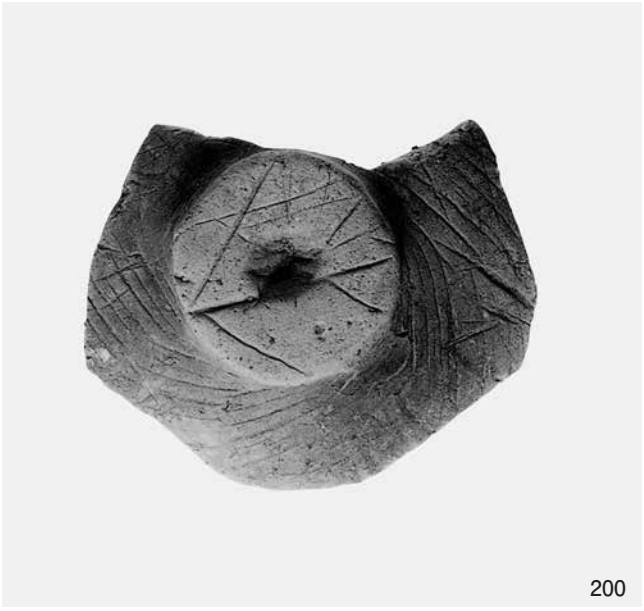
194

190



196

185：SH20 出土土器　189 ～ 191・194・196：SH22 出土土器



200

202

201

205

203

209

200 ～ 203・205・209：SH22 出土土器

写真図版 61　遺物

208

217

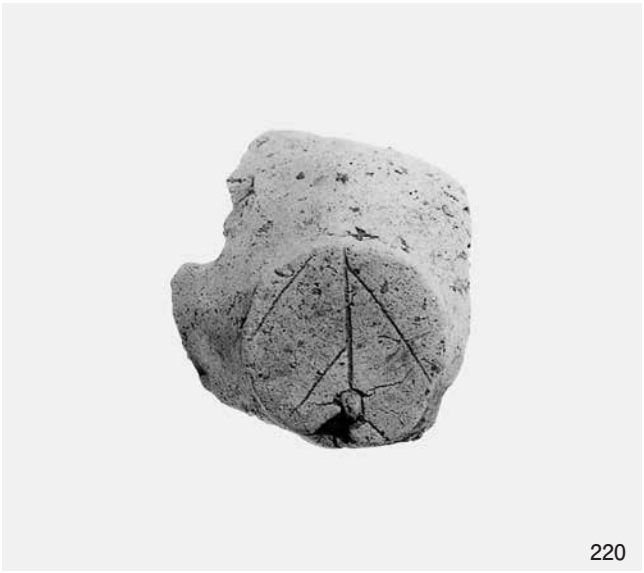
211

218

215

219

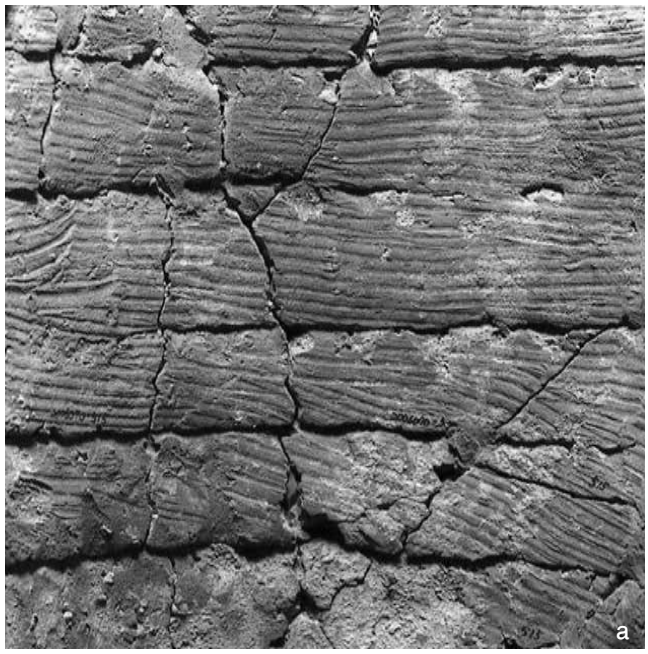
208・211・215・217 ～ 219：SH22 出土土器



220

222

221



a

224

220 ～ 222・224：SH22 出土土器　a：224 内面

写真図版 63　遺物

223

235

225

237

226

228

238

223・225・226・228・235・237・238：SH22 出土土器

239

240

241

242

243

244

246

248

249

239：SH22 出土土器　240 ～ 244・246・248・249：SH23 出土土器

写真図版 65　遺物

250

252

253

255

259

250・252・253・255：SH23 出土土器　259：SH24 出土土器

262

264

263

268

266

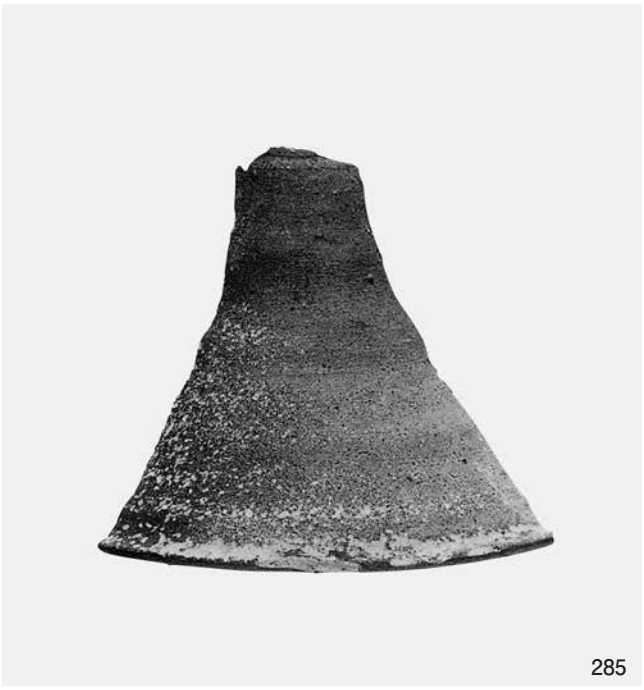
270

262・263：SH24 出土土器　264・266：SK15 出土土器　268・270：SD06 出土土器

写真図版 67　遺物

272

283


285

278

279

289

281

291

272・278・279・281・283・285・289・291：SD06 出土土器

292

295

294

299

296

300

298

292・294 ～ 296：SD06 出土土器　298：SB10 出土土器　299・300：包含層出土土器

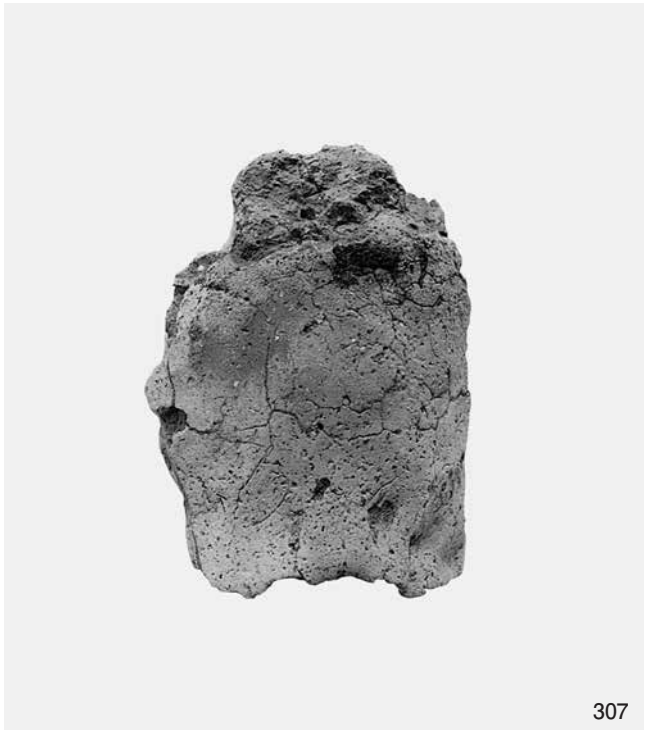
写真図版 69　遺物

302

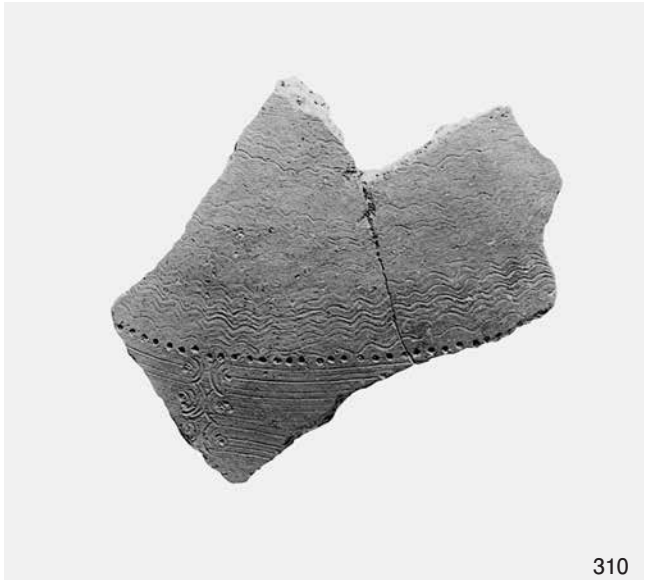
304

306

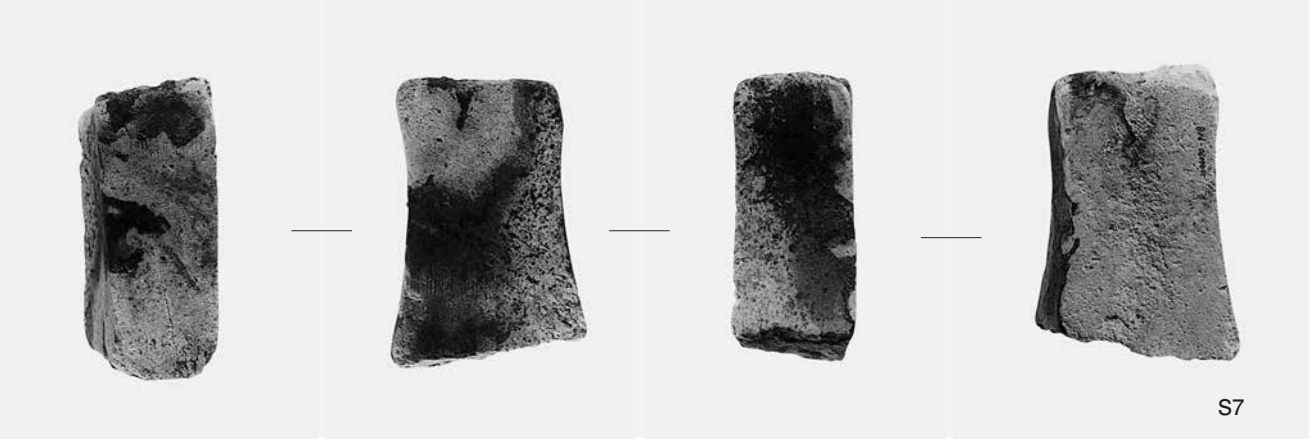
309


307

308


310

302・304・306 ～ 310：包含層出土土器



S7：SH23 出土石製品

写真図版 71　遺物

312

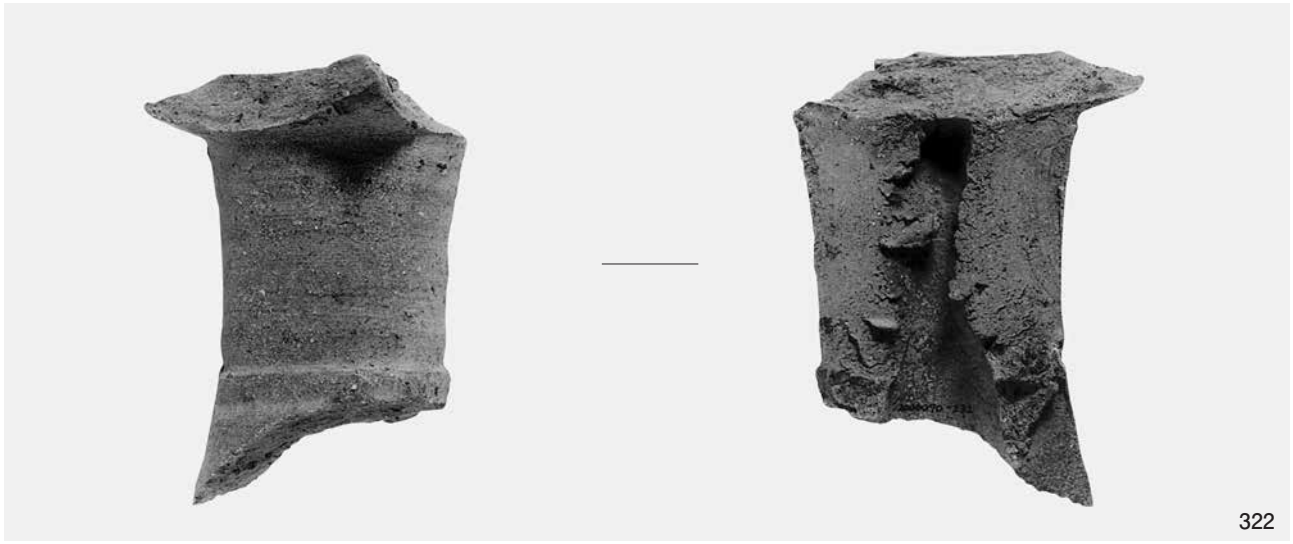
313

317

319

321

323


322

312・313・317・319・321 ～ 323：SH26 出土土器

324

a

325

328

326

331

324：SH26 出土土器　325・326・328・331：SH27 出土土器　a：324 ヘラ記号

写真図版 73　遺物

332

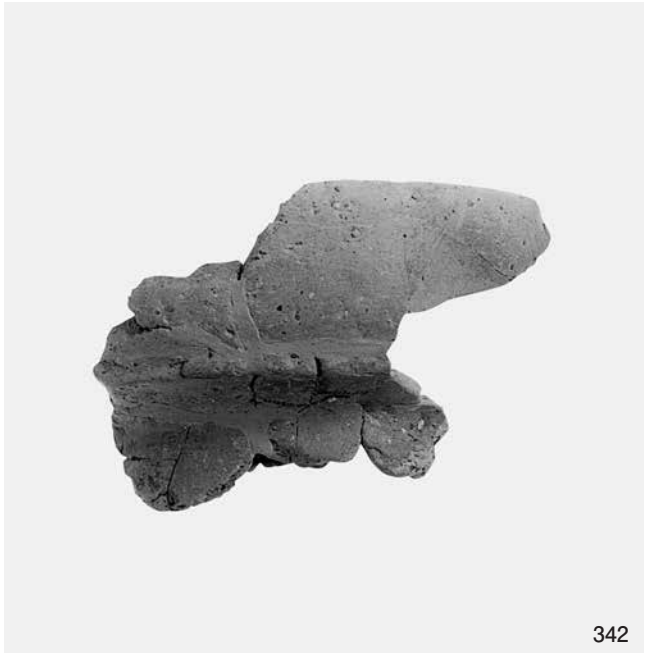
333

334

335

339

340


342

332 ～ 335・339・340：SH27 出土土器　342：SH28 出土土器

343

344

345

346

348

349

351

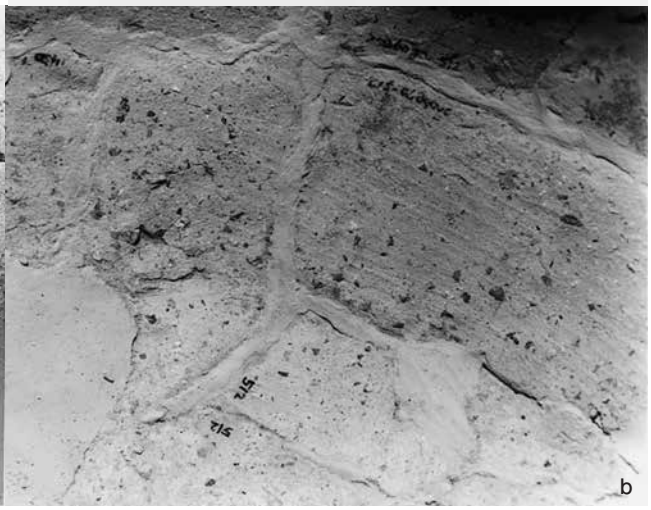
343 ～ 346・348・349・351：SH28 出土土器

写真図版 75　遺物

352

353

a


b

354

356

352 ～ 354・356：SH28 出土土器　a：353 不連続部外面　b：353 不連続部内面

357

a

b

358

359

c

d

357 ～ 359：SH28 出土土器　a：357 不連続部外面　b：357 不連続部内面　c：359 不連続部外面　d：359 底部外面

写真図版 77　遺物

360

a

b

361

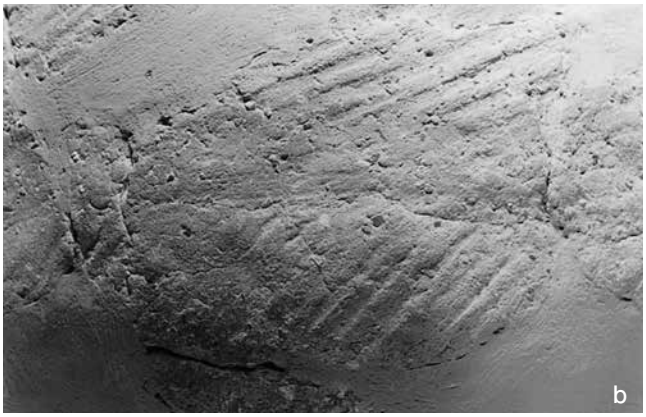
363

c

360・361・363：SH28 出土土器　a：360 不連続部外面　b：361 不連続部外面　c：363 不連続部外面

364

a


b

365

366

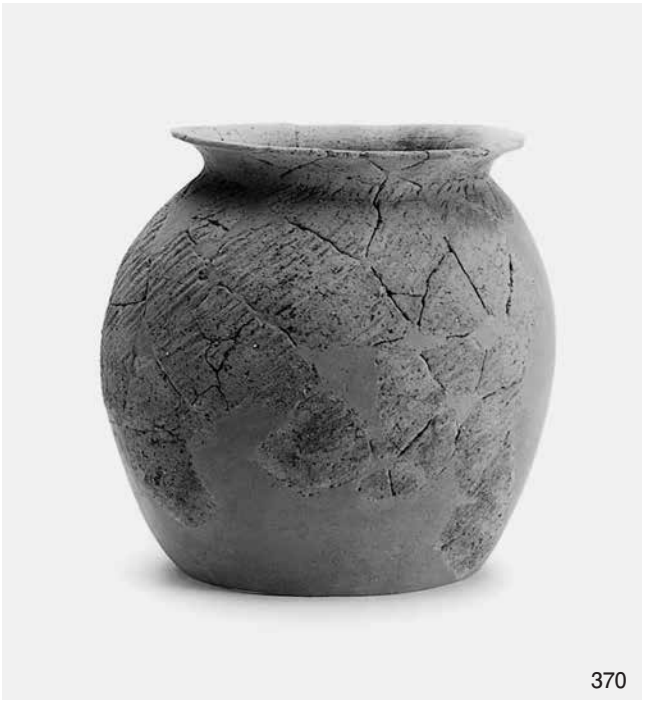
367

c

364 ～ 367：SH28 出土土器　a：364 不連続部外面　b：366 不連続部外面　c：367 不連続部外面

写真図版 79　遺物

368


370

369

371

a

372

368 ～ 372：SH28 出土土器　a：369 不連続部外面

373

375

374

376

377

373 ～ 377：SH28 出土土器　a：374 不連続部外面

写真図版 81　遺物

379

381

380

383

382

384

379 ～ 384：SH28 出土土器

385

387

386

390

391

385 ～ 387・390・391：SH28 出土土器

写真図版 83　遺物

393

394

395

397

393 ～ 395・397：SH28 出土土器　a：393 不連続部外面　b：394 不連続部外面　c：394 不連続部内面

396

a

b

398

403

404

400

396・398・400・403・404：SH28 出土土器　a：396 不連続部外面　b：396 不連続部内面

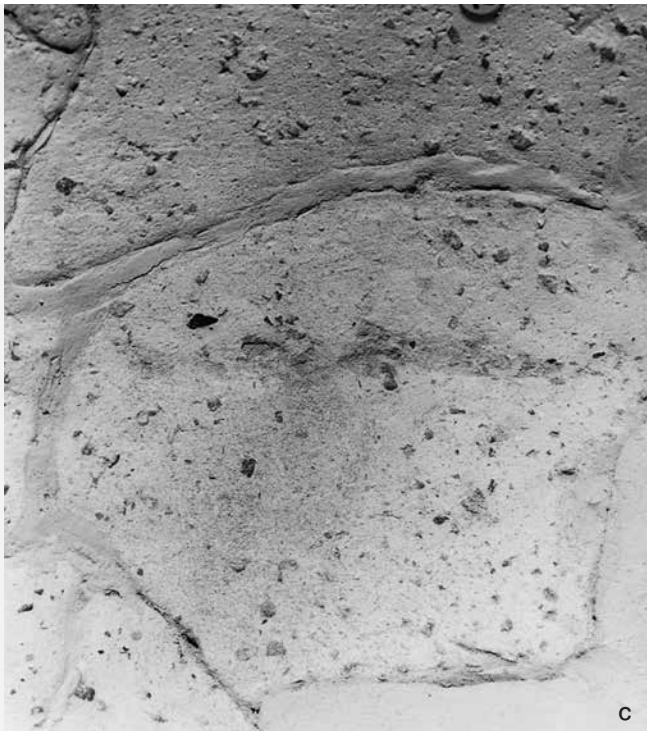
写真図版 85　遺物

401

a

b

402



c

401・402：SH28 出土土器　a：401 不連続部外面　b：401 不連続部内面　c：402 不連続部外面

405

409

408

411

410

412

405・408 ～ 412：SH28 出土土器

写真図版 87　遺物

414

a

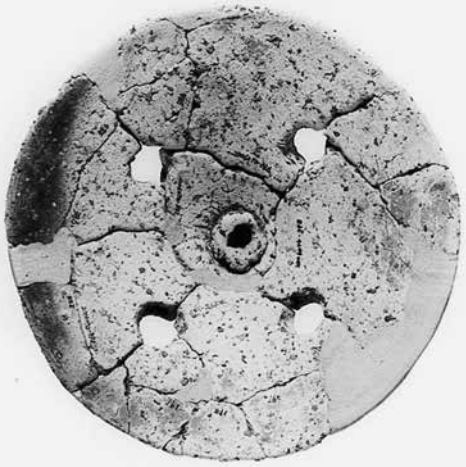
416

415

417

414 ～ 417：SH28 出土土器　a：415 接合部内部

418



420

423

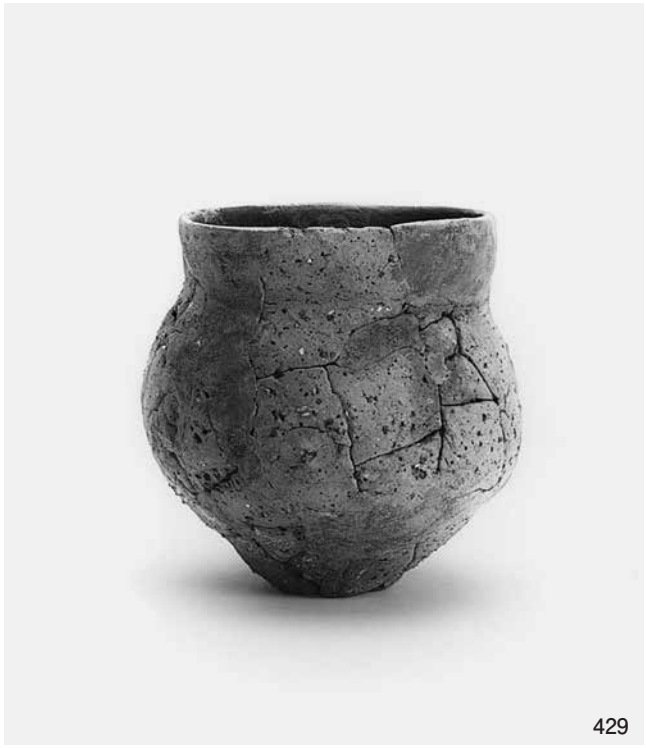
421

424

418・420・421・423・424：SH28 出土土器

写真図版 89　遺物

425


429

428

434

a

430

435

425・428 ～ 430・434・435：SH28 出土土器　a：430 外面

436

441

437

444

440

445

436・437・440・441・444・445：SH28 出土土器

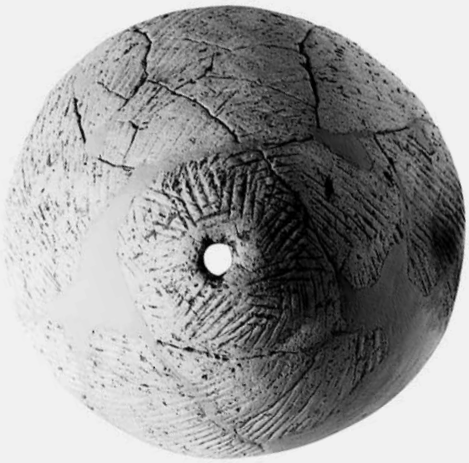
写真図版 91　遺物

446

449

450

447



451

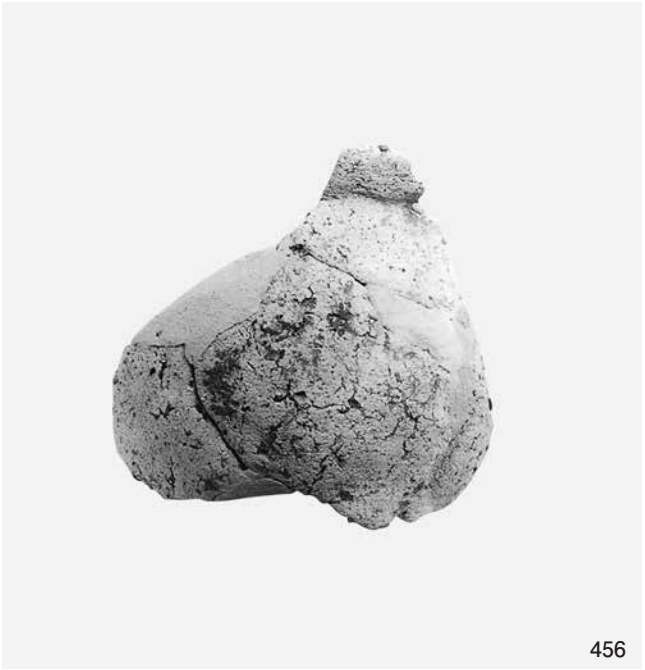
452

453

446・447・449 ～ 453：SH28 出土土器

454

455


456

457

458

459

454 ～ 459：SH28 出土土器

写真図版 93　遺物

460

467

462

468

464

469

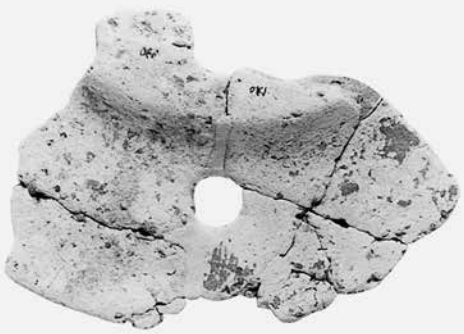
460・462・464・467 ～ 469：SH28 出土土器

470

474

471

477



472

480

470 ～ 472・474：SH28 出土土器　477：SH27・SH28 出土土器　480：SH29 出土土器

写真図版 95　遺物

483

a

b

484

485

486

487

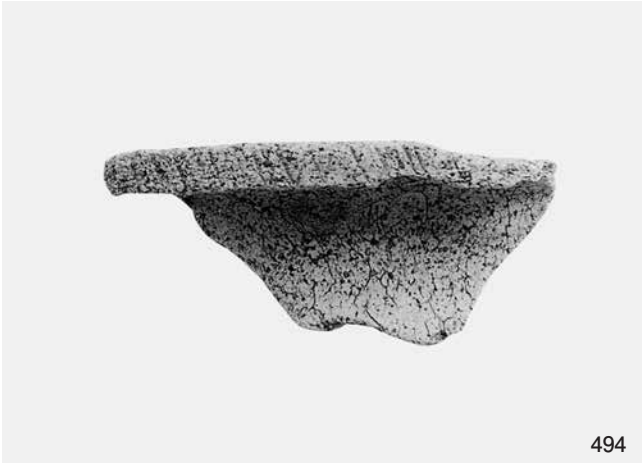
483 ～ 486：SH29 出土土器　487：P10 出土土器　a：483 不連続部外面　b：483 不連続部内部

491

493

495

496


494

503

506

491：SK17 出土土器　493：SK16 出土土器　494 ～ 496・503・506：SD09 出土土器

写真図版 97　遺物

505

515

507

517

525

522

505・507・515・517・522・525：SD09 出土土器

528

534

533

536

S8　S9

M5

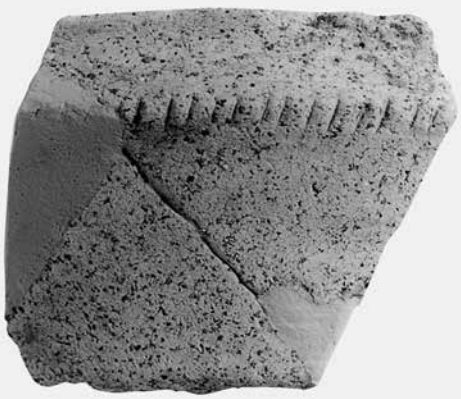
M8

M6

M7

528・533・534・536：包含層出土土器　S8：SH28 出土石器　S9：SH27 出土石製品
M5・M6：SH26 出土鉄製品　M7：SE01 出土鉄製品　M8：SH27 出土鉄製品

写真図版 99　遺物


537

541

538

542

539

544

540

537 ～ 542・544：SD11 出土土器

550

553

558

556

550・553・556・558：SD11 出土土器

写真図版 101　遺物

557

561

559

565

560

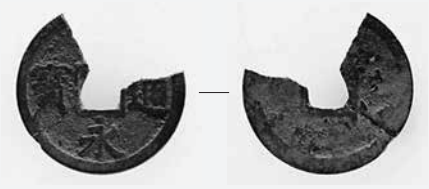
562

567

557・559：SD11 出土土器　560 ～ 562・565・567：包含層出土土器

569

571



M9

569・571：包含層出土土器　M9：包含層出土銅銭

報　告　書　抄　録

ふりがな	いちのごういせきはっくつちょうさほうこくしょよん
書　　名	市之郷遺跡発掘調査報告書Ⅳ
副 書 名	県営姫路日出住宅、県営姫路日出第２－１期事業建替に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第 433 冊
編 著 者 名	山田清朝
編 集 機 関	兵庫県立考古博物館
所 在 地	加古郡播磨町大中１丁目１番１号
発 行 機 関	兵庫県教育委員会
所 在 地	〒 650 － 8567　神戸市中央区下山手通５丁目 10 － 1　℡ 078 － 362 － 3784
発行年月日	2012 年（平成 24 年）３月 26 日

所収遺跡名（県遺跡番号）	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	調査番号					
市之郷遺跡（20462）	姫路市日出町３丁目 18 番	28201	2007125	34° 49′ 31″	134° 42′ 40″	平成18年6月26日～9月29日	1699㎡	県営姫路日出住宅、県営姫路日出住宅第2－1期建替事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市之郷遺跡	集落跡	弥生時代中期	竪穴住居跡・溝・土坑	弥生土器	
		弥生時代後期末	竪穴住居跡・掘立柱建物跡	弥生土器・製塩土器	大型掘立柱建物
		古墳時代後期	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑	土師器・須恵器	

概　　要

調査地は、Ａ区からＤ区の４地区からなり、弥生時代と古墳時代遺構が検出されている。

弥生時代の遺構は、中期と後期からなる。中期については、その前葉から後葉の各時期の遺構が検出されている。主な遺構としては、竪穴住居跡・土坑・溝などである。

後期については、その初頭から布留式段階までの遺構が検出されている。ただし、後期の中葉については、遺構は検出されていない。検出された遺構は、竪穴住居跡が中心である。このなかで、布留式段階の大型の掘立柱建物は注目される。

古墳時代の遺構は、６世紀後半から７世紀前半に限られる。このなかで、竪穴住居跡を中心とした時期と、掘立柱建物を中心とした時期に大きく分けることができる。前者が６世紀後半、後者が７世紀前半に位置付けられるものである。特に、前者の竪穴住居跡は、数地点で複雑に切り合い関係をもち、短期間に数度にわたり建て替えが行われている。

出土遺物としては、庄内期を中心とした遺物が多量に出土している。一括性が認められ、当地における当該期の良好な資料として位置付けられるものである。

兵庫県文化財調査報告 第433冊

姫路市

市 之 郷 遺 跡 Ⅳ

県営姫路日出住宅、県営姫路日出住宅第２－１期建替事業に伴う発掘調査報告書

平成24年3月26日　　発行

編 集　兵 庫 県 立 考 古 博 物 館
〒675-0142　加古郡播磨町大中１丁目１番１号

発 行　兵 庫 県 教 育 委 員 会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10－１

印 刷　野 崎 印 刷 紙 業 株 式 会 社　神戸営業所
〒651-0088　神戸市中央区小野柄通５丁目１番27号